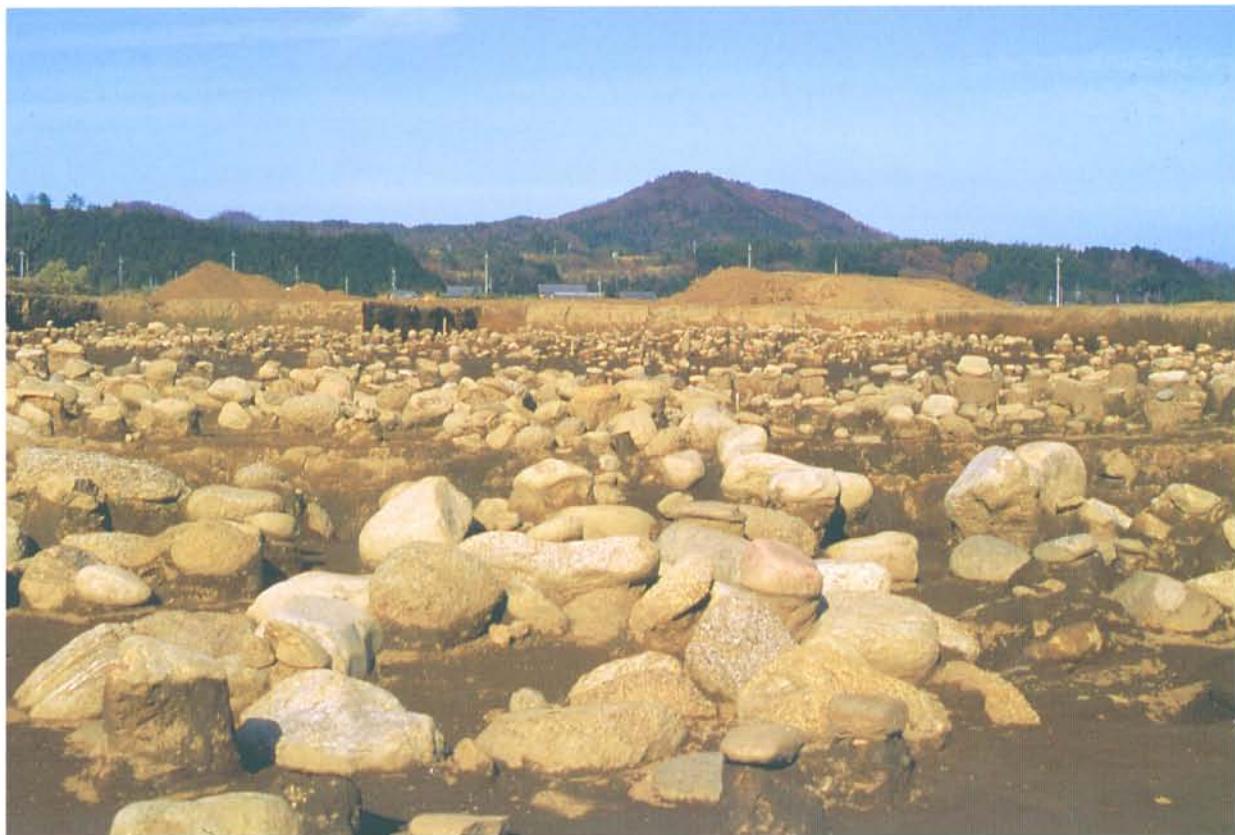


天白遺跡

本文編

1995・3

三重県埋蔵文化財センター



A地区配石遺構群（南から）



縄文土器



配石遺構 15（西から）



土偶



辰砂原石



赤色顔料付着の石皿（嬉野町教育委員会保管）



赤色顔料付着の磨石・敲石類と土器

天白遺跡

——本文編——

1 9 9 5 • 3

三重県埋蔵文化財センター

序

人類の歴史は、一説によると 500万年と言います。この内の言わば 499万年は、搖籃の地アフリカから南極大陸を除く世界各地への拡散の時代でした。この拡散は、人類が最初にとった生存戦略でした。その後の 1 万年前から、定住そして農耕を始めました。その結果、人口密度が加速度的に高まり、今日に至っています。言わば人口周密化の時代です。これは、人類のとった第二の生存戦略でした。しかし現代は、地球の資源と環境悪化が限界に近づいている、と多くの人が感じるまでになっています。拡散から周密化、そして今後はどうような生存戦略を人類は選択してゆけば良いのでしょうか。

日本の縄文時代は、定住化を進める一方、基本的に採集経済であって農耕社会ではありませんでした。自然の懷にあって、大地の恵みとほど良い調和を保っていたようです。それに対して、その後の弥生時代からは農耕社会となり、生活の向上を図るためにには、自然をよりひどく破壊するしかない宿命を負うようになりました。

人はいつでも道を探す時には振り返ります。今日の縄文時代への関心の高まりも、環境問題への意識の高まりと表裏一体のものと思われます。将来の生活のさらなる向上を実現するためには、新しい自然との関係、すなわち第三の生存戦略を早急に築かなくてはなりません。

ここに報告いたします天白遺跡の発掘調査でも、縄文社会のあり様を示す豊かな文物が明らかになりました。埋蔵文化財は元来寡黙なものであり、まして単独では現代への即効薬にはなりません。しかし、天白遺跡の調査成果を含めた今後の研究によって縄文社会の具体像がいきいきと復元され、明日への示唆が得られれば望外の喜びです。

最後になりましたが、天白遺跡の調査と保存並びに報告にご協力、ご尽力いただきました多くの方々に、厚くお礼申し上げます。

平成 7 年 3 月

三重県埋蔵文化財センター

所 長 川 村 政 敏

例　　言

1. 本書は、三重県一志郡嬉野町大字釜生田字天白ほかに所在する天白（てんぱく）遺跡を、平成4年度に三重県埋蔵文化財センターが実施した発掘調査の報告書である。

2. 本書は、「平成4年度三重県農業基盤整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告」の内の1冊である。

3. 当報告に係る発掘調査の現場作業は、4地区計5,490m²を対象として、平成4年7月29日から平成5年1月19日まで実施した。各地区の内訳は下記のとおりである。

A地区	2,260m ² (含範囲確認調査 560m ²)	担当 主事 森川幸雄	研修員 竹田憲治
B地区	400m ²	担当 研修員 竹田憲治	
C地区	800m ²	担当 主事 森川常厚	
D地区	2,030m ²	担当 ク ク	

4. 当報告書の作成は三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び管理指導課が行った。執筆は、石器・石製品については大下明（雲雀丘学園中・高等学校）と久保勝正（上野商業高等学校）の両氏より玉稿をいただき、そのほかを森川幸雄を中心として森川常厚・竹田憲治・山田猛が担当した。分担は目次と文末に示したとおりである。

なお、編集は森川幸雄が担当し、遺物の写真撮影は清水弘之が担当した。

5. 石器・石製品の石材については、磯部 克（松阪高等学校）氏に鑑定していただいた。

6. 当報告に係る発掘調査の経費は、平成4年度に三重県教育委員会が三重県農林水産部から執行委任を受け、農家負担分は三重県が文化庁の補助金を受け、実施したものである。

7. 発掘調査にあたっては、下記の方々にご指導やご協力をいただいた。なお、所属と敬称は省略させていただいた。

新屋雅明、青木哲也、泉 拓良、伊藤正人、今津節生、岩瀬彰利、植田文雄、上野修一、岡田憲一、岡村道雄、大塚達朗、大野 薫、岡崎晋明、奥 義次、金子浩昌、川崎 保、木下哲夫、工藤俊樹、寒川 旭、菅原弘樹、鈴木保彦、高柳圭一、千葉 豊、中村健二、中村友博、成瀬正和、西山要一、新田智子、八賀 晋、馬場保之、浜野美代子、深井明比古、松村恵司、水野正好、百瀬長秀、安原啓示、矢野健一、家根祥多、湯浅利彦、和氣清章
(あいうえお順)

8. 当報告書では、全て真北を用いた。なお、当該地域の磁針方位は西偏6度20分（平成元年、国土地理院）である。

また、当地域の第VI座標系は0度16分43秒東偏する。

9. B～D地区で使用した遺構表示略号は、下記のとおりである。なお、B～D地区の遺構番号は201番からの通番である。

S H = 壁穴住居 S K = 土坑 S D = 溝 S B = 掘立柱建物 S E = 井戸

10. 当報告書の遺物番号はA～Dの各地区で1番から与えた。なお、A地区については、縄文土器、土偶、その他の土製品、石器各器種、石製品各器種、弥生土器にそれぞれ1番から与えた。

11. 当報告書の遺物図版の内、立面写真は約1：3である。

12. スキャニングによるデーター取り込みのため、若干のひずみが生じています。

各図の縮尺率はスケールバーを参照ください。

本文目次

I	前　　言	(森川幸雄)	1		
1	概要		1		
2	経過		1		
II	位置と環境		2		
1	地理的環境		2		
2	歴史的環境	(森川幸雄・森川常厚)	2		
III	A 地区の調査	(森川幸雄)	10		
1	層序		10		
2	縄文時代の遺構		10		
(1)	配石遺構		10		
(3)	埋設土器		12		
(4)	焼土		13		
3	縄文時代の遺物		26		
(1)	土器		26		
A	後期中葉から晩期初頭の在地系の土器		26		
B	後期中葉から晩期初頭の異系統の土器		43		
C	その他の時期		44		
(2)	土偶		144		
A	出土状況		144		
B	土偶の概要		144		
(3)	その他の土製品		157		
A	勾玉　B 有孔球状土製品　C 丸玉　D 管玉				
E	円板　F 不明土製品　G 粘土塊				
(4)	石器	(大下 明・久保勝正)	160		
A	概要		160		
B	分布		160		
C	石材		160		
D	形態記述		161		
a	石鏃	b 打欠き石錐	c 切目石錐	d 有溝石錐	
e	打製石斧	f 台石	g 石皿	h 敲石	i 磨石
j	石錐	k 石匙	l 削器	m ノミ状石器	n 楔形石器
o	磨製石斧	p 有溝砥石	q 砥石	r 部分磨製石器	
s	軽石製石器	t 磠器	u 赤色顔料付着石器		
v	二次加工痕有剥片	w 使用痕有剥片	x 剥片・碎片		
y	石核	z 素材			
(5)	石製品	(大下 明)	213		
A	概要		213		
B	分布		213		
C	形態記述		213		

a 岩偶・岩版	b 線刻礫	c 石棒	d 石刀		
e 石剣	独鈷状石製品	g 有孔円形石製品			
h 小型鉢形石製品	i 球状石製品	j 垂飾	k 小玉		
(6) 骨片				(森川幸雄)	224
3 弥生時代の遺構と遺物				(山田 猛)	239
IV B 地区の調査 (竹田憲治) 242					
1 遺構					242
2 遺物					242
3 小結					245
V C 地区の調査 (森川常厚) 246					
1 遺構					246
(1) 奈良時代の遺構					246
(2) 平安時代末期～鎌倉時代の遺構					246
(3) 室町時代の遺構					246
(4) その他の遺構					246
2 遺物					246
(1) 平安時代末期～鎌倉時代の遺物					246
3 小結					250
VI D 地区の調査 254					
1 遺構					254
(1) 飛鳥・奈良時代の遺構					254
(2) 平安時代の遺構					254
(3) 平安時代末期～鎌倉時代の遺構					254
(4) 室町時代の遺構					254
(5) その他の遺構					257
2 遺物					257
(1) 飛鳥・奈良時代の遺物					257
(2) 平安時代の遺物					257
(3) 平安時代末期～鎌倉時代の遺物					257
(4) 室町時代の遺物					259
(5) 包含層出土の遺物					260
3 小結					260
VII 考察 (森川幸雄) 262					
(1) 後期中葉から晩期初頭の在地系の土器					262
(2) 土偶					270
(3) 石器・石製品				(大下 明・久保勝正)	273
(4) 赤色顔料付着遺物				(森川幸雄)	280
(5) 配石遺構					281
(6) 天白遺跡の性格					281

卷頭目次

A地区配石遺構群	辰砂原石
縄文土器	赤色顔料付着の石皿
配石遺構15	赤色顔料付着の磨石・敲石類と土器
土偶	

挿図目次

II 位置と環境	
第1図 遺跡位置図	7
第2図 遺跡地形図	8
第3図 調査区位置図	9
第4図 県史跡指定範囲	9
III A地区の調査	
第5図 A地区土層断面図1	14
第6図 A地区土層断面図2	15
第7図 A地区平面図	16
第8図 A地区本調査区平面図	17
第9図 A地区範囲確認調査トレンチ平面図	18
第10図 配石遺構1~7・9・10~13実測図	19
第11図 配石遺構8周辺・14・15実測図	20
第12図 配石遺構16~22・24・27実測図	21
第13図 配石遺構23・25・26実測図	22
第14図 配石遺構28~30実測図	23
第15図 埋設土器1~6実測図	23
第16図 埋設土器7~14実測図	24
第17図 埋設土器15~22実測図	25
第18図 埋設土器23~26実測図	26
第19図 深鉢A類実測図	45
第20図 深鉢A類実測図	46
第21図 深鉢A類実測図	47
第22図 深鉢A類実測図	48
第23図 深鉢A類実測図	49
第24図 深鉢A類実測図	50
第25図 深鉢A類実測図	51
第26図 深鉢A類実測図	52
第27図 深鉢A類実測図	53
第28図 深鉢A類実測図	54
第29図 深鉢A類実測図	55
第30図 深鉢A・A'類実測図	56
第31図 深鉢A'類実測図	57
第32図 深鉢A'類実測図	58
第33図 深鉢B類実測図	59
第34図 深鉢B類実測図	60
第35図 深鉢B類実測図	61
第36図 深鉢B類実測図	62
第37図 深鉢B類実測図	63
第38図 深鉢B類、無文深鉢実測図	64
第39図 無文深鉢実測図	65
第40図 無文深鉢実測図	66
第41図 鉢A類実測図	67
第42図 鉢A類実測図	68
第43図 鉢A・A'・A"類実測図	69
第44図 鉢B類実測図	70
第45図 鉢B・C・D類実測図	71
第46図 鉢D類実測図	72
第47図 鉢D類実・無文鉢実測図	73
第48図 無文鉢、壺ないしは 注口土器A類実測図	74
第49図 壺ないしは 注口土器A・A'類実測図	75
第50図 壺ないしは 注口土器A・A'類実測図	76
第51図 壺ないしは 注口土器B・C類実測図	77
第52図 壺ないしは注口土器C類実測図	78
第53図 壺ないしは注口土器 B・C・D・E・F類実測図	79
第54図 皿、高杯、脚台、釣手土器、 舟形土器、手捏土器、 ミニチュア土器実測図	80
第55図 異系統土器実測図	81

第56図	深鉢A類実測図	82
第57図	深鉢A類実測図	83
第58図	深鉢A類実測図	84
第59図	深鉢A類実測図	85
第60図	深鉢A類実測図	86
第61図	深鉢A類実測図	87
第62図	深鉢A類実測図	88
第63図	深鉢A類実測図	89
第64図	深鉢A類実測図	90
第65図	深鉢A類実測図	91
第66図	深鉢A類実測図	92
第67図	深鉢A類実測図	93
第68図	深鉢A類実測図	94
第69図	深鉢A類実測図	95
第70図	深鉢A類実測図	96
第71図	深鉢A類実測図	97
第72図	深鉢A類実測図	98
第73図	深鉢A類実測図	99
第74図	深鉢A類実測図	100
第75図	深鉢A類実測図	101
第76図	深鉢A類実測図	102
第77図	深鉢A類実測図	103
第78図	深鉢A類実測図	104
第79図	深鉢A類実測図	105
第80図	深鉢A類実測図	106
第81図	深鉢A類実測図	107
第82図	深鉢A類実測図	108
第83図	深鉢A'類実測図	109
第84図	深鉢A'類実測図	110
第85図	深鉢A'類実測図	111
第86図	深鉢A'類実測図	112
第87図	深鉢B類実測図	113
第88図	深鉢B類実測図	114
第89図	深鉢B類実測図	115
第90図	深鉢B類実測図	116
第91図	深鉢B類実測図	117
第92図	深鉢B類実測図	118
第93図	その他深鉢実測図	119
第94図	その他深鉢実測図	120
第95図	鉢A類実測図	121
第96図	鉢A・A'・A"類実測図	122
第97図	鉢B類実測図	123
第98図	鉢B・C・D類実測図	124
第99図	鉢D類実測図	125
第100図	壺ないしは注口土器	
	A・A'類実測図	126
第101図	壺ないしは注口土器	
	A'類実測図	127
第102図	壺ないしは注口土器	
	A・A'類実測図	128
第103図	壺ないしは注口土器	
	A・A'・B類実測図	129
第104図	壺ないしは注口土器B・	
	C・D・E・G類実測図	130
第105図	異系統土器実測図	131
第106図	異系統土器実測図	132
第107図	異系統土器実測図	133
第108図	その他の時期の	
	縄文土器実測図	134
第109図	土偶A類実測図	148
第110図	土偶A類実測図	149
第111図	土偶B～D類実測図	150
第112図	土偶E～G類実測図	151
第113図	土偶G類・その他実測図	152
第114図	土偶各部位実測図	153
第115図	土偶各部位実測図	154
第116図	土偶各部位実測図	155
第117図	土偶分布図	157
第118図	その他の土製品実測図	158
第119図	石鏸形態模式図	162
第120図	石鏸実測図1	163
第121図	石鏸実測図2	164
第122図	打欠き石錐実測図	165
第123図	切目石錐・同未製品、	
	有溝石錐実測図	166
第124図	打製石斧実測図1	167
第125図	打製石斧実測図2	168
第126図	台石実測図1	169
第127図	台石実測図2	170
第128図	台石実測図3	171
第129図	石皿実測図1	172
第130図	石皿実測図2	173

第 131 図 石皿実測図 3	174	第 168 図 岩偶、岩版実測図 1	214
第 132 図 石皿実測図 4	175	第 169 図 岩偶、岩版実測図 2	215
第 133 図 敵石実測図 1	176	第 170 図 線刻礫実測図	216
第 134 図 敵石実測図 2	177	第 171 図 石棒、石刀、石剣実測図 1	218
第 135 図 磨石実測図	178	第 172 図 石棒、石刀、石剣実測図 2	220
第 136 図 石錐形態模式図	179	第 173 図 石棒、石刀、石剣実測図 3	222
第 137 図 石錐実測図 1	180	第 174 図 独鈎状石製品、有孔円形石製品、 小型鉢形石製品実測図	223
第 138 図 石錐実測図 2	181	第 175 図 球状石製品、垂飾実測図	224
第 139 図 削器形態模式図	182	第 176 図 小玉実測図	224
第 140 図 石匙実測図、削器実測図 1	183	第 177 図 弥生土器実測図	241
第 141 図 削器実測図 2	184		
第 142 図 削器実測図 3	185		
第 143 図 削器実測図 4	186		
第 144 図 削器実測図 5	187		
第 145 図 削器実測図 6	188		
第 146 図 削器実測図 7	189		
第 147 図 削器実測図 8	190		
第 148 図 削器実測図 9	191		
第 149 図 ノミ状石器形態模式図	192		
第 150 図 ノミ状石器実測図 1	193		
第 151 図 ノミ状石器実測図 2	194		
第 152 図 楔形石器実測図	196		
第 153 図 楔形石器実測図	197		
第 154 図 磨製石斧実測図 1	198		
第 155 図 磨製石斧実測図 2	199		
第 156 図 有溝砥石実測図 1	200		
第 157 図 有溝砥石実測図 2	201		
第 158 図 有溝砥石実測図 3	202		
第 159 図 砥石実測図	203		
第 160 図 部分磨製石器実測図	204		
第 161 図 軽石製石器実測図 1	205		
第 162 図 軽石製石器実測図 2、 礫器実測図	206		
第 163 図 赤色顔料付着石器実測図	207		
第 164 図 剥片実測図	208		
第 165 図 石核実測図 1	209		
第 166 図 石核実測図 2	210		
第 167 図 石器素材実測図	211		
		IV B 地区の調査	
		第 178 図 B 地区遺構実測図、 土層断面図	243
		第 179 図 S H271・272・273実測図、 S H271・273カマド実測図	244
		第 180 図 B 地区遺物実測図	245
		V C 地区の調査	
		第 181 図 C 地区平面図	247
		第 182 図 S H205 実測図	247
		第 183 図 C 地区土層断面図	248
		第 184 図 C 地区出土遺物実測図	250
		第 185 図 S D205 出土遺物実測図	251
		VI D 地区の調査	
		第 186 図 D 地区平面図	255 ~ 256
		第 187 図 D 地区土層断面図	255 ~ 256
		第 188 図 S B256~258実測図	257
		第 189 図 S E228 実測図	258
		第 190 図 S D248 断面図	258
		第 191 図 S K227 実測図	258
		第 192 図 D 地区出土遺物実測図	259
		VII 考 察	
		第 193 図 深鉢 A 類型式分類 1	265
		第 194 図 深鉢 A 類型式分類 2	266
		第 195 図 深鉢 A' 類型式分類	267
		第 196 図 深鉢 A 類グリッド別出土点数 1	268
		第 197 図 深鉢 A 類グリッド別出土点数 2	269
		第 198 図 土偶 A 類型式分類	271

表 目 次

II 位置と環境	
第1表 天白遺跡周辺の縄文時代遺跡一覧表	… 7
III A地区の調査	
第2表 縄文土器分類	
及び出土位置一覧表1	… 135
第3表 縄文土器分類	
及び出土位置一覧表2	… 136
第4表 縄文土器分類	
及び出土位置一覧表3	… 137
第5表 縄文土器分類	
及び出土位置一覧表4	… 138
第6表 縄文土器分類	
及び出土位置一覧表5	… 139
第7表 縄文土器分類	
及び出土位置一覧表6	… 140
第8表 縄文土器分類	
及び出土位置一覧表7	… 141
第9表 縄文土器分類	
及び出土位置一覧表8	… 142
第10表 縄文土器分類	
及び出土位置一覧表9	… 143
第11表 縄文土器分類	
及び出土位置一覧表10	… 144
第12表 土偶分類表	… 156
第13表 粘土塊出土一覧表	… 159
第14表 石器・石製品グリット別	
出土点数一覧表(1)	… 225
第15表 石器・石製品グリット別	
出土点数一覧表(2)	… 226
第16表 石器・石製品グリット別	
出土点数一覧表(3)	… 227
第17表 石器・石製品グリット別	
出土点数一覧表(4)	… 228
第18表 石鏃観察表	… 229
第19表 石錐観察表	… 230
第20表 打製石斧観察表	… 230
第21表 台石観察表	… 230
第22表 石皿観察表	… 231
第23表 敲石観察表	… 231
第24表 磨石観察表	… 232
第25表 石錐観察表	… 232
第26表 石匙観察表	… 232
第27表 削器観察表	… 233
第28表 ノミ状石器観察表	… 234
第29表 楔形石器観察表	… 234
第30表 磨製石斧観察表	… 235
第31表 砥石・有溝砥石観察表	… 235
第32表 部分磨製石斧観察表	… 236
第33表 軽石製石器観察表	… 236
第34表 碓器観察表	… 236
第35表 赤色顔料付着石器観察表	… 236
第36表 剥片観察表	… 236
第37表 石核観察表	… 237
第38表 素材観察表	… 237
第39表 岩偶観察表	… 237
第40表 線刻礫観察表	… 238
第41表 石棒・石剣・石刀観察表	… 238
第42表 独鈍状石製品・有孔円形石製品・鉢形石製品観察表	… 238
第43表 球状石製品・垂飾・小玉観察表	… 238
V C地区の調査	
第44表 C地区出土遺物観察表(1)	… 251
第45表 C地区出土遺物観察表(2)	… 252
第46表 C地区出土遺物観察表(3)	… 253
VI D地区の調査	
第47表 D地区出土遺物観察表	… 262
VII 考 察	
第48表 三重県出土の土偶一覧表	… 270
第49表 石錐分類対照表	… 275

付 図

付図1 天白遺跡A地区本調査区平面図 (1:100)

付図2 天白遺跡A地区範囲確認調査トレンチ

平面図 (1:100)

I 前 言

1 概 要

調査は、平成4年度の県営は場整備事業に伴うものである。A～Dの4地区で実施した（第3図）。

A地区では、縄文時代後期中葉から晩期初頭を主体とする多量の遺構・遺物が確認された。遺構では、西日本には希有の大規模な配石遺構群の他、埋設土器などが検出された。遺物では、土器や石器の他、土偶や石棒などの祭祀関係の遺物が多量に出土した。また、赤色顔料が確認される遺物も目立つ。遺物の出土量は整理箱にして2,000箱余りであった。その他の時代のものには、弥生時代の方形周溝墓2基や中世の条里に関すると推定される溝1条などがある。

B地区では、飛鳥～奈良時代の堅穴住居3棟が検出された。

C地区では、奈良時代の堅穴住居1棟や中世の土坑2基、溝数条が検出された。

D地区では、平安時代の掘立柱建物1棟や平安時代末期から鎌倉時代にかけての土坑、溝、室町時代の掘立柱建物2棟、井戸1基、土坑、溝などが検出された。

これらの調査の内で特筆すべきものは縄文時代の配石遺構群で、その存在は西日本屈指であり県内外で注目された。

2 経 過

（第3・4図）参照。

天白遺跡の発見は比較的新しく、昭和63年の皇学館大学考古学研究会による、嬉野町遺跡詳細分布調査^①の時である。量的にまとまった宮滝式土器が確認され、縄文時代後期後葉の良好な遺跡として注目された。

その後、平成2年に県営は場整備事業に先立ち、三重県埋蔵文化財センターによる分布調査・試掘調査^②が行われ、用水路部分の発掘調査も実施された。用水路部分の調査では、飛鳥時代の遺構・遺物が検出されたが、縄文時代に所属する遺構・遺物は皆無であった。

同年、嬉野町教育委員会により、工場建設に伴う試掘調査^③が実施された。調査地が川よりの一段低い場所であったためか、この調査では、遺構・遺物は確認されなかった。

以上の経過の後、平成4年度の発掘調査が実施された。A地区の調査を7月29日に開始し、10月12日からは、B・C・D地区の調査も平行して行った。

A地区については、遺跡の重要性から関係各位との協議を行い、11月25日から範囲確認のためのトレーニング調査も実施した。トレーニングは、は場整備の地区除外地であった南側を除く三方に、計4本設定した。

調査の結果、縄文時代の遺構・遺物の広がりは東西に約90mの範囲であることと北端を確認した。なお、C及びD地区についても、下層の確認調査を実施したが、縄文時代の遺物包含層は確認されなかった。

A地区的調査は、遺跡（配石遺構）の保存を念頭において行った。したがって縄文時代の遺物包含層は完掘せずに、配石遺構が安定してみられるレベルで掘削をとどめた。また、配石遺構の断割りも一部のものについてのみ行った。

調査期間中には、文化庁・岡村道雄氏（9月3日）、同・松村恵司氏（12月1日）、同・安原啓示氏（12月15日）の現場視察を受けた。また、奈良大学・泉拓良氏（9月21日）、同・水野正好氏（9月30日）の現地指導を受けた。

11月21日にはA地区を中心に現地説明会を実施し、県内外から多数の参加者があった。

A地区的調査は平成5年1月11日に終了し、翌12日から埋戻しを行った。埋戻しは、土を詰めた土嚢袋により主だった配石遺構を保護した後、人力により配石遺構上部まで土を被せ、その後、重機により土を被せた。

平成4年度の調査結果を受けて、翌5年、嬉野町教育委員会はA地区の南側に範囲確認のためのトレ

ンチ調査を実施した^④。この結果、縄文時代の遺構・遺物の広がりは、南北に約100mであることが確認された。

平成4年及び5年の調査結果をもとに、中郷土地改良区を始めとする関係各位のご協力により場整

備の計画が変更され、平成5年10月6日、縄文時代の配石遺構を中心に東西約124m、南北105mの範囲が嬉野町の町史跡に指定された。その後、平成7年3月13日に、同範囲が三重県の県史跡に指定された。

(森川幸雄)

[註]

① 皇学館大学考古学研究会「天白遺跡」(『嬉野町の遺跡』1989年)。

② 福田哲也「天白遺跡」(『平成2年度農業基盤整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告－第1分冊－』三重県埋蔵文化財センター、1991年)。

③ 和氣清章「天白遺跡」(『平成2年度 三重県埋蔵文化財センター年報2』三重県埋蔵文化財センター、1991年)。

④ 和氣清章『天白遺跡範囲確認調査報告』(嬉野町教育委員会、1994年)。

II 位置と環境

天白遺跡（1）は、現在の三重県一志郡嬉野町大字釜生田字天白ほかに所在する。また、古代のこの

地域は、伊勢国壱志郡宕野郷に相当する。

1 地理的環境

天白遺跡は、中部日本の南部とも西日本の東端とも言える紀伊半島東部にある。この地は伊勢湾西岸とも呼ばれ、伊勢の海岸平野が広がる。その南北の中央部には雲出川が東流し、伊勢湾に注ぎ込んでいる。この雲出川の有力な支流である中村川も下流域で北上し、合流している。中村川は、新世代第三紀新層である一志層群を基盤とする丘陵を開析しており、天白遺跡の所在する中流域では河岸段丘を形成

しながら蛇行を繰り返している。当遺跡は、中村川が大きく蛇行した北岸の沖積低地に立地する。

土層観察の結果、縄文時代の包含層の上に中村川の氾濫によって堆積した砂質シルト層が広く覆っていた。したがって縄文時代の天白遺跡は、微高地ではあるが、まだ河岸段丘は形成されておらず、氾濫原上にあったと推定される。現況は畠地であり、付近の標高は28m前後である。

2 歴史的環境

天白遺跡の所在する旧伊勢国壱志郡は、大和から青山峯を越えて最初に出る所である。そのため、伊勢国の中では各時代を通じて最も畿内色の強い特徴的な地域である。

旧石器時代の確かな遺跡は付近にはないが、島田遺跡（10）や天保遺跡（14）では尖頭器が出土しており、縄文時代早期前半以前に属するものと考えられる。以下、縄文時代を中心として各時代を概観してみよう。

縄文時代 中村川の中・下流域には、縄文時代の遺跡が高密度に確認されている。古い例としては、釜生田遺跡（8）で早期初頭の土器片がある。そのほかにも早期前半の土器は、下沖遺跡（2）や天白遺

跡の対岸にある午前坊遺跡（4）を始め、東野B遺跡（5）、井ノ廣遺跡（7）、やや離れて蛇龜橋遺跡（12）、馬ノ瀬遺跡（17）、針箱遺跡（25）からも出土している。この内、釜生田遺跡や馬ノ瀬遺跡からは陥穴が検出され、東野B遺跡からは線刻礫も出土している。このように、早期前半に限っても5km程の範囲に少なくとも8遺跡が集中している。同様に、縄文時代各期の遺跡がこの中村川沿いに集中しており、縄文社会集団の領域を考える上でも興味深い地域である。

天白遺跡は、中期中葉に始まって後期中葉から晩期初頭に最盛期を迎えている。中村川流域では、天白遺跡の最盛期である後期後葉頃の遺跡としては、

下沖遺跡が知られている。

下沖遺跡は、天白遺跡の上流約2kmの、中村川が大きく蛇行する北岸の河岸段丘上に位置する。平成3年度に嬉野町教育委員会が発掘調査した結果、やはり後期後葉から晚期前半を中心とする多量の遺物が出土した。特に、土偶や石棒、赤色顔料の付着した土器や磨石、敲石等は、天白遺跡とも共通しており、注目される。また、配石遺構の存在も共通する。一方、天白遺跡では検出されなかった竪穴住居が、下沖遺跡では確認されている。

なお、三重県内における天白遺跡と同時期の主要な遺跡には、宮川水系の森添遺跡（50、度会郡度会町）や櫛田川水系の森荘川浦遺跡（51、多気郡多気町）があげられる。この両遺跡からも天白遺跡と共に、土偶や水銀朱を主成分とする赤色顔料の付着した土器や石器が多数出土している。特に、森添遺跡では石棒や石冠・御物石器・土製耳飾・玉類などの特殊な遺物が注目される。

また、三重県に近接する同時代の主要な遺跡には、兵庫県の元住吉山遺跡（52）や京都府の一乗寺向畠遺跡（53）、滋賀県の滋賀里遺跡（54）や小川原遺跡（55）、奈良県の宮滝遺跡（56）、愛知県の寺津貝塚（57）、静岡県の蜆塚遺跡（58）、長野県の中村中平遺跡（59）などがあげられよう。この内、宮滝遺跡は吉野川と宮川を介して森添遺跡等のある伊勢南部に通じている。また、京大阪方面には雲出川と伊賀盆地を介して意外に近い。さらに、愛知・静岡方面には伊勢湾口の島々と渥美半島という有力なルートがあり、特に伊勢南部との交流は何時の時代も盛んであった。北上して濃尾平野に出、山を越えれば中村中平遺跡などのある信州に至る。

天白遺跡が最盛期を終えた晚期後半にも、竪穴住居の検出された釜生田遺跡や蛇龜橋遺跡を始め、蛇龜橋遺跡に先行する突帯文土器の合口土器棺墓が調査された天保遺跡のほかにも、堀之内遺跡（19）や下之庄東方遺跡（24）など、多くの遺跡が確認されている。やはりこの時期も、東海地方にあって近畿地方的な文化要素が最も色濃い点がこの地域の特色である。

弥生時代 東海地方で最も古い要素を多く持った遠賀川式土器を出土した中ノ庄遺跡は、この雲出川下

流域に位置する。

伊勢地方の前期弥生遺跡は、この地域を出発点として北上し、安濃川の納所遺跡、鈴鹿川の上箕田遺跡、海蔵川の大谷遺跡など、主要河川のデルタに拠点的集落が形成されている。北上するにしたがって古手の土器は少くなり、この傾向は濃尾平野まで延長している。

一方、雲出川流域より南伊勢に前期弥生文化が本格的に浸透したのは北伊勢よりも一時期遅く、前期新段階になってからである。

各河川の流域では、上記のような拠点的集落を中心として、次第に中・上流域にも拡散している。雲出川流域では、中期の方形周溝墓群や竪穴住居が下ノ庄東方遺跡を始め、片野遺跡（28）・鳥居本遺跡（29）などで検出されている。

古墳時代 欠山式土器の新段階は全国的視野からすれば古墳時代に属するが、西野4号墓（30）などはこの時期の方形台状墓の可能性もある。また、上野1号墳（31）は布留I式期に属し、全長20mの前方後円墳とも推定されている。

一方、この嬉野町内には前期の前方後方墳が集中している点も注目される。すなわち、全長71.4mの向山古墳（32）、全長47mの錆山古墳（33）、「壱志君塚」とも呼ばれる全長45mの筒野古墳（34）、全長43.6mの西山古墳（35）である。いずれも前期のものであり、直径3.6km程の範囲にある。

後期では、歩搖付金銅製品や鉄地金銅張馬具類が副葬された天保1号墳（14）を始め、鉄地金銅張馬具類ほかが副葬された西野5号墳（30）など、有力な古墳が目立つ。これらは、6世紀中葉前後の築造であり、いずれも横穴式石室を採用している。

古墳時代に一貫して営まれた集落としては下之庄東方遺跡があり、竪穴住居が70棟確認されている。また、片野遺跡では後期の規格性をもって並んでいたらしい竪穴住居ほかが検出されている。

飛鳥～平安時代 旧壱志郡下には、この嬉野町を中心として白鳳時代に創建された寺院跡が集中しており、都城の置かれた地域を除けば全国的に見ても特異な地域といえよう。すなわち、旧壱志郡壱志にあって良好な川原寺式軒丸瓦や凸面布目瓦等が採集されている一志廃寺（37）を始め、法起寺式伽藍配置で

磚物や塑像の出土した天花寺廃寺（39）、上野廃寺（22）、嬉野廃寺（23）の他、斑光寺廃寺や高寺廃寺（共に一志町）がある。これらの寺院に供給したであろう辻垣内瓦窯跡（36）からは、復元されて重要文化財に指定された2点の鷗尾も出土している。この旧壱志郡下の白鳳瓦には、複線鋸歯文や偏向唐草文などが特徴的に多用されており、地域色を形成している。そしてこの特色は、南接する旧飯高郡等の地域色の原型ともなっている。

また、発掘調査はされていないが基壇状の高まりを留める中谷遺跡（38）からは、天平期の官衙に多用されたという重圈文軒丸も表面採集されている。同型式の瓦は、近くの天花寺廃寺でも出土しており、藤原広嗣の乱（740年）の際に聖武天皇が行幸した川口関跡とも推定される大角遺跡（白山町）でも出土している。

一方、天平期の小野瓦窯跡（42）からは、軒丸瓦が出土している。当遺跡は旧飯高郡に属しており、同郡下に同范関係が認められる。

このほかの律令期の遺跡には、平生遺跡（40）や鳥居本遺跡などが良く知られている。こうした遺跡では、7・8世紀の暗文を施した胎土の精良な土師器も特徴的である。飛鳥地方の精良な例と良く類似するが、一部を除いて地元産と推定される。このような土師器は瓦の地域色と同様に、旧飯高郡のモデルとなっている。

このように、旧壱志郡は特異な都ぶりを示している。その理由は、当時都のあった飛鳥地方から東国に向かう場合、伊賀国を抜けて伊勢国の最初の郡であり、ここから南下すれば斎宮や伊勢神宮に至り、北上すれば東国に至る、交通の要衝地であったことにある。事実、斎王退下に伴う壱志頓宮や壱志駅家が文献で知られ、当然官道もあったはずである。ともかく、こうした地勢的な傾向は単に律令期に留まらず、通史的に伺える当地方の特色である。

（森川幸雄）

中世 古代には、前方後方墳や白鳳寺院の集中等により伊勢平野において先進的な位置づけをされる当地域も古代末にはその地位を低下させ、中世前半にかけての様相は、南勢地域の特色に埋没してしまっている。

伊勢は平氏の拠点であったためか、鎌倉幕府成立後も小規模ながら平氏の抵抗は続いているようである。その対策としてであろうか、当地域の天花寺、新屋庄等の荘園地頭は東国御家人で占められる。しかし、この東国御家人による支配の様相を考古学的資料から解明することは困難な現状である。中世集落の調査事例は増加しているものの、その性格に言及した報告は、平安時代に遡るものであるが名主層の屋敷とする平生遺跡のみである。また、平安時代に蘭大納言が築城したと伝えられる天花寺城（43）においても、現在までの発掘調査結果では、そこまで遡る資料は出土していない現状等、不明な事項が多い。

ところが中世後半になると様相は一変し、再び歴史の中心となる。南北朝の動乱以来、南勢地方に勢力を延ばした北畠氏に関連する城館が多数伝えられ、中・北勢を拠点とする勢力や北朝、織田信長と対峙してきた。これらの城館を中心とした南北朝や戦国の動乱は、いくつもの伝説を今日に残している。

阿坂城（44）は伊勢平野を一望できる標高321mの尾根に築かれた山城である。『伊勢国司記略』には「応永年中国司満雅朝臣足利の軍勢を防がんため、此山の上に城を築て籠り給ふ。敵水道を断て城中難儀に及ぶ時、国司卒に仰せて白米を水の如く馬の足に汲かけて、敵を欺き退け給ひければ、これより白米城と名づくなり」とあることから地元では「白米城」として広く知られている。南北2カ所に分かれ、南側は最高点に占地し、四方に切岸を配した方形の台状地、やや低い北側は土塁や切岸により複雑な郭構造である。また両者の間には2条の堀切も設けられている。この城の北側裾野から中村川沿いに遡ると白口峠を経て北畠氏が本拠を構える多氣に至る。この道が多氣と伊勢平野を結ぶ重要な経路であったことは容易に推測できる。天白遺跡はこの経路上に位置し、付近には中世城館が多く点在する。森本城（45）、八田城（46）、堀ノ内城（47）、天花寺城小川城（48）、須賀城（49）等があり、森本城と阿坂城を居館と詰城に位置づける論考もある。^① この様に、天白遺跡周辺は北畠氏支配の最前線として機能していたが、戦国末期に新興勢力である織田信長によって壊滅に追い込まれ、中世は終わりを告げる。

近世 近世には津藤堂藩領と徳川和歌山藩領の境に位置し、天白遺跡近辺は後者に属していた。近代の廃藩置県においても、当地域は度会県の北端部で安濃津県との境に近く、現代に至っても津、松阪両市

の経済圏の接点にあたるなど中世後期以来の大きな勢力の接点という位置づけは不变である。

(森川常厚)

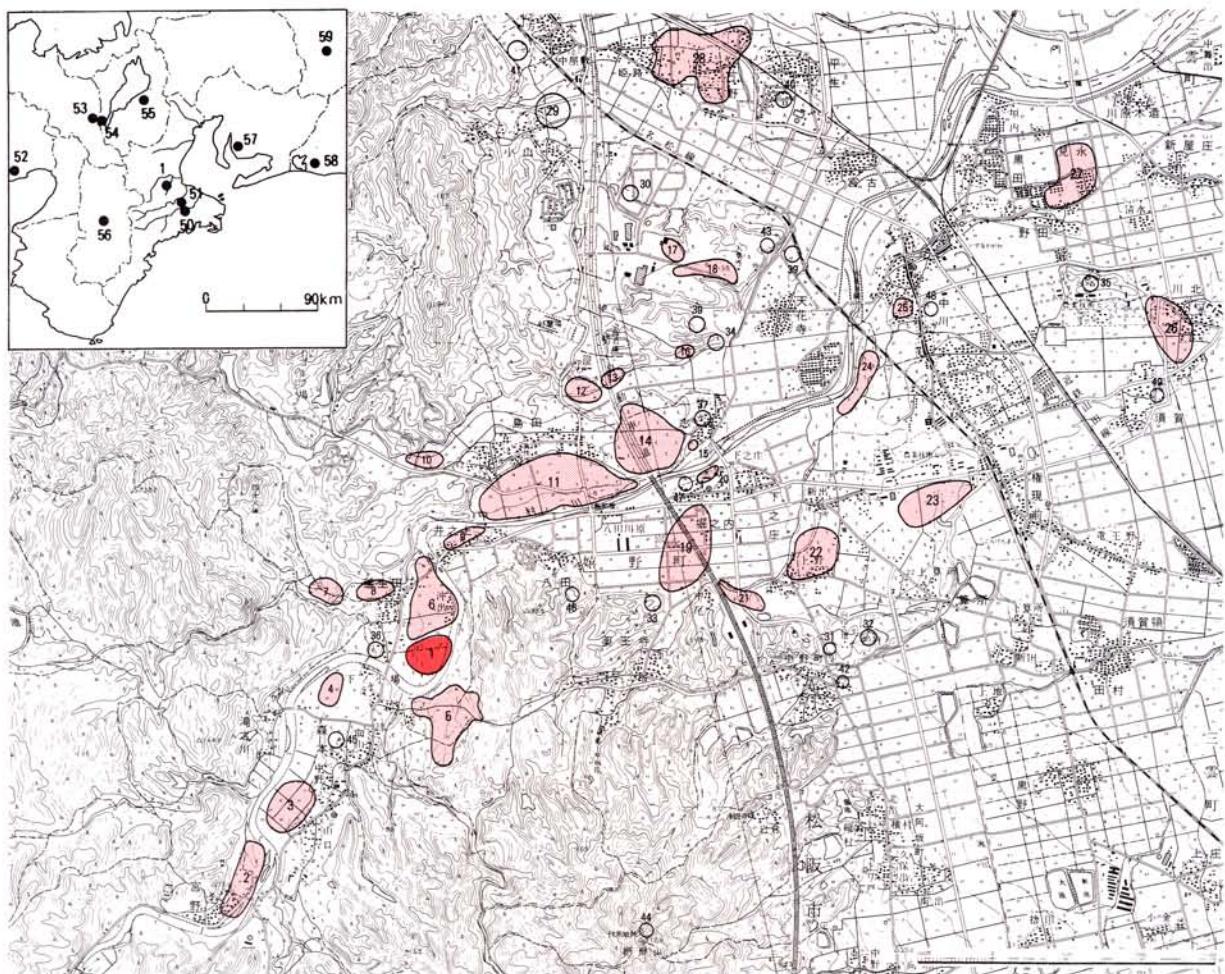
[註]

- ① 伊藤裕偉「北畠領域における阿坂城とその周辺」(『Miehistory』vol.6、三重歴史文化研究会、1993年)。

[関係文献]

- 1 天 白 遺 跡 · 森川幸雄『天白遺跡』(三重県埋蔵文化財センター、1993年)。
· 和氣清章『天白遺跡範囲確認調査報告』(嬉野町教育委員会、1994年)。
2 下 沖 遺 跡 · 和氣清章「下沖遺跡」(『三重県埋蔵文化財センター年報3』三重県埋蔵文化財センター、1992年)の62・63頁。
4 午 前 坊 遺 跡 · 増田安生「午前坊遺跡」(『三重県埋蔵文化財年報16』三重県教育委員会、1986年)の37頁。
5 東 野 B 遺 跡 · 稲垣良二、服部芳人『東野B遺跡』(三重県教育委員会、1987年)現場説明会資料。
· 奥義次、田村陽一、穂積裕昌「三重県下の前半期押型文土器」(『研究紀要』第2号、三重県埋蔵文化財センター、1993年)の146・147頁。
6 弥 五 郎 垣 内 遺 跡 · 「弥五郎垣内遺跡」(『嬉野町埋蔵文化財調査概要』平成2年度、嬉野町教育委員会、1991年)。
7 井 ノ 廣 遺 跡 · 小林秀『井ノ廣遺跡』(三重県埋蔵文化財センター、1989年)現場説明会資料。
· 奥義次、田村陽一、穂積裕昌「三重県下の前半期押型文土器」(『研究紀要』第2号、三重県埋蔵文化財センター、1993年)の150・151頁。
8 釜 生 田 遺 跡 · 田中久生、江尻健『釜生田遺跡』(三重県教育委員会、1988年)現場説明会資料。
· 奥義次、田村陽一、穂積裕昌「三重県下の前半期押型文土器」(『研究紀要』第2号、三重県埋蔵文化財センター、1993年)154・155頁。
9 井 之 上 遺 跡 · 皇学館大学考古学研究会「井之上遺跡」(『嬉野町の遺跡』1989年)。
10 島 田 遺 跡 · 鈴木敏雄「考古学からみた一志郡」(『一志郡誌』下巻、一志郡町村会、1955年)。
11 上 野 垣 内 遺 跡 · 田中喜久雄「上野垣内遺跡」(『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会、1980年)。
12 蛇 亀 橋 遺 跡 · 新田洋「蛇亀橋遺跡」(『昭和56年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会、1982年)。
13 燃 野 遺 跡 · 新田洋「燃野遺跡」(『近畿自動車道(久居~勢和)埋蔵文化財発掘調査報告』第3分冊4、三重県教育委員会、三重県埋蔵文化財センター、1991年)。
14 天 保 遺 跡 · 田村陽一他「天保遺跡A・B地区」(『近畿自動車道(久居~勢和)埋蔵文化財発掘調査報告』第3分冊6、三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター、1991年)。
· 田村陽一『近畿自動車道(久居~勢和)埋蔵文化財発掘調査報告』第3分冊7(三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター、1991年)。
· 伊勢野久好他『天花寺山』(一志町・嬉野町教育委員会、1991年)。
17 馬 ノ 瀬 遺 跡 · 「清水谷遺跡」(『嬉野町埋蔵文化財調査概要』平成2年度、嬉野町教育委員会、1991年)。
18 清 水 谷 遺 跡 · 田村陽一『近畿自動車道(久居~勢和)埋蔵文化財発掘調査報告』第三分冊8(三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター、1991年)。
19 堀 之 内 遺 跡 · 和氣清章『中尾垣内遺跡発掘調査報告』(嬉野町教育委員会、1990年)。
21 中 尾 垣 内 遺 跡 · 河北秀実「中尾遺跡」(『近畿自動車道(久居~勢和)埋蔵文化財発掘調査報告』第3分冊1、三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター、1991年)。
· 和氣清章『上野廢寺発掘調査報告』(嬉野町教育委員会、1995年)。
22 上 野 廢 寺 下 層 遺 跡 · 鈴木敏雄「考古学からみた一志郡」(『一志郡誌』下巻、一志郡町村会、1955年)。
23 嬉 野 廢 寺 · 『一級河川中村川埋蔵文化財発掘調査概要Ⅰ下之庄東方遺跡(高畑地区)』(三重県教育委員会、1987年)。
· 『一級河川中村川埋蔵文化財発掘調査概要Ⅱ下之庄東方遺跡(小野・四反田・夜ノ堀地区)』(三重県教育委員会、1988年)。
25 針 箱 遺 跡 · 『針箱遺跡・下之庄東方遺跡』(嬉野町教育委員会・嬉野町遺跡調査会、1987年)。
26 庵 ノ 門 遺 跡 · 皇学館大学考古学研究会「庵ノ門遺跡」(『嬉野町の遺跡』1989年)。

- 27 野田遺跡 · 和氣清章『野田遺跡発掘調査報告』(嬉野町教育委員会、1995年)。
- 28 片野遺跡 · 河瀬信幸他『片野遺跡発掘調査報告』(三重県教育委員会、1985年)。
- 29 鳥居本遺跡 · 伊勢野久好『片野遺跡発掘調査報告』(一志町教育委員会、1986年)。
- 30 西野古墳群 · 稲生進一、吉村利男『鳥居本遺跡発掘調査報告』(一志町教育委員会、1975年)。
- 31 上野1号墳 · 河北秀実『近畿自動車道(久居~勢和)埋蔵文化財発掘調査報告』第3分冊10、三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター、1991年)。
- 32 向山古墳 · 伊勢野久好他『天花寺山』(一志町・嬉野町教育委員会、1991年)。
- 33 鎌山古墳 · 伊藤裕偉「上野1号墳」(『定型化する古墳以前の墓制』第Ⅱ分冊近畿・中部以東編(埋蔵文化財研究集会、1988年))。
- 34 筒野古墳 · 原始古代史部会「一志郡向山前方後方墳について」(『ふびと』27、三重大学歴史研究会、1967年)。
- 35 西山古墳 · 伊勢野久好他『天花寺山』(一志町・嬉野町教育委員会、1991年)。
- 36 筒野古墳 · 原始古代史部会「一志郡筒野・西山両前方後方墳について」(『ふびと』20、三重大学歴史研究会、1963年)。
- 37 西山古墳 · 原始古代史部会「一志郡筒野・西山両前方後方墳について」(『ふびと』20、三重大学歴史研究会、1963年)。
- 38 辻垣内瓦窯跡 · 原始古代史部会「一志郡筒野・西山両前方後方墳について」(『ふびと』20、三重大学歴史研究会、1963年)。
- 39 天花寺廃寺 · 辻富美雄他『釜生田辻垣内瓦窯跡群発掘調査概報』(嬉野町教育委員会、1985年)。
- 40 平生遺跡 · 竹内英昭他『辻垣内瓦窯跡群』(嬉野町教育委員会、1988年)。
- 41 平生遺跡 · 鈴木敏雄『三重県古瓦図録』(楽山文庫、1933年)。
- 42 八太廃寺 · 皇學館大学考古学研究会「中谷廃寺」(『嬉野町の遺跡』1989年)。
- 43 中谷遺跡 · 小玉道明、山田猛「天華寺廃寺」(『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会、1980年)。
- 44 天花寺廃寺 · 山田猛「天華寺廃寺」(『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財調査報告』三重県教育委員会、1981年)。
- 45 平生遺跡 · 三重大学歴史研究会『平生遺跡発掘調査報告』(平生遺跡発掘調査団、1976年)。
- 46 八太廃寺 · 福田哲也、野口美幸『平生遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、1994年)。
- 47 小野瓦窯跡 · 鈴木敏雄『三重県古瓦図録』(楽山文庫、1933年)。
- 48 天花寺城 · 松阪市史編さん委員会編『松阪市史』第二巻 資料編考古(1978年)。
- 49 阿坂城 · 岡田文雄「天花寺城」(『三重の中世城館』三重県教育委員会、1976年)。
- 50 阿坂城 · 世古且守「阿坂城」(『三重の中世城館』三重県教育委員会、1976年)。
- 51 森本城 · 岡田文雄「森本城」(『三重の中世城館』三重県教育委員会、1976年)。
- 52 森本城 · 世古且守「森本城」(『三重の中世城館』三重県教育委員会、1976年)。
- 53 八田城 · 岡田文雄「八田城」(『三重の中世城館』三重県教育委員会、1976年)。
- 54 八田城 · 世古且守「八田城」(『三重の中世城館』三重県教育委員会、1976年)。
- 55 堀之内城 · 岡田文雄「堀之内城」(『三重の中世城館』三重県教育委員会、1976年)。
- 56 堀之内城 · 岡田文雄「小川城」(『三重の中世城館』三重県教育委員会、1976年)。
- 57 小川城 · 岡田文雄「小川城」(『三重の中世城館』三重県教育委員会、1976年)。
- 58 小川城 · 岡田文雄「須賀城」(『三重の中世城館』三重県教育委員会、1976年)。
- 59 須賀城 · 岡田文雄「須賀城」(『三重の中世城館』三重県教育委員会、1976年)。
- 60 森添遺跡 · 奥義次、御村精治『森添遺跡発掘調査概報II』(度会町遺跡調査会、1988年)。
- 61 森莊川浦遺跡 · 奥義次「森莊川浦遺跡」(『多気町史-通史』多気町、1993年) 102 ~110頁。
- 62 元住吉山遺跡 · 直良信夫「播磨国押部谷元住吉山の遺跡について(予報)」(『人類学雑誌』43-5、1928年)。
- 63 一乗寺向畠町遺跡 · 佐原眞「京都市一乗寺縄文文化遺跡の調査」(『古代文化』第7巻第2号、1961年)。
- 64 一乗寺向畠町遺跡 · 田辺昭三編『湖西線関係遺跡調査報告書』(湖西線関係遺跡発掘調査団、1973年)。
- 65 滋賀里遺跡 · 中村健二「小川原遺跡の発掘調査-西日本最大級の配石遺構群-」(『滋賀考古』第8号、滋賀考古学研究会、1992年)。
- 66 小川原遺跡 · 末永雅雄『宮滝の遺跡』(奈良県史蹟名勝天然記念物調査会報告15、1944年)。
- 67 寺津貝塚 · 増子康真「愛知県寺津貝塚」(『東海先史文化の諸段階』資料編II、1975年)。
- 68 蜷塚遺跡 · 麻生優他『巓塚遺跡総括篇』(浜松市教育委員会、1962年)。
- 69 中村中平遺跡 · 馬場保之他『中村中平遺跡』(飯田市教育委員会、1994年)。

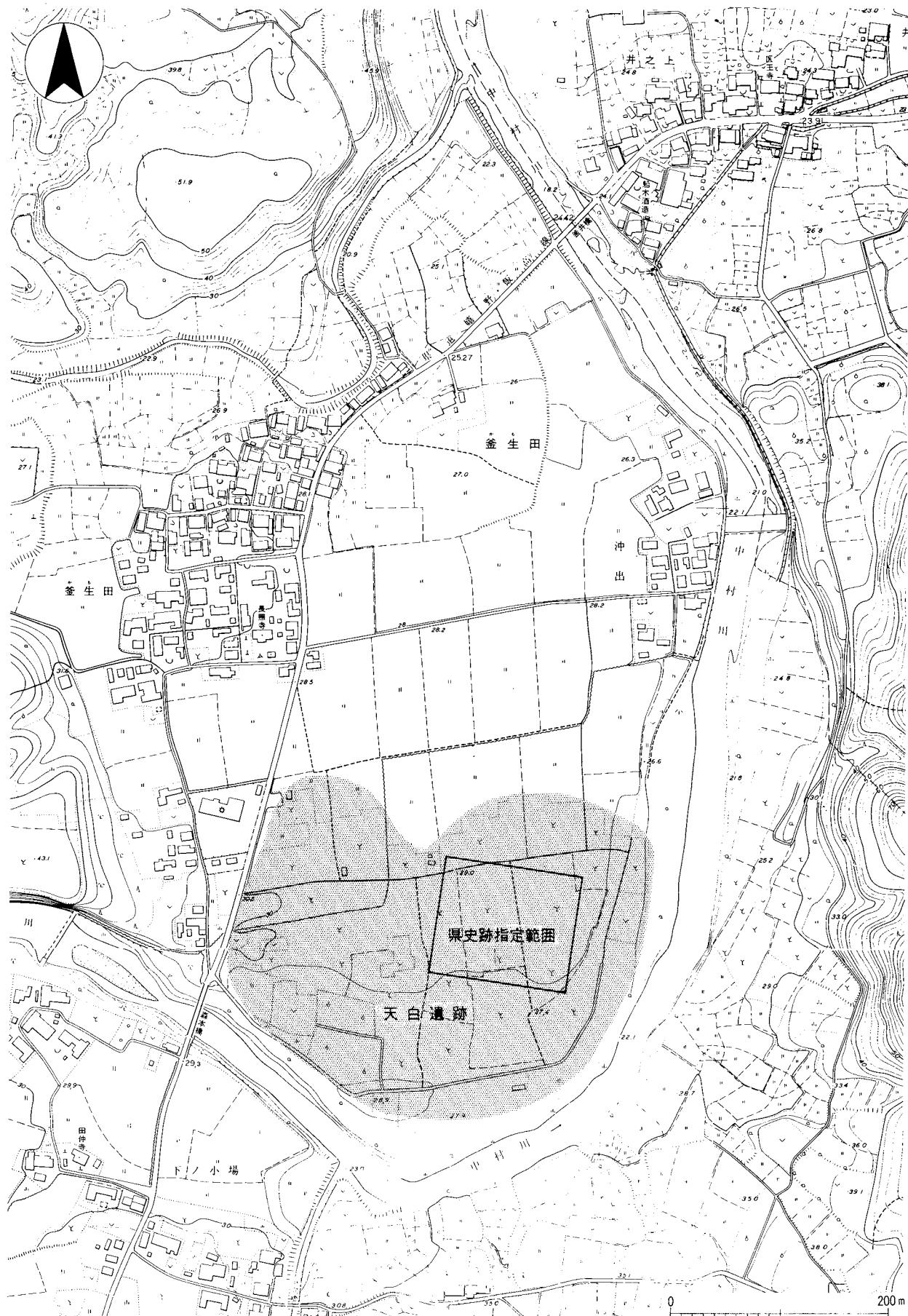


第1図 遺跡位置図 (1 : 50,000)

No.	遺跡名	時期						備考
		草	早	前	中	後	晩	
1	天白			○	○	○		
2	下沖	○	○	○	○	○		
3	大垣内							詳細不明
4	午前坊	○		○				
5	東野B	○		○	○			
6	弥五郎垣内		○	○	○			
7	井ノ廣	○		○				旧称「鹿伏遺跡」
8	釜生田	○	○	○	○	○		
9	井之上		○					
10	島田							尖頭器ほか
11	上野垣内			○	○			
12	蛇亀橋	○	○		○			
13	焼野	○	○	○	○			
14	天保		○	○	○	○		尖頭器

No.	遺跡名	時期						備考
		草	早	前	中	後	晩	
15	郡一							詳細不詳
16	筒野							詳細不明
17	馬ノ瀬		○					
18	清水谷				○	○		
19	堀之内				○	○	○	
20	御所垣内							詳細不詳
21	中尾垣内			○	○	○		含「ビハノ谷遺跡」
22	上野廃寺下層			○		○		
23	嬉野							詳細不詳
24	下之庄東方			○		○		
25	針箱	○	○	○	○			
26	庵ノ門						○	
27	野田						○	
28	片野		○		○	○		

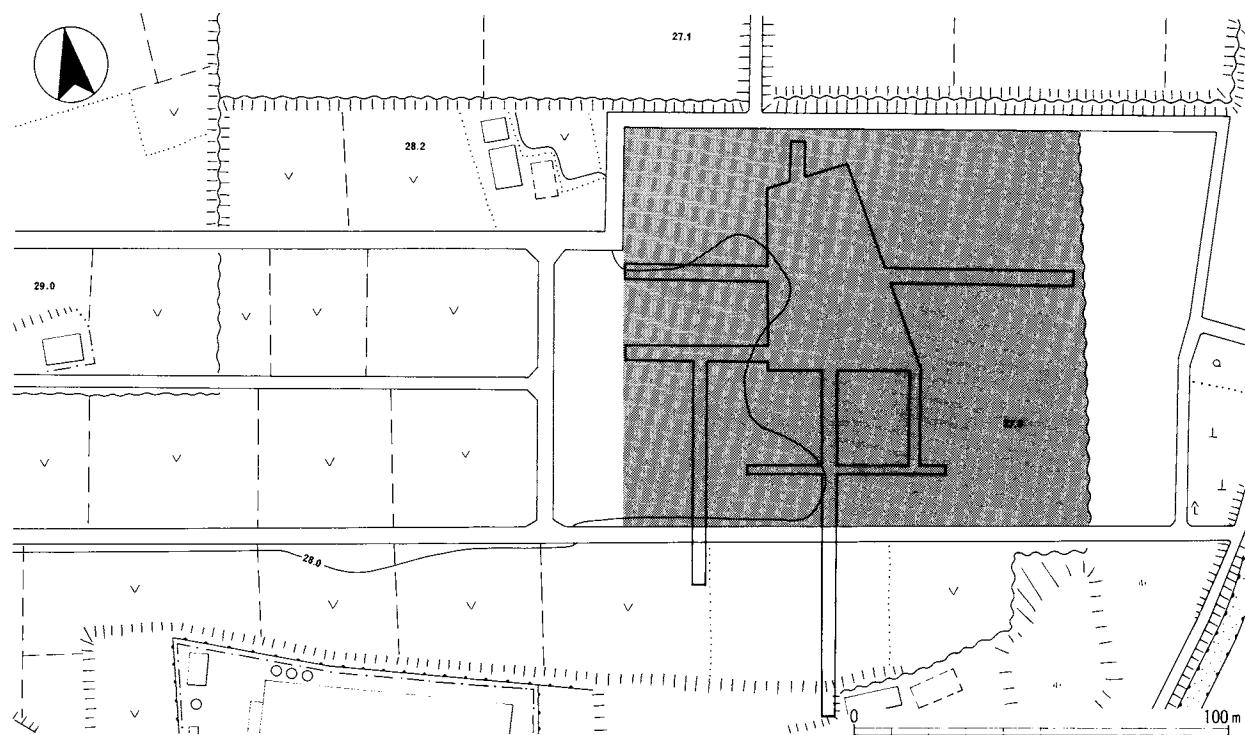
第1表 天白遺跡周辺の縄文時代遺跡一覧表



第2図 遺跡地形図 (1 : 5,000)



第3図 調査区位置図（1：2,000）※設計変更前の工事計画線による



第4図 県史跡指定範囲（1：2,000）※設計変更後の工事計画線による

III A 地区の調査

縄文時代後期中葉から晩期初頭に属する大規模な配石遺構群や埋設土器26基、焼土35基、弥生時代中期の方形周溝墓2基、中世の条里と係わると推定される溝1条を検出した。

今回検出された配石遺構群は西日本では希有なもので、遺跡の重要性から、本来の調査区とは別に範囲確認のためのトレンチ調査を実施した。トレンチは、ほ場整備の地区除外地であった南側を除く三方に、4本設定した。

グリッドの設定（第7図） 調査は4m×4mのグリッドを1単位とする地区割を設定して行った。グリッドの設定は国土座標にはよらず、任意で設定し

た。南北にアルファベット（A～O）を用い、東西に算用数字（1～12）を用い、グリッドの北西隅を表示の原点とした。しかし、範囲確認のためのトレンチ調査を実施したため、東側にはそのまま算用数字（13～22）を延ばしたが、北側については平仮名（あ・い）を、西側については片仮名（ア～コ）を新たに用いた。なお、グリッドの設定はA～Dの各地区でそれぞれを行い、統一性はない。

以下、層序、縄文時代の遺構、縄文時代の遺物、弥生時代の遺構・遺物について記述を進めるが、中世の溝についてはC（SD201）・D（SD248）地区にもつながるもので、A地区の報告では割愛した。

1 層序

調査開始当初、南壁及び西壁に層位の確認のため、深さ2m程の溝を開けた。基本的な層序は、上から、第I層：灰褐色シルト（耕作土）、第II層：黄色砂質シルト、第III層：灰褐色シルト、第IV層：褐灰色シルト、第V層：暗褐灰色シルト、第VI層：黒色シルト（黒ボク）、第VII層：暗黄色砂、第VIII層：黄色砂、第IX層：灰白色シルトである（第5・6図）。縄文時代の遺物包含層は、第III層（灰褐色シルト層）であり、第IV層以下は無遺物であった。

第III層は20～50cm程の厚みをもつが、分離はできなかった。第III層は西側範囲確認調査の北トレンチではHケグリッドで、南トレンチではMケグリッド

で無くなり、東側範囲確認調査トレンチでは、H16グリッドで無くなる。また、北側範囲確認調査トレンチでは第III層そのものは薄くなりながらも続くが、遺物の出土は北端に向かって極めて少なくなるものであった。

中世の溝は第II層（黄色砂質シルト層）を切るもので、耕作土直下に検出された。したがって、第II層上面でも遺構検出を試みたが、他の遺構は確認されなかった。範囲確認調査では、日程的な問題があり第II層上面での遺構検出を行っていない。なお、弥生時代の方形周溝墓は埋土と第II層との識別ができないものであった。

2 縄文時代の遺構

配石遺構群や埋設土器26基、焼土35基がある。これらの遺構は、周辺から出土する土器から後期中葉

から晩期初頭に所属すると考えられる。なお、住居跡は確認されなかった。

(1) 配石遺構

で、方形に近いものもある。大きさは径1～2m程で、配石の状況には、A：周囲に石を巡らすタイプ、B：二重に石を巡らすタイプ、C：内側にも石を巡らすタイプ、D：無造作に石を集めたタイプなどがある。配石内に土坑や焼土を伴うものがある。立石を伴うものはない。

配石遺構の地点的なまとまりをみると、本調査区

第III層（灰褐色シルト層）中に確認された。

本遺跡の配石遺構は、大型のものではなく小型のものが時期差や形態差をもって當まれた結果、大規模な配石遺構群が成立したものである。

個々の配石遺構には、一見してそれと判る明確なまとまりをみせるものとそうでないものがある。前者について述べると、平面形は円形もしくは楕円形

西側にはAタイプのものが直線的に並ぶ。南側には中世の溝にその中心部分を壊されるが、各タイプのものが同心円状に多数みられる。東側には比較的大きなCタイプのものを中心としたまとまりがみられる。北側には明確な配石状況を示すものは少ないが、多数の石は散在する。また、調査区中央部には配石遺構が少ない印象を受ける。西側の北トレーニングには石が散在する。西側の南トレーニングには明確な配石遺構もみられる。東側のトレーニングには明確な配石遺構は認められないが、多数の石がみられる。以上の状況から配石遺構の分布（累積結果）について考えると、明確な配石遺構がまとまる南側の一群と個々の配石遺構の遺存状況は悪いが、多数の石が確認される北側の一群、北と南の両群をつなぐように直線的な配列をみせる本調査区西側の一群というまとまりが把握される。

以下、比較的明瞭なまとまりをもつ個々の配石遺構について記述をする。

配石1（第10図） 本調査区西側に直線的に並ぶAタイプの配石遺構のなかで、最も北に位置するものである。東西1m、南北0.9m程の楕円形を呈する。

配石2（第10図） 配石1のすぐ西に在る。遺存状況は悪いが、Aタイプのものであったと推定される。配石に囲まれるように焼土が確認された。また、長軸0.7m×短軸0.4m、深さ6cmほどの土坑が配石内に検出されたが、特筆すべき遺物の出土はなかった。

配石3（第10図） 配石2の南側に在るAタイプのものである。配石1～3は集中する。長軸1.8m、短軸1.5m程の楕円形を呈する。配石内に長軸1.0m、短軸0.8m、深さ15cm程の楕円形の土坑を確認した。土坑埋土の篠掛けを行ったが特筆すべき遺物の出土はなく、時期の細分もできない。土坑埋土は小石混じりのもので、形はとどめないが風化した石が1個確認された。

配石4（第10図） 本調査区西側に直線的に並ぶAタイプのなかで、ほぼ中央に位置する。長軸2.0m、短軸1.5m程の楕円形を呈する。配石内に重複する2基の土坑を検出した。南側の土坑が新しい。南側の土坑は、長軸0.6m、短軸0.5m、深さ10cm程の楕円形である。土坑埋土の篠掛けを行ったが特筆すべき

遺物の出土はなく、時期の細分もできない。土坑埋土は小石混じりのもので、形はとどめないが風化した石が1個確認された。配石3に伴う土坑と類似する状況が認められた。北側の土坑は全容を把握できない。特筆すべき遺物の出土はなく、時期の細分はできない。

配石5（第10図） 一辺が1.3m程の方形に近い形を呈するAタイプの配石遺構である。配石内には配石3・4と同様の小石混じりの部分が確認されたが、今回は掘削を控えた。

配石6・7（第10図） 2基の配石遺構が重複する。共にAタイプの配石遺構である。配石6は長軸1.2m、短軸1.0m程の楕円形を呈する。配石7は全容が不明である。配石には台石が1点みられた。両配石遺構共に、配石内には配石3・5と同様の小石混じりの部分が確認されたが、今回は掘削を控えた。

配石8（第11図） 径1m程の範囲に無造作に石が集められたDタイプの配石遺構である。北側には不明瞭ながらAタイプになると思われる配列を示す石がある。

配石9（第10図） 径0.8m程の範囲に無造作に石が集められたDタイプの配石遺構である。

配石10（第10図） 長さ2.1m程の石列状をなす。一応、配石遺構と考えておく。

配石11・12（第10図） 本調査区ほぼ中央に位置する。配石11は、径1m程の範囲に無造作に石が集められたDタイプの配石遺構である。配石12は、Aタイプの残骸と推定される。

配石13（第10図） 長軸1.1m×短軸0.9m程のAタイプの配石遺構である。長軸両端に比較的大きな石を配する。

配石14（第11図） 径2.0m程の円形を呈する。後述する配石15に類似するCタイプの配石遺構であったと推定する。中央部の石が抜き取られている。下部遺構の有無を確認するトレーニングを開けたが、土坑などは伴わない。

配石15（第11図） 径1.8m程の円形を呈する。周辺に大きな石を巡らし、中に小石を同心円状に巡らすCタイプの配石遺構である。中央の石がやや大きく5ないしは6重に石を巡らしている。石は立てたものが目立つ。中央に向かってややレベルが下がる。

配石16 (第12図) 径1.5m程の範囲に石が集中する。遺存状況は悪いが、Cタイプの配石遺構であった可能性がある。

配石17 (第12図) 遺存状況は悪いが、Cタイプの配石遺構であった可能性がある。

配石18 (第12図) 径1.6m程の範囲に石が集中する。中央部の石を欠くが、Cタイプのものである。

配石19 (第12図) 東西3.6m、南北2.0m程の範囲に配石遺構が集中するもので、複数の配石遺構が重複するものと推定する。便宜的に配石19とした。

配石20 (第12図) 径1.5m程の範囲に無造作に石が集められたDタイプの配石遺構である。

配石21 (第12図) 南北1.8m、東西1.4m程の範囲に石が集中する。北側の石は疎らで、南側の石はまとまりをみせる。南側だけで1基とするのが適切かもしれない。CまたはDのタイプの配石遺構か。

配石22 (第12図) 径1.2m程の範囲に無造作に石が集められたDタイプの配石遺構である。

配石23 (第12図) 東西6.4m、南北3.6m程の範囲に配石が認められ、本遺跡中、配石遺構が最も集中する部分である。中世の溝が一部を破壊するものと思われる。中央に石のない空白部が認められることから、全体として1基の配石遺構と考えることもできる。しかし、微妙なレベル差がみられることから、やはり複数の配石遺構が重複するものであろう。便宜的に配石23とした。

配石24 (第12図) 東西3.0m、南北1.2m程の範囲

(2)

26基を確認した。調査区全体に散在してみられるが、中央部は希薄で、配石遺構と同様に北側と南側の2群に分けて考えることもできる。

正立のものと倒立のものがほぼ同数みられる。

第Ⅲ層 (灰褐色シルト層) 中に確認されるもので、正立例の一部は、**第Ⅳ層** (褐灰色シルト層) にまで及ぶ。掘方はぎりぎりに掘られたものが多いと推定され、確認できたものは少数にとどまる。

有文と無文のものがある。有文のものはいわゆる凹線文土器にかぎられ、一乗寺K式以降、元住吉山I式、同II式、宮滝式、滋賀里式が主体的にみられる本遺跡では、後半の時期のものに限られる。

内容物では、微細な骨片や炭がみられるものもあ

に配石遺構がある。中世の溝が一部を破壊している。複数の配石遺構が重複するものであろうか。

配石25 (第13図) 長軸1.9m×短軸1.7m程の楕円形を呈する。周囲に石を二重に巡らすBタイプの配石遺構である。明らかなBタイプの配石遺構はこの1基である。内側の石と比較して、外側の石が大きい。

配石26 (第13図) 径2.4m程の範囲にみられる。完存するものではないが、Cタイプの可能性がある。なお、配石20~22と24~26は配石23の回りに衛星的に分布するものとの見方ができる。

配石27 (第12図) 径0.5m程の範囲に石を積み重ねるように配した配石遺構である。

配石28 (第14図) 長軸1.4m×短軸1.2m程の楕円形を呈する、Aタイプの配石遺構であろうか。配石内には焼土が確認された。

配石29 (第14図) 範囲確認調査西・南トレントの中央で検出された。径0.9m程の円形を呈する、Aタイプの配石遺構である。配石内には厚さ12cm程の焼土が確認され、周囲の石も赤化、もしくは脆くなっていた。炉の可能性もあり、周辺を精査したが堅穴住居を想定させる遺構はなかった。焼土を伴うタイプの配石遺構と考える。

配石30 (第14図) 範囲確認調査西・北トレントの南壁に検出した。全容は不明だが、径1m程の土坑内に配石が認められるもので、本遺跡内では特殊な例である。特筆すべき遺物の出土は無かった。

埋設土器

るが、骨片や炭は調査区全体に散在するもので、混入の可能性が高い。

以下、個々の埋設土器について記述を行う。なお、有文の埋設土器については「2 繩文時代の遺物(1)土器」で行う分類に基づいて記述をする。

埋設1 (第15図) 調査区北西部に、西壁トレントの掘削時に確認した。倒立の埋設土器である。有文深鉢の頸部から上が残存する。後述する深鉢A g類で宮滝式の古相の深鉢と推定されるが、元住吉山II式に遡る可能性もある。

埋設2 (第15図) 埋設1のすぐ東側に確認された。それぞれ半分程が残る2個体の深鉢が組み合わされて埋設土器とされる。いずれも倒立である。189

は口縁部から胴部にかけて残存する。深鉢B 1類で、宮滝式の古相に比定される。59は頸部から上が残存する。後述する深鉢A g類で、宮滝式の古相に比定される。

埋設3（第15図） 倒立の無文深鉢で、底部のみが残存する。内外面とも貝殻調整後、僅かに磨かれる。

埋設4（第15図） 倒立の有文深鉢で、頸部から上が残存する。深鉢A' g'類で、宮滝式の新相に比定される。

埋設5（第15図） 正立の有文深鉢で、胴部上半以下が残存する。深鉢A g'類と推定され、宮滝式の新相に比定される。周辺には焼土がみられた。

埋設6（第15図） 正立の無文深鉢で、胴部以下が残存する。内外面とも貝殻調整後、磨きである。

埋設7（第16図） 正立の無文深鉢で、頸部以下が残存する。外面は貝殻調整後磨きで、内面は貝殻調整後撫である。

埋設8（第16図） 正立の有文深鉢で、ほぼ完存する。深鉢A' g'類で、宮滝式の新相に比定される。

埋設9（第16図） 正立の深鉢で、無文の胴部下半以下を欠く。外面は貝殻調整後磨きで、内面は貝殻調整後撫である。

埋設10（第16図） 正立の無文深鉢で、口縁部は一部を残すのみであるが、口縁部以下はほぼ完存する。内外面とも丁寧に磨かれる。人頭大の石が上にのる。

埋設11（第16図） 倒立の有文深鉢で、頸部から上が残存する。深鉢A' g'類で、宮滝式の新相に比定される。

埋設12（第16図） 倒立の有文深鉢で、頸部から上が残存する。深鉢A g'類で、宮滝式の新相に比定される。

埋設13（第16図） 正立の無文深鉢で、胴部以下が残存する。外面は貝殻調整後磨きで、内面は貝殻調整後撫である。15cm程の石が上下に2個入る。周辺には焼土がみられる。焼土の強弱により、掘方が断面では確認された。

（3）

焼土面を35カ所で確認した。焼土の広がりは大小様々で、径0.4～3.0m程のものがある。調査区中央にはみられず、北側と南側の2群に分けることがで

埋設14（第16図） 倒立の有文深鉢で、口縁部のみが残存する。深鉢A g'類で、宮滝式の新相に比定される。

埋設15（第17図） 倒立の有文深鉢で、口縁部から胴部にかけて半分程が残存する。深鉢A f類で、元住吉山Ⅱ式に比定される。掘方が断面で確認された。

埋設16（第17図） 正立の無文深鉢で、口縁部を欠く。外面は貝殻調整後撫で、内面は撫である。掘方が断面で確認された。

埋設17（第17図） 無文深鉢の中に、壺ないしは注口土器の口縁部が入る。共に倒立である。無文深鉢は、外面は貝殻調整後撫で、内面は撫である。壺ないしは注口土器は、B類で元住吉山Ⅱ式に比定される。

埋設18（第17図） 倒立の有文深鉢で、口縁部のみが残存する。深鉢A g類で、宮滝式の古相に比定される。

埋設19（第17図） 正立の有文鉢で、口縁部の一部を欠く。鉢B類で、元住吉山Ⅱ式に比定される。20cm程の石が上にのる。

埋設20（第17図） 倒立の無文深鉢で、底部を欠く。内外面とも貝殻調整後磨きである。

埋設21（第17図） 正立の無文深鉢で、底部を欠く。内外面とも貝殻調整後撫である。掘方が断面で確認された。

埋設22（第17図） 倒立の無文深鉢で、底部を欠く。内外面とも貝殻調整後磨きである。

埋設23（第18図） 正立の無文深鉢で、口縁部を欠く。内外面とも貝殻調整後磨きである。偏平な石で蓋をされていた。

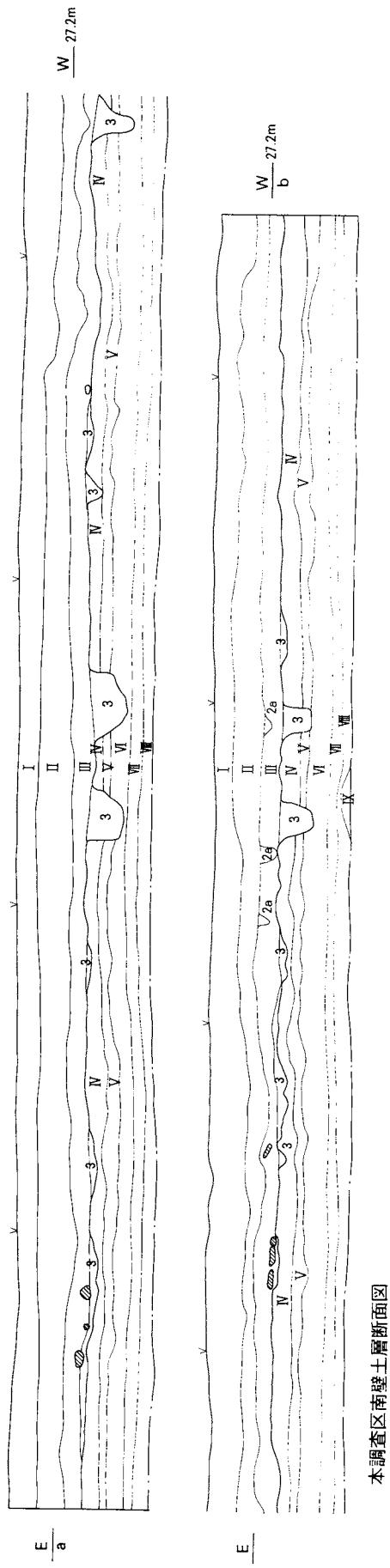
埋設24（第18図） 正立の有文深鉢で、口縁部を欠く。深鉢B 1類で、元住吉山Ⅱ式に比定される。

埋設25（第18図） 正立の無文深鉢で、口縁部を欠く。外面は貝殻調整後磨きで、内面は撫である。長さ40cm程の石がのる。掘方が断面で確認された。

埋設26（第18図） 正立の無文深鉢で、胴部下半以下が残存する。内外面とも丁寧に磨かれる。残存部上端は擬口縁で、再度磨き直して使用される。

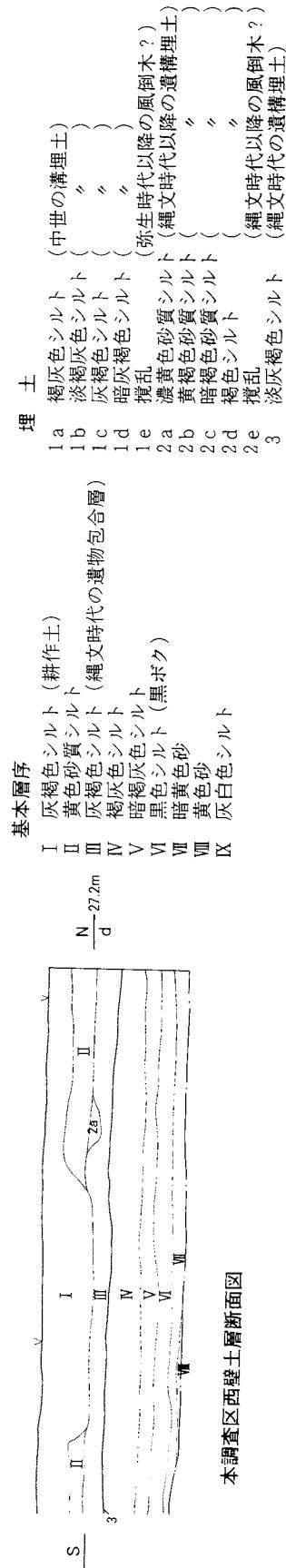
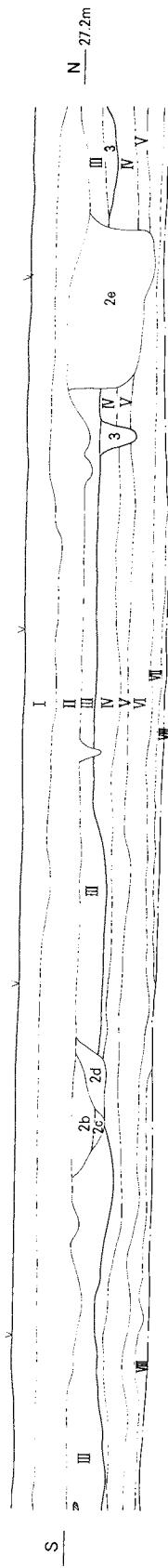
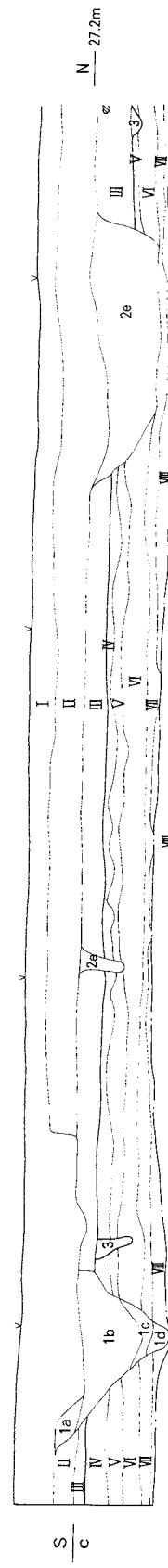
土

きる。焼土は祭祀に伴って火を炊いた痕跡と考えられるが、厚く堆積するものもあり、二次的に集められたものもあると考える。（森川幸雄）



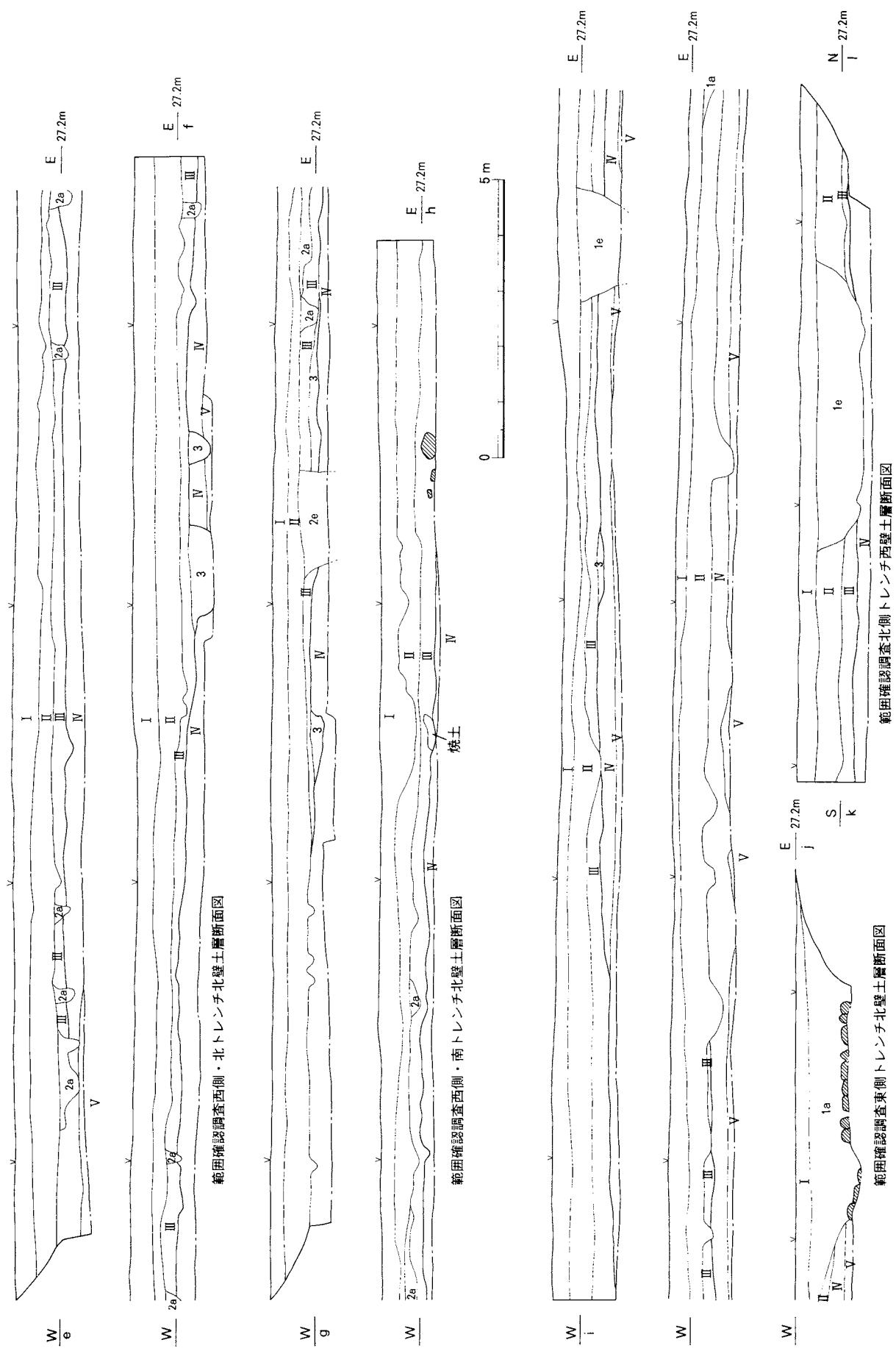
本調査区南壁土層断面図

第5図 A地区土層断面図1 (1 : 100)



本調査区西壁土層断面図

基本層序		埋 土
I	灰褐色砂質シルト (耕作土)	1 a 淡灰色シルト (中世の溝理土)
II	黃褐色砂質シルト (縄文時代の遺物包含層)	1 b 淡褐灰色シルト („ „)
III	褐灰色シルト (縄文時代の遺物包含層)	1 c 灰褐色シルト („ „)
IV	褐灰色シルト (縄文時代の遺物包含層)	1 d 暗灰褐色シルト („ „)
V	暗褐灰色シルト (黒ボク)	1 e 搅乱濃黄色砂質シルト (弥生時代以降の風倒木?)
VI	黑色シルト (黒ボク)	2 a 黃褐色砂質シルト (縄文時代以降の遺構埋土)
VII	暗黃色砂 黃色砂	2 b 暗褐色砂質シルト („ „)
VIII	黃色砂	2 c 褐色シルト („ „)
IX	灰白色シルト	2 d 搅乱 (縄文時代以降の風倒木?)
		2 e 淡灰褐色シルト (縄文時代の遺構埋土)



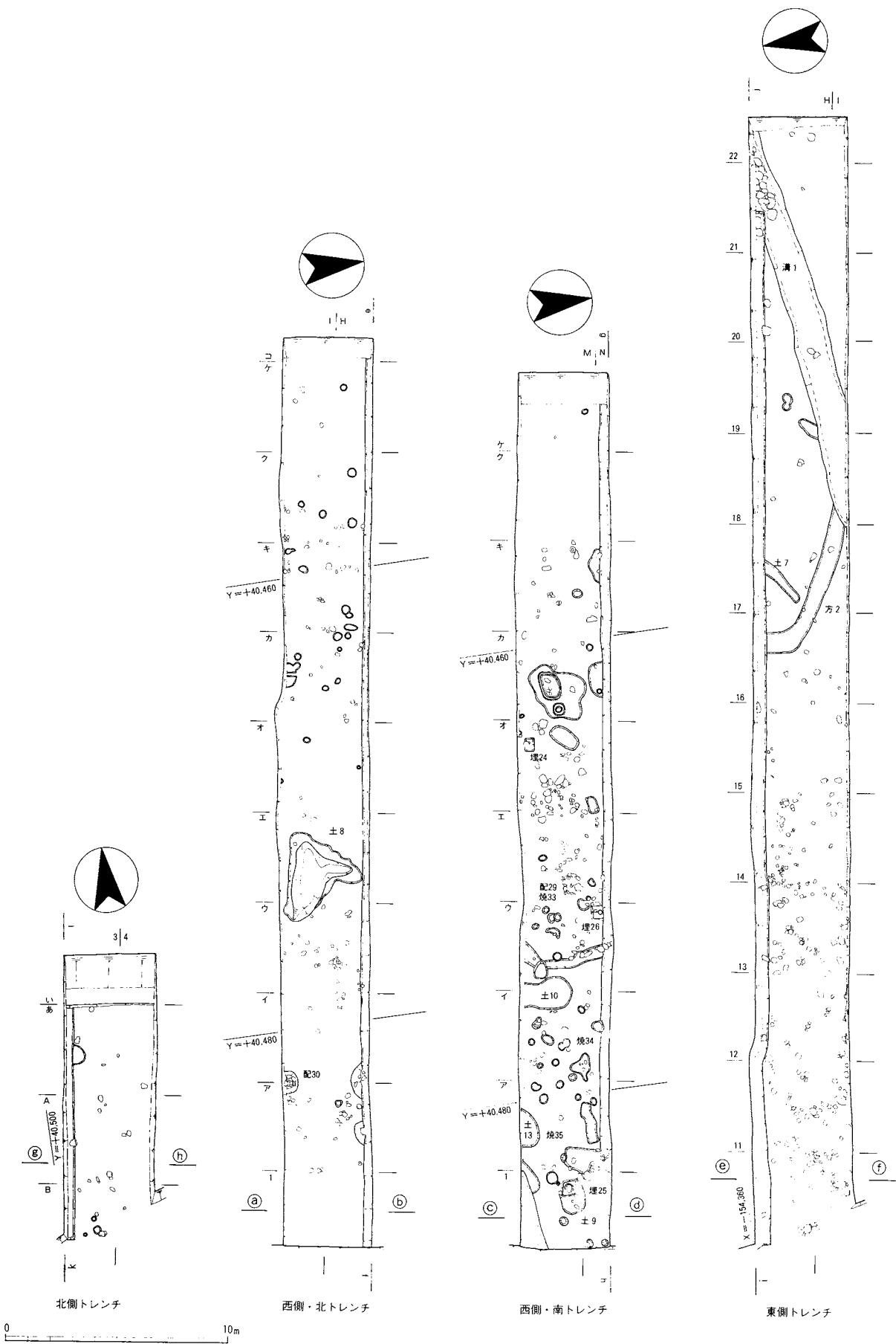
第6図 A地区土層断面図2 (1 : 100)



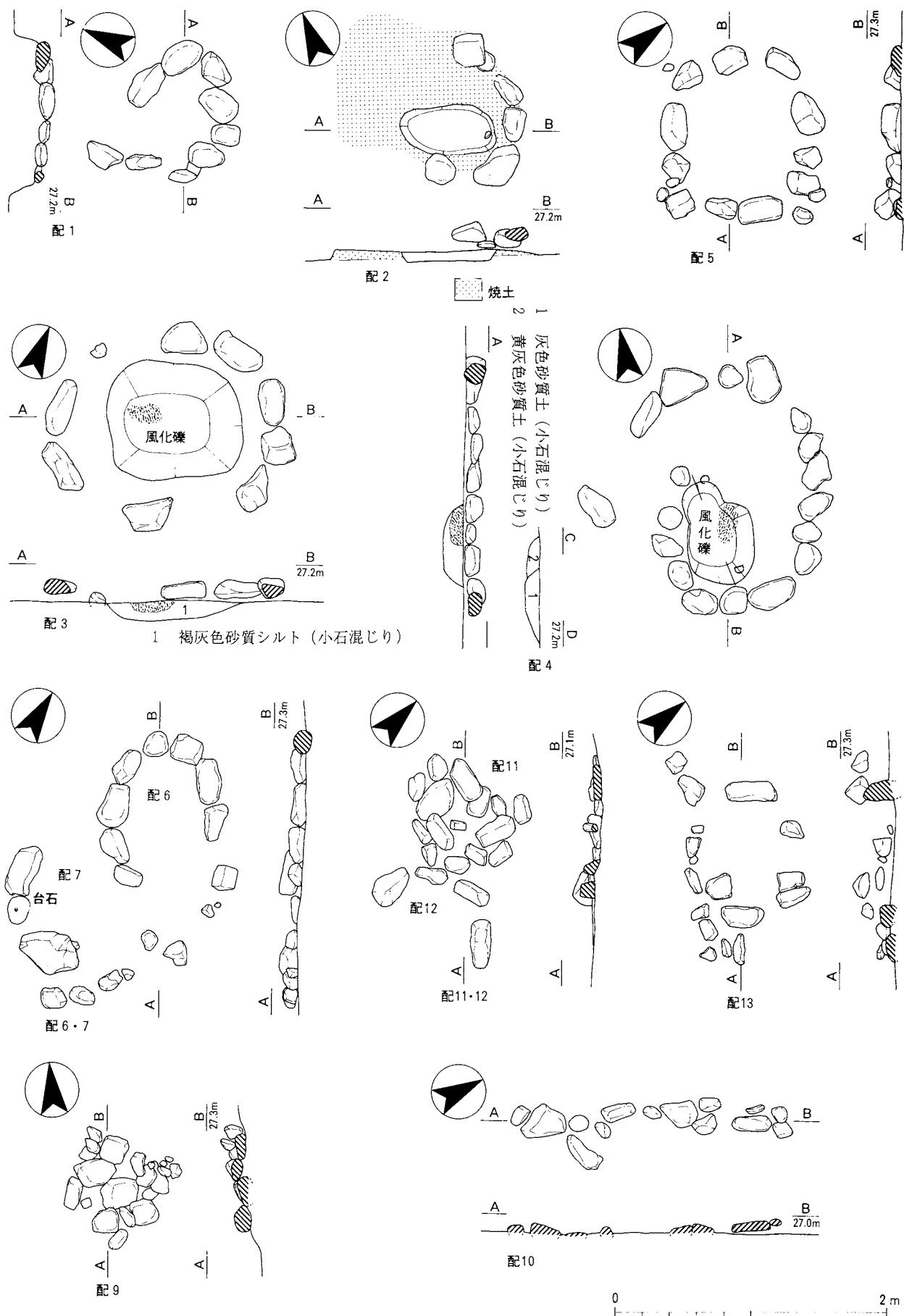
第7図 A地区平面図 (1 : 500)



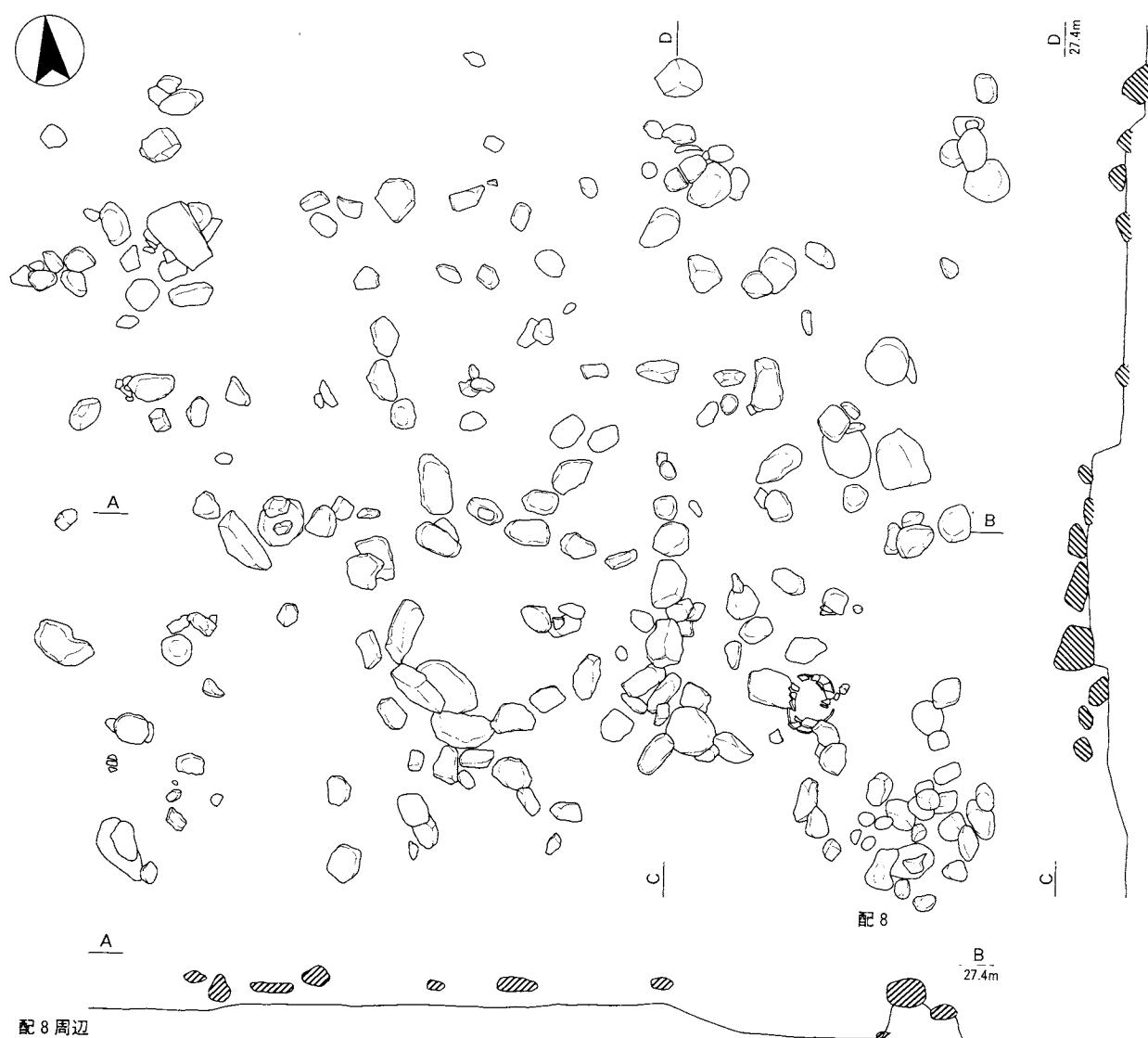
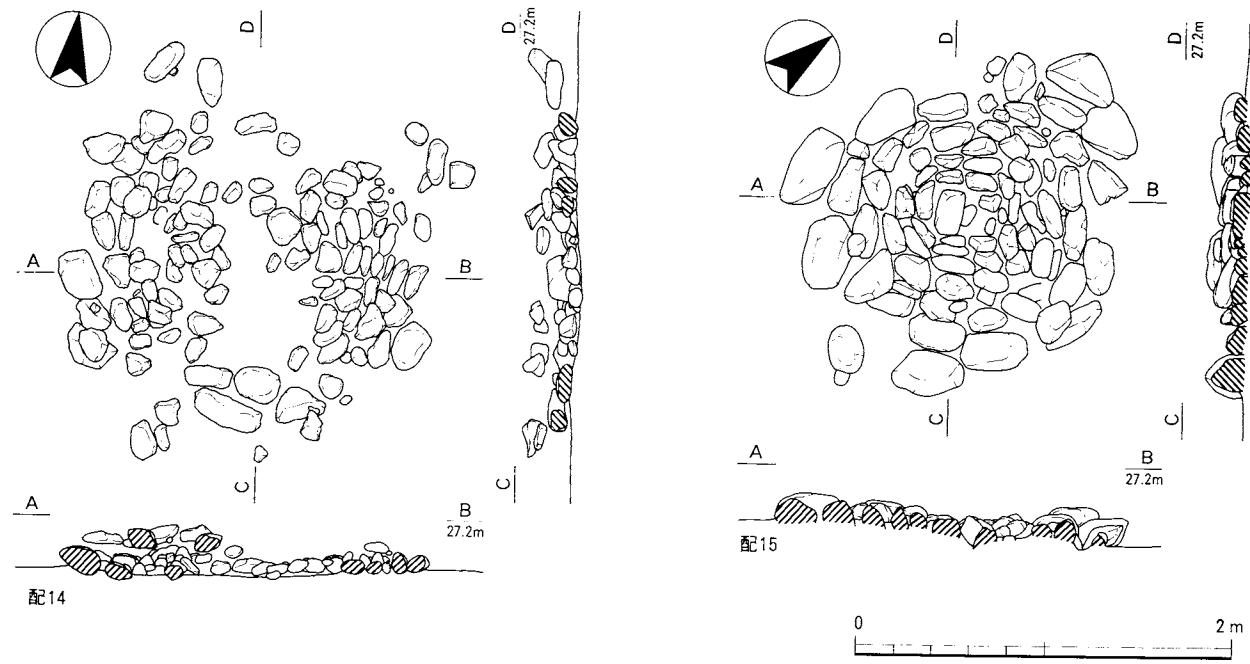
第8図 A地区本調査区平面図 (1 : 250)



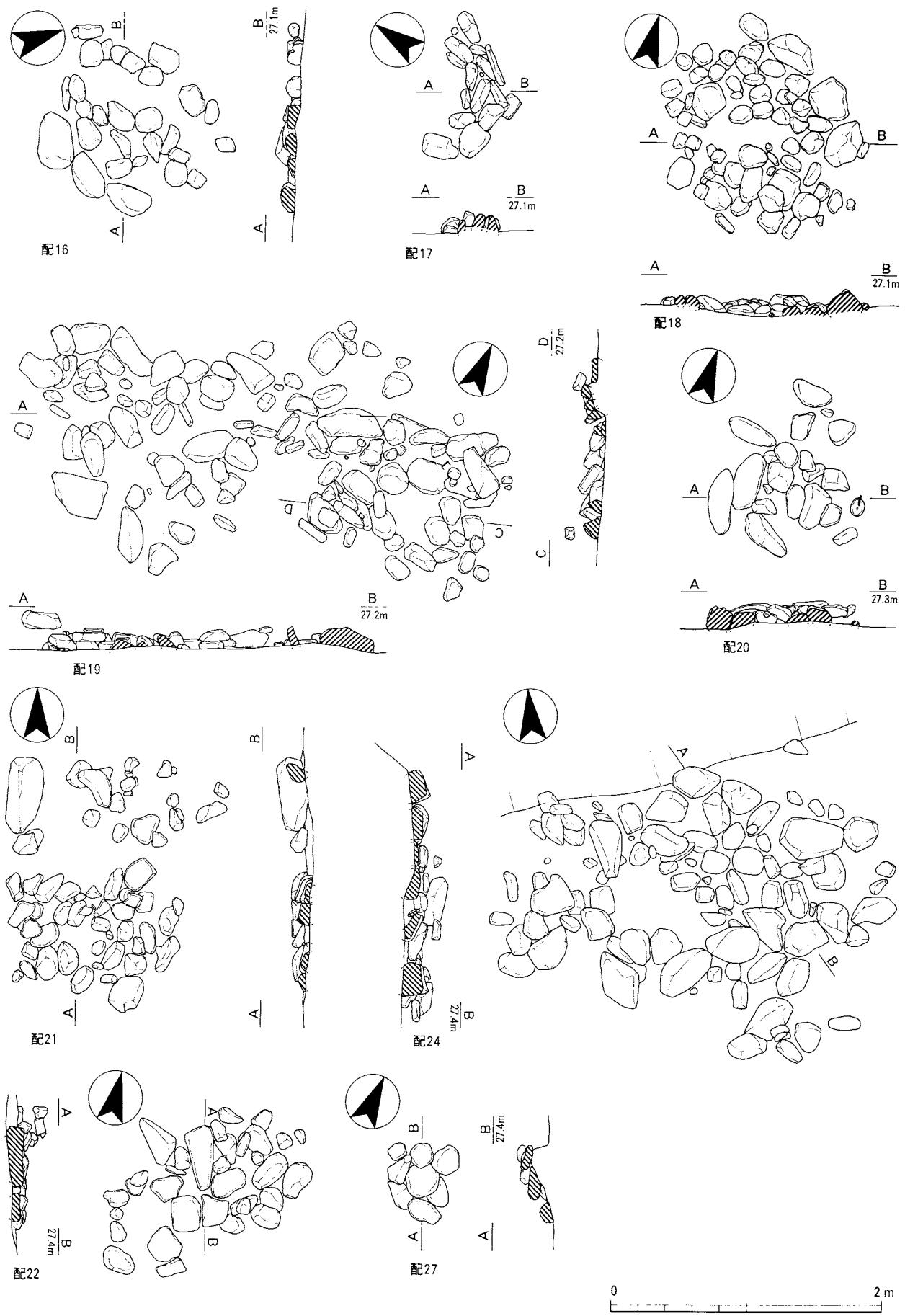
第9図 A地区 範囲確認調査トレンチ平面図 (1 : 250)



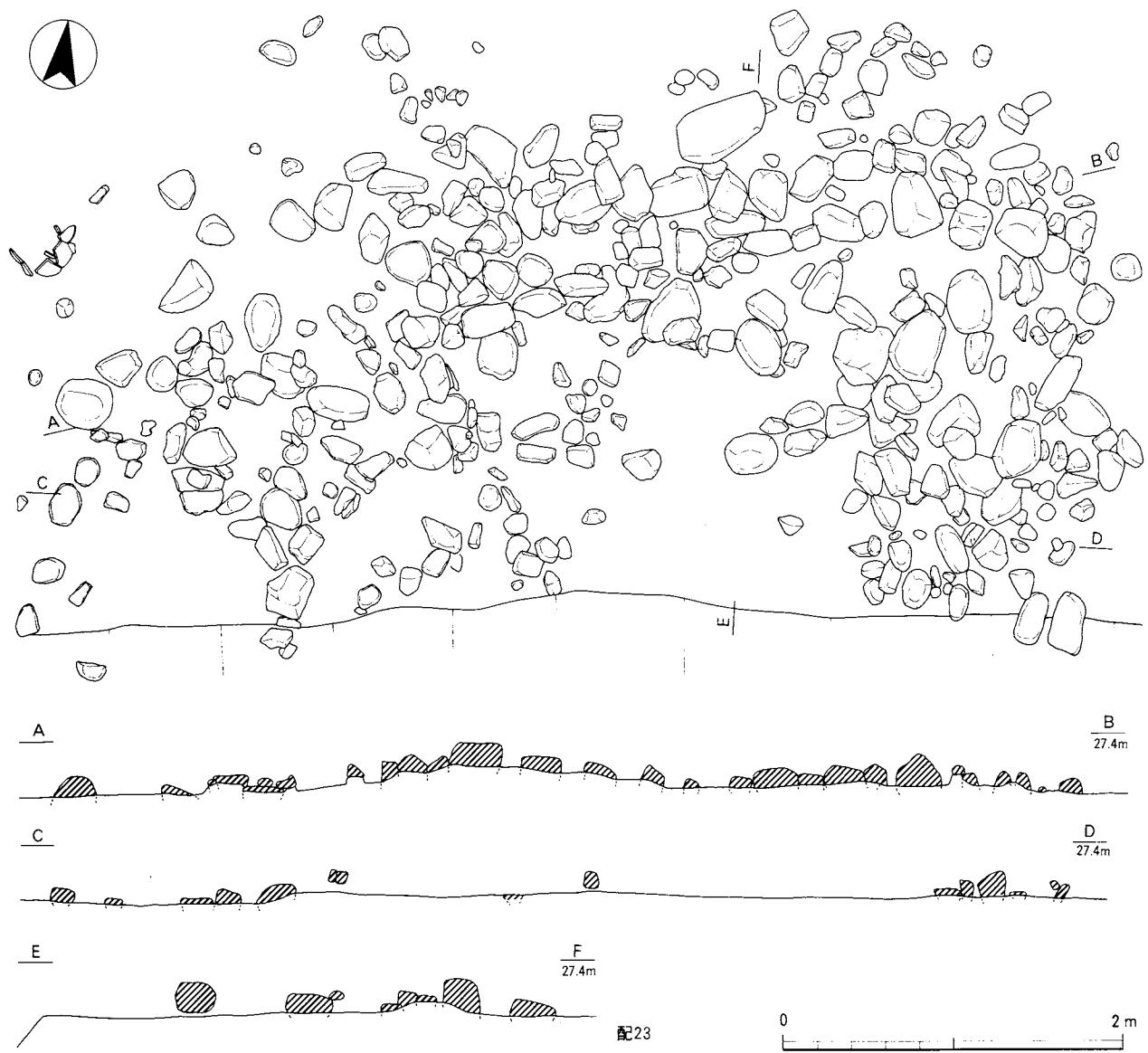
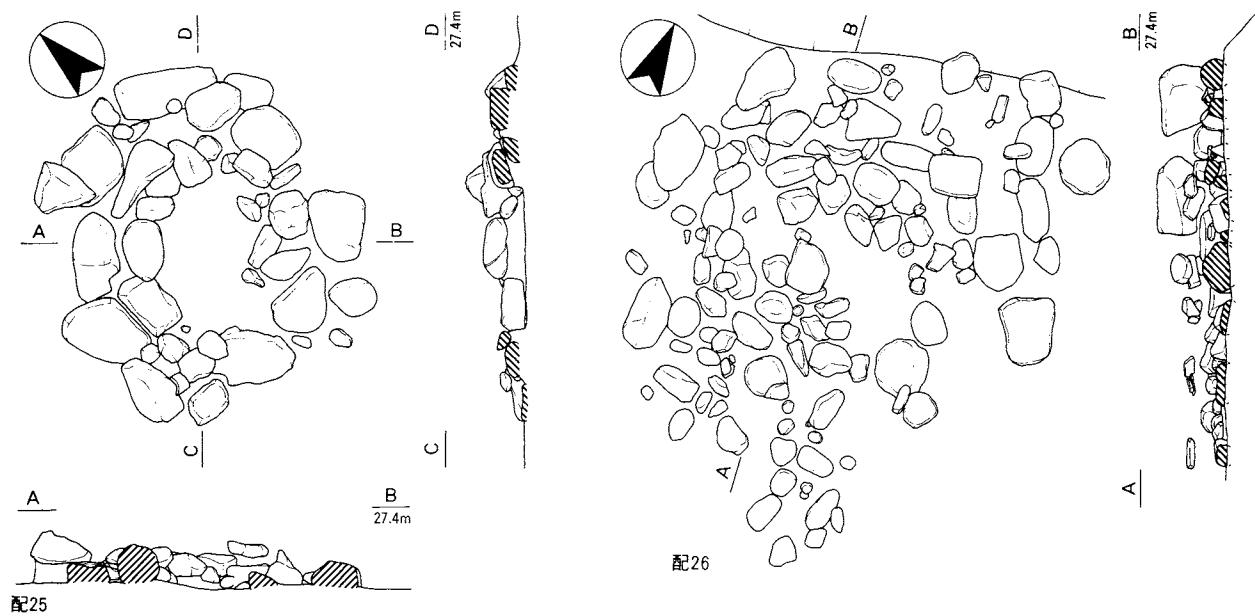
第10図 配石遺構 1～7・9・10～13実測図（1：40）



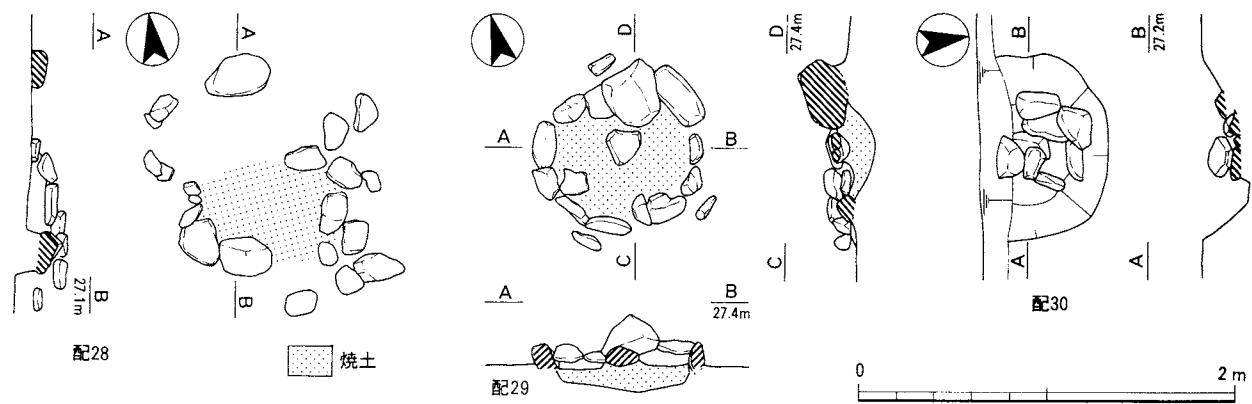
第11図 配石遺構 8周辺・14・15実測図 (1 : 40)



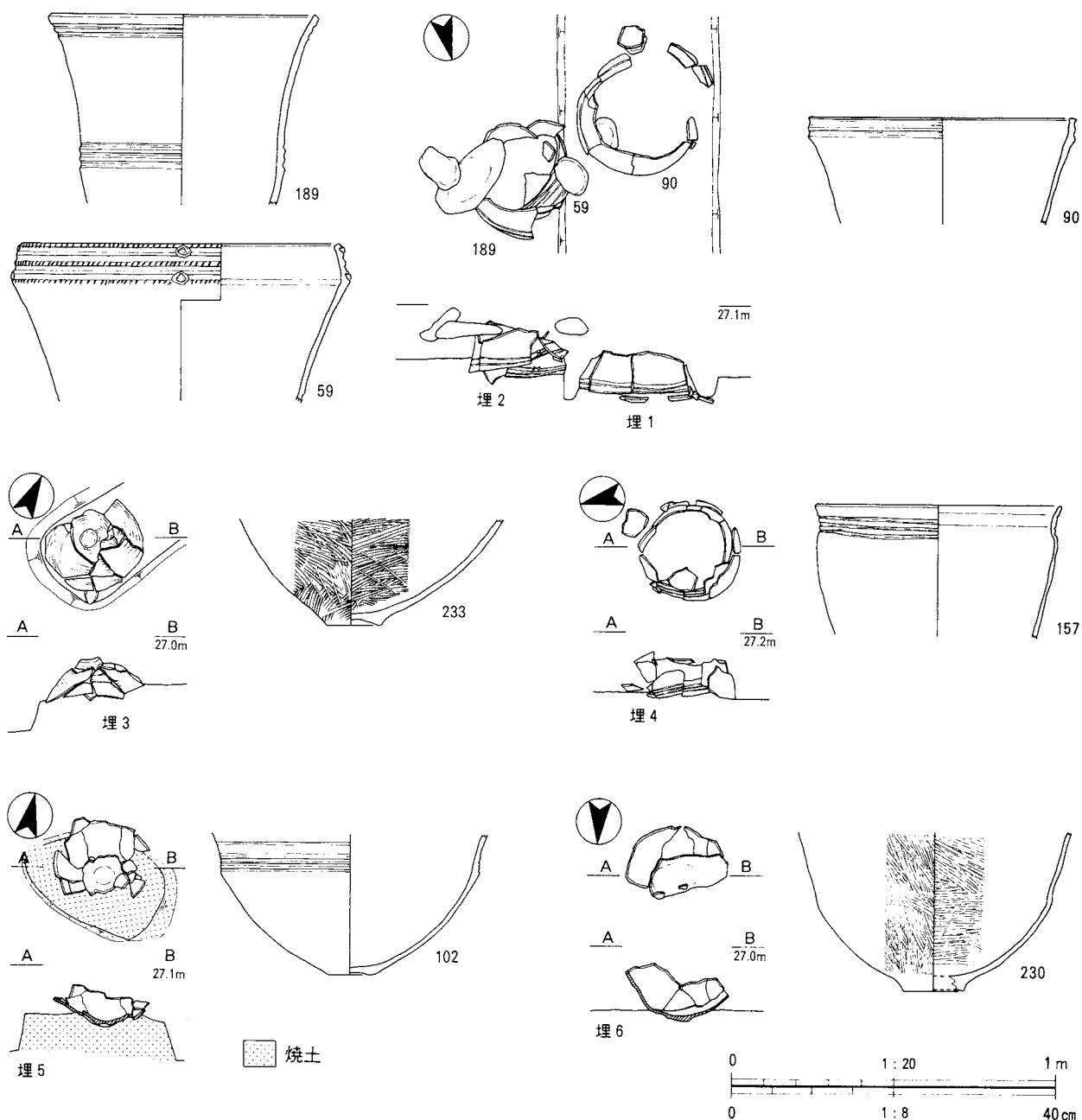
第12図 配石遺構16~22・24・27実測図 (1 : 40)



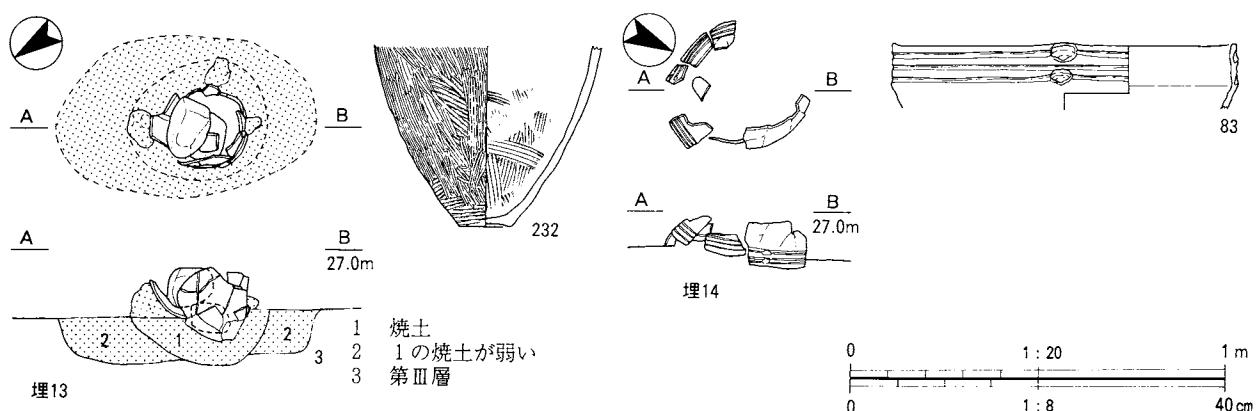
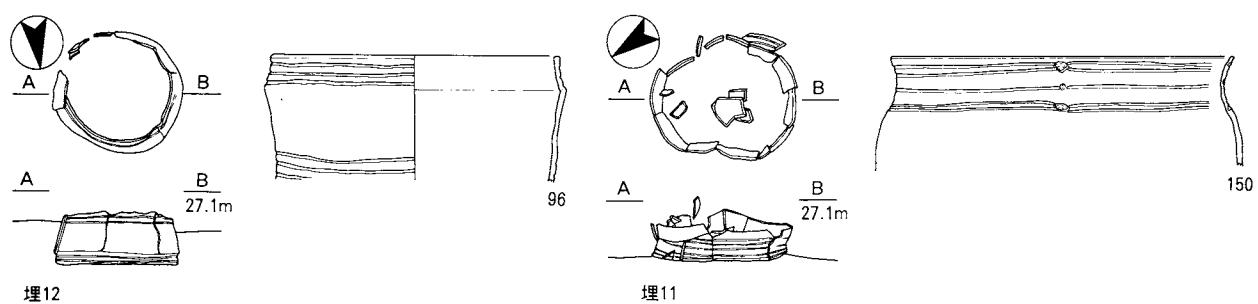
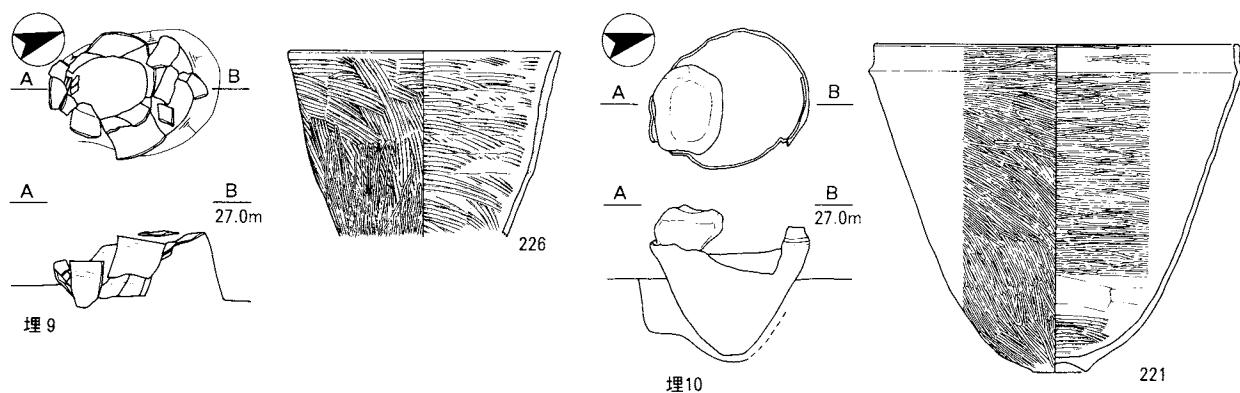
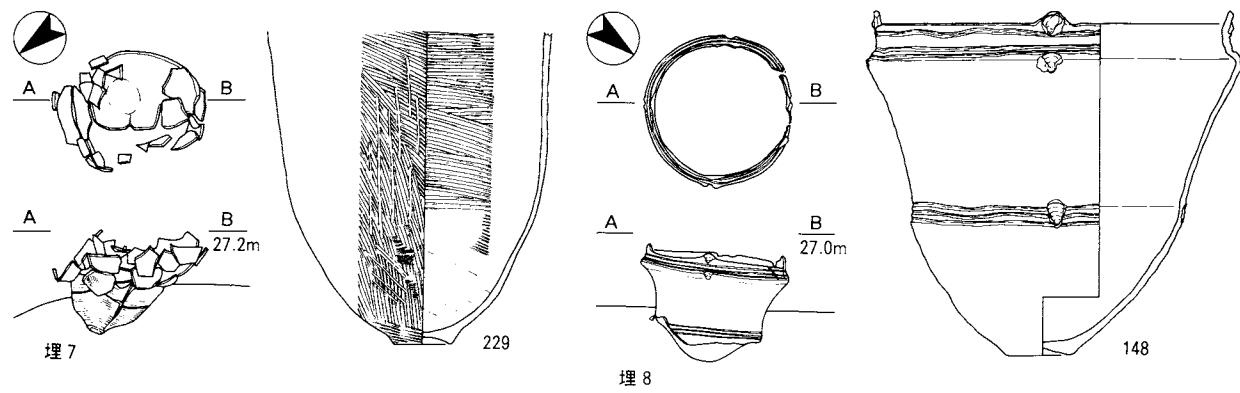
第13図 配石遺構23・25・26実測図 (1 : 40)



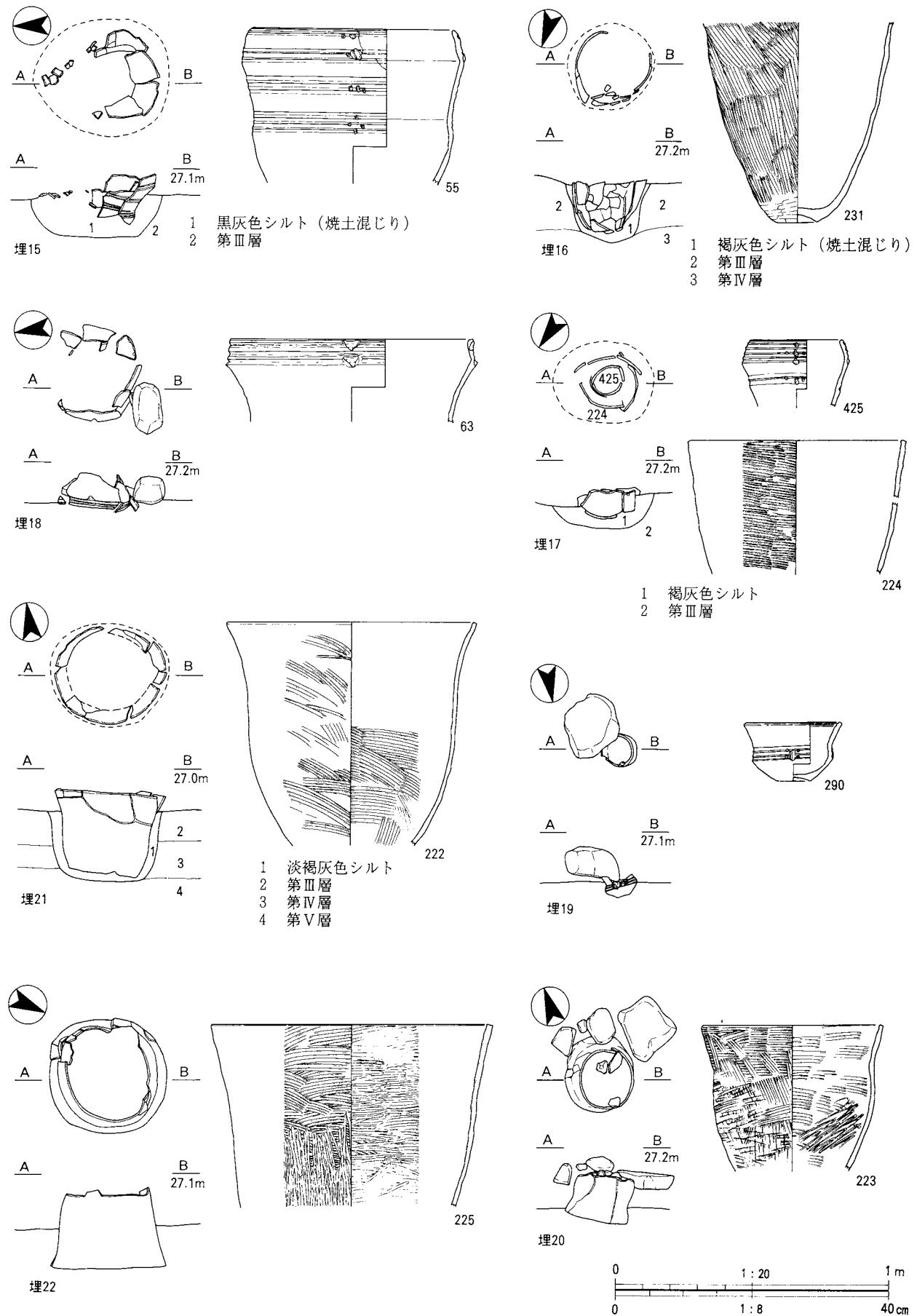
第14図 配石遺構28~30実測図 (1 : 40)



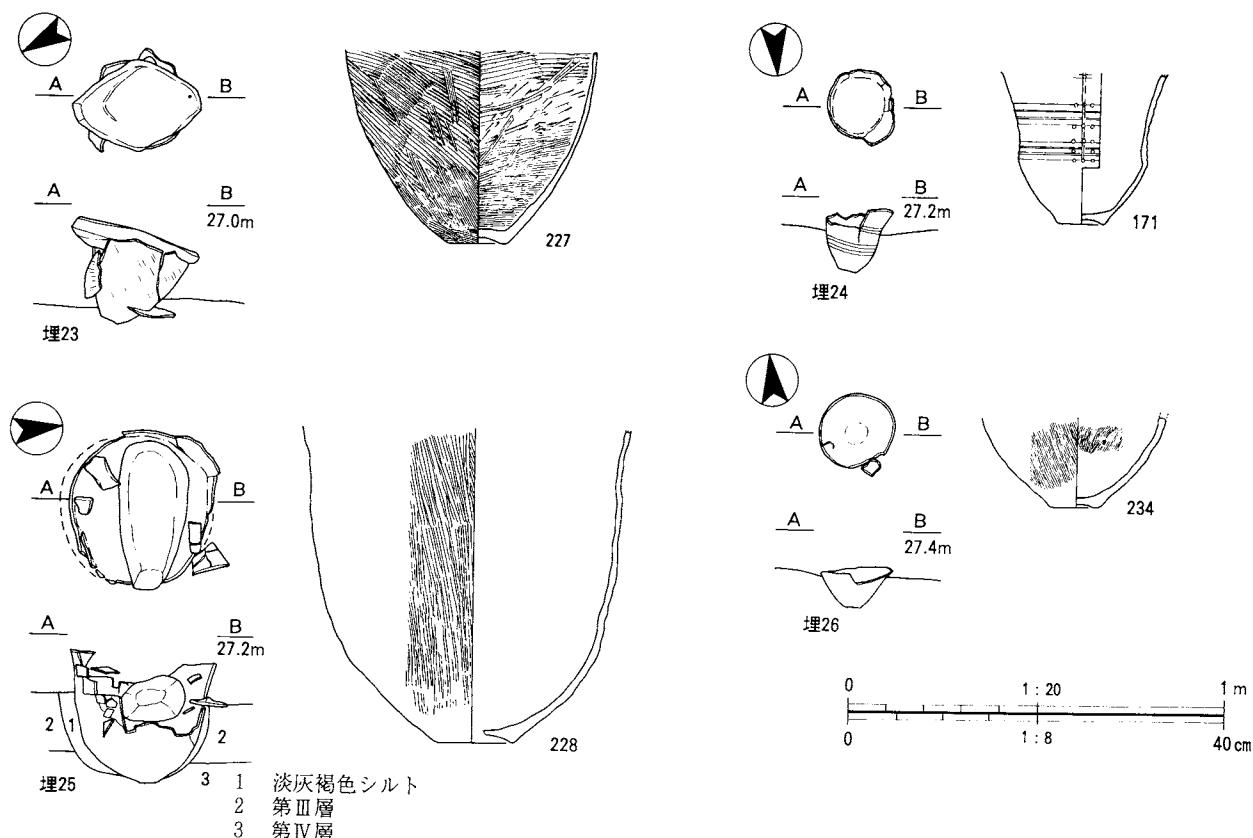
第15図 埋設土器 1~6 実測図 (出土状況図は 1 : 20、土器実測図は 1 : 8)



第16図 埋設土器 7～14実測図（出土状況図は1：20、土器実測図は1：8）



第17図 埋設土器15~22実測図（出土状況図は1:20、土器実測図は1:8）



第18図 埋設土器23～26実測図（出土状況図は1：20、土器実測図は1：8）

3 縄文時代の遺物

多量の土器、土製品、粘土塊、石器、石製品、骨片が出土した。その量は整理箱にして2,000箱に及ぶ。その殆どが第3層（灰褐色シルト層）からの出土で、少量の遺構出土遺物がこれに加わる。第3層

は分層ができず、遺構遺物も少量にとどまり、後述する遺物は一括性を欠く。以下、土器、土偶、その他の土製品、石器、石製品、骨片の順に報告を行う。なお、粘土塊はその他の土製品に含めた。

（1）土器

縄文時代中期中葉から晩期後半のものがある。主体は後期中葉から晩期初頭であり、他の時期のものは少量にとどまる。ここでは、後期中葉から晩期初頭の在地系と同時期の異系統、その他の時期の土器に分けて記述を行う。

A 後期中葉から晩期初頭の在地系の土器

一乗寺K式から滋賀里II式に比定される資料がある。一括性を欠くものであるため、従来の編年観に従って、器種別に型式学的な操作に依拠した分類を加味し、報告を行う。

深鉢、鉢、壺ないしは注口土器、皿、高杯、釣手

土器、舟形土器、ミニチュア土器、手捏土器がある。主体となるのは深鉢であり、まず、深鉢から記述を進める。

a 深鉢

有文深鉢の口縁部片を中心に掲載した。無文深鉢は埋設土器のみの掲載であるが、無文深鉢の量は有文深鉢の量をはるかに凌駕することを断つておく。

有文深鉢は口縁部の形態から、A類、A'類、B類の3類に分類した。

A類

口縁部に屈曲をもつものをA類とした。口縁部の

文様から14類の細分をおこなった。文様による細分に応じて口縁部の屈曲の状況にも多少の差異が認められる。

なお、この14類の細分については、深鉢A'類とB類及び、深鉢以外の器種についても可能な範囲で対比を行う。

A a類（第56図536～548、第68図847～855） 口縁部は「く」字状に内折するもので、さらに口縁部中央付近で内折する。結果、幅広で外弯気味の口縁部となる。これは、前形式の北白川上層式3期との関連が考えられる。外反する頸部は無文である。口縁部の文様は、2箇所の屈曲部に横位の有文帯をもつものである。すなわち口頸部境を有文帯とし、無文部を介して口縁部中央付近に有文帯をもち、口縁直下を無文とするものである。各有文帯の上下には沈線が引かれ、結果4本の沈線が横走するが、口頸部境の沈線が省略されるもの（546・854）や、沈線を伴わない隆帶状のもの（547）もある。平縁（536～548）と波状縁（847～855）がある。

地文には縄文（536～539・541・542・544・545・847～849・851～853）、二枚貝殻頂部の押圧によると思われる擬縄文（854）、刻み（546～547・855）がある。540・543・548・850は不明瞭である。なお、縄文には結節縄文ないしは付加条縄文の例（544・545）があり、他は547のL（以下、LRかLrか不明瞭のものはLで表す。Rの表記も同様の意味である。）を除きRLである。855は、二枚貝腹縁による刻みである。口縁端部に刻みをもつもの（546・548・855）が3例ある。

横走する文様帯を縦に区画する付加装飾文がみられる。これらは、「ノ」または「C」字状（逆向きも含む。以下同じ。）の浮文か沈文である。「ノ」字状の浮文が確認されるものに536・439・546～548・847～851・855がある。540と847はやや幅が広く、847は「ノ」字状というよりは波頂部に沿って左右均等な浮文となる。848は「ノ」字状のものと逆「ノ」字状の浮文を上下で交互に組み合わせる。849と851は波底部資料。「ノ」字状の浮文の両端に沈線が巡る例（537・847・855・5466・8518）がある。「C」字状の沈文が確認されるものに542・543・545・847・850がある。847と850は浮文と沈文を組み合わせる例である。浮

文には施文がみられるが、この施文具は地文とは一致しないものも多い。536は、浮文端部に巻貝殻頂部によると思われる刺突がみられ、855の浮文端部には短沈線状の刻みがみられる。547には半円状（馬蹄形）の沈線がみられる。連弧状の転回をするものかどうかは決しがたい。

他に、末端刺突を伴う沈線が目立つ点が特徴としてあげられる。

なお、537と538、848と849は同一個体の可能性が高い。

本類は、一乗寺K式に比定される。

A b類（第19図1～16、第28図108～112、第56図549～第59図652、第68図856～第73図964） A a類に比べて口縁部の幅が狭くなる。結果、A a類の口縁部中央付近の屈曲から上の部分が消失し、単純な内折「く」字の口縁部形態をとる。なかには9のように外弯気味の口縁部をもつ例もある。口縁部文様は、A a類の口縁直下の無文部が消失した構成で、口頸部境に有文帯をもち、無文部を介して口縁直下に有文帯をもつものとなる。2つの有文帯を画する2本の沈線が口縁部と平行に引かれるのが一般的であるが、口頸部境の有文帯下にも沈線を伴う例（5など）もある。外反する頸部は無文とし、胴部に屈曲をもち、胴部上半に横位の文様帯をもつ。平縁（1～16・549～652）と波状縁（108～112・856～964）がある。

地文には縄文（1～10・108・549～608・856～905）、巻貝による擬縄文（1・12・109・609～611・907～910・912～922）、刻み（13・14・104・612～639・911・923～948）、刺突列（949～953）がある。15・16・110～112・641～652・954～964は地文をもたない。縄文には結節縄文ないしは付加条縄文の例（10・592～608・905・906）があり、他はRL（1～3・5・7・549・550・552・559・560・562・563・572・573・575～580・871～876・892・901～904）、R（877・878?）、LR（6・8・9・108・551・553・565・556・558・564・566・567～571・574・581～585・856～863・868・870・880～884・887～891・893～899）、Lr（557・565・586・587・865・866・867・885・886・900）、L（4・564・588～591・869）である。RLが31点、Rが2点、LRが49点、Lrが10点、Lが6点である。A a類は圧倒的にRLであったが、A b類では

LR優勢となる。掲載資料のみの数値ではあるが、無作為抽出によるものであり、大体の傾向は示していると考えられる。刻みの内、109・612～619・923～926は二枚貝腹縁の刺突によるものである。911は、巻貝による刻みである。なお、109例のように口縁部の地文と胴部の地文が異なる例もある。861と889は、地文に縄文と刻みが重複して使用されるものである。861はその結果、付加条縄文に類似する効果があるようにも思われる。

横走する文様帶を縦に区画する付加装飾文をもつ。「ノ」字状の浮文を持つ例に1・2・16・550・620・621・641～643・856～858・927・928・942～944・954・958・959がある。944は、波底部資料である。これらの内、平縁のもの（1・2・16・549・550・620・621・641～643）には浮文端部に刺突はみられないが、波状縁の7例の内には857・858・927のように巻貝による円形の刺突が認められるものが3例ある。

幅広の「ノ」字状浮文をもつ例に3・12・551～561・644・645・861・871～877・908・923～926・929・954～956・958・963がある。これらの内、平縁の552・553・644・645と波状縁の908・963の6例を除いてはいずれも浮文端部に巻貝等による円形の刺突が確認され、刺突を伴う例が圧倒的に多くなる。なお、12は刺突ではなく、巻貝側面の圧痕を伴う例である。また、これらの浮文は中央にくびれをもつ傾向や、口縁端部からやや迫り上がる傾向が看取される。

波状縁の浮文はA a類の847のように、「ノ」字状ではなく波頂部の形態に沿った左右均等の浮文になるもの（862～870・878・879・907～916・930～935）が目立つ。地文は巻貝擬縄文や刻みが多く、縄文ではR（878）を除きLR（862・863・868・870）、Lr（865～867）、L（869）としが優勢である。これらの例は、波頂部の浮文が大きくくびれて斜め上方に引き出されたり、上方に迫り上がったりする傾向がある。浮文端部の刺突の形状も862・863・866・907・910～913・931のような円形のものから863・865・867～870・878・879・909・915・916・932～935のように縦長、あるいは大きなものが目立つようになり、嘴状の波頂部（934、935など）をもつものが現れる。嘴状の波頂部は109例のように、内面に刺突を伴うのではなく、面として仕上げられているものもある。

なお、934には波頂部に垂下する沈線がみられる。浮文外面には縦位の短沈線を伴う例（865～869）や円形の刺突を伴う例（931・933～935）も現れる。934と935は、刺突の位置がより下位に下がる。平縁資料にも、626例のように浮文が大きく迫り上がるものがある。浮文下端には刺突がある。

その他の浮文例としては、馬蹄形を伴うもの（562・563）や縦位の2本の棒状浮文（949）がある。馬蹄形については深鉢A a類には明確にその祖形をたどれるものがないが、後述する鉢A類の235に祖形を求めることが出来る。なお、936例の瘤状浮文は馬蹄形の退化したものと考える。2本の棒状浮文については、後述する背中合わせの孤線文が出自と思われる。その他特殊なものに、加曾利B 2式の突起を思わせる例（4、564）があるが、4は貝殻による調整（貝殻条痕）が器面に認められるもので、在地の土器として扱った。

沈文には、円形のもの（5）や「ノ」ないしは「C」字状のもの（7・10・574・647・649・961・1883）、背中合わせになる孤線（6・108・566・569・572・609・610・645・646・886）、その孤線がそのまま長方形区画文になるもの（11・567・568・570・571・596・612～614・885・917・918・920・937～939）、馬蹄形を波頂部に配するもの（109・888～890）、蛇行沈線（880・957・881？）、S字状沈線（882）、向かい合う弧線（565）、波頂部や波底部で横走する沈線を一端途切れさせ、末端刺突をおこなうもの（891～893・960）がある。565は、加曾利B 1式末から2式のモチーフを連想させるものであるが、器面に貝殻条痕が認められるので在地系の土器として扱った。647例は、背中合わせになる孤線間に円形の刺突（巻貝の殻頂部先端を折ったものによる？）が上下2個みられる特殊なものである。以上、付加装飾文については、浮文、沈文とも一部の特殊なもの（4・564・565・647）を除けば、全て深鉢A a類にその祖形を求められる。大きな変化としては、波状縁の嘴状の突起の出現があげられる。また、110例のように波頂部に付加装飾文をもたない例もある。

その他、口縁部文様に連弧文を伴う例が目立つ。長めの連弧文（7・8・15・573・574）と短めの連弧文（16・650～652・962～964）がある。連弧文は、

いずれも文様帶構成の原則には従わず、無文部である沈線間に配される。650～652と962～964例は、ルーズな連弧文で結節繩文を彷彿させる。短い連弧文の出現は、結節繩文に出自を求められるものかもしれない。

口縁部内面に文様をもつ例が僅かにある（601・602・633・649）。649はB類とすべきものかもしれない。また、文様ではないが口頸部境の内面に沈線状のものを伴うものが多い（例えば、562、563、631、914など）。これは深鉢A a類の543、856などにも認められるものである。口頸部境の屈曲を強く意識した現れであろうか。

波状縁の波頂単位については、2単位のもの（111）、3単位のもの（112）、4単位のもの（109、110）がある。

胴部の文様は横走する沈線や連弧文で構成される。なお、A b類の沈線も末端刺突を伴うものが多い。本類は、元住吉山I式に比定される。

A b'類（第20図17～19、第28図113・114、第59図653、第73図965～968） 口縁部の文様構成はA b類と同じであるが、付加装飾文や沈線が特徴的なものをA b'類とした。平縁（17～19・653）と波状縁（113・114・965～968）がある。

付加装飾文は、17と破片資料である968を除いて、瘤状の突起が認められる。突起には、965を除き刺突や押圧（両者とも巻貝によるか）を伴う。これらの突起はA b類の馬蹄形の浮文にその出自を求めることが可能である。17は、突起をもたないが、巻貝側面による押圧が上下2個みられる。17と965は、上下に2個の付加装飾文をもつ点で共通する。これは、A b類の889や936、後述するA c類の117などに出自を求めることが可能である。

沈線は、966を除いて幅広で凹線的なものになる。特に、114・967・968などは器面全体が良く研磨されているが、沈線そのものも光沢のあるものである。これは、沈線を施した時の土器の乾き具合や工具に起因するものであろうが、後出する凹線内を磨く手法の出自はここにあるかもしれない。

17、113、966は地文に刻みをもち、968はR Lの繩文をもつ。

波状縁例で、114と967は波頂部が大きな嘴状を呈

し、965は外湾気味の口縁部を呈する。965は、波頂部の突起下に垂下する沈線をもつ。この沈線の先にある横走する沈線は頸部文様帶であろうか。

19と436は同一個体か。

本類は、元住吉山I式に比定されると考えるが、その終末に位置づけたい。

A c類（第20図20～29、第28図115～117、第60図654～第62図709、第74図969～第75図1006） A b類の口縁部幅がさらに狭くなる傾向がある。口縁部文様は、A b類の口縁直下の有文帶が消失した構成で、口頸部境の有文帶1帯と口縁直下の無文部からなる。有文帶の上下に沈線が見られる例（20や26など）もあるが、有文帶下の沈線が省略され、1本の沈線となるものが大多数である。667例のように沈線が全く省略されるものもある。外反する頸部は無文とし、胴部に屈曲をもち胴部上半に横位の文様帶をもつ。平縁（20～29・654～709）と波状縁（115～117・969～1006）がある。

口縁部文様帶の地文には、繩文（20～24・115・654～684・969～981）、巻貝による擬繩文（25・117・688～690）、刻み（26～28・116・691～704・982～993）、刺突列（29・994・995）がある。705～709と996～1006は、地文をもたない。繩文には、結節繩文ないしは付加条繩文の例（23・24・668～684）があり、他はR L（20・21・654・662～665・970・976・979）、R（115・666）、L R（22・656～661・667・969・971～973・975・980）、L r（978）、L（655・974・977・981）である。R Lが10点、Rが2点、L Rが14点、L rが1点、Lが4点である。A b類と同様で、L Rがやや優勢である。刻みの内、691～694と982の5例は二枚貝腹縁による刺突である。なお、116は口縁部文様帶（刻み）と胴部文様帶（繩文=L R）の地文が異なる例である。

横走する文様帶を縦に区画する付加装飾文をもつが、A b類のようにバリエーションは豊かではない。「ノ」字状の浮文例に20・25・26・654・668・673・695・973・987がある。直線的な棒状浮文例に115・969・970がある。幅広の浮文例に21・116・655・669・670・685・686・692・694・971・972・974・981・983～986・988・990・993・994・996・997・999・1000がある。他の、浮文例には2本の棒状浮文をもつ23

がある。これらの浮文例には端部に巻貝殻頂部などによる刺突を伴うものがある。円形の刺突がみられるものに、26・655・669・694・974・981・985・987・988・993・999・1000がある。横長の刺突がみられるものに、21・975・983がある。縦長の刺突がみられるものに、20と116がある。特殊な例として、渦巻状の990がある。また、117は嘴状の波頂部になるもので、刺突は伴わず広く面的に仕上げられるものである。975・999・1000は、浮文外面に縦位の短沈線を伴う。990は、短沈線の両端に刺突を伴う。117は、990例の両端の刺突が独立した状態で、上下2個の刺突とそれをつなぐ短沈線がある。971も同様のものであろうか。

沈文は、浮文両端に沿って引かれた沈線のみが残った形のもの（29・656・691・988）があるだけである。

連弧文は、本来無文部である部分にみられ（687・705・706）、沈線が省略されて連弧文だけの例（1001）もある。

胴部文様帶には、直線的なもの（26・117）やクラシク状のもの（116）、区画文（1001）、連弧文がみられる。116は、地文にL Rの縄文と刻みが併用されている。

その他、沈線には末端刺突を伴うものが多いことや719のように口頸部境の内面に沈線状のものが認められる例が多いことを記しておく。なお、28は深鉢B類とすべきかもしれない。

本類は、観塚III式に比定される。本類に属する資料の出土量は相当数あり、在地土器の組成のひとつと考える。

A c' 類（第20図30～第21図33、第62図710、第75図1007） 口縁部の文様構成はA c 類と同じであるが、沈線の幅が広く凹線的なものをA c' 類とした。平縁（30～33・710）と波状縁（1007）がある。

付加装飾文や地文が確認されるものは33だけである。上下に瘤状の浮文がある。上位のものは端部に横長の刺突を伴う。下位のものは押圧を伴う。地文は刻みである。器面全体が良く研磨されており、沈線そのものも光沢をもつ。A b' 類の114・967・968例と同様で、後述する凹線内を磨く手法の出自に関わるものと考える。

30は、沈線内に間隔の広い押し引き状の手法が確

認される。

本類は、観塚III式に比定されると考えるが、その終末に位置づけたい。

A d 類（第21図34、35、第76図1008～1011） 口縁部に横位の沈線や有文帯がみられず、縦位の「ノ」字状の浮文のみが確認されるものを一括した。平縁（34・35）と波状縁（1008～1011）がある。

34は口縁部中央にも屈曲を伴うもので、器形的にはA a 類に類似する。他は、A b 類もしくはA c 類に類似する。34・35・1010・1011の浮文端部には円形の刺突がみられる。1009は、斜め上方に引き出された浮文端部に縦長の刺突がみられる。35は、胴部上半にも対向する2個の「ノ」字状浮文や、短く途切れながらも連続する横位の沈線がみられる。

34は、一乗寺K式に比定されると考える。他は、元住吉山I式ないしは観塚III式に比定されると考える。

A e 類（第21図36～第22図41、第62図711～716、第76図1012～1017） A a → c 類の変化は、口縁部の有文帯及び沈線の消失の過程であった。A e 類は再び沈線が多条化するものを一括した。多条化の傾向は後述するA f 類でさらに強まる。また、沈線は有文帯を画するものから集合沈線的なものへと変化する。すなわち、有文帯の消失の始まりである。付加装飾文は、A a から c 類に伝統的であった「ノ」字状のものも残るが、A b' 類やA c' 類に多くみられた円形や馬蹄形の瘤状のものが目立つ。平縁（36～41・711～716）と波状縁（1012～1017）がある。

3本沈線の例（36・38～40・711・713・714・716・1013・1014）、4本沈線の例（37・41・712・715・1012・1015～1017）がある。1012は5本の沈線がみられるが上端1本は波頂部だけで終わるものと思われる。41・1012・1013及び39の胴部文様帶の沈線は、幅が広く凹線的な印象を受ける。712の沈線は、押し引きの手法によるものである。

付加装飾文には、「ノ」字状の浮文例（37・713・715）や円形の瘤状の浮文例（36・716・1013）、馬蹄形の瘤状の浮文例（39・41・711・1015・1016）がある。瘤状浮文のうち、36には押圧が、39には刻みが、1013には刺突が伴う。沈文には「ノ」字状（36）や巻貝の側面圧痕（38）、点文（1012）がある。36は、

伝統的な「ノ」字状の付加装飾文と新出の瘤状の付加装飾文が併用される。

A a から c 類に伝統的であった沈線の末端刺突の原則が崩れ、沈線からはずれて刺突が見られる例（36・38・1012・1013）がある。これらの刺突列は、後述する A f 類に一般化する。

有文帯には、刻みの例（38・41・712・714～716・1013）や刺突列の例（1015～1017）、L r の縄文例（713）、L R の縄文と刻みの併用例（1014）がある。刻み例の内、714と716は幅広の刻みである。なお、縄文例（713・1014）については、縄文が本類まで残存するかどうか疑問であり、課題を残す。

本類は、元住吉山Ⅱ式に比定されると考える（本報告書268頁参照）。

A f 類（第22図42～第23図57、第28図118～第29図120、第62図717～728、第76図1018～第78図1041）
沈線を磨きや撫でにより再調整した凹線文の出現をもって A f 類とする。725や726など、磨きや撫で調整を伴わない例外もあるが、これらは、後述する付加装飾文の構成から本類に含めた。口縁部幅は広くなる。平縁（42～57・717～728）と波状縁（118～120・1018～1041）がある。

平縁の凹線には、凹線間に明らかな無文部をもつ例（45、50、51、55）がある。

付加装飾文には、点文（214など）や点文間をつなぐ縦位の短凹線を伴う例（49など）、点文を伴わない縦位の短凹線の例（54など）、巻貝側面の圧痕（48など）、A e 類に出現した刺突列を粗形とする列点文（46）がある。中心になる付加装飾文とそれに伴う列点文を組合せた例も多い（48など）。瘤状の突起に刺突を伴う例（719、1022）もある。

刻み帯をもつものが、平縁では、掲載資料28例中10例ある。一方、波状縁では、27例中1例（118）のみである。

口縁端部に2個一対の瘤状突起をもつもの（48、50、51、717、1031）が目立つ。

波状縁例は、全体的に波頂部が高く、口縁部文様と波頂端部の間に無文部を形成する例（119、1024、1035、1037～1038）やその無文部に点文間をつなぐ縦位の短凹線（118、1018、1036）や点文（120、1020、1021、1029、1039～1040）、波頂部だけの凹線

をもつ例（1030～1034）がある。

1036～1040は嘴状の波頂部をもつ。

1019と1024の2例は波頂部内面にも文様をもつ。

胴部上半には口縁部と類似した文様をもつ。また、頸部文様をもつ例（55、718、1028）が目立つ。本例は、元住吉山Ⅱ式に比定される。

A g 類（第24図58～第25図75、第29図121～124、第63図729～736、第78図1042～1051）
付加装飾文として、巻貝側面の静止圧痕ではなく、回転圧痕のいわゆる扇状圧痕をもち、凹線は磨きや撫でにより再調整されたものを本類とした。平縁（58～75・729～736）と波状縁（121～124・1042～1051）がある。

凹線の本数は、A f 類は多条化の傾向があり、多いもので6本のものもあったが、本類では、3本のものを中心に、2～4本のものとなる。61例のように1本と2本の組み合わせからなり、その間に無文部をもつ例もある。

扇状圧痕には、貼付けの上に施文される例（59・64・67）や下方に開くものを伴う例（59・60・62・733・1042・1046）がある。

粗い刻み帯を残す例（58～61・121・729・730・1045）やA f 類に特徴的であった列点文の名残がみられる例（60・729・730・1042）もある。

平縁には、口縁端部に2個一対の瘤状突起をもつ例（729、734）や、半円状の突起をもつ例（60）がある。

波状縁には、A f 類の波頂部に無文部をもつ例や文様を付加する例の名残を残すもの（122・1043・1044）、嘴状突起になる例（1050）、富士山型の山形突起をもつ例（1051）がある。

胴部文様は、口縁部文様と類似するものがみられる（122・123）。75と124は、頸部文様であろうか。

本類は、宮滝式の古相に比定される。

A g' 類（第25図77～第26図86、第29図125～第30図132、第63図737～第65図773、第78図1052～第81図1112）
本類は付加装飾文に扇状圧痕をもつ点はA g 類に準ずるが、凹線が磨きや撫でにより再調整されず、工具により引かれたままのものを一括した。本来、凹線とは呼ばず、幅の広い沈線と呼称すべきかもしれないが、ここでは凹線として記述を進める。平縁（77～86・737～773）と波状縁（125～132・1052

～1112) がある。

凹線の本数は、A g類と同じで、2から4本のものがある。特殊な例として、5本の凹線が確認される1053例や1本の凹線の13例がある。1053例は上方から見ると、方形の口縁部をもつものと推定される。

波状縁の波頂部は、扇状圧痕によって埋められ、A f類に特徴的であった無文部は全くみられなくなる。128の口縁部凹線は、波頂部に沿って大きく上がるるものと、水平に終わるものとに分かれる。

平縁のものにも、A g類にみられた半円状の突起が大きく発達した例(761～764)があり、これらも波状縁128例と同様に、口縁部文様帶の凹線が波頂部で分かれる。

本類は、頸部文様帶をもつ例(80・85・86・125～128・130・132・775・762～764・1067・1068・1084・1087・1088)が多くみられる。1089と1107についても、破片の下端にみられる文様は頸部文様帶と推定されるが、即断は控える。注目されるものに、125、126、128、1088の4例がある。これらは、頸部文様帶をもつだけでなく、頸部文様部で器形的にも段(弱い屈曲)が認められる。その他、80と755例は、口縁部の扇状圧痕から頸部文様帶に垂下する凹線が認められる。

129例は、扇状圧痕ではなくて波頂部に3本の弧線をもつもので、胴部には1本の凹線と連弧文がみられる。また、765～767例は、凹線が扇状圧痕の手前で方形区画文状に閉じるものである。

波状縁例には、1074のように嘴状の突起の名残りを感じさせるものや、1075のように富士山型の突起をもつものがある。1074は、口縁部内面にA b類などに顕著であった古い要素である刺突を伴う。なお、1074～1078は小型の深鉢であり、凹線内に磨きや撫でを伴わない原因が土器の大きさにあり、A f類やA g類に含まれる可能性もある。その他、1080～1087は瘤状の突起をもつ例である。これらの瘤状の突起は、口頸部境の張出しが例えれば1062から1063例へと強くなり、扇状圧痕の施文とも係わって突起化したものと推定される。

以下に記述する例は、本類でも後半に位置づけられるものと考える。器形的には、131・769～773・1089～1110例のように、外弯気味の口縁部が目立つ。

132例は、頸部文様帶より上が外湾気味となり、直立する口縁部が取りつくものである。文様では、130・132・768～773・1088～1106例のように、凹線が細くなり沈線状になるものが目立つ。平縁の768と769の凹線は、本来口縁部に平行であるべきものであるが、波状を呈するようである。扇状圧痕は、769～770と1089～1106例のようにやや小振りのものが目立つ。また、771～773と1107のように扇状圧痕を祖形とする「V」字状の付加装飾文もみられる。1109の扇状圧痕は縦長である。770・1108・1110は付加装飾文をもたない。1110と1111は瘤状突起をもつ。突起の位置は口縁部の下半か頸部か決しがたい。なお、1111と1112は、深鉢B類とすべきかもしれない。

本類は、宮滝式の新相に比定される。

A h類(第65図774～792、第82図1113～1128) 器形的には、波状縁の3例(1113～1115)を除き、外弯気味の口縁部をもつ。これは、A g'類の後半に位置づけたものに多くみられる器形である。文様的には、付加装飾文に縦位の短沈線をもつもの(774～778・1113～1123)や弧線文をもつもの(780～787)、凹線を連続する点文に置き換えたもの(788～792・1125～1128)を一括して本類とした。平縁(774～793)と波状縁(1113～1128)がある。

付加装飾文の縦位短沈線は、後述するA' g'類の1177～1180例の巻貝の側面圧痕を縦にずらすものに祖形が求められる。平縁の例(774～779)は、口縁端部と口頸部境に瘤状の突起をもち、その間に短沈線を引く。779は短沈線がみられない例であるが、瘤状突起の存在から本類に含めた。1124例は、短沈線から変化したと推定される「U」字状の付加装飾文をもつことから本類としたが、凹線というよりもむしろ沈線状のもので、後述するA i類に含めるべきかもしれない。

弧線文は、伝統的な連弧文に祖形を求めることが可能であるが、弧線文が集束する位置に点文がみられる例(780・781・784)や、複数の弧線からなる例(780・781・783～785)を参考にすると、A g'類のやや小振りの扇状圧痕文と長い弧線状になる凹線からの変化と推定することもできる。780例は短沈線と弧線文が組合わされた文様構成をもち、頸部?文様帶には、巻貝の側面圧痕が認められる。780と781

は同一個体である。787例は対抗する弧線文をもつ。凹線を巻貝殻頂部を折ったものによる列点文に置き換える例は、弧線文状になる1128例や器形から本類に含めた。この手法は後述する A' g' 類の1223に既にみられるものであるが、本類に盛行するものと推定される。

なお、本類に属すものは、頸部？まで残る780例を参考に深鉢の口縁部と考えたものが多いが、鉢に属するものもある可能性があることを断っておく。

本類は、滋賀里 I 式に比定されると考える。

A i 類（第30図133、第65図793～805、第82図1129～1138） 口縁部が外弯気味で、巻貝殻頂部先端ないしは笠状具などによる沈線文をもつものを本類とした。A h 類にみられた列点文を伴うもの（793、794、803）や、刺突列を伴うもの（1134～1136）もある。平縁（1129～1138）と波状縁（133・793～805）がある。

沈線文には、弧線文（794～797・1130）や弧線文が祖形と推定される山形文（133・800～805・1134～1136・1138）が目立つ。山形文は、幅の広い口縁部を埋めるように沈線文が展開する。

器形全体が分かる資料に恵まれず、頸部以下の状況が分からぬ。

本類は、滋賀里II式に比定されると考える。

（第26図87～第27図101、第66図806～822） いわゆる凹線文土器の一群で、付加装飾文をもたないものもしくは、破片資料の制約から付加装飾文が確認されないものを集めた。87・806～815は、磨きないしは撫で再調整された凹線で、刻み帯を伴う例である。A f 類と考えら、元住吉山 II 式に比定される。しかし、806・808・815などは刻みが粗く、口縁端部の仕上げも他のものが面的に仕上げられるのに比して丸みを帯びていることから A g 類（宮滝式の古相）に属する可能性や過渡的なものという印象を受ける。816の凹線は、工具により引かれたままのものであるが、刻み帯を伴うことから、やはり A f 類（元住吉山 II 式）か。88～91・95・817は、凹線を磨きないしは撫で調整している。刻み帯はみられず、A g 類（宮滝式の古相）の可能性が高いが、口縁端部の面が明瞭な90や817は A f 類ないしは A g 類への過渡的なものという印象を受ける。817は、凹線も 7 本と多条

であり、A f 類に近いと考えられる。92～94・96～102・818・820～822は、凹線が工具により引かれたままのもので、A g' 類（宮滝式の新相）に属すると考えられる。このうち、99と100は、口縁部が外湾ぎみにななものであり、より新しい傾向を示す。819は、工具により引かれたままの凹線間に連弧を伴う例である。ここでは分類を控えておく。

A j 類（第27図103～106、第67図823～832）

A a から i 類は、口縁部文様帶が横走する沈線や凹線を基本として成立していたが、本類及び、次に記述する A k 類はこの基本に沿わないものである。

器形は口頸部境で「く」字状に内折するものである。口縁部文様は、連続する縦位のモチーフをもつもので、浮文になるもの（103～106・823～829）と沈文になるもの（830～832）がある。全て平縁の資料である。

103・823・828・829は、棒状浮文に刻みがみられる。103は、胴部文様の構成が口縁部文様と異なるもので、刻みを伴うやや幅の広い沈線と、縦に配列された 3 個の点文とその左右に展開する L R の縄文を充填した弧文がみられる。831は、縦位の沈線間に縄文が確認される。105・106・828・829は胴部資料である。

本類は、覗塚III式に比定される。本類の出自は不明確であるが、近畿から中部地方にかけて広くみられるものである。天白遺跡でも一定量みられることから、在地土器の組成のひとつと考えておく。

A k 類（第27図107、第30図134、第67図833～846、第82図1139～1141） 口縁部に縄文帶をもつものを一括した。平縁（107・833～846）と波状縁（134、1139～1141）がある。

平縁資料の内、107・833～835は口縁端部が細く終わるもので、836～842・844にもその傾向はみられる。833は、中央にくびれをもつ浮文がみられる。

波状縁資料は、外弯気味の口縁部をもつ。1140は、縄文帶と波頂端部との間に無文部分をつくる。

縄文は、2 点の R L 例（846・1140）と 1 点の L r 例（845）を除いて、他の 16 例は全て L R である。

本類は、元住吉山 I 式までの資料と考えられる。1140と1141は、外湾する口縁部の形態から一乗寺 K 式に近い資料と考えられる。

A' 類

口縁部が「く」字状に内折した後、さらに外反する器形のものを特にA' 類とする。深鉢A' 類は、g 類（宮滝式の古相）から i 類（滋賀里II式）に属するものが確認された。後述する壺ないしは注口土器B 類の430例や森添遺跡の資料をみると、A' 類は f 類（元住吉山II式）から出現すると思われる。

A' g 類（第30図135～138、第83図1142、1143）

本類は、口縁部の形態以外はA g 類に準ずる。全て平縁資料である。

135は口縁部内面に凹線と粗い刻み帯をもつ。1142は、A f 類に特徴的であった列点文の名残りがみられる。

本類は、宮滝式の古相に比定される。

A' g' 類（第30図139～第32図151、図83図1144～84図1180、第86図1223～1238） 本類は、口縁部の形態以外はA g' 類に準ずる。平縁（139～151・1144～1180）と波状縁（1223～1238）がある。

特筆すべきこととしては、本類中で口頸部境の屈曲が“甘く”なる変化（例えば、148→149→1174）がある。その変化は漸移的である。口頸部境の屈曲が甘くなるに応じて口縁部幅が広くなる傾向も看取できる。1174例は特徴的で、広くなった口縁部に5本の凹線をもつ。付加装飾も縦長になり、上下の扇状圧痕を凹線でつなぐものとなる。

その他、1175、1176には扇状圧痕を祖形とする「V」字状の付加装飾がみられる。また、1177～1180例は、巻貝の側面圧痕を縦方向にずらすものである。この縦長の圧痕は、A h 類や後述するA' h 類の短沈線の祖形と考えられる。

特異な例としては、凹線を巻貝殻頂部を折ったものによる列点文に置き換えた1223がある。本例は、A' g 類に属する可能性もある。

本類は、宮滝式の新相に比定される。

A' h 類（第32図152、第84図1181～第85図1200、1205） 器形は、A' g' 類の後半に位置づけられる口頸部境の屈曲が甘いものと同様である。文様は、A h 類に準ずるが、弧線文の例は無い。いずれも平縁資料である。

付加装飾文に短沈線を持つ例としては、152と1181～1187、1205がある。1188と1191は、短沈線からの

変化と考えられた縦長区画文状の付加装飾文をもつ。1189は短沈線に点文を伴う。1189・1191・1192の凹線は、区画文状になる。1188は、目立って口縁部の幅が広い。口縁部の上下に凹線が引かれ、凹線間をつなぐように前述した付加装飾文を施文するため、縦長のモチーフになったと推定される。152の口縁部は、小波状を呈する。

凹線を連続する列点文に置き換えた例には、1193～1200がある。これらの内、1193・1194・1200は凹線との併用がみられる。1200は、凹線で円を描いた中に点文がみられる特殊なものである。1197は、前述した1188のように口縁部幅が広く、上下に列点文がみられる。上方の列点文は2条である。下方は、破片資料の制約から1条しか確認できないが、2条になる可能性がある。また、上下の列点文をつなぐ、縦位の2条の列点文もみられる。下方の列点文の上には、凹線状のものが1条ある。

本類は、滋賀里I式に比定されると考える。

A' i 類（第32図153、第85図1201～1204、1206、1207） 器形は、A' h 類に準じ、文様はA i 類に準ずる。いずれも平縁資料で、山形文をもつ。

本類は、滋賀里II式に比定されると考える。

（第32図154～158、第85図1208～第86図1222） A' 類に属するいわゆる凹線文土器の一群で、付加装飾文をもたないもしくは破片資料の制約のため確認できないものを集めた。154と155は、磨きにより再調整された凹線をもつもので、A' g 類（宮滝式の古相）と推定する。この2例は、口縁部内面にも凹線を施す。

156～158と1208～1222の凹線は、工具により引かれたままのもので、A' g' 類（宮滝式の新相）と推定される。これらのなかには、口頸部境の屈曲が甘くなる資料（157など）が目立つ。なお、1211・1212・1221は、口縁部内面にも凹線を施す。1222は、連弧文を伴う例である。

1219は、口縁部幅の極めて狭いもので、口縁部文様帶をもたない。本来A" 類とし、別の器形分類を当てるべきものであろう。類似した例が後述する鉢A" 類にある。滋賀里I式に近い、比較的新しい資料と考える。

B 類

B類は、口縁部に屈曲をもたず、外反して終わる器形の深鉢である。すなわち、土器制作上、深鉢A類の「く」字状に内折する口縁部の積み上げを省略した器形である。圧倒的に平縁資料が多く、一部に波状縁のものがある。

口縁部の施文の状況から、1～3の3類に分類した。以下、各類の記述を進めるが、可能な範囲で、深鉢A類で行った文様からの細分との対比も行いたい。

B 1類（第33図159～第35図193、第87図1239～第89図1282、第91図1324、第92図1327～1349） 口縁部外面に施文がみられるものを一括した。平縁（159～193・1239～1282・1324）と波状縁（1327～1349）がある。

1239は口縁部に平行する2条の沈線をもち、沈線間に刺突列がある。小型品である。深鉢A b類（以下、「深鉢A」を省略して表記する。）に対比できるものであろうか。元住吉山I式の資料と考えておく。

1240は、口縁端部に二枚貝腹縁による刻み帯をもつ。a～c類までの対比が可能である。元住吉山I式ないしは蜆塚III式の資料か。

159～176と1241～1260は、いわゆる凹線文土器である。凹線は、磨きないしは撫でにより再調整される。付加装飾には点文（1162など）や巻貝の側面压痕（172など）、縦位の短凹線（1259など）、それらに付随する列点文（171など）がある。円形の浮文上に刺突を行う例（169など）もある。f類に対比できる一群で、元住吉山II式に比定される。口縁部内面にも施文される例が多い。比較的細い凹線が施文されるもの（1242）、比較的太い凹線が施文されるもの（164、174、1253、1257）、比較的細い凹線と刻み帯が施文されるもの（165～167、169、172、173、176、1241、1249、1251、1260）、比較的太い凹線と刻み帯が施文されるもの（1243、1246、1247、1250、1252、1258、1259）がある。破片資料という制約があるが、165、169、171～176には頸部文様が確認される。巻貝の側面压痕を付加装飾にもつ例に頸部文様が認められる確率が高い。

177～180と1261～1265は凹線が磨きないしは撫でにより再調整されており、付加装飾に扇状压痕をもつ一群である。g類に対比でき、宮滝式の古相に比

定される。残存率の高い資料は、全て頸部文様帯が確認される。口縁部内面にも施文される例が多い。比較的細い凹線が施文されるもの（179）、比較的太い凹線が施文されるもの（1263・1264）、比較的細い凹線と刻み帯が施文されるもの（1262）、比較的太い凹線と刻み帯が施文されるもの（178・1261）がある。180は口縁部に半円状の突起をもち、小波状を呈するものである。突起部に単独の扇状压痕をもつ。

181～184・1266・1267・1327～1349は、工具により引かれたままの凹線をもつものである。付加装飾文に扇状压痕をもつもの（181～183・1266・1267・1327・1328・1330～1332・1337）と巻貝の側面压痕をもつ資料（1329・1333～1341）は、g'類に対比でき宮滝式の新相に比定される。付加装飾文に短凹線をもつ資料（1342～1344）は、h類に対比でき滋賀里I式に比定されると考える。付加装飾文をもたないもの（1345～1349）は、上述のいずれかに所属するものであろう。頸部文様帯は181・182・1264の3例に確認される。破片資料の制約から確実なことは言えないが、頸部文様帯を伴う率は高いと推定される。口縁部内面にも施文される例がある。比較的太い凹線が施文されるもの（182、1266）、比較的太い凹線と刻み帯が施文されるもの（181）がある。なお、波状縁の1329・1332～1336・1338～1349は、口縁部の破片資料である。深鉢B類に含めて考えたが、深鉢A'類になる可能性もある

185～193と1268～1282は、付加装飾文の部分が確認されない資料である。187・1268～1272・1274は、口縁部もしくは胴部外面に磨きないしは撫でにより再調整された凹線をもち、刻み帯も確認されることから、f類（元住吉山II式）に相当する可能性が高い。185・186・187・1273・1275は、口縁部外面に磨きないしは撫でにより再調整された凹線をもち、口縁部内面に刻み帯が確認される資料であり、やはり、f類（元住吉山II式）に相当する可能性が高い。1277と1278は、凹線内に工具の細線が確認される。口縁端部の面取りは明瞭である。1278例は口縁部内面に刻み帯が確認される。両資料とも、f類（元住吉山II式）からg類（宮滝式の古相）への過渡的なものという印象を受ける。

189～192と1276は、口縁部外面に磨きないしは撫

でにより再調整された凹線をもつ。刻み帯は内外面とも確認されない。g類（宮滝式の古相）に相当すると推定される。192は、口縁部内面に比較的太い凹線をもつ。

193と1279～1282は、工具により引かれたままの凹線をもつ。1282を除いて、g'類（宮滝式の新相）に相当すると推定される。1282は、凹線間に連弧文が確認されるものである。ここでは分類を控えておく。

1324は、口縁端部以下、残存部全てにL Rの縄文が確認される。一乗寺K式から元住吉山I式の資料と推定される。

B 2類（第35図194～第38図214、第38図220、第89図1283～1317） 口縁部外面には文様をもたず、内面に施文するものを一括した。220は波状縁で、他は、全て平縁である。

胴部まで確認される資料は少ないが、200・1284・1311などに横走する胴部文様帯がみられる。明らかに頸部文様帯といえる例はない。1202などは、頸部文様帯の可能性が指摘できるものであるが、これは、後述する鉢B類の可能性もある。

口縁部内面の文様は、環状に巡るものである。

沈線と縄文帯が確認される例に194と1283～1287がある。1286と1287は結節縄文で、他は、194と1283がR Lで、1285がL Rである。1284は縄文と思われるが不確かである。本例は、胴部にも沈線と縄文？が確認される。

縄文帯のみで、沈線を伴わない資料に220と1288～1292がある。いずれも、結節縄文ないしは付加条縄文である。

沈線と巻貝による擬縄文帯が確認される例に、1293と1294がある。

沈線と二枚貝腹縁による刻み帯がみられる例に、195がある。1295は、沈線を伴わない二枚貝腹縁による刻み帯が確認される。1296も同類か。196はやや太めの沈線と二枚貝腹縁の押し引き？がみられる。1297は口縁部内面に段をもち、その上に工具の確定はできないが刻み帯をもつ。

1307と1309は、沈線と刺突列が確認される。1308は沈線を伴わず2段の刺突列がみられ、1310は沈線と重なるように刺突列が施されている。なお、1308

は内外面とも赤色顔料が確認される。

以上の縄文や擬縄文、二枚貝腹縁による刻み帯、刺突列が確認される例は、a～c類に相当すると推定され、一乗寺K式から元住吉山I式ないしは覗塚III式までの資料と推定される。

197～207と1299～1301は、沈線と刻み帯が確認される資料である。205と206の沈線は、やや幅の広いものである。1300は、胴部外面に2条の沈線がみられる。208～211と1302～1306は、沈線を伴わずに刻み帯のみをもつ。これらの資料には、口縁部内面が段状になって、その上に刻み帯をもち、刻み帯下に沈線状のものが巡るもの（209など）も多い。1302は、胴部外面に刻み帯と2条の沈線が確認され、沈線間には付加装飾文として「ノ」字状の沈文をもつ。刻み帯は頸部文様帯と理解すべきものか、あるいは本例は後述する鉢B類とすべきものなのか、疑問を残す。刻みは、左下がりのものが圧倒的に多く、1306などはその逆で少数派である。刻み帯をもつ例はf類、すなわち元住吉山II式を中心とすると考えられるが、1302の胴部文様帯は沈線と「ノ」字状の沈文をもち、元住吉山I式以前に比定される。また、刻みの粗いもののいくつかは、g類、すなわち宮滝式の古相に降る可能性もある。

212～214と1311～1317は、沈線のみが確認される資料である。1311・1315・1317は2本、1316は3本の沈線がみられる。1317は弧線文になると推定される。1316は小破片資料で全容は不明である。本例は、内面に赤色顔料が確認される。1313は、口唇にL rの縄文が施文される。1311は胴部に2条の沈線と1条の連弧文をもち、刻みが充填される。1312は胴部に3条の沈線と2条の連弧文をもち、Lの縄文が充填される。

これらの資料は、口縁部内面に沈線のみが確認されるもので、比較的新しい時期が想定される。しかし、1312と1313は縄文を伴うものでc類まで、すなわち元住吉山I式ないしは覗塚III式までの資料と推定される。1311は、元住吉山I式ないしはII式までの資料か。他は、f類、元住吉山II式以降の資料であろうか。1314・1315・1316は、g'類（宮滝式の新相）に比定され、1317は、h類（滋賀里I式）に比定されると考える。

B 3類（第38図215～219、第91図1318～1323）

口縁部の内外面とも、文様をもたないものを一括した。全て平縁である。

218・1319・1320～1322は、胴部文様に沈線と縄文が確認される。218は、不明瞭であるが付加条縄文か。他は、LRである。1322と1323は幅の広い縄文帯になるものと推定される。

1318は、3条の沈線と付加装飾文に蛇行沈線をもつ。1321は、2条の沈線とその上下に連弧文をもつ。

以上の資料は、c類まで、すなわち元住吉山I式ないしは蜋塚III式までの資料と考えられる。

215と216は、凹線と刻みが確認されるもので、f類に対比でき元住吉山II式の資料と推定される。

217は、工具により引かれたままの凹線をもつものでg'類に対比でき宮滝式の新相に比定されると考える。

無文深鉢

無文深鉢は、前述したように埋設土器のみを掲載した（第38図221～第40図234）。無文深鉢の総量は、有文深鉢の量をはるかに凌駕するものであることを改めて断っておく。

貝殻による調整の後、磨きもしくは撫でにより再調整される。221と234は、丁寧な研磨が行われる。

口縁部の残る資料は、「く」字に内折する1例（221）と外反して終わる5例（222～226）がある。器形的には、前者が深鉢A類に、後者が深鉢B類に相当するが、文様帶をもたないためか胴部の屈曲の状況が有文土器とは異なる。

詳細は、「2縄文時代の遺構（2）埋設土器」で記述したので省く。

その他の深鉢

その他の深鉢を一括した（第93図1350～第94図1382）。1350～1365は平縁資料で、1366～1373は波状縁資料である。1374～1382は胴部資料である。

1350は、口縁端部外面に豆粒状の突起をもつ。

1351は、口唇から口縁端部外面にかけて豆粒状の突起を2個もつ。

1352は、口縁端部内面から外面にかけて豆粒状の突起をもつ。

1353は、口縁端部内面から口唇にかけてくびれを伴う突起をもつ。

1354は、口縁部に1条の沈線をもち、口縁端部と沈線の間にRLの縄文帯をもつ。内剃気味の口唇に突起をもつ。

1355は、方形区画状になる隆帯があり、隆帯上にはLRの縄文を施文する。口唇には、2個一对の突起をもつ。

1356は、口縁部に平行する2条の沈線があり。無文部を介して入組風のモチーフをもつ文様がみられる。

1357は、口唇にLrの縄文をもつ。

1358は、口唇から口縁部外面に縄文をもつ。

1359～1365は、やや外湾気味の口縁部をもつ。1359は口縁部に無文部をもち、以下にはLRの縄文をもつ。1360と1361は残存する外面の全面に縄文がみられる。1360はLRで、1361はRLである。1362～1365は沈線を伴い、1364は沈線より上の部分に縄文がみられ、他は沈線より下の部分に縄文がみられる。1363はRLで、1364と1365はLRである。1362はRしか。

1366と1367は、外湾気味の口縁部に平行する4条の沈線がみられる。1366は、沈線間に刺突列が充填され、波頂部には縦位の刻みがみられる。1367は、沈線間にLRの縄文が充填される。両資料とも口縁端部から下に、無文部→有文帯→無文部→有文帯となる。文様構成は、a類の一乘寺K式に類似する。

1368は、胴部？に沈線とLrの縄文がみられる。

1369は、深鉢A b類に類似するが、沈線ではなく、撫でによる凹線的な文様をもつ。浮文には刻みがみられ、内面には刺突がある。

1370は、段をなす口縁端部外面に刻み帯をもつ。深鉢B類の1240に近い資料である。

1371は、口縁部に沈線とLrの縄文をもつ。

1372は、口縁部にLRの縄文帯をもつ。

1373は、口唇と口縁部外面にRLの縄文をもつ。

1374と1375は、胴部に連続する瘤状の突起をもつ。

1376～1382は、胴部に縄文帯をもつ資料である。1376は頸胴部境に段をもち、その下に幅の広いRLの縄文帯をもつ。1377は、3帯のLRの縄文帯をもつ。1378は、幅広くRLの縄文がみられる。1379は、沈線とその下に幅広くLRの縄文がみられる。1380は、沈線とRLの縄文帯をもつ。1381はLの縄文帯をもつ。1382はLRの縄文帯をもつ。

b 鉢

鉢は、器形からA、A'、A''、B、C、Dの6類に分類される。以下に、各類の記述を行う。

A類（第41図235～第43図268、第95図1383～第96図1420・1430）

A類は、「く」字状に内折する口縁部をもつ鉢である。口縁部文様は、深鉢A類に類似する。1414～1420は波状縁で、他は平縁である。

235は、a類の文様構成をもつ。口縁短部には半円形状の突起をもち、突起の下方には馬蹄形の浮文をもつ。地文には二枚貝腹縁による刻みをもち、口唇にも刻みがある。口縁部のみの資料であり、深鉢になる可能性もある。一乗寺K式に比定される。

236・1383・1384は、3か5条の沈線をもつ。地文には縄文（236はR、1383はL R、1384はL）をもつ。1384は、口縁部内面にも沈線と縄文帯をもつ。文様構成は、a類と異なり、沈線が多条化するe類に比定することも考えられるが、236に逆「6」字状の沈文があることや地文に縄文をもつことなどから、この3例は一乗寺K式に比定しておきたい。深鉢Aは、a類の文様構成をとるが、鉢はこれらの集合沈線状の文様構成をとるもののが伴い、一乗寺K式のセットをなすものかもしれない。

237～242・1385～1398・1414～1419は、b類の文様構成をもつもので元住吉山I式に比定される。1385は4条の沈線を伴うが、2条ずつの沈線束をなし、間に比較的幅の広い無文部をもつので、b類に含めた。地文に縄文をもつもの（237～239・1386～1395・1414～1417）と刻みをもつもの（241・1385・1394～1397・1418・1419）がある。1385は、二枚貝腹縁による刻みである。241と1398は地文をもたない。ただし、1398は内面に刻み帯をもつ。縄文は、237～239・1391・1394・1415・1416がR L、1386・1387・1389・1390・1392・1393・1414がL R、1417がL r、1388がLである。付加装飾文は、「ノ」字状の浮文をもつ例（237・238・241・242・1387）、加曾利B2式に特徴的な浮文をもつ例（1388）、「ノ」字状の沈文をもつ例（265）、馬蹄形の沈文をもつ例（1415・1416）がある。1388は、器面調整に貝殻調整が認められるもので在地系の土器として扱った。1418の「ノ」字状の沈線内には連続する刺突を伴う。240～242・1394・

1396・1397は、連弧文を伴う。241・242・1394例は、深鉢A b類と同様に沈線間に連弧文をもつ。他の例は、下方の沈線が口縁部中央付近に迫り上がり、口縁部境に連弧文と刻みをもつ。241は連弧文と刻みが重なり、付加条縄文的な効果をみせる。本例は、口縁部内面にも2条の沈線と刻み帯をもつ。また、1398例も、1条の沈線と刻み帯をもつ。赤色顔料が、237～239、1386の内面及び口縁部外面に、240、1390、1392の内面に認められる。

243・1399～1402・1420は、b'類に相当し、元住吉山I式の終末に位置づけられると考える。文様構成はb類と同じであるが、沈線がやや太く凹線的なものになる。243・1400・1401は付加装飾文に押圧ないしは刺突を伴う馬蹄形の浮文をもつ。1402は、馬蹄形状の突起を伴う。沈線は1条であるが、2帯の刻み帯をもつ。突起の位置に当たる口唇部に、両端に刺突を伴う短沈線がある。1420は、巻貝の側面圧痕をもつ。243と1420は、地文に刻みをもち、243は口唇内面側にも刻みをもつ。赤色顔料が、243の内面及び口唇部に、1400の内面及び口縁部外面に、1401の内面に認められる。

244と245はc'類に相当し、覗塚III式の終末に位置づけられると考える。口縁部境に1条の沈線をもつ。沈線は、やや幅が広く凹線的である。245の内面には、赤色顔料が確認される。

246・247・1403・1404はe類に相当し、元住吉山II式に位置づけられると考える。沈線が多条化するもので、沈線の幅はやや広くなり、凹線的になる傾向がある。1403と1404は、地文に刻みをもつもので、e類と考えたが、一乗寺K式に比定した236・1383・1384と同類になるかもしれない。1403は波状縁の可能性がある。1404は口縁部内面にも刻み帯をもつ。246は地文に刻みをもち、口唇にも刻みが認められる。3条の沈線の内、中央のものは沈線内刺突がみられる。口縁端部には2個一対の突起をもち、その下方には巻貝の圧痕や小さな複数の刺突を伴う円形の浮文がみられる。247は、地文に刻みをもち、連弧文を伴うものである。246と247の内面には、赤色顔料が認められる。

248～256と1405～1410はf類に相当し、元住吉山II式に比定される。凹線は、磨きや撫でにより再調

整されたものである。1405と1406は例外で、工具により引かれたままの凹線をもつが、付加装飾文からf類と考えた。付加装飾文には、卷貝の側面压痕や点文、短凹線、列点文、压痕を伴う円形の浮文などがある。1410は、口縁端部に2個一対の突起をもつ。刻み帯をもつ例に、248・249・251・1410がある。262～265と1411～1413は、付加装飾文が確認されないが、磨きにより再調整された凹線と刻み帯をもつ資料である。f類に相当すると考えられ、元住吉山II式に比定される。1411の凹線は例外で、工具により引かれたままのものであるが、刻み帯を伴う点からf類と考えた。なお、本例は弧線文を伴う。268も工具により引かれたままの凹線であるが、内面に沈線と刻み帯がみられ、やはり元住吉山II式のものか。

266は撫でにより、267は磨きにより再調整された凹線をもつ資料である。刻み帯は伴わない。共に付加装飾文は確認されず、詳細な時期の確定は困難である。f類（元住吉山II式）もしくはg類（宮滝式の古相）に相当する。過渡的な資料か。

268は、外面に工具によりひかれたままの凹線をもち、内面に凹線と刻み帯がある。Af類に相当するものであろうか。

257～261はg'類に相当し、宮滝式の新相に比定される。凹線は再調整されないものである。260は、口縁端部に半円状の突起をもつ。259は、胴部に屈曲と文様帯をもつ特異な例である。残存度が低く器種的にも問題を残す。一応鉢と考え、少数例なので本類に加えておいた。

1430は、k類に相当する。口縁部にLRの縄文帯をもつ。内面及び口縁部外面に赤色顔料が確認される。一乗寺K式ないしは元住吉山I式に比定される。

A'類（第43図269～278、第96図1421、1422）

深鉢A' と同様で、口縁部が「く」字状に内折した後、さらに外反する器形のものを鉢A'類とした。g類（宮滝式の古相）以降のものがある。

269～271はg類に相当し、宮滝式の古相に比定される。276は付加装飾文が確認されないが、撫でにより再調整される凹線をもつ例で、g類と考えられる。

272～275・1421・1422はg'類に相当し、宮滝式の新相に比定される。274を除き、口縁端部に半円状の突起がみられる。277と278は付加装飾文が確認さ

れないが、工具により引かれたままの凹線をもつ資料で、やはりg'類か。278は、凹線による刻み帯状の文様をもつ。1421は内面に赤色顔料が確認される。

A"類（第43図279、280、第96図1423～1429）

A'類の口縁部の幅が縮小化されて成立したものと考えられるもので、逆「て」字状の口縁部のものを一括した。

1423～1428はA'類からの過渡的な資料である。1423は口縁端部に押圧をもつ。1423と1424は同一個体と思われる。280は、小さな刻みを上下2個もつ。280の口縁部外面のくびれ部分と1423、1424の内面に赤色顔料が確認される。本類は、滋賀里式I式に比定されると考える。

B類（第44図281～第45図305、第97図1431～第98図1452）

口縁部は外反したまま終わり、胴部に屈曲をもつもので、深鉢B類の器高が低いものである。いずれも平縁資料である。

281～289と1431～1440は、概ね元住吉山I式の資料と推定される。これらは沈線をもつ資料で、いずれも口縁部外面には文様をもたない。口縁部内面の文様は、1432が沈線とLRの縄文帯、281・289・1439・1440が沈線と刻み帯（内289は二枚貝腹縁によるもの）、282が沈線のみ、1437が結節縄文もしくは付加条縄文、1434と1438が刻み帯で、283は沈線と縄文か刻みか不明瞭である。289の沈線は円形の付加装飾文をもつ。胴部文様では、281にクランク状のモチーフがみられ、283～288と1434～1436には連弧文がみられる。284は、単位の長い連弧文と短い連弧文が組み合わされる。1438は、付加装飾文として向かい合う弧文をもつ。286は、沈線が方形区画状に閉じる。地文には、縄文の例（281・282・1431～1435・1437）、巻貝による擬縄文例（284・285）、刻みの例（286～288・1439・1440）がある。283と1436は、縄文か刻みか不明瞭である。縄文例では、282がLR、1431と1432がLR、1433と1434がRL、1435がR、281がLRと結節縄文もしくは付加条縄文との組み合わせ、1437が結節縄文もしくは付加条縄文である。

290～295・297・1442・1445は、磨きもしくは撫でにより再調整された凹線をもつ。付加装飾文に巻貝の側面压痕や点文をもつもので、f類に相当し、元

住吉山Ⅱ式に比定される。293と295は、刻み帯をもつ。291・292・294・296・1442は、口縁部内面に沈線と刻み帯をもつ。なお、1442は口縁部外面にも凹線をもつ。元住吉山Ⅱ式以降の鉢B類資料には、口縁部外面に文様が確認される例がある。これは、深鉢B類のB1類とした口縁部外面に文様をもつものが、元住吉山Ⅱ式以降に明瞭になることと足並みを揃える。

1443は口縁部内面に沈線と刻みをもつもので、やはり元住吉山Ⅱ式前後と考えておく。

298～300・1441・1444・1446は、付加装飾文は認められないが、磨きないしは撫でにより再調整された凹線をもつ。300は口縁部内面に沈線と刻み帯を、1441は刻み帯をもつ。これらの資料は、元住吉山Ⅱ式前後に位置づけられる。

301～304と1447～1450は、工具による引かれたままの凹線をもつもので、宮滝式の新相に相当する可能性が高い。1451、1452は、口縁部内面に比較的太い凹線がみられるもので、宮滝式に相当すると考えられる。305は弧線文をもつ資料である。口縁部の器壁も薄く、滋賀里Ⅰ式まで降る資料か。

C類（第45図306～312、第98図1453～1460）

ボール状の器形になるものを本類とした。平縁（306～312、1453～1455）と波状縁（1456～1460）がある。

306は、3条の沈線と付加装飾文に「ノ」字状の沈文がみられる。LRの縄文が充填される。一乗寺K式ないしは元住吉山Ⅰ式に比定される。

1453、1456、1457は、2条の沈線と地文としての縄文（1453はL、1456はRL、1457はLR）をもつ。1456は、波頂部に沈線を区画する縦位の短沈線がある。3例とも元住吉山Ⅰ式の資料か。

1458と1459は、刺突を伴う円形の瘤状突起を伴う点で共通する。1458は、2帶の刻み帯をもつb類に相当する資料で、元住吉山Ⅰ式の終末に位置づけたい。1459は、突起の特徴から、やはり、元住吉山Ⅰ式の終末に位置づけたい。

307は、工具により引かれたままの凹線をもつ。g類に相当し、宮滝式の新相に比定したい。

308は、弧線文をもつもので、器壁も薄い。h類に相当し、滋賀里Ⅰ式と考える。

309は、口縁部外面に4条の沈線と内面に1条の沈

線をもつ。滋賀里Ⅱ式と考える。

310は、沈線により弧線や直線が描かれ、2条の沈線間には刻みを伴う。312は沈線により弧線や直線が描かれる。311と1454は、巻貝殻頂部を折ったものによる刺突列がみられる。いずれも詳細な時期比定は困難である。

1455は口縁端部に2条の凹線？がみられる。縁帶文の時期の資料である可能性も考えたが、ここでは凹線文の特異な例と考えておきたい。口縁部外面にはベンガラが確認される。

1460は、口縁部内面に巻貝の側面圧痕と2条の凹線が確認されるものである。D類に含めるべきものかもしれない。

D類（第45図313～第47図334、第98図1461～第99図1478）

比較的浅い器形で、口縁部内面のみに文様をもつものを本類とした。底部から口縁部にかけての立ち上がりをみると、直線的なもの（例えば、329など）と、外湾氣味のもの（例えば、314など）がある。323例のように、途中に弱い屈曲がみられるものもある。底部が残存する資料は少ないが、凹底になるもの（329）と丸く終わるもの（334）がみられる。

口縁部内面に沈線と縄文帯をもつものには、313～314と1461～1462がある。313と314はLRで、315と1461はLr、1462はRL、1464は縄文と思われるが不明瞭である。1464は、沈線が「C」字状に終わる。

1463と1465は、沈線と巻貝による擬縄文帯をもつ。

316、1466、1477は、沈線と二枚貝腹縁による刻み帯をもつ。1466は、沈線が円を描いて終わる。1477は、沈線が「C」字状に終わる。

317～328と1467～1473は、沈線と刻み帯をもつ。1471の刻みは、幅の広いものである。1473は、沈線を2条をもつ。刻みは、328を除いて左下がりになる。328は逆である。なお、317・321・1467・1469・1473・1477は、内面に赤色顔料が確認される。

329と330は、刻み帯のみをもつ資料である。

331～333・1474～1476・1478は、沈線のみをもつ資料である。1476は2条である。1478は口縁端部に突起があり、突起内面に刺突をもつ。

334は、小さな刺突がみられる資料である。内面に赤色顔料が確認される。

以上、鉢D類で縄文や擬縄文、二枚貝腹縁の刺突がみられるものは、元住吉山I式までの資料と考えて大過ないと思われる。刻みを伴う資料や沈線だけの資料は、詳細な時期の限定が困難で、ここでは控えておく。1478については、宮滝式の新しい部分に比定され、334は、それより降る資料と推定しておく。

無文鉢（第47図335～第48図361）

器形的には、335と336はA類、337と338はA'類、339～350はC類、351～359はD類であるなお、A"類に関しては、無文のものもA"類の項で記述した。特殊なものとして口縁部に瘤状の突起をもつ360や、方形の突起をもつ361などがある。なお、337・339・344・345・357の内面には赤色顔料が確認され、336と340は内・外面に確認される。

C 壺ないしは注口土器

注口部が残存しないものが多く、壺の可能性があるものも含めたので、壺ないしは注口土器とした。

器形からA、A'、B、C、D、E、F、Gの8類に分類した。

A類（第48図362～373、第48図375～第49図388、第100図1479～1492）

無頸壺で、算盤玉形の胴部上半に段をもつものをA類とし、段をもたないものを後述するA'類とした。

A類は、端部の形状と文様からさらに細分することが可能である。

362～365と1479～1484は、端部が素直に引き出されるものである。端部は無文とするが、ポイントに「ノ」字状の浮文をもつようである。端部の引き延ばされ方は、長いものから短いものに変化するようで、1483や1484などはかなり短く、やや厚みをもつようになる。これらの例は、「ノ」字状または、馬蹄形の浮文や沈文をもつ。362のように地文にR Lの縄文をもつだけのものもあるが、単位文間に沈線による横長三角形のモチーフを描くものが目立つ。横長三角形のモチーフは、単位文間に頂点でつながるように2個あるもの（1483など）と、単位文間に1個のものが展開するだけのもの（363）がみられる。地文には、縄文の他、巻貝擬縄文や二枚貝腹縁による刻みなどが多用される。なお、1479の沈線は押し引き状

である。また、1482は連弧文がみられる。

1485の端部は、1483や1484の器厚がさらに強調されたものである。この変化は、366～373・375・1486～1488の端部が三角形状に肥厚するものへと受け継がれると推定する。端部が三角形状に肥厚する例には「ノ」字状または馬蹄形の浮文や沈文に加え、背中合わせになる弧線を単位文とするもの（1488など）がある。また、三角形状のモチーフに加え、クランク状のモチーフのもの（371）がみられる。連弧文のもの（375など）も多い。その他、注目されるものに368がある。本例は、横長三角形モチーフの下方の沈線が省略されたかのようで、擬縄文が充填される部分が逆転している様に思われる。地文には、縄文の他、巻貝擬縄文や二枚貝腹縁による刻みなどが多用される。

376～384・1489・1493では、三角形状に肥厚した端部の内面に沈線や刻みなどを施すようになる。383は、三角形状の肥厚が下方に引き出されるやや特殊な例である。384は、その逆で上方に引き出される傾向をもつ。これらの例は、「ノ」字状または、馬蹄形の浮文や背中合わせになる弧線を単位文とする。注目されるものに、384と1489がある。この2例は、馬蹄形の浮文が縮小化されたと考えられる瘤状の浮文をもつ。また、横長三角形状やクランク状のモチーフのものが多いが、先述した368例のように、三角形やクランクの下方の沈線が省略され、地文が充填される部分が逆転しているもの（378～380）が目立つ。この3例は、A'類の393例との関連が注目される。

385～388・1491・1492は、端部が残存しないものであるが、これらは、384例でみた三角形状の肥厚が上方に引き出される傾向が進み、三角形状の肥厚をもたず、端部が短く上方に引き延ばされるだけのものになった可能性が考えられる。結果、端部の残存の状況が悪くなったものであろう。386は、384や1489の馬蹄形浮文が縮小化したものと関連すると考えられる、円形の瘤状浮文をもつ。

387と1492は、磨きにより再調整された凹線をもつ。388も凹線文であるが、磨滅が激しく調整は不明である。特に、1492は沈線文と凹線文が併用される資料で注目される。

以上、A類の記述を行ったが、所属時期については、387・388・1492は、凹線の存在から元住吉山Ⅱ式に比定される。沈線文との併用や付加装飾文から宮滝式に降るとは考えられない。384・386・1489例は、瘤状の突起をもつことから元住吉山Ⅰ式の終末前後に考えたい。その他のものは、元住吉山Ⅰ式もしくは、一部の資料は一乗寺K式に遡る可能性がある。なお、三角形状の肥厚をもつ資料は、内面に沈線や刻みをもつ例が後出するものと考えられるが、初期を除いては、並存していた可能性が高いと思われる。

A'類（第49図389～第50図398、第100図1493～第101図1513、第103図1555、1556）

無頸壺で、算盤形の胴部をもつ。胴部上半に段をもたない。

端部の残存する資料が少なく、A類で記述したような細分はできない。

389と1493～1495は、「ノ」字状の浮文や渦状の沈文を起点に2条の平行する沈線によるモチーフが展開する。390・1498～1500・1502・1503例も2条の平行する沈線によるモチーフがみられる。1498は、向かい合う弧線が上下3段みられる。391～396・397・1501・1505～1513は、三角形やクランク文を基本としたモチーフが展開する。これらの内、397・1512・1513は地文をもたず、やや幅の広い沈線が引かれる。394～397・1511・1513の胴部屈曲部の文様は凹線と評価できるもので、沈線と凹線の併用が認められる。398は、扇状圧痕が認められる。

所属時期については、398が宮滝式の古い部分に、394～397・1511・1513は、凹線や付加装飾文から元住吉山Ⅱ式に、393は馬蹄形浮文が縮小化した瘤状の突起をもつことから元住吉山Ⅰ式の終末に比定される。他は、一部が一乗寺K式まで遡る可能性もあるが、元住吉山Ⅰ式に比定されよう。

なお、1555と1556は本類として扱ったが、胴部が卵形の器形になるものかもしれない。

AもしくはA'類（第48図374、第50図399～407、第102図1514～第103図1554）

破片資料の制約から、胴部上半に段をもつか否か確定できないものである。

407と1552～1554は、扇状圧痕と凹線の状況、刻み

の存在などから宮滝式の古相に、406と1548～1551は沈線と凹線の併用や付加装飾文から元住吉山Ⅱ式に、405・1544～1547が瘤状突起をもつことから元住吉山Ⅰ式終末に比定される。他は、一部が一乗寺K式まで遡る可能性もあるが、元住吉山Ⅰ式に比定されよう。

なお、A・A'類としたもので端部が残存しない資料は、後述するB類ないしはC類のものを含んでいる可能性があることを断っておく。

B類（第51図408～431、第103図1557～第104図1573）

外反する頸部から「く」字に内折する口縁部をもつものを本類とした。胴部と接合する資料はないが、恐らく算盤玉形の胴部がつくものと思われる。

口頸部は、深鉢A類に類似する。したがって、深鉢A類の細分をもちいて個々の説明をする。

408・415・1557～1559はb類、で元住吉山Ⅰ式に比定される。409・1560・1564はb'類で、元住吉山Ⅰ式の終末に比定される。410～414・1561・1562はc類で、覗塚III式に比定される。416と1563はe類で、元住吉山Ⅰ式の終末に比定される。417～424と1566はf類で、元住吉山Ⅱ式に比定される。431も付加装飾文がみられないが、丁寧に磨かれた凹線の状況から同時期と考えられる。426と427はg類で、宮滝式の古相に比定される。428・429・1567はg'類で、宮滝式の新相に比定される。1565と1568は口縁部外面に文様をもたないが、頸部に沈線と刻みがみられることから、元住吉山Ⅰ式に比定しておく。

1569～1573は、本類の口縁部につく突起と考える。1572以外は、擬縄文や刻みをもち、元住吉山Ⅰ式までの資料と推定する。

430は、深鉢A'類に相当する。刻みを伴う凹線文土器であり、元住吉山Ⅱ式と考えておきたい。深鉢A'類や鉢A'類は、宮滝式以降の資料しかみられなかった。先述したように、430や森添遺跡の資料から、口縁部が「く」字に内折した後にさらに外反するものは、元住吉山Ⅱ式に現れるものと考えておく。

C類（第51図432～第52図458、第53図468、第104図1574～1577）

直立気味の口縁部を有するもので、胴部は算盤玉形になると思われる。比較的短い口縁部のもの（432～446・1574～1577）と長い口縁部をもつもの（447

～458）がある。458は唯一の波状縁例である。

所属時期については、扇状圧痕と刻み帯を伴う1577が宮滝式の古相で、扇状圧痕と工具で引かれたままの凹線を伴う446が宮滝式の新相に比定される。453や454も宮滝式の新相か。445は丁寧な磨きで再調整された凹線をもち、元住吉山Ⅱ式と考える。刻みと凹線が確認される448も同時器か。瘤状の突起をもつ436・437・455・457・1576は、元住吉山Ⅰ式でも新相と考える。444・452・468の詳細な時期は不明である。他は、沈線と刻み帯（433・458・1574・1575は、二枚貝腹縁による刻み）、刺突列、擬繩文、連弧文などが確認され元住吉山Ⅰ式に比定される。

D類（第53図459～463、第104図1578～1582）

瓢形の壺になると推定されるものである。注口部が確認される資料はない。

459と1578～1581はf類で、元住吉山Ⅱ式に比定され、461～463と1582はg'類で宮滝式の新相に比定される。460はf類で、元住吉山Ⅱ式か。なお、1578の内面には赤色顔料が確認される。

E類（第53図465～467、第104図1583～1590）

直立気味の口縁部をもち、深い鉢状になるものを本類とした。1583と1584は元住吉山Ⅰ式までの資料である。1584は異系統土器の可能性もある。1585～1587はf類で、元住吉山Ⅱ式に比定される。1588は同時期ないしは宮滝式の古相に比定される。1589はg類で、宮滝式の古相に比定される。465～467、1590はg'類で、宮滝式の新相に比定される。

F類（第53図464）

E類と同じく直立気味の口縁部をもち、深い鉢状になるものであるが、胴部に強い屈曲をもつ。

464の1点がある。f類に相当し、元住吉山Ⅱ式に比定される。

G類（第53図1591）

深鉢A類に注口部がついた器形である。

1591の1点がある。g'類で、宮滝式の新相か。

無文の壺ないしは注口土器（第53図469～476）

器形的には、469と470はB類に、471～475はC類になる。476もC類か。

d その他の器種（第54図477～517）

477は皿であり、内面に赤色顔料が確認される。

478～491は、高杯ないしは脚台である。480はb'類で、元住吉山Ⅰ式の終末の資料か。478、479は、口縁部内面に沈線と刻み帯をもつ。478の外面は、丁寧に磨かれた凹線をもつ。478はf類で、元住吉山Ⅱ式に比定される。479も同時期か。482は、磨きにより再調整された凹線と扇状圧痕をもつ。g類に相当し、宮滝式の古相に比定される。481は、工具により引かれたままの凹線をもつ。宮滝式の新相の資料か。479と483は、脚台に楕円形の透かしをもつ。486と487の凹線は、磨きにより再調整される。488の凹線は撫でにより再調整される。491は蓋の可能性を残す。なお、480の口縁部外面から内面にかけてと490の内面には、赤色顔料が確認される。

492と493は釣手土器である。同一個体であろう。2条の沈線とその間に充填される刻みをもつ。元住吉山Ⅰ式の資料であろう。

494～496は舟形土器である。494は、2条の沈線をもつ。b類に相当し、元住吉山Ⅰ式に比定される。495、496の内外面には赤色顔料が確認される。495はベンガラと思われる。

497～517は、手捏土器ないしはミニチュア土器である。497は小型土器とすべきかもしれない。515は皿か。514・516・517は高杯である。他は鉢である。

e 底部

掲載資料で、底部が残存するものは、殆ど凹底である。底部のみが残存する資料は掲載できなかつたが、それらの大多数は凹底で、一部に平底のものがある。平底の資料は、網代痕をもつものが目立ち、木葉痕をもつ資料も1点確認した。平底の資料は、一乗寺K式に比定されるものであろうか。

B 後期中葉から晩期初頭の異系統の土器

在地系の土器に混じり、異系統の土器が散見される。比率は僅かなものであるが、その内容は豊富なものであり、天白遺跡人の交流の広さを物語る。以下に概要を記す。

518～529と1592～1628は、東北系のものである。518～524と1592～1606は、加曾利B2～3式に並行するもので、後期中葉に位置づけられる。1607は後期後半のものか。1608～1610は、1607に類似するものであるが同類とするには疑問を残す。527～529と1611～1628は、瘤付土器である。527、528、1611～1615は、後期後葉に、529と1616～1623は、同一個体

で、後期末葉に、1624～1628は、後期終末に位置づけられると考える。1628の器形は在地的なものか。

1629と1630は、3単位波状縁深鉢で加曾利B 2式に比定される。後期中葉のものである。

530・531・1631～1634は、関東系のもので、加曾利B 2式に比定される。後期中葉のものである。1631は、いわゆる算盤玉形の胴部である。1633の棒状浮文は、在地的なものとの融合か。1635と1636も関東系のものか。加曾利B 2～3式に比定される。

532～535・1637～1648・1653は、中部高地系のものである。1637～1641と1645は、加曾利B 2～3式に比定される。1642～1644は、時期的にやや降り、加曾利B 3式から高井東式のものか。532～535と1646～1648は、高井東式に比定さる後期後葉のものである。1653は、いわゆる上之段式のものと考えられ、後期末葉から晩期初頭に位置づけられる。

1649～1652は不明である。1650を除き中部高地系のものであろうか。1654、1655も不明である。

1656～1659は、北陸系のものである。後期後葉の八日市新保2式に比定される。

1660～1662は地文が擬縄文ではあるが、東海系の寺津下層式のものと考えられる。後期後葉のものである。

以上のように、天白遺跡の最盛期には各地域の土器がみられる。

C その他の時期

出土した縄文土器の圧倒的多数は、後期中葉から晩期初頭のものであるが、この前後の時期のものも少量ではあるが出土している。中期中葉から後期前葉のものと晩期後半のものがみられる。

1663～1669は、中期の土器である。1663と1664は、中期中葉の咲畠式のものであろうか。1665～1669は、中期末葉に所属する。

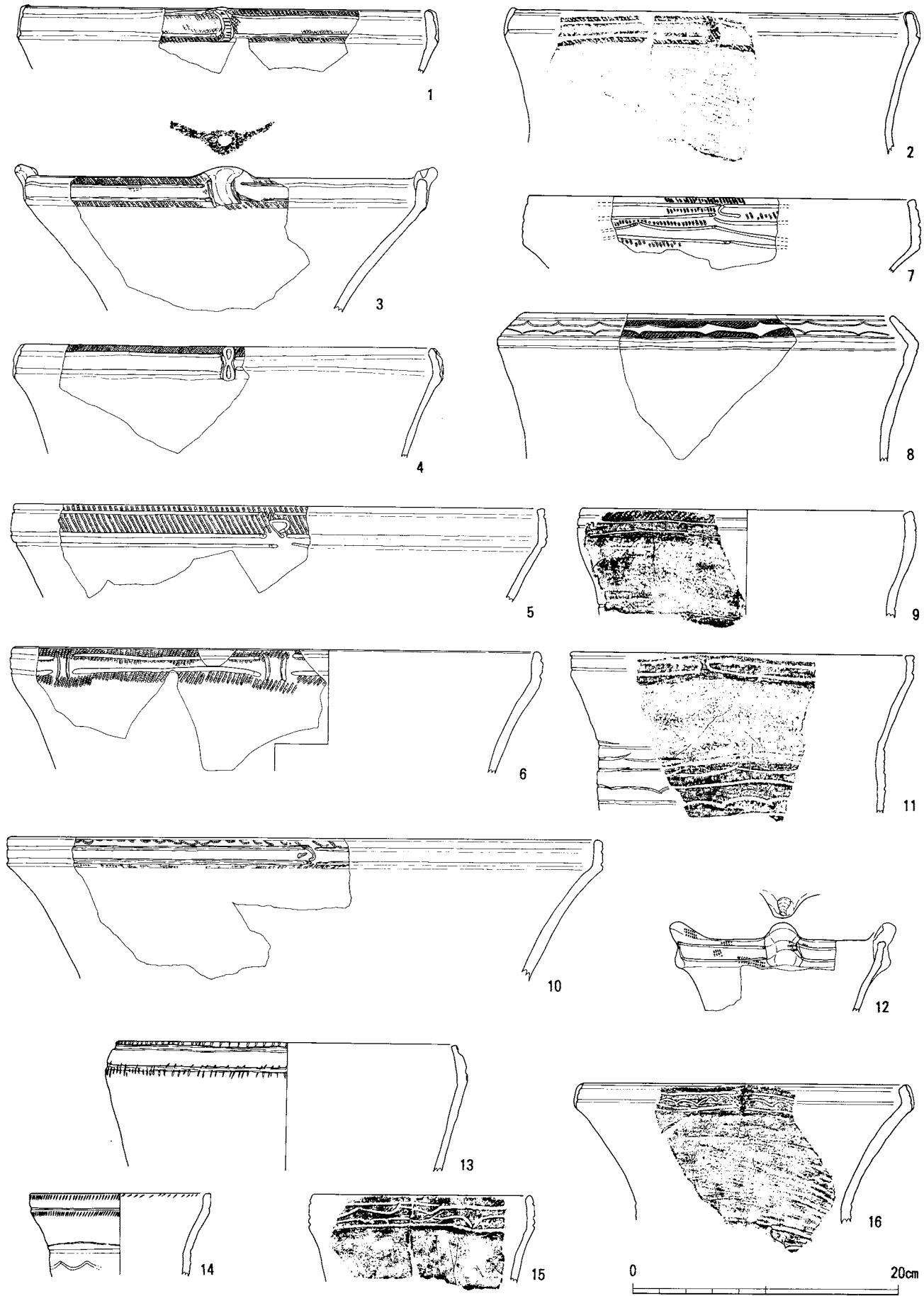
1670～1685は、後期初頭から前葉の土器である。1670は、やや幅の広い沈線で、後期初頭の中津式に比定される。1671～1674は、後期前葉のいわゆる縁帶文土器成立期のものである。1675は、北白川上層式3期辺りのものか。1676～1685は、1671～1675などに伴う後期前葉の条線文土器である。

1687～1690は、晩期後半の土器である。1687は爪形文がみられ、瀬戸内地方の原下層式との関連が考えられる。1687～1690は、凸帶文土器である。1687は、凸帶上に範状工具によるD字状の刻みをもつ。船橋式に比定される。1688～1690は、二枚貝による長大なO字状の刻みをもつ。馬見塚式に比定される。なお、1690は2条凸帶である。
(森川幸雄)

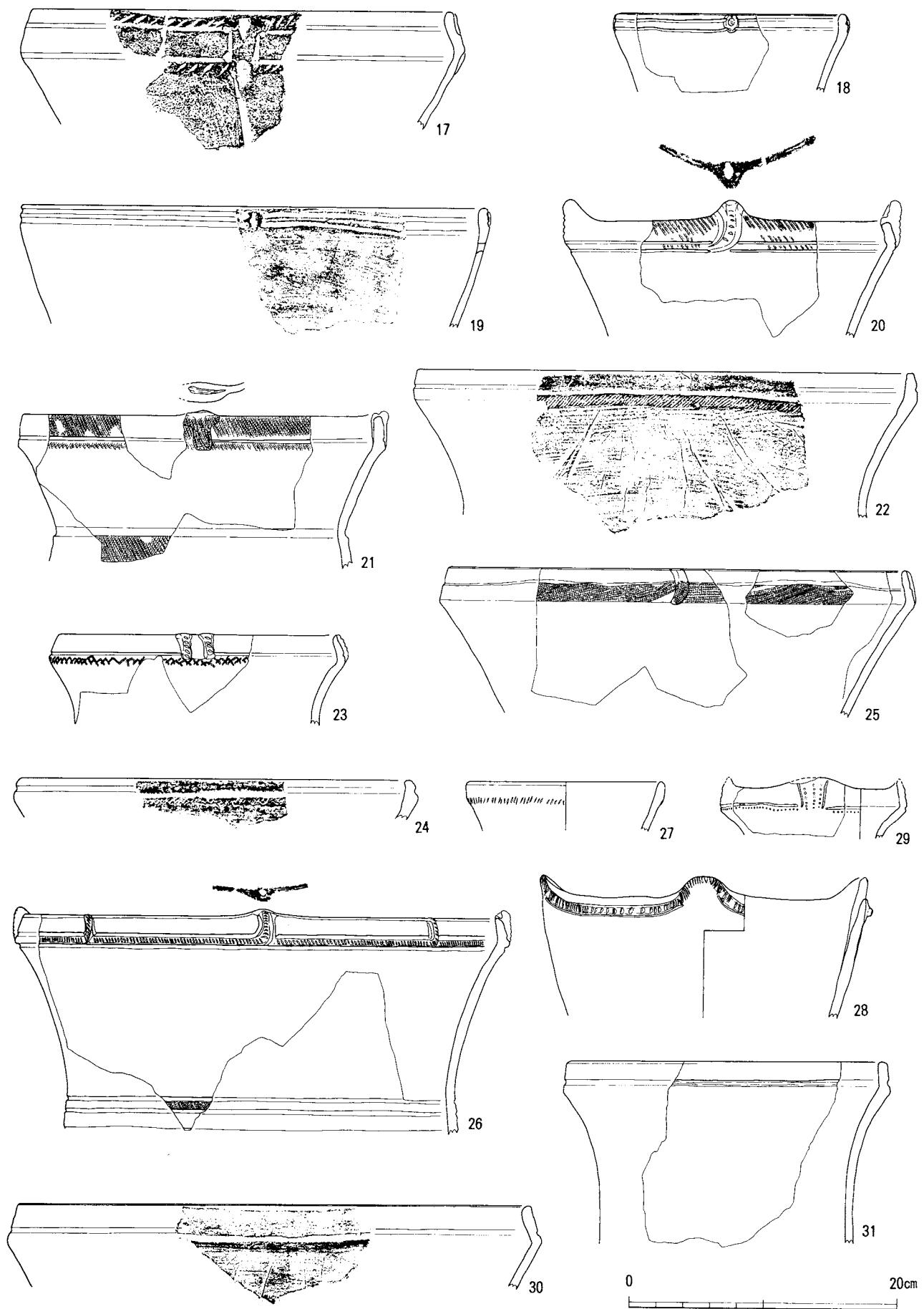
[註]

- ① 奥義次、御村精治『森添遺跡発掘調査概報II』
(度会町遺跡調査会、1988年)。

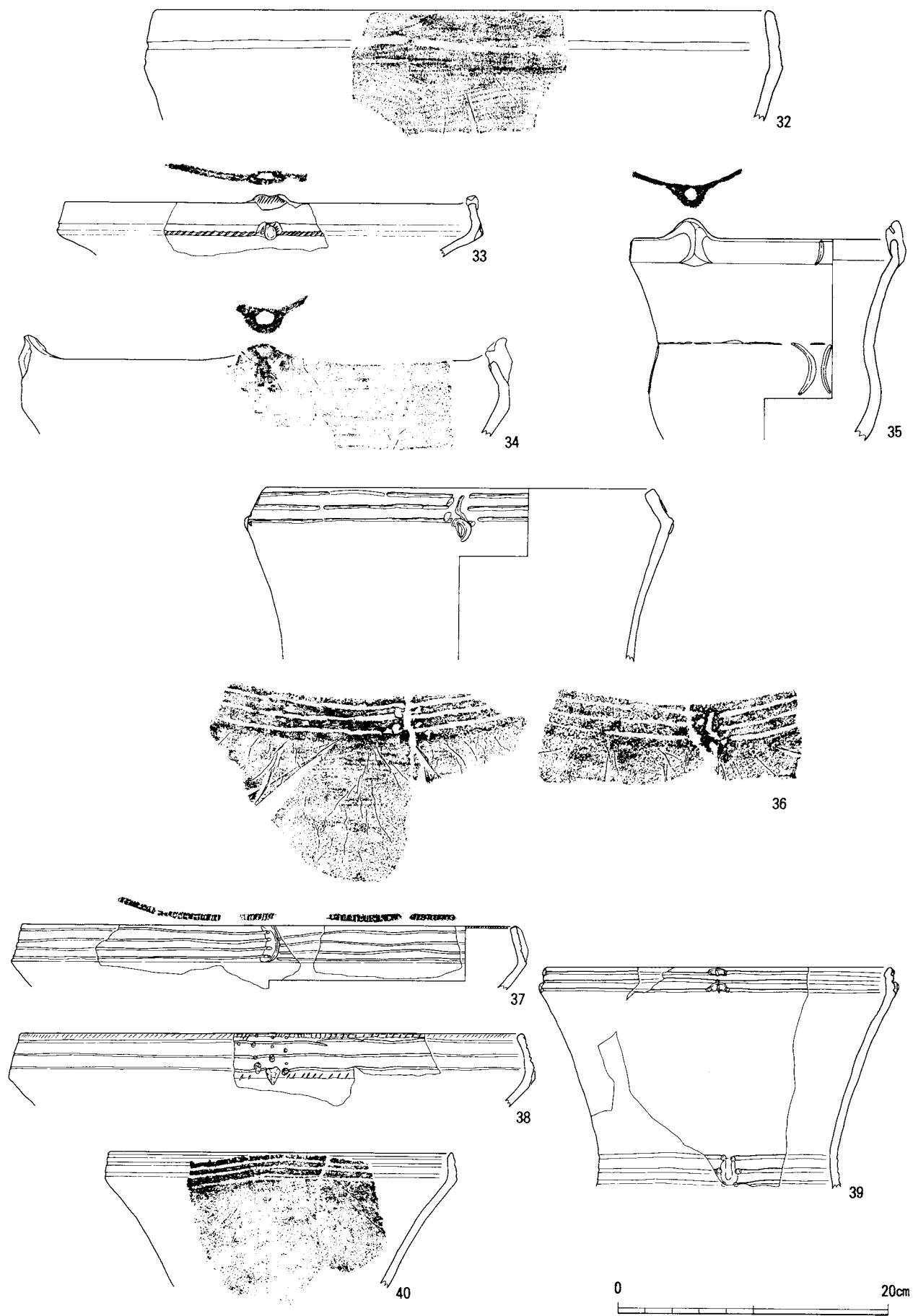
- ② 泉拓良「近畿地方の土器」(『縄文文化の研究』4
縄文土器II、1981年)。



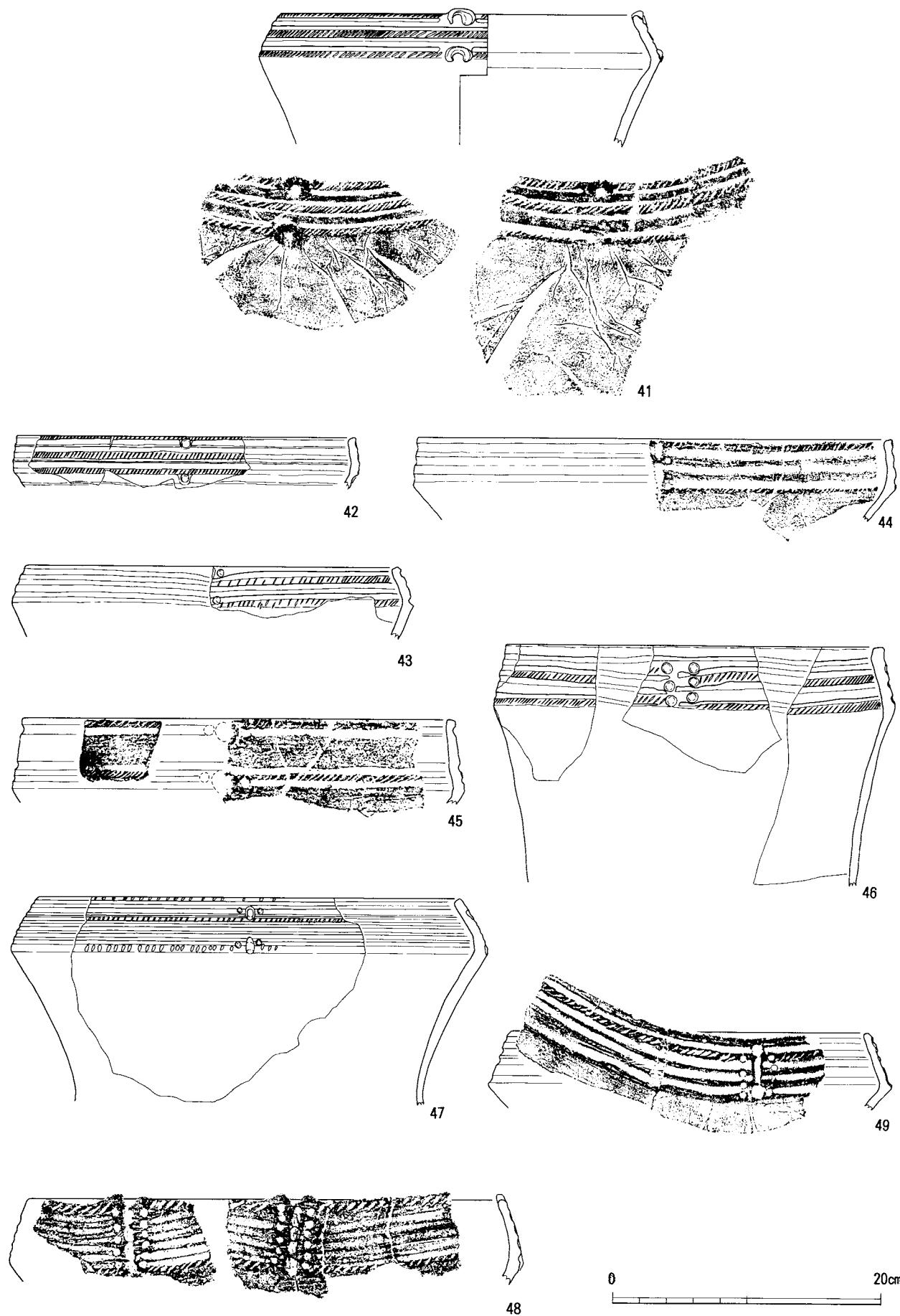
第19図 深鉢A類実測図 (1 : 4)



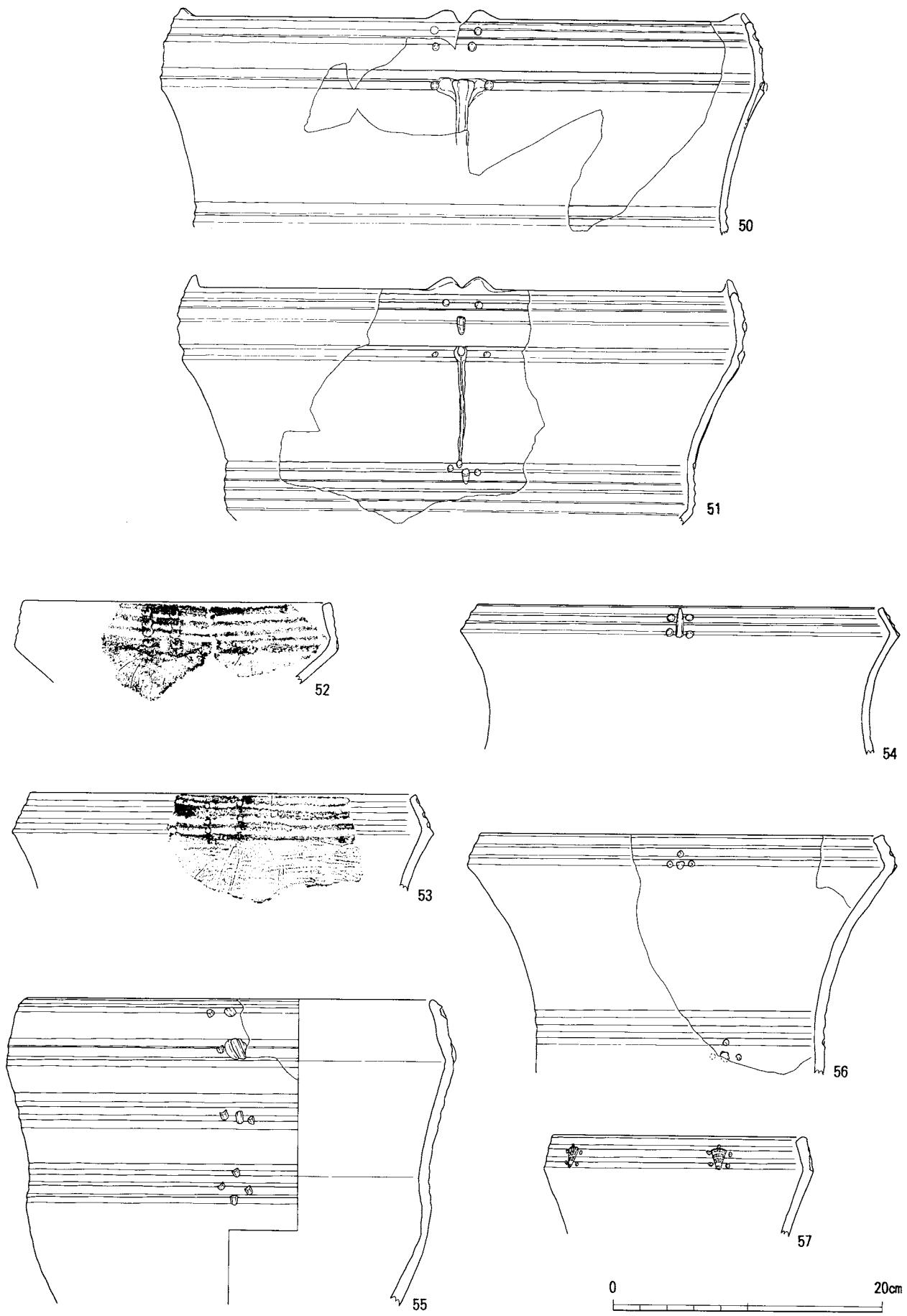
第20図 深鉢A類実測図 (1 : 4)



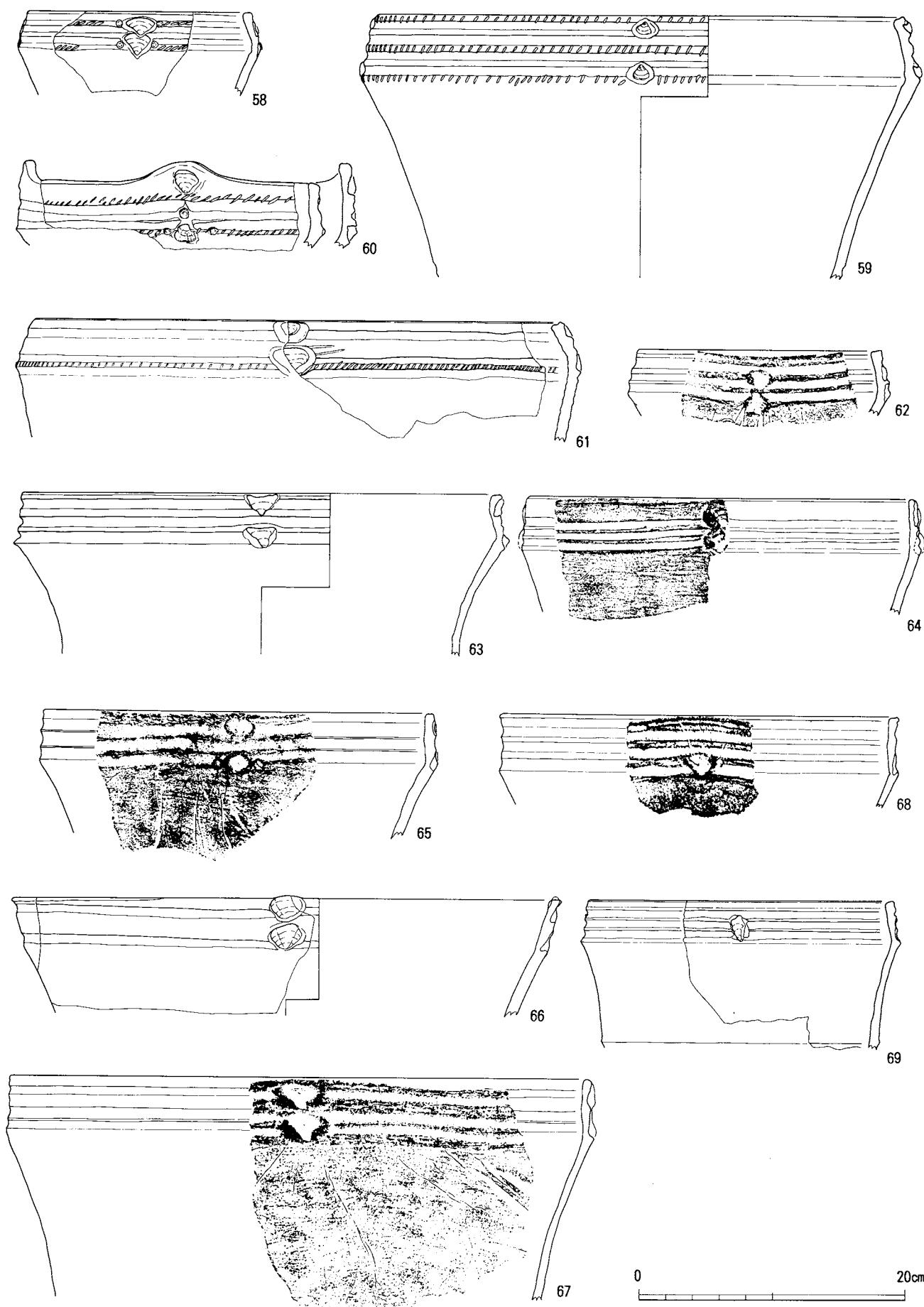
第21図 深鉢A類実測図 (1 : 4)



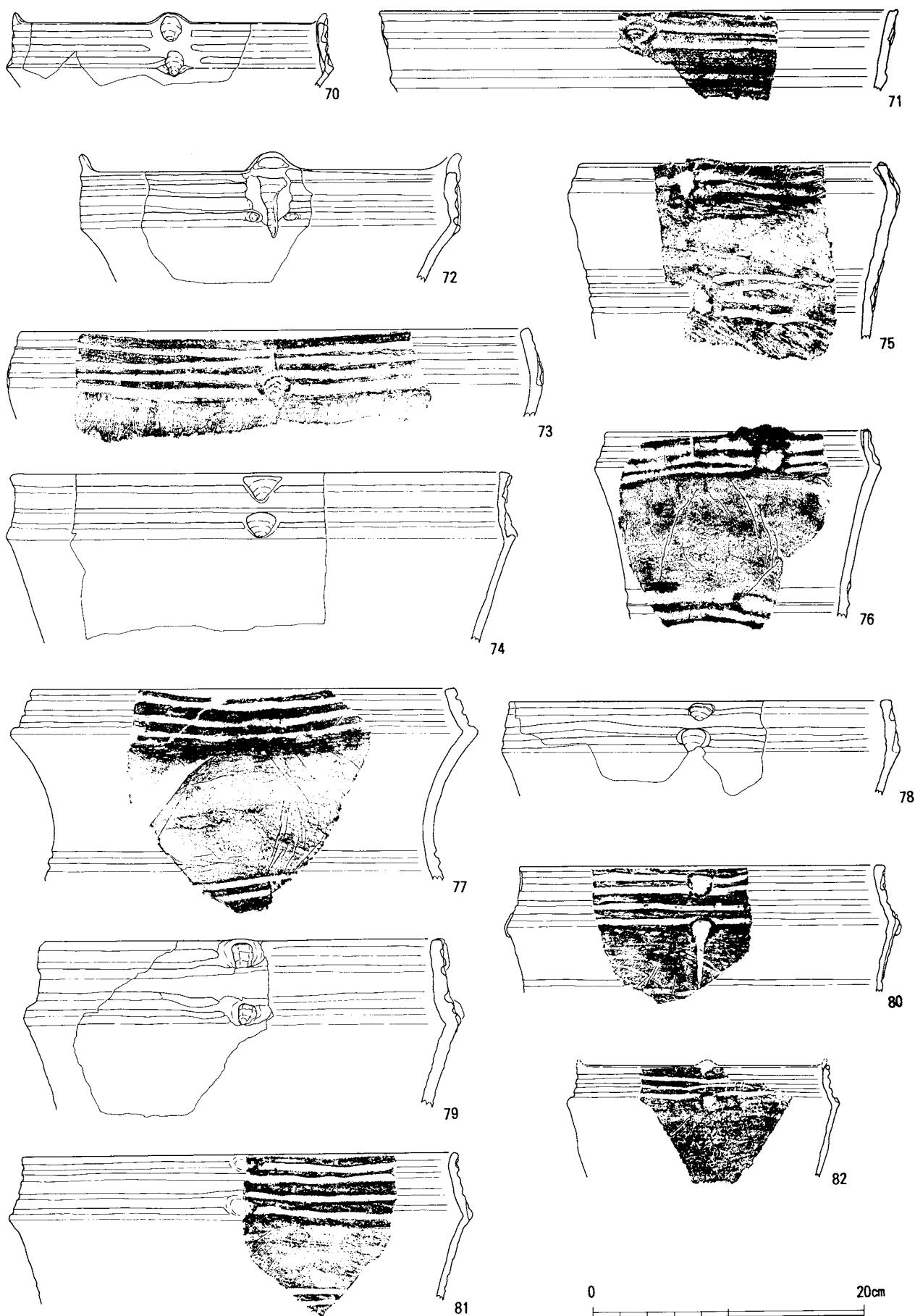
第22図 深鉢A類実測図 (1 : 4)



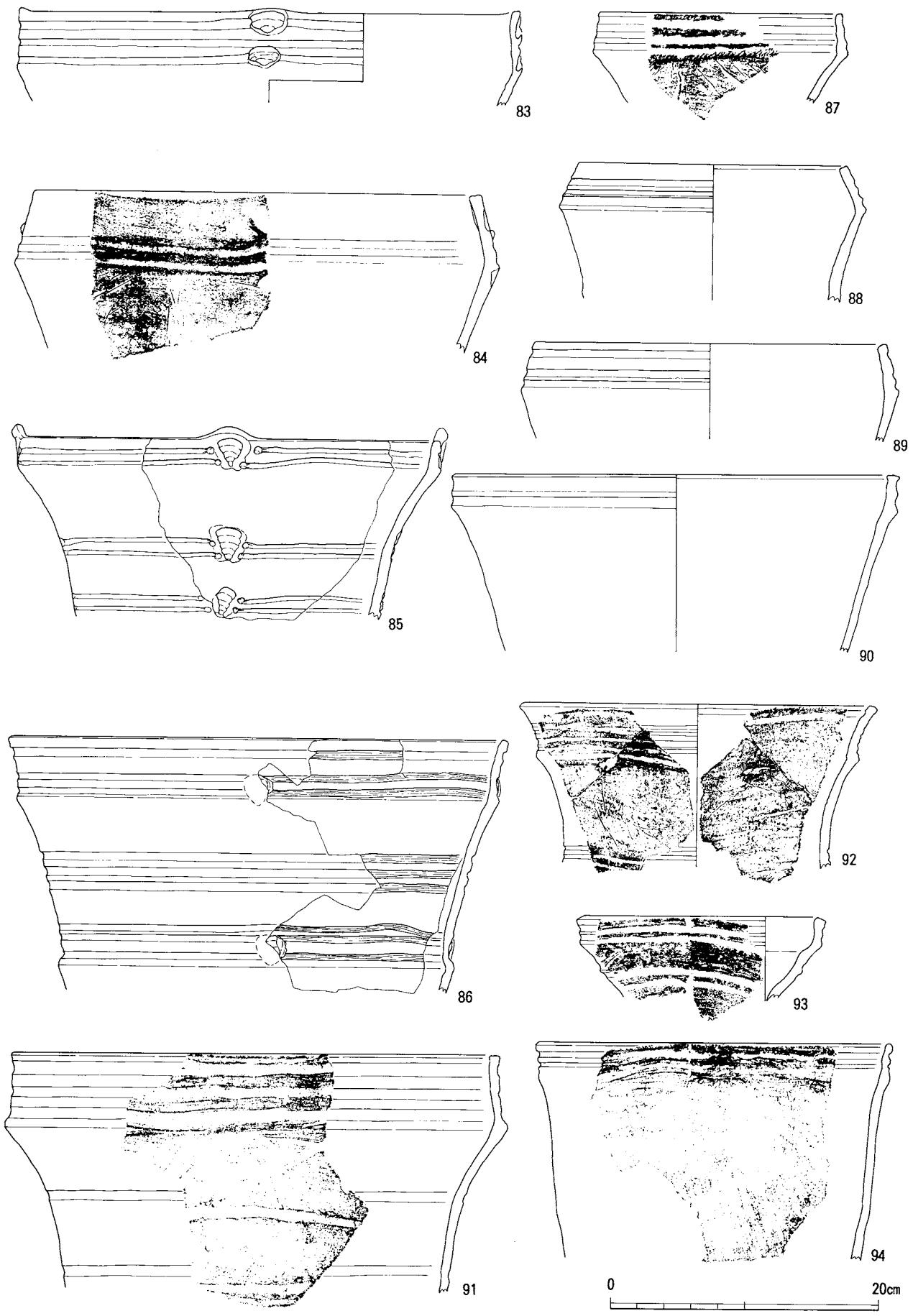
第23図 深鉢A類実測図 (1 : 4)



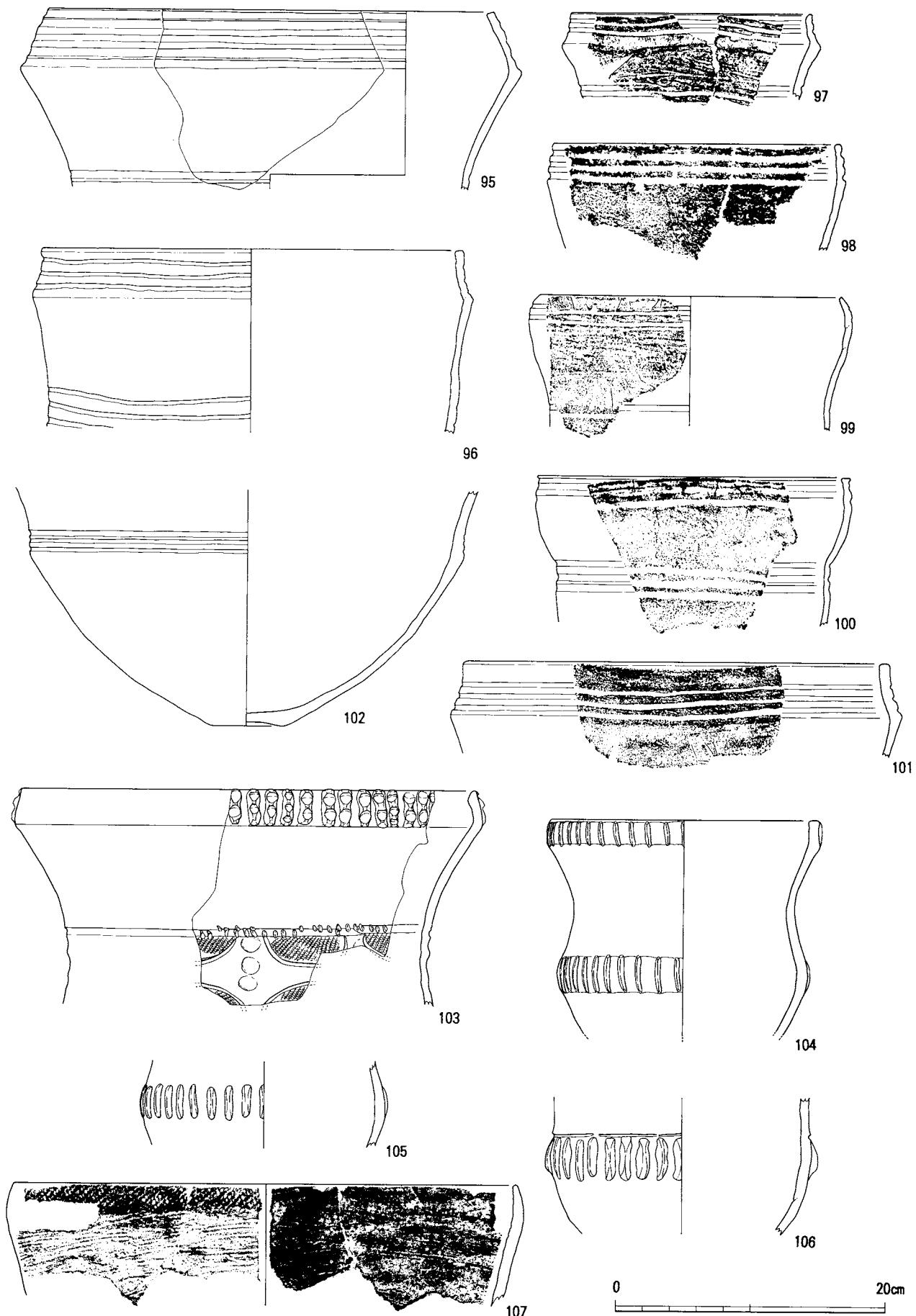
第24図 深鉢A類実測図 (1 : 4)



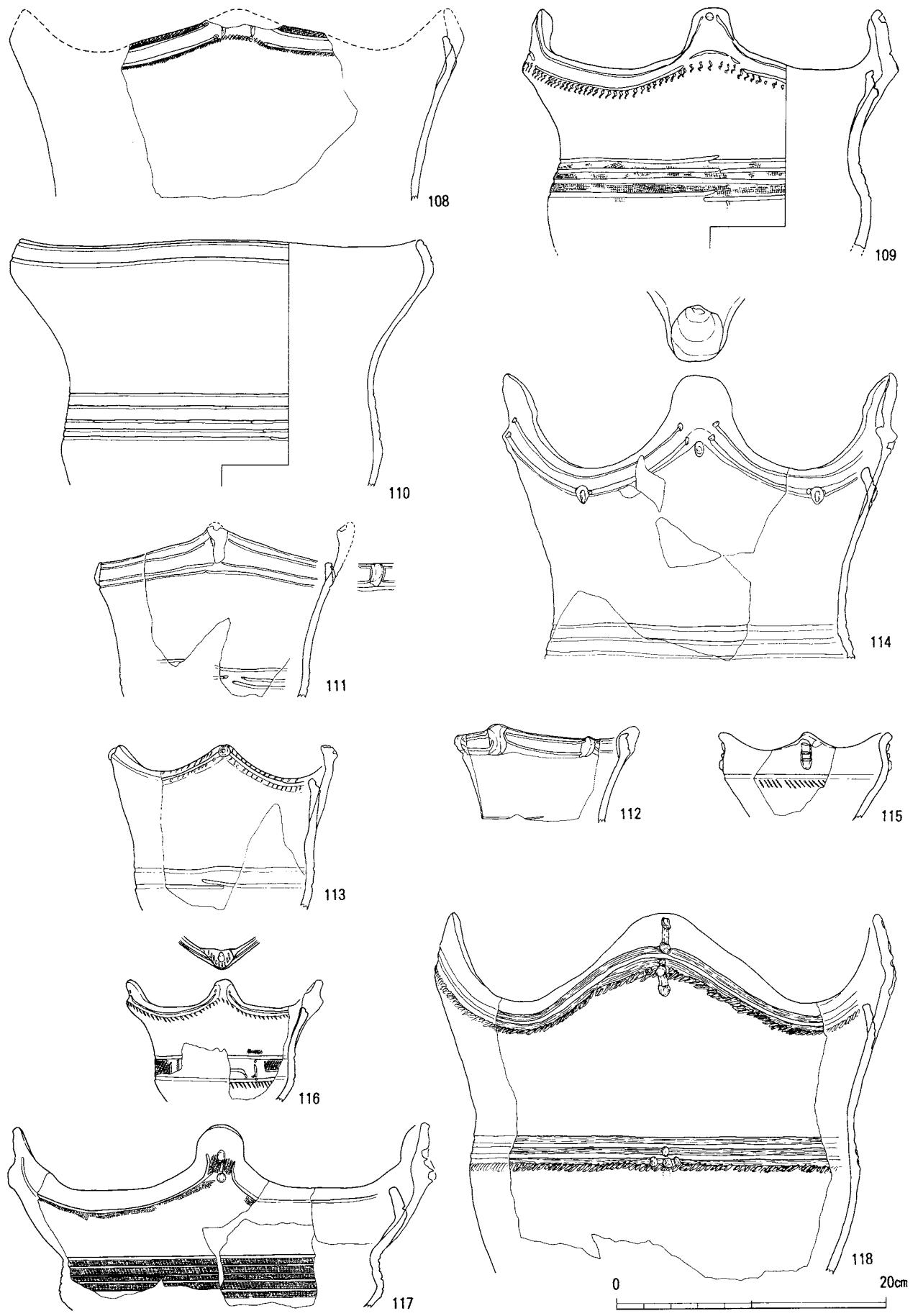
第25図 深鉢A類実測図 (1 : 4)



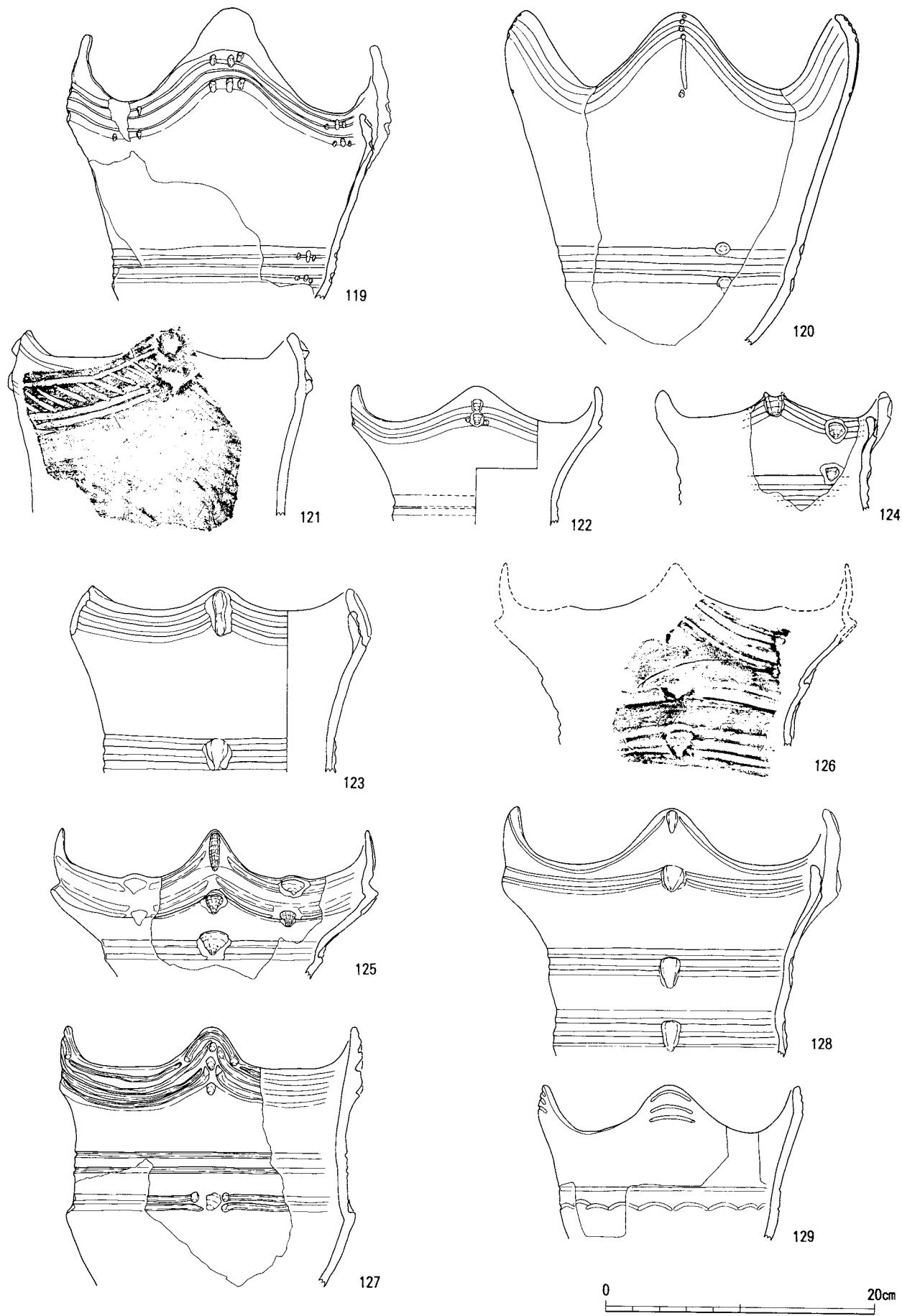
第26図 深鉢A類実測図 (1 : 4)



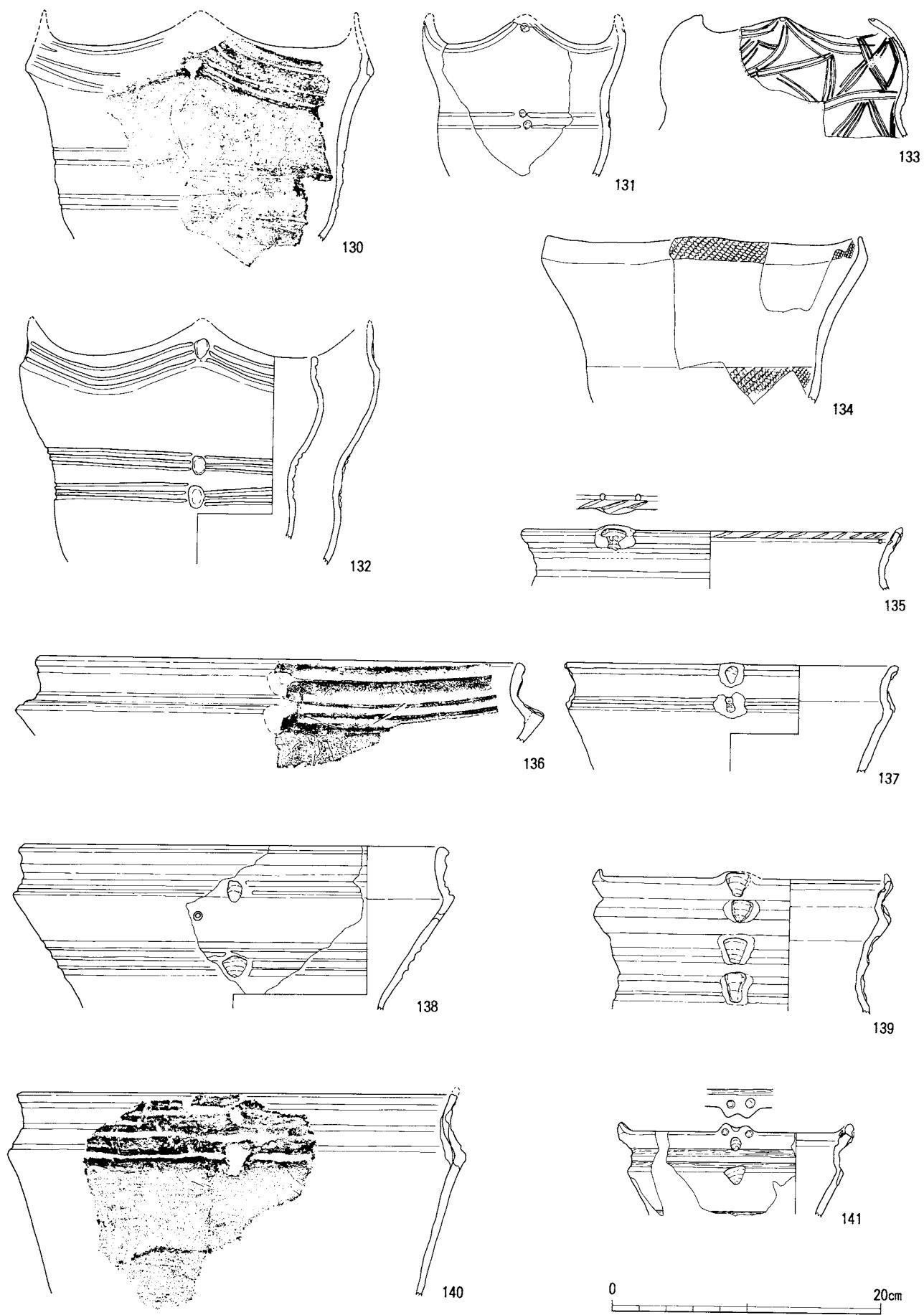
第27図 深鉢A類実測図 (1 : 4)



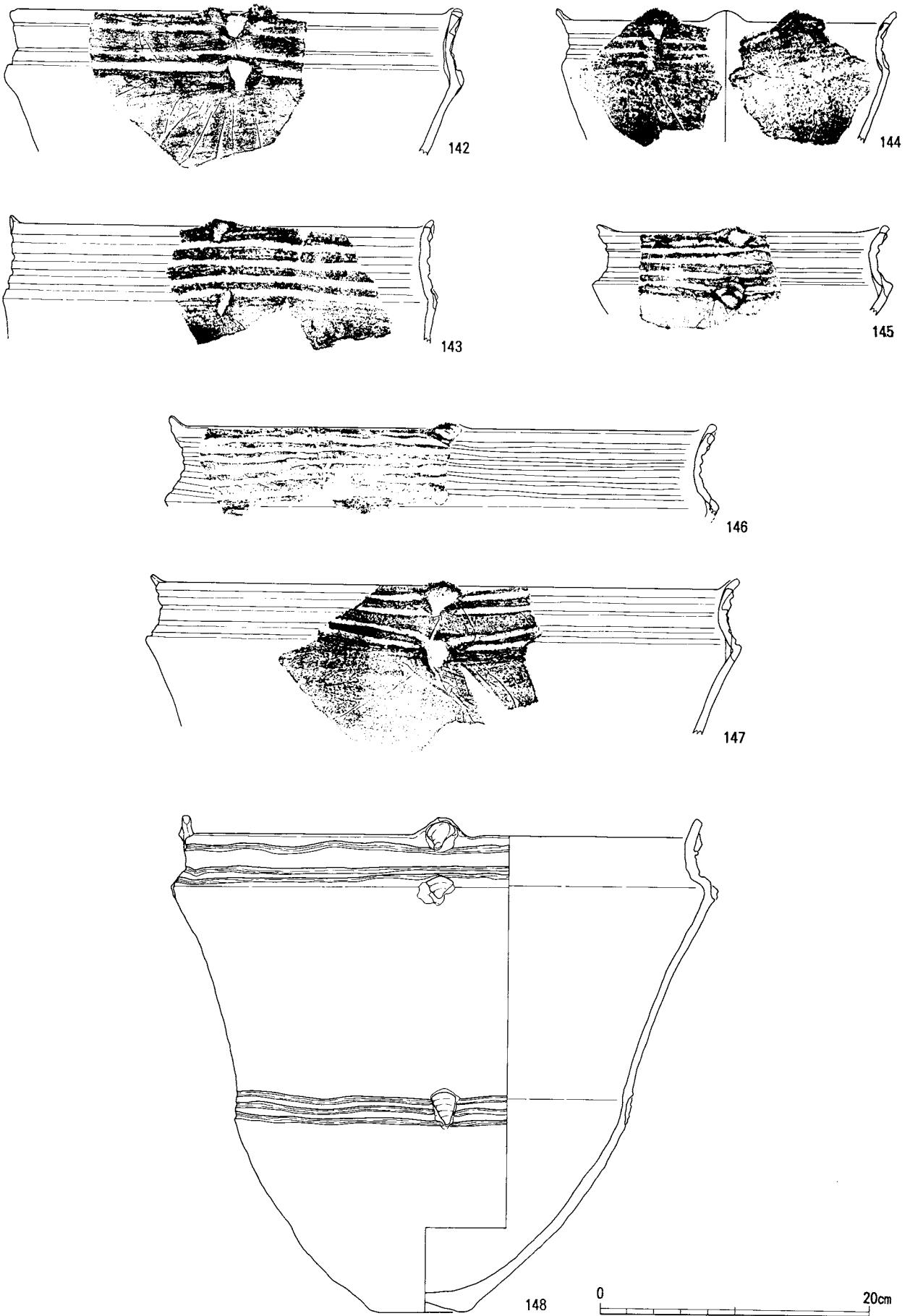
第28図 深鉢A類実測図 (1 : 4)



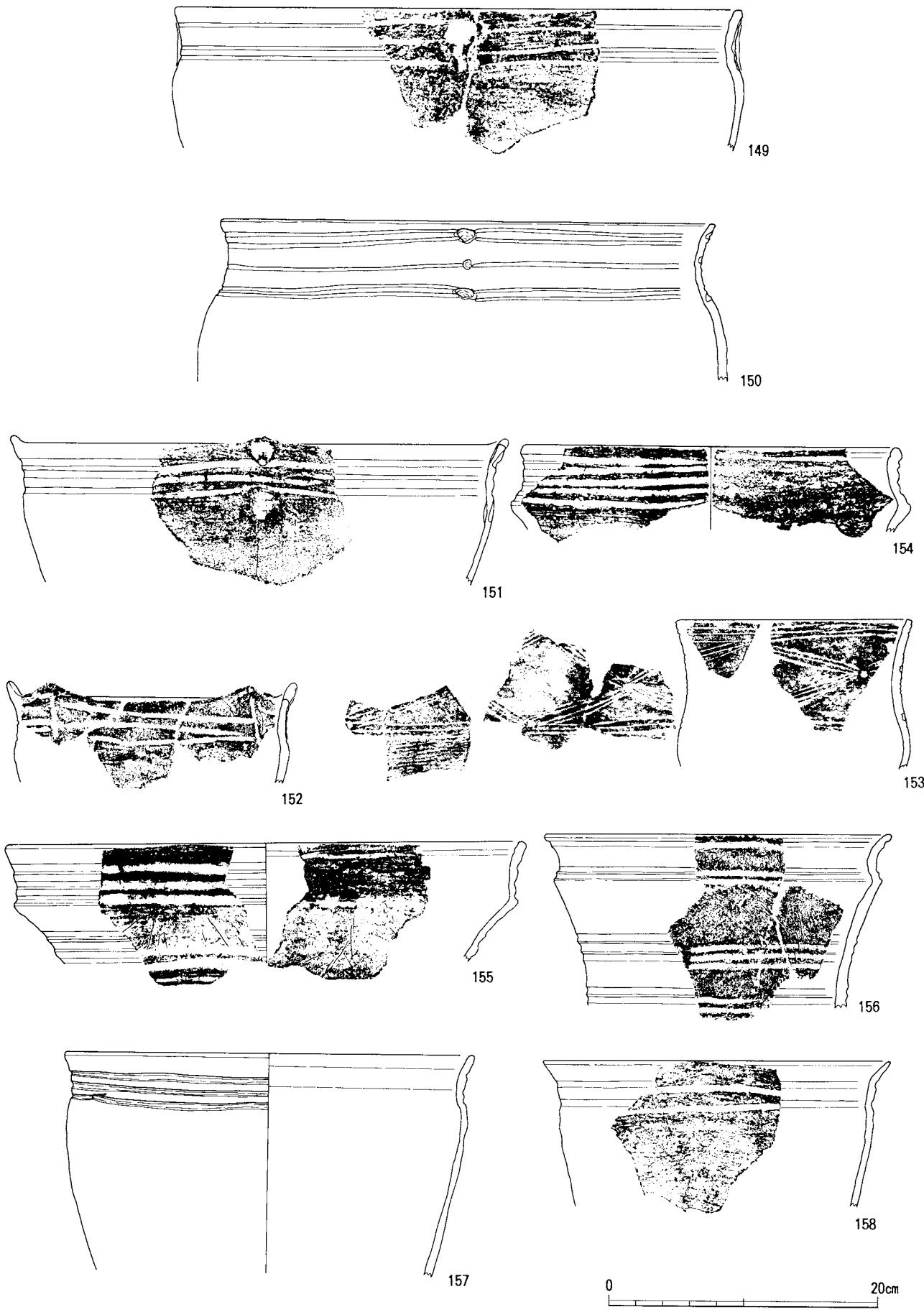
第29図 深鉢A類実測図 (1 : 4)



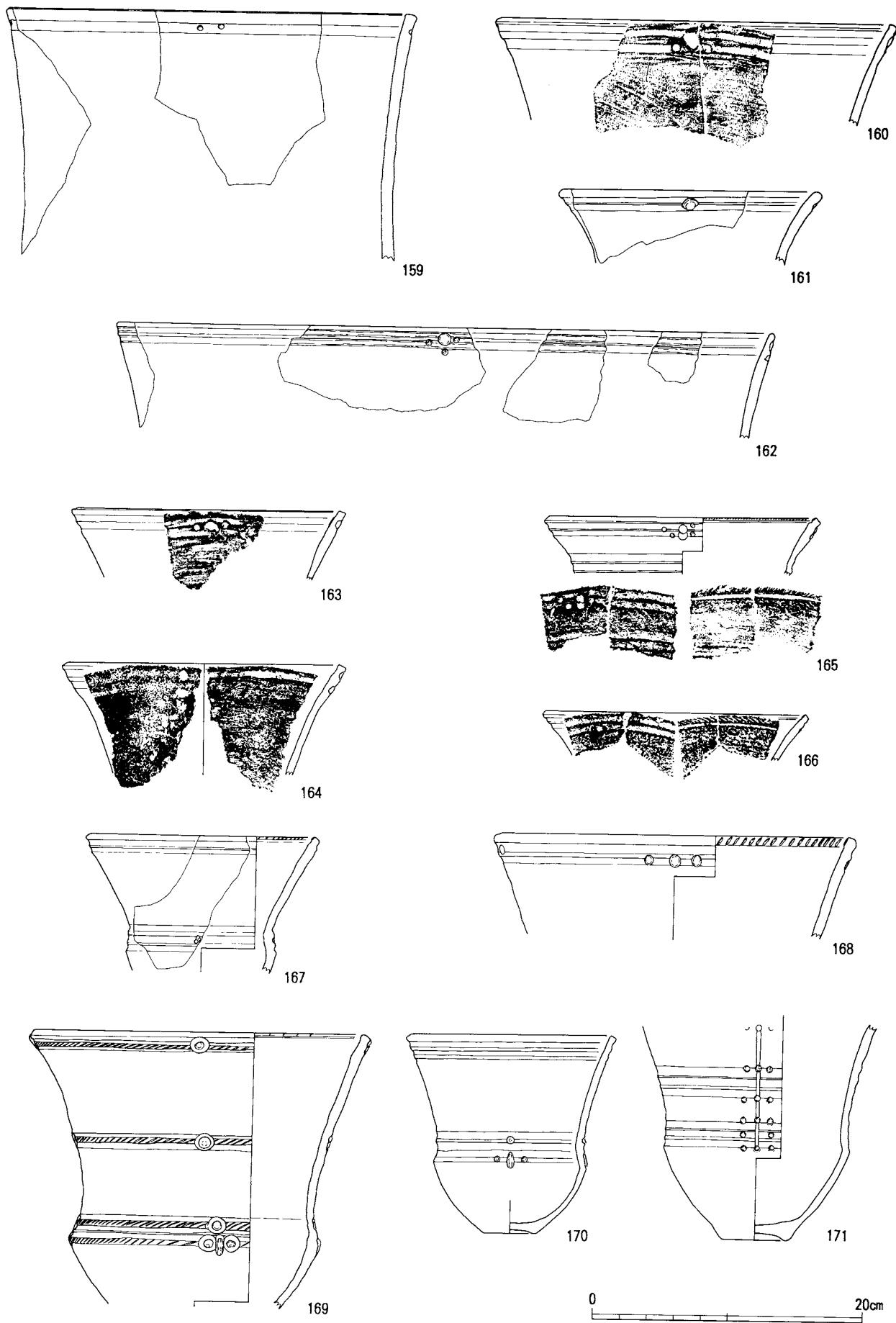
第30図 深鉢A・A'類実測図 (1:4)



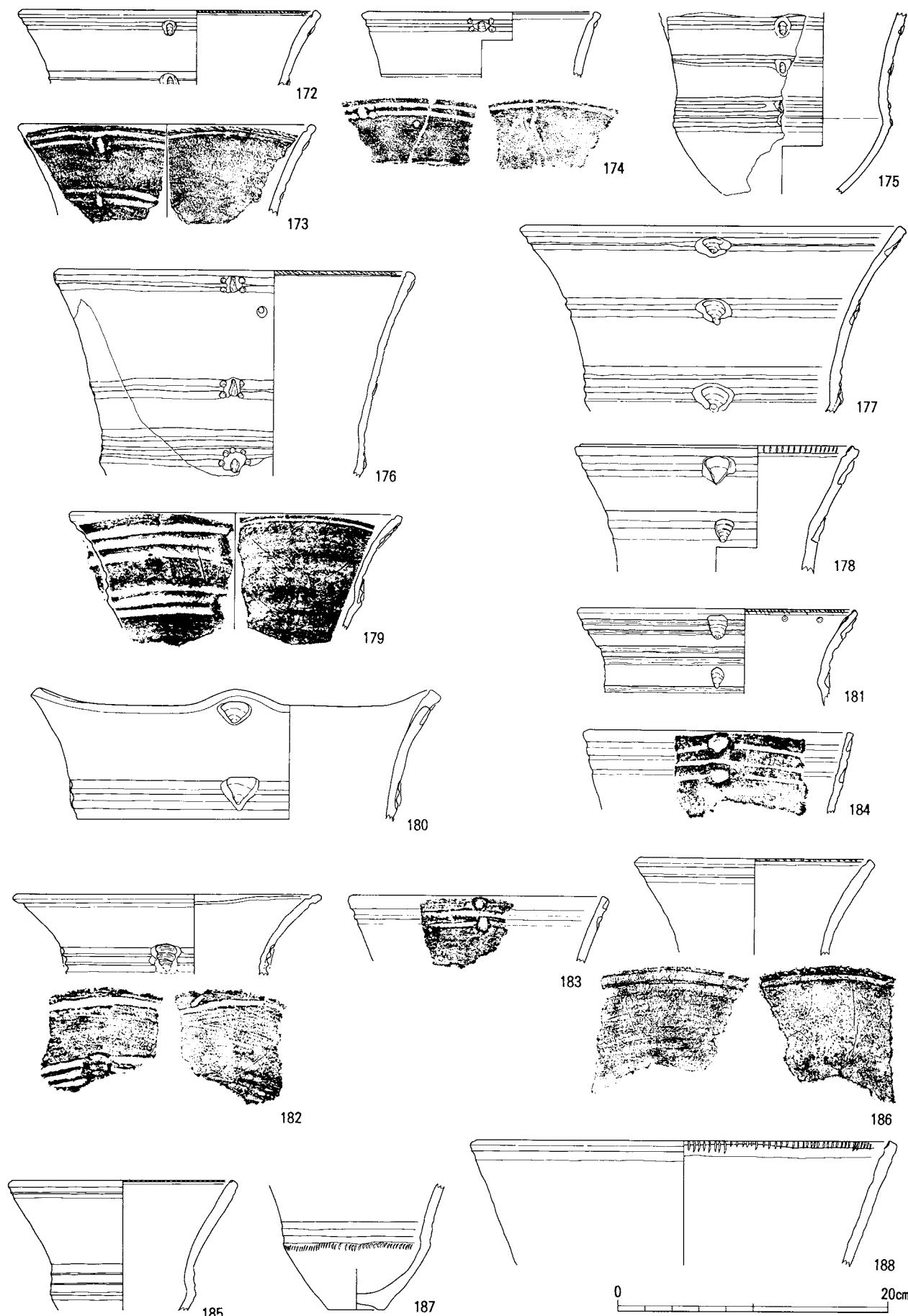
第31図 深鉢A'類実測図 (1 : 4)



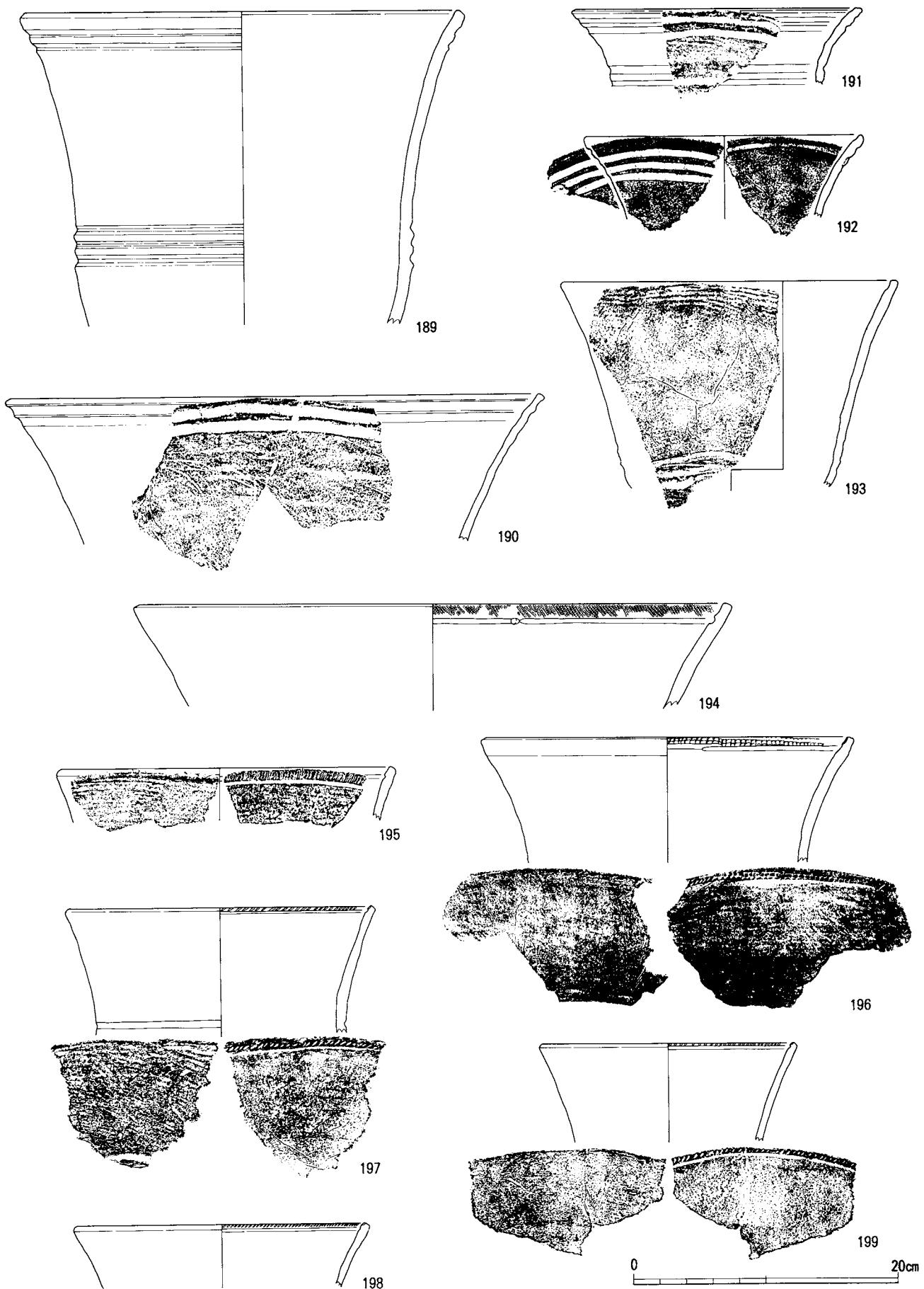
第32図 深鉢A'類実測図 (1 : 4)



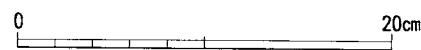
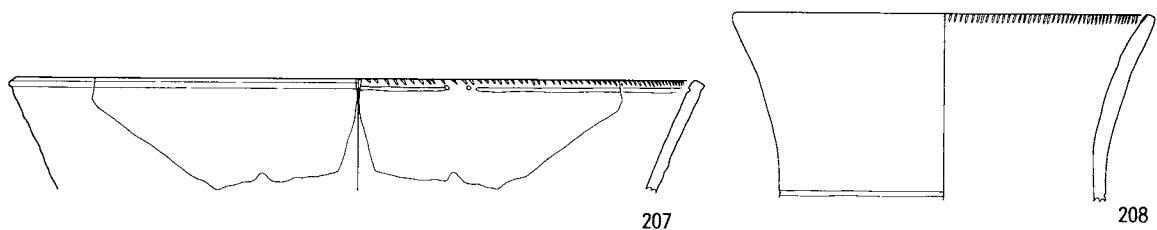
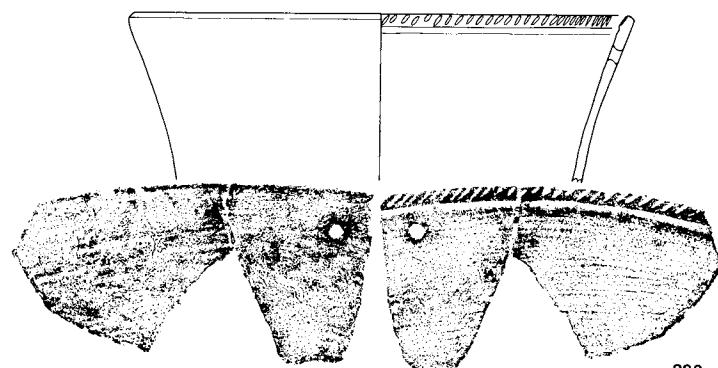
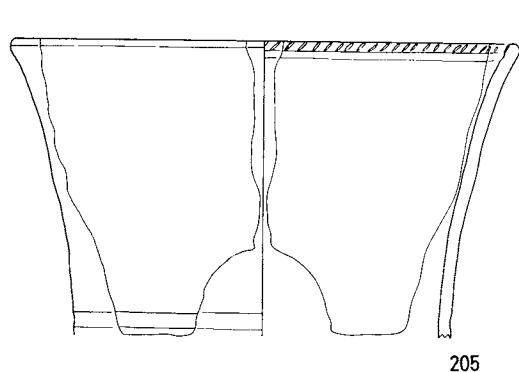
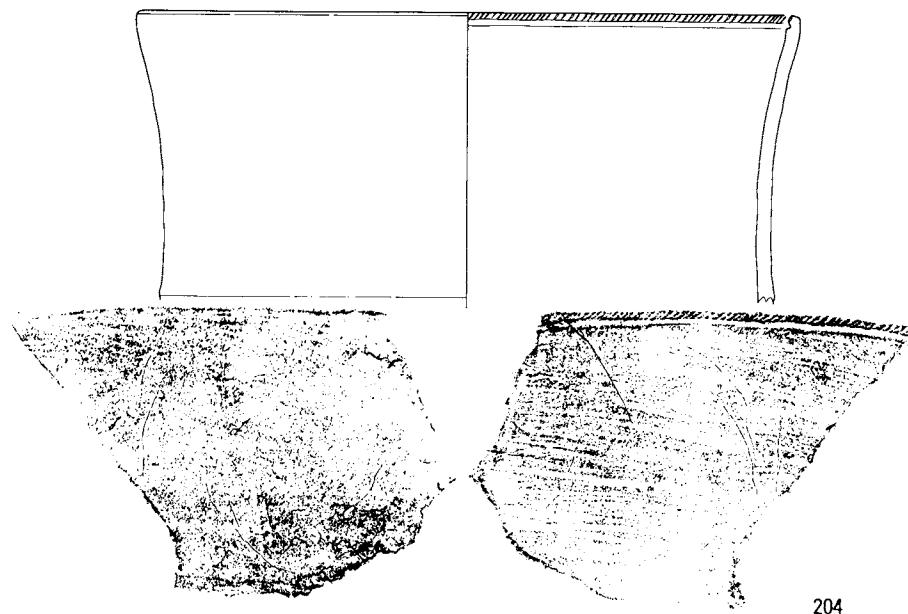
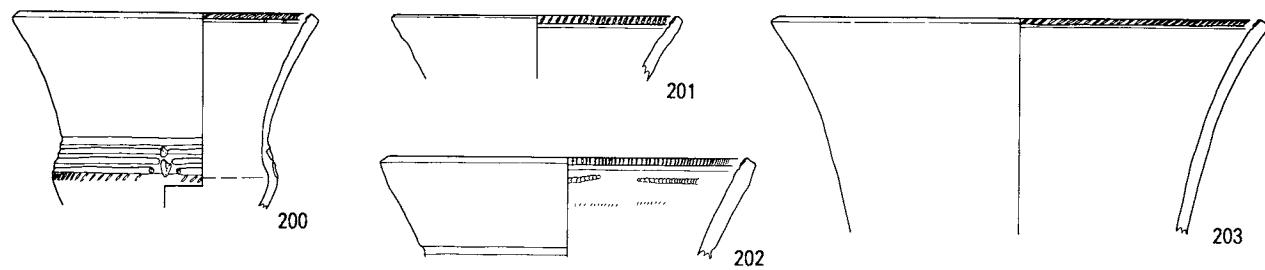
第33図 深鉢B類実測図 (1 : 4)



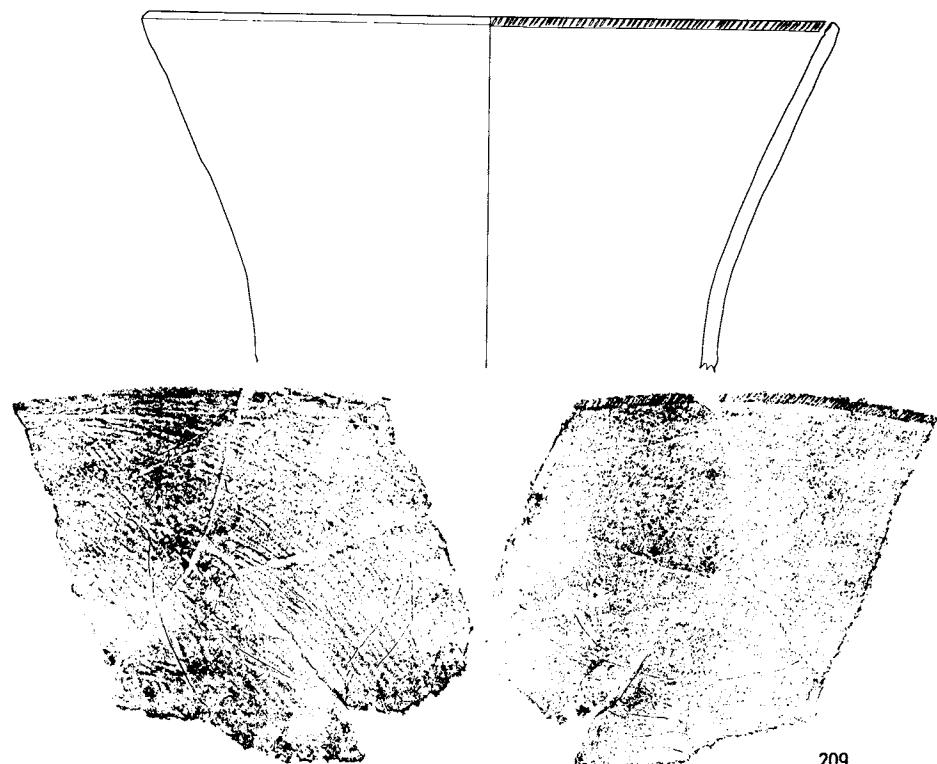
第34図 深鉢B類実測図 (1 : 4)



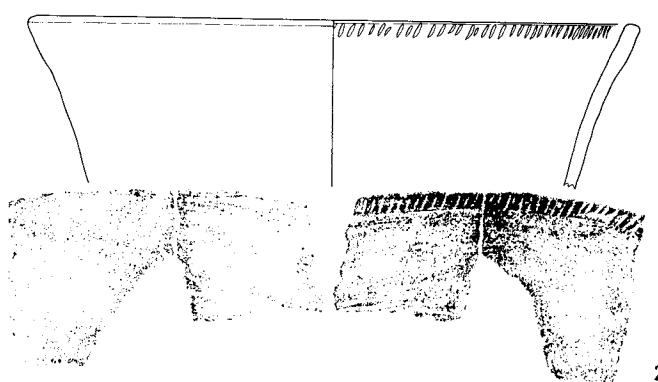
第35図 深鉢B類実測図 (1 : 4)



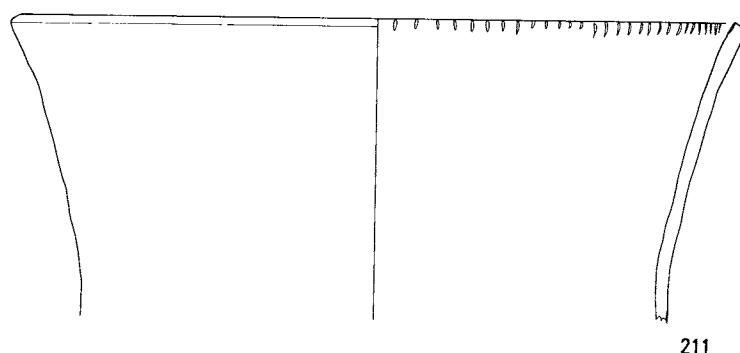
第36図 深鉢B類実測図 (1 : 4)



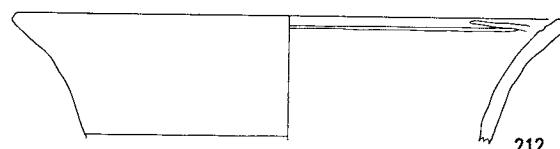
209



210



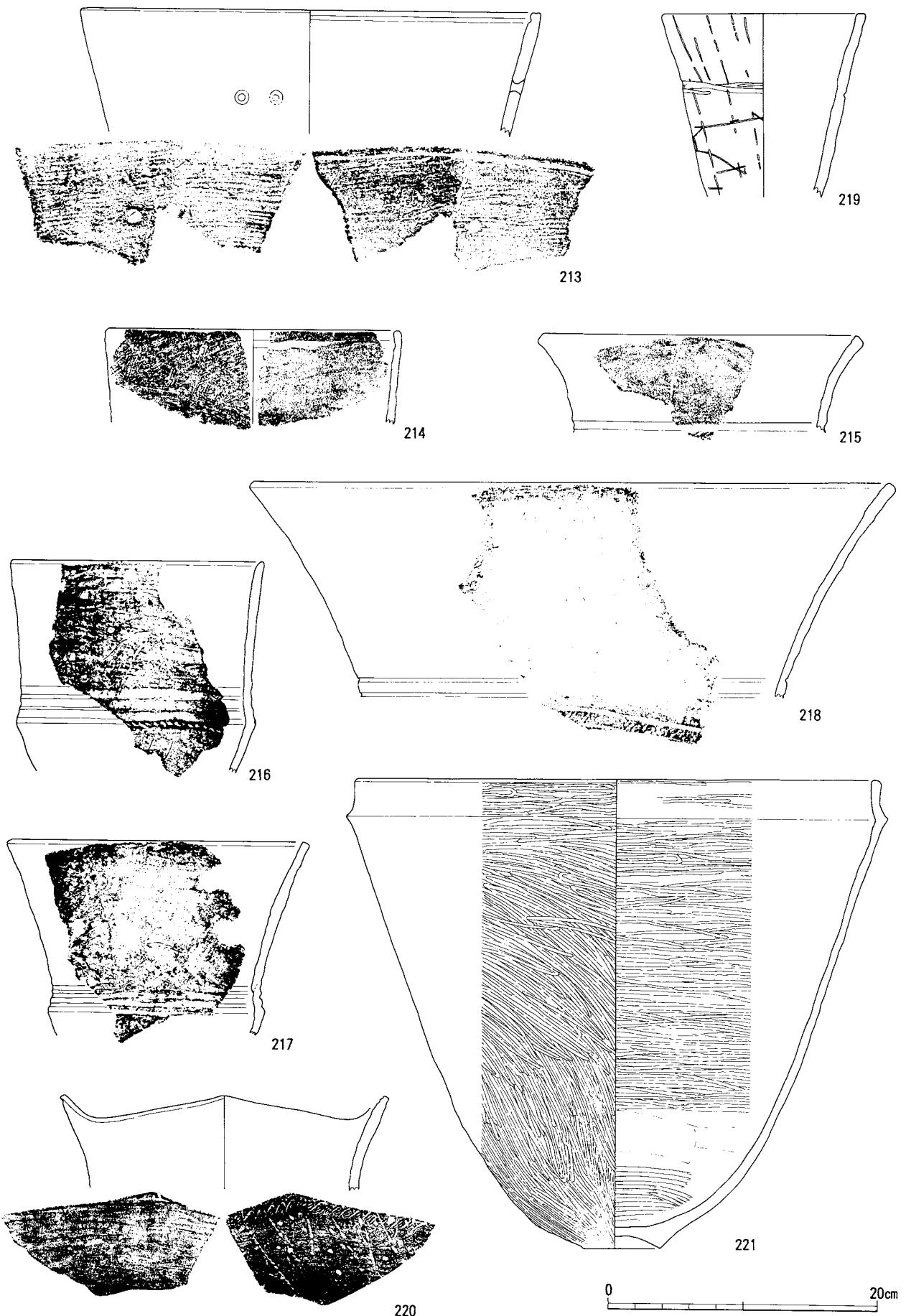
211



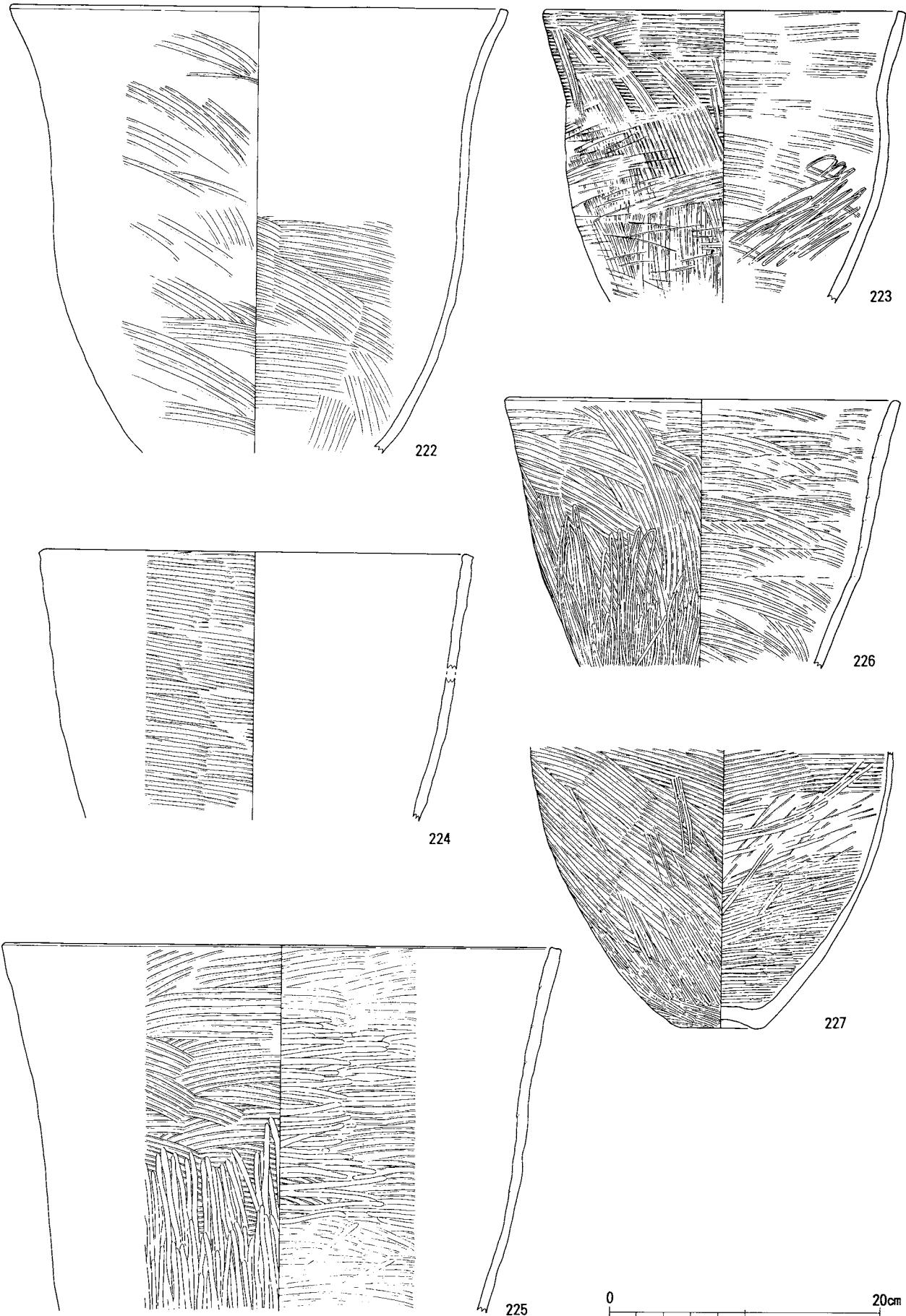
212

0 20cm

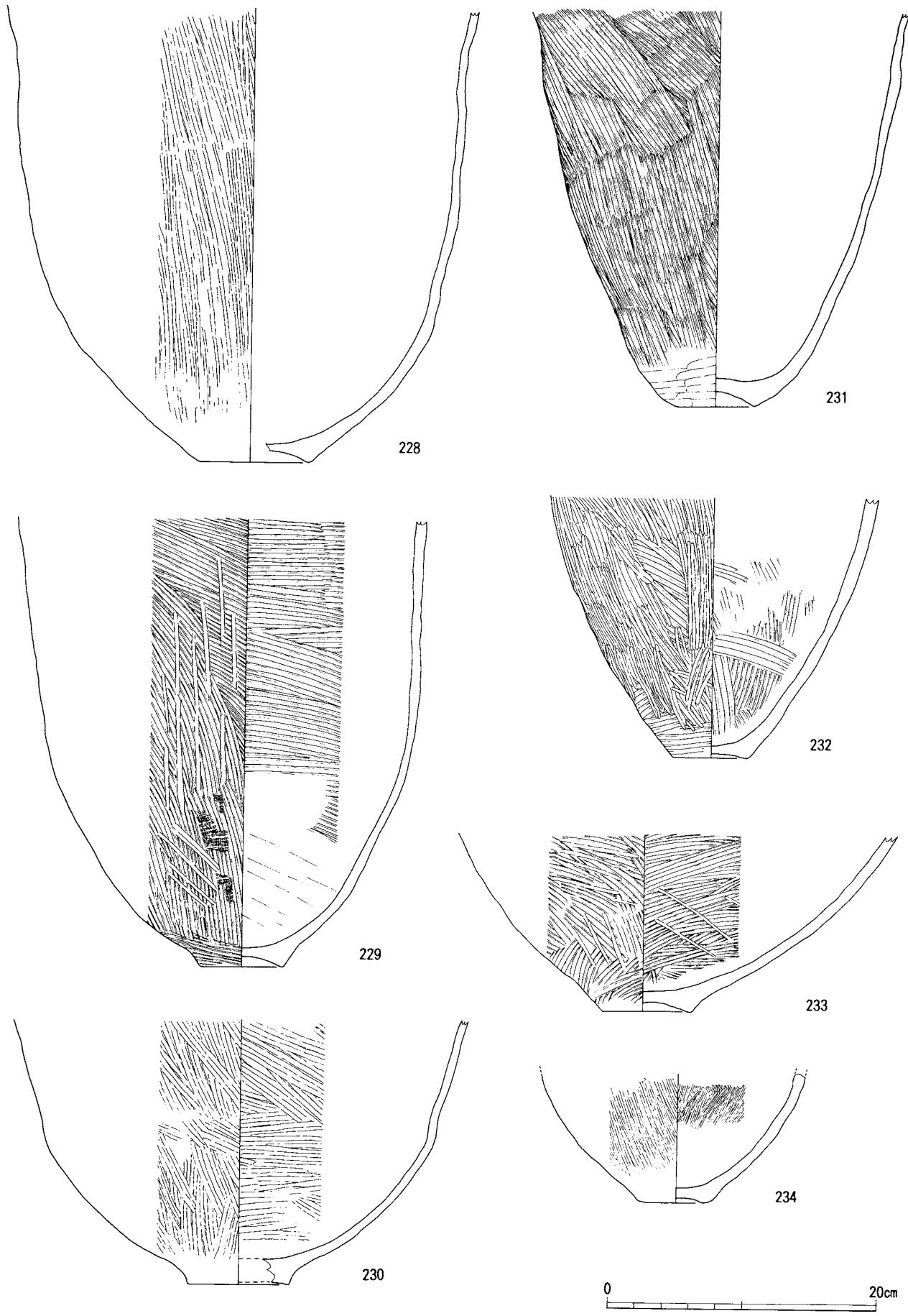
第37図 深鉢B類実測図 (1 : 4)



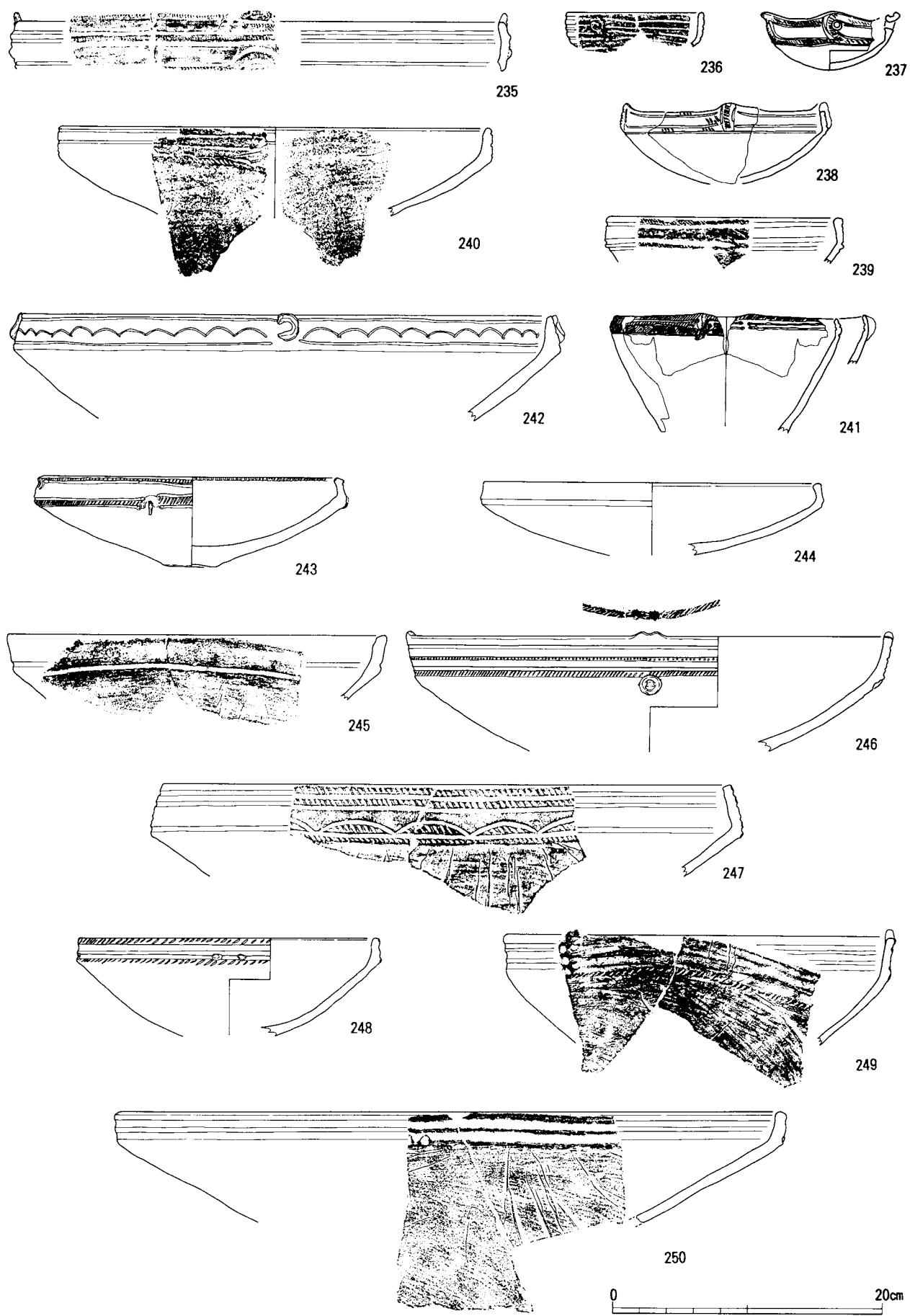
第38図 深鉢B類、無文深鉢実測図（1：4）



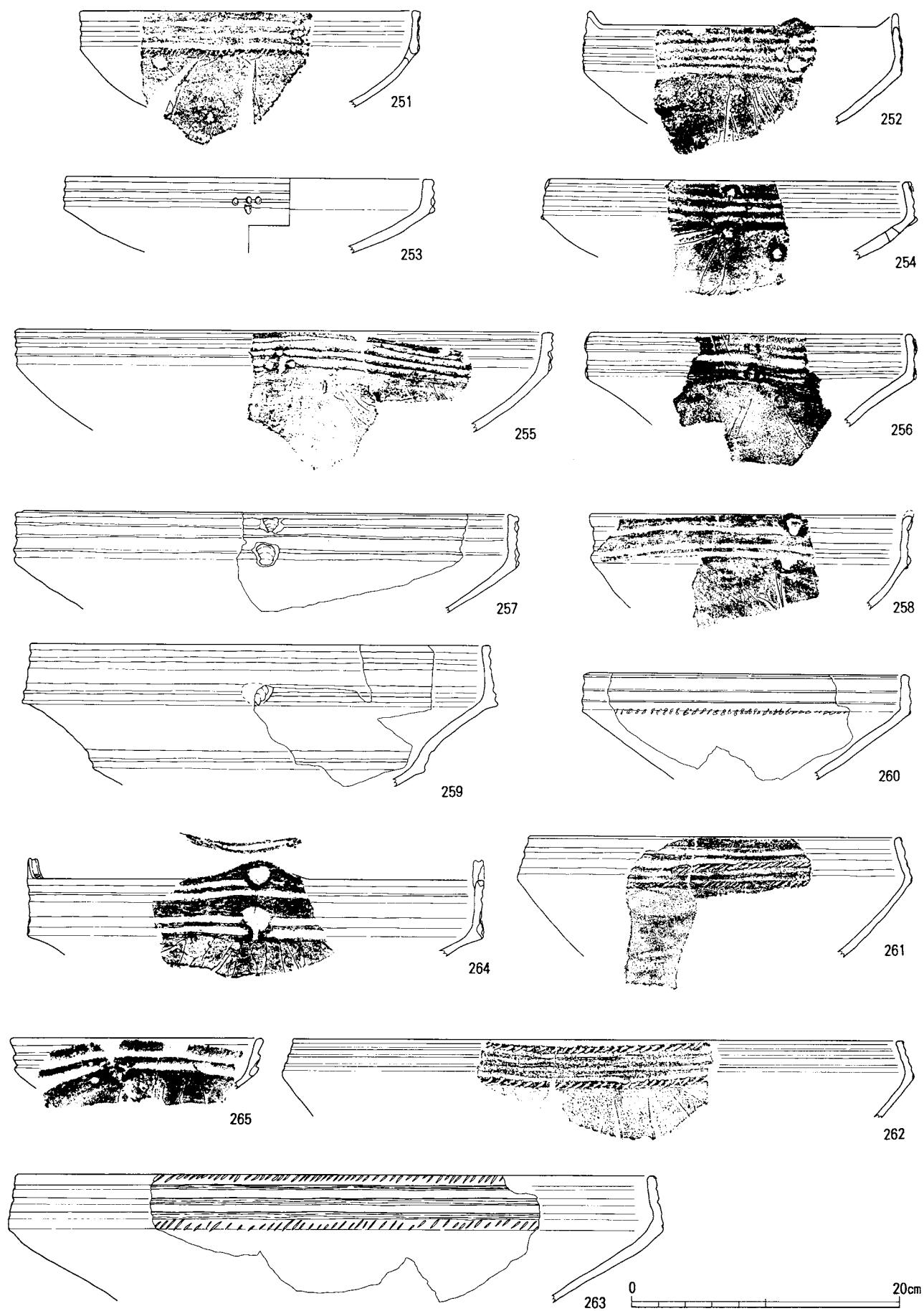
第39図 無文深鉢実測図 (1 : 4)



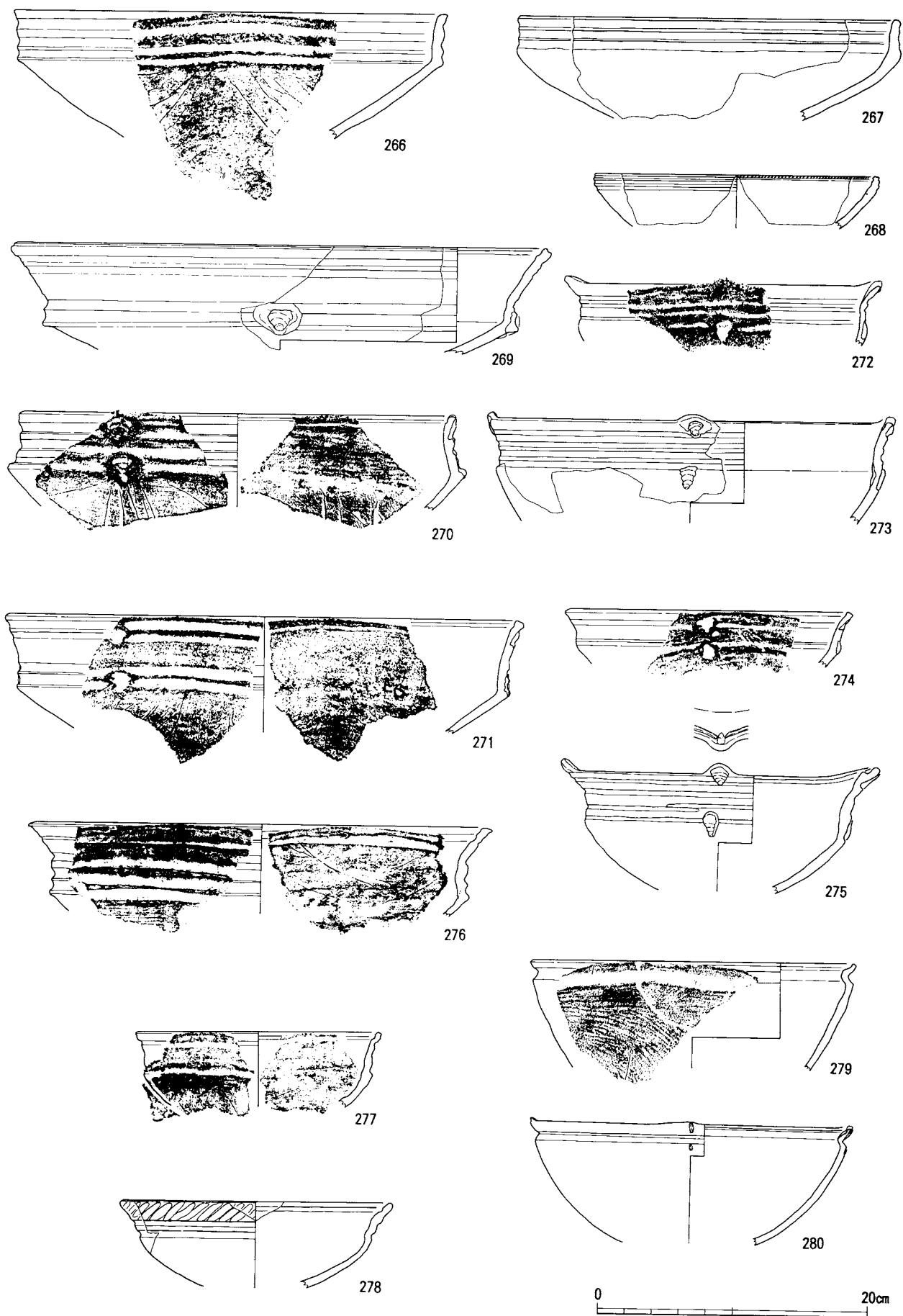
第40図 無文深鉢実測図 (1 : 4)



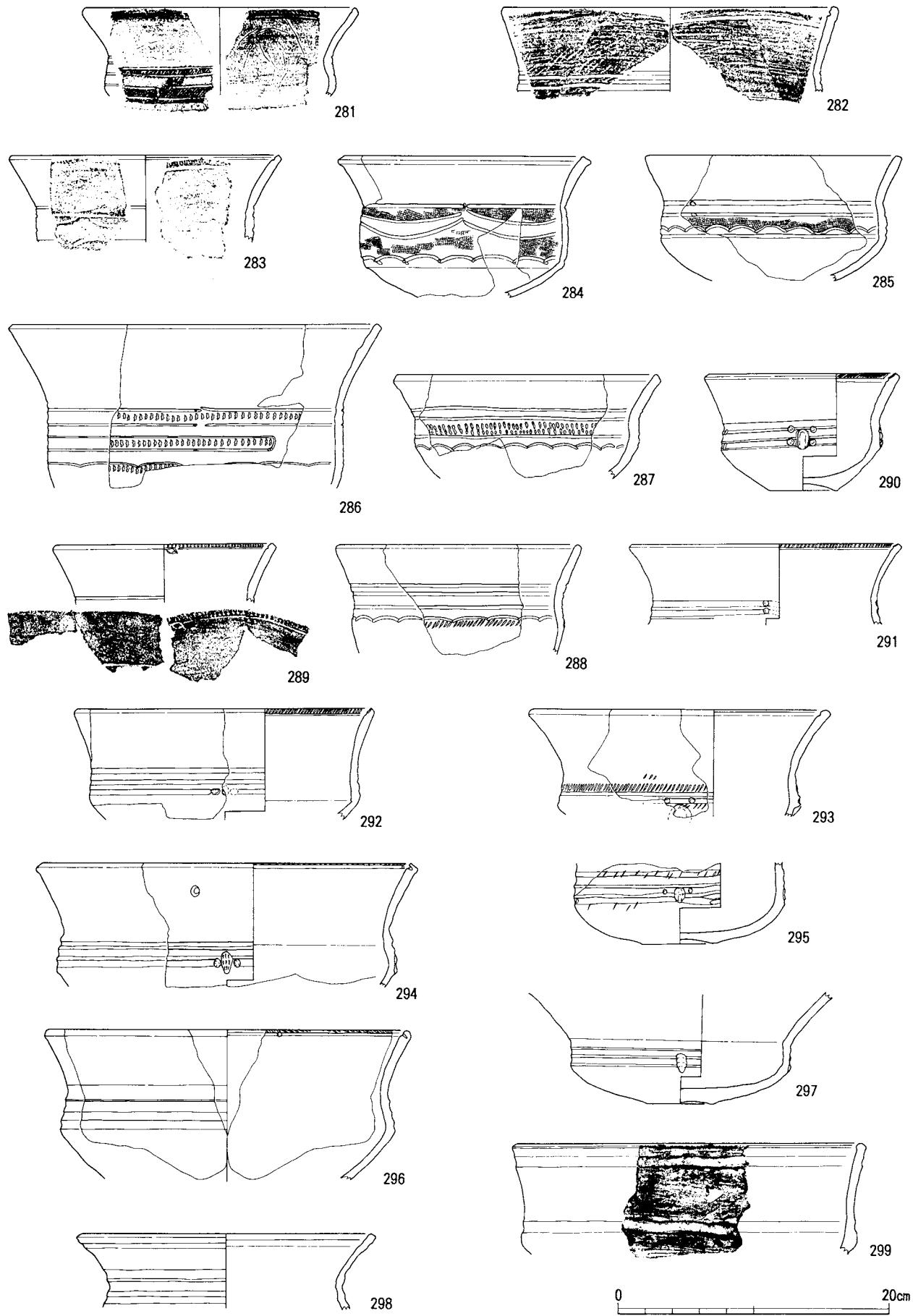
第41図 鉢A類実測図 (1 : 4)



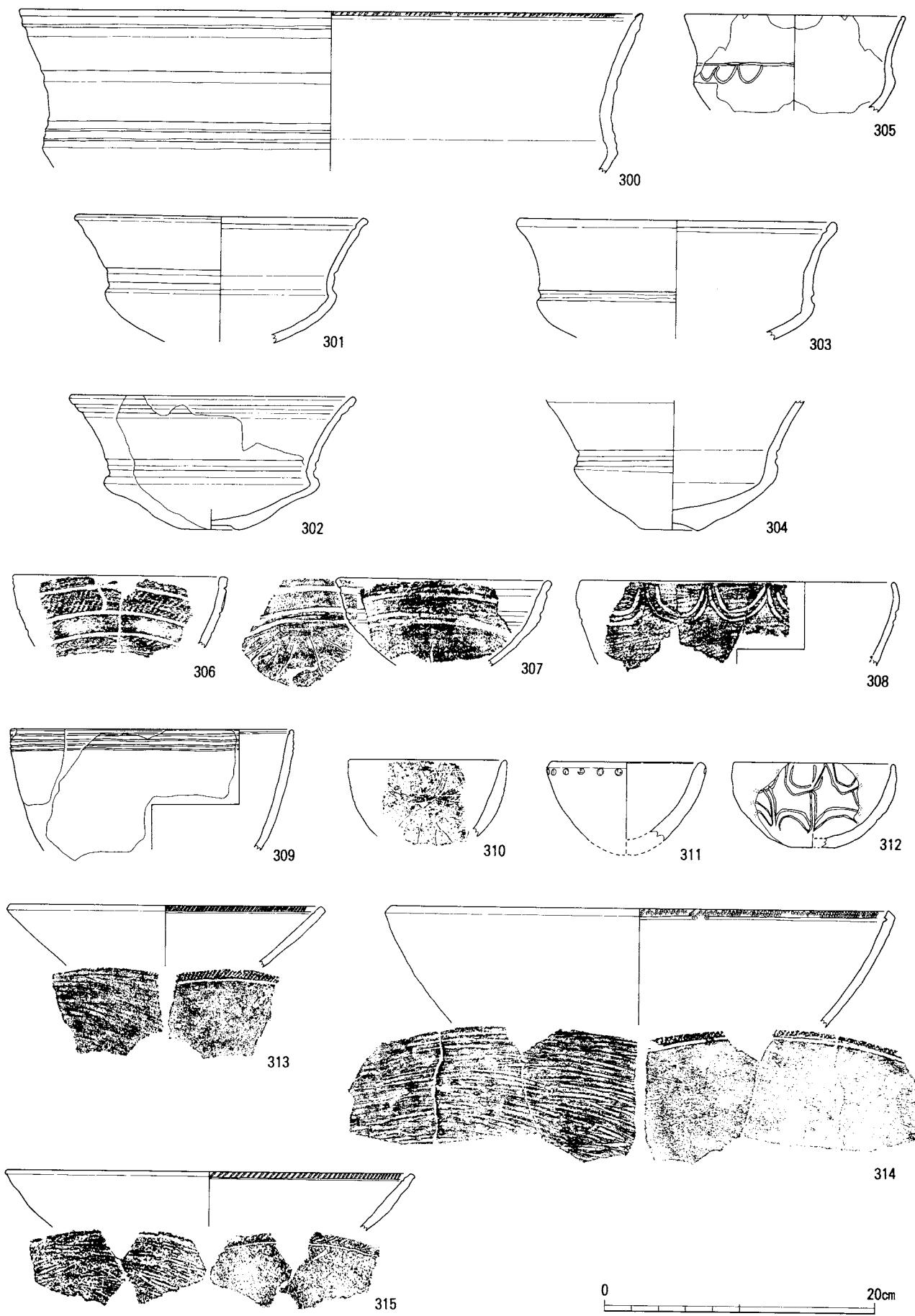
第42図 鉢A類実測図 (1 : 4)



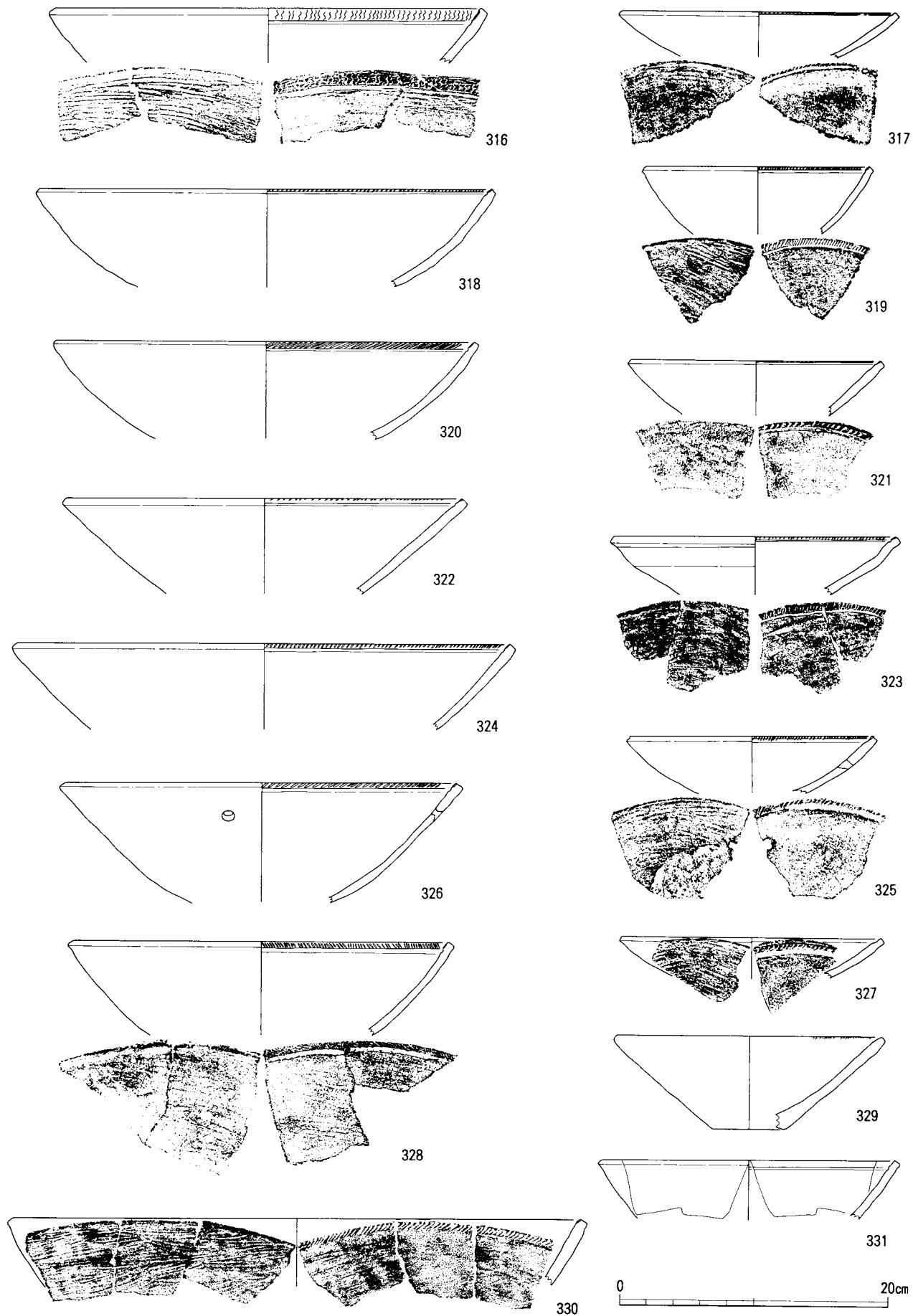
第43図 鉢A・A'・A''類実測図 (1 : 4)



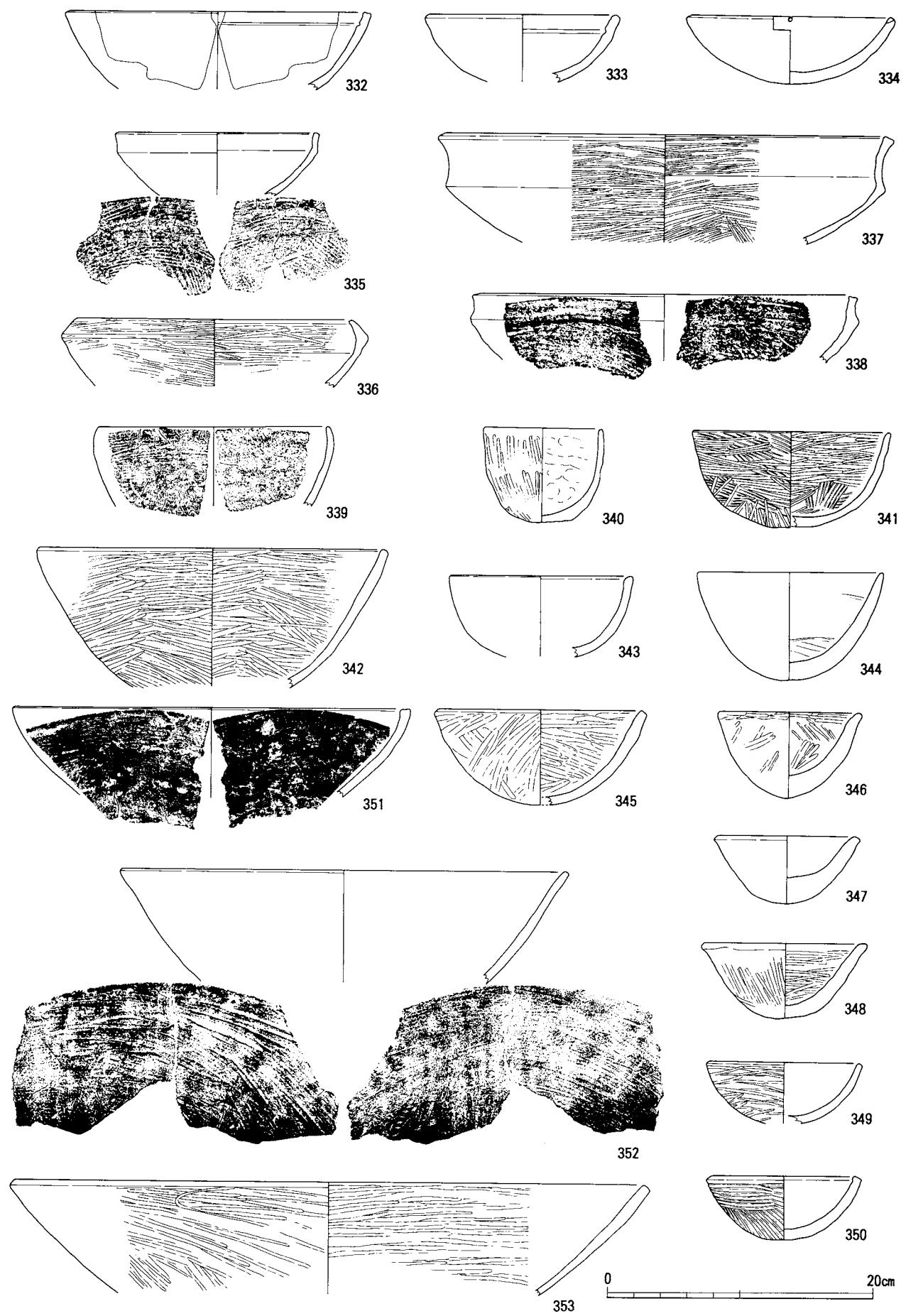
第44図 鉢B類実測図 (1 : 4)



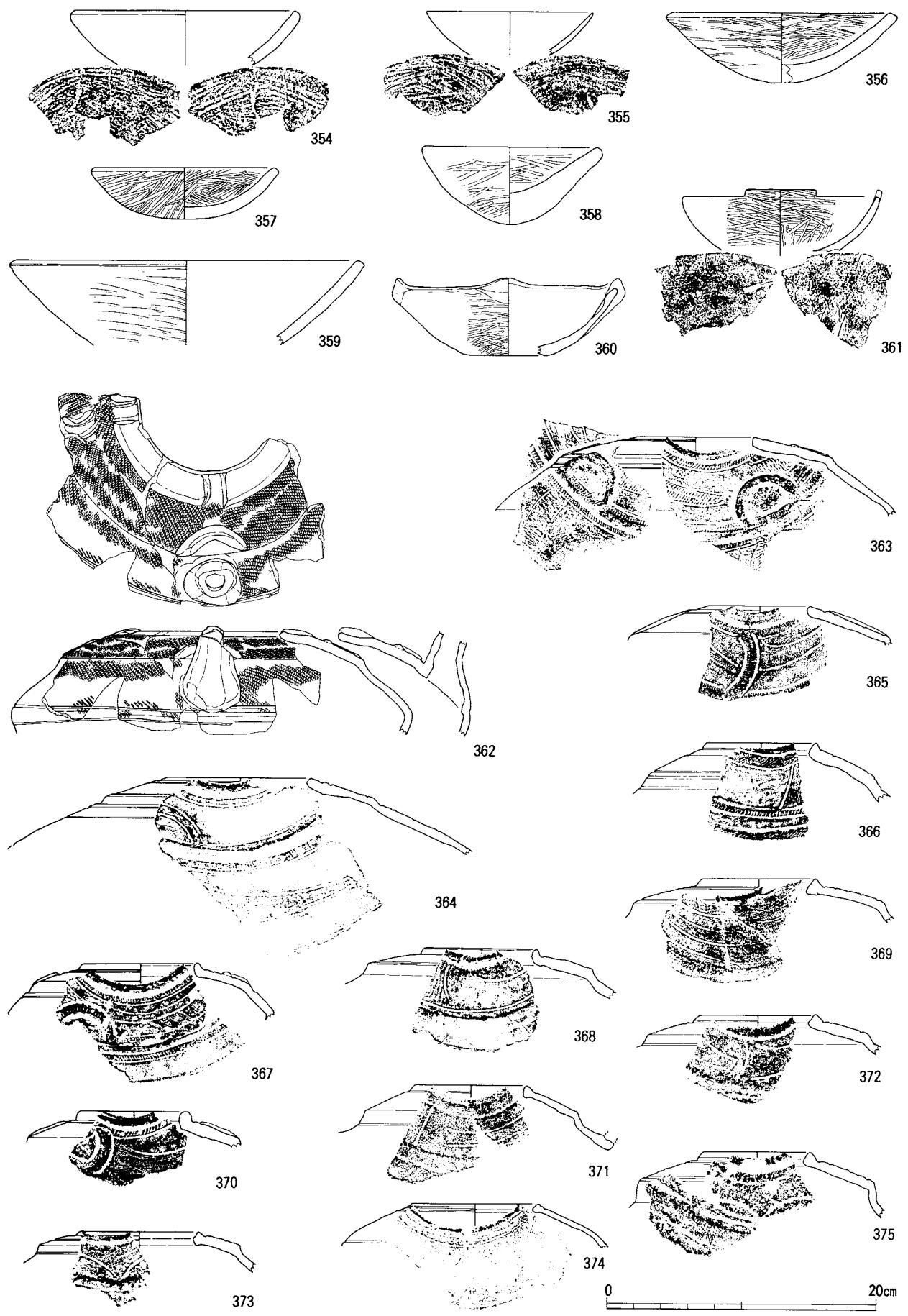
第45図 鉢B・C・D類実測図 (1 : 4)



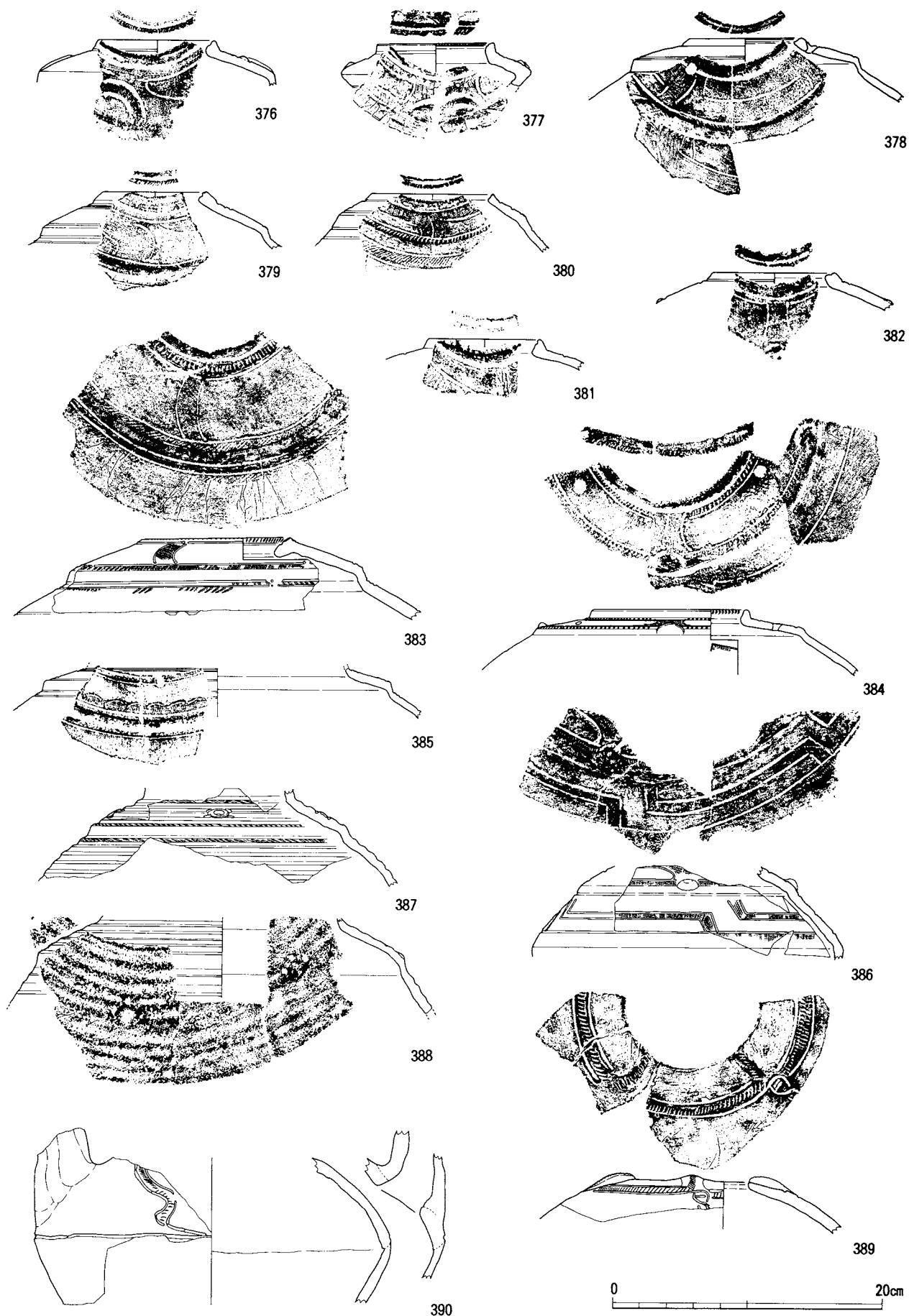
第46図 鉢D類実測図 (1 : 4)



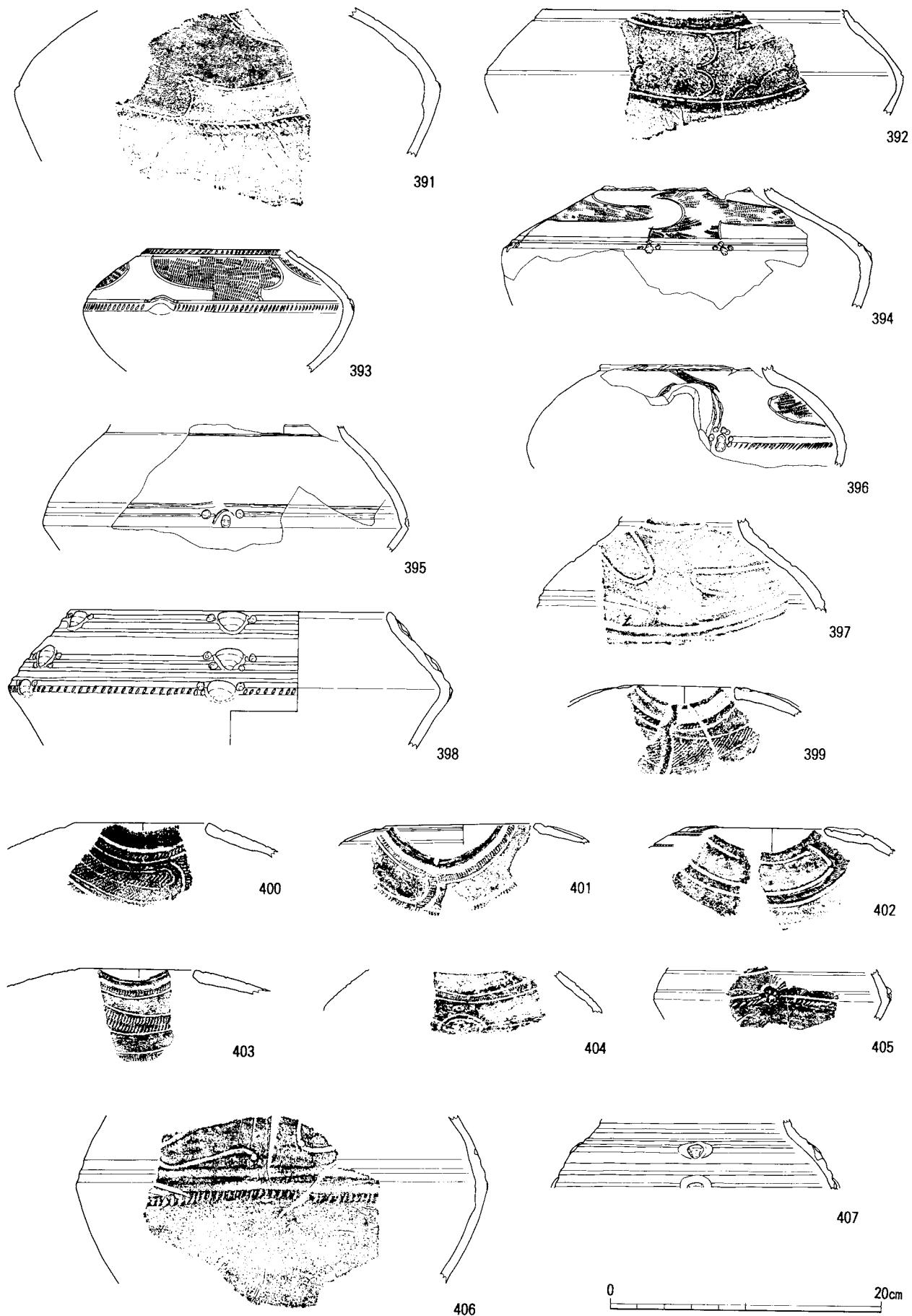
第47図 鉢D類・無文鉢実測図 (1 : 4)



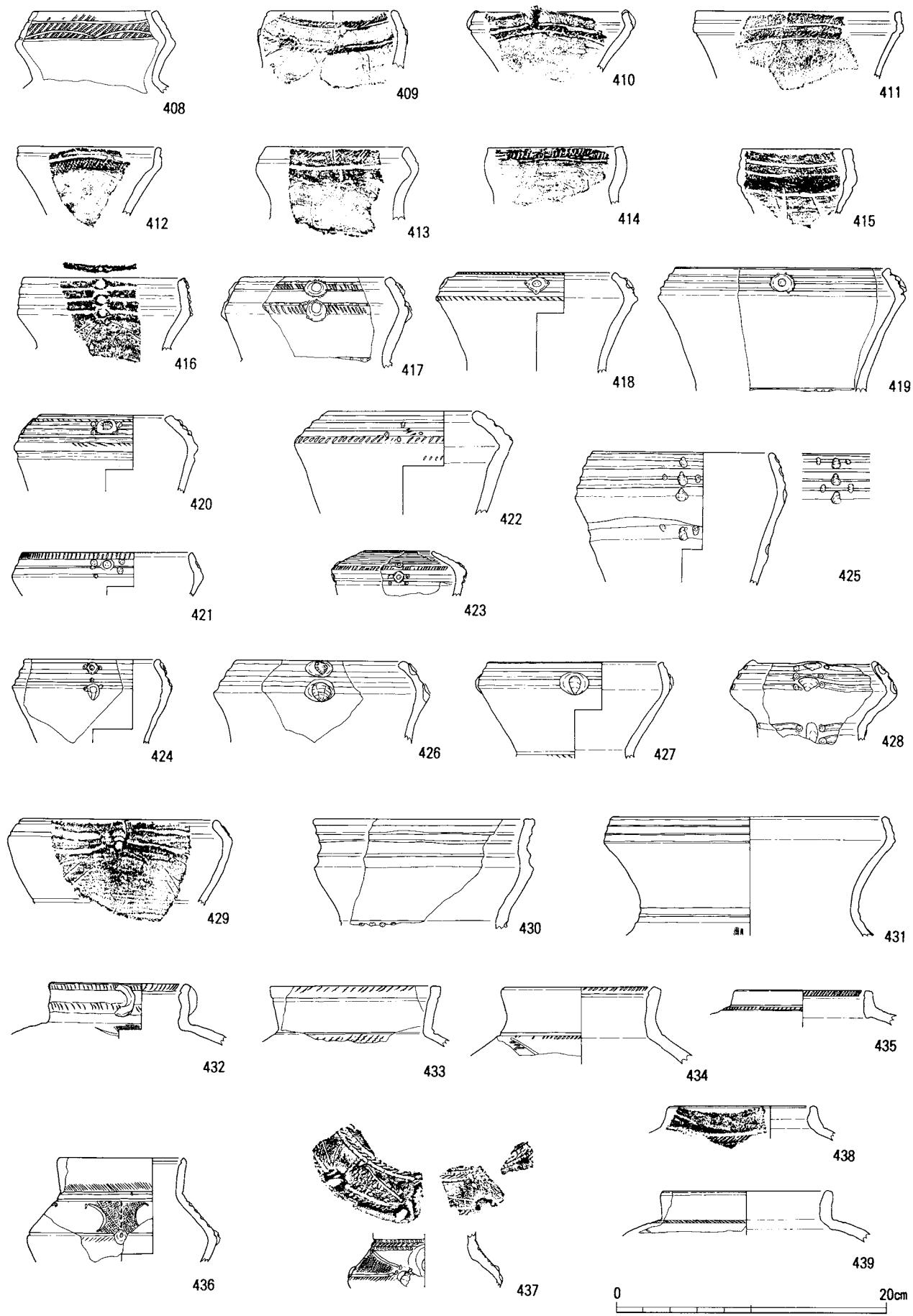
第48図 無文鉢、壺ないしは注口土器A類実測図（1：4）



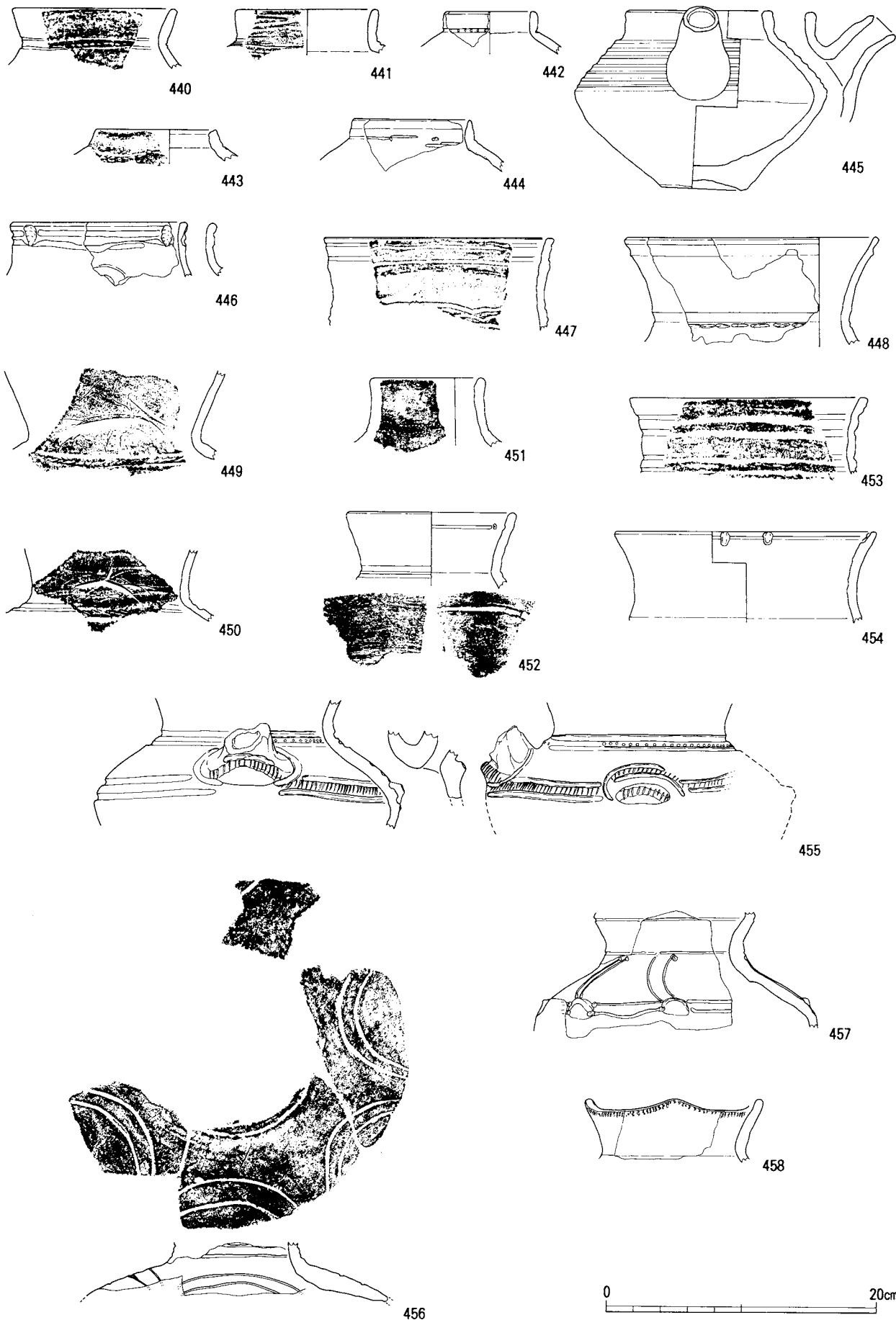
第49図 壺ないしは注口土器A・A'類実測図 (1 : 4)



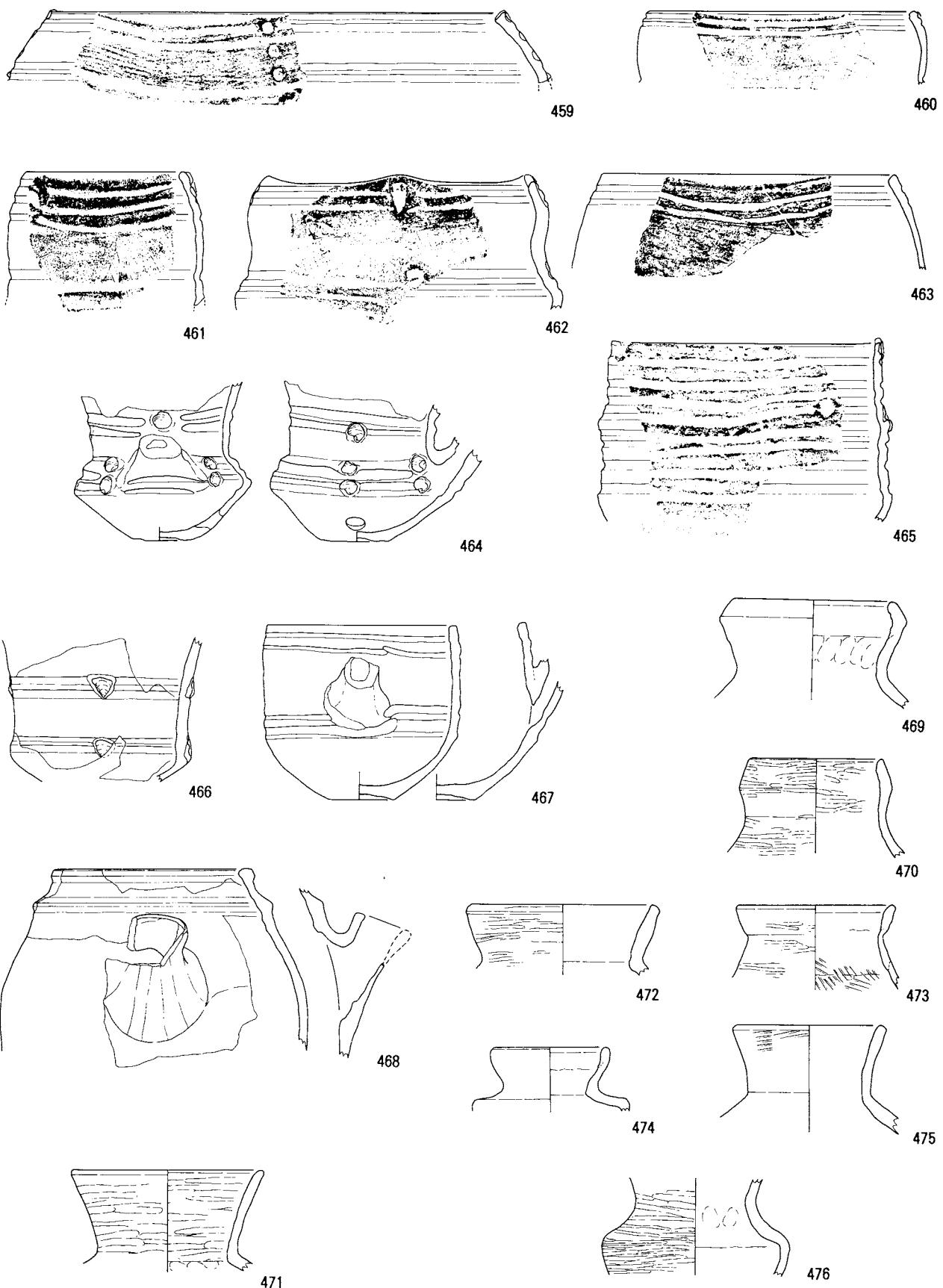
第50図 壺ないしは注口土器A・A'類実測図 (1 : 4)



第51図 壺ないしは注口土器B・C類実測図（1：4）

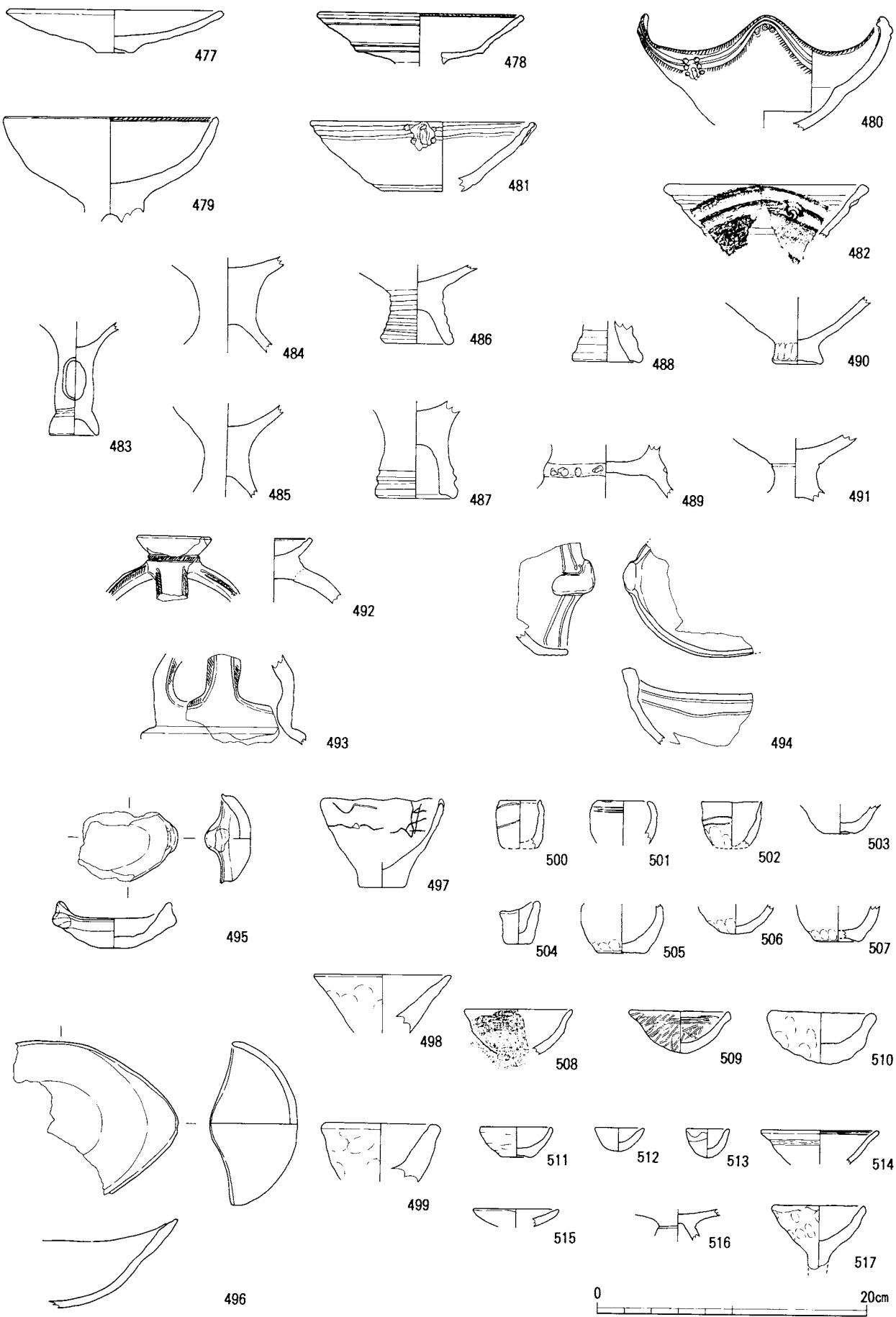


第52図 壺ないしは注口土器C類実測図 (1 : 4)

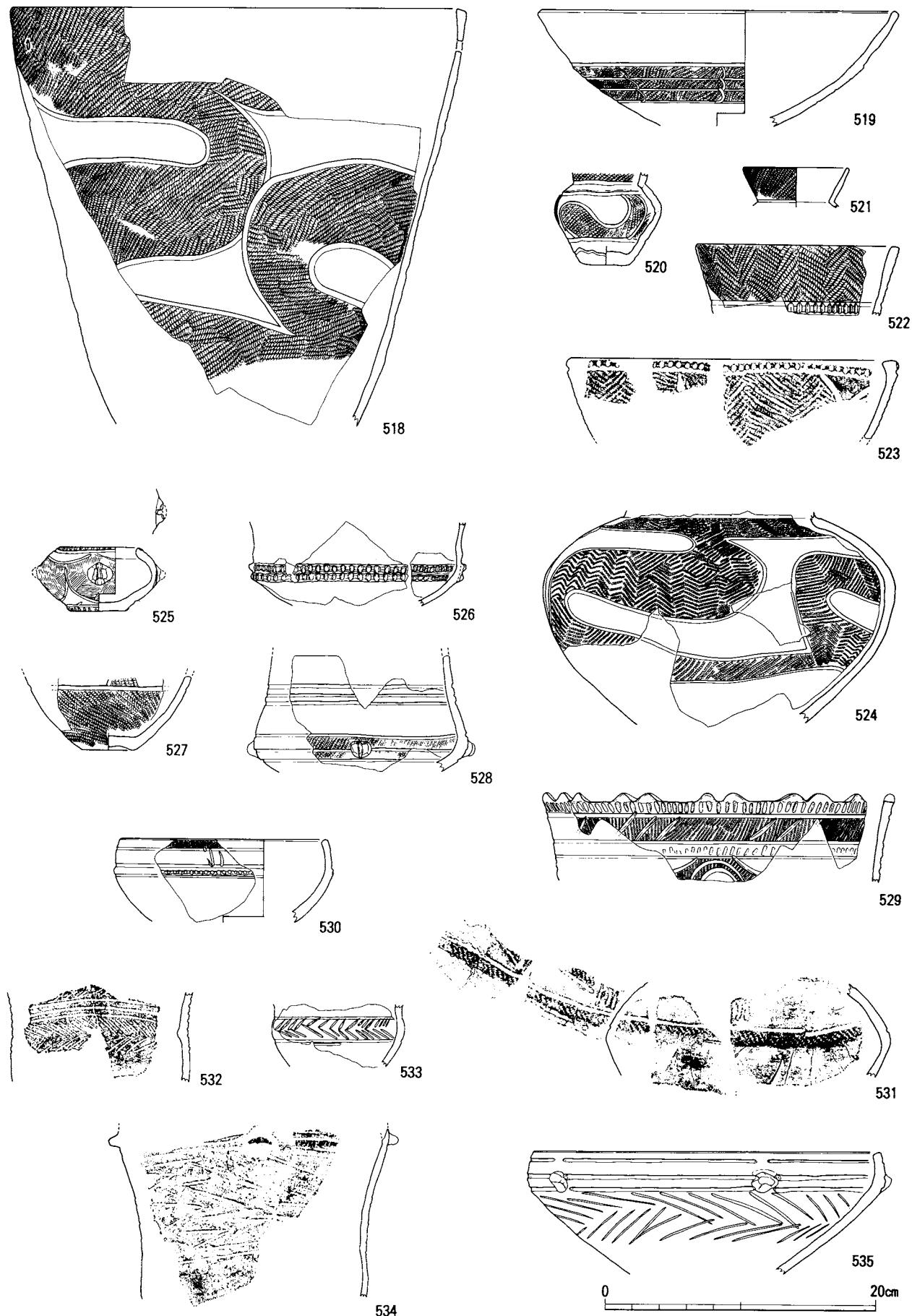


0 20cm

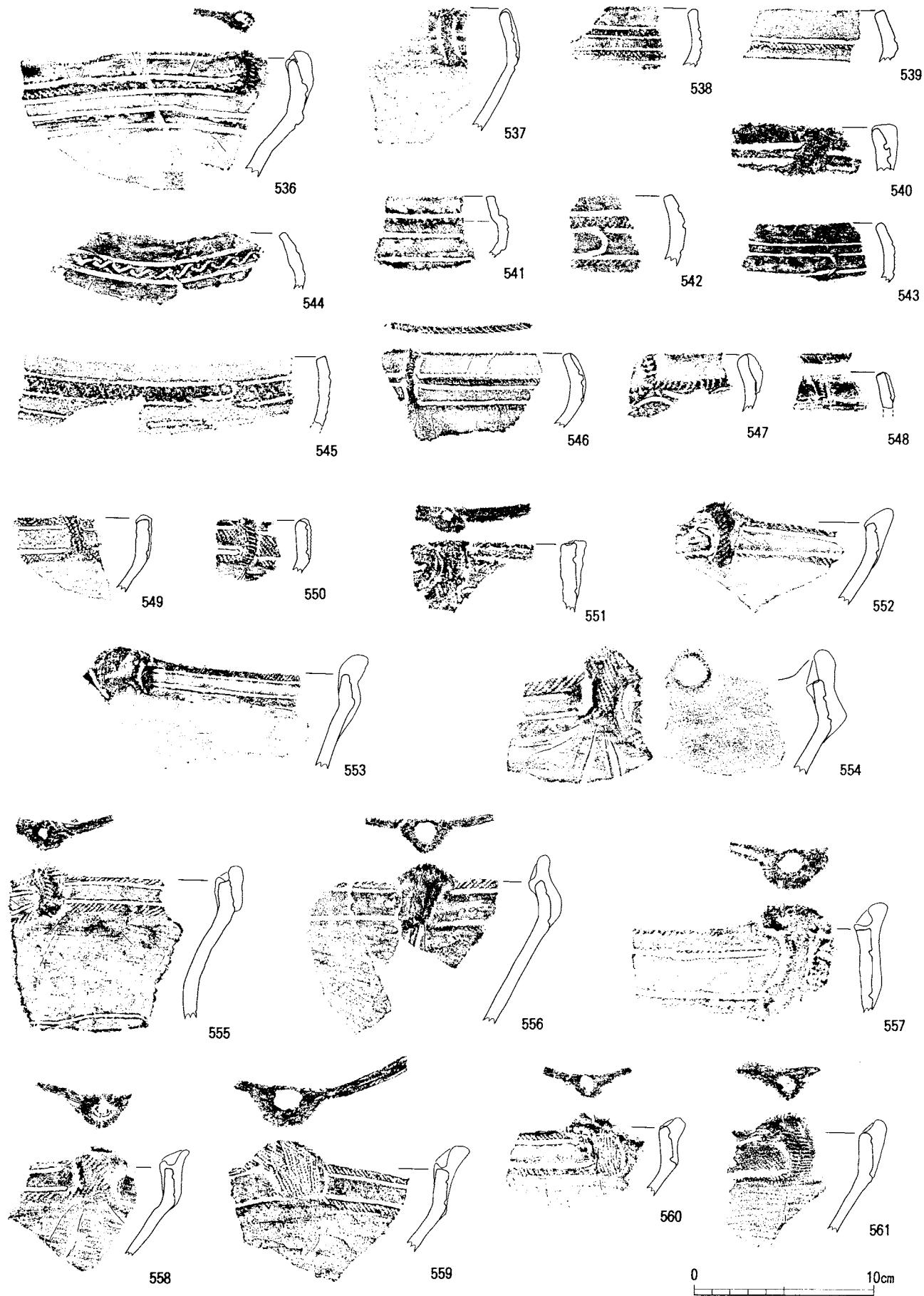
第53図 壺ないしは注口土器B・C・D・E・F類実測図 (1 : 4)



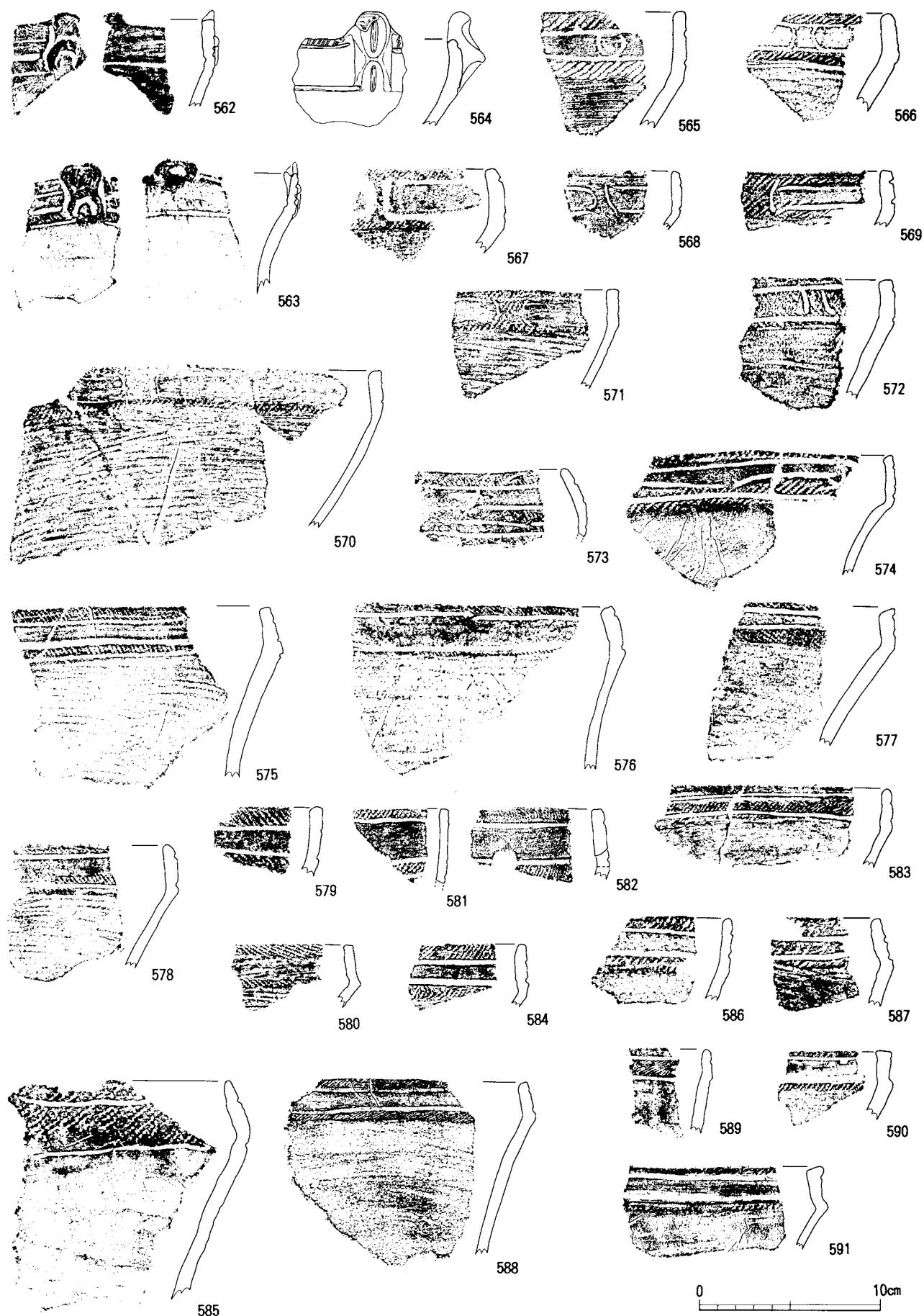
第54図 皿、高杯、脚台、釣手土器、舟形土器、手捏土器、ミニチュア土器実測図（1：4）



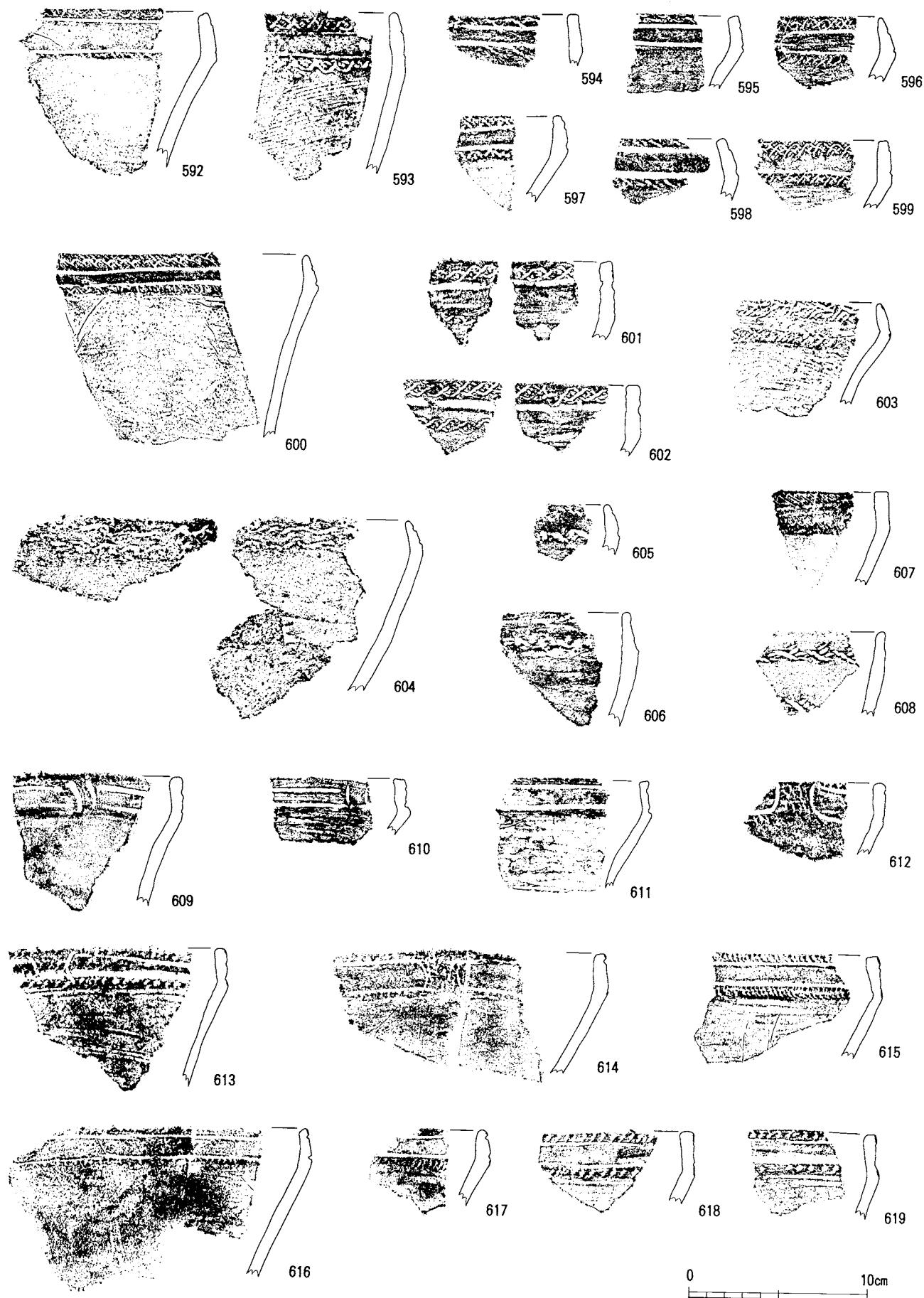
第55図 累系統土器実測図 (1 : 4)



第56図 深鉢A類実測図 (1 : 3)



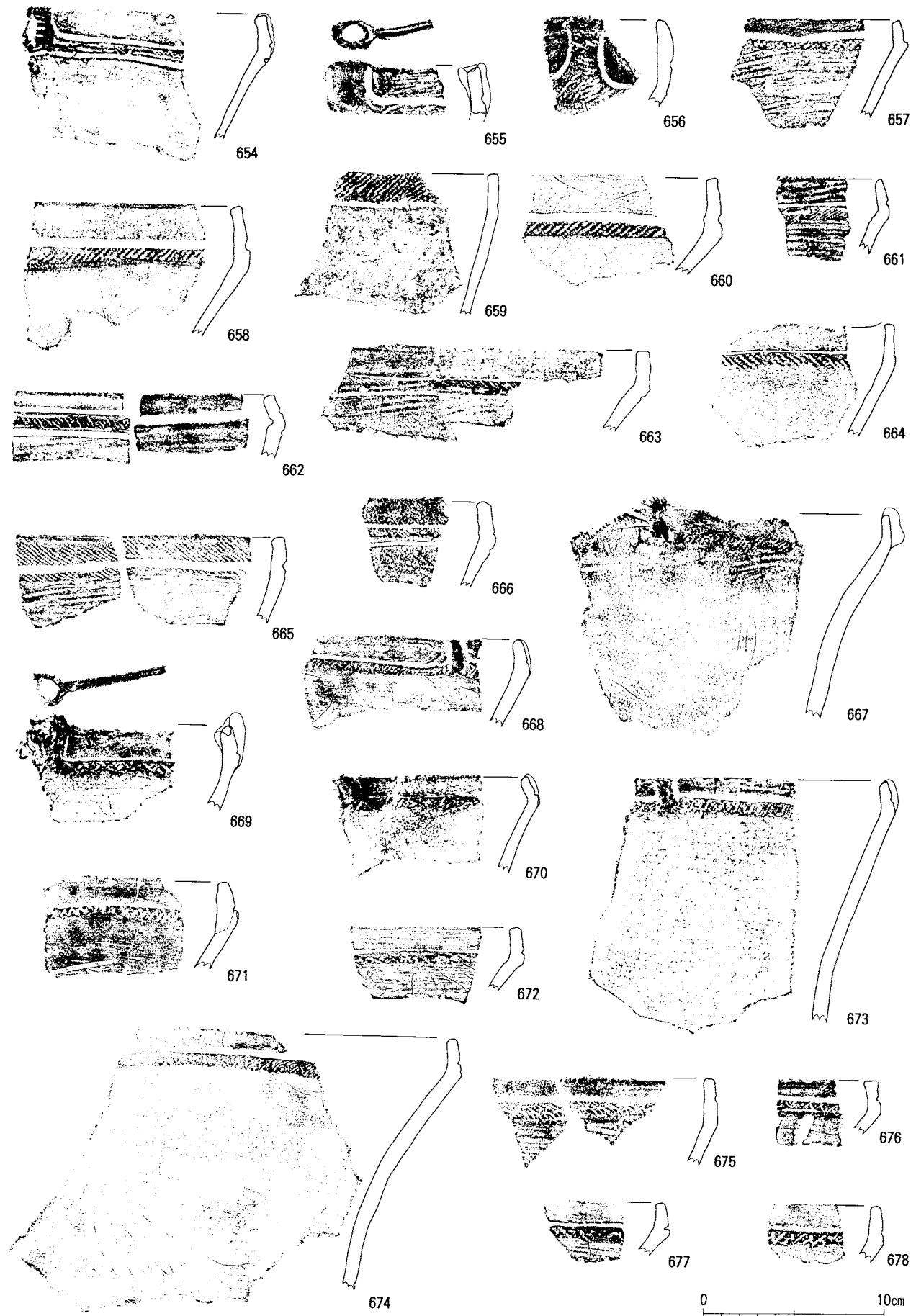
第57図 深鉢A類実測図 (1 : 3)



第58図 深鉢A類実測図 (1 : 3)



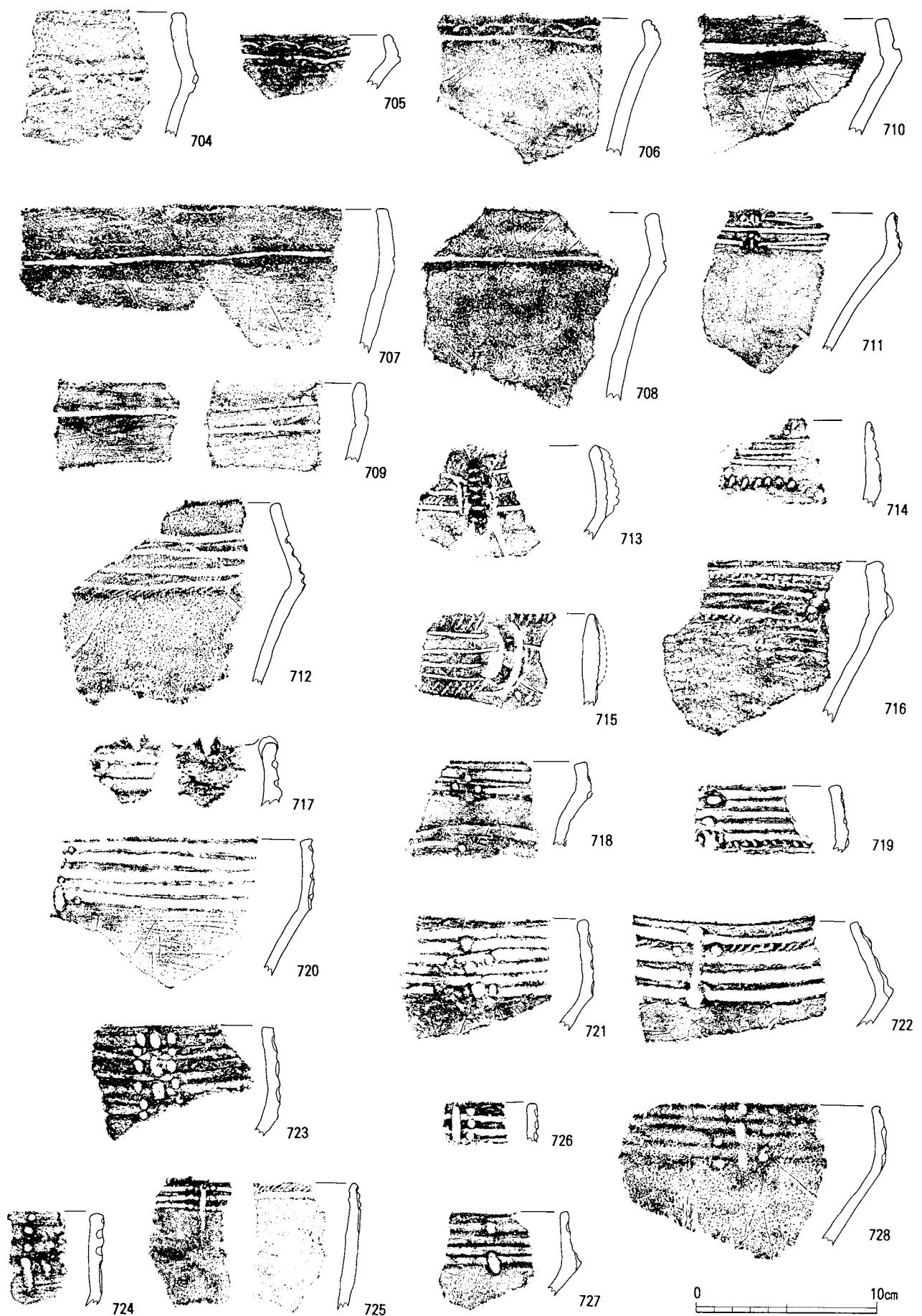
第59図 深鉢A類実測図 (1 : 3)



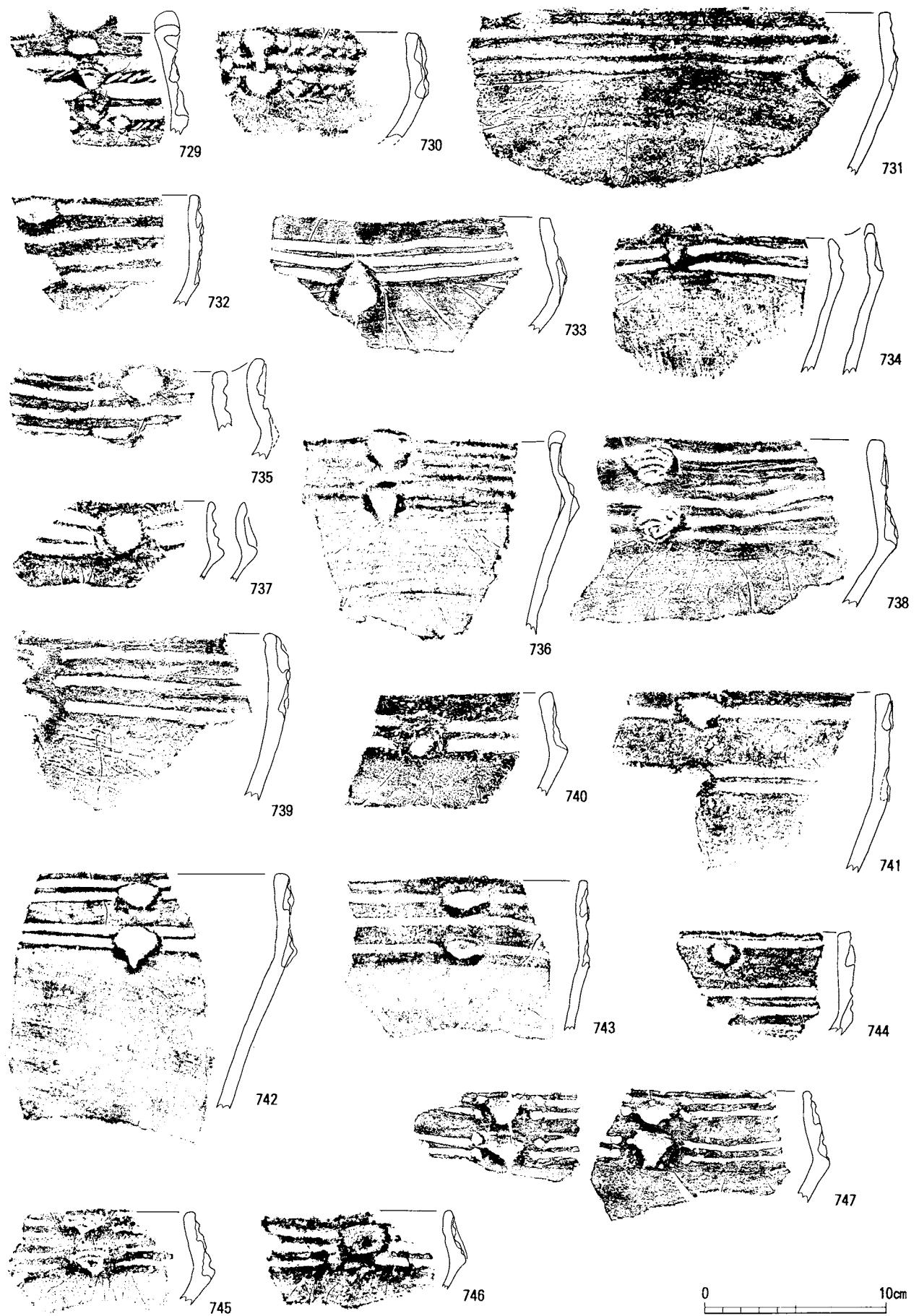
第60図 深鉢A類実測図 (1 : 3)



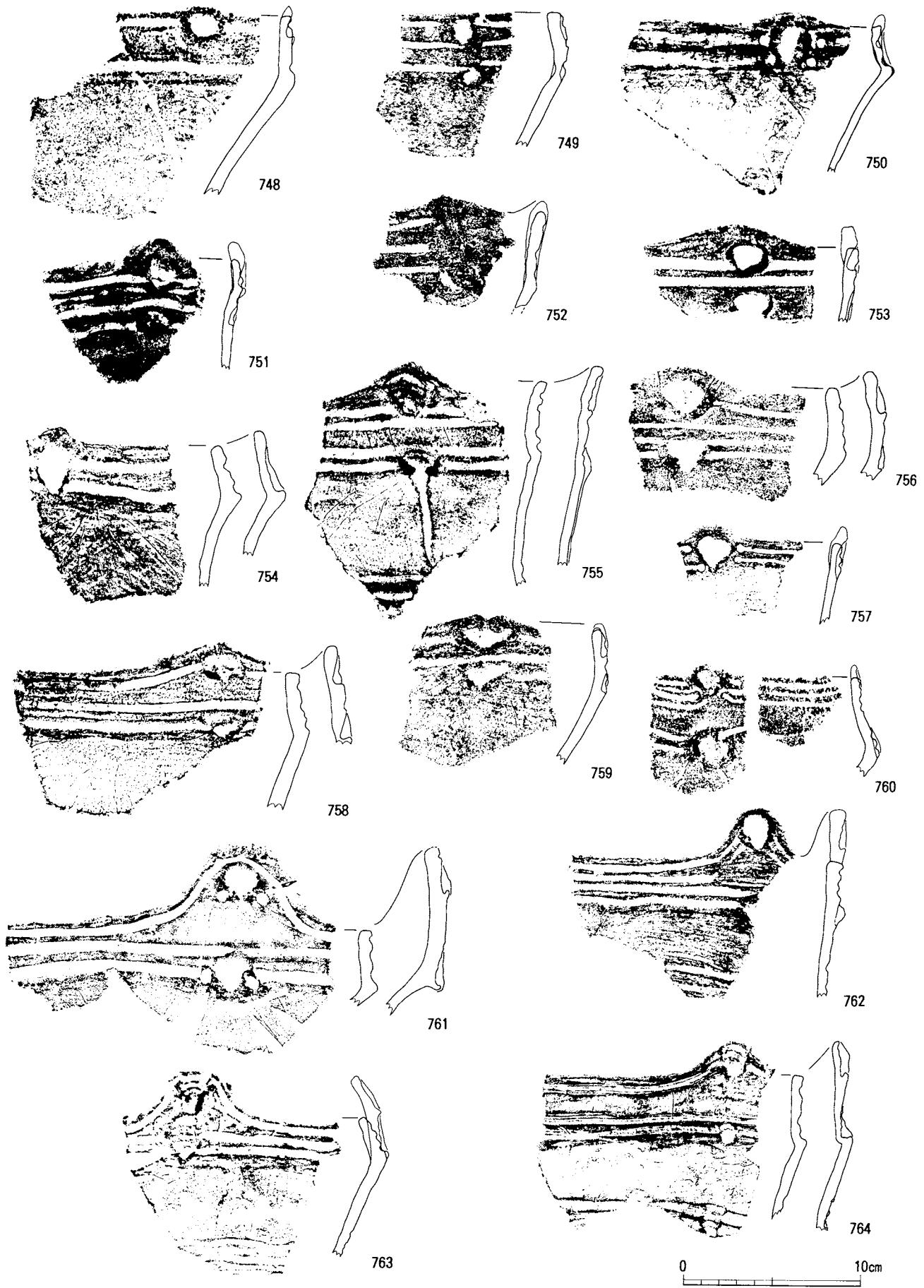
第61図 深鉢A類実測図 (1 : 3)



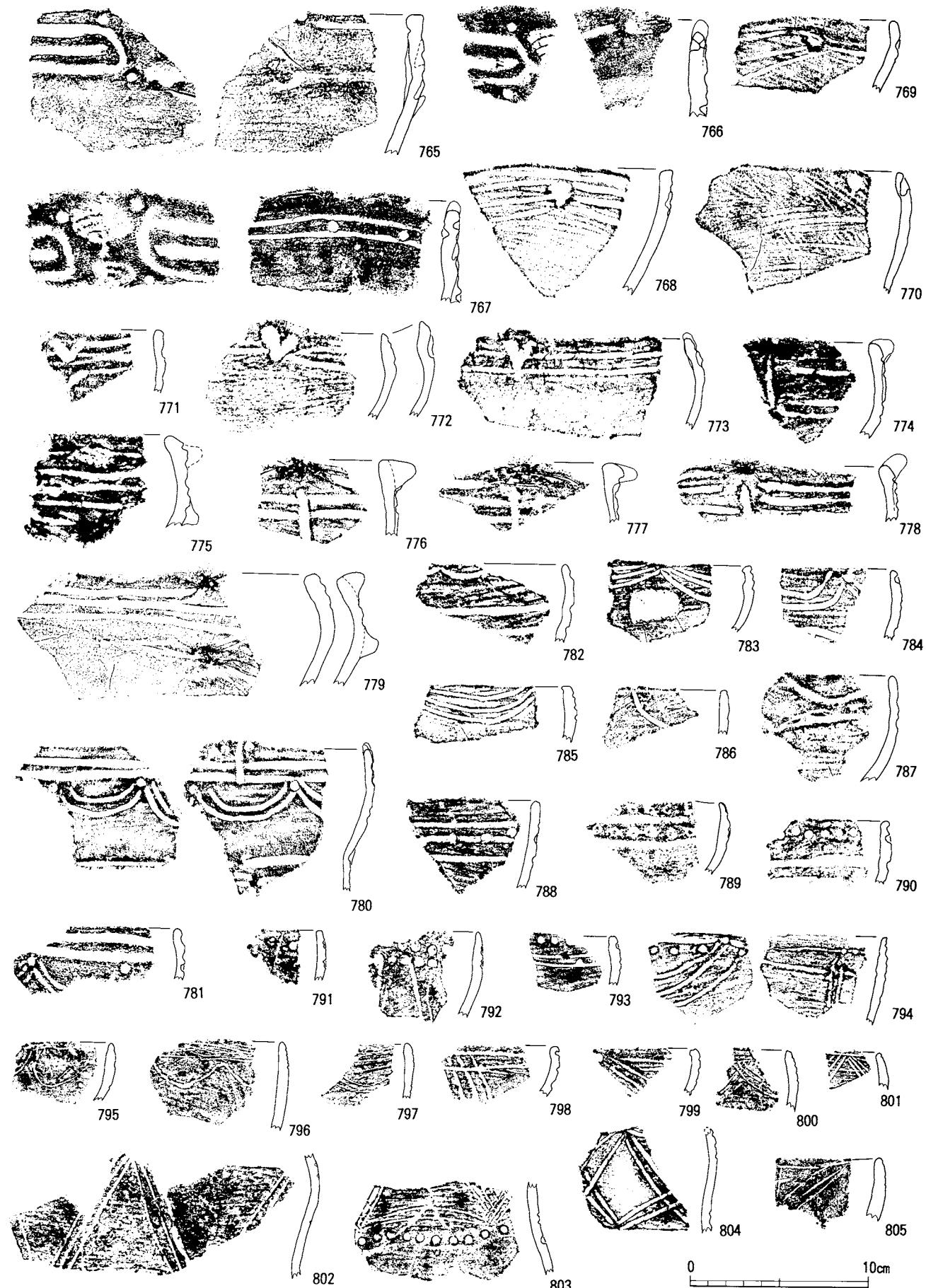
第62図 深鉢A類実測図 (1 : 3)



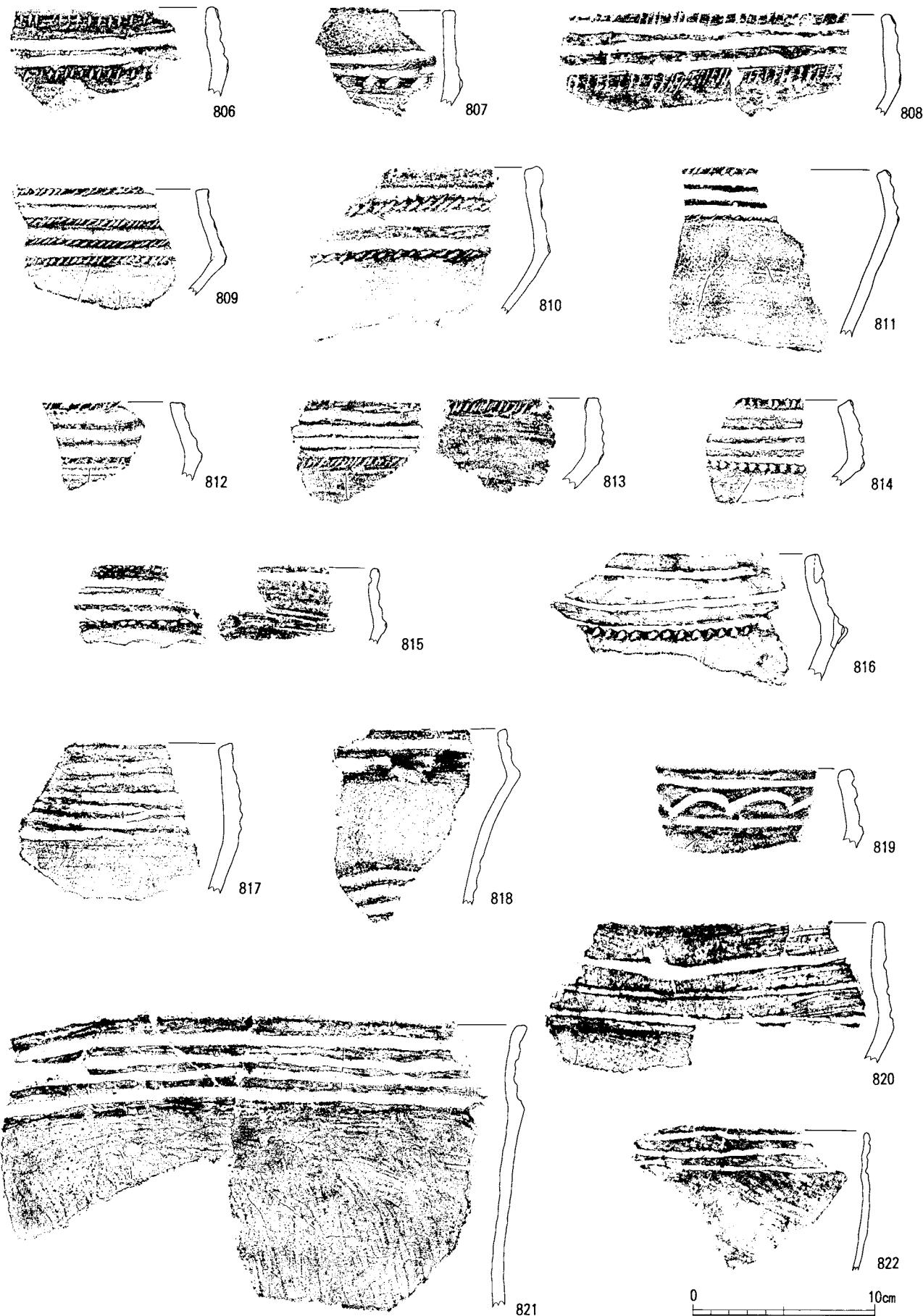
第63図 深鉢A類実測図 (1 : 3)



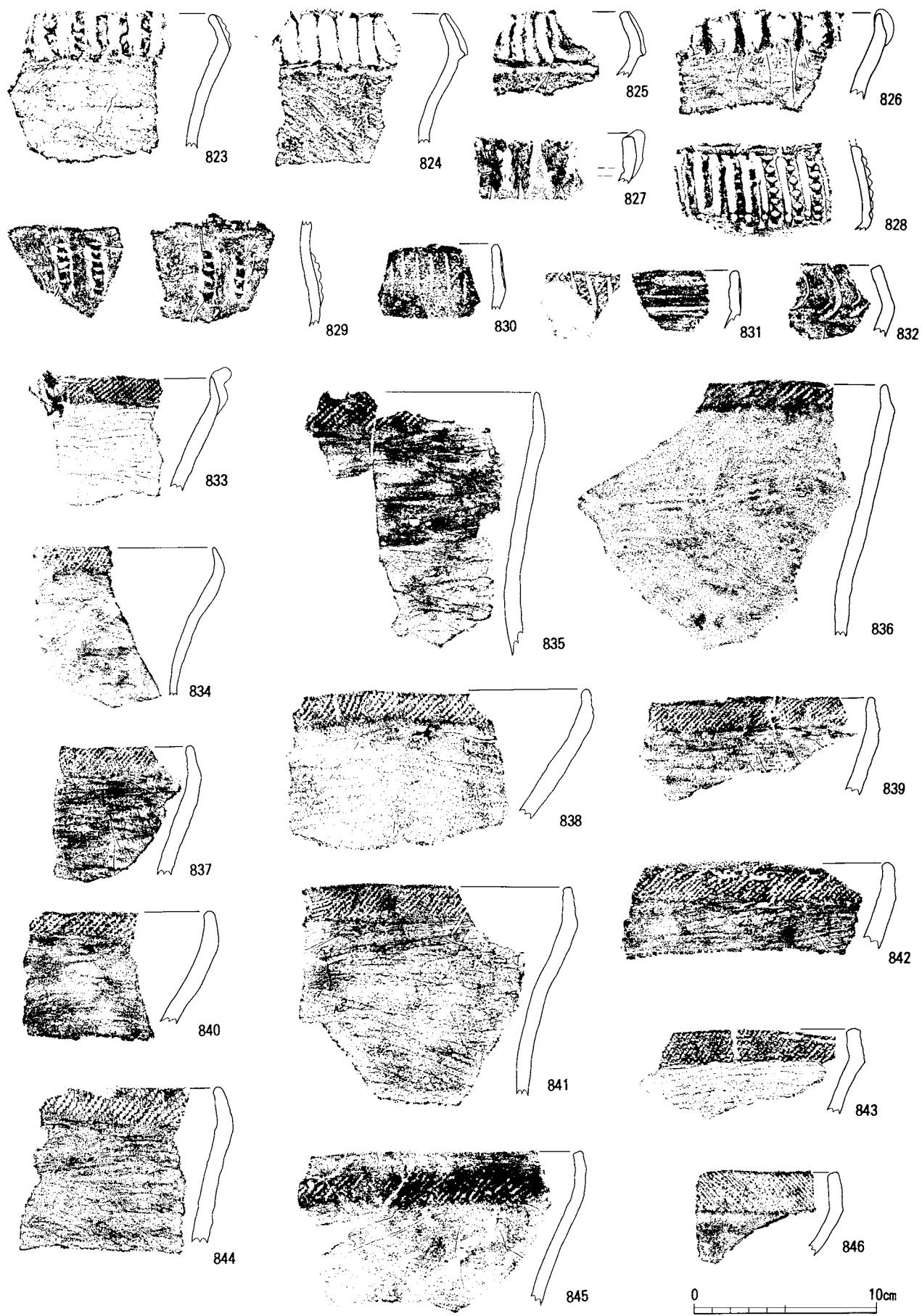
第64図 深鉢A類実測図 (1 : 3)



第65図 深鉢A類実測図 (1 : 3)



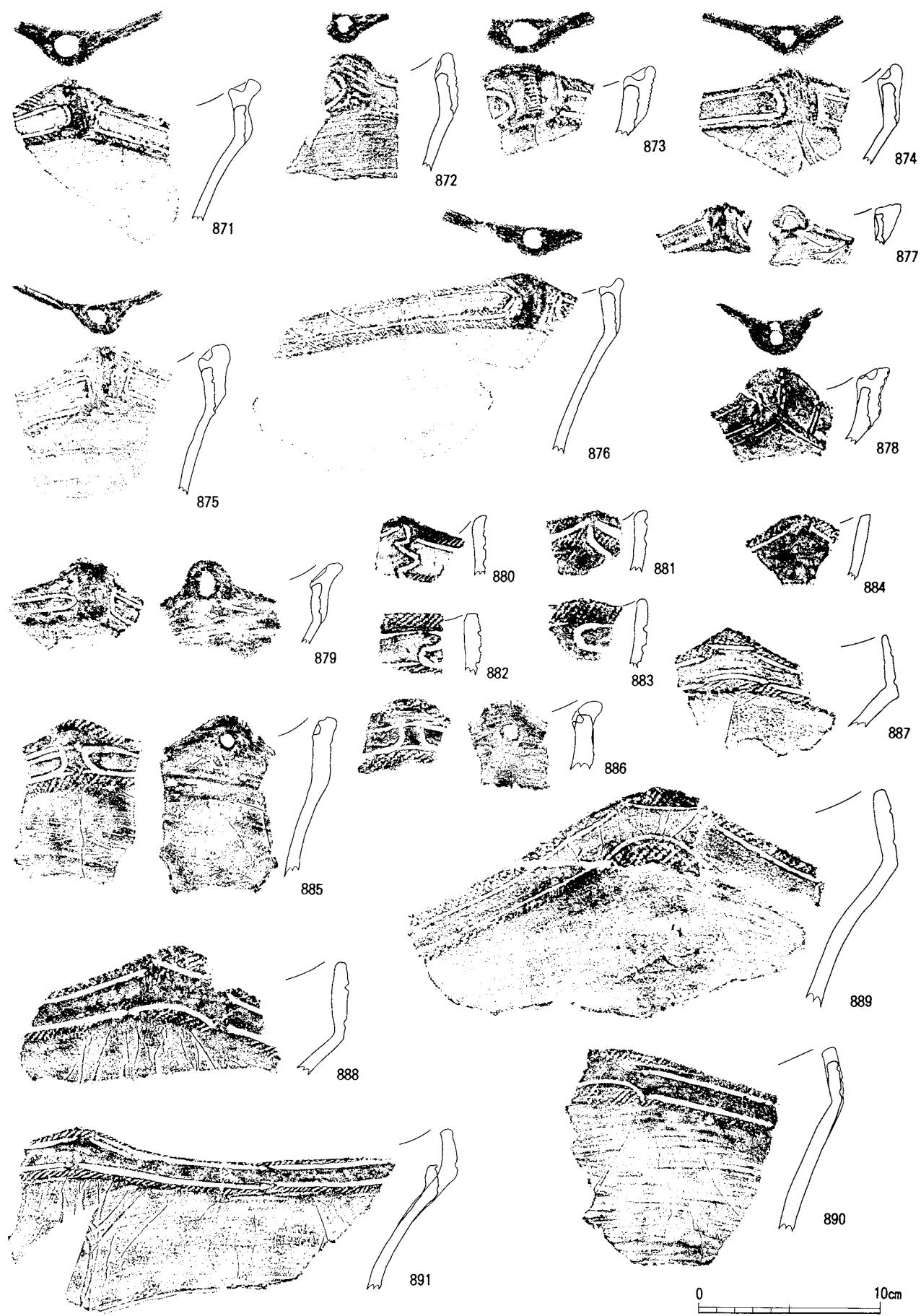
第66図 深鉢A類実測図 (1 : 3)



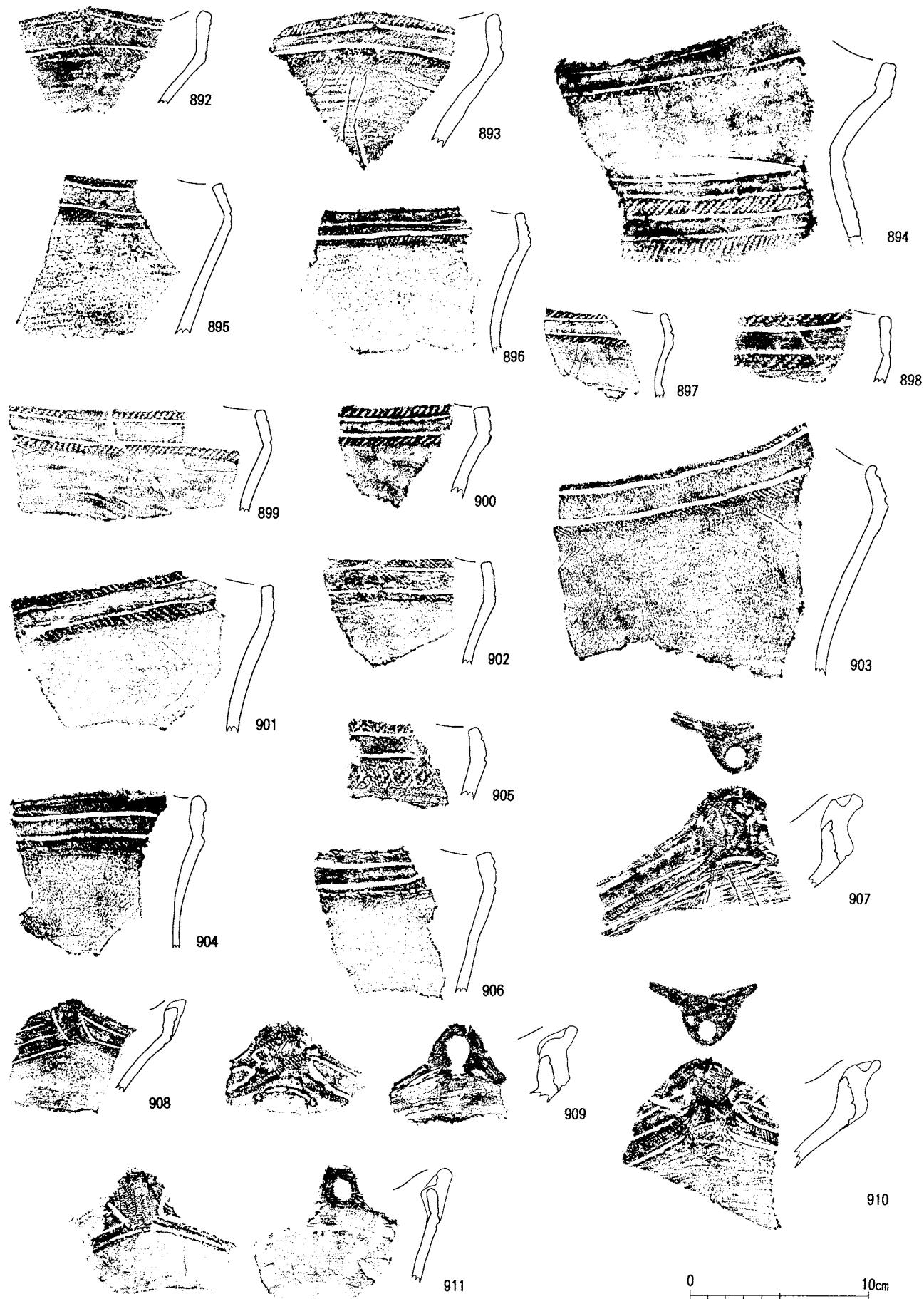
第67図 深鉢A類実測図 (1 : 3)



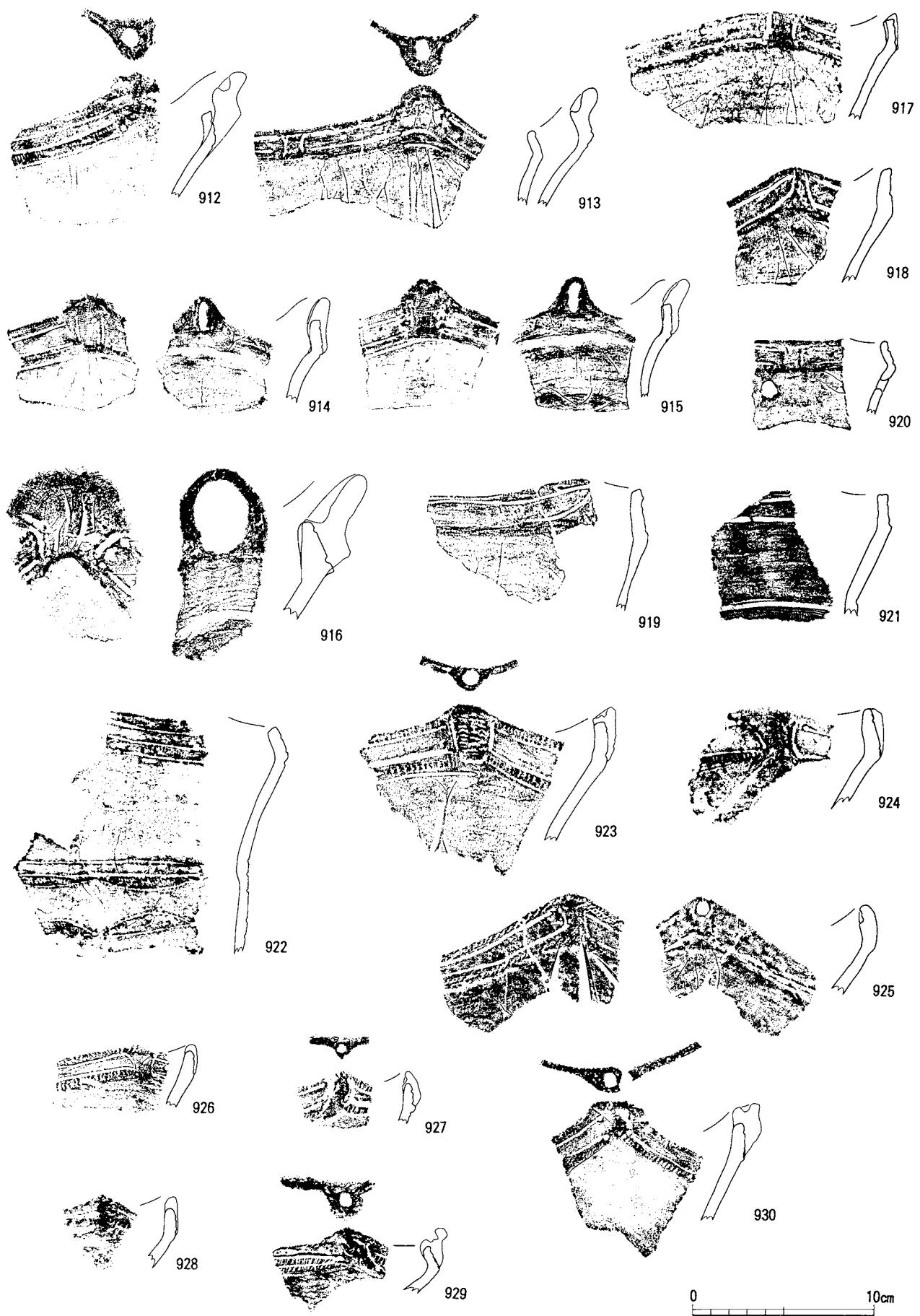
第68図 深鉢A類実測図 (1 : 3)



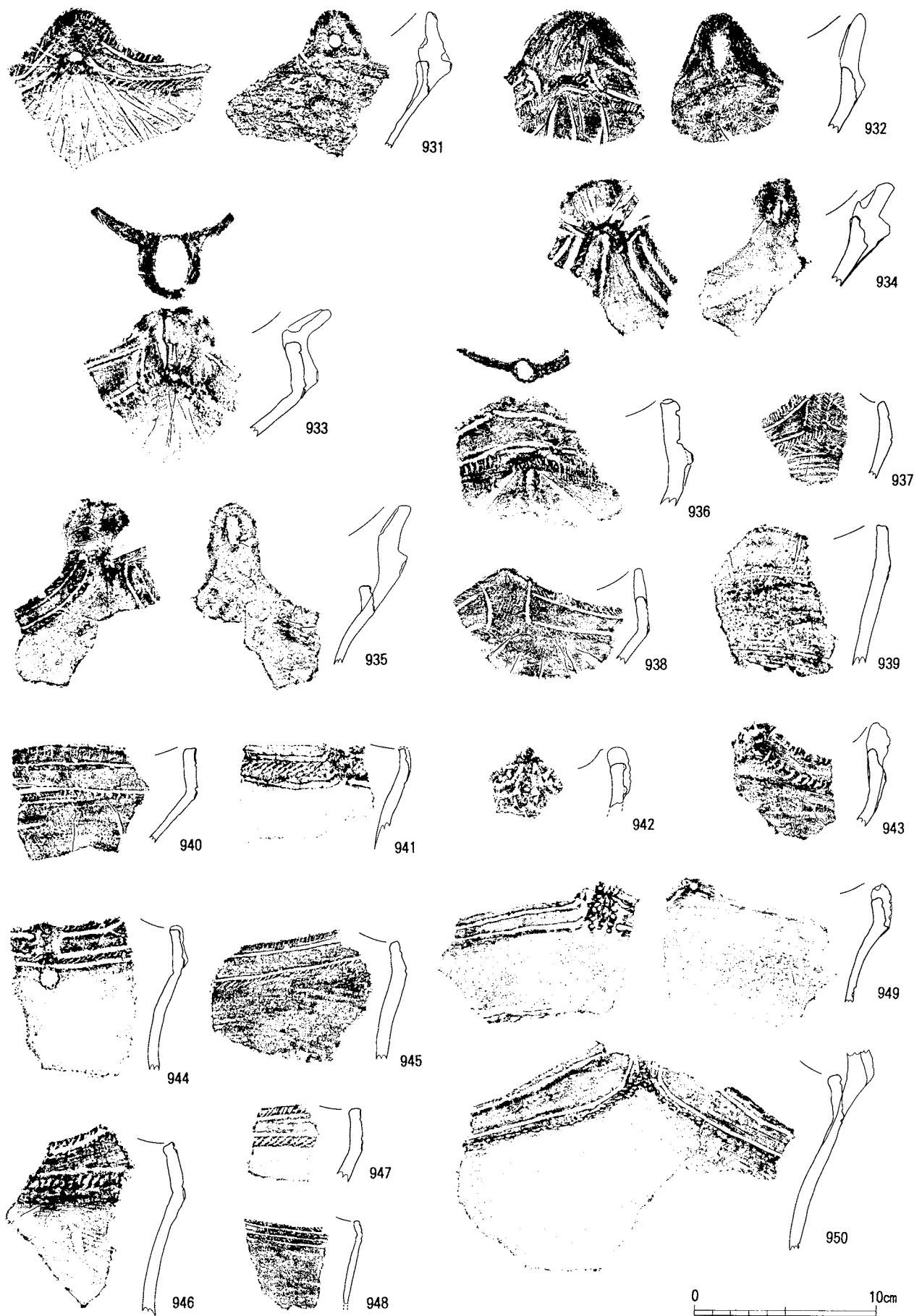
第69図 深鉢A類実測図 (1 : 3)



第70図 深鉢A類実測図 (1 : 3)



第71図 深鉢A類実測図 (1 : 3)

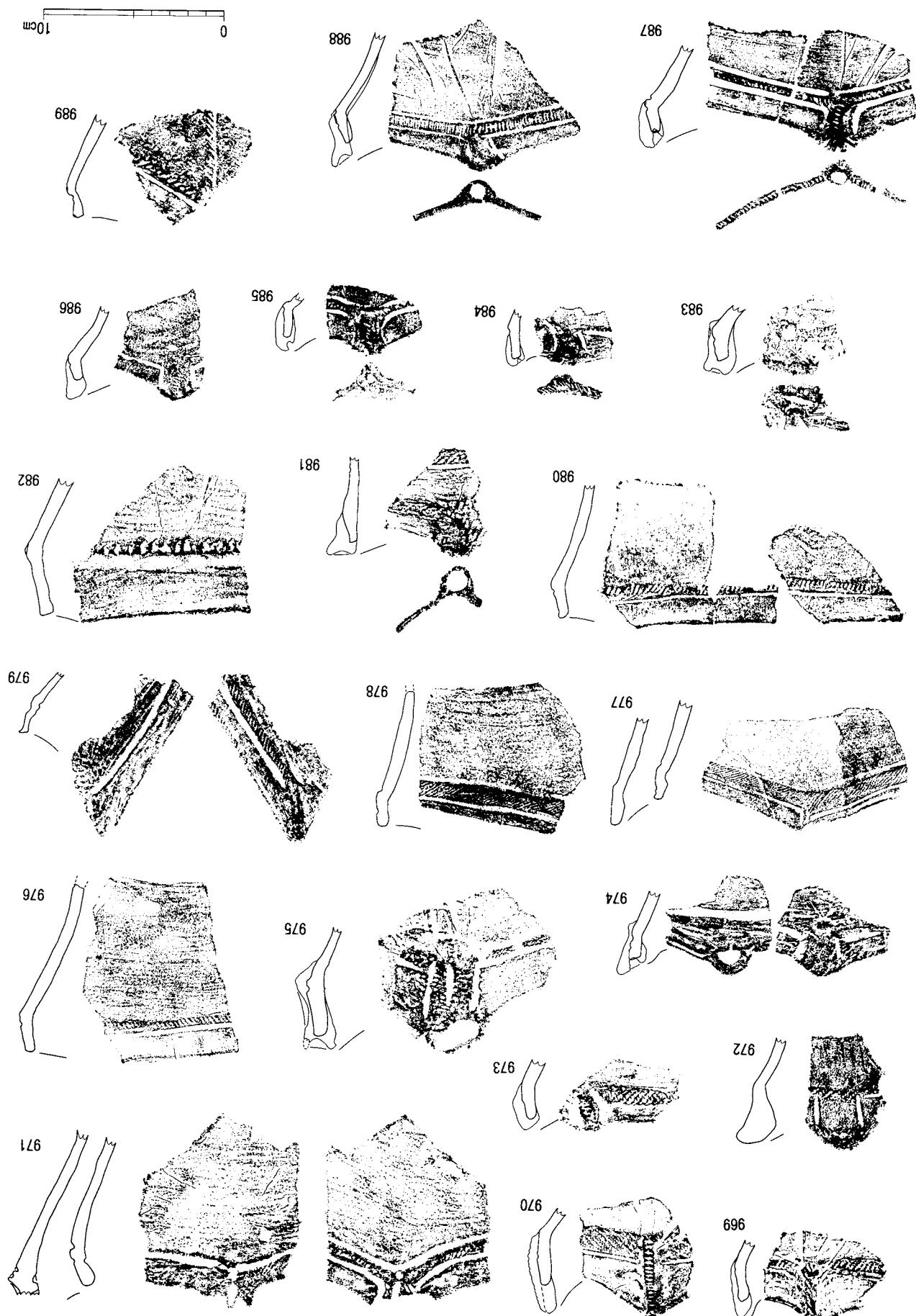


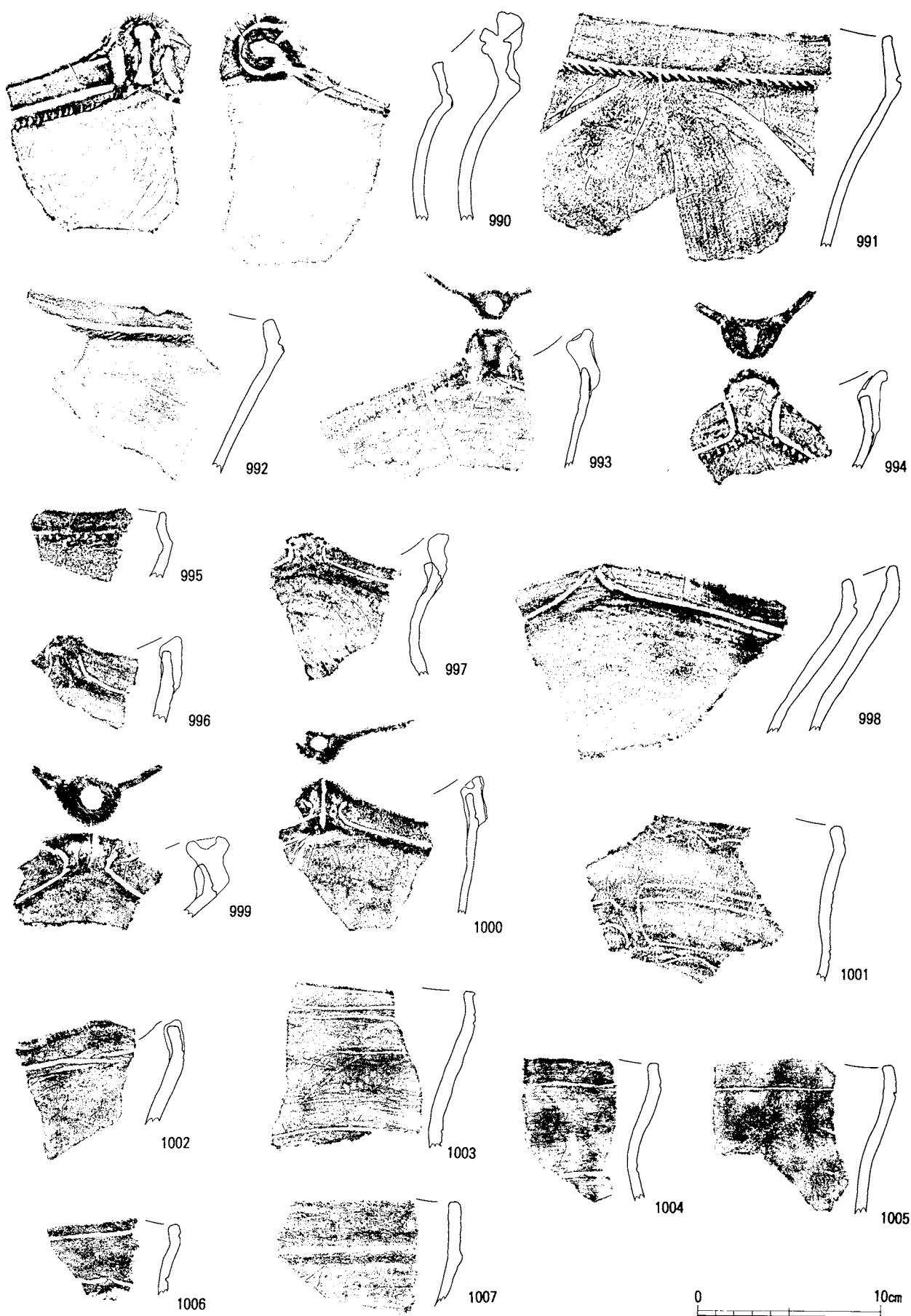
第72図 深鉢A類実測図 (1 : 3)



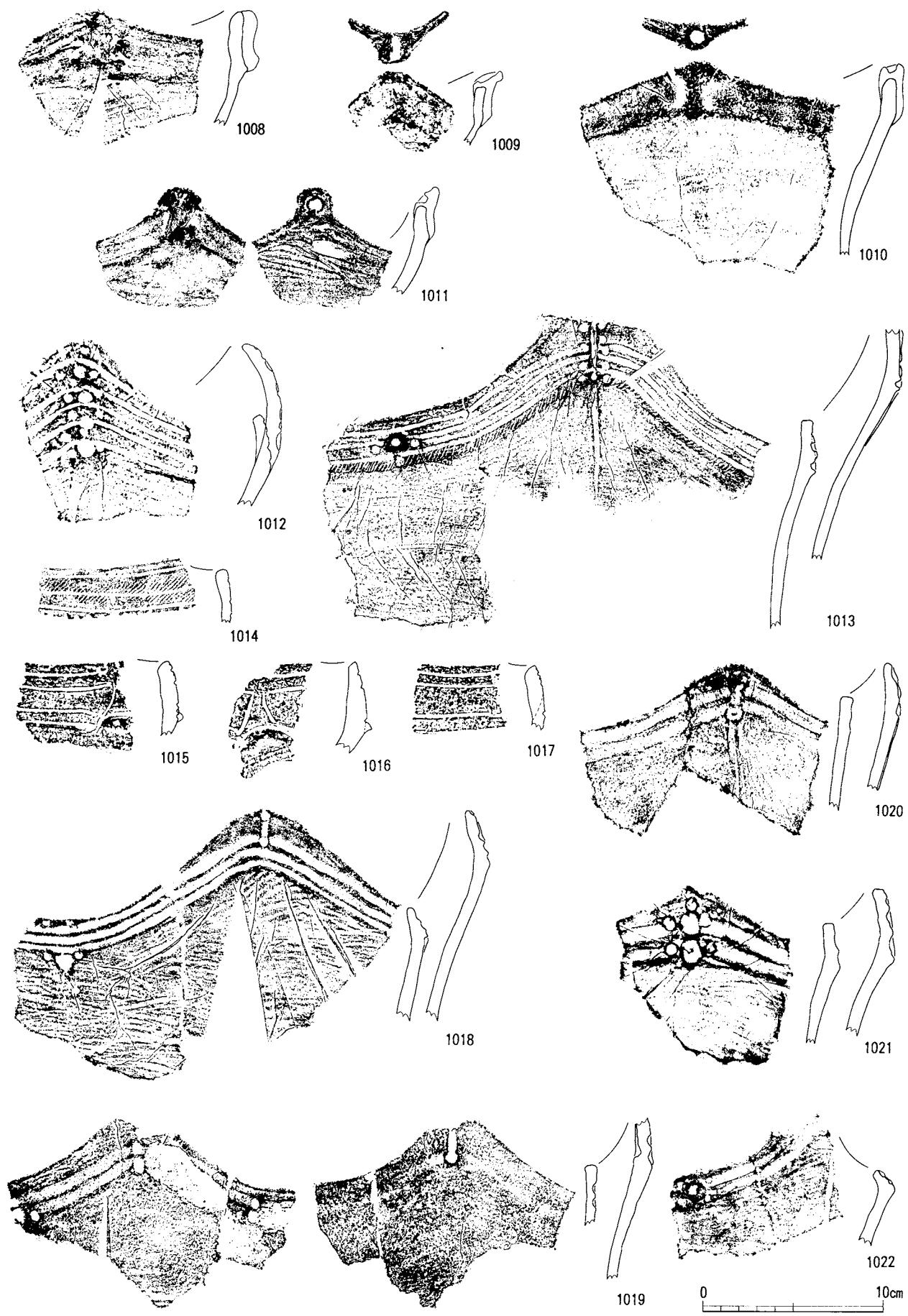
第73図 深鉢A類実測図 (1 : 3)

第74图 深海A组美测图 (1 : 3)

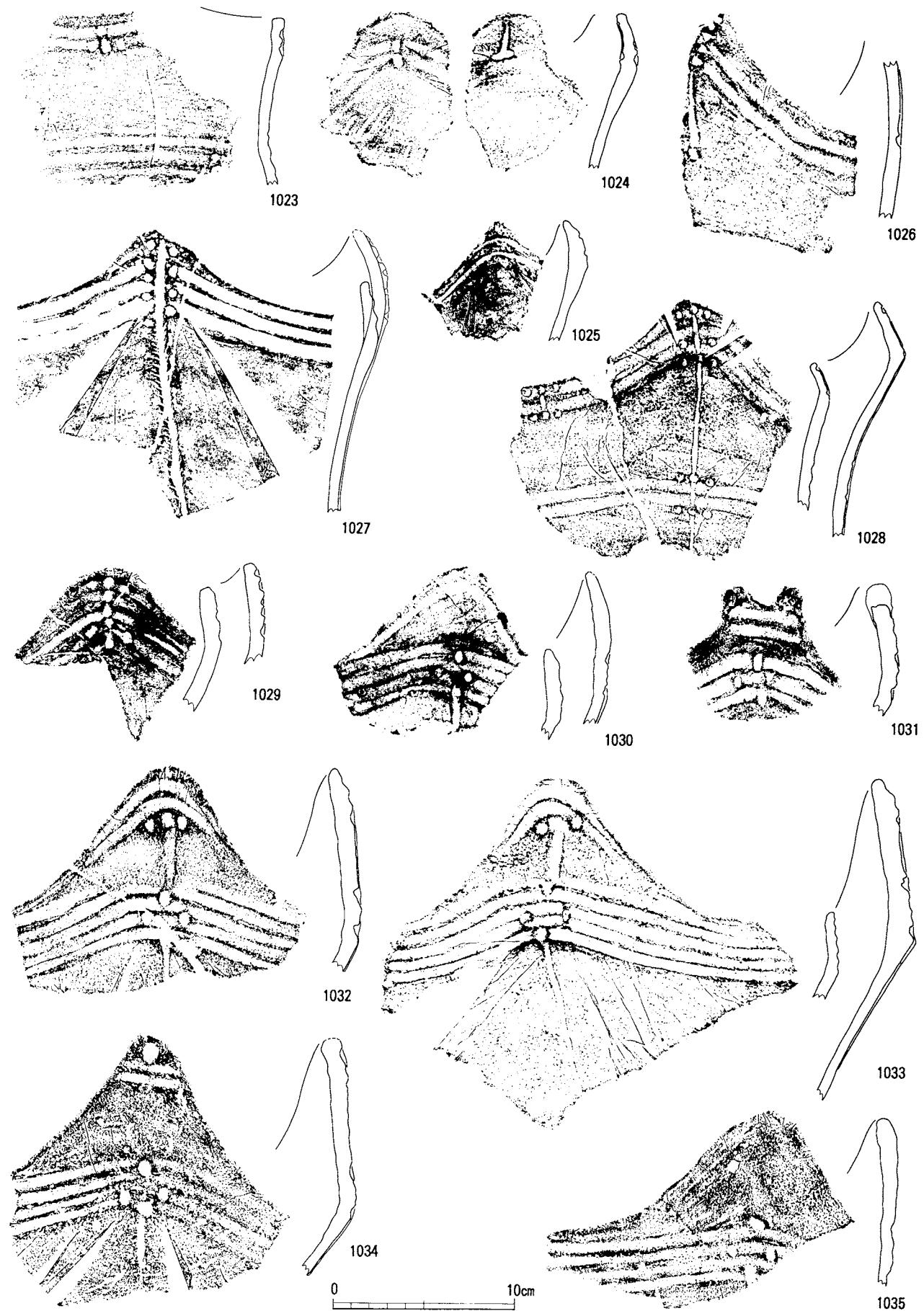




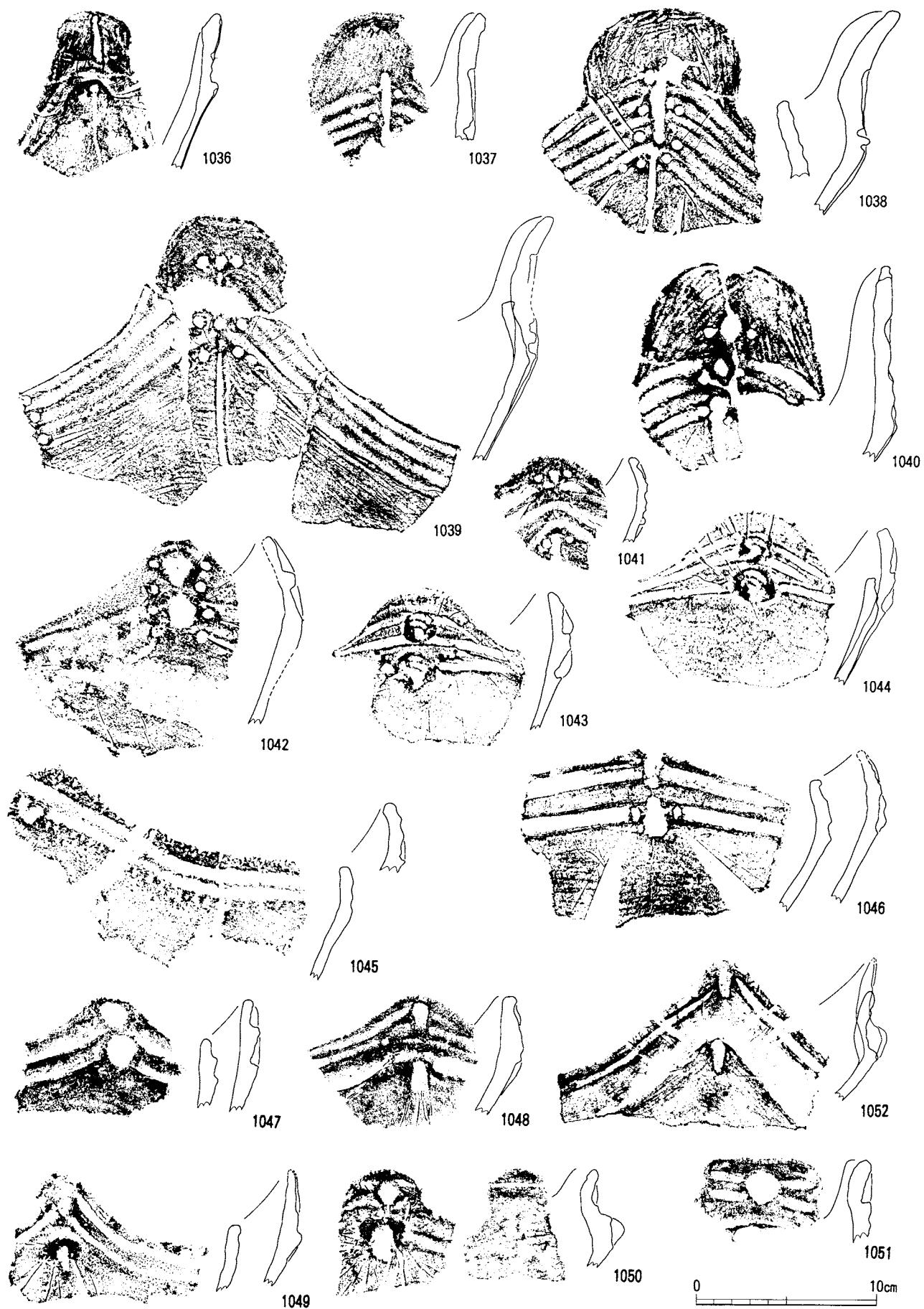
第75図 深鉢A類実測図 (1 : 3)



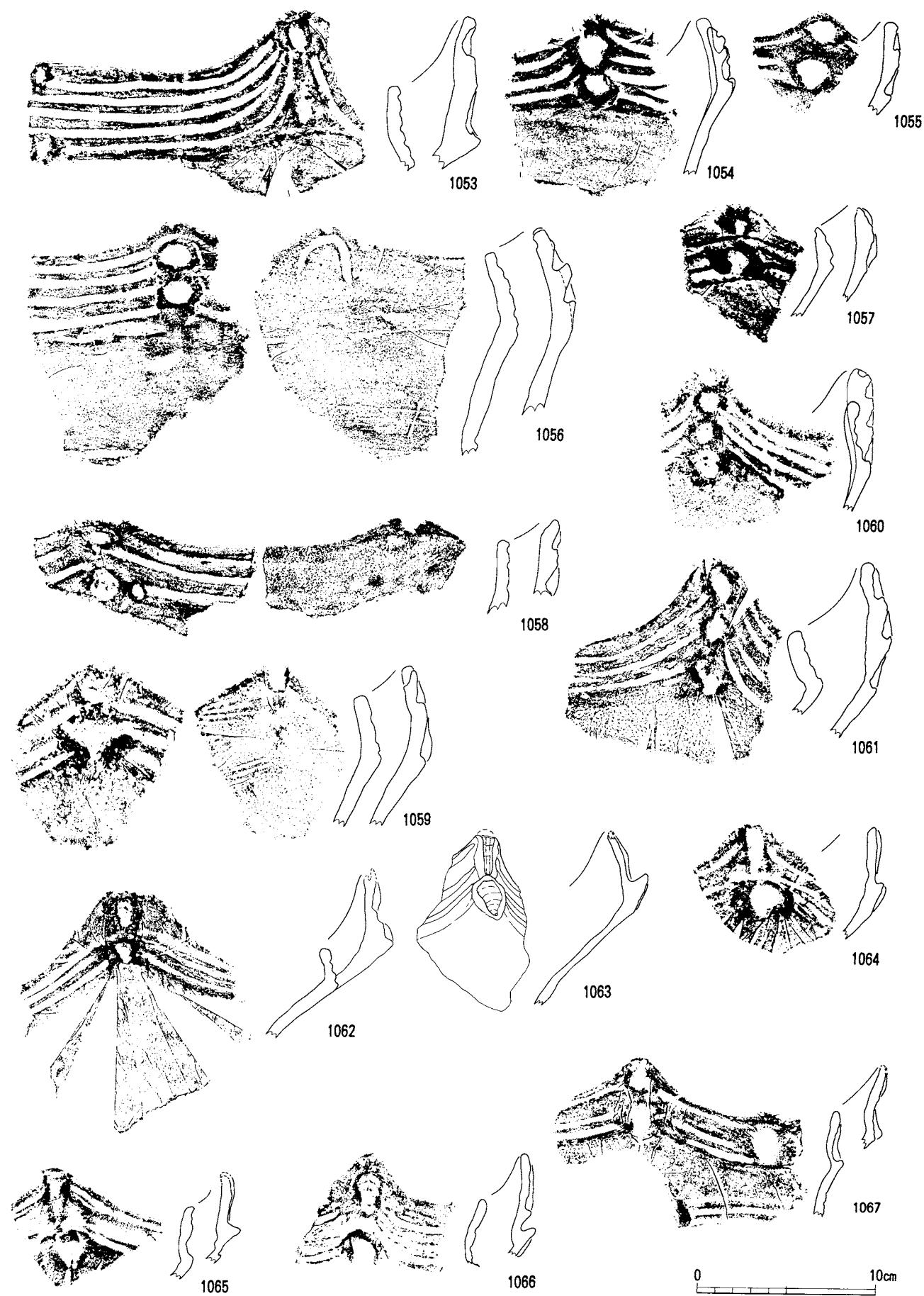
第76図 深鉢A類実測図 (1 : 3)



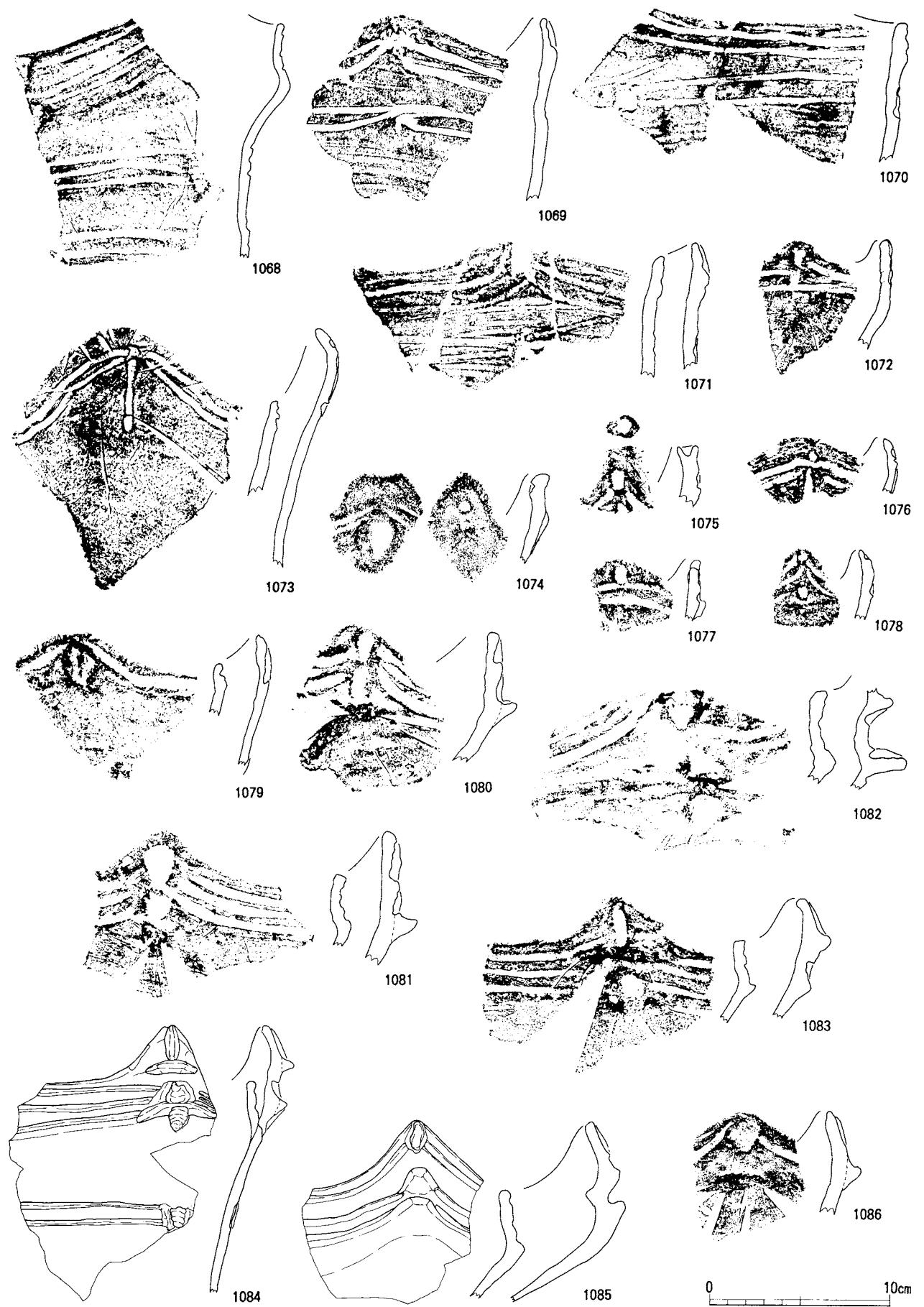
第77図 深鉢A類実測図 (1 : 3)



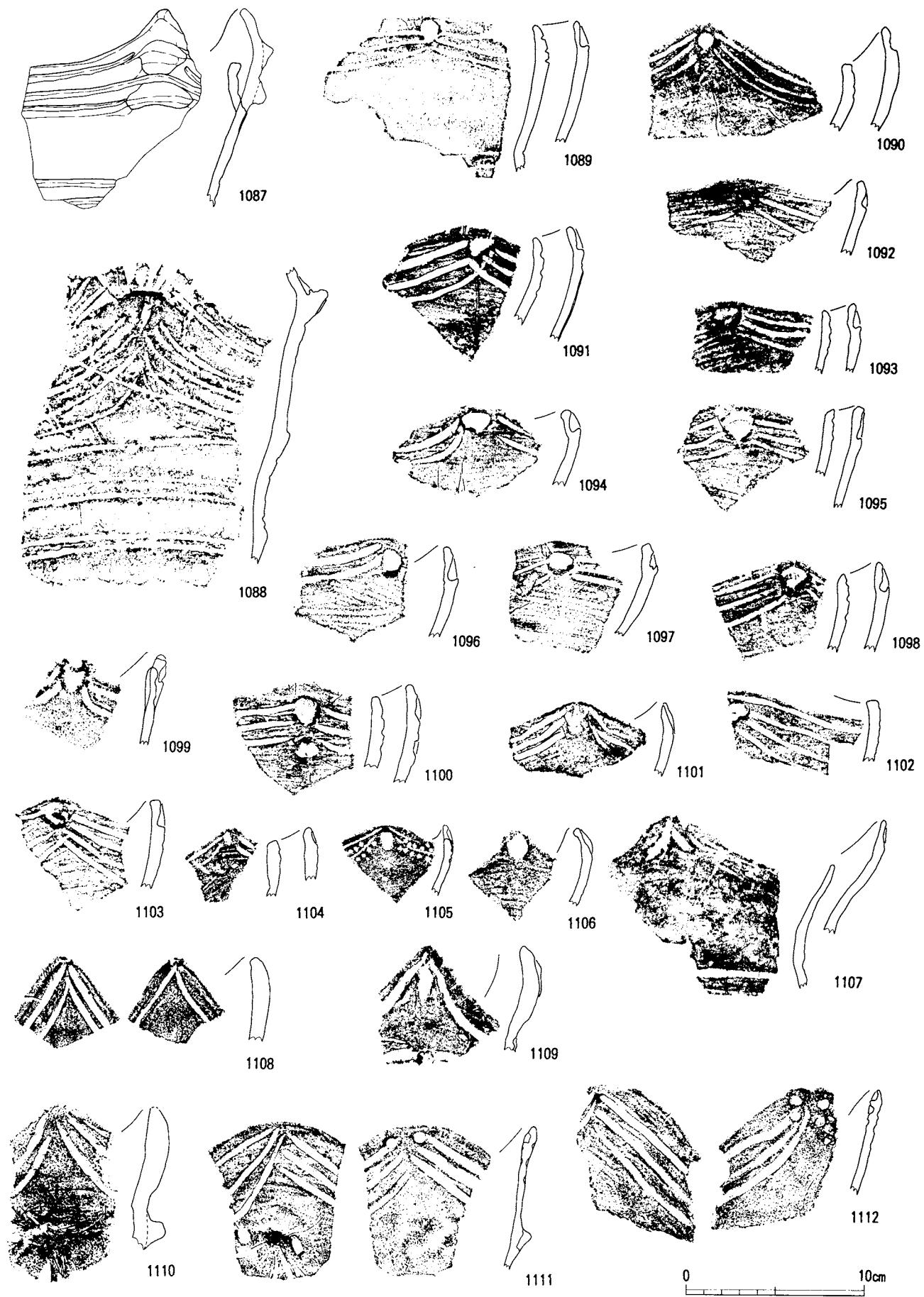
第78図 深鉢A類実測図 (1 : 3)



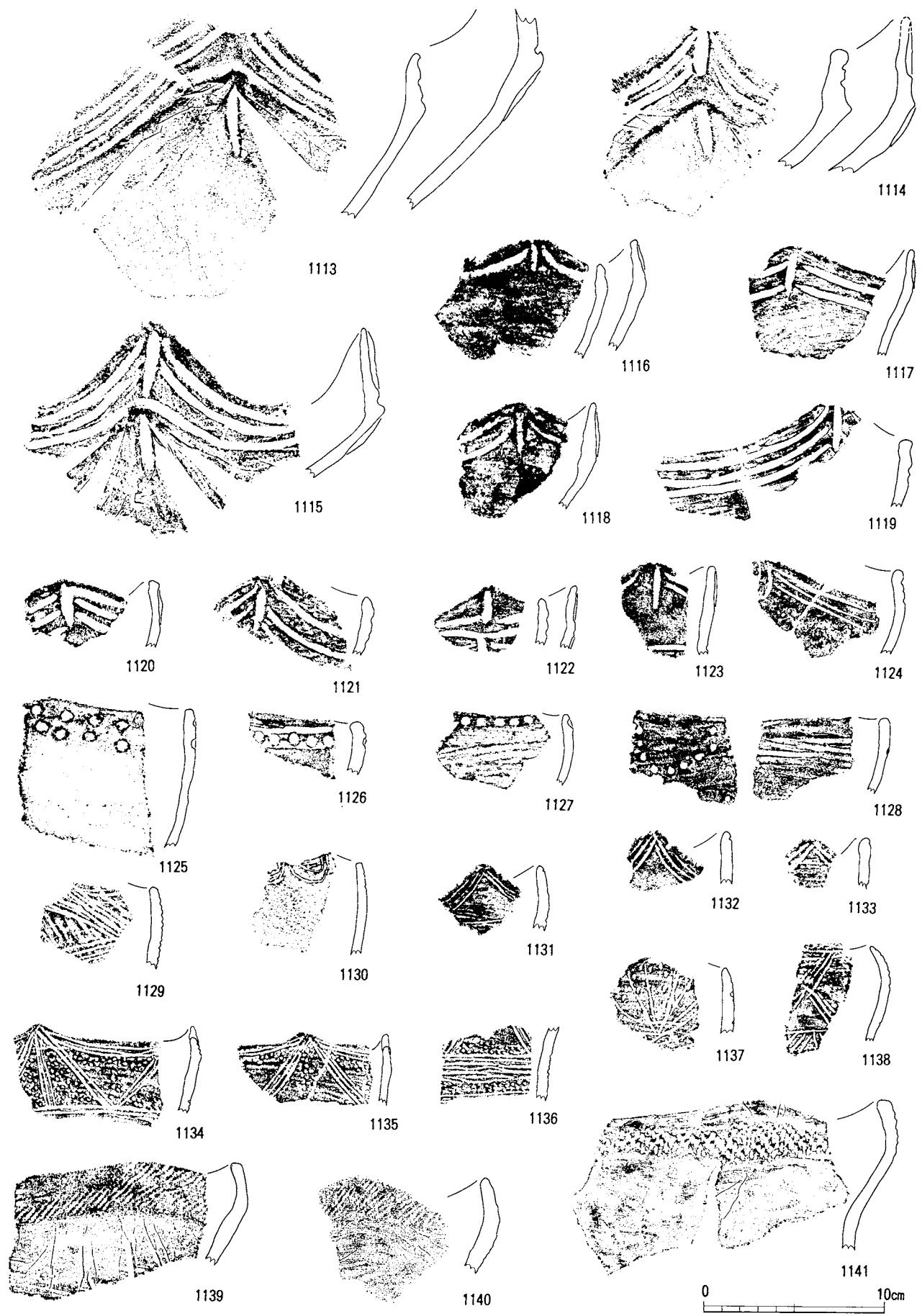
第79図 深鉢A類実測図 (1 : 3)



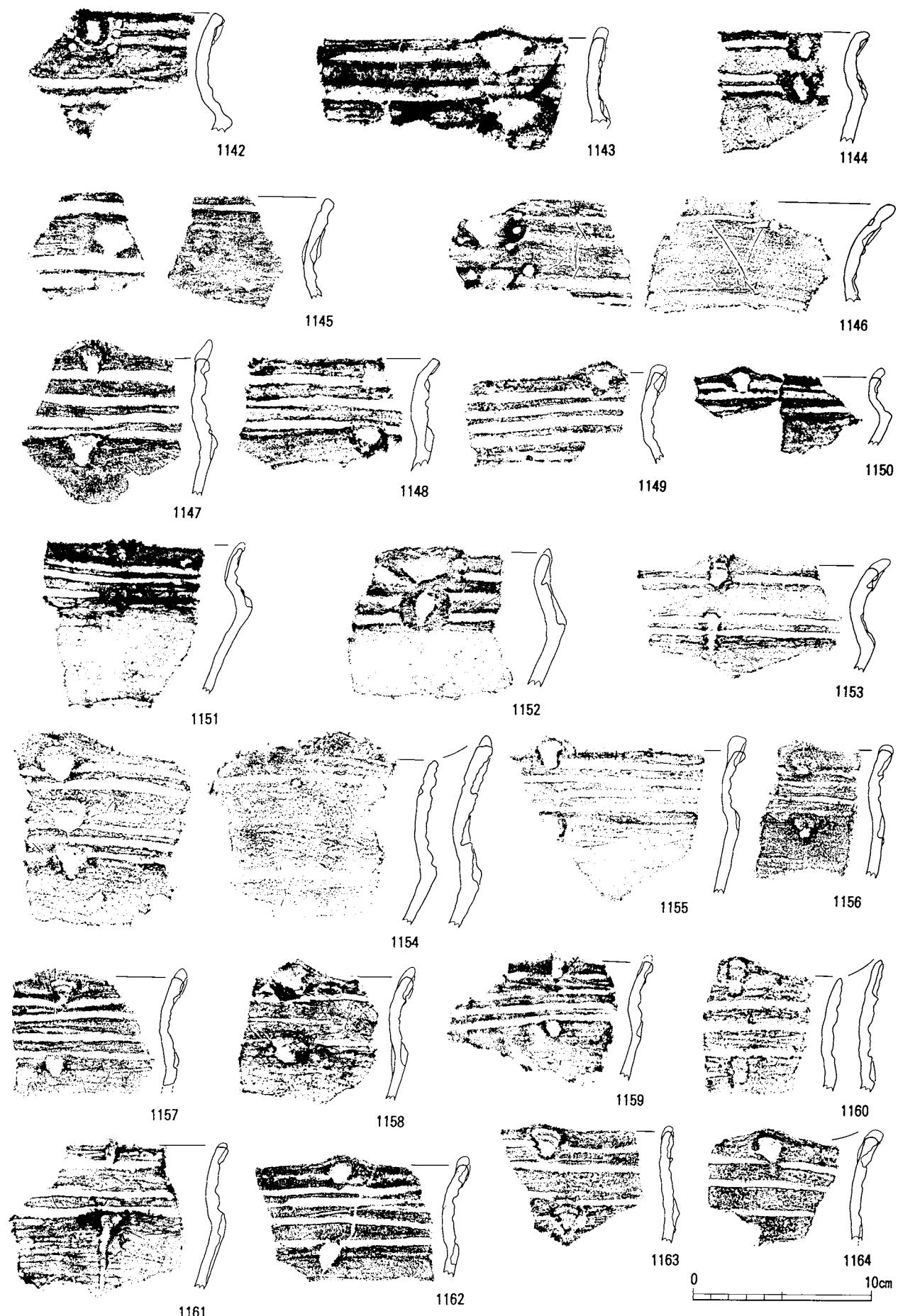
第80図 深鉢A類実測図 (1 : 3)



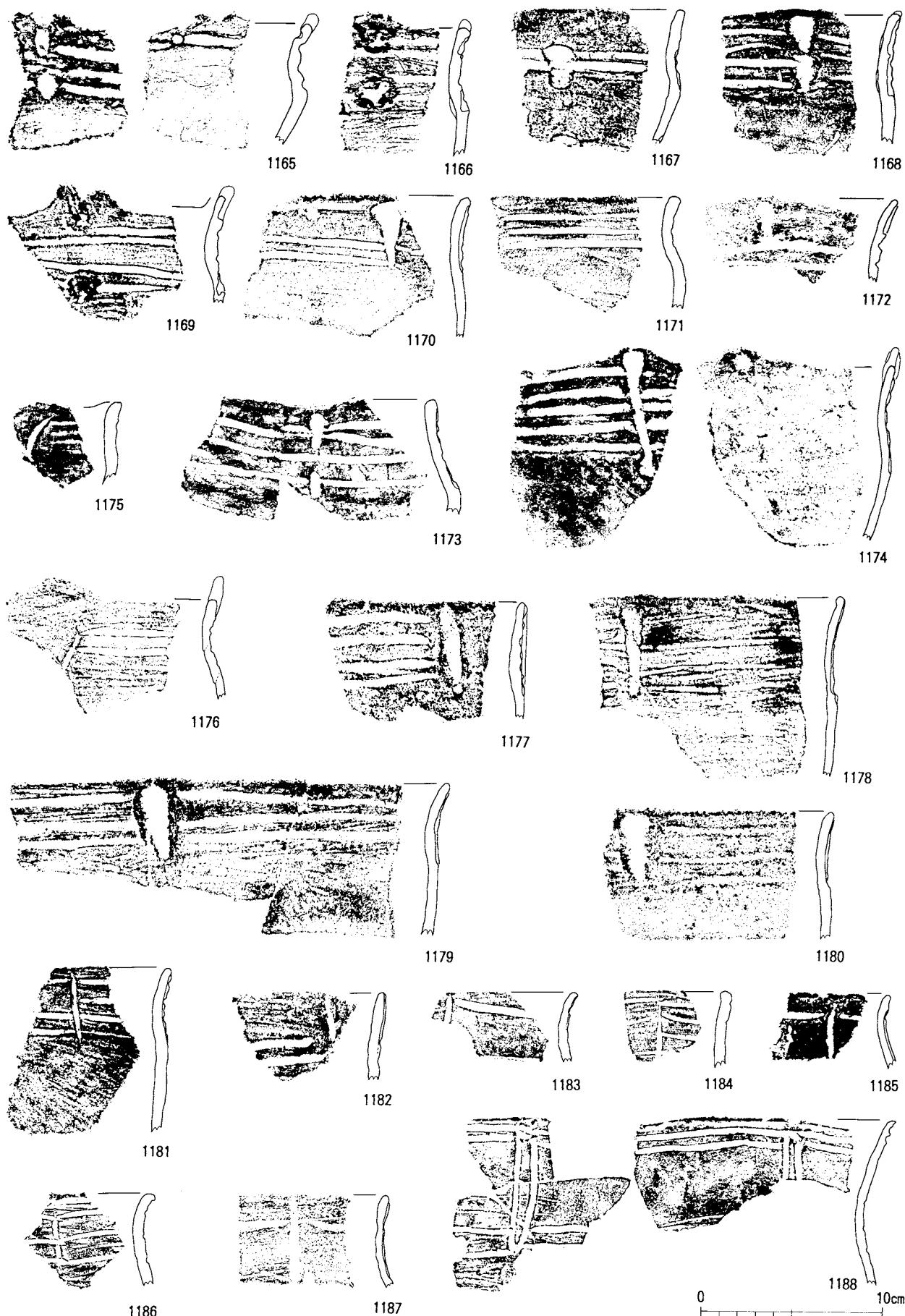
第81図 深鉢A類実測図 (1 : 3)



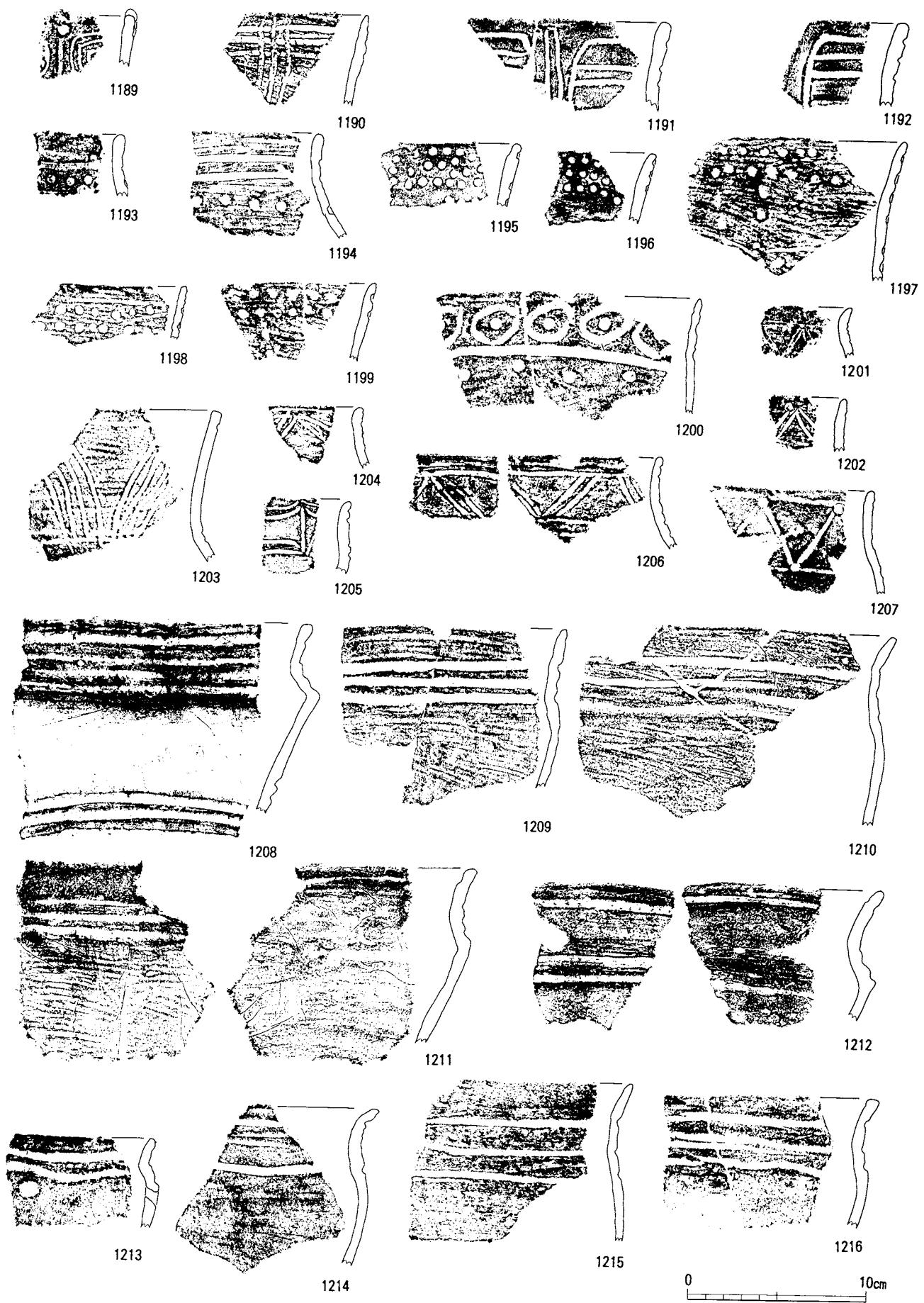
第82図 深鉢A類実測図 (1 : 3)



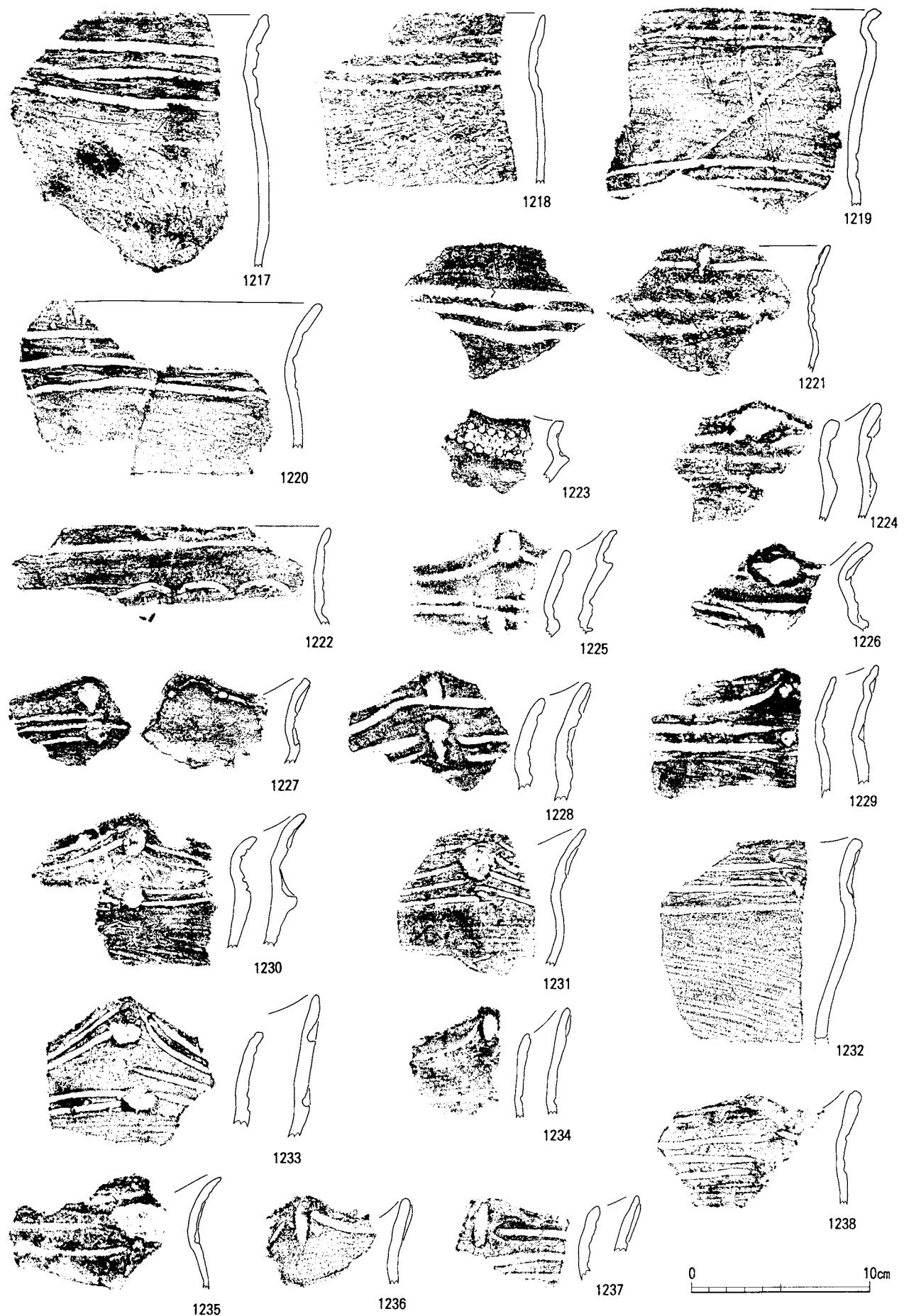
第83図 深鉢A'類実測図 (1 : 3)



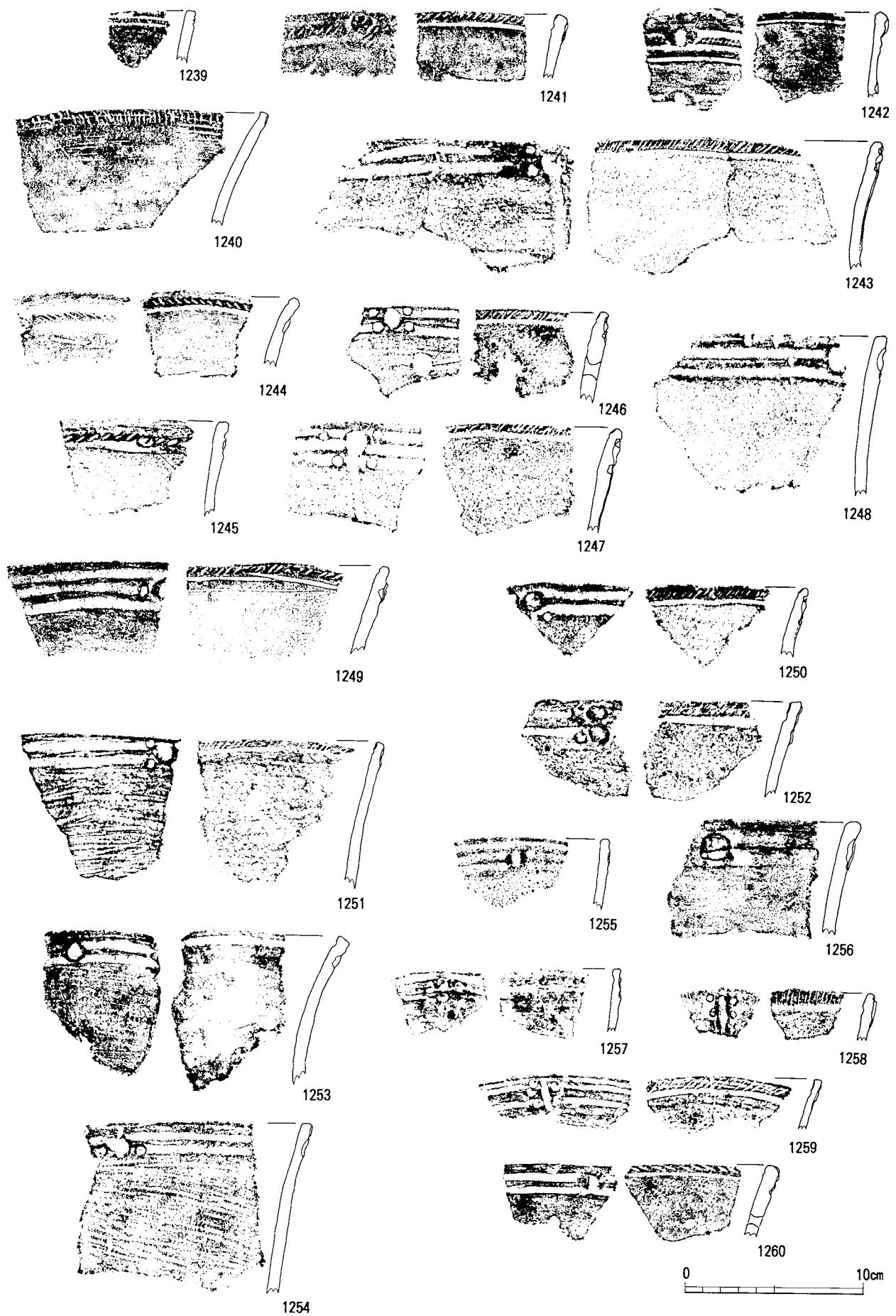
第84図 深鉢A'類実測図 (1 : 3)



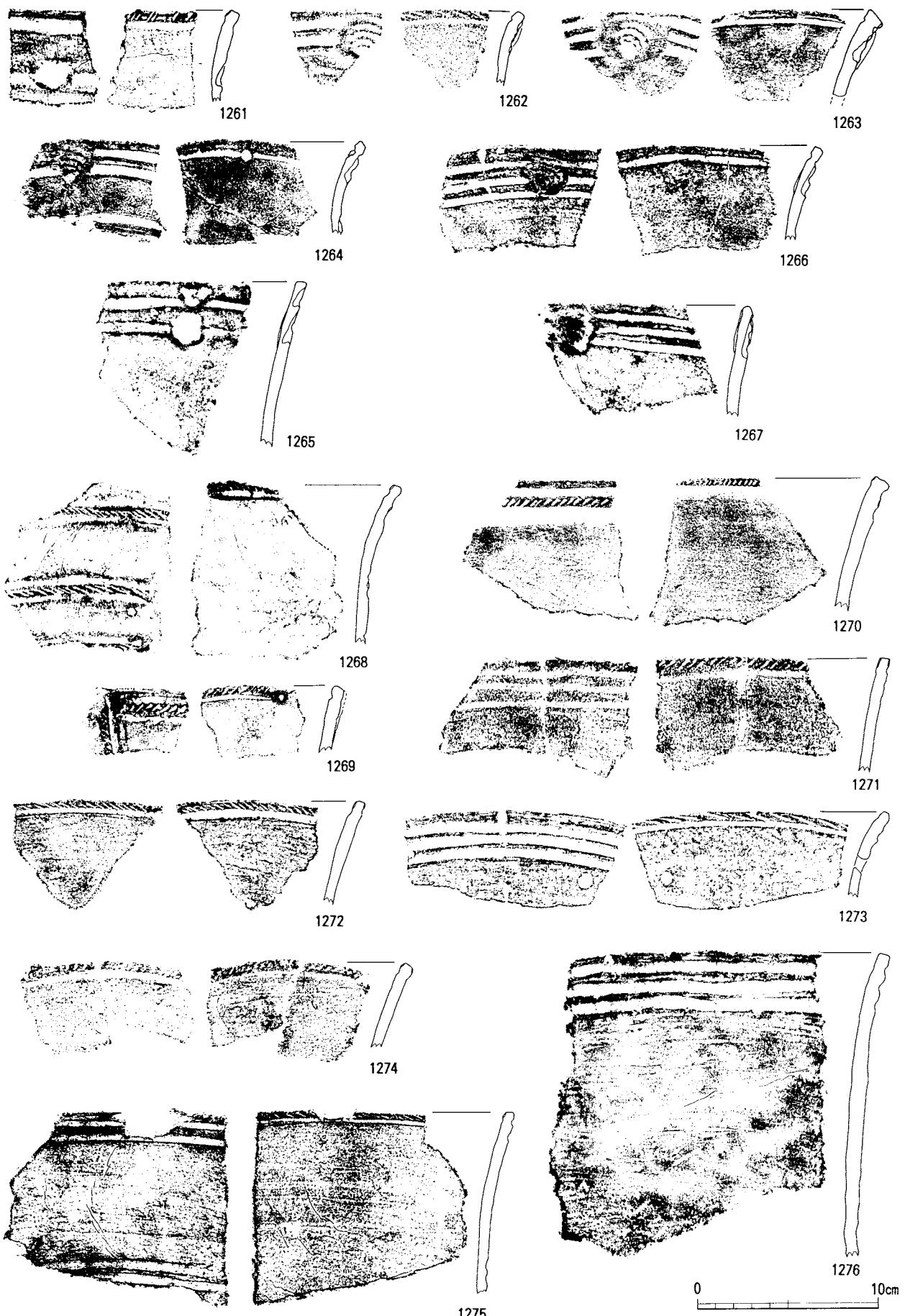
第85図 深鉢A'類実測図 (1 : 3)



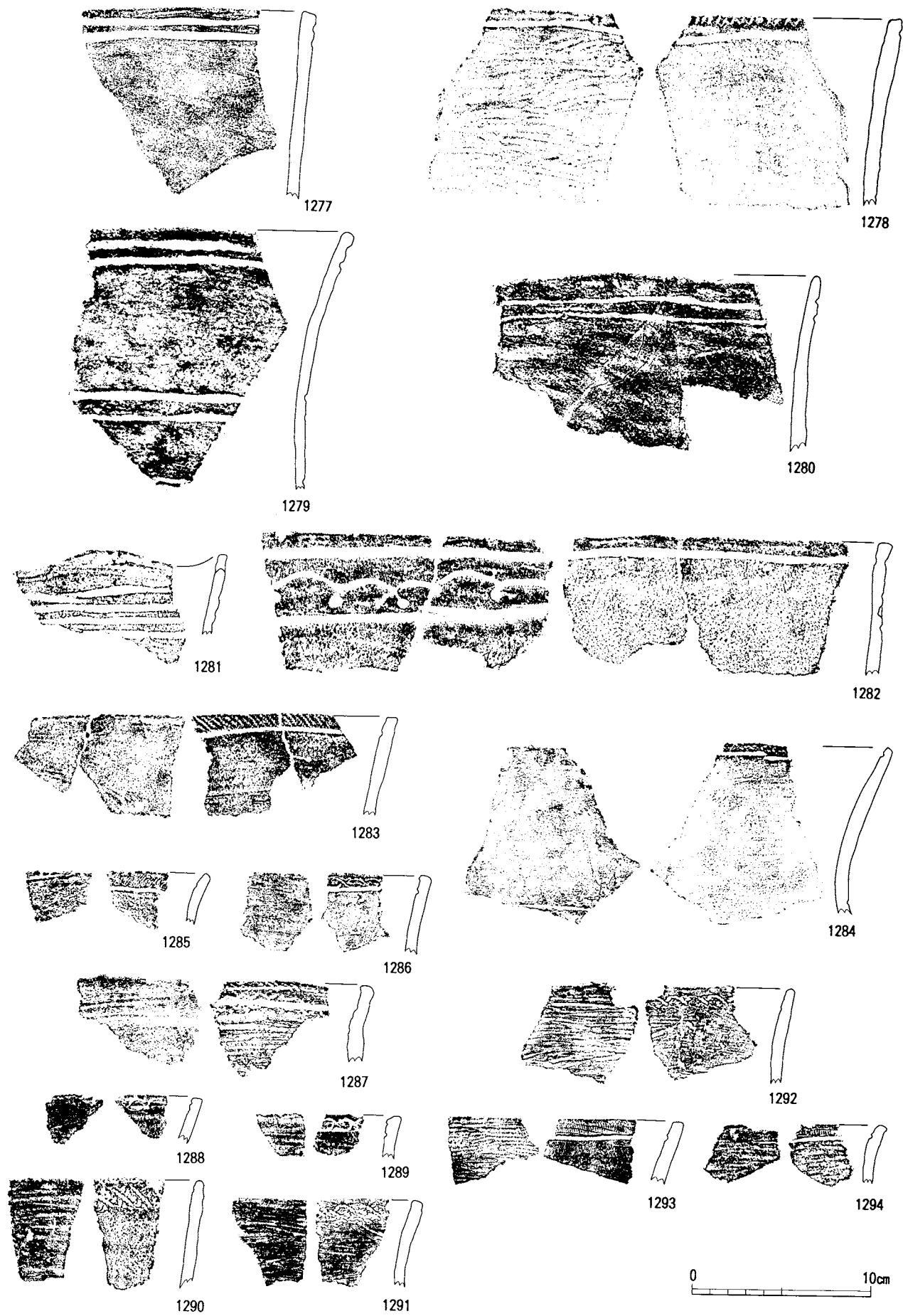
第86図 深鉢A'類実測図 (1 : 3)



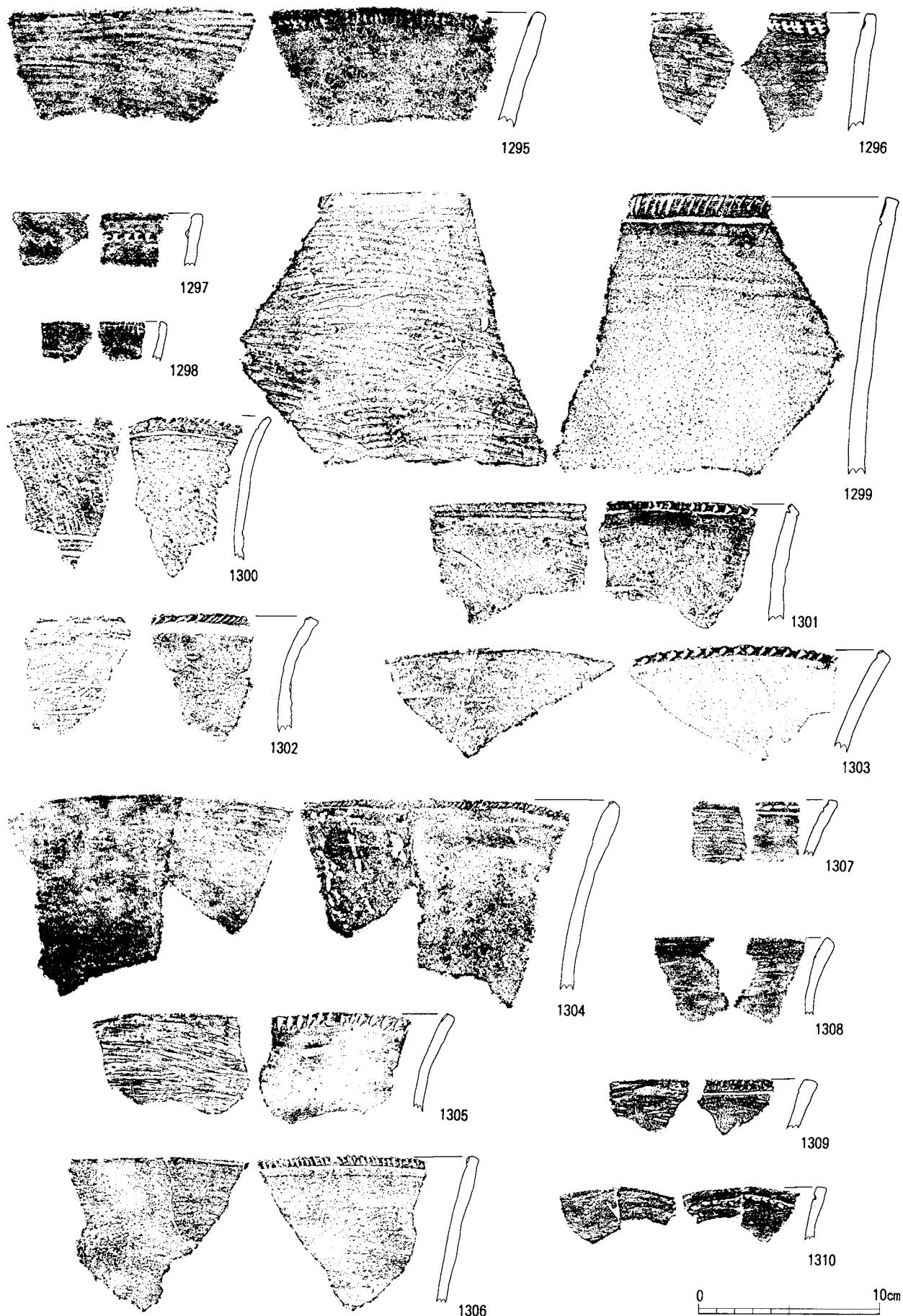
第87図 深鉢B類実測図 (1 : 3)



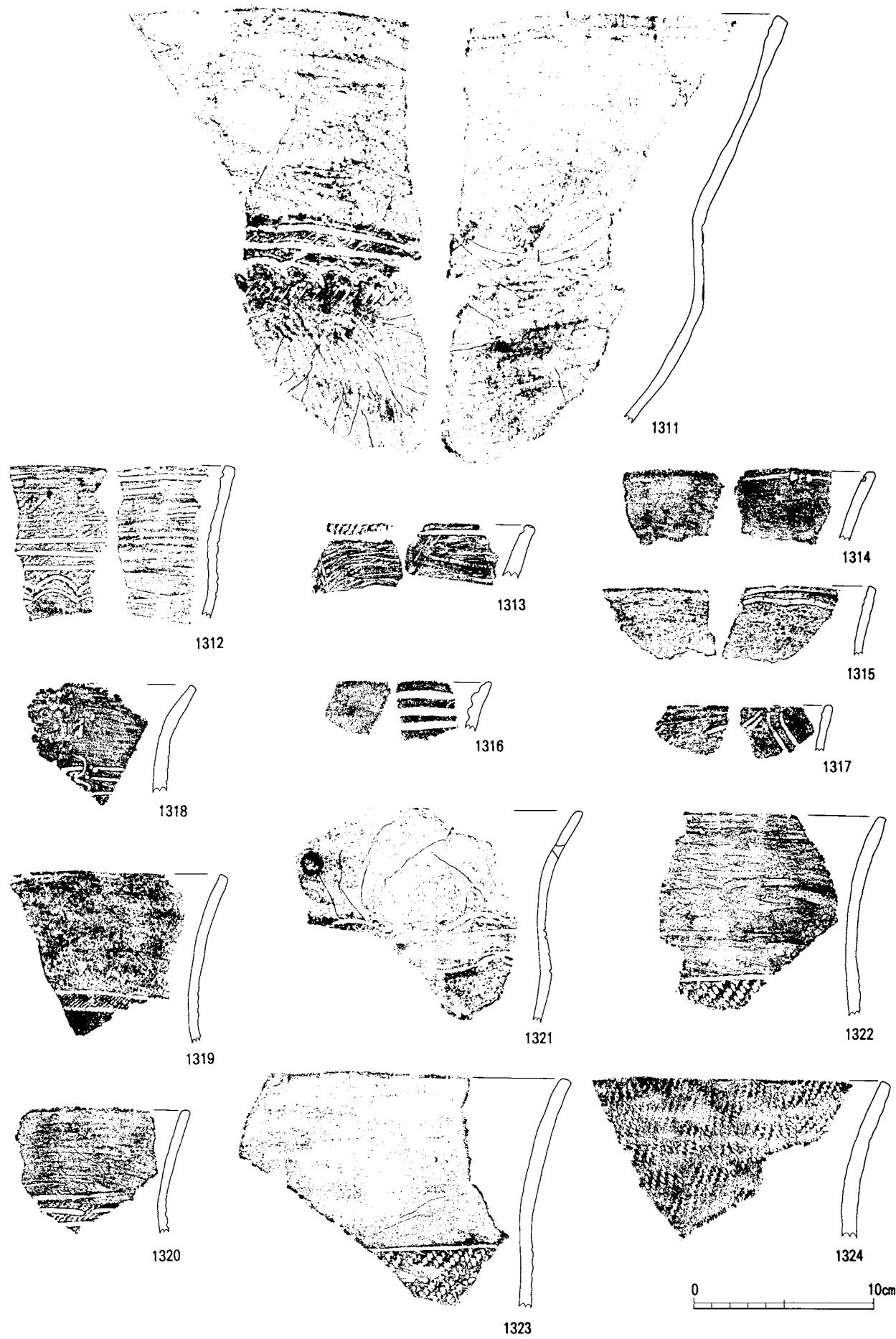
第88図 深鉢B類実測図 (1 : 3)



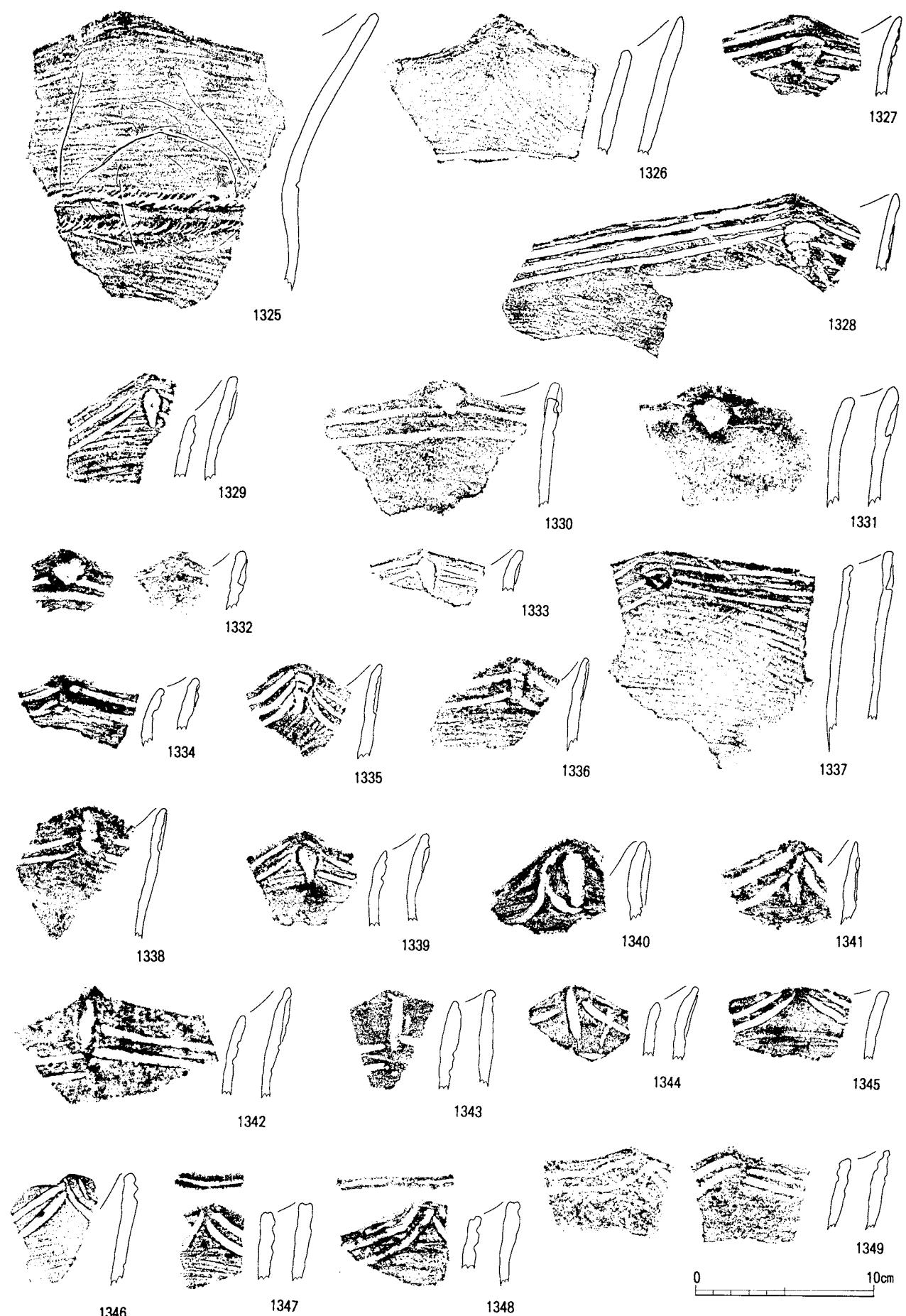
第89図 深鉢B類実測図 (1 : 3)



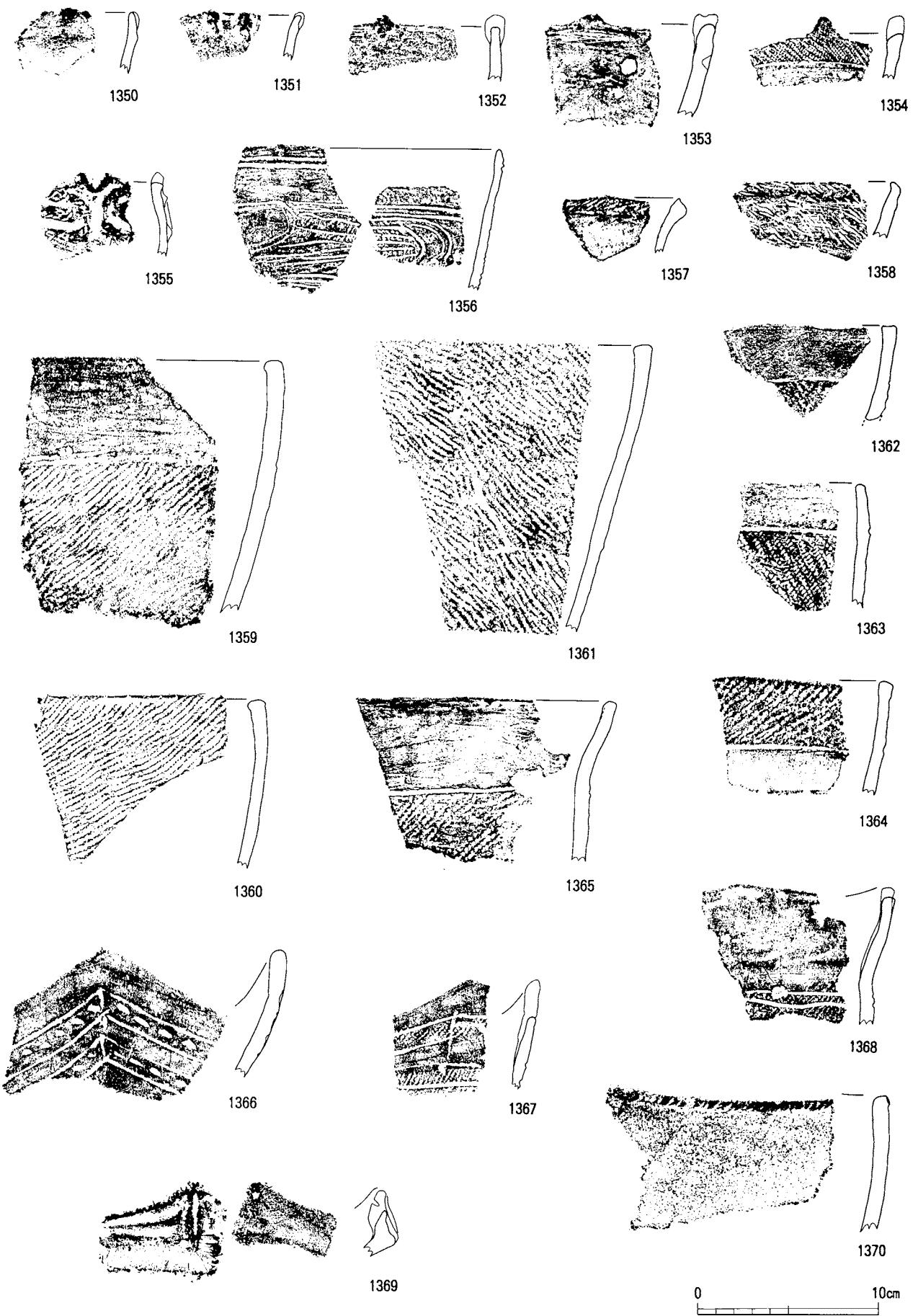
第90図 深鉢B類実測図 (1 : 3)



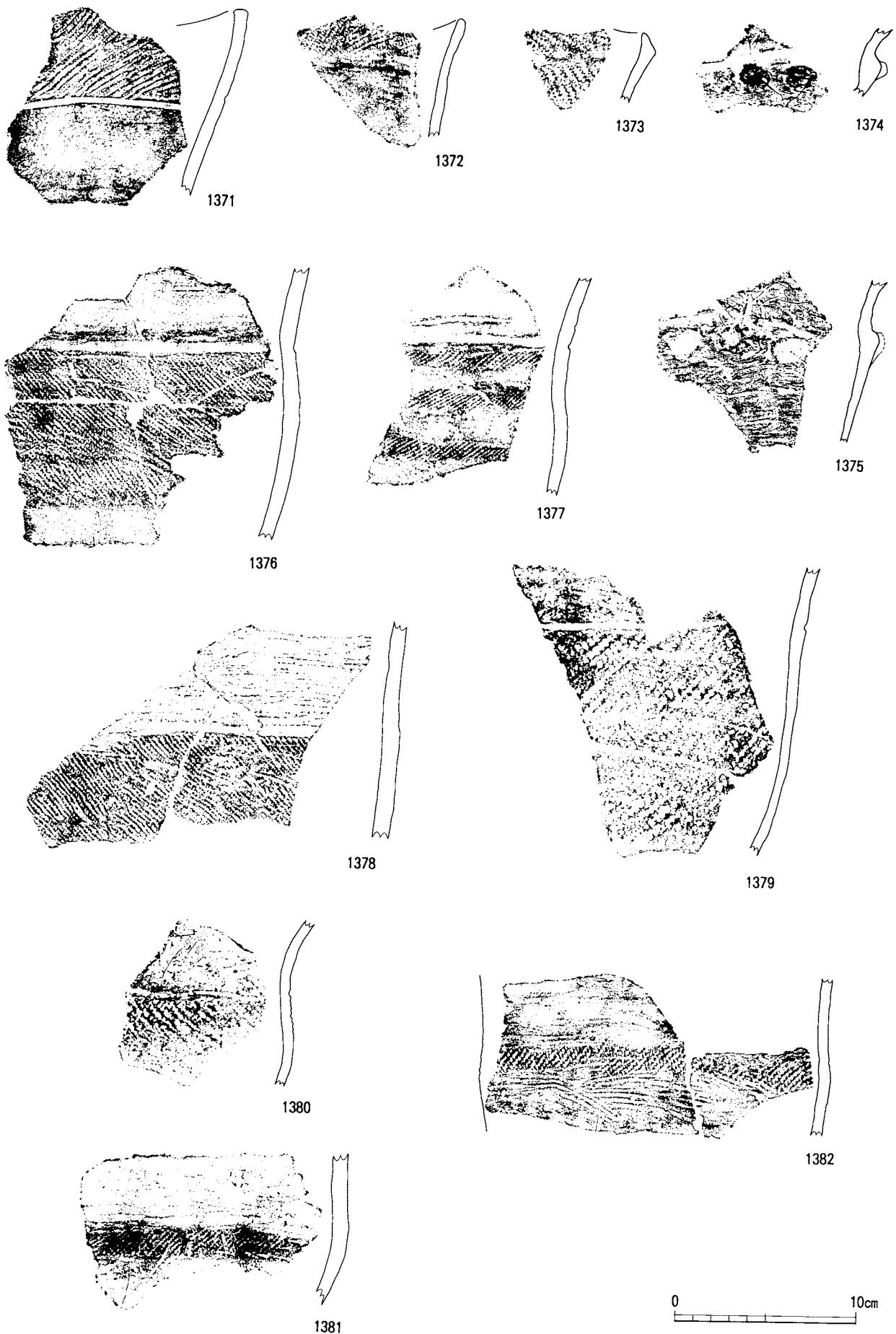
第91図 深鉢B類実測図 (1 : 3)



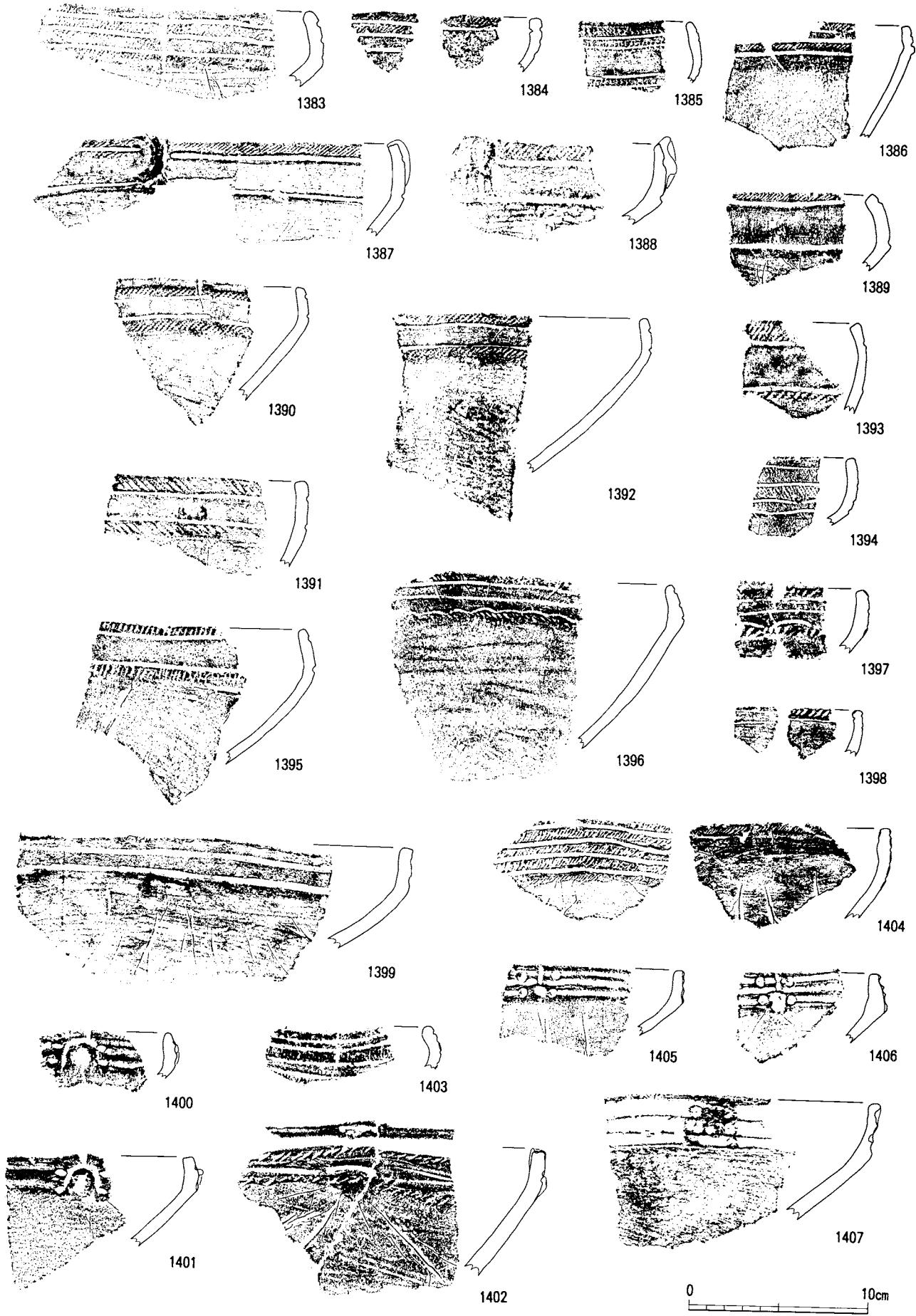
第92図 深鉢B類実測図 (1 : 3)



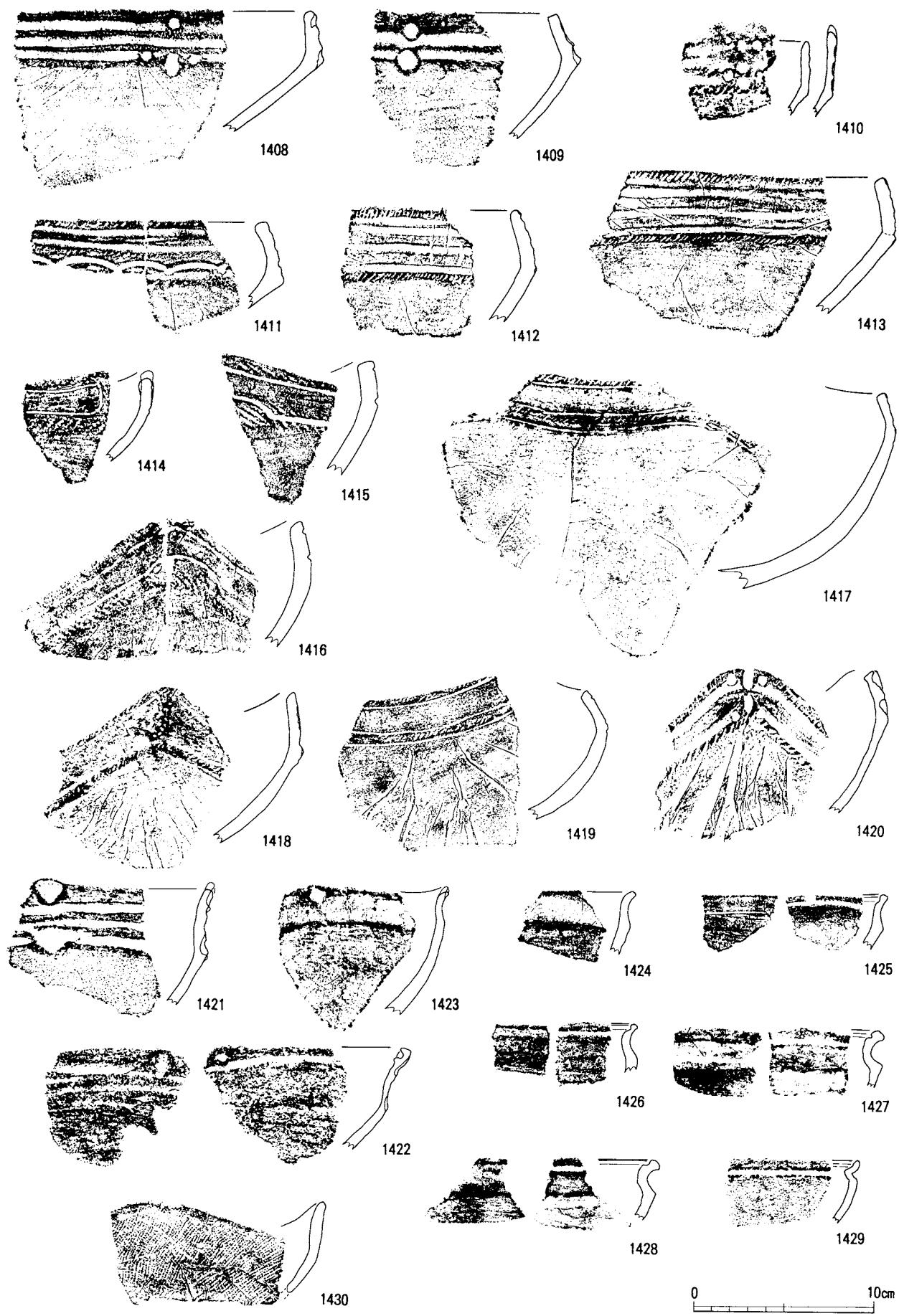
第93図 その他の深鉢実測図 (1 : 3)



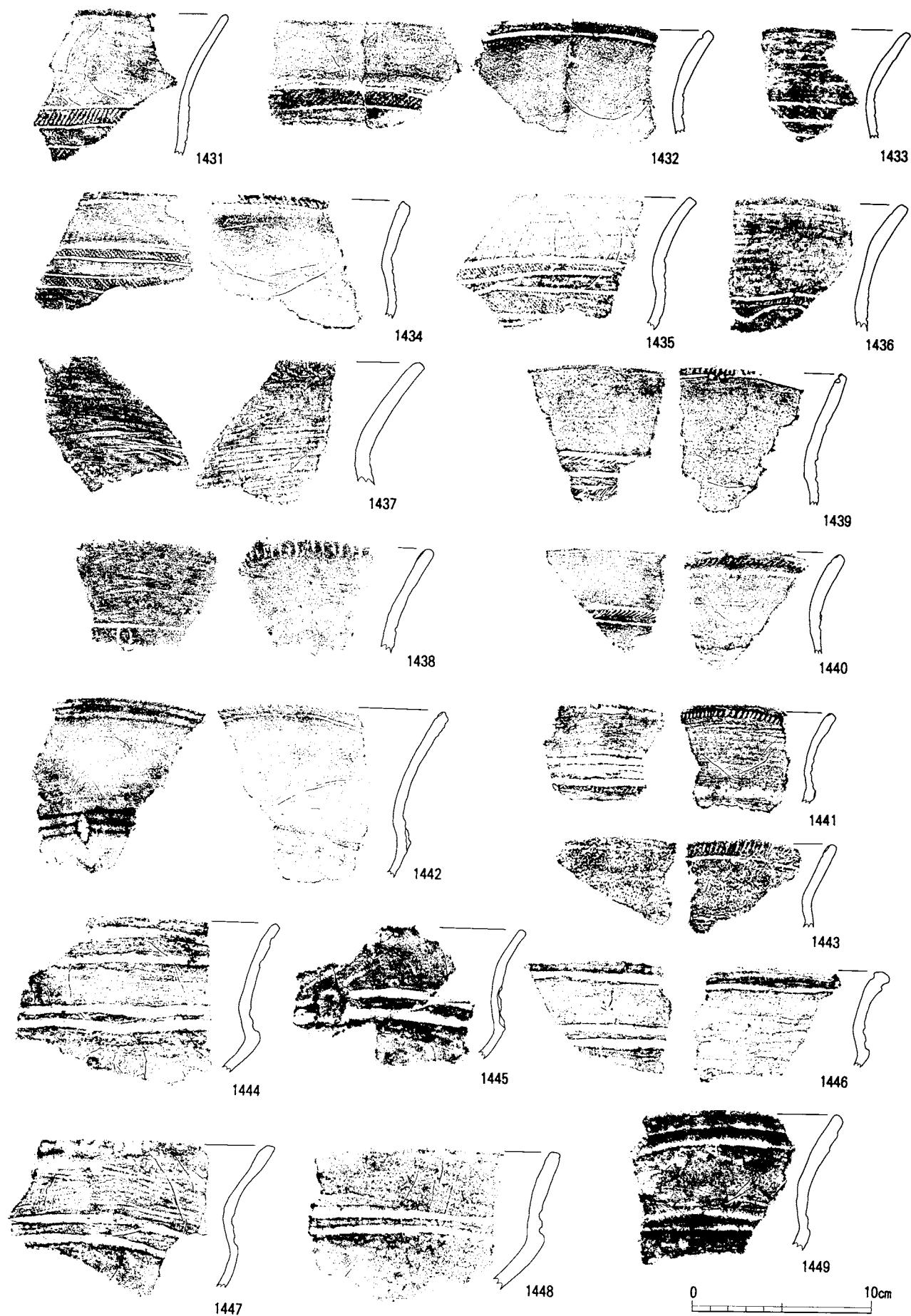
第94図 その他の深鉢実測図 (1 : 3、ただし1382は1 : 4)



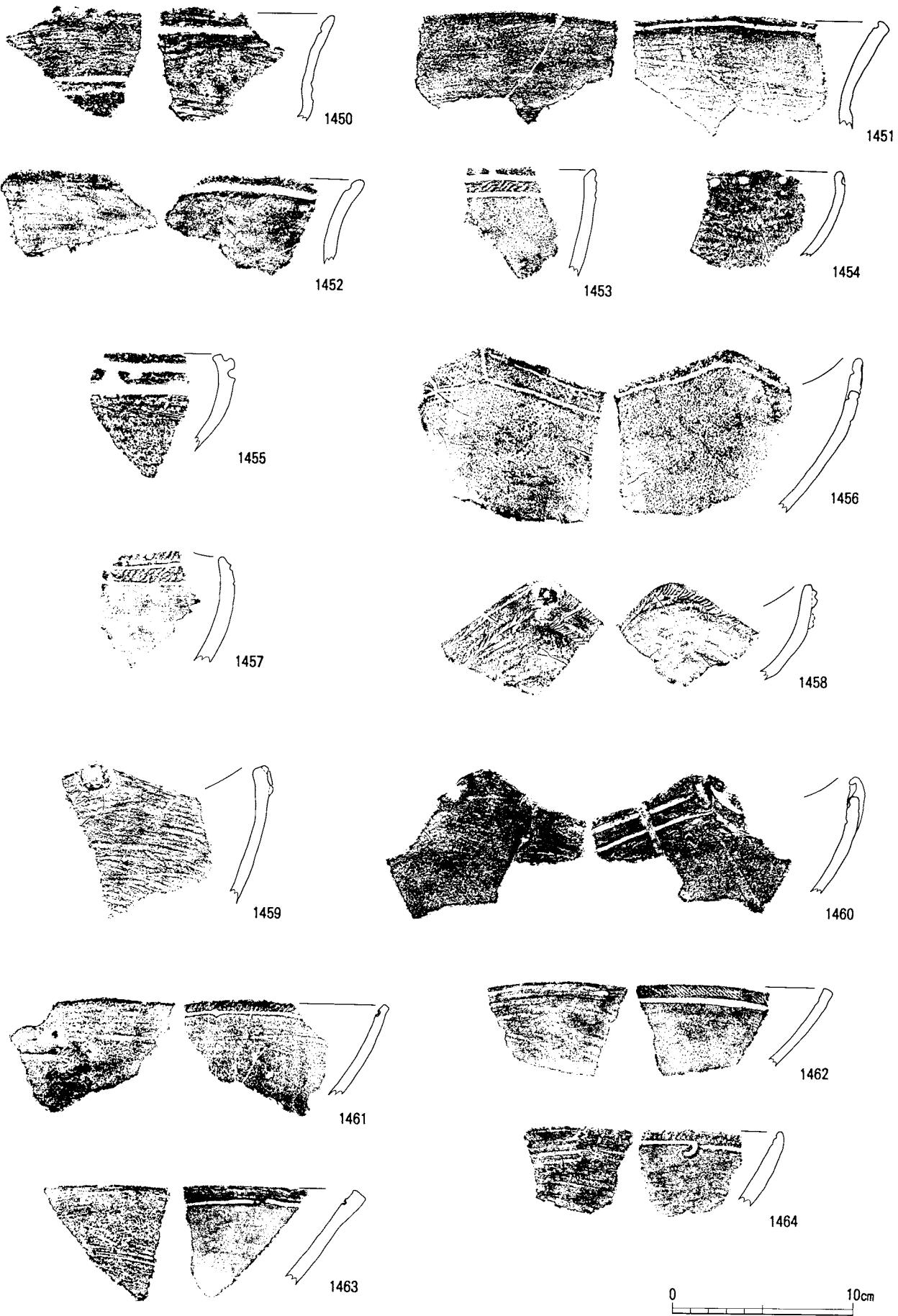
第95図 鉢A類実測図 (1 : 3)



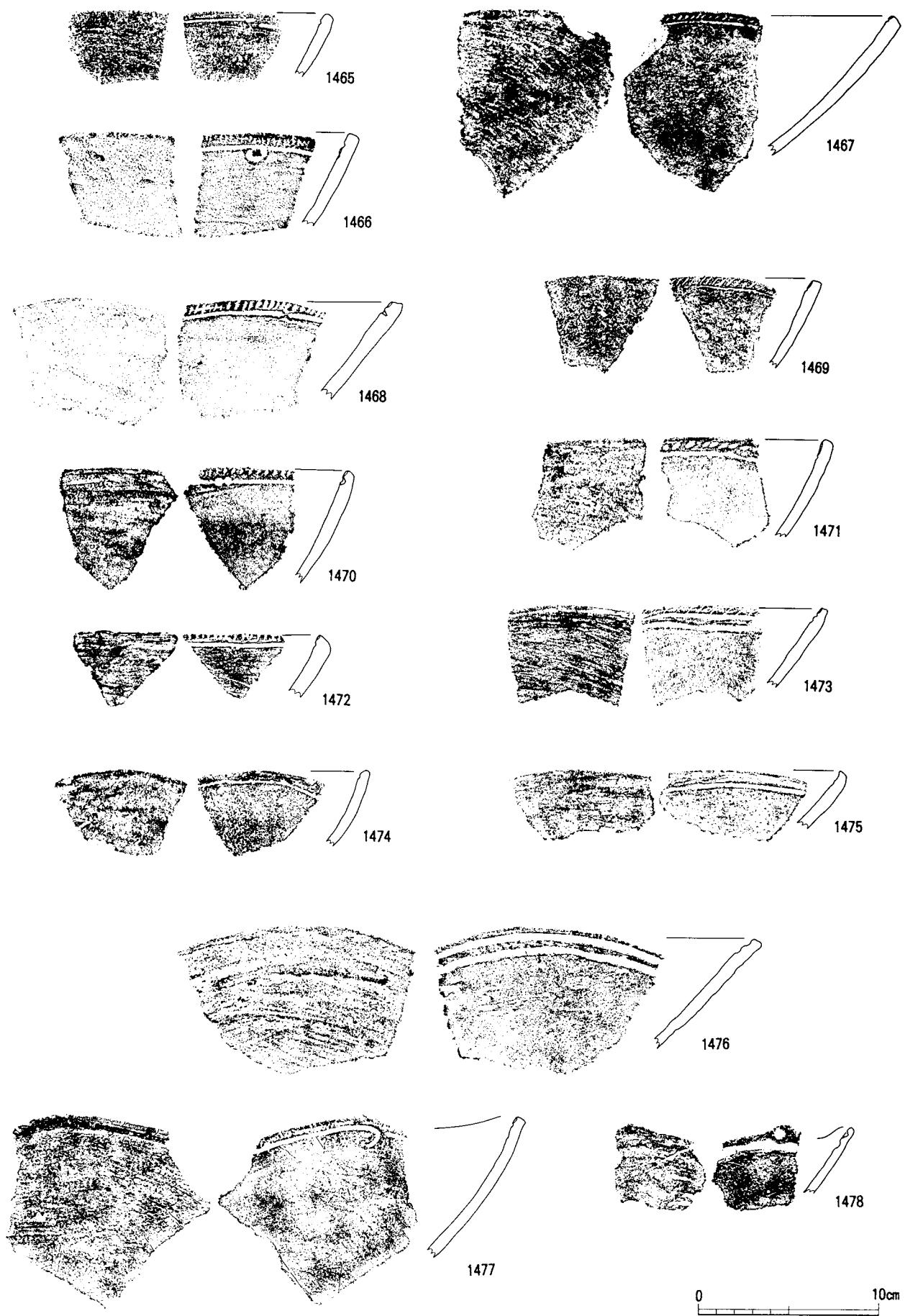
第96図 鉢A・A'・A''類実測図 (1 : 3)



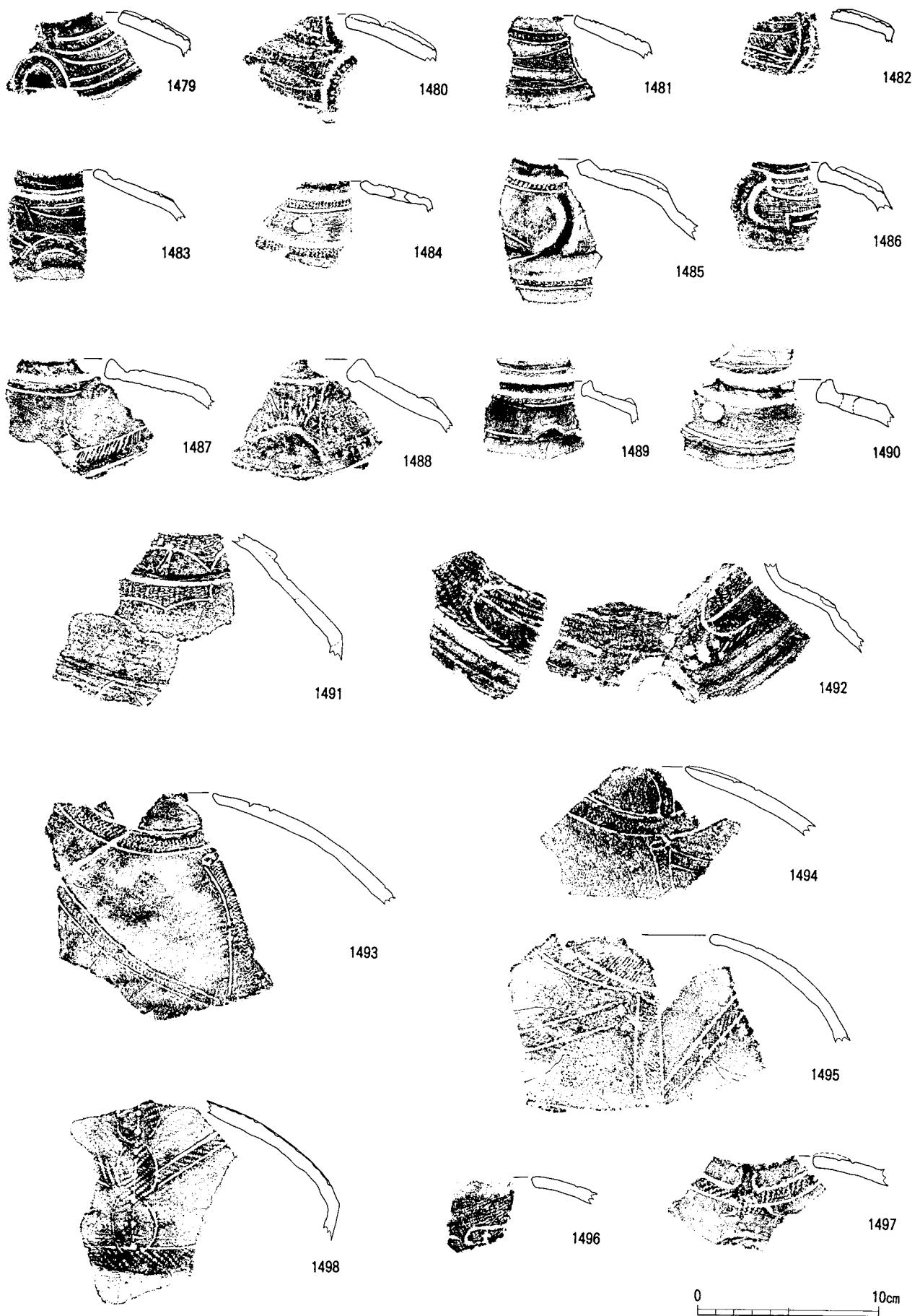
第97図 鉢B類実測図 (1 : 3)



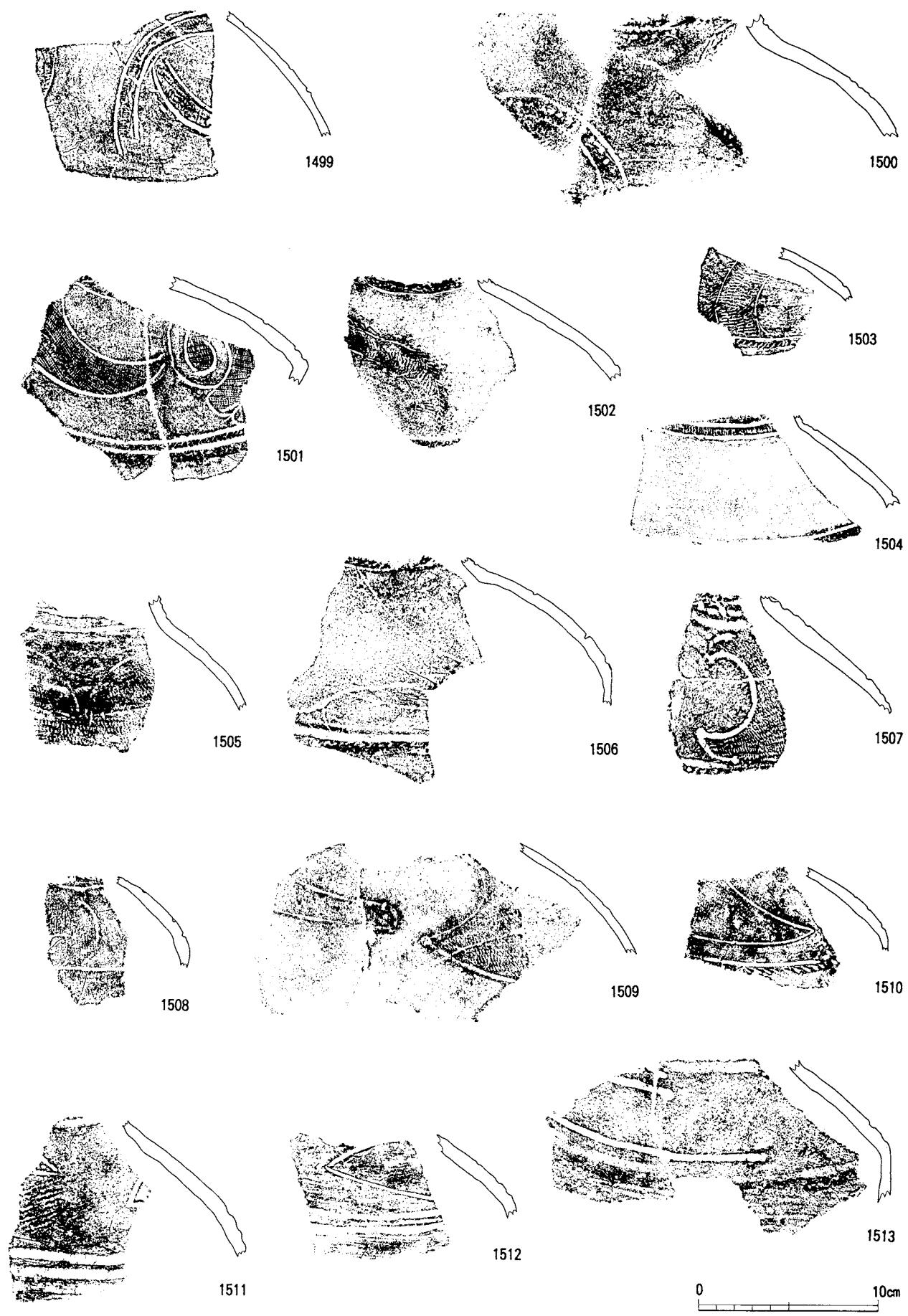
第98図 鉢B・C・D類実測図 (1 : 3)



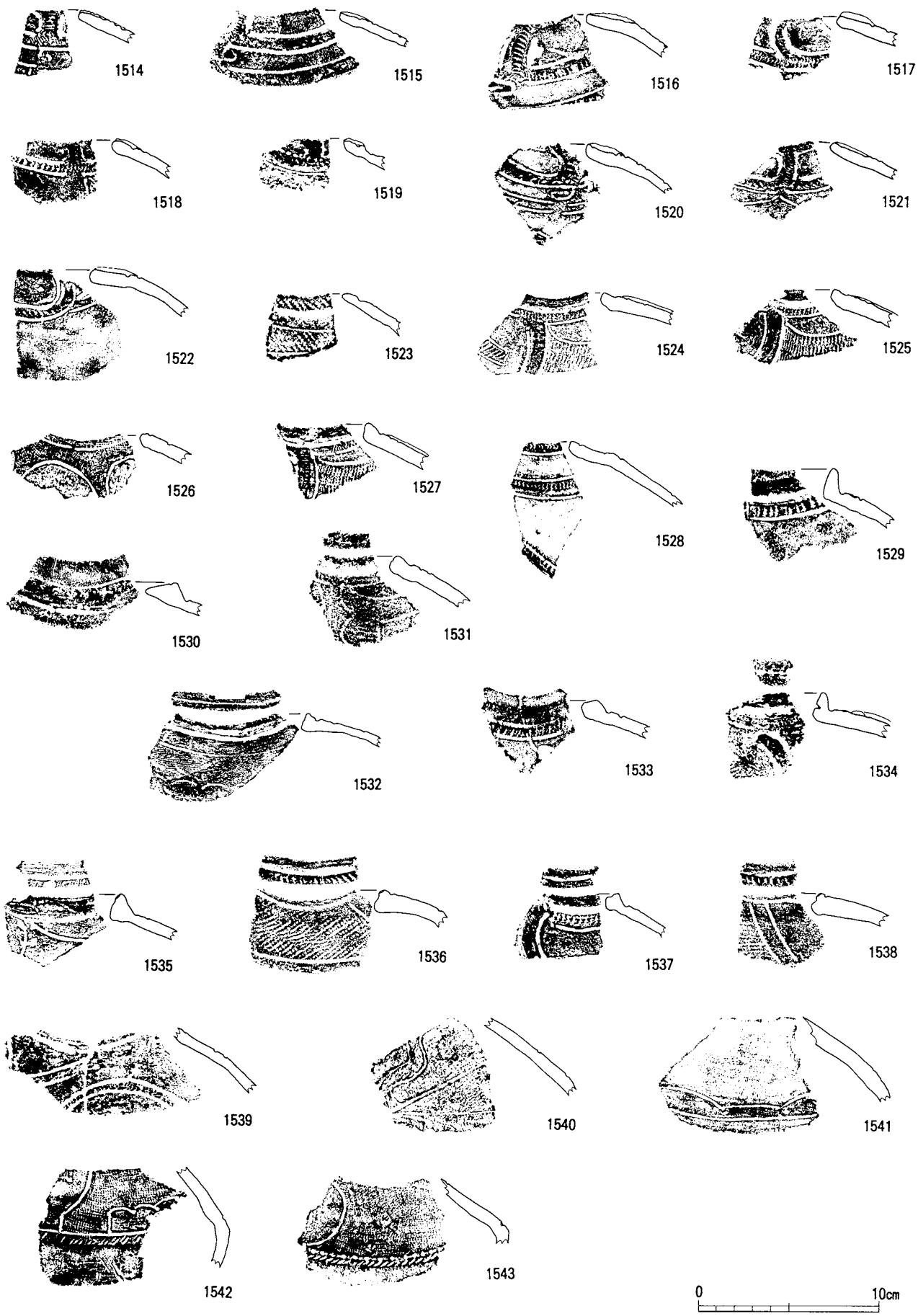
第99図 鉢D類実測図 (1 : 3)



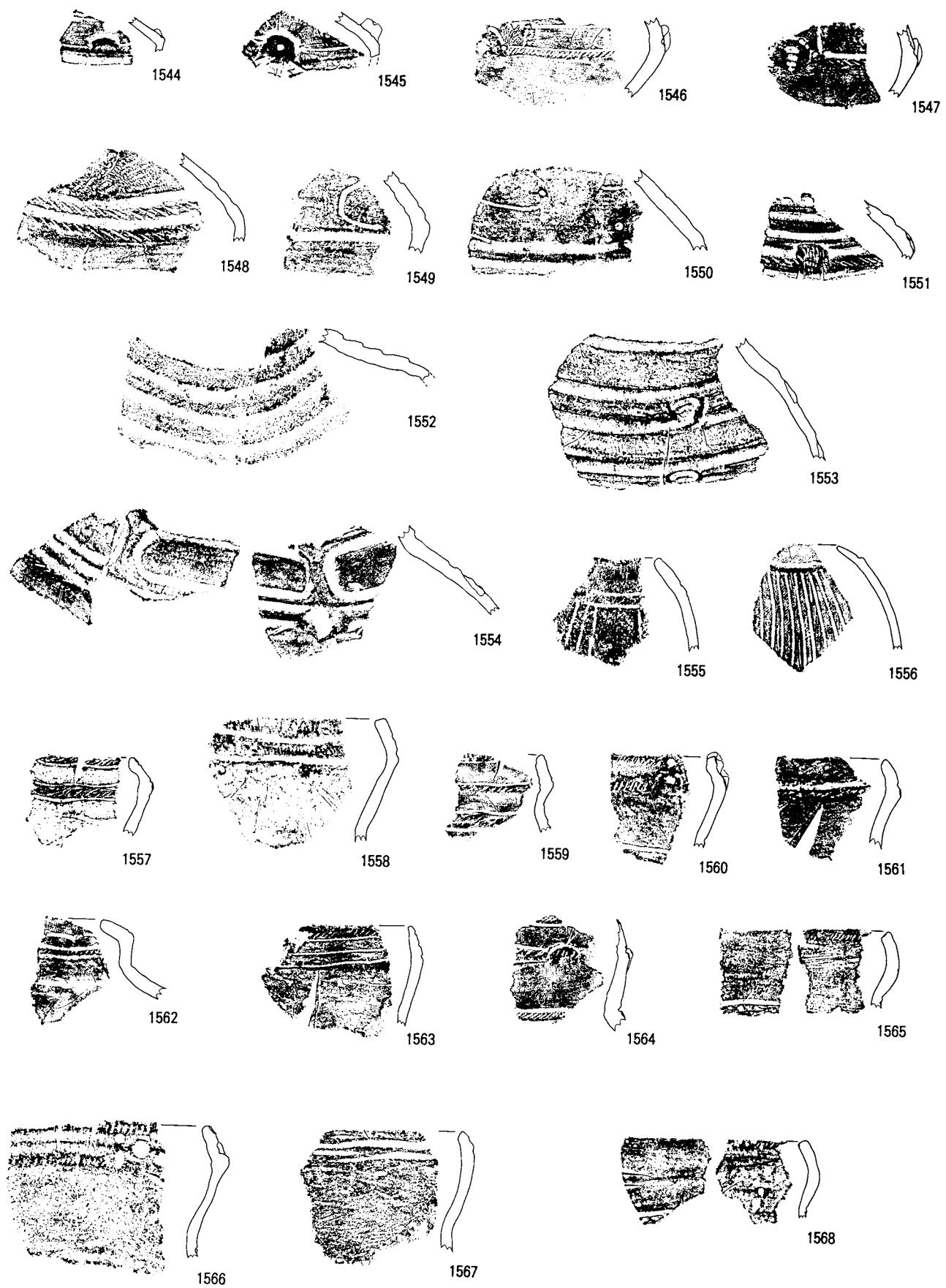
第100図 壺ないしは注口土器A・A'類実測図 (1 : 3)



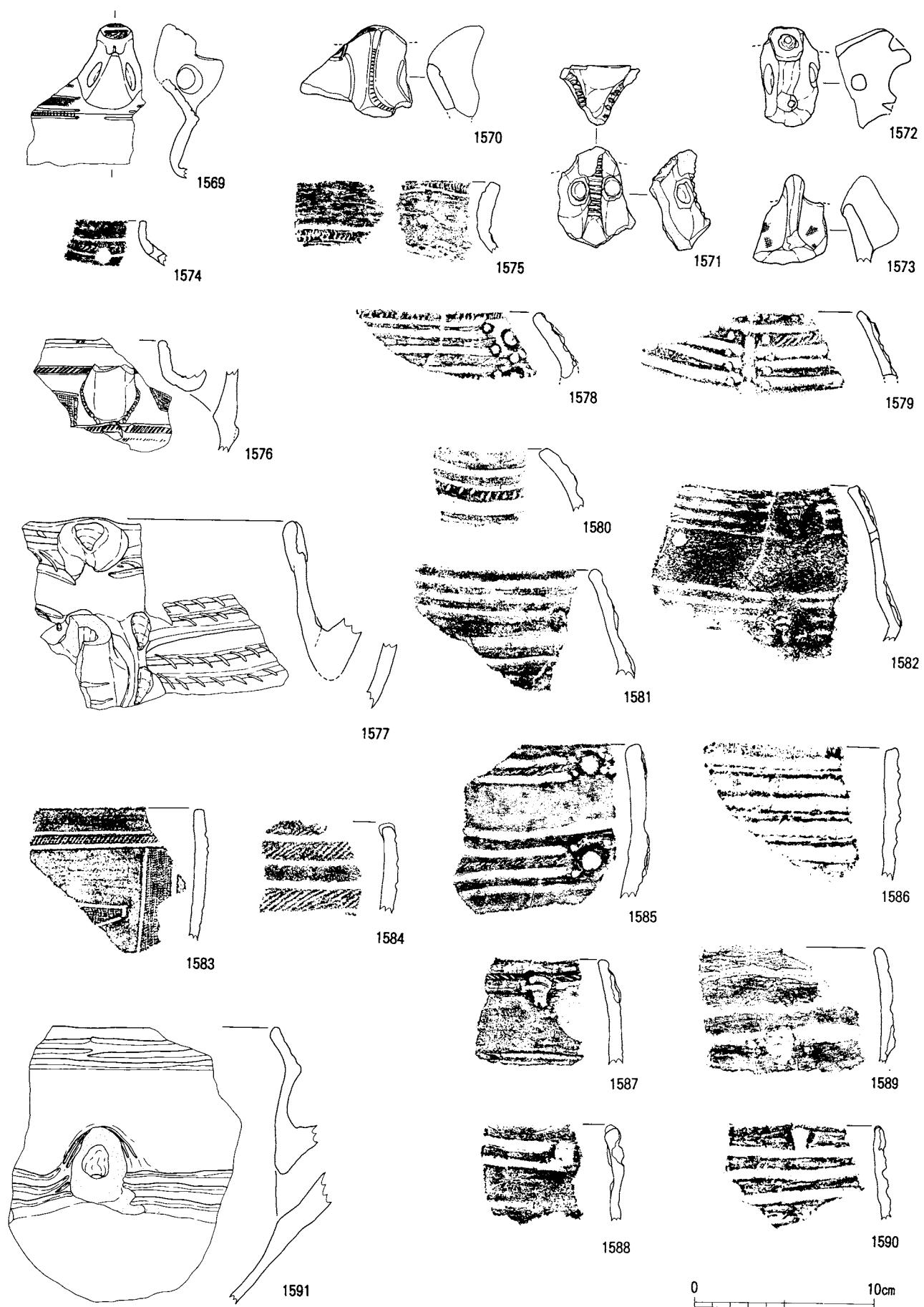
第101図 壺ないしは注口土器A'類実測図 (1 : 3)



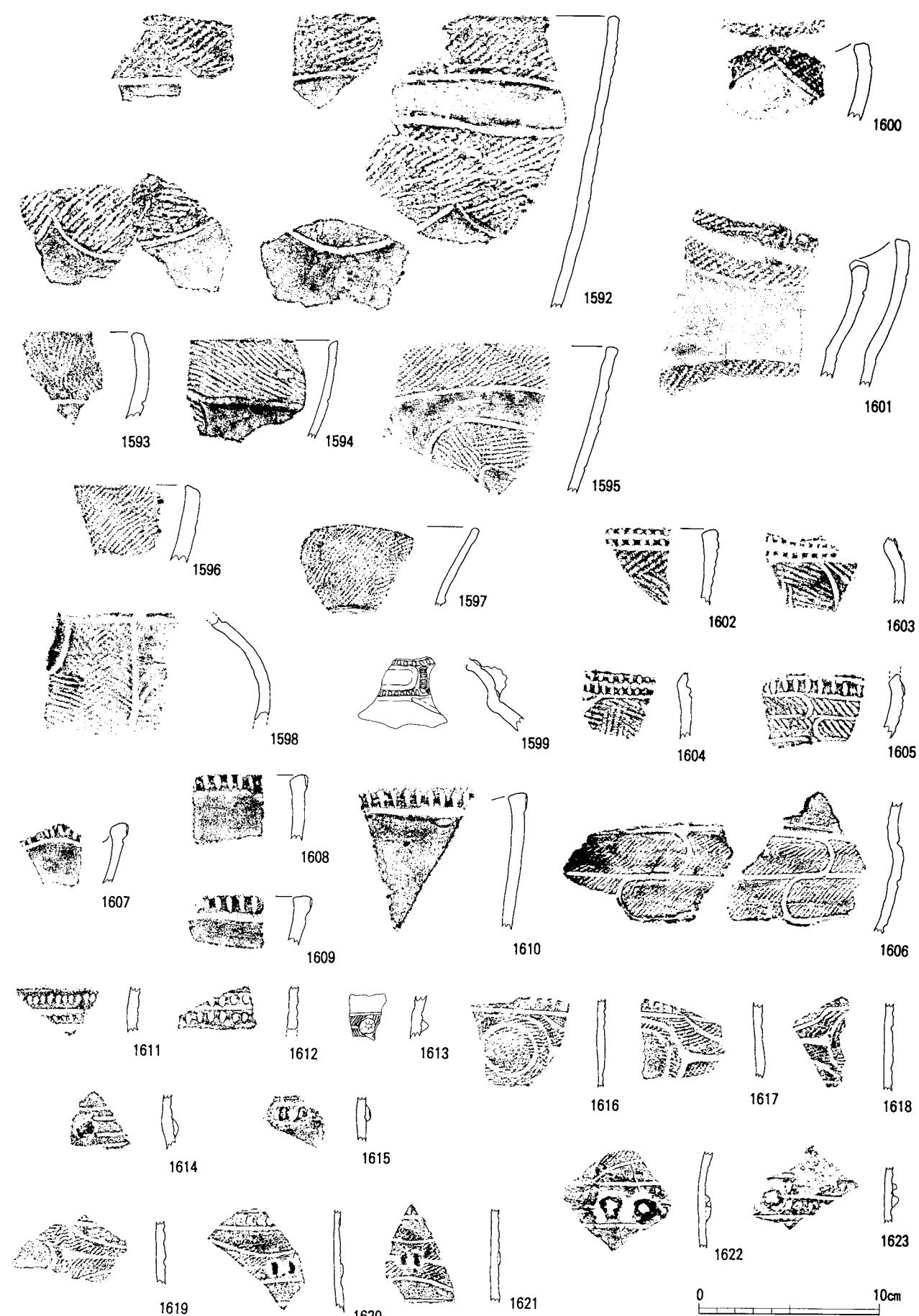
第102図 壺ないしは注口土器A・A'類実測図（1：3）



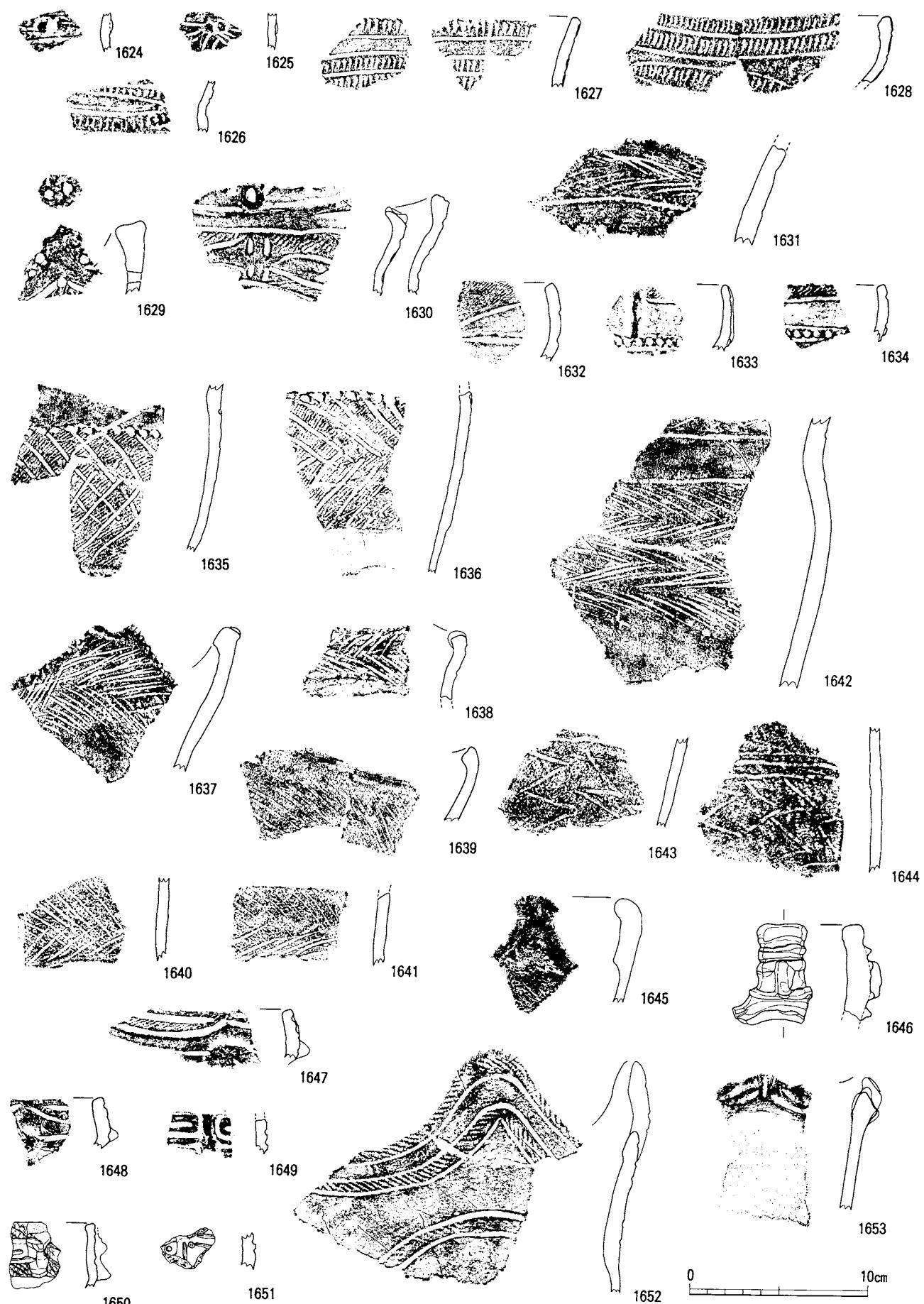
第103図 壺ないしは注口土器A・A'・B類実測図（1：3）



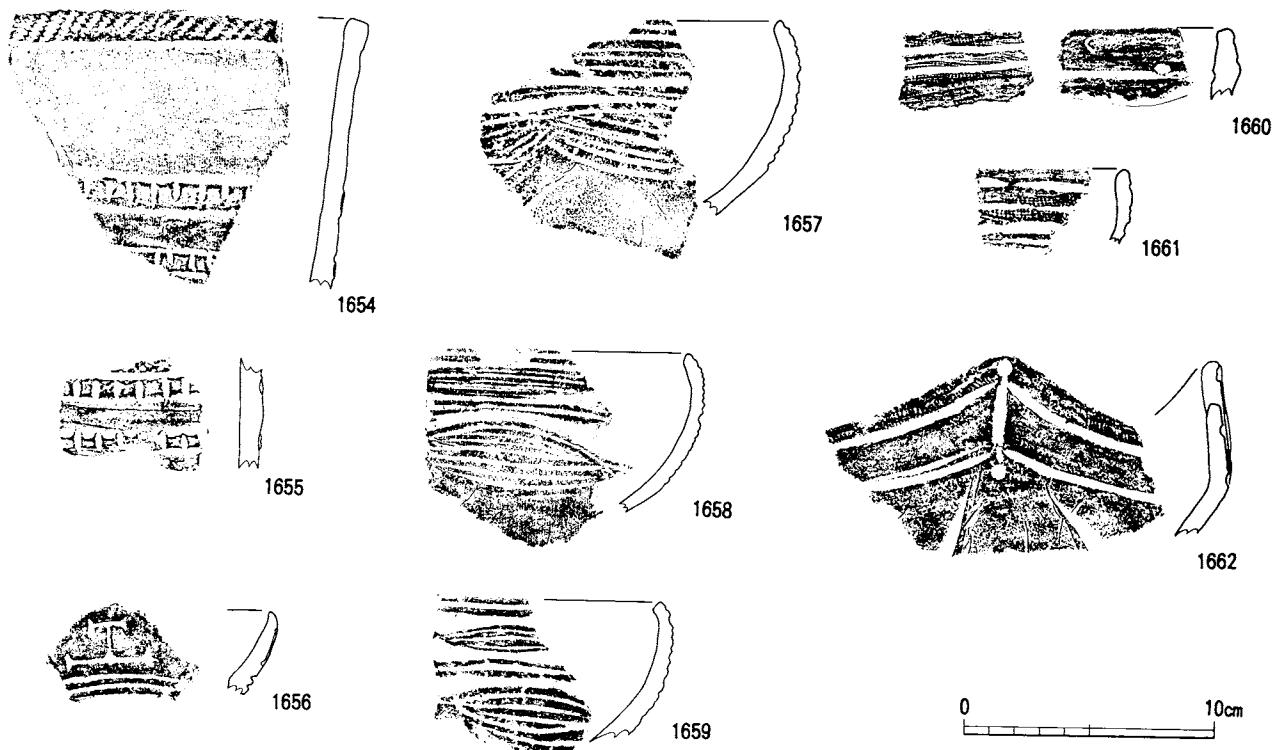
第104図 壺ないしは注口土器B・C・D・E・G類実測図（1：3）



第105図 累系統土器実測図 (1 : 3)



第106図 累系統土器実測図 (1 : 3)



第107図 累系統土器実測図（1：3）



第108図 その他の時期の縄文土器実測図（1：3）

0 10cm

No	分類	出土位置	No	分類	出土位置	No	分類	出土位置
1	深鉢 A b	N11 第Ⅲ層	61	深鉢 A g	C 4-6 第Ⅲ層	121	深鉢 A g	C 2 第Ⅲ層
2	深鉢 A b	N11 第Ⅲ層	62	深鉢 A g	C 4 第Ⅲ層	122	深鉢 A g	C 5 第Ⅲ層
3	深鉢 A b	E 2 第Ⅲ層	63	深鉢 A g	L 5 埋設土器18	123	深鉢 A g	D 6、E 6 第Ⅲ層
4	深鉢 A b	N 8 第Ⅲ層	64	深鉢 A g	D 6 第Ⅲ層	124	深鉢 A g	N 8 第Ⅲ層
5	深鉢 A b	H15、I15 第Ⅲ層	65	深鉢 A g	D 6 第Ⅲ層	125	深鉢 A g'	K 7 第Ⅲ層
6	深鉢 A b	O11 南壁トレンチ	66	深鉢 A g	E 6 第Ⅲ層	126	深鉢 A g'	D 5 第Ⅲ層
7	深鉢 A b	H14 第Ⅲ層	67	深鉢 A g	E 6 第Ⅲ層	127	深鉢 A g'	D 5 第Ⅲ層
8	深鉢 A b	D 8 第Ⅲ層	68	深鉢 A g	D 2 第Ⅲ層	128	深鉢 A g'	E 3 第Ⅲ層
9	深鉢 A b	不明	69	深鉢 A g	D 2 第Ⅲ層	129	深鉢 A g'	B6、C6-7、D7 第Ⅲ層
10	深鉢 A b	E 7 第Ⅲ層	70	深鉢 A g	I 4 第Ⅲ層	130	深鉢 A g'	L 7 第Ⅲ層
11	深鉢 A b	N11 第Ⅲ層	71	深鉢 A g	D 2 第Ⅲ層	131	深鉢 A g'	F 6 第Ⅲ層
12	深鉢 A b	H14 第Ⅲ層	72	深鉢 A g	E 6 第Ⅲ層	132	深鉢 A g'	I 4-7 第Ⅲ層
13	深鉢 A b	C 5、K 8 第Ⅲ層	73	深鉢 A g	D 2 第Ⅲ層	133	深鉢 A i	N 4-7 第Ⅲ層
14	深鉢 A b	N 4 第Ⅲ層	74	深鉢 A g	E 6 第Ⅲ層	134	深鉢 A k	N 2 第Ⅲ層
15	深鉢 A b	H14 第Ⅲ層	75	深鉢 A g	D 6 第Ⅲ層	135	深鉢 A' g	N 3-4 第Ⅲ層
16	深鉢 A b	D 4 第Ⅲ層	76	深鉢 A g'	I 10 第Ⅲ層	136	深鉢 A' g	N 6 第Ⅲ層
17	深鉢 A b'	C 5 第Ⅲ層	77	深鉢 A g'	E 2 第Ⅲ層	137	深鉢 A' g	D 4 第Ⅲ層
18	深鉢 A b'	C 2 第Ⅲ層	78	深鉢 A g'	C 6 第Ⅲ層	138	深鉢 A' g	I 1 土坑8
19	深鉢 A b'	C 1 西壁トレンチ	79	深鉢 A g'	C 5 第Ⅲ層	139	深鉢 A' g	H 7 第Ⅲ層
20	深鉢 A c	H 3 第Ⅲ層	80	深鉢 A g'	F 7 第Ⅲ層	140	深鉢 A' g	K 7 第Ⅲ層
21	深鉢 A c	D 2、F 2 第Ⅲ層	81	深鉢 A g'	E 6 第Ⅲ層	141	深鉢 A' g	K 7 第Ⅲ層
22	深鉢 A c	D 8 第Ⅲ層	82	深鉢 A g'	不明	142	深鉢 A' g	K 8 第Ⅲ層
23	深鉢 A c	N 8 第Ⅲ層	83	深鉢 A g'	J 5 埋設土器14	143	深鉢 A' g	L 8 第Ⅲ層
24	深鉢 A c	F7 第Ⅲ層、G5 土坑6	84	深鉢 A g'	C 3 第Ⅲ層	144	深鉢 A' g	C 4 第Ⅲ層
25	深鉢 A c	E 6 第Ⅲ層	85	深鉢 A g'	N 4 第Ⅲ層	145	深鉢 A' g	D 4 第Ⅲ層
26	深鉢 A c	E 6-7 第Ⅲ層	86	深鉢 A g'	D 2 第Ⅲ層	146	深鉢 A' g	K 7 第Ⅲ層
27	深鉢 A c	D 3 第Ⅲ層	87	深鉢 A f	B 5 第Ⅲ層	147	深鉢 A' g	D 3 第Ⅲ層
28	深鉢 A c	C 7 第Ⅲ層	88	深鉢 A g	B 5、C 5 第Ⅲ層	148	深鉢 A' g	F 3 埋設土器8
29	深鉢 A c	N 5 第Ⅲ層	89	深鉢 A g	N 7 第Ⅲ層	149	深鉢 A' g	K 7 第Ⅲ層
30	深鉢 A c'	C 5 第Ⅲ層	90	深鉢 A g	E 2 埋設土器1	150	深鉢 A' g	H 3 埋設土器11
31	深鉢 A c'	C 6 第Ⅲ層	91	深鉢 A g	K 10 第Ⅲ層	151	深鉢 A' g	N 9 第Ⅲ層
32	深鉢 A c'	C 7 第Ⅲ層	92	深鉢 A g'	N 8 第Ⅲ層	152	深鉢 A' h	L 6 第Ⅲ層
33	深鉢 A c'	B 4 第Ⅲ層	93	深鉢 A g'	D 6 第Ⅲ層	153	深鉢 A' i	K 5-6、L 5 第Ⅲ層
34	深鉢 A d	D 4 第Ⅲ層	94	深鉢 A g'	不明	154	深鉢 A' g	D 4 第Ⅲ層
35	深鉢 A d	O 2 南壁トレンチ	95	深鉢 A g	K 6 埋設土器19	155	深鉢 A' g	D 5 第Ⅲ層
36	深鉢 A e	C 2、I 12 第Ⅲ層	96	深鉢 A g'	H 4 埋設土器12	156	深鉢 A' g	J 10 第Ⅲ層
37	深鉢 A e	D 7 第Ⅲ層	97	深鉢 A g'	N 9 第Ⅲ層	157	深鉢 A' g	E 3 埋設土器4
38	深鉢 A e	K 7 第Ⅲ層	98	深鉢 A g'	N 1 第Ⅲ層	158	深鉢 A' g	K 4 第Ⅲ層
39	深鉢 A e	C 2、D 4 第Ⅲ層	99	深鉢 A g'	G 7 第Ⅲ層	159	深鉢 B 1	E 2、G 3 第Ⅲ層
40	深鉢 A e	I 12 第Ⅲ層	100	深鉢 A g'	F 6 第Ⅲ層	160	深鉢 B 1	C 6 第Ⅲ層
41	深鉢 A e	C 6、K 10 第Ⅲ層	101	深鉢 A g'	N 10 第Ⅲ層	161	深鉢 B 1	C 5 第Ⅲ層
42	深鉢 A f	C 7 第Ⅲ層	102	深鉢 A g'	E 4 埋設土器5	162	深鉢 B 1	C 6-7、F 8 第Ⅲ層
43	深鉢 A f	C 2 第Ⅲ層	103	深鉢 A j	H 14 第Ⅲ層	163	深鉢 B 1	E 4 第Ⅲ層
44	深鉢 A f	B 5 第Ⅲ層	104	深鉢 A j	N 10 第Ⅲ層	164	深鉢 B 1	J 9 第Ⅲ層
45	深鉢 A f	I 9、J 9 第Ⅲ層	105	深鉢 A j	O 11 南壁トレンチ	165	深鉢 B 1	D 3 第Ⅲ層
46	深鉢 A f	C 5 第Ⅲ層	106	深鉢 A j	F 6、M 1 第Ⅲ層	166	深鉢 B 1	K 10 第Ⅲ層
47	深鉢 A f	J 10 第Ⅲ層	107	深鉢 A k	I 13 第Ⅲ層	167	深鉢 B 1	D 2 第Ⅲ層
48	深鉢 A f	C 2 第Ⅲ層	108	深鉢 A b	N 11 第Ⅲ層	168	深鉢 B 1	C 3-5 第Ⅲ層
49	深鉢 A f	K 10 第Ⅲ層	109	深鉢 A b	M 4、N 10 第Ⅲ層	169	深鉢 B 1	C 5 第Ⅲ層
50	深鉢 A f	C 5、D 3 第Ⅲ層	110	深鉢 A b	M 8 第Ⅲ層	170	深鉢 B 1	D 2 第Ⅲ層
51	深鉢 A f	D 3 第Ⅲ層	111	深鉢 A b	D 4 第Ⅲ層	171	深鉢 B 1	N 1 埋設土器24
52	深鉢 A f	K 10 第Ⅲ層	112	深鉢 A b	E 6 第Ⅲ層	172	深鉢 B 1	C 7、D 7 第Ⅲ層
53	深鉢 A f	C 4 第Ⅲ層	113	深鉢 A b'	I 4 第Ⅲ層	173	深鉢 B 1	D 7 第Ⅲ層
54	深鉢 A f	C 4、D 2、K 7 第Ⅲ層	114	深鉢 A b'	C 6 第Ⅲ層	174	深鉢 B 1	D 2 第Ⅲ層
55	深鉢 A f	K 5 埋設土器15	115	深鉢 A c	O 8 南壁トレンチ	175	深鉢 B 1	C 7 第Ⅲ層
56	深鉢 A f	C 6 第Ⅲ層	116	深鉢 A c	H 12 第Ⅲ層	176	深鉢 B 1	C 6 第Ⅲ層
57	深鉢 A f	C 2 第Ⅲ層	117	深鉢 A c	I 7 第Ⅲ層	177	深鉢 B 1	N 9 第Ⅲ層
58	深鉢 A g	B 3 第Ⅲ層	118	深鉢 A f	C 5 第Ⅲ層	178	深鉢 B 1	C 4 第Ⅲ層
59	深鉢 A g	E 2 埋設土器2	119	深鉢 A f	C 6 第Ⅲ層	179	深鉢 B 1	C 4 第Ⅲ層
60	深鉢 A g	C 5 第Ⅲ層	120	深鉢 A f	B 4 第Ⅲ層	180	深鉢 B 1	E 6 第Ⅲ層

第2表 繩文土器分類及び出土位置一覧表(1)

No	分類	出土位置	No	分類	出土位置	No	分類	出土位置
181	深鉢 B 1	C 5・6 第Ⅲ層	241	鉢 A	M 11 第Ⅲ層	301	鉢 B	K 8 第Ⅲ層
182	深鉢 B 1	M 8 第Ⅲ層	242	鉢 A	C 6 第Ⅲ層	302	鉢 B	E 7 第Ⅲ層
183	深鉢 B 1	B 5 第Ⅲ層	243	鉢 A	C 6 第Ⅲ層	303	鉢 B	G 8 第Ⅲ層
184	深鉢 B 1	N 7 第Ⅲ層	244	鉢 A	D 6 第Ⅲ層	304	鉢 B	H 7 第Ⅲ層
185	深鉢 B 1	D 2 第Ⅲ層	245	鉢 A	C 4、D 4 第Ⅲ層	305	鉢 B	M 4 第Ⅲ層
186	深鉢 B 1	D 7 第Ⅲ層	246	鉢 A	C 6、D 5 第Ⅲ層	306	鉢 C	L 10 第Ⅲ層
187	深鉢 B 1	D 3 第Ⅲ層	247	鉢 A	C 7 第Ⅲ層	307	鉢 C	I 9 第Ⅲ層
188	深鉢 B 1	D 1・2・3 第Ⅲ層	248	鉢 A	C 5 第Ⅲ層	308	鉢 C	M 2 第Ⅲ層
189	深鉢 B 1	E 2 埋設土器2	249	鉢 A	C 5 第Ⅲ層	309	鉢 C	B 4・5 第Ⅲ層
190	深鉢 B 1	I 1 第Ⅲ層	250	鉢 A	C 4 第Ⅲ層	310	鉢 C	N 1 第Ⅲ層
191	深鉢 B 1	D 3 第Ⅲ層	251	鉢 A	C 4 第Ⅲ層	311	鉢 C	E 6 第Ⅲ層
192	深鉢 B 1	D 3 第Ⅲ層	252	鉢 A	C 4 第Ⅲ層	312	鉢 C	I 1 第Ⅲ層
193	深鉢 B 1	D 2 第Ⅲ層	253	鉢 A	D 2 第Ⅲ層	313	鉢 D	O 5 南壁トレンチ
194	深鉢 B 2	O 3 南壁トレンチ	254	鉢 A	C 3 第Ⅲ層	314	鉢 D	D 5 第Ⅲ層
195	深鉢 B 2	M 3 第Ⅲ層	255	鉢 A	K 6 第Ⅲ層	315	鉢 D	D 7 第Ⅲ層
196	深鉢 B 2	C 6 第Ⅲ層	256	鉢 A	C 3 第Ⅲ層	316	鉢 D	H 1 第Ⅲ層
197	深鉢 B 2	不明	257	鉢 A	D 2 第Ⅲ層	317	鉢 D	I 13 第Ⅲ層
198	深鉢 B 2	D 2 第Ⅲ層	258	鉢 A	N 4 第Ⅲ層	318	鉢 D	C 5 第Ⅲ層
199	深鉢 B 2	C 4、D 4 第Ⅲ層	259	鉢 A	K 9 第Ⅲ層	319	鉢 D	D 2 第Ⅲ層
200	深鉢 B 2	J 9 第Ⅲ層	260	鉢 A	J 10 第Ⅲ層	320	鉢 D	不明
201	深鉢 B 2	D 4 第Ⅲ層	261	鉢 A	D 5 第Ⅲ層	321	鉢 D	H 1 第Ⅲ層
202	深鉢 B 2	C 6 第Ⅲ層	262	鉢 A	K 10 第Ⅲ層	322	鉢 D	D 2 第Ⅲ層
203	深鉢 B 2	C 6 第Ⅲ層	263	鉢 A	B 4 第Ⅲ層	323	鉢 D	D 6 第Ⅲ層
204	深鉢 B 2	C 6 第Ⅲ層	264	鉢 A	I 1 第Ⅲ層	324	鉢 D	I 1 第Ⅲ層
205	深鉢 B 2	C 5 第Ⅲ層	265	鉢 A	K 10 第Ⅲ層	325	鉢 D	I 1 第Ⅲ層
206	深鉢 B 2	D 3 第Ⅲ層	266	鉢 A	D 5 第Ⅲ層	326	鉢 D	C 4 第Ⅲ層
207	深鉢 B 2	C 3 第Ⅲ層	267	鉢 A	C 4 第Ⅲ層	327	鉢 D	I 1 第Ⅲ層
208	深鉢 B 2	C 5 第Ⅲ層	268	鉢 A	I 1 第Ⅲ層	328	鉢 D	H 13 第Ⅲ層
209	深鉢 B 2	C 6 第Ⅲ層	269	鉢 A'	D 8 第Ⅲ層	329	鉢 D	N 4 第Ⅲ層
210	深鉢 B 2	D 2 第Ⅲ層	270	鉢 A'	H 1 第Ⅲ層	330	鉢 D	C 3 第Ⅲ層
211	深鉢 B 2	C 2 第Ⅲ層	271	鉢 A'	C 3 第Ⅲ層	331	鉢 D	D 2 第Ⅲ層
212	深鉢 B 2	D 3 第Ⅲ層	272	鉢 A'	N 1 第Ⅲ層	332	鉢 D	D 7 第Ⅲ層
213	深鉢 B 2	C 4、D 7 第Ⅲ層	273	鉢 A'	N 4 第Ⅲ層	333	鉢 D	N 10 第Ⅲ層
214	深鉢 B 2	N 4 第Ⅲ層	274	鉢 A'	N 9 第Ⅲ層	334	鉢 D	L 6 第Ⅲ層
215	深鉢 B 3	C 3 第Ⅲ層	275	鉢 A'	D 4 第Ⅲ層	335	鉢 無文	E 6 第Ⅲ層
216	深鉢 B 3	N 1 第Ⅲ層	276	鉢 A'	N 2 第Ⅲ層	336	鉢 無文	F 4 第Ⅲ層
217	深鉢 B 3	K 10 第Ⅲ層	277	鉢 A'	H 1 第Ⅲ層	337	鉢 無文	F 4 第Ⅲ層
218	深鉢 B 3	D 6 第Ⅲ層	278	鉢 A'	F 8 第Ⅲ層	338	鉢 無文	C 7 第Ⅲ層
219	深鉢 B 3	C 6 第Ⅲ層	279	鉢 A''	K 8 第Ⅲ層	339	鉢 無文	F 8 第Ⅲ層
220	深鉢 B 2	N 7 第Ⅲ層	280	鉢 A''	N 8 第Ⅲ層	340	鉢 無文	M 8 第Ⅲ層
221	深鉢 無文	G 5 埋設土器10	281	鉢 B	H 12 第Ⅲ層	341	鉢 無文	D 7 第Ⅲ層
222	深鉢 無文	L 9 埋設土器21	282	鉢 B	H 14 第Ⅲ層	342	鉢 無文	D 4 第Ⅲ層
223	深鉢 無文	M 7 埋設土器20	283	鉢 B	M 7 第Ⅲ層	343	鉢 無文	K 7 第Ⅲ層
224	深鉢 無文	K 5 埋設土器17	284	鉢 B	E 2 第Ⅲ層	344	鉢 無文	K 4 第Ⅲ層
225	深鉢 無文	M 9 埋設土器22	285	鉢 B	H 13 第Ⅲ層	345	鉢 無文	N 4 第Ⅲ層
226	深鉢 無文	E 7 埋設土器9	286	鉢 B	C 4 第Ⅲ層	346	鉢 無文	B 7 第Ⅲ層
227	深鉢 無文	M 10 埋設土器23	287	鉢 B	C 7 第Ⅲ層	347	鉢 無文	D 3 第Ⅲ層
228	深鉢 無文	N 1 埋設土器26	288	鉢 B	C 7 第Ⅲ層	348	鉢 無文	C 6 第Ⅲ層
229	深鉢 無文	E 6 埋設土器20	289	鉢 B	M 11 第Ⅲ層	349	鉢 無文	I 15 第Ⅲ層
230	深鉢 無文	E 4 埋設土器6	290	鉢 B	K 8 埋設土器19	350	鉢 無文	N 3 第Ⅲ層
231	深鉢 無文	K 4 埋設土器16	291	鉢 B	I 1 第Ⅲ層	351	鉢 無文	K 8 第Ⅲ層
232	深鉢 無文	H 9 埋設土器13	292	鉢 B	C 3 第Ⅲ層	352	鉢 無文	D 6 第Ⅲ層
233	深鉢 無文	C 4 埋設土器3	293	鉢 B	I 1 第Ⅲ層	353	鉢 無文	I 2 第Ⅲ層
234	深鉢 無文	M 9 埋設土器25	294	鉢 B	C 3・5 第Ⅲ層	354	鉢 無文	C 4 第Ⅲ層
235	鉢 A	N 8 第Ⅲ層	295	鉢 B	K 9 第Ⅲ層	355	鉢 無文	N 1 第Ⅲ層
236	鉢 A	N 1 第Ⅲ層	296	鉢 B	C 7 第Ⅲ層	356	鉢 無文	E 2 第Ⅲ層
237	鉢 A	E 2 第Ⅲ層	297	鉢 B	J 9 第Ⅲ層	357	鉢 無文	B 7 第Ⅲ層
238	鉢 A	I 13 第Ⅲ層	298	鉢 B	K 7 第Ⅲ層	358	鉢 無文	G 9 第Ⅲ層
239	鉢 A	E 6 第Ⅲ層	299	鉢 B	A 4 第Ⅲ層	359	鉢 無文	K 10 第Ⅲ層
240	鉢 A	D 1 西壁トレンチ	300	鉢 B	C 4 第Ⅲ層	360	鉢 無文	I 9 第Ⅲ層

第3表 繩文土器分類及び出土位置一覧表(2)

No	分類	出土位置	No	分類	出土位置	No	分類	出土位置
361	鉢 無文	H13 第Ⅲ層	421	壺、注 B	K 4 第Ⅲ層	481	高杯	I 9 第Ⅲ層
362	壺、注 A	N11 第Ⅲ層	422	壺、注 B	C 6 第Ⅲ層	482	高杯	H 9 第Ⅲ層
363	壺、注 A	D 4 第Ⅲ層	423	壺、注 B	H 7 第Ⅲ層	483	高杯・脚台	I † 第Ⅲ層
364	壺、注 A	O 南壁トソチ	424	壺、注 B	H † 第Ⅲ層	484	高杯・脚台	N 4 第Ⅲ層
365	壺、注 A	E 6 第Ⅲ層	425	壺、注 B	K 5 埋設17	485	高杯・脚台	D 2 第Ⅲ層
366	壺、注 A	D 4 第Ⅲ層	426	壺、注 B	N 6 第Ⅲ層	486	高杯・脚台	M 8 第Ⅲ層
367	壺、注 A	H13 第Ⅲ層	427	壺、注 B	F 5 第Ⅲ層	487	高杯・脚台	H 9 第Ⅲ層
368	壺、注 A	H12 第Ⅲ層	428	壺、注 B	B 7 第Ⅲ層	488	高杯・脚台	K10 第Ⅲ層
369	壺、注 A	N6+7 第Ⅲ層	429	壺、注 B	K 7 第Ⅲ層	489	高杯・脚台	N † 第Ⅲ層
370	壺、注 A	N 3 第Ⅲ層	430	壺、注 B	C 5 第Ⅲ層	490	高杯・脚台	I13 第Ⅲ層
371	壺、注 A	N 3 第Ⅲ層	431	壺、注 B	B4, C4 第Ⅲ層	491	高杯・脚台	N 1 第Ⅲ層
372	壺、注 A	D 7 第Ⅲ層	432	壺、注 C	C 7 第Ⅲ層	492	釣手土器	C 6 第Ⅲ層
373	壺、注 A	D 7 第Ⅲ層	433	壺、注 C	H 1 第Ⅲ層	493	釣手土器	D 6 第Ⅲ層
374	壺、注 A'	H 3 第Ⅲ層	434	壺、注 C	D 7 第Ⅲ層	494	舟形土器	N11 第Ⅲ層
375	壺、注 A	H 1 第Ⅲ層	435	壺、注 C	D 2 第Ⅲ層	495	舟形土器	C 7 第Ⅲ層
376	壺、注 A	G 2 第Ⅲ層	436	壺、注 C	C 7 第Ⅲ層	496	舟形土器	N b 第Ⅲ層
377	壺、注 A	H 3 第Ⅲ層	437	壺、注 C	D 5 第Ⅲ層	497	手捏・ミニチュア	N11 第Ⅲ層
378	壺、注 A	H12 第Ⅲ層	438	壺、注 C	M 7 第Ⅲ層	498	手捏・ミニチュア	F 8 第Ⅲ層
379	壺、注 A	N11 第Ⅲ層	439	壺、注 C	あ 4 第Ⅲ層	499	手捏・ミニチュア	B 4 第Ⅲ層
380	壺、注 A	E 8 第Ⅲ層	440	壺、注 C	M 4 第Ⅲ層	500	手捏・ミニチュア	F 6 第Ⅲ層
381	壺、注 A	D 5 第Ⅲ層	441	壺、注 C	N 4 第Ⅲ層	501	手捏・ミニチュア	F 6 第Ⅲ層
382	壺、注 A	D - 第Ⅲ層	442	壺、注 C	D 7 第Ⅲ層	502	手捏・ミニチュア	B 4 第Ⅲ層
383	壺、注 A	N 3 第Ⅲ層	443	壺、注 C	F 7 第Ⅲ層	503	手捏・ミニチュア	G 6 第Ⅲ層
384	壺、注 A	N11 第Ⅲ層	444	壺、注 C	D 7 第Ⅲ層	504	手捏・ミニチュア	M 2 第Ⅲ層
385	壺、注 A	N 3 第Ⅲ層	445	壺、注 C	K10 第Ⅲ層	505	手捏・ミニチュア	C 4 第Ⅲ層
386	壺、注 A	I11 第Ⅲ層	446	壺、注 C	I 9 第Ⅲ層	506	手捏・ミニチュア	E 2 第Ⅲ層
387	壺、注 A	C 6 第Ⅲ層	447	壺、注 C	M10 第Ⅲ層	507	手捏・ミニチュア	D 6 第Ⅲ層
388	壺、注 A	L 9 第Ⅲ層	448	壺、注 C	K 5 第Ⅲ層	508	手捏・ミニチュア	E 7 第Ⅲ層
389	壺、注 A'	D7, E7 第Ⅲ層	449	壺、注 C	C 6 第Ⅲ層	509	手捏・ミニチュア	I13 第Ⅲ層
390	壺、注 A'	C 5 第Ⅲ層	450	壺、注 C	C 6 第Ⅲ層	510	手捏・ミニチュア	E 7 第Ⅲ層
391	壺、注 A'	M 4 第Ⅲ層	451	壺、注 C	C 4 第Ⅲ層	511	手捏・ミニチュア	F 1 西壁トソチ
392	壺、注 A'	C 1 西壁トソチ	452	壺、注 C	N11 第Ⅲ層	512	手捏・ミニチュア	N 3 第Ⅲ層
393	壺、注 A'	C 7 第Ⅲ層	453	壺、注 C	L 7 第Ⅲ層	513	手捏・ミニチュア	K 7 第Ⅲ層
394	壺、注 A'	L 9 第Ⅲ層	454	壺、注 C	K 7 第Ⅲ層	514	手捏・ミニチュア	C 6 方形周溝基1
395	壺、注 A'	C 3 第Ⅲ層	455	壺、注 C	C3, D5, E3+6 第Ⅲ層	515	手捏・ミニチュア	C 4 第Ⅲ層
396	壺、注 A'	I † 第Ⅲ層	456	壺、注 C	N 9 第Ⅲ層	516	手捏・ミニチュア	F 3 第Ⅲ層
397	壺、注 A'	B 3 第Ⅲ層	457	壺、注 C	M 7 第Ⅲ層	517	手捏・ミニチュア	K10 第Ⅲ層
398	壺、注 A'	C 3 第Ⅲ層	458	壺、注 C	D 3 第Ⅲ層	518	異系統	H13 第Ⅲ層
399	壺、注 A+A'	G 2 第Ⅲ層	459	壺、注 D	G 9 第Ⅲ層	519	異系統	E 7 第Ⅲ層
400	壺、注 A+A'	C 5 第Ⅲ層	460	壺、注 D	N7+9 第Ⅲ層	520	異系統	N 7 第Ⅲ層
401	壺、注 A+A'	C6, E5 第Ⅲ層	461	壺、注 D	D 2 第Ⅲ層	521	異系統	M11 第Ⅲ層
402	壺、注 A+A'	N10 第Ⅲ層	462	壺、注 D	K 8 第Ⅲ層	522	異系統	E 3 第Ⅲ層
403	壺、注 A+A'	E 4 第Ⅲ層	463	壺、注 D	E 6 第Ⅲ層	523	異系統	D4+5, E5 第Ⅲ層
404	壺、注 A+A'	I 9 第Ⅲ層	464	壺、注 F	C 3 第Ⅲ層	524	異系統	N3+4 第Ⅲ層
405	壺、注 A+A'	N 9 第Ⅲ層	465	壺、注 E	L 7 第Ⅲ層	525	異系統	D 7 第Ⅲ層
406	壺、注 A+A'	D 2 第Ⅲ層	466	壺、注 E	C 4 第Ⅲ層	526	異系統	N 9 第Ⅲ層
407	壺、注 A+A'	C6, D7 第Ⅲ層	467	壺、注 E	E 5 第Ⅲ層	527	異系統	C 7 第Ⅲ層
408	壺、注 B	H14, I15 第Ⅲ層	468	壺、注 C	N10 第Ⅲ層	528	異系統	H10 第Ⅲ層
409	壺、注 B	C 7 方形周溝基1	469	壺、注 無文	D 5 第Ⅲ層	529	異系統	H3, I2 第Ⅲ層
410	壺、注 B	H13 第Ⅲ層	470	壺、注 無文	D 2 第Ⅲ層	530	異系統	E 6 第Ⅲ層
411	壺、注 B	I13 第Ⅲ層	471	壺、注 無文	E 6 第Ⅲ層	531	異系統	N10+11 第Ⅲ層
412	壺、注 B	I13 第Ⅲ層	472	壺、注 無文	D 2 第Ⅲ層	532	異系統	I † 第Ⅲ層
413	壺、注 B	I14 第Ⅲ層	473	壺、注 無文	F 4 第Ⅲ層	533	異系統	N 4 第Ⅲ層
414	壺、注 B	F 5 第Ⅲ層	474	壺、注 無文	C 3 第Ⅲ層	534	異系統	J8, K8 第Ⅲ層
415	壺、注 B	D 4 第Ⅲ層	475	壺、注 無文	C 4 第Ⅲ層	535	異系統	C6, E7 第Ⅲ層
416	壺、注 B	E 2 第Ⅲ層	476	壺、注 無文	D 3 第Ⅲ層	536	深鉢 A a	H14 第Ⅲ層
417	壺、注 B	K 9 第Ⅲ層	477	皿	D 1 西壁トソチ	537	深鉢 A a	N 9 第Ⅲ層
418	壺、注 B	B 7 第Ⅲ層	478	高杯	D 3 第Ⅲ層	538	深鉢 A a	N 4 第Ⅲ層
419	壺、注 B	B 6 第Ⅲ層	479	高杯	N 4 第Ⅲ層	539	深鉢 A a	H13 第Ⅲ層
420	壺、注 B	C 7 第Ⅲ層	480	高杯	D2, L10 第Ⅲ層	540	深鉢 A a	I14 第Ⅲ層

※表中「注」は「注口土器」の略

第4表 繩文土器分類及び出土位置一覧表 (3)

No	分類	出土位置	No	分類	出土位置	No	分類	出土位置
541	深鉢 A a	I 2 第III層	601	深鉢 A b	I 2 第III層	661	深鉢 A c	F 2 第III層
542	深鉢 A a	N 1 第III層	602	深鉢 A b	N 9 第III層	662	深鉢 A c	I 1 第III層
543	深鉢 A a	N 11 第III層	603	深鉢 A b	H 13 第III層	663	深鉢 A c	F 5 第III層・焼土1
544	深鉢 A a	N 5 第III層	604	深鉢 A b	F 5、H 14 第III層	664	深鉢 A c	M 9 第III層
545	深鉢 A a	H 14 第III層	605	深鉢 A b	H 2 第III層	665	深鉢 A c	D 5 第III層
546	深鉢 A a	N 10 第III層	606	深鉢 A b	H 14 第III層	666	深鉢 A c	C 1 第III層
547	深鉢 A a	H 14 第III層	607	深鉢 A b	N 1 第III層	667	深鉢 A c	O 4 南壁トレンチ
548	深鉢 A a	I 1 第III層	608	深鉢 A b	C 4 第III層	668	深鉢 A c	N 10 第III層
549	深鉢 A b	B 4 第III層	609	深鉢 A b	不明	669	深鉢 A c	I 3 第III層
550	深鉢 A b	N 11 第III層	610	深鉢 A b	M 8 第III層	670	深鉢 A c	N 7 第III層
551	深鉢 A b	N 3 第III層	611	深鉢 A b	I 8 第III層	671	深鉢 A c	N 2 第III層
552	深鉢 A b	D 3 第III層	612	深鉢 A b	H 15 第III層	672	深鉢 A c	E 6 第III層
553	深鉢 A b	N 11 第III層	613	深鉢 A b	D 2 第III層	673	深鉢 A c	N 1 第III層
554	深鉢 A b	E 5 第III層	614	深鉢 A b	C 7 第III層	674	深鉢 A c	N 11 第III層
555	深鉢 A b	N 11 第III層	615	深鉢 A b	H 13 第III層	675	深鉢 A c	N 1 第III層
556	深鉢 A b	N 11 第III層	616	深鉢 A b	O 8 南壁トレンチ	676	深鉢 A c	H 3 第III層
557	深鉢 A b	N 3 第III層	617	深鉢 A b	O 11 南壁トレンチ	677	深鉢 A c	J 8 第III層
558	深鉢 A b	N 3 溝1	618	深鉢 A b	H 6 第III層	678	深鉢 A c	C 3 第III層
559	深鉢 A b	C 7 第III層	619	深鉢 A b	C 2 第III層	679	深鉢 A c	I 5 第III層
560	深鉢 A b	N 3 第III層	620	深鉢 A b	E 7 第III層	680	深鉢 A c	D 1 第III層
561	深鉢 A b	N 11 第III層	621	深鉢 A b	N 9 第III層	681	深鉢 A c	M 7 第III層
562	深鉢 A b	K 9 第III層	622	深鉢 A b	N 5 第III層	682	深鉢 A c	L 7 第III層
563	深鉢 A b	不明	623	深鉢 A b	C 3 第III層	683	深鉢 A c	D 7 第III層
564	深鉢 A b	I 13 第III層	624	深鉢 A b	N 1 土坑10	684	深鉢 A c	G 3 第III層
565	深鉢 A b	N 10 第III層	625	深鉢 A b	M 6 溝1	685	深鉢 A c	N 8 第III層
566	深鉢 A b	H 19 第III層	626	深鉢 A b	N 11 第III層	686	深鉢 A c	N 4 第III層
567	深鉢 A b	G 3 第III層	627	深鉢 A b	H 14 第III層	687	深鉢 A c	D 4 第III層
568	深鉢 A b	F 5 第III層	628	深鉢 A b	O 11 南壁トレンチ	688	深鉢 A c	C 7 第III層
569	深鉢 A b	H 3 第III層	629	深鉢 A b	D 4 第III層	689	深鉢 A c	N 9 第III層
570	深鉢 A b	N 5 第III層	630	深鉢 A b	C 3 第III層	690	深鉢 A c	C 4 第III層
571	深鉢 A b	H 3 第III層	631	深鉢 A b	C 2 第III層	691	深鉢 A c	H 12 第III層
572	深鉢 A b	H 14 第III層	632	深鉢 A b	F 5 第III層	692	深鉢 A c	N 1 土坑9
573	深鉢 A b	N 10 第III層	633	深鉢 A b	H 15 第III層	693	深鉢 A c	F 5 第III層
574	深鉢 A b	I 14 第III層	634	深鉢 A b	D 1 第III層	694	深鉢 A c	N 11 第III層
575	深鉢 A b	H 1 第III層	635	深鉢 A b	M 10 第III層	695	深鉢 A c	N 4 第III層
576	深鉢 A b	D 5 第III層	636	深鉢 A b	N 10 第III層	696	深鉢 A c	C 3 第III層
577	深鉢 A b	L 7 第III層	637	深鉢 A b	M 7 第III層	697	深鉢 A c	C 3 第III層
578	深鉢 A b	N 11 第III層	638	深鉢 A b	F 7 第III層	698	深鉢 A c	I 1 土坑8
579	深鉢 A b	N 8 第III層	639	深鉢 A b	C 4 第III層	699	深鉢 A c	H 4 第III層
580	深鉢 A b	F 7 第III層	640	深鉢 A b	M 3 第III層	700	深鉢 A c	N 2 第III層
581	深鉢 A b	D 7 土坑1	641	深鉢 A b	D 4 第III層	701	深鉢 A c	E 2 第III層
582	深鉢 A b	F 3 第III層	642	深鉢 A b	E 6 第III層	702	深鉢 A c	D 2 第III層
583	深鉢 A b	E 6 第III層	643	深鉢 A b	A 4 第III層	703	深鉢 A c	M 9 第III層
584	深鉢 A b	C 3 第III層	644	深鉢 A b	N 8 第III層	704	深鉢 A c	C 7 第III層
585	深鉢 A b	H 14 第III層	645	深鉢 A b	G 4 第III層	705	深鉢 A c	G 4 第III層
586	深鉢 A b	M 11 第III層	646	深鉢 A b	H 13 第III層	706	深鉢 A c	C 5 第III層
587	深鉢 A b	N 11 第III層	647	深鉢 A b	O 1 第III層	707	深鉢 A c	C 3 第III層
588	深鉢 A b	H 12 第III層	648	深鉢 A b	D 3 第III層	708	深鉢 A c	D 1 第III層
589	深鉢 A b	N 9 第III層	649	深鉢 A b	D 6 第III層	709	深鉢 A c	C 7 第III層
590	深鉢 A b	D 3 第III層	650	深鉢 A b	N 7 第III層	710	深鉢 A c	C 3 第III層
591	深鉢 A b	I 9 第III層	651	深鉢 A b	N 7 第III層	711	深鉢 A e	I 13 第III層
592	深鉢 A b	I 1 第III層	652	深鉢 A b	排土	712	深鉢 A e	D 7 第III層
593	深鉢 A b	M 10 第III層	653	深鉢 A b	C 7 第III層	713	深鉢 A e	F 7 第III層
594	深鉢 A b	N 7 第III層	654	深鉢 A c	H 13 第III層	714	深鉢 A e	F 8 第III層
595	深鉢 A b	B 3 第III層	655	深鉢 A c	J 4 第III層	715	深鉢 A e	H 6 第III層
596	深鉢 A b	N 8 第III層	656	深鉢 A c	E 6 第III層	716	深鉢 A e	C 3 第III層
597	深鉢 A b	O 8 第III層	657	深鉢 A c	I 1 第III層	717	深鉢 A f	K 10 第III層
598	深鉢 A b	H 7 第III層	658	深鉢 A c	I 12 第III層	718	深鉢 A f	C 4 第III層
599	深鉢 A b	C 3 第III層	659	深鉢 A c	E 2 第III層	719	深鉢 A f	I 8 第III層
600	深鉢 A b	N 8 第III層	660	深鉢 A c	C 5 第III層	720	深鉢 A f	D 2 第III層

第5表 繩文土器分類及び出土位置一覧表(4)

No	分類	出土位置	No	分類	出土位置	No	分類	出土位置
721	深鉢 A f	J 9 第Ⅲ層	781	深鉢 A h	G 8 第Ⅲ層	841	深鉢 A k	E 6 第Ⅲ層
722	深鉢 A f	C 4 第Ⅲ層	782	深鉢 A h	K 5 第Ⅲ層	842	深鉢 A k	I 13 第Ⅲ層
723	深鉢 A f	K 10 第Ⅲ層	783	深鉢 A h	D 7 第Ⅲ層	843	深鉢 A k	N 3 第Ⅲ層
724	深鉢 A f	N 4 第Ⅲ層	784	深鉢 A h	D 3 第Ⅲ層	844	深鉢 A k	E 3 第Ⅲ層
725	深鉢 A f	K 10 第Ⅲ層	785	深鉢 A h	A 4 第Ⅲ層	845	深鉢 A k	N 8 第Ⅲ層
726	深鉢 A f	K 9 第Ⅲ層	786	深鉢 A h	E 7 第Ⅲ層	846	深鉢 A k	H 12 第Ⅲ層
727	深鉢 A f	I 5 第Ⅲ層	787	深鉢 A h	不明	847	深鉢 A a	F 3 第Ⅲ層
728	深鉢 A f	K 8 第Ⅲ層	788	深鉢 A h	E 5 第Ⅲ層	848	深鉢 A a	O 10 南壁トレンチ
729	深鉢 A g	I 10 第Ⅲ層	789	深鉢 A h	I 8 第Ⅲ層	849	深鉢 A a	O 10 南壁トレンチ
730	深鉢 A g	N 5 第Ⅲ層	790	深鉢 A h	I 5 第Ⅲ層	850	深鉢 A a	N 10 第Ⅲ層
731	深鉢 A g	N 6 第Ⅲ層	791	深鉢 A h	N 6 第Ⅲ層	851	深鉢 A a	K 10 第Ⅲ層
732	深鉢 A g	E 6 第Ⅲ層	792	深鉢 A h	I 4 第Ⅲ層	852	深鉢 A a	H 20 第Ⅲ層
733	深鉢 A g	C 5 第Ⅲ層	793	深鉢 A i	N 5 第Ⅲ層	853	深鉢 A a	I 1 第Ⅲ層
734	深鉢 A g	E 1 第Ⅲ層	794	深鉢 A i	N 9 第Ⅲ層	854	深鉢 A a	D 8 土坑2
735	深鉢 A g	D 6 第Ⅲ層	795	深鉢 A i	J 6 第Ⅲ層	855	深鉢 A a	H 14 第Ⅲ層
736	深鉢 A g	J 8 第Ⅲ層	796	深鉢 A i	K 7 第Ⅲ層	856	深鉢 A b	D 7 第Ⅲ層
737	深鉢 A g'	F 2 第Ⅲ層	797	深鉢 A i	M 4 第Ⅲ層	857	深鉢 A b	E 6 第Ⅲ層
738	深鉢 A g'	E 4 第Ⅲ層	798	深鉢 A i	N 5 第Ⅲ層	858	深鉢 A b	J 10 第Ⅲ層
739	深鉢 A g'	D 2 第Ⅲ層	799	深鉢 A i	B 3 第Ⅲ層	859	深鉢 A b	N 11 第Ⅲ層
740	深鉢 A g'	C 6 第Ⅲ層	800	深鉢 A i	F 4 第Ⅲ層	860	深鉢 A b	D 4 第Ⅲ層
741	深鉢 A g'	K 9 第Ⅲ層	801	深鉢 A i	N 5 第Ⅲ層	861	深鉢 A b	M 7 第Ⅲ層
742	深鉢 A g'	J 10 第Ⅲ層	802	深鉢 A i	N 5 第Ⅲ層	862	深鉢 A b	H 14 第Ⅲ層
743	深鉢 A g'	E 2 第Ⅲ層	803	深鉢 A i	N 5 第Ⅲ層	863	深鉢 A b	N 5 第Ⅲ層
744	深鉢 A g'	I 11 第Ⅲ層	804	深鉢 A i	N 5 第Ⅲ層	864	深鉢 A b	I 1 第Ⅲ層
745	深鉢 A g'	H 5 第Ⅲ層	805	深鉢 A i	K 8 第Ⅲ層	865	深鉢 A b	N 4 第Ⅲ層
746	深鉢 A g'	C 5 第Ⅲ層	806	深鉢 A f	N 4 第Ⅲ層	866	深鉢 A b	C 5 第Ⅲ層
747	深鉢 A g'	L 3 第Ⅲ層	807	深鉢 A f	L 3 第Ⅲ層	867	深鉢 A b	F 5 第Ⅲ層
748	深鉢 A g'	I 10 第Ⅲ層	808	深鉢 A f	D 2 第Ⅲ層	868	深鉢 A b	I 12 第Ⅲ層
749	深鉢 A g'	D 3 第Ⅲ層	809	深鉢 A f	K 9 第Ⅲ層	869	深鉢 A b	K 4 第Ⅲ層
750	深鉢 A g'	E 5 第Ⅲ層	810	深鉢 A f	N 1 第Ⅲ層	870	深鉢 A b	D 7 第Ⅲ層
751	深鉢 A g'	D 2 第Ⅲ層	811	深鉢 A f	D 2 第Ⅲ層	871	深鉢 A b	O 1 南壁トレンチ
752	深鉢 A g'	B 4 第Ⅲ層	812	深鉢 A f	N 5 第Ⅲ層	872	深鉢 A b	L 4 第Ⅲ層
753	深鉢 A g'	D 3 第Ⅲ層	813	深鉢 A f	I 5 第Ⅲ層	873	深鉢 A b	N 5 第Ⅲ層
754	深鉢 A g'	E 7 第Ⅲ層	814	深鉢 A f	B 3 第Ⅲ層	874	深鉢 A b	D 7 第Ⅲ層
755	深鉢 A g'	D 3 第Ⅲ層	815	深鉢 A f	K 10 第Ⅲ層	875	深鉢 A b	E 7 第Ⅲ層
756	深鉢 A g'	D 6 第Ⅲ層	816	深鉢 A f	J 9 第Ⅲ層	876	深鉢 A b	H 13 第Ⅲ層
757	深鉢 A g'	N 7 第Ⅲ層	817	深鉢 A g	M 5 第Ⅲ層	877	深鉢 A b	D 7 第Ⅲ層
758	深鉢 A g'	K 10 第Ⅲ層	818	深鉢 A g	E 2 第Ⅲ層	878	深鉢 A b	N 5 第Ⅲ層
759	深鉢 A g'	D 2 第Ⅲ層	819	深鉢 A	D 6 第Ⅲ層	879	深鉢 A b	N 3 第Ⅲ層
760	深鉢 A g'	K 8 第Ⅲ層	820	深鉢 A g'	C 4 第Ⅲ層	880	深鉢 A b	不明
761	深鉢 A g'	E 2 第Ⅲ層	821	深鉢 A g'	K 8 第Ⅲ層	881	深鉢 A b	F 6 第Ⅲ層
762	深鉢 A g'	K 9 第Ⅲ層	822	深鉢 A g'	G 7 第Ⅲ層	882	深鉢 A b	N 4 第Ⅲ層
763	深鉢 A g'	H 7 第Ⅲ層	823	深鉢 A j	D 2 第Ⅲ層	883	深鉢 A b	G 2 第Ⅲ層
764	深鉢 A g'	J 10 第Ⅲ層	824	深鉢 A j	L 4 第Ⅲ層	884	深鉢 A b	F 4 第Ⅲ層
765	深鉢 A g'	L 5 第Ⅲ層	825	深鉢 A j	C 4 第Ⅲ層	885	深鉢 A b	D 4 第Ⅲ層
766	深鉢 A g'	C 3 第Ⅲ層	826	深鉢 A j	C 7 第Ⅲ層	886	深鉢 A b	N 3 溝1
767	深鉢 A g'	C 1 西壁トレンチ	827	深鉢 A j	D 5 第Ⅲ層	887	深鉢 A b	N 4 第Ⅲ層
768	深鉢 A g'	I 5 第Ⅲ層	828	深鉢 A j	O 10 南壁トレンチ	888	深鉢 A b	D 3 第Ⅲ層
769	深鉢 A g'	N 5 第Ⅲ層	829	深鉢 A j	M 8、N 8 第Ⅲ層	889	深鉢 A b	C 6 第Ⅲ層
770	深鉢 A g'	I 7 第Ⅲ層	830	深鉢 A j	I 15 第Ⅲ層	890	深鉢 A b	H 16 第Ⅲ層
771	深鉢 A g'	K 7 第Ⅲ層	831	深鉢 A j	H 14 第Ⅲ層	891	深鉢 A b	I 12 第Ⅲ層
772	深鉢 A g'	不明	832	深鉢 A j	H 14 第Ⅲ層	892	深鉢 A b	E 7 第Ⅲ層
773	深鉢 A g'	H 17 土坑7	833	深鉢 A k	C 6 第Ⅲ層	893	深鉢 A b	I 1 第Ⅲ層
774	深鉢 A h	I 9 第Ⅲ層	834	深鉢 A k	N 3 第Ⅲ層	894	深鉢 A b	H 1 第Ⅲ層
775	深鉢 A h	M 7 第Ⅲ層	835	深鉢 A k	I 3 第Ⅲ層	895	深鉢 A b	O 11 南壁トレンチ
776	深鉢 A h	G 7 第Ⅲ層	836	深鉢 A k	E 6 第Ⅲ層	896	深鉢 A b	O 11 南壁トレンチ
777	深鉢 A h	F 7 第Ⅲ層	837	深鉢 A k	E 6 第Ⅲ層	897	深鉢 A b	O 11 南壁トレンチ
778	深鉢 A h	N 5 第Ⅲ層	838	深鉢 A k	H 13 第Ⅲ層	898	深鉢 A b	G 5 第Ⅲ層
779	深鉢 A h	I 9 第Ⅲ層	839	深鉢 A k	E 6 第Ⅲ層	899	深鉢 A b	N 9 第Ⅲ層
780	深鉢 A h	G 6、H 8 第Ⅲ層	840	深鉢 A k	N 2 第Ⅲ層	900	深鉢 A b	不明

第6表 繩文土器分類及び出土位置一覧表(5)

No	分類	出土位置	No	分類	出土位置	No	分類	出土位置
901	深鉢 A b	N11 第Ⅲ層	961	深鉢 A b	不明	1021	深鉢 A f	C 4 第Ⅲ層
902	深鉢 A b	F 8 第Ⅲ層	962	深鉢 A b	C 4 第Ⅲ層	1022	深鉢 A f	D 2 第Ⅲ層
903	深鉢 A b	N 4 第Ⅲ層	963	深鉢 A b	E 8 第Ⅲ層	1023	深鉢 A f	D 4 第Ⅲ層
904	深鉢 A b	N 4 第Ⅲ層	964	深鉢 A b	C 6 第Ⅲ層	1024	深鉢 A f	D 5 第Ⅲ層
905	深鉢 A b	I15 第Ⅲ層	965	深鉢 A b'	J10 第Ⅲ層	1025	深鉢 A f	H 1 第Ⅲ層
906	深鉢 A b	H16 第Ⅲ層	966	深鉢 A b'	D 4 第Ⅲ層	1026	深鉢 A f	C 2 第Ⅲ層
907	深鉢 A b	C 5 第Ⅲ層	967	深鉢 A b'	K10 第Ⅲ層	1027	深鉢 A f	J 8 第Ⅲ層
908	深鉢 A b	N ウ 第Ⅲ層	968	深鉢 A b'	D 2 第Ⅲ層	1028	深鉢 A f	B 7 第Ⅲ層
909	深鉢 A b	N カ 第Ⅲ層	969	深鉢 A c	I イ 第Ⅲ層	1029	深鉢 A f	C 3 第Ⅲ層
910	深鉢 A b	D 7 第Ⅲ層	970	深鉢 A c	I13 第Ⅲ層	1030	深鉢 A f	D 7 第Ⅲ層
911	深鉢 A b	N10 第Ⅲ層	971	深鉢 A c	J 9 第Ⅲ層	1031	深鉢 A f	C 5 第Ⅲ層
912	深鉢 A b	O 1 西壁トレンチ	972	深鉢 A c	E 2 第Ⅲ層	1032	深鉢 A f	不明
913	深鉢 A b	N 3 第Ⅲ層	973	深鉢 A c	N 1 第Ⅲ層	1033	深鉢 A f	N カ 第Ⅲ層
914	深鉢 A b	E 2 第Ⅲ層	974	深鉢 A c	J 2 第Ⅲ層	1034	深鉢 A f	不明
915	深鉢 A b	G 2 第Ⅲ層	975	深鉢 A c	N10 第Ⅲ層	1035	深鉢 A f	C 5 第Ⅲ層
916	深鉢 A b	M11 第Ⅲ層	976	深鉢 A c	O 2 南壁トレンチ	1036	深鉢 A f	I 1 第Ⅲ層
917	深鉢 A b	D 2 第Ⅲ層	977	深鉢 A c	N11 第Ⅲ層	1037	深鉢 A f	D 7 第Ⅲ層
918	深鉢 A b	C 3 第Ⅲ層	978	深鉢 A c	O - 南壁トレンチ	1038	深鉢 A f	B 6 第Ⅲ層
919	深鉢 A b	N11 第Ⅲ層	979	深鉢 A c	N10 第Ⅲ層	1039	深鉢 A f	H 1 第Ⅲ層
920	深鉢 A b	N 3 第Ⅲ層	980	深鉢 A c	I13 第Ⅲ層	1040	深鉢 A f	H 1 第Ⅲ層
921	深鉢 A b	L 8 溝1	981	深鉢 A c	N 4 第Ⅲ層	1041	深鉢 A f	D 7 第Ⅲ層
922	深鉢 A b	N11 第Ⅲ層	982	深鉢 A c	O 1 西壁トレンチ	1042	深鉢 A g	N イ 第Ⅲ層
923	深鉢 A b	H14 第Ⅲ層	983	深鉢 A c	N 4 第Ⅲ層	1043	深鉢 A g	K10 第Ⅲ層
924	深鉢 A b	M 7 第Ⅲ層	984	深鉢 A c	H13 第Ⅲ層	1044	深鉢 A g	C 7 第Ⅲ層
925	深鉢 A b	C 5, D 5 第Ⅲ層	985	深鉢 A c	F 6 第Ⅲ層	1045	深鉢 A g	J 9 第Ⅲ層
926	深鉢 A b	H15 第Ⅲ層	986	深鉢 A c	N10 第Ⅲ層	1046	深鉢 A g	C 3 第Ⅲ層
927	深鉢 A b	C 2 第Ⅲ層	987	深鉢 A c	H15 第Ⅲ層	1047	深鉢 A g	C 5 第Ⅲ層
928	深鉢 A b	F 8 第Ⅲ層	988	深鉢 A c	H14 第Ⅲ層	1048	深鉢 A g	N 6 第Ⅲ層
929	深鉢 A b	M 8 第Ⅲ層	989	深鉢 A c	N11 第Ⅲ層	1049	深鉢 A g	D 4 第Ⅲ層
930	深鉢 A b	N10 第Ⅲ層	990	深鉢 A c	D 3 第Ⅲ層	1050	深鉢 A g	D 7 第Ⅲ層
931	深鉢 A b	N 1 土坑9	991	深鉢 A c	C 6-7 第Ⅲ層	1051	深鉢 A g	D 3 第Ⅲ層
932	深鉢 A b	D 7 第Ⅲ層	992	深鉢 A c	O 3 南壁トレンチ	1052	深鉢 A g'	K 7 第Ⅲ層
933	深鉢 A b	H 1 第Ⅲ層	993	深鉢 A c	N10 第Ⅲ層	1053	深鉢 A g'	E 2 第Ⅲ層
934	深鉢 A b	I 1 第Ⅲ層	994	深鉢 A c	D 7 第Ⅲ層	1054	深鉢 A g'	I 10 第Ⅲ層
935	深鉢 A b	M11 第Ⅲ層	995	深鉢 A c	H19 第Ⅲ層	1055	深鉢 A g'	E 6 第Ⅲ層
936	深鉢 A b	N カ 第Ⅲ層	996	深鉢 A c	N 6 第Ⅲ層	1056	深鉢 A g'	D 3 第Ⅲ層
937	深鉢 A b	N 4 第Ⅲ層	997	深鉢 A c	N11 第Ⅲ層	1057	深鉢 A g'	N イ 第Ⅲ層
938	深鉢 A b	I12 第Ⅲ層	998	深鉢 A c	N11 第Ⅲ層	1058	深鉢 A g'	I 9 第Ⅲ層
939	深鉢 A b	M 8 第Ⅲ層	999	深鉢 A c	E 2 第Ⅲ層	1059	深鉢 A g'	J 8 第Ⅲ層
940	深鉢 A b	E 3 第Ⅲ層	1000	深鉢 A c	N10 第Ⅲ層	1060	深鉢 A g'	D 6 第Ⅲ層
941	深鉢 A b	M 8 第Ⅲ層	1001	深鉢 A c	I 1 第Ⅲ層	1061	深鉢 A g'	M 9 第Ⅲ層
942	深鉢 A b	F 4 土坑5	1002	深鉢 A c	F 5 方形周溝墓1	1062	深鉢 A g'	D 3 第Ⅲ層
943	深鉢 A b	C 7 第Ⅲ層	1003	深鉢 A c	C 3 第Ⅲ層	1063	深鉢 A g'	H 8 第Ⅲ層
944	深鉢 A b	F 4 第Ⅲ層	1004	深鉢 A c	D 4 第Ⅲ層	1064	深鉢 A g'	H 8 第Ⅲ層
945	深鉢 A b	N 4 第Ⅲ層	1005	深鉢 A c	E 6 第Ⅲ層	1065	深鉢 A g'	I 7 第Ⅲ層
946	深鉢 A b	H ウ 第Ⅲ層	1006	深鉢 A c	N 4 第Ⅲ層	1066	深鉢 A g'	N ウ 第Ⅲ層
947	深鉢 A b	K10 第Ⅲ層	1007	深鉢 A c'	N 1 第Ⅲ層	1067	深鉢 A g'	N イ 第Ⅲ層
948	深鉢 A b	E 6 土坑4	1008	深鉢 A d	M 8 第Ⅲ層	1068	深鉢 A g'	G 8 第Ⅲ層
949	深鉢 A b	N 8 第Ⅲ層	1009	深鉢 A d	M 8 第Ⅲ層	1069	深鉢 A g'	N 1 第Ⅲ層
950	深鉢 A b	M 5 第Ⅲ層	1010	深鉢 A d	H13 第Ⅲ層	1070	深鉢 A g'	N 1 第Ⅲ層
951	深鉢 A b	M 4 第Ⅲ層	1011	深鉢 A d	G 5 第Ⅲ層	1071	深鉢 A g'	N 1 第Ⅲ層
952	深鉢 A b	C 7 第Ⅲ層	1012	深鉢 A e	C 1 西壁トレンチ	1072	深鉢 A g'	C 5 第Ⅲ層
953	深鉢 A b	C 5 第Ⅲ層	1013	深鉢 A e	C 3 第Ⅲ層	1073	深鉢 A g'	D 7 第Ⅲ層
954	深鉢 A b	D 3 第Ⅲ層	1014	深鉢 A e	N11 第Ⅲ層	1074	深鉢 A g'	B 7 第Ⅲ層
955	深鉢 A b	L 6 第Ⅲ層	1015	深鉢 A e	M11 第Ⅲ層	1075	深鉢 A g'	H 9 第Ⅲ層
956	深鉢 A b	M 8 第Ⅲ層	1016	深鉢 A e	C 7 第Ⅲ層	1076	深鉢 A g'	D 2 第Ⅲ層
957	深鉢 A b	B 5 第Ⅲ層	1017	深鉢 A e	不明	1077	深鉢 A g'	F 5 焼土1
958	深鉢 A b	排土	1018	深鉢 A f	A 3 第Ⅲ層	1078	深鉢 A g'	不明
959	深鉢 A b	J 8 第Ⅲ層	1019	深鉢 A f	D 5 第Ⅲ層	1079	深鉢 A g'	N イ 第Ⅲ層
960	深鉢 A b	N 4 第Ⅲ層	1020	深鉢 A f	K 9 第Ⅲ層	1080	深鉢 A g'	あ 4 第Ⅲ層

第7表 繩文土器分類及び出土位置一覧表 (6)

No	分類	出土位置	No	分類	出土位置	No	分類	出土位置
1081	深鉢 A g'	B 4 第III層	1141	深鉢 A k	D 4 第III層	1201	深鉢 A' i	K 5 第III層
1082	深鉢 A g'	D 4 第III層	1142	深鉢 A' g	H 8 第III層	1202	深鉢 A' i	B 6 第III層
1083	深鉢 A g'	D 4 第III層	1143	深鉢 A' g	N 6 第III層	1203	深鉢 A' i	I ♀ 第III層
1084	深鉢 A g'	K 8 第III層	1144	深鉢 A' g'	D 7 第III層	1204	深鉢 A' i	L 7 第III層
1085	深鉢 A g'	K 9 第III層	1145	深鉢 A' g'	D 4 第III層	1205	深鉢 A' h	E 8 第III層
1086	深鉢 A g'	不明	1146	深鉢 A' g'	N 1 第III層	1206	深鉢 A' i	N ♀ 第III層
1087	深鉢 A g'	K 8 第III層	1147	深鉢 A' g'	D 3 第III層	1207	深鉢 A' i	K 4・5 第III層
1088	深鉢 A g'	K 8 第III層	1148	深鉢 A' g'	D 6 第III層	1208	深鉢 A' g'	N 1 第III層
1089	深鉢 A g'	N ♀ 第III層	1149	深鉢 A' g'	G 8 第III層	1209	深鉢 A' g'	I 9 第III層
1090	深鉢 A g'	K 5 第III層	1150	深鉢 A' g'	E 6 第III層	1210	深鉢 A' g'	I 9 第III層
1091	深鉢 A g'	N 9 第III層	1151	深鉢 A' g'	C 5 第III層	1211	深鉢 A' g'	K 8 第III層
1092	深鉢 A g'	I 3 第III層	1152	深鉢 A' g'	L 10 第III層	1212	深鉢 A' g'	H 9 第III層
1093	深鉢 A g'	N ♀ 第III層	1153	深鉢 A' g'	N ♀ 第III層	1213	深鉢 A' g'	K 7 第III層
1094	深鉢 A g'	I 7 第III層	1154	深鉢 A' g'	H 7 第III層	1214	深鉢 A' g'	E 7 第III層
1095	深鉢 A g'	F 6 第III層	1155	深鉢 A' g'	O 4 南壁トレンチ	1215	深鉢 A' g'	E 6 第III層
1096	深鉢 A g'	N ♀ 第III層	1156	深鉢 A' g'	K 7 第III層	1216	深鉢 A' g'	K 7 第III層
1097	深鉢 A g'	C 6 第III層	1157	深鉢 A' g'	I 1 第III層	1217	深鉢 A' g'	K 7 第III層
1098	深鉢 A g'	N ♀ 第III層	1158	深鉢 A' g'	I 9 第III層	1218	深鉢 A' g'	E 7 第III層
1099	深鉢 A g'	I 9 第III層	1159	深鉢 A' g'	K 7 第III層	1219	深鉢 A' g'	K 8 第III層
1100	深鉢 A g'	K 6 第III層	1160	深鉢 A' g'	不明	1220	深鉢 A' g'	K 7 第III層
1101	深鉢 A g'	D 4 第III層	1161	深鉢 A' g'	M 4 第III層	1221	深鉢 A' g'	F 6 第III層
1102	深鉢 A g'	G 2 第III層	1162	深鉢 A' g'	B 4 第III層	1222	深鉢 A' g'	G 6 第III層
1103	深鉢 A g'	N ♀ 第III層	1163	深鉢 A' g'	G 8 第III層	1223	深鉢 A' g'	N ♀ 第III層
1104	深鉢 A g'	E 7 第III層	1164	深鉢 A' g'	H 7 第III層	1224	深鉢 A' g'	C 5 第III層
1105	深鉢 A g'	N ♀ 第III層	1165	深鉢 A' g'	J 9 第III層	1225	深鉢 A' g'	C 2 第III層
1106	深鉢 A g'	E 6 第III層	1166	深鉢 A' g'	K 7 第III層	1226	深鉢 A' g'	E 2 第III層
1107	深鉢 A g'	N ♀ 第III層	1167	深鉢 A' g'	F 8 第III層	1227	深鉢 A' g'	C 3 第III層
1108	深鉢 A g'	C 5 第III層	1168	深鉢 A' g'	K 8 第III層	1228	深鉢 A' g'	D 4 第III層
1109	深鉢 A g'	I 9 第III層	1169	深鉢 A' g'	N 3 第III層	1229	深鉢 A' g'	D 4 第III層
1110	深鉢 A g'	N 9 第III層	1170	深鉢 A' g'	K 8 第III層	1230	深鉢 A' g'	K 7 第III層
1111	深鉢 A g'	I 9 第III層	1171	深鉢 A' g'	G 3 第III層	1231	深鉢 A' g'	K 6 第III層
1112	深鉢 A g'	F 7 第III層	1172	深鉢 A' g'	K 8 第III層	1232	深鉢 A' g'	G 3 第III層
1113	深鉢 A h	K 8 第III層	1173	深鉢 A' g'	N 1 第III層	1233	深鉢 A' g'	N ♀ 第III層
1114	深鉢 A h	D 4 第III層	1174	深鉢 A' g'	N 4 第III層	1234	深鉢 A' g'	G 6 第III層
1115	深鉢 A h	E 6 第III層	1175	深鉢 A' g'	N ♀ 第III層	1235	深鉢 A' g'	J 3 第III層
1116	深鉢 A h	B 5 第III層	1176	深鉢 A' g'	K 5 第III層	1236	深鉢 A' g'	D 3 第III層
1117	深鉢 A h	H 3 第III層	1177	深鉢 A' g'	N 5 第III層	1237	深鉢 A' g'	H 8 第III層
1118	深鉢 A h	K 4 第III層	1178	深鉢 A' g'	K 7 第III層	1238	深鉢 A' g'	E 6 第III層
1119	深鉢 A h	A 4 第III層	1179	深鉢 A' g'	K 7 第III層	1239	深鉢 B 1	H 12 第III層
1120	深鉢 A h	N ♀ 第III層	1180	深鉢 A' g'	不明	1240	深鉢 B 1	I 12 第III層
1121	深鉢 A h	不明	1181	深鉢 A' h	K 8 第III層	1241	深鉢 B 1	N 8 第III層
1122	深鉢 A h	F 3 第III層	1182	深鉢 A' h	K 7 第III層	1242	深鉢 B 1	N ♀ 第III層
1123	深鉢 A h	B 7 第III層	1183	深鉢 A' h	F 6 第III層	1243	深鉢 B 1	K 10 第III層
1124	深鉢 A h	N ♀ 第III層	1184	深鉢 A' h	B 4 第III層	1244	深鉢 B 1	I ♀ 第III層
1125	深鉢 A h	K 7 第III層	1185	深鉢 A' h	不明	1245	深鉢 B 1	K 10 第III層
1126	深鉢 A h	G 6 第III層	1186	深鉢 A' h	I 2 第III層	1246	深鉢 B 1	D 6 第III層
1127	深鉢 A h	K 6 第III層	1187	深鉢 A' h	K 6 第III層	1247	深鉢 B 1	C 3 第III層
1128	深鉢 A h	E 6 第III層	1188	深鉢 A' h	H 2 第III層	1248	深鉢 B 1	D 2 第III層
1129	深鉢 A i	K 7 第III層	1189	深鉢 A' h	D 7 第III層	1249	深鉢 B 1	D 7 第III層
1130	深鉢 A i	N ♀ 第III層	1190	深鉢 A' h	N ♀ 第III層	1250	深鉢 B 1	C 5 第III層
1131	深鉢 A i	N ♀ 第III層	1191	深鉢 A' h	N ♀ 第III層	1251	深鉢 B 1	C 6 第III層
1132	深鉢 A i	N ♀ 第III層	1192	深鉢 A' h	N ♀ 第III層	1252	深鉢 B 1	D 5 第III層
1133	深鉢 A i	N 7 第III層	1193	深鉢 A' h	K 10 第III層	1253	深鉢 B 1	K 6 第III層
1134	深鉢 A i	N ♀ 第III層	1194	深鉢 A' h	G 7 第III層	1254	深鉢 B 1	K 10 第III層
1135	深鉢 A i	N ♀ 第III層	1195	深鉢 A' h	N ♀ 第III層	1255	深鉢 B 1	K 10 第III層
1136	深鉢 A i	N ♀ 第III層	1196	深鉢 A' h	N ♀ 第III層	1256	深鉢 B 1	C 5 第III層
1137	深鉢 A i	H 2 第III層	1197	深鉢 A' h	F 7 第III層	1257	深鉢 B 1	C 2 第III層
1138	深鉢 A i	N ♀ 第III層	1198	深鉢 A' h	E 7 第III層	1258	深鉢 B 1	C 5 第III層
1139	深鉢 A k	I 13 第III層	1199	深鉢 A' h	F 7 第III層	1259	深鉢 B 1	C 4 第III層
1140	深鉢 A k	E 7 第III層	1200	深鉢 A' h	J 9 第III層	1260	深鉢 B 1	K 9 第III層

第8表 繩文土器分類及び出土位置一覧表(7)

No	分類	出土位置	No	分類	出土位置	No	分類	出土位置
1261	深鉢 B 1	B 5 第Ⅲ層	1321	深鉢 B 3	N 7 第Ⅲ層	1381	深鉢 その他	E 6 第Ⅲ層
1262	深鉢 B 1	不明	1322	深鉢 B 3	K10 第Ⅲ層	1382	深鉢 その他	D 4 第Ⅲ層
1263	深鉢 B 1	K10 溝1	1323	深鉢 B 3	M 8 第Ⅲ層	1383	鉢 A	N 2 第Ⅲ層
1264	深鉢 B 1	D 3 第Ⅲ層	1324	深鉢 B 1	H14 第Ⅲ層	1384	鉢 A	H 4 第Ⅲ層
1265	深鉢 B 1	E 6 第Ⅲ層	1325	深鉢 B 3	B 2 第Ⅲ層	1385	鉢 A	D 7 第Ⅲ層
1266	深鉢 B 1	C 3 第Ⅲ層	1326	深鉢 B 3	I 1 第Ⅲ層	1386	鉢 A	E 3 第Ⅲ層
1267	深鉢 B 1	C 4 第Ⅲ層	1327	深鉢 B 1	K 8 第Ⅲ層	1387	鉢 A	F 6 第Ⅲ層
1268	深鉢 B 1	不明	1328	深鉢 B 1	G 7 第Ⅲ層	1388	鉢 A	M 10 第Ⅲ層
1269	深鉢 B 1	J 3 第Ⅲ層	1329	深鉢 B 1	F 6 第Ⅲ層	1389	鉢 A	N 2 第Ⅲ層
1270	深鉢 B 1	O 4 南壁トレンチ	1330	深鉢 B 1	N 1 第Ⅲ層	1390	鉢 A	D 7 第Ⅲ層
1271	深鉢 B 1	N 1 第Ⅲ層	1331	深鉢 B 1	E 6 第Ⅲ層	1391	鉢 A	N 3 第Ⅲ層
1272	深鉢 B 1	D 6 第Ⅲ層	1332	深鉢 B 1	E 6 第Ⅲ層	1392	鉢 A	D 7 第Ⅲ層
1273	深鉢 B 1	C 7 第Ⅲ層	1333	深鉢 B 1	E 6 第Ⅲ層	1393	鉢 A	F 2 第Ⅲ層
1274	深鉢 B 1	I 1 第Ⅲ層	1334	深鉢 B 1	F 6 第Ⅲ層	1394	鉢 A	N 8 第Ⅲ層
1275	深鉢 B 1	K 9 第Ⅲ層	1335	深鉢 B 1	K 7 第Ⅲ層	1395	鉢 A	D 6 第Ⅲ層
1276	深鉢 B 1	N 9 第Ⅲ層	1336	深鉢 B 1	K 7 第Ⅲ層	1396	鉢 A	O 1 西壁トレンチ
1277	深鉢 B 1	D 5 第Ⅲ層	1337	深鉢 B 1	F 6 第Ⅲ層	1397	鉢 A	C 7 方形周溝墓1
1278	深鉢 B 1	C 2 第Ⅲ層	1338	深鉢 B 1	K 7 第Ⅲ層	1398	鉢 A	N 11 第Ⅲ層
1279	深鉢 B 1	E 6 第Ⅲ層	1339	深鉢 B 1	E 7 第Ⅲ層	1399	鉢 A	G 9 第Ⅲ層
1280	深鉢 B 1	C 2 第Ⅲ層	1340	深鉢 B 1	F 3 第Ⅲ層	1400	鉢 A	C 7 第Ⅲ層
1281	深鉢 B 1	N 1 第Ⅲ層	1341	深鉢 B 1	C 2 第Ⅲ層	1401	鉢 A	C 7 第Ⅲ層
1282	深鉢 B 1	N 9 第Ⅲ層	1342	深鉢 B 1	G 6 第Ⅲ層	1402	鉢 A	M 4 第Ⅲ層
1283	深鉢 B 2	C 5 第Ⅲ層	1343	深鉢 B 1	排土	1403	鉢 A	K 8 第Ⅲ層
1284	深鉢 B 2	N 4 第Ⅲ層	1344	深鉢 B 1	C 1 西壁トレンチ	1404	鉢 A	L 10 第Ⅲ層
1285	深鉢 B 2	N 8 第Ⅲ層	1345	深鉢 B 1	N 1 第Ⅲ層	1405	鉢 A	K 10 第Ⅲ層
1286	深鉢 B 2	不明	1346	深鉢 B 1	N 4 第Ⅲ層	1406	鉢 A	C 6 第Ⅲ層
1287	深鉢 B 2	O 3 南壁トレンチ	1347	深鉢 B 1	D 5 第Ⅲ層	1407	鉢 A	I 1 第Ⅲ層
1288	深鉢 B 2	F 3 第Ⅲ層	1348	深鉢 B 1	I 9 第Ⅲ層	1408	鉢 A	K 10 第Ⅲ層
1289	深鉢 B 2	D 3 第Ⅲ層	1349	深鉢 B 1	F 7 第Ⅲ層	1409	鉢 A	不明
1290	深鉢 B 2	E 8 第Ⅲ層	1350	深鉢 その他	N 3 第Ⅲ層	1410	鉢 A	C 5 第Ⅲ層
1291	深鉢 B 2	N 6 第Ⅲ層	1351	深鉢 その他	F 2 第Ⅲ層	1411	鉢 A	N 1 第Ⅲ層
1292	深鉢 B 2	D 2 第Ⅲ層	1352	深鉢 その他	I 1 第Ⅲ層	1412	鉢 A	K 9 第Ⅲ層
1293	深鉢 B 2	C 7 第Ⅲ層	1353	深鉢 その他	D 5 第Ⅲ層	1413	鉢 A	K 9 第Ⅲ層
1294	深鉢 B 2	M 11 第Ⅲ層	1354	深鉢 その他	C 7 第Ⅲ層	1414	鉢 A	H 14 第Ⅲ層
1295	深鉢 B 2	I 13 第Ⅲ層	1355	深鉢 その他	I 4 第Ⅲ層	1415	鉢 A	E 3 第Ⅲ層
1296	深鉢 B 2	K 7 第Ⅲ層	1356	深鉢 その他	I 9 第Ⅲ層	1416	鉢 A	D 2・3 第Ⅲ層
1297	深鉢 B 2	M 10 第Ⅲ層	1357	深鉢 その他	I 2 第Ⅲ層	1417	鉢 A	D 7 第Ⅲ層
1298	深鉢 B 2	G 5 第Ⅲ層	1358	深鉢 その他	H 14 第Ⅲ層	1418	鉢 A	D 7 第Ⅲ層
1299	深鉢 B 2	C 7 第Ⅲ層	1359	深鉢 その他	M 7 第Ⅲ層	1419	鉢 A	E 2 第Ⅲ層
1300	深鉢 B 2	D 3 第Ⅲ層	1360	深鉢 その他	M 7 第Ⅲ層	1420	鉢 A	H 1 第Ⅲ層
1301	深鉢 B 2	H 15 第Ⅲ層	1361	深鉢 その他	I 13 第Ⅲ層	1421	鉢 A'	K 8 第Ⅲ層
1302	深鉢 B 2	I 1 第Ⅲ層	1362	深鉢 その他	N 2 第Ⅲ層	1422	鉢 A'	E 2 第Ⅲ層
1303	深鉢 B 2	N 8 第Ⅲ層	1363	深鉢 その他	H 15 第Ⅲ層	1423	鉢 A''	K 7 第Ⅲ層
1304	深鉢 B 2	D 2 第Ⅲ層	1364	深鉢 その他	I 13 第Ⅲ層	1424	鉢 A''	J 7 第Ⅲ層
1305	深鉢 B 2	F 5 第Ⅲ層	1365	深鉢 その他	C 3 第Ⅲ層	1425	鉢 A''	I 7 第Ⅲ層
1306	深鉢 B 2	M 7 第Ⅲ層	1366	深鉢 その他	H 15 第Ⅲ層	1426	鉢 A''	N 1 第Ⅲ層
1307	深鉢 B 2	C 3 第Ⅲ層	1367	深鉢 その他	H 14 第Ⅲ層	1427	鉢 A''	E 4 第Ⅲ層
1308	深鉢 B 2	N 11 第Ⅲ層	1368	深鉢 その他	I 13 第Ⅲ層	1428	鉢 A''	K 7 第Ⅲ層
1309	深鉢 B 2	L 3 第Ⅲ層	1369	深鉢 その他	J 7 第Ⅲ層	1429	鉢 A''	F 6 第Ⅲ層
1310	深鉢 B 2	E 3 第Ⅲ層	1370	深鉢 その他	C 6 第Ⅲ層	1430	鉢 A	N 8 第Ⅲ層
1311	深鉢 B 2	M 9 第Ⅲ層	1371	深鉢 その他	I 13 第Ⅲ層	1431	鉢 B	I 14 第Ⅲ層
1312	深鉢 B 2	N 11 第Ⅲ層	1372	深鉢 その他	F 6 第Ⅲ層	1432	鉢 B	H 13 第Ⅲ層
1313	深鉢 B 2	H 10 第Ⅲ層	1373	深鉢 その他	H 1 第Ⅲ層	1433	鉢 B	N 11 第Ⅲ層
1314	深鉢 B 2	H 1 第Ⅲ層	1374	深鉢 その他	E 6 第Ⅲ層	1434	鉢 B	D 2 第Ⅲ層
1315	深鉢 B 2	D 3 第Ⅲ層	1375	深鉢 その他	E 6 第Ⅲ層	1435	鉢 B	H 13 第Ⅲ層
1316	深鉢 B 2	D 4 第Ⅲ層	1376	深鉢 その他	H 14 第Ⅲ層	1436	鉢 B	E 3 第Ⅲ層
1317	深鉢 B 2	C 6 第Ⅲ層	1377	深鉢 その他	I 13 第Ⅲ層	1437	鉢 B	N 10 第Ⅲ層
1318	深鉢 B 3	N 4 第Ⅲ層	1378	深鉢 その他	H 15 第Ⅲ層	1438	鉢 B	N 10 第Ⅲ層
1319	深鉢 B 3	D 2 第Ⅲ層	1379	深鉢 その他	N 11 第Ⅲ層	1439	鉢 B	D 7 第Ⅲ層
1320	深鉢 B 3	E 7 第Ⅲ層	1380	深鉢 その他	N 8 第Ⅲ層	1440	鉢 B	D 6 第Ⅲ層

第9表 繩文土器分類及び出土位置一覧表(8)

No	分類	出土位置	No	分類	出土位置	No	分類	出土位置
1441	鉢 B	C 5 第Ⅲ層	1501	壺、注 A'	E 2 第Ⅲ層	1561	壺、注 B	C 6 第Ⅲ層
1442	鉢 B	J 9 第Ⅲ層	1502	壺、注 A'	M 11 第Ⅲ層	1562	壺、注 B	N 4 第Ⅲ層
1443	鉢 B	C 3 第Ⅲ層	1503	壺、注 A'	C 4 第Ⅲ層	1563	壺、注 B	N 4 第Ⅲ層
1444	鉢 B	L 7 第Ⅲ層	1504	壺、注 A'	E 6 第Ⅲ層	1564	壺、注 B	不明
1445	鉢 B	H 8 第Ⅲ層	1505	壺、注 A'	C 2 第Ⅲ層	1565	壺、注 B	J 9 第Ⅲ層
1446	鉢 B	D 4 第Ⅲ層	1506	壺、注 A'	C 4 第Ⅲ層	1566	壺、注 B	K 9 第Ⅲ層
1447	鉢 B	K 7 第Ⅲ層	1507	壺、注 A'	b 3 第Ⅲ層	1567	壺、注 B	N 4 第Ⅲ層
1448	鉢 B	不明	1508	壺、注 A'	H 3 第Ⅲ層	1568	壺、注 B	H 11 第Ⅲ層
1449	鉢 B	D 3 第Ⅲ層	1509	壺、注 A'	C 2 第Ⅲ層	1569	壺、注 B	H 14 第Ⅲ層
1450	鉢 B	C 6 第Ⅲ層	1510	壺、注 A'	C 6 第Ⅲ層	1570	壺、注 B	I 13 第Ⅲ層
1451	鉢 B	C 7 第Ⅲ層	1511	壺、注 A'	K 10 第Ⅲ層	1571	壺、注 B	D 5 第Ⅲ層
1452	鉢 B	K 8 第Ⅲ層	1512	壺、注 A'	C 2 第Ⅲ層	1572	壺、注 B	N 7 第Ⅲ層
1453	鉢 C	I 11 第Ⅲ層	1513	壺、注 A'	C 3 第Ⅲ層	1573	壺、注 B	H 14 第Ⅲ層
1454	鉢 C	H 3 第Ⅲ層	1514	壺、注 A・A'	C 2 第Ⅲ層	1574	壺、注 C	E 3 第Ⅲ層
1455	鉢 C	N 4 第Ⅲ層	1515	壺、注 A・A'	K 9, N 6 第Ⅲ層	1575	壺、注 C	N 4 第Ⅲ層
1456	鉢 C	H 13 第Ⅲ層	1516	壺、注 A・A'	N 11 第Ⅲ層	1576	壺、注 C	H 1 第Ⅲ層
1457	鉢 C	N 11 第Ⅲ層	1517	壺、注 A・A'	N 2 第Ⅲ層	1577	壺、注 C	B 3, D 3・4 第Ⅲ層
1458	鉢 C	I 4 第Ⅲ層	1518	壺、注 A・A'	E 8 第Ⅲ層	1578	壺、注 D	K 9 第Ⅲ層
1459	鉢 C	I 4 第Ⅲ層	1519	壺、注 A・A'	H 13 第Ⅲ層	1579	壺、注 D	C 4 第Ⅲ層
1460	鉢 C	E 7 第Ⅲ層	1520	壺、注 A・A'	N 8 第Ⅲ層	1580	壺、注 D	H 6 第Ⅲ層
1461	鉢 D	N 5 第Ⅲ層	1521	壺、注 A・A'	E 6 第Ⅲ層	1581	壺、注 D	I 1 第Ⅲ層
1462	鉢 D	H 13 第Ⅲ層	1522	壺、注 A・A'	N 8 第Ⅲ層	1582	壺、注 D	J 10 第Ⅲ層
1463	鉢 D	C 5 第Ⅲ層	1523	壺、注 A・A'	N 4 第Ⅲ層	1583	壺、注 E	H 13 第Ⅲ層
1464	鉢 D	C 7 第Ⅲ層	1524	壺、注 A・A'	E 6 第Ⅲ層	1584	壺、注 E	C 3 第Ⅲ層
1465	鉢 D	N 11 第Ⅲ層	1525	壺、注 A・A'	E 6 第Ⅲ層	1585	壺、注 E	C 6 第Ⅲ層
1466	鉢 D	H 14 第Ⅲ層	1526	壺、注 A・A'	E 6 第Ⅲ層	1586	壺、注 E	N 7 第Ⅲ層
1467	鉢 D	C 7 第Ⅲ層	1527	壺、注 A・A'	D 7 第Ⅲ層	1587	壺、注 E	N 4 第Ⅲ層
1468	鉢 D	D 7 第Ⅲ層	1528	壺、注 A・A'	M 9 第Ⅲ層	1588	壺、注 E	不明
1469	鉢 D	I 4 第Ⅲ層	1529	壺、注 A・A'	H 15 第Ⅲ層	1589	壺、注 E	C 2 第Ⅲ層
1470	鉢 D	C 6 第Ⅲ層	1530	壺、注 A・A'	N 3 第Ⅲ層	1590	壺、注 E	不明
1471	鉢 D	B 5 第Ⅲ層	1531	壺、注 A・A'	G 9 第Ⅲ層	1591	壺、注 G	I 9 第Ⅲ層
1472	鉢 D	H 14 第Ⅲ層	1532	壺、注 A・A'	N 11 第Ⅲ層	1592	異系統	H 13・14 第Ⅲ層
1473	鉢 D	N 7 第Ⅲ層	1533	壺、注 A・A'	不明	1593	異系統	I 2 第Ⅲ層
1474	鉢 D	E 6 第Ⅲ層	1534	壺、注 A・A'	D 4 第Ⅲ層	1594	異系統	F 6 第Ⅲ層
1475	鉢 D	D 7 第Ⅲ層	1535	壺、注 A・A'	M 5 第Ⅲ層	1595	異系統	H 13 第Ⅲ層
1476	鉢 D	K 8 第Ⅲ層	1536	壺、注 A・A'	H 12 第Ⅲ層	1596	異系統	N 4 第Ⅲ層
1477	鉢 D	N 11 第Ⅲ層	1537	壺、注 A・A'	G 2 第Ⅲ層	1597	異系統	H 14 第Ⅲ層
1478	鉢 D	C 7 第Ⅲ層	1538	壺、注 A・A'	H 15 第Ⅲ層	1598	異系統	H 20 溝1
1479	壺、注 A	不明	1539	壺、注 A・A'	N 4 第Ⅲ層	1599	異系統	N 5 第Ⅲ層
1480	壺、注 A	H 10 第Ⅲ層	1540	壺、注 A・A'	N 1 第Ⅲ層	1600	異系統	M 6, N 6 第Ⅲ層
1481	壺、注 A	M 9 第Ⅲ層	1541	壺、注 A・A'	N 4 第Ⅲ層	1601	異系統	H 13 第Ⅲ層
1482	壺、注 A	I 5 第Ⅲ層	1542	壺、注 A・A'	H 12 第Ⅲ層	1602	異系統	K 4 第Ⅲ層
1483	壺、注 A	N 11 第Ⅲ層	1543	壺、注 A・A'	C 3 第Ⅲ層	1603	異系統	I 4 第Ⅲ層
1484	壺、注 A	E 6 第Ⅲ層	1544	壺、注 A・A'	C 2 第Ⅲ層	1604	異系統	N 6 第Ⅲ層
1485	壺、注 A	G 2 第Ⅲ層	1545	壺、注 A・A'	N 11 第Ⅲ層	1605	異系統	E 3 第Ⅲ層
1486	壺、注 A	M 7 第Ⅲ層	1546	壺、注 A・A'	C 2 第Ⅲ層	1606	異系統	I 14・15 第Ⅲ層
1487	壺、注 A	H 12 第Ⅲ層	1547	壺、注 A・A'	C 2 第Ⅲ層	1607	異系統	N 4 第Ⅲ層
1488	壺、注 A	D 2 第Ⅲ層	1548	壺、注 A・A'	D 3 第Ⅲ層	1608	異系統	N 1 第Ⅲ層
1489	壺、注 A	N 7 第Ⅲ層	1549	壺、注 A・A'	M 9 第Ⅲ層	1609	異系統	N 8 第Ⅲ層
1490	壺、注 A	M 7 第Ⅲ層	1550	壺、注 A・A'	C 4 第Ⅲ層	1610	異系統	H 13 第Ⅲ層
1491	壺、注 A	D 8 土坑3	1551	壺、注 A・A'	C 6 第Ⅲ層	1611	異系統	E 8 第Ⅲ層
1492	壺、注 A	K 9・10 第Ⅲ層	1552	壺、注 A・A'	D 6・7 第Ⅲ層	1612	異系統	N 3 第Ⅲ層
1493	壺、注 A'	E 8 第Ⅲ層	1553	壺、注 A・A'	N 6 第Ⅲ層	1613	異系統	N 5 第Ⅲ層
1494	壺、注 A'	D 7 第Ⅲ層	1554	壺、注 A・A'	D 4 第Ⅲ層	1614	異系統	H 5 第Ⅲ層
1495	壺、注 A'	I 14 第Ⅲ層	1555	壺、注 A'	H 14 第Ⅲ層	1615	異系統	N 4 第Ⅲ層
1496	壺、注 A'	I 15 第Ⅲ層	1556	壺、注 A'	C 3 第Ⅲ層	1616	異系統	I 3 第Ⅲ層
1497	壺、注 A'	N 8 第Ⅲ層	1557	壺、注 B	F 4 第Ⅲ層	1617	異系統	H 3 第Ⅲ層
1498	壺、注 A'	H 15 第Ⅲ層	1558	壺、注 B	C 2 第Ⅲ層	1618	異系統	H 3 第Ⅲ層
1499	壺、注 A'	D 1 西壁トレンチ	1559	壺、注 B	D 3 第Ⅲ層	1619	異系統	H 3 第Ⅲ層
1500	壺、注 A'	M 4 第Ⅲ層	1560	壺、注 B	F 5 第Ⅲ層	1620	異系統	I 3 第Ⅲ層

※表中「注」は「注口土器」の略

第10表 繩文土器分類及び出土位置一覧表 (9)

No	分類	出土位置	No	分類	出土位置	No	分類	出土位置
1621	異系統	I 2 第Ⅲ層	1646	異系統	J10 第Ⅲ層	1671	後期前葉	M10 第Ⅲ層
1622	異系統	I 3 第Ⅲ層	1647	異系統	L 9 第Ⅲ層	1672	後期前葉	G 6 第Ⅲ層
1623	異系統	H 3 第Ⅲ層	1648	異系統	I 9 第Ⅲ層	1673	後期前葉	排土
1624	異系統	K 8 第Ⅲ層	1649	異系統	G 9 第Ⅲ層	1674	後期前葉	I20 第Ⅲ層
1625	異系統	K 6 第Ⅲ層	1650	異系統	N 3 第Ⅲ層	1675	後期前葉	N 4 第Ⅲ層
1626	異系統	B 6 第Ⅲ層	1651	異系統	F 6 第Ⅲ層	1676	後期前葉	N 7 第Ⅲ層
1627	異系統	M 9, N 9 第Ⅲ層	1652	異系統	C 2-4 第Ⅲ層	1677	後期前葉	N 8 第Ⅲ層
1628	異系統	I 9 第Ⅲ層	1653	異系統	C 7 第Ⅲ層	1678	後期前葉	E 5 第Ⅲ層
1629	異系統	M 8 第Ⅲ層	1654	異系統	D 2 第Ⅲ層	1679	後期前葉	D 4 第Ⅲ層
1630	異系統	N11 第Ⅲ層	1655	異系統	E 5 第Ⅲ層	1680	後期前葉	L10 第Ⅲ層
1631	異系統	L 6 第Ⅲ層	1656	異系統	H 7 第Ⅲ層	1681	後期前葉	I14 第Ⅲ層
1632	異系統	O 4 南壁トレンチ	1657	異系統	K 8 第Ⅲ層	1682	後期前葉	I10 第Ⅲ層
1633	異系統	N 9 第Ⅲ層	1658	異系統	K 6 第Ⅲ層	1683	後期前葉	C 5 第Ⅲ層
1634	異系統	N10 第Ⅲ層	1659	異系統	K 6 第Ⅲ層	1684	後期前葉	N11 第Ⅲ層
1635	異系統	H14 第Ⅲ層	1660	異系統	I 8 第Ⅲ層	1685	後期前葉	H14-15 第Ⅲ層
1636	異系統	H14 第Ⅲ層	1661	異系統	C 3 第Ⅲ層	1686	晚期後半	I12 第Ⅲ層
1637	異系統	C 5 第Ⅲ層	1662	異系統	C 7 第Ⅲ層	1687	晚期後半	M 9 第Ⅲ層
1638	異系統	H13 第Ⅲ層	1663	中期中葉	J 5 第Ⅲ層	1688	晚期後半	西壁トレンチ
1639	異系統	B 4, C 4 第Ⅲ層	1664	中期中葉	M 2 第Ⅲ層	1689	晚期後半	排土
1640	異系統	D 3 第Ⅲ層	1665	中期末葉	K 8 第Ⅲ層	1690	晚期後半	排土
1641	異系統	D 3 第Ⅲ層	1666	中期末葉	F 6 第Ⅲ層			
1642	異系統	M 9 第Ⅲ層	1667	中期末葉	C 4 第Ⅲ層			
1643	異系統	あ3 第Ⅲ層	1668	中期末葉	E 3 第Ⅲ層			
1644	異系統	L 6 第Ⅲ層	1669	中期末葉	F 6 第Ⅲ層			
1645	異系統	H14 第Ⅲ層	1670	後期初頭	B 3 第Ⅲ層			

第11表 繩文土器分類及び出土位置一覧表（10）

(2) 土偶

66点が出土した。翌平成5年度、嬉野町教育委員会が実施した南側の範囲確認調査でも、4点が出土した。したがって、合計70点の土偶が天白遺跡では確認されている。ここでは、平成4年度の当調査分の66点について記述する。

A 出土状況（第117図）

遺構からの出土ではなく、他の土器片などと混在して第Ⅲ層（灰褐色シルト層）で確認された。したがって、出土状況からは土偶の所属時期の細分はできない。

出土地点に特に偏りはみられず、調査区全体に散在する。接合例は、25~30m程離れたグリット間のものが2例（8・26）、隣接グリット間のものが3例（3・22・27）、同一グリット内のが2例（17・59）ある。なお、各グリットは4m方格である。

B 土偶の概要（第109図1~第116図66、第12表）

製作技法や形態から、胴部を中心に残る土偶（1~32）をA~G類、及びその他の8類に分類した。以下、各類の記述を進め、その後に頭部や腕、脚などの各部位だけが残る資料（33~66）について記述する。

A類（1~10） ひとがたで、2本の棒状粘土を中心製作されたものをA類とした。乳房や腕が確認される資料から、縦長の乳房や偏平な腕をもつことも本類の特徴としてあげられる。

1は、右肩部から腕にかけて残存する。腕は偏平で、端部を欠く。背面に、肩から降りる斜方向の沈線帯がみられる。沈線帯は2条沈線間に二枚貝腹縁の刺突文をもつ。また、肩部にも横位の沈線が1条ある。肩部沈線は末端刺突と沈線内刺突をもつ。

2も、右肩部から腕にかけて残存する。腕は偏平で、先端が窄まる。背面に、1と類似する施文がみられる。肩から降りる斜方向の沈線帯は、ややルーズなものになり2ないしは3条である。また、1には確認されない、肩部でとまる2条の短い沈線もある。肩部の横位の沈線もルーズで、4~5条みられる。

3は、胴部が残存する。2本の棒状粘土を中心作られているため、左右に割れて出土した2点が接合した。腕は欠損するが、割れ口の形状から断面が偏平な腕をもつと推定される。背面に、肩部から降りる斜方向のルーズな沈線が数条みられる。1や2

にみられた肩部の横位の沈線はない。肩部の中央が瘤状にやや盛り上がる。

4は、左半身が残存する。腕は欠損するが、割れ口の形状から断面が偏平な腕をもつと推定される。縦長の乳房をもつ。乳房の下には、横位の隆帯をもつ。この隆帯は途中で剥離するが、側面まで巡っていたと思われる。腹部や臀部の表現であろう。背面には、肩部から降りる斜方向の2条の沈線がみられる他、肩や脇に沈線が確認される。側面に、僅かではあるが赤色顔料と思われるものが認められる。

5は、胴部が残存する。腕は欠損するが、割れ口の形状から断面が偏平な腕をもつと推定される。縦長の乳房をもつ。左右の乳房の間には正中線がみられる。妊娠線の表現か。腹部には、横位の隆帯をもつ。隆帯の中央に、臍の表現である刺突をもつ。背面には、肩部から降りる斜方向の2条の沈線がみられる。肩部から背面にかけて赤色顔料が確認される。

6は、胴部の右半身が残存する。腕は欠損するが、割れ口の形状から断面が偏平な腕をもつと推定される。縦長の乳房であったと推定される剥離痕が認められる。背面の斜方向の沈線帯は、1～5が肩部から降りるのに対して、本例は脇から降りる。沈線帯は2条である。腰に隆帯を2带もつ。肩部から背面にかけて赤色顔料が確認される。

7は、胴部が残存する。2本の棒状粘土に化粧粘土を付加した様子が良く分かる資料である。頭部には、頭部を接合するための心材の痕跡と推定されるものがある。腕は欠損するが、ソケット状に差し込まれたもので、窪みをもつ。先端を欠損するが、縦長の乳房をもつ。背面には、脇から降りる斜方向の2条の沈線がある。中央には、幅の広い縦位の沈線をもつ。肩部には、横位の隆帯がある。肩部や側面を中心に赤色顔料が確認される。

8は、本類の中で最も残存状況が良好な資料である。肩部から爪先にかけて、2本の棒状粘土を中心に作られていることが良く分かる。頭部は目や鼻、口などの表現をもたない。耳には穿孔がみられる。腕は欠損するが、割れ口の形状から偏平な腕をもつと推定される。乳房の剥離痕が認められる。4～6と比べ、縦長になる印象は弱い。膝や臀部が瘤状の盛り上がりにより表現される他、過剰なまでの隆帶

表現がみられる。1～7までにみられた背面の沈線帯はもたない。肩部には横位の隆帯をもつ。

9は、頭部を除く左半身が残存するものと考える。1～8と比べ粗雑化及び偏平化する。乳房の表現と考えられるものがあるが、中央が窪むもので、断定はできない。正面の部分が剥離するが、側面から背面にかけて隆帯状のものが確認される。股間にも低い高まりが認められる。

10は、臀部を中心に左半身が残存するものと考える。粗雑な作りである。臀部の表現と考えられる高まりが認められる。

B類(11～15) ひとがたで、小型のものをB類とした。総じて偏平な作りである。

11は、腕と顔面を欠損する。豆粒状の乳房をもつ。腰の張りが強い。脚は、先端が窄まる。

12は、腕と脚を欠損する。頭部は目や鼻、口などの表現をもたない。乳房の剥離痕が認められる。両面に、僅かであるが赤色顔料が確認される。

13は、胴部と右脚が残存する。脚は、先端が窄まる。背面に沈線が2条みられる。A類に特徴的であった沈線帯に類似するものが、左右1条ずつみられるものであろうか。臀部の表現と考えられる横位の隆帯をもつ。腰の張りがやや強い。

14は、臀部と右脚が残存する。脚は、先端が窄まる。両側面に隆帯状のものが認められる。

15は、胴部の小片である。一応、本類に含めて考えておく。背面に、縦位と斜方向の各2条の沈線帯がみられる。また、赤色顔料が確認される。

C類(16・17) ひとがたで、高く突き出した乳房をもつものをC類とした。背面の沈線文も類似する。

16は、左腕を除く上半身が残存する。頭部には、口の表現と考えられる刺突をもつ。目や鼻の表現は無い。後頭部が突き出る。腕は先端が窄まる。背面には肩から脇に1条の沈線をもち、脇からは斜方向に2条の沈線が降りる。背面の中央に、指頭によると推定される押圧がみられる。背面に赤色顔料が確認される。

17は、胴部と右腕が残存する。背面には、16と類似する沈線文がみられる。

D類(18・19) ひとがたで、偏平なものをD類

とした。乳房は縦長である。

18と19は、共に胸部から上が残存し、頭部と腕を欠く。

18は、口の表現と考えられる刺突をもつ。背面に赤色顔料が確認される。

E類(20) 1点のみである。ひとがたで、顔面が斜め下方を向く。目や鼻、口などの表現はもたない。頭部に沈線をもつ。やや縦長になると思われる乳房の剥離痕がみられる。

F類(21) 1点のみである。ひとがたで、肩部に横位の粘土の積み上げの痕跡をもつ。頭部は力士の鬚の様な形状で、後頭部にやや幅の広い沈線をもつ。顔面は斜め上方を向き、ハート形の段をもつもので、仮面を表現したものと考えることもできる。目や鼻、口などの表現はもたない。

G類(22~27) いわゆる分銅形のものをG類とした。

22は、残存度が低い。分銅形になるものと考えて本類に含めたが、表裏や上下左右も不明確である。沈線及び沈線間に充填される巻貝による擬繩文がみられる。沈線が集約する部分には、巻貝の殻頂部を折ったものによると考えられる刺突がある。両面に赤色顔料が確認される。

23は、残存度が低く磨滅も激しい。分銅形になるものと考える。片面に2条の沈線がみられ、もう一方の面に2条の沈線間に刻みが充填される沈線帯がみられる。

24は、分銅形の上半部が残存するものと考えた。中央の突起は乳房と推定される。片方は剥離する。乳房の上下に幅の広い横位の沈線がある。上は2条で、下は1条である。下端に刺突状のものが確認される。臍の表現であろうか。背面には、上下各2条の幅の広い横位の沈線がある。背面に赤色顔料が確認される。

25は、残存度が低く磨滅も激しい。分銅形になるものと考える。片面に数条の沈線をもつ。沈線は、横位のものと斜方向のものがある。後述する26に類似するものであろうか。

26は、上半部の右半身が欠損するものと考える。端部に丸みをもつ方が上で、平らな方を下と推定したが、逆の可能性もある。両面に、2ないしは3条

からなる沈線帯がある。沈線の幅はやや広い。沈線帯は横位のものと斜方向のものがある。斜方向の沈線帯は、腹面のものが直線的で、背面のものは曲線的である。腹面下半部の斜方向の沈線帯が集約する部分には刺突がみられる。女性器もしくは臍の表現であろうか。上下が逆の場合は、口の表現を考えることもできる。全面に赤色顔料が確認される。本例の文様は、京都府舞鶴市の桑飼下遺跡出土の岩版の文様を連想させる。^③

27は、ほぼ完存する。端部がより平らの方を下半部と考えたが、逆の可能性もある。無文であるが、上半部の中央には、焼成前の刺突状のものがある。意識的なものか否かは確定できない。口の表現を考えることもできるが、前述した26例の様に女性器もしくは臍の表現を考えることもできる。この場合は上下が逆になる。全面に赤色顔料が確認される。

その他(28~32) 胸部を中心に残る土偶で、A~G類以外のものを一括した。

28は、上下両端を欠く。下端は2本の脚をもたず、そのまま窄まるものと推定される。乳房は、周辺を窪ませることにより表現され、沈線により輪郭が描かれる。この2条の沈線は、下方へと延びる。また、頸部に端部が閉じる2条の沈線がみられる。女性器もしくは臍の表現と推定される刺突をもつ。背面には、2条の沈線により、26例の背面に類似する施文がみられる。この施文の上には刺突がある。全面に赤色顔料が確認される。

29は全容が不明で、表裏や上下左右も不明確である。刺突列や刻み帯がみられる。両面に赤色顔料が確認される。

30も全容が不明である。分銅形とも考えられるが、残存する肩端部に僅かに立ち上がりが確認され、頭部がつく可能性もある。突起は乳房であろう。背面に沈線が数条みられる。

31も全容は不明である。割れ口は、剥離面である。土器の突起の可能性も考えたが、片面に乳房状の高まりがあるため土偶とした。背面に縦位の沈線がみられる。分銅形になるものであろうか。

32は、ほぼ完存するものと考える。下端は両脚を表現すると考えられ、二股になる。片面に、幅の広い2条の横位の沈線をもつ。もう一方の面には、縦

位の幅の広い沈線をもつ。

各部位（33～66） 33～39は、頭部の資料である。33は、上端面に交叉する沈線がみられる。また、下端には、横位の沈線と縦位の短沈線をもつ。後頭部は剥離する。僅かに赤色顔料と思われるものが確認される。34は、一応土偶の頭部と考えた。剥離が著しい。擬縄文風の施文が確認される。35は、上端に横位の強い撫でがあり、中央が隆帯状になる。下半には鼻状の高まりをもち、下端に口と考えられる刺突をもつ。後頭部は無文で反りをもつ。36も、一応土偶の頭部と考えた。2条の沈線と末端刺突状のものがみられる。37は、顔面に隆帯による渦状の表現をもつ。これは、剥離する右耳につながっていたものと考えられる。残存する左耳には、穿孔がみられる。38は、刺突列による施文がみられる。上端面には、比較的大きな刺突が2個ある。目の表現であろうか。39は、頭部に瘤状の突起をもつ。中央の刺突は、口の表現であろう。この刺突からは、1条の細い沈線が垂下する。両端の刺突は、目ないしは耳であろう。背面に向かって細くなり、貫通する。頸部には沈線状のものが巡る。両面に赤色顔料が確認される。

40は、耳と考える。巻貝による刺突がみられる。

41は、剥離した乳房と考える。

42は、剥離した腹部と考える。中央に、臍の表現と推定される刺突をもつ。刺突の上下には各1条の短沈線があり、左右には末端刺突を伴う各2条の短沈線がある。左右の沈線間にはLの縄文が充填される。赤色顔料が確認される。

43と44は、臀部を中心に残存するものと考える。

[註]

- ① 和氣清章『天白遺跡範囲確認調査報告』（嬉野町教育委員会、1994年）。
- ② 渡辺誠編『桑飼下遺跡発掘調査報告書』（平安博物館、1975年）。

共に、両脚の剥離痕が認められる。43の背面は反りをもち、臀部が突き出た形になる。44の背面には、上下に横位の隆帯がある。下方の隆帯は、「U」字状になるもので、臀部を表現すると考える。類似する隆帯が、東大阪市の馬場川遺跡出土の土偶にみられる。^③上方の隆帯は刻み列を伴う。

45は、肩もしくは腕である。

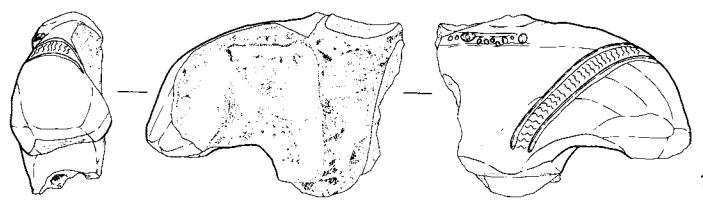
46～53は、腕である。46～48の断面は偏平である。46と47の上面には、連続する浅い刺突状のものがある。49は、付け根の上面にルーズな1条の沈線とこれを切る刻み帶をもつ。50は、付け根の背面に1条の沈線をもつ。51～53は、先端部に掌を表現したと考えられる押圧をもつ。また、52と53は接合上の理由であろうか付け根の部分が細くなる。

54は、腰の部分と考える。刺突列を伴う沈線が2条みられる。赤色顔料が確認される。

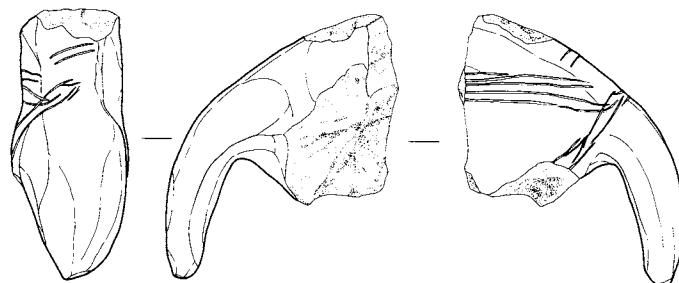
55～66は脚である。55と56は豊満な資料で、良く締まった足首をもつ。共に臀部の膨らみをもつ。57～59は足首の締まりは認められるものの、全体に直線的な資料である。57は、足首と付け根の部分に沈線内刺突を伴う各1条の沈線が巡る。58には赤色顔料が確認される。60～66は、脚先に向かって細くなる資料である。60は、小型のものである。数条の沈線がみられる。付け根の部分が引き出され、この部分の上面に湾曲する沈線が1条ある。また、脚の裏には刺突がみられる。61と63～66は、臀部の膨らみをもつ。64は、膝の表現の突起が剥離した痕跡がみられる。65は、沈線と刺突がみられる。また、64と65は赤色顔料が確認される。

（森川幸雄）

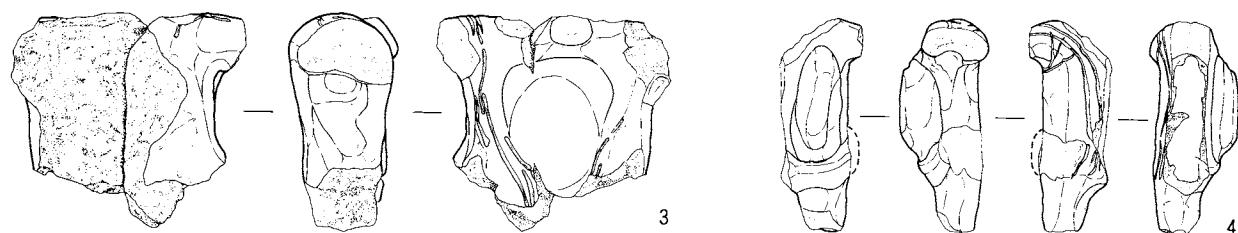
③ 片岡肇「近畿地方の土偶について」（『角田文衛博士古希記念 古代学叢論』角田文衛博士古希記念事業会、1989年）。



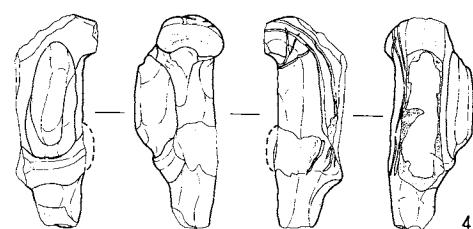
1



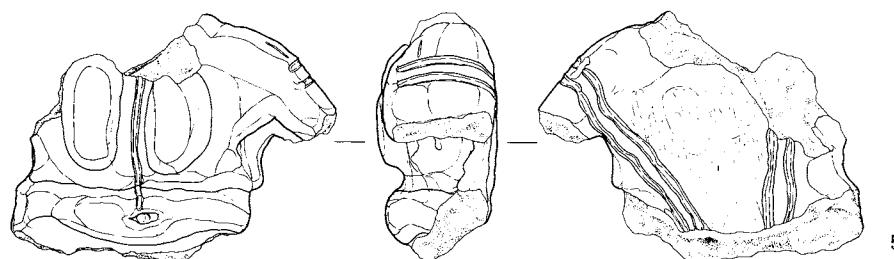
2



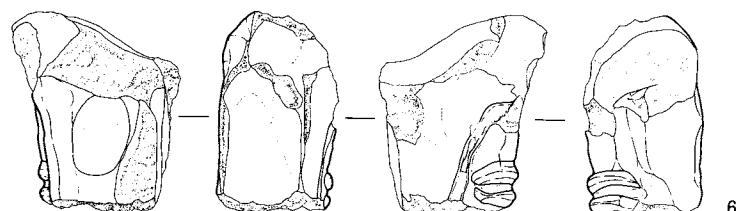
3



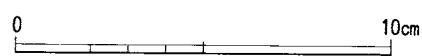
4



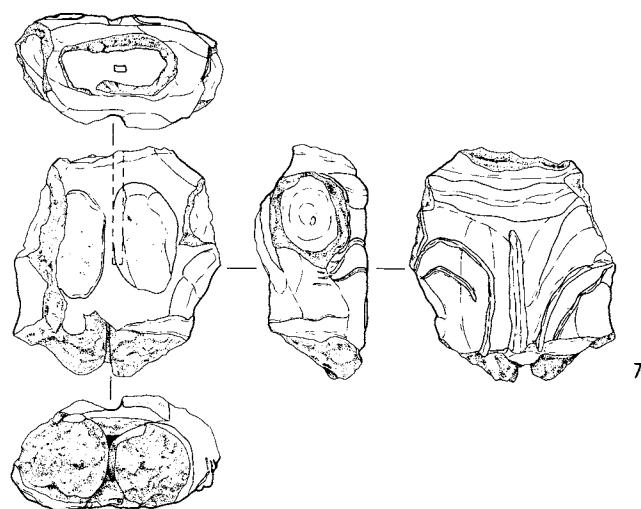
5



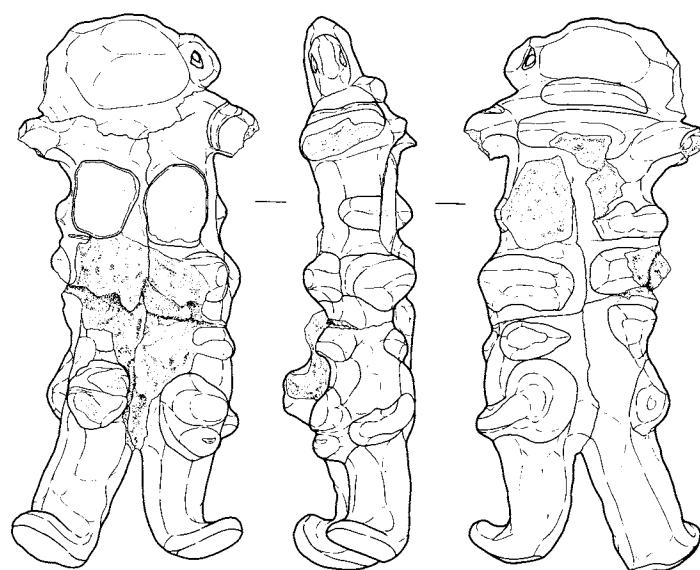
6



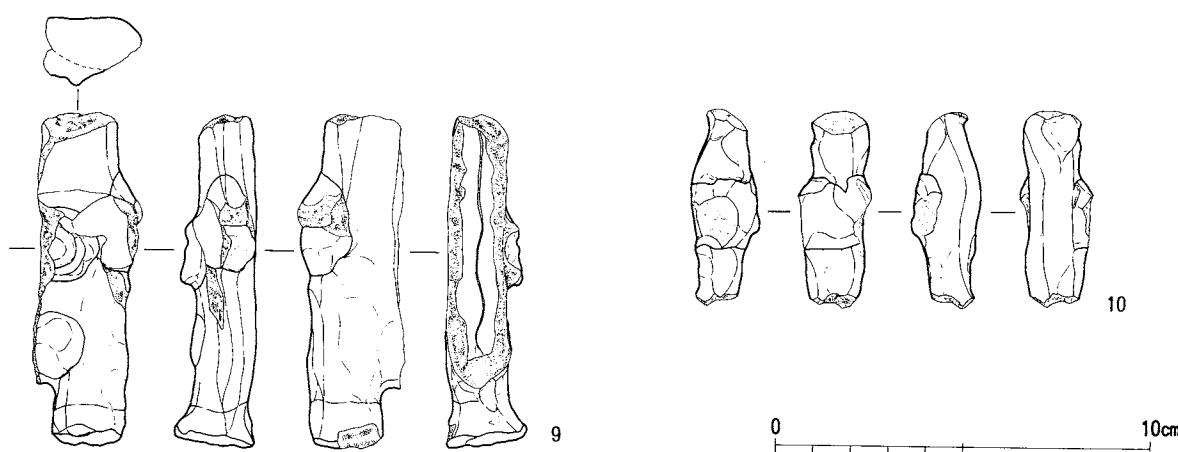
第109図 土偶A類実測図 (1 : 2)



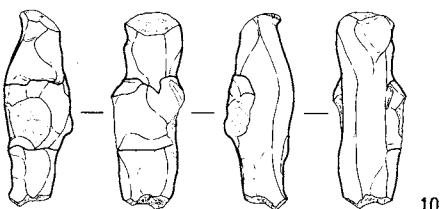
7



8



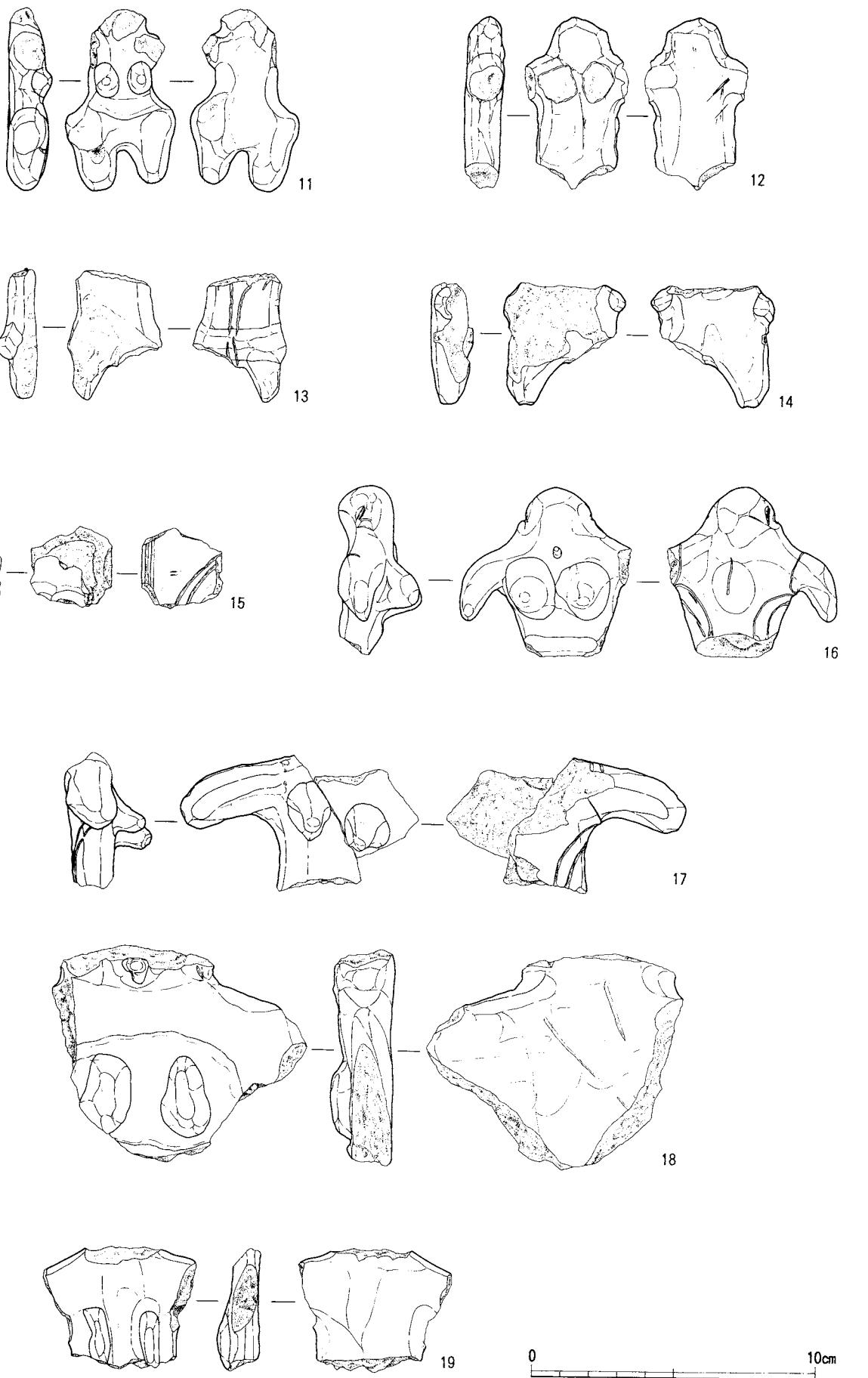
9



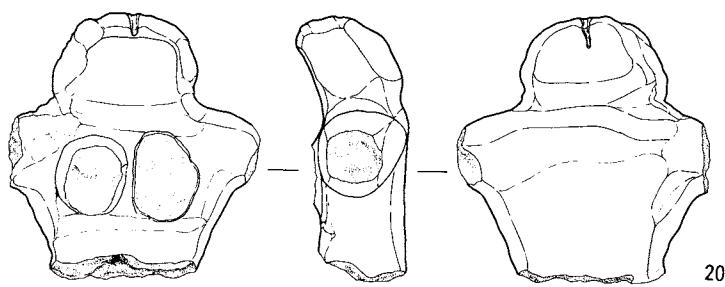
10



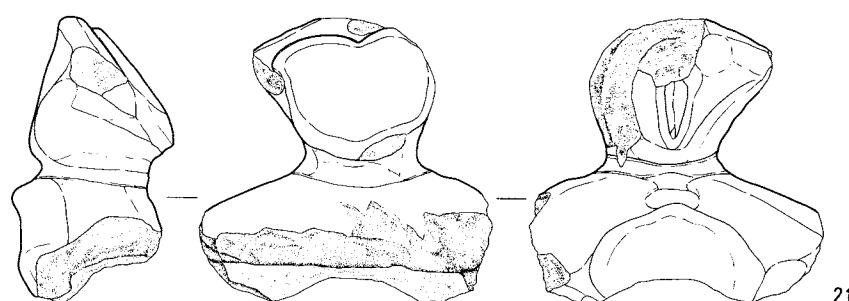
第110図 土偶A類実測図 (1 : 2)



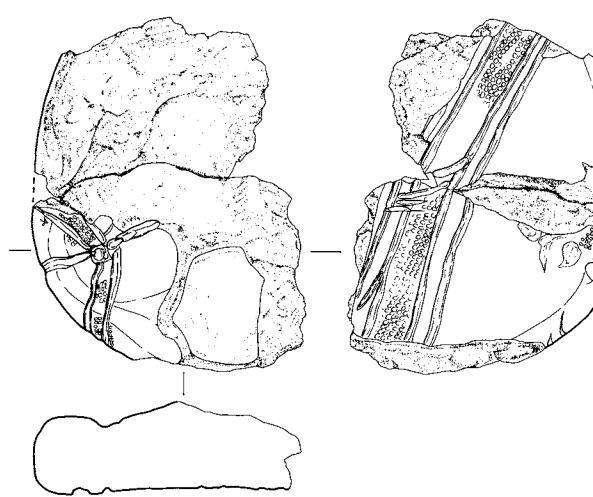
第111図 土偶B～D類実測図（1：2）



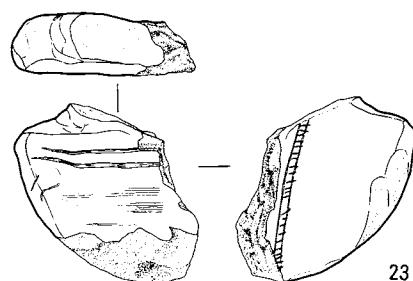
20



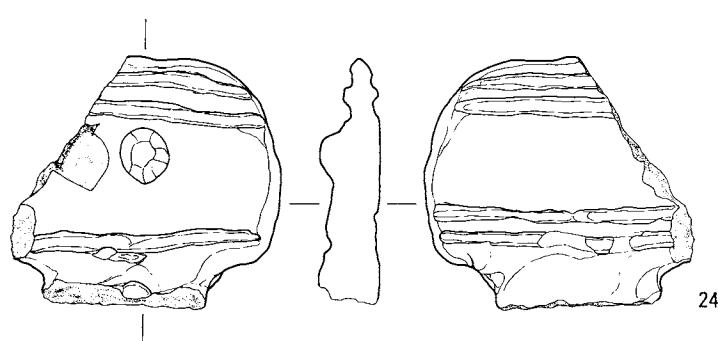
21



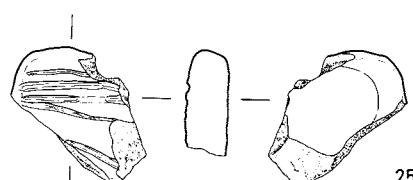
22



23



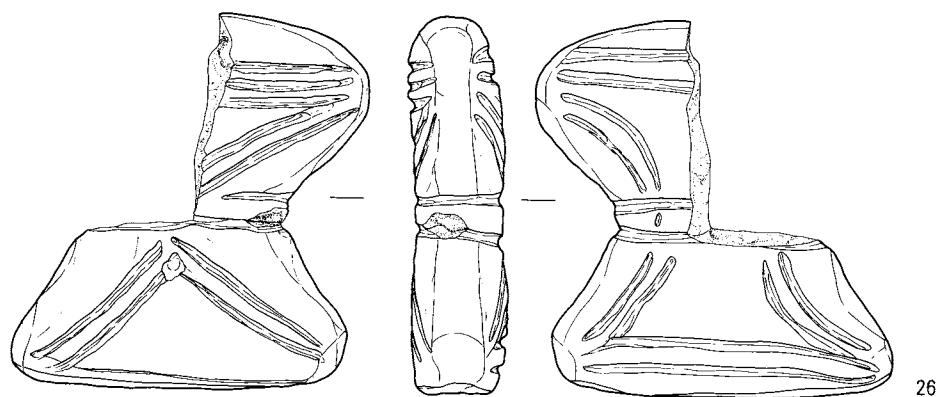
24



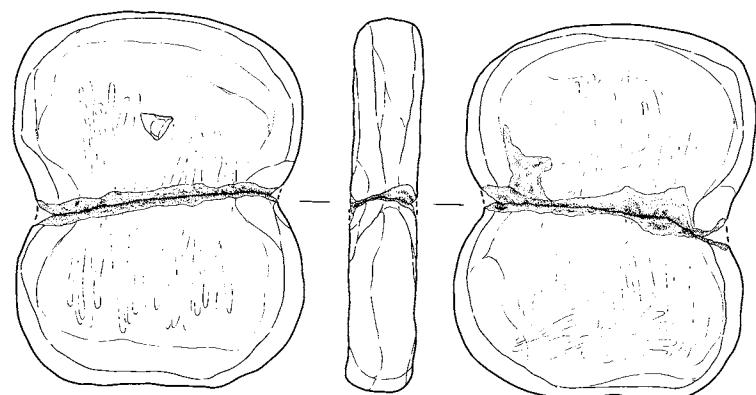
25



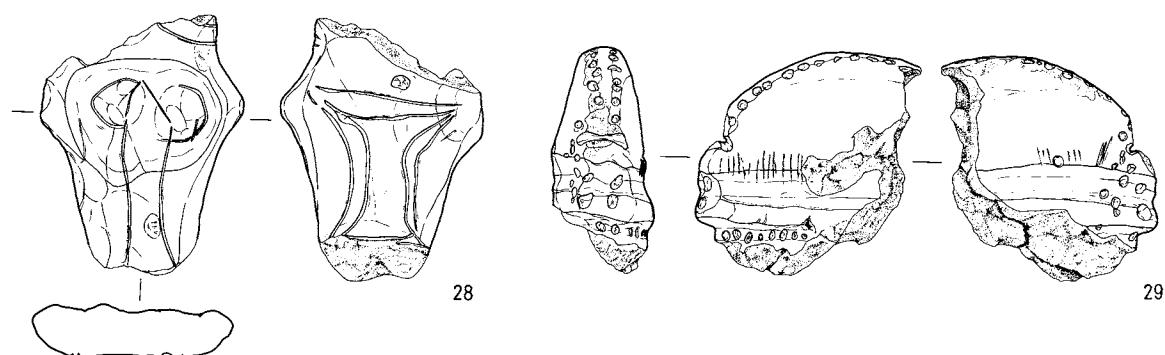
第112図 土偶E～G類実測図（1：2）



26

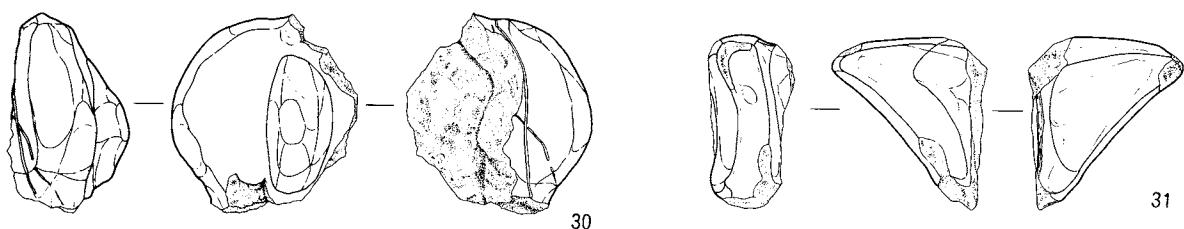


27



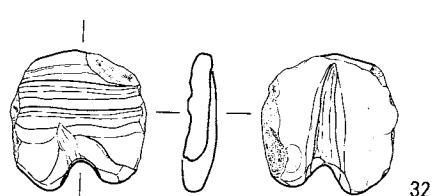
28

29

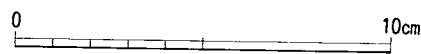


30

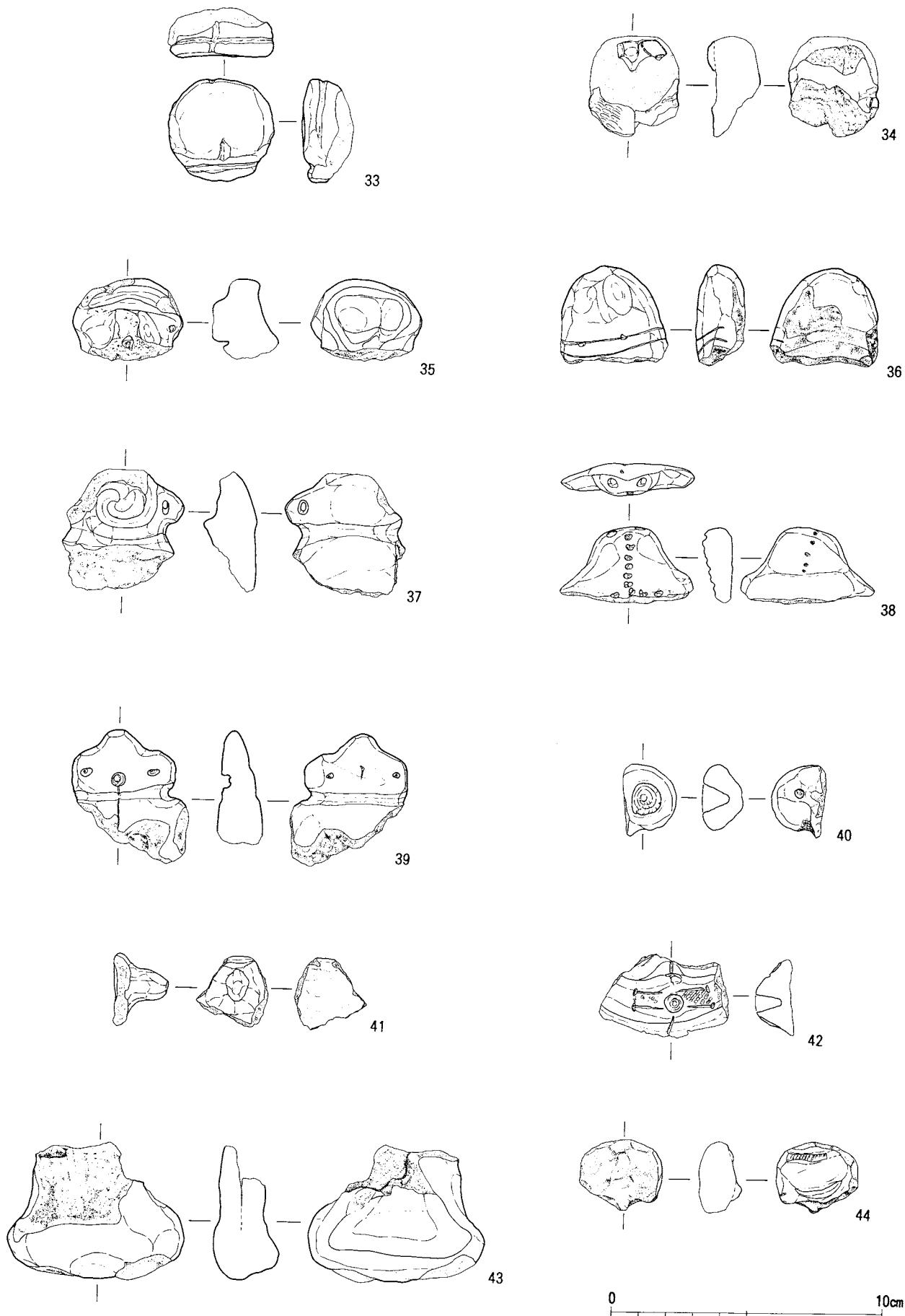
31



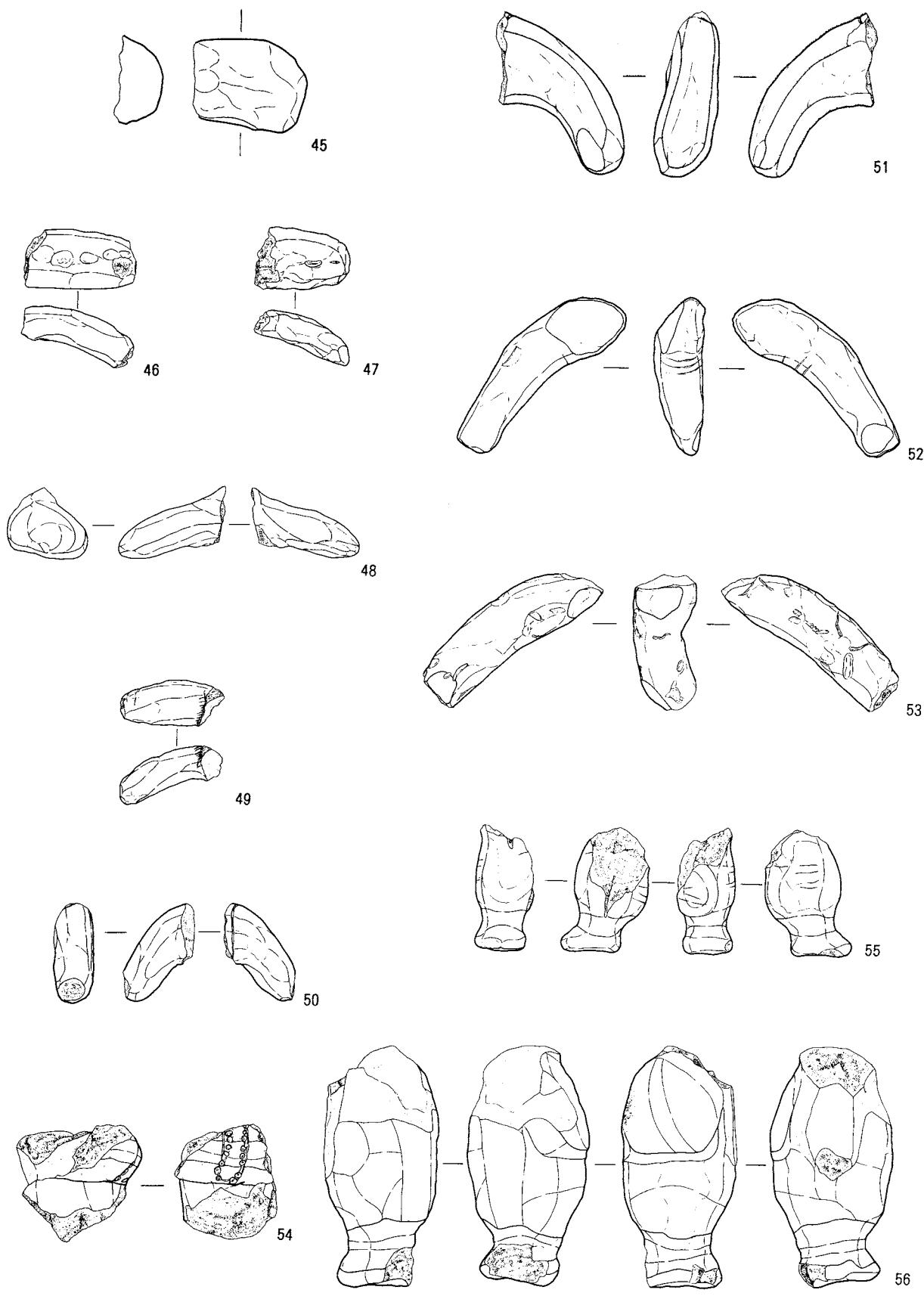
32



第113図 土偶G類・その他実測図 (1 : 2)

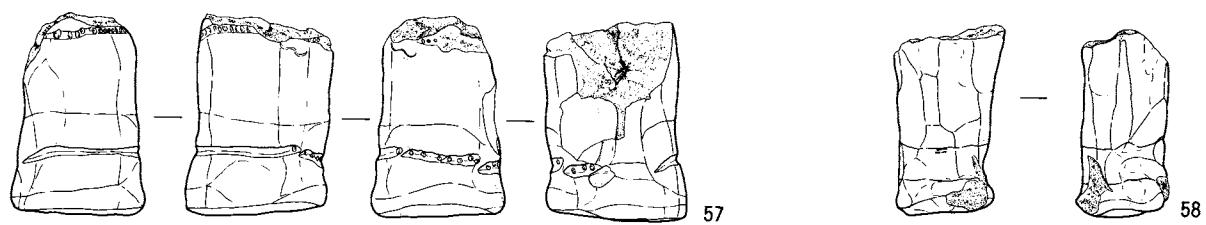


第114図 土偶各部位実測図 (1 : 2)

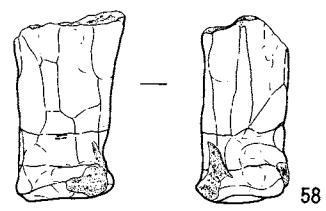


0 10cm

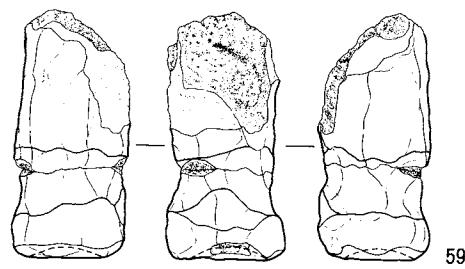
第115図 土偶各部位実測図 (1 : 2)



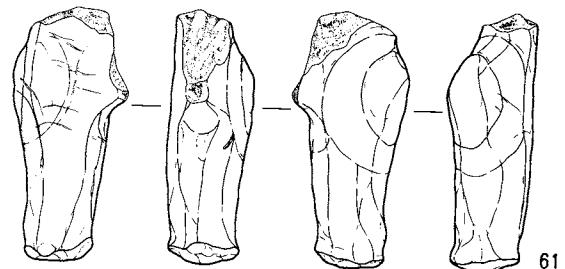
57



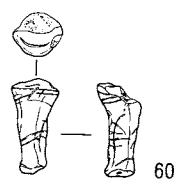
58



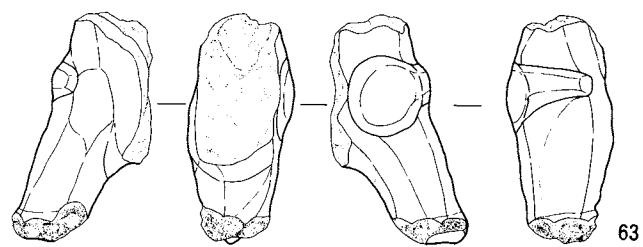
59



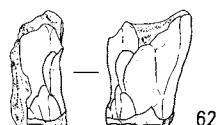
61



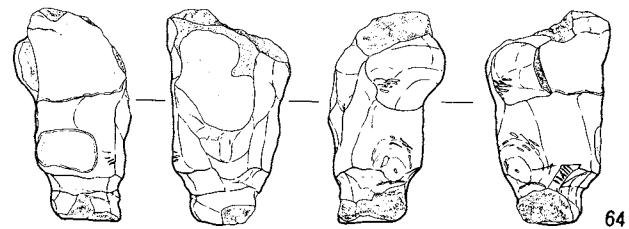
60



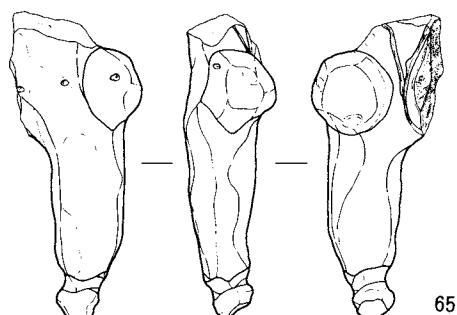
63



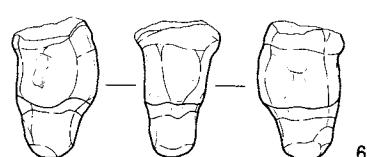
62



64



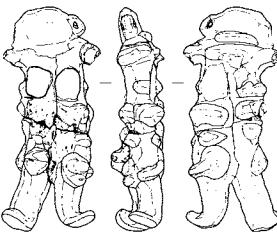
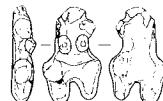
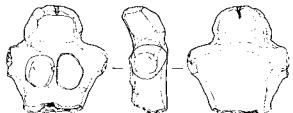
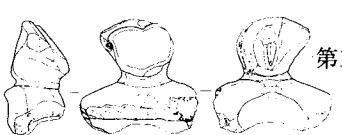
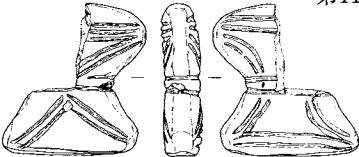
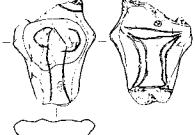
65



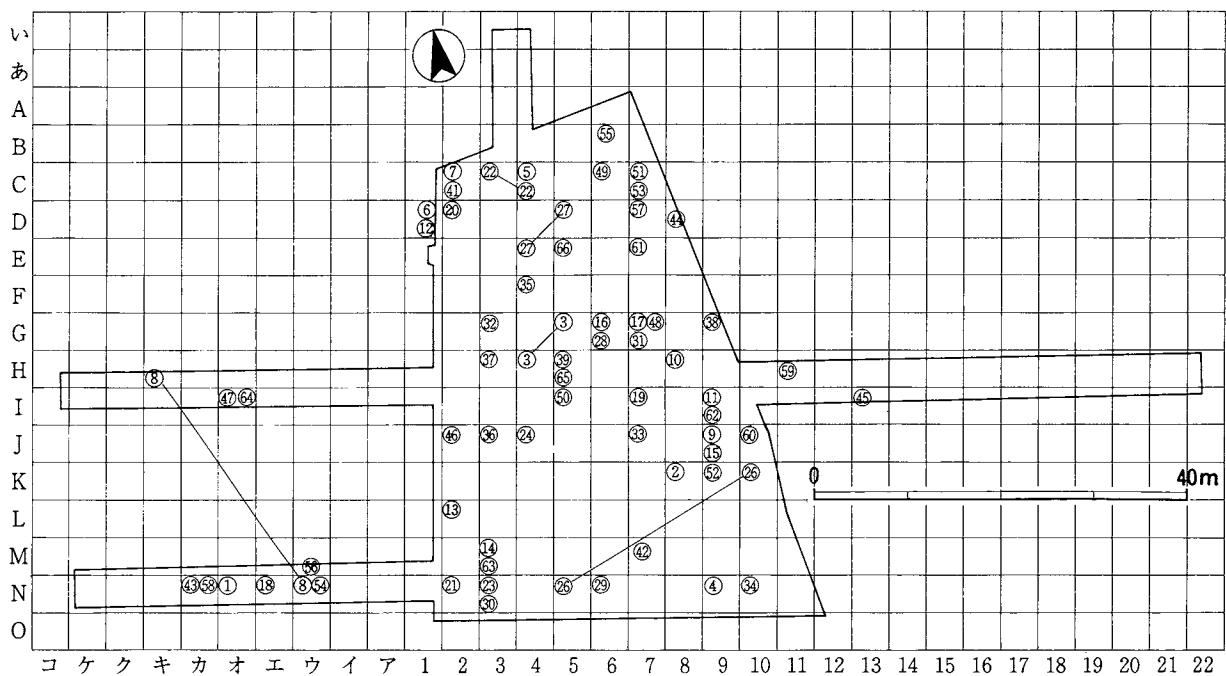
66



第116図 土偶各部位実測図 (1 : 2)

系統分類	特　　徴	具　　体　　例
A 類	<ul style="list-style-type: none"> ・ひとがた ・2本の棒状粘土を中心に製作 ・縦長の乳房 ・偏平な腕 	 第109図1～第110図10
B 類	<ul style="list-style-type: none"> ・ひとがた ・小 型 ・偏 平 	 第111図11～15
C 類	<ul style="list-style-type: none"> ・ひとがた ・高く突き出た乳房 	 第111図16・17
D 類	<ul style="list-style-type: none"> ・ひとがた ・偏 平 ・縦長の乳房 	 第111図18・19
E 類	<ul style="list-style-type: none"> ・ひとがた ・顔面が斜め下方を向く ・頭部に沈線 	 第112図20
F 類	<ul style="list-style-type: none"> ・ひとがた ・肩部に横位の積み上げの痕跡 ・顔面が斜め上方を向く ・頭部に沈線 	 第112図21
G 類	<ul style="list-style-type: none"> ・分銅形 	 第112図22～第113図27
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・A～G類以外の土偶を一括 	 第113図28～32

第12表 土偶分類表（縮尺は1：5）



第117図 土偶分布図 (1 : 800)

(3) その他の土製品

土器と土偶以外の土製品を一括した。勾玉や丸玉、管玉、有孔球状土製品、円板などがある。全て第III層（灰褐色シルト層）出土のものであり、遺構からの出土はない。したがって、出土状況からは所属時期の細分はできない。

A 勾玉（第118図1・2）

2点ある。1は、J 10グリッド出土で、長さ51mm、重さ16.7gである。頭部に角状の突起をもつ。穿孔の周辺に1ないし2条の沈線をもつ。2は、Nオグリッド出土で、長さ38mm、重さ10.4gである。頭部に穿孔をもち、3条の沈線が巡る。

B 有孔球状土製品（第118図3）

1点だけ確認された。C 5グリッド出土である。沈線による施文がみられ、L rの縄文が充填される。

C 丸玉（第118図5～12）

8点ある。5はK 7、6はH 2、7はC 2、8はD 7、9はJ 8、10はI オ、11はI 6、12はJ 10グリッド出土である。長さ・径・重さは、5が14mm・12.5mm・1.9g、6が14mm・12mm・2.1g、7が11mm・12～15mm・2.0g、8が14mm・13mm・2.3g、9が13mm・17mm・3.4g、10が19mm・18mm・4.2g、11が16mm・17mm・6.5g、12が19mm・20mm・4.6gである。5は複数の刺突をもち、刺突内に赤色顔料が残る。

D 管玉（第118図13）

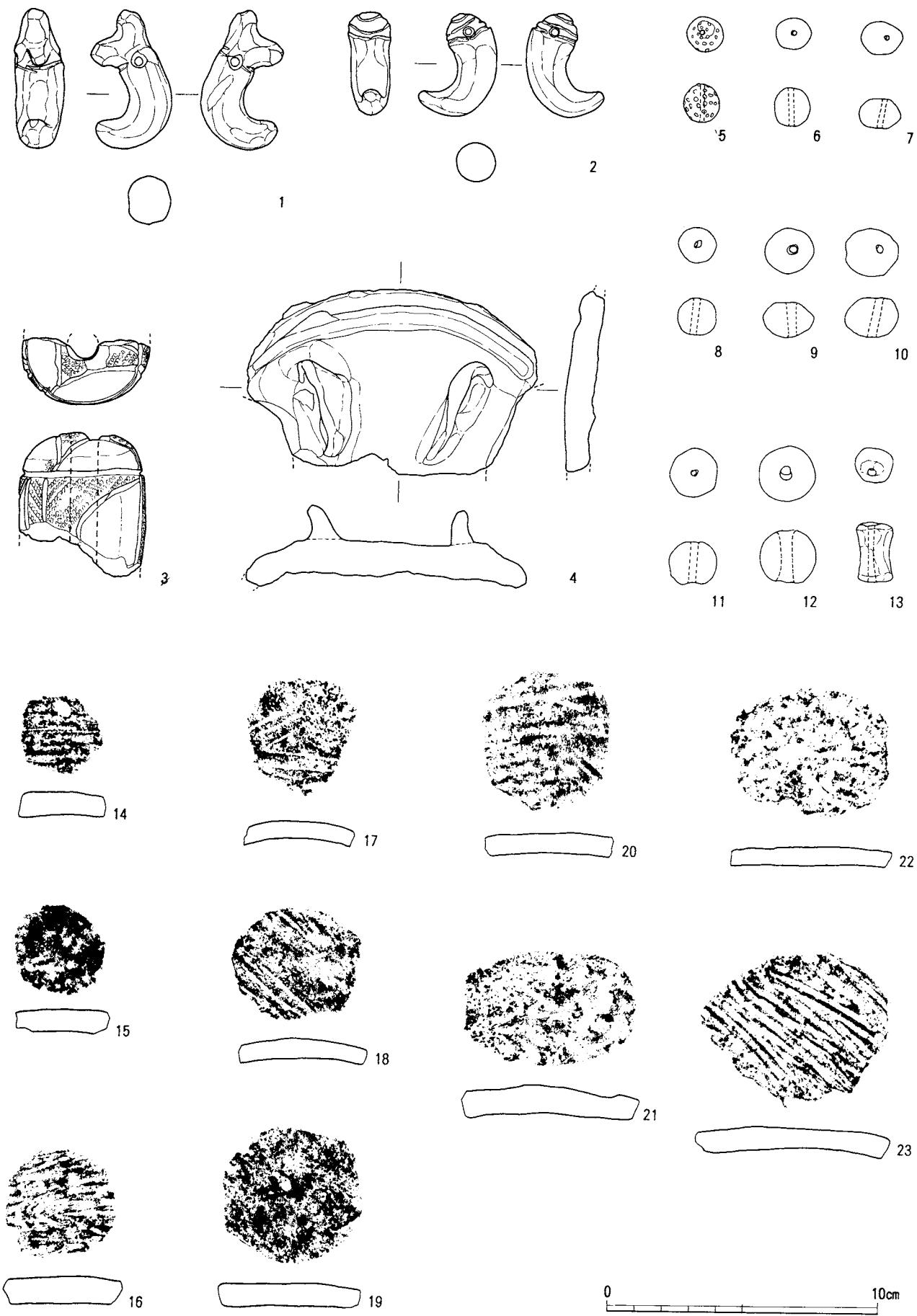
1点だけ確認された。I 9グリッド出土で、長さ22mm、径13mm、重さ3.2gある。中央がくびれる鼓状の形である。

E 円板（第118図14～23）

円板の一部を掲載した。総点数については未整理である。15はHオ、16はK 6、17はE 5、18はD 4、19はA 3、20はC 3、21はN 5、23はC 4グリッド出土である。14と22は不明である。径・重さは、14が33mm・10.0g、15が34mm・10.9g、16が42～44mm・24.0g、17が46mm・13.3g、18が45～47mm・16.5g、19が52mm・27.9g、20が47～52mm・22.0g、21が43～65mm・30.0g、22が48～60mm・23.5g、23が57～72mm・重さ30.6gである。ほぼ円形のもの（14～20）と橢円形のもの（21～23）がある。穿孔をもつものは確認されない。17の文様は羽状沈線と思われ、異系統の土器が使用された例である。

F 不明土製品（第118図4）

4は、I 9グリッドの出土である。つり上がった眉状の突起を2個もつ。その上には湾曲する太い沈線が1条ある。同様の沈線がもう1本あったようである。左右両端は、円形の孔の一部のようにも思われる。内面の撫で調整は粗い。仮面の可能性もある



第118図 その他の土製品実測図 (1 : 2)

が、類似する資料がなく根拠に乏しい。

G 粘土塊（第13表、P L 80）

範囲確認調査・東トレンチの東部を除く調査区全体に、粘土塊がみられる。全て第Ⅲ層（灰褐色シル

ト層）からの出土である。総点数は2,028点で、総重量は約31kgである。今回は、一部の写真を掲載しただけで実測図の掲載ができなかった。性格などの検討は今後の課題としたい。
(森川幸雄)

出土地点	個数 (重量 g)	出土地点	個数 (重量 g)	出土地点	個数 (重量 g)	出土地点	個数 (重量 g)
い3	—	G 4	8 (108)	I 6	2 (25.5)	M オ	—
い4	—	G 5	14 (121)	I 7	—	M エ	—
あ3	2 (124.5)	G 6	2 (16)	I 8	2 (10)	M ウ	1 (20)
あ4	4 (42.5)	G 7	2 (16)	I 9	61 (606)	M イ	—
A 3	3 (43.5)	G 8	7 (92)	I 10	35 (203)	M ア	—
A 4	1 (26)	G 9	6 (3)	I 11	15 (313)	M 1	—
A 5	—	H ゴ	—	I 12	—	M 2	1 (12)
A 6	1 (22.5)	H ケ	—	I 13	1 (15)	M 3	1 (5)
A 7	2 (7)	H ク	—	I 14	7 (134.5)	M 4	3 (33)
B 2	—	H キ	1 (7)	I 15	7 (114)	M 5	1 (6)
B 3	24 (489)	H カ	4 (30.5)	I 16	2 (25)	M 6	1 (18)
B 4	32 (322)	H オ	19 (293.5)	I 17	—	M 7	1 (22.5)
B 5	33 (337)	H エ	33 (315)	I 18	—	M 8	5 (70)
B 6	21 (281.5)	H ウ	5 (76)	I 19	—	M 9	3 (56.5)
B 7	18 (180)	H イ	—	I 20	—	M 10	4 (61)
C 1	4 (18)	H ア	—	I 21	—	M 11	—
C 2	62 (1040)	H 1	—	I 22	—	N ケ	—
C 3	92 (1617.5)	H 2	—	J 1	—	N ク	—
C 4	79 (1232)	H 3	2 (22)	J 2	—	N キ	2 (24.5)
C 5	51 (1202)	H 4	—	J 3	3 (45)	N カ	10 (211.5)
C 6	125 (2491)	H 5	2 (22)	J 4	1 (5)	N オ	19 (347.5)
C 7	98 (1705.5)	H 6	1 (22)	J 5	4 (9)	N エ	21 (190)
C 8	—	H 7	6 (87)	J 6	1 (14)	N ウ	6 (101)
D 1	7 (176)	H 8	3 (68)	J 7	2 (7.5)	N イ	5 (89)
D 2	95 (2614)	H 9	17 (183)	J 8	2 (32.5)	N ア	3 (33)
D 3	56 (797.5)	H 10	17 (50)	J 9	5 (67)	N 1	1 (137)
D 4	29 (531.5)	H 11	5 (29)	J 10	7 (147.5)	N 2	6 (51)
D 5	33 (388)	H 12	2 (44)	K 1	—	N 3	2 (10.5)
D 6	47 (777)	H 13	3 (18)	K 2	—	N 4	43 (261)
D 7	71 (1061)	H 14	37 (671)	K 3	3 (22)	N 5	21 (265.5)
D 8	7 (101.5)	H 15	5 (91.5)	K 4	—	N 6	9 (154)
D 9	—	H 16	1 (21)	K 5	1 (12.5)	N 7	3 (72)
D 10	—	H 17	—	K 6	3 (46)	N 8	8 (101.5)
E 1	1 (5)	H 18	—	K 7	8 (139)	N 9	10 (210)
E 2	40 (502)	H 19	—	K 8	5 (77)	N 10	9 (75)
E 3	23 (132)	H 20	—	K 9	11 (163.5)	N 11	3 (38.5)
E 4	19 (194.5)	H 21	—	K 10	17 (665.5)	O 1	5 (9)
E 5	16 (246)	H 22	—	K 11	—	O 2	—
E 6	28 (320.5)	I ゴ	—	L 1	—	O 3	—
E 7	4 (114)	I ケ	—	L 2	1 (3)	O 4	1 (10)
E 8	27 (339.5)	I ク	—	L 3	1 (1)	O 5	—
F 1	—	I キ	1 (4)	L 4	—	O 6	5 (27.5)
F 2	13 (81.5)	I カ	9 (344)	L 5	2 (5.5)	O 7	—
F 3	10 (94.5)	I オ	39 (454.5)	L 6	—	O 8	1 (12.5)
F 4	21 (240)	I エ	16 (210)	L 7	4 (53)	O 9	—
F 5	6 (133)	I ウ	—	L 8	—	O 10	—
F 6	13 (118)	I イ	1 (2)	L 9	3 (36)	O 11	—
F 7	27 (273.5)	I ア	—	L 10	3 (73)	O 12	—
F 8	21 (133)	I 1	—	L 11	—	排土	15 (189)
F 9	2 (35)	I 2	2 (27.5)	M ケ	—	表土	—
G 1	—	I 3	3 (27)	M ク	—	不明	32 (789.5)
G 2	2 (58)	I 4	—	M キ	—	総計	2,028 (310,235)
G 3	4 (75.5)	I 5	1 (40)	M カ	—		

第13表 粘土塊出土一覧表

(4) 石 器

石器は、土器・土製品と同様に点数・内容共に豊富な資料が出土した。ここでは、生産・生活用具としての石器と精神活動に伴う石製品の二者に大別し、石製品については次項で検討を加える。

これらの所属時期は、主体となる土器の時期から大半が縄文時代後期中葉～晚期初頭に限定されると理解される。以下の形態に関する記述の後に、問題点を検討したい。

A 概要

石器の総点数は、19,480点である。器種別の内訳は、石鏸842点、石鏸未成品160点、打欠き石錘5点、切目石錘5点、切目石錘未成品1点、有溝石錘1点、打製石斧10点、台石62点、石皿27点、敲石361点、磨石39点、石錐125点、石匙2点、削器282点、磨製石斧25点、楔形石器（同碎片を含む）1,203点、ノミ状石器153点、有溝砥石48点、砥石11点、軽石製石器46点、礫器6点、赤色顔料付着石器9点（敲石6点、磨石3点）、部分磨製石器2点、二次加工痕有剥片436点、使用痕有剥片918点、剥片・碎片13,496点、石核1,038点、石器素材（原石材）167点である（第14～17表）。

これらの器種は、一般に次のような用途が推定されている。石鏸は狩猟具、打欠き石錘・切目石錘・有溝石錘と軽石製石器の一部は漁撈具、打製石斧・石皿・敲石・磨石は植物質食糧の採集具と調理加工具、石匙・磨製石斧・石錐・楔形石器・ノミ状石器・軽石製石器の一部・砥石・礫器・部分磨製石器・二次加工痕有剥片の一部・使用痕有剥片は、狩猟活動やその他の生活維持活動に伴う生活用具として使用され、各器種未成品・二次加工痕有剥片の一部・剥片・碎片・石核は、石器製作活動にそれぞれ関係する資料であると考える。

ただ、敲石・磨石の一部には、赤色顔料の付着が明瞭に認められるものがあり、辰砂原石の出土と合わせて遺跡内で水銀朱の生産が行われていたことはほぼ間違いないと考えられる。また、一部には酸化鉄（ベンガラ）の利用もみられることから、赤色顔料付着資料に関しては、食料獲得以外の生活維持活動に伴う石器として、そこに含めて組成の検討を行うべきものといえる。

本遺跡では、住居址・貯蔵穴など生活活動に直接的に関わる遺構は検出されておらず、その出土状況をみると、後述するように次々と廃棄された状態を示している。このことから、この遺跡が特殊な廃棄状態を示すものならば、これら石器群の器種構成や組成は、当時の「様々な器物をなんらかの理由でまとめて廃棄する」という遺跡の性格が反映されているといえよう。

B 分布

ここでは、遺跡内における各器種の分布と出土状況について記述する。遺物はグリッド一括で取り上げ、一部を除いて1点づつの原位置を記録していくため、4m方格グリッドより狭い範囲での分布については検討できない。ここではグリッドごとの出土傾向を示すに留めておきたい。グリッドごとの器種別出土点数は第14～17表に示した。配石との関係は、配石が現地保存を目的として取り上げられていないため十分に検討し得ない。また、石皿をはじめとする植物質食糧の調理加工用石器は、保存された配石構成礫の中に含まれている可能性も考慮される。

器種ごとの分布傾向や器種内での完成品と破損品との分布の差なども、調査区の北西部と南東部が特に多く、一方著しく散漫な部分もあるなど、粗密はみられるものの意図的な配置と判断されるものはみられない。全体の傾向としては、土器・土製品と同様に大量に廃棄された状態を示していると理解される。

器種別では、磨製石斧が遺跡範囲確認のために設けられた西南トレンチ付近でややまとまっている。

C 石材

最も多いのが、サヌカイトで18,149点（93.2%）を占める。剥片石器に利用される安山岩のうち大半は、肉眼観察では、大阪府・奈良県境の二上山から産出する一般にサヌカイトと呼ばれるものと、岐阜県下の飛騨川とその下流の木曽川流域から採集されるガラス質湯ヶ峰流紋岩で「下呂石」と通称されているものの2種類に区分した。

ただ、前者として分類した中にはフィッシャーが白くけば立ち、細かい白斑が目立つもので下呂石との区別が難しい資料が数点だがみられた。こうした

判断の難しい資料については、理化学的な産地同定を行っていないため、今回の分類では便宜的に二上山産のサヌカイトとして判定したが、二上山以外の産地のものが含まれている可能性も考慮する必要がある。

二上山産とされるサヌカイトのなかにも採集地点の相違によってその特徴が微妙に異なることが知られており、本遺跡の出土品もいくつかの原礫表がみられることから、二上山山麓の複数の地点からの採集品が搬入されている可能性を指摘できる。また、確実に二上山産出として判別される資料の中には、翼状剥片など旧石器時代の石器を石器製作のための石器素材（原石材）として搬入していると判断されるものが複数確認され、注目される。これについては後に詳しく検討する。

下呂石は、原礫表を残す資料を観察すると、鶏卵大から拳大程度の円磨度の進行した円礫が原石として遺跡内に持ち込まれていることが推定される。この大きさの下呂石の原石産地としては、岐阜県美濃加茂市以南の木曽川流域がその一つとして想定される^①。この他、剥片石器には、黒曜石・頁岩・チャート・石英がみられる。黒曜石は、1点確認した。比較的透明部分が多く、黒ないし灰色部分が混じる特徴から、肉眼観察では信州産と判断される。三重県で出土した信州産出の黒曜石製石器は、尾鷲市曾根遺跡で石鏃1点が確認されているものが、現在のところ県下で最南端と考えられる^②。

頁岩は、風化が著しいものが多い。器種には、打製石斧・削器・楔形石器がみられる。

在地の石材であるチャートは、石鏃・削器などの製品がみられるが全体としては極めて少ない。

石英は、石材の性質から剥離面の観察が困難であったが、10点の石鏃をはじめ他の器種にも一定量が使用されていることが確認された。

台石・石皿・敲石・磨石には、花崗岩・砂岩など特定の石材が選択的に利用されていることが理解される。とりわけ、安定した形態をもつ敲石・磨石には、花崗岩が選択的に利用されている印象がある。配石に使用されている礫石との石材の異同に関しては、配石が取り上げられていないため詳細な比較は為し得ないが、花崗岩や砂岩など概ね類似した石材

が使用されており、これら石器と配石の石材とが同じ採集地から得られた可能性も考えられる。その供給源としては、遺跡のすぐ眼前を流れる中村川の河床礫である可能性が高いと推定される。

この他に、片岩系の石材が磨製石斧の一部に用いられている。

全体としては、剥片石器には搬入石材が、礫核石器には遺跡周辺の石材が使用されている傾向が認められるといえよう。

D 形態記述

a 石鏃（第120図1～第121図53）

加工により先端部を作出したもので、矢柄の先につける鏃と考えられるもの。未成品も含め1,002点出土した。その類型ごとの内訳はI a類 342点、I b 41点、I c類12点、I d類227点、II a類 114点、II b類27点、III a類16点、III b類12点、IV類1点、欠損により分類ができないもの50点、未成品160点となる。石材別にみるとサヌカイトが965点と最も多く、ついで下呂石が20点、石英10点、頁岩7点である。

石鏃分類の属性は基部形態と茎の有無が基本的な着目点となっているが、導き出そうとする事柄によって着目する属性は細かくなったり、異なったり、と無限に存在することになる。ここでは石鏃形態のおおまかな傾向を捉えることを目的としたため、下記のように実体にあわせてきわめて簡略的な分類を行った（第119図参照）。

I類……基部が凹基となるもの。

a類……側縁が直線的で、全体形は正三角形状あるいは二等辺三角形状を呈す。

b類……側縁が緩やかに外に張る弧状で、全体形は正三角形状あるいは二等辺三角形状を呈す。

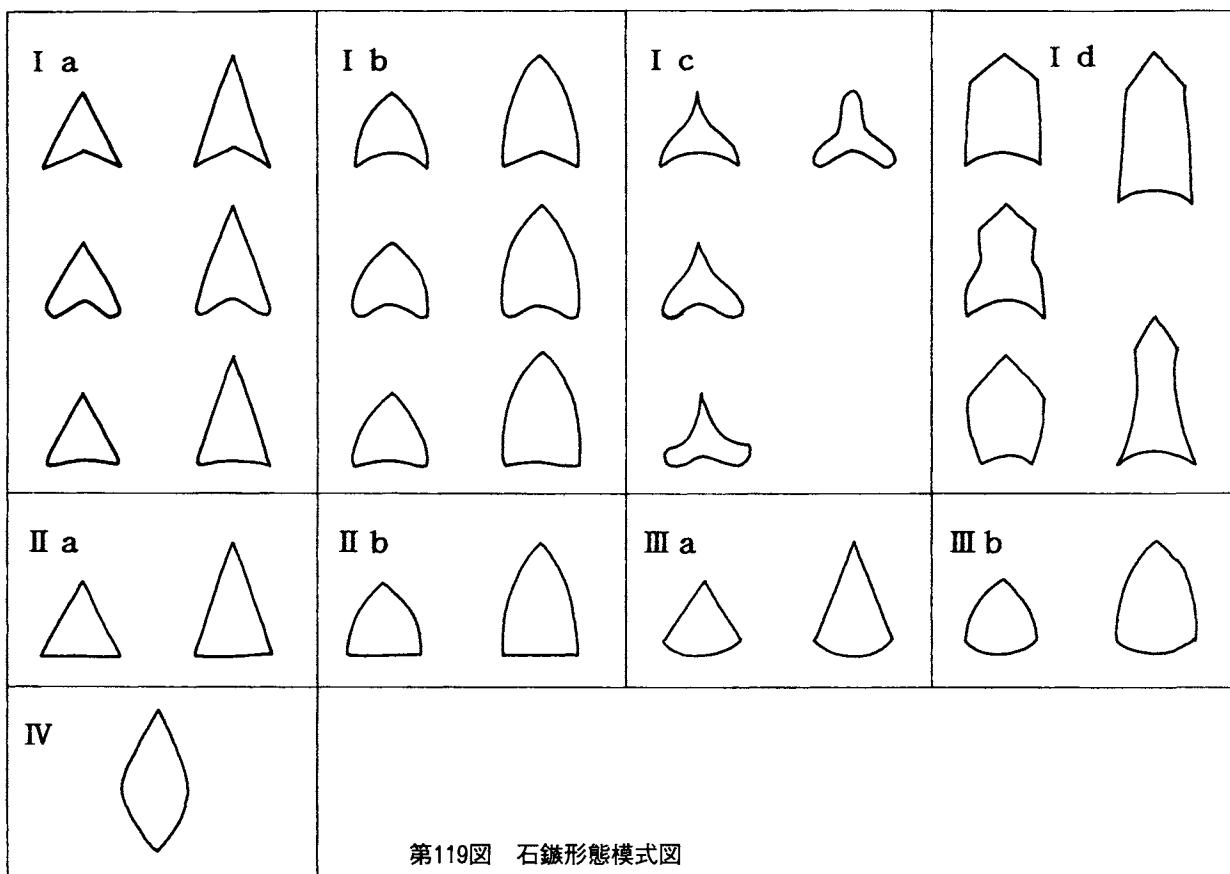
c類……側縁が真中あたりで内に屈曲し、全体形が「Y」状を呈す。

d類……側縁が先端部近くで屈曲し、中央部が直線的または緩やかに内に張る弧状で全体形が五角形状を呈す。

II類……基部が平基となるもの。

a類……側縁が直線的で、全体形は正三角形状あるいは二等辺三角形状を呈す。

b類……側縁が緩やかに外に張る弧状で、全体



第119図 石鎌形態模式図

形は正三角形状あるいは二等辺三角形状を呈す。

III類……基部が円基となるもの。

a類……側縁が直線的で、全体形は正三角形状あるいは二等辺三角形状を呈す。

b類……側縁が緩やかに外に張る弧状で、全体形は正三角形状あるいは二等辺三角形状を呈す。

IV類……基部が尖基となるもの

I a類 (1~15) 全体形が正三角形状のものには脚部が比較的尖鋭なもの (1~4) と脚端部が丸みをもち、あまり尖鋭でないもの (5~8) がある。3・4は側縁がややいびつ、7は厚めで、8は抉りが浅い。全体形が二等辺三角形状のものには脚端部が比較的尖鋭なもの (9・10・12) と脚端部が丸みをもち、あまり尖鋭でないもの (11・13~15) がある。13は腹面側が周縁加工で一次面を大きく残し、脚部は短く細い。14は側縁が鋸歯状を呈する。15はわずかに抉りを入れる。

I b類 (16~21) 16は細身で抉りが浅い。17・18は脚端部が尖鋭で抉りを弧状に浅く入れる。19~

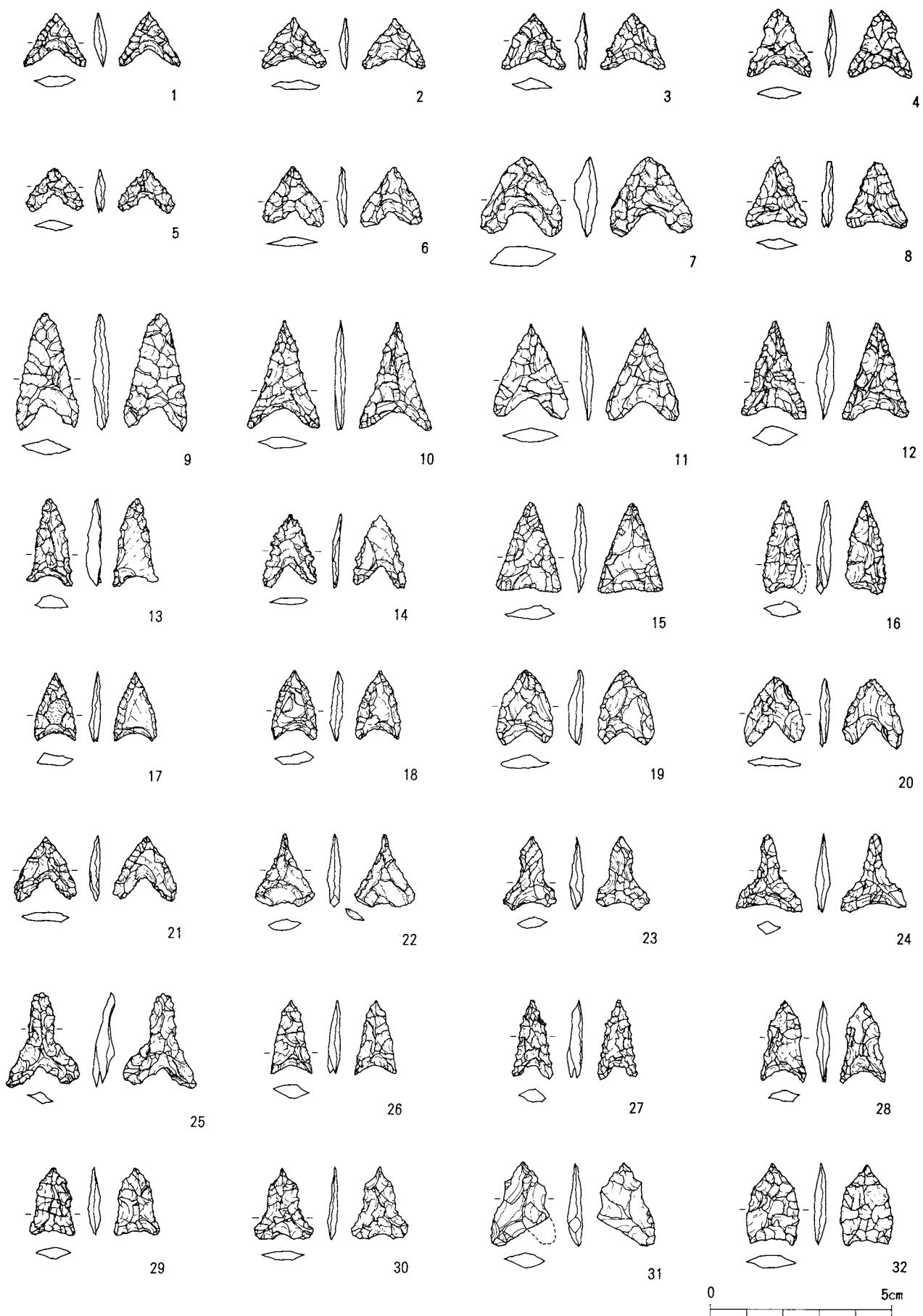
21は脚端部があまり尖鋭でなく、抉りが「へ」状を呈す。

I c類 (22~25) 先端部が細く側縁が緩く内に反る22、太さが先端部と脚部とではほぼ同じもの (23・25)、先端部が脚部よりわずかに細く、脚端部が比較的尖鋭な24がある。

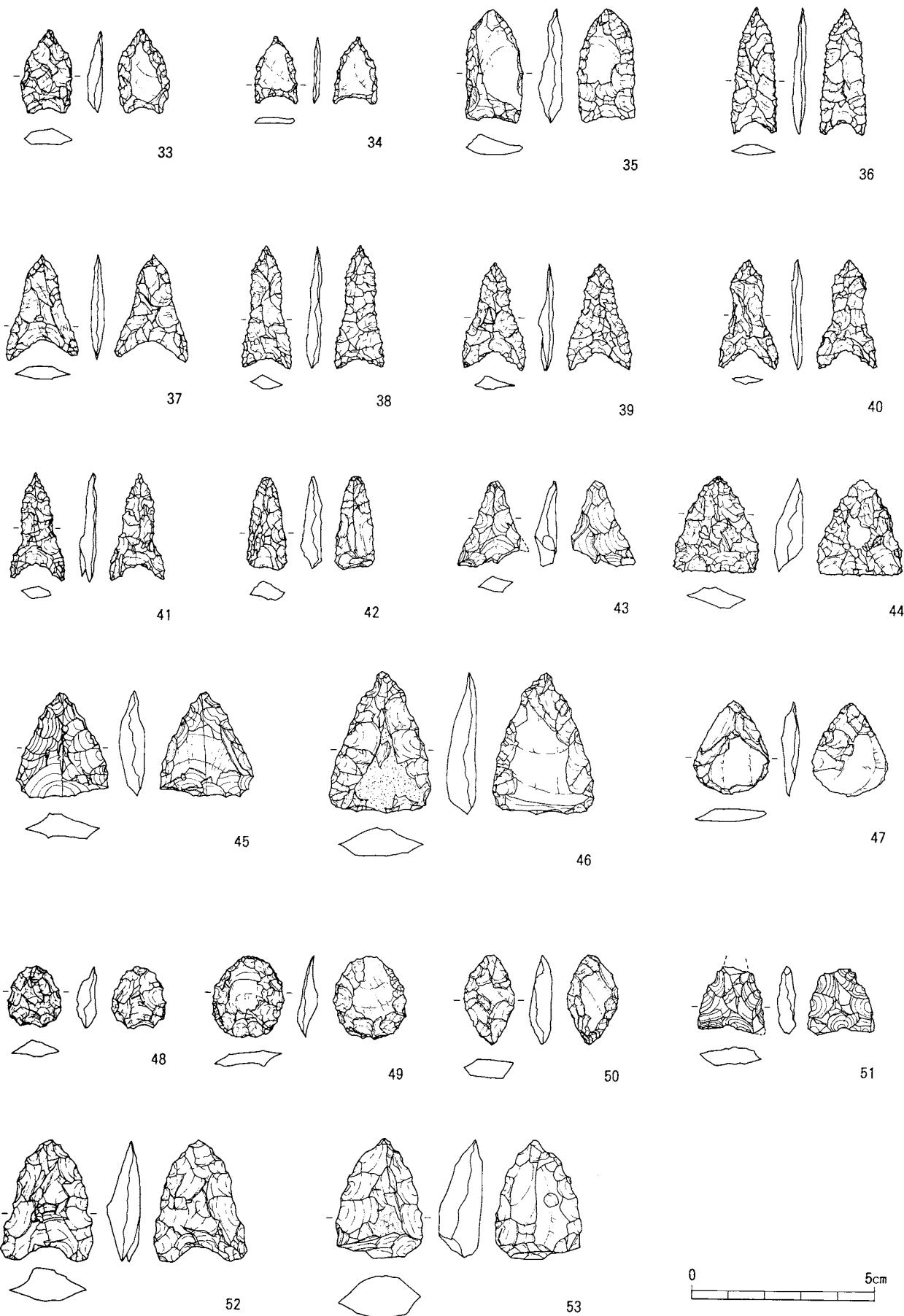
I d類 (26~41) 小型でやや細身の26~28、小型で将棋駒状を呈し側縁が屈曲点から脚端部にかけて内に反る29~31、同じく小型で将棋駒状を呈し側縁が屈曲点から脚端部にかけて外に張る32・33、直線的な34、大型でシャープさに欠け抉りが浅い35、大型細身で側縁が屈曲点から脚端部にかけて直線的な36、同じく大型で側縁が屈曲点から脚端部にかけて内に反る37~41がある。30・37は先端部をより尖鋭に作り出し、33~35は片面あるいは両面に一次面を残す。また、36~41は脚端部が尖鋭である。

II a類 (42・43) 42は細身でやや左右非対称、43はかなり左右非対称である。

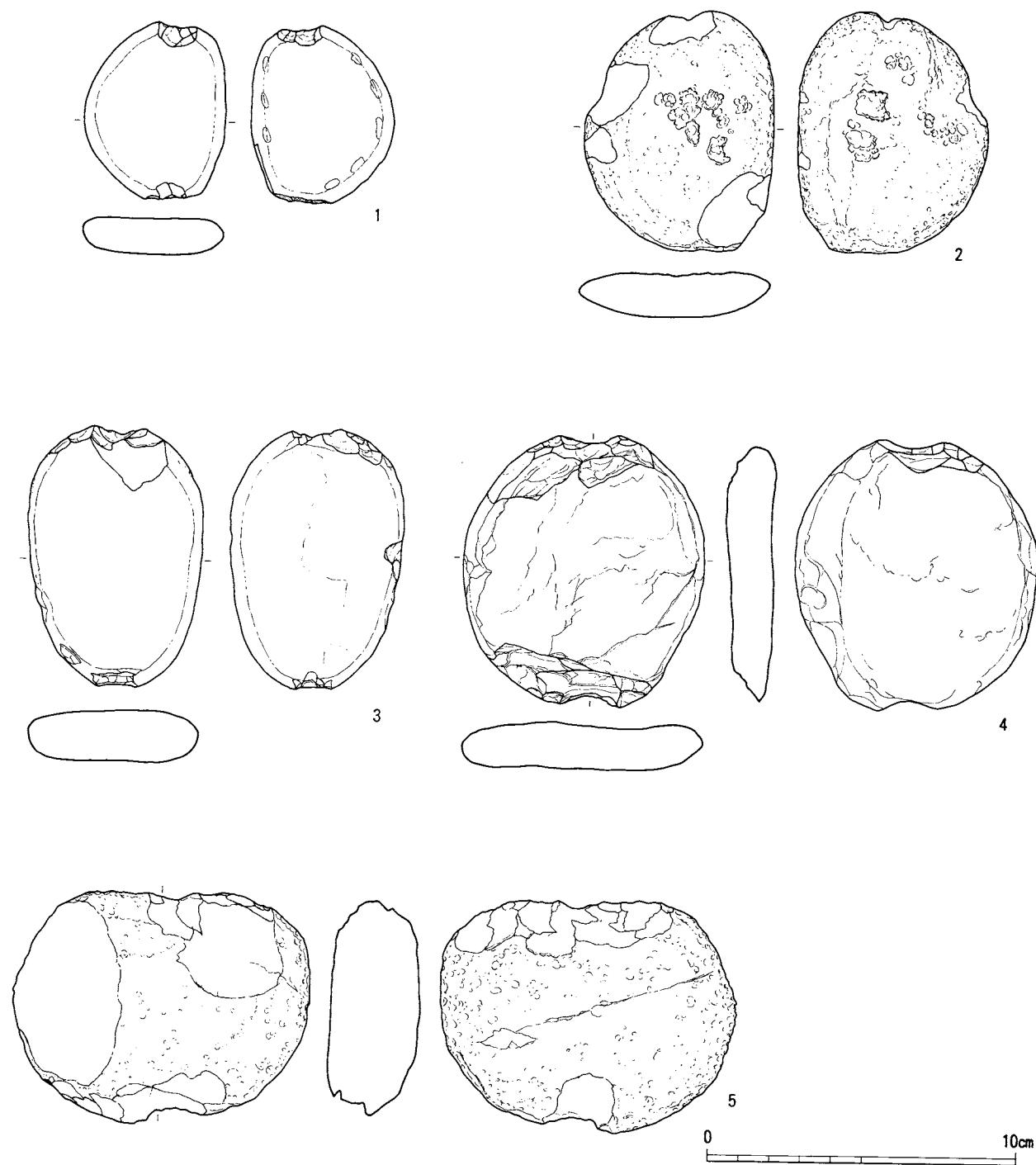
II b類 (44~46) 全体的に3点ともわずかに側縁が張るもので、45は一次面を、46は礫表と一次面をとどめる。



第120図 石鎌実測図 1 (2 : 3)



第121図 石鎌実測図2 (2 : 3)



第122図 打欠き石錐実測図 (1 : 2)

III a類 (47) 両面に一次面を大きく残す。

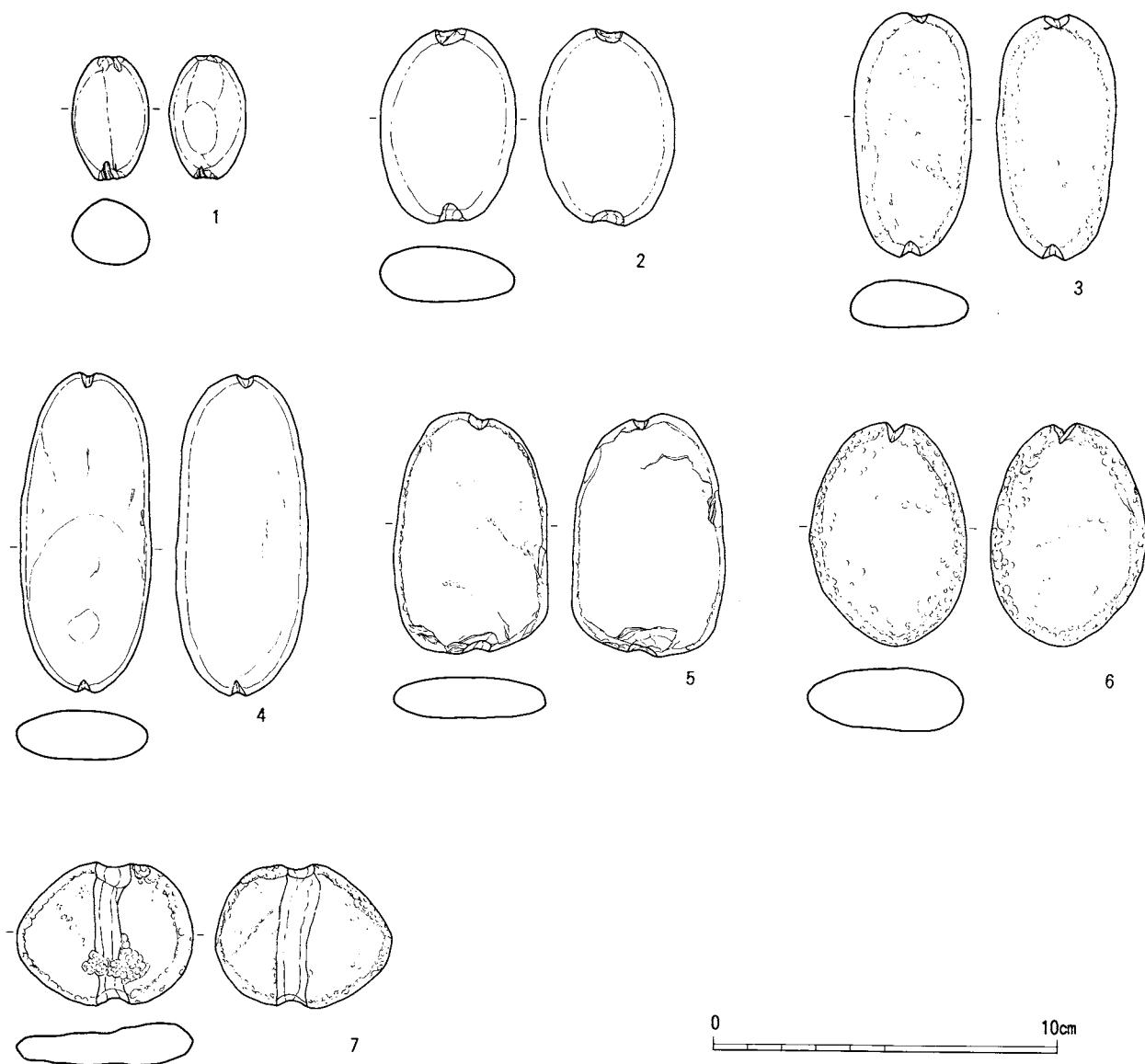
III b類 (48・49) 先端部が丸みをもち、本器種に分類することに躊躇するものであるが、本遺跡出土の削器の諸特徴と照らし合わせた場合、かなりイレギュラーなものであり、むしろ大きさや側面観などの類似から本器種に含めた。

IV類 (50) 中央部に最大幅をもち逆正三角形状の基部を作り出す。

その他 (51~53) 51は石英製で先端部を欠損しておりI b類かI c類かは分からぬ。52・53はかなり厚さがあり、加工もやや不整形な感があるためここでは一応未成品とした。

b 打欠き石錐 (第122図)

5点出土した。1・3は、後述する岩偶や線刻碑と同じ軟質の砂岩を素材とする。打欠きは2点とも両端の両面に施される。2は、3ヶ所に打ち欠きを



第123図 切目石錐・同未成品、有溝石錐実測図（1：2）

もつ例である。礫器状を為す。4は、長幅比のほぼ等しい大型の例である。長幅のほぼ等しい片岩製楕円礫を素材とする。打欠きは、図左面では両端に施されるが、右面では一端のみである。5は、短軸両端に打欠きを施す、大型・厚手の横型品である。礫器との中間的形態をもつ。

c 切目石錐（第123図1～6）

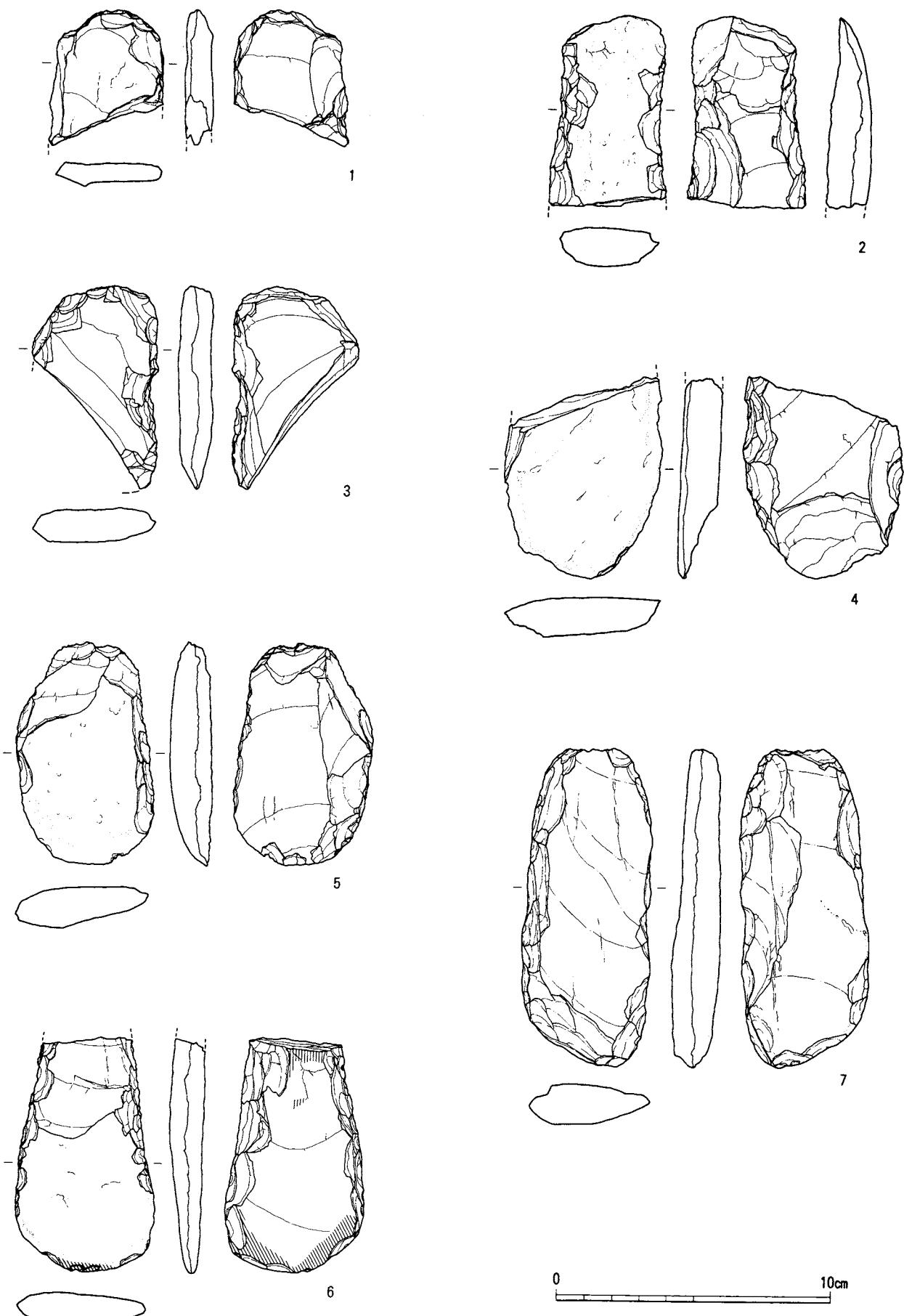
6点ある。いずれも自然礫をそのまま素材とするが、個体差が大きい。すべて完形品である。1は、小型厚手の砂岩製礫を素材とする。切目の形成は、一端は明瞭だが、他端は浅いつぶれ状の凹部となっている。2は、打欠きを施した後に切目を施している。3は、縦長の楕円礫を用いる。表面には細かい

擦痕状の傷がみられる。4も同様に縦長礫を素材とする大型品である。表面は極めて平滑である。両端の両面に明瞭な切目が形成される。5は、図下端側では打欠きを施した後に切目を形成している。切目の周辺は、使用の際の紐擦れと推定される摩滅が著しい。6は、肌理の粗い砂岩を素材とする。長軸の一端のみに切目を形成することから、未成品であろう。

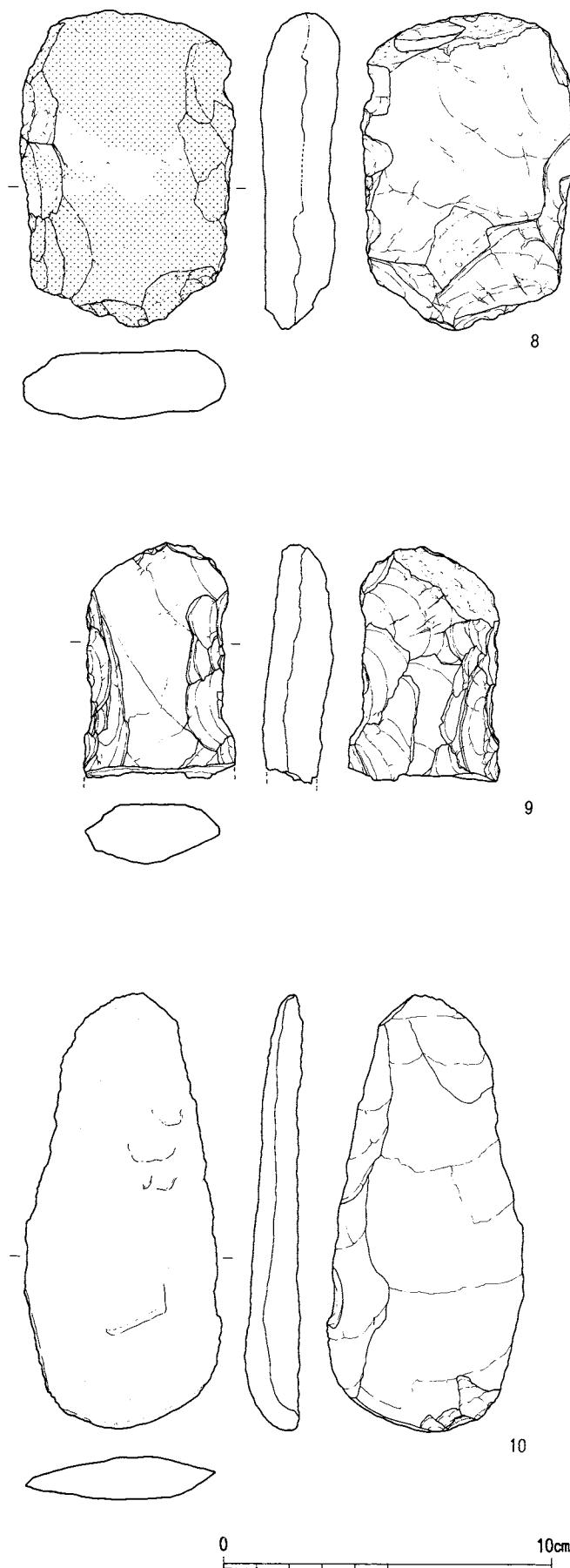
d 有溝石錐（第123図7）

1点のみ出土した。扁平な楕円礫を横位に用いている。短軸に全周する幅広の溝を作出する。溝の幅は6～9 mmと幅広だが、深さは約1 mmと浅い。

e 打製石斧（第124図1～第125図10）



第124図 打製石斧実測図 1 (1 : 2)



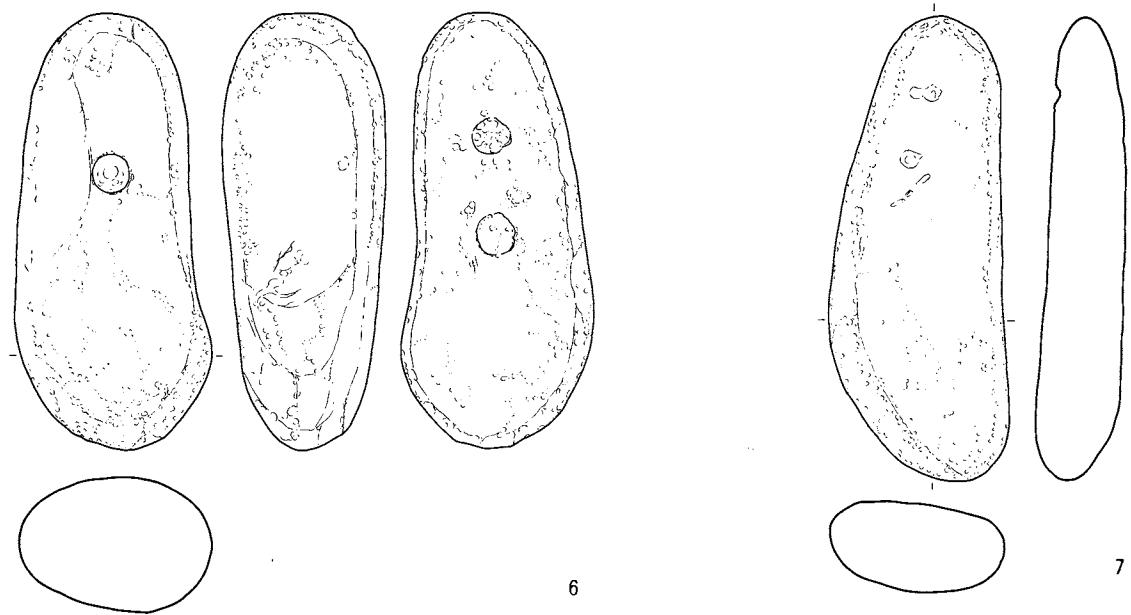
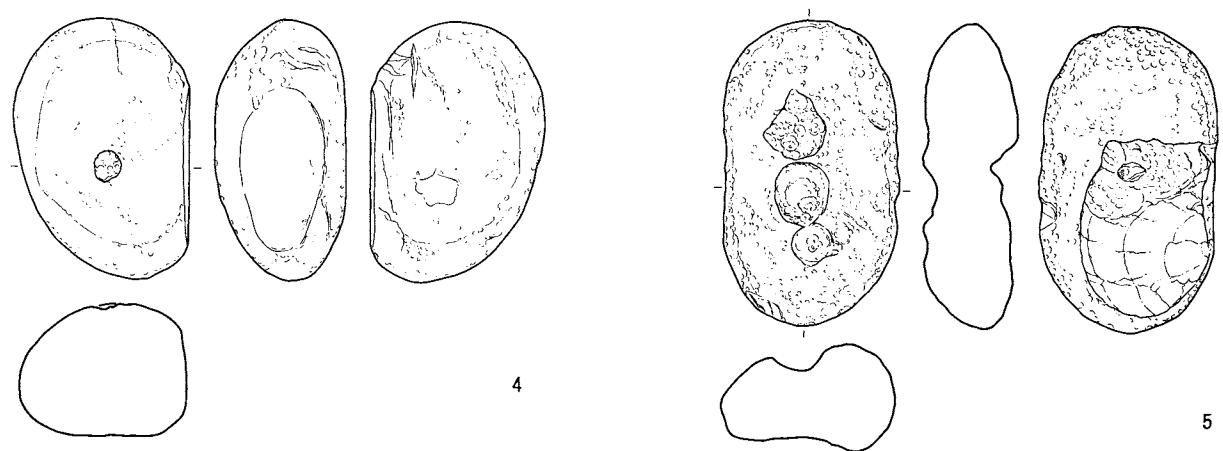
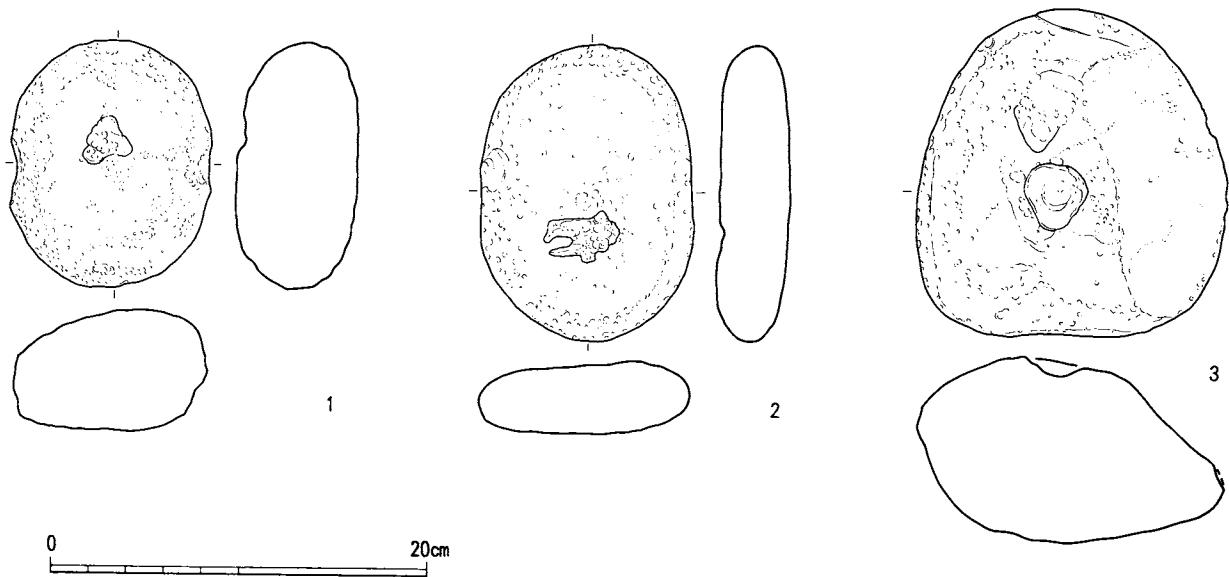
第125図 打製石斧実測図2 (1 : 2)

出土資料は、10点と少ない。うち1点は未成品である。1と2は基部片である。全形は、下半の形態が基部とほぼ同じ幅の短冊形か、やや開く撥形のいずれかであろう。3は、下端にわずかに刃縁が残る。側縁中央が若干凹むが、短冊形と分類した。4は、背面のほぼ全体が原礫表に覆われ、腹面側の周縁に剥離を施して器形を作出している。刃部の形成が不完全なことから、未成品もしくは加工途中での折損品とも考えられる。5～7は、短冊形の完形品である。6は、基部から刃部に向って器幅が広がる整った形態をもつ。刃部の縁辺には使用による磨耗と線状痕が明瞭に観察され、器体上半には着柄痕と理解される磨耗がみられる。7は、器表全体が風化している。周縁の加工は両面のほぼ全周にわたるが、いずれも浅い。8・9は、共に背面に原礫表を残している。8は、幅広厚手で剥離が周縁のみに留まり、加工度が低い。9は、厚手の基部で、残存部下部にくびれがみられることから、撥型の基部と考えられる。表裏とも器体中央に大きく一次面を残す。10は、素材礫から剥取された剥片の一部に二次加工を施したものである。下端には、ややまとまった剥離がみられるが、側面観からもわかるように刃部を形成するには至っていない。

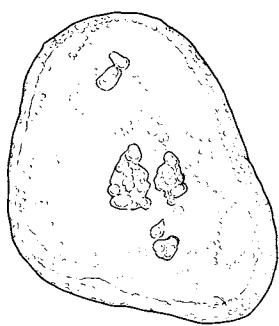
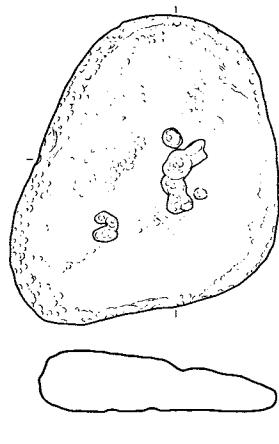
f 台石 (第126図1～第128図14)

台石としたものは、器表に敲打痕をもつ石器のうち、製粉具の上石として片手で支持して使用することが困難な重量を有すると判断したものをここに含めた。敲石との区分は感覚的な部分があるため、中間的なものも含んでいる。

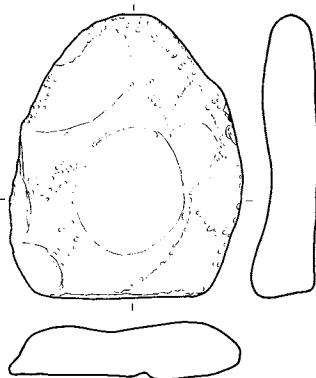
1～4・7は片面、5・6は両面を機能面として使用する。3は、台石として典型的な形態をもつ。6・7は、敲打痕の周囲の平坦面に広い磨面が形成され、石皿としても用いられていたことを示している。1～7のうち、3・6以外は手持ちの敲石と兼用であった可能性が考えられる。また、4と6には側面に磨痕がみられることから、こうした大型のものも両手で支持して用いられたとも考えられる。8～11も台石として使用された一群である。8は、両面に敲打痕と磨面が形成される。9は、片面が敲打痕、他面が磨面となっている。10・11もいずれも安定した敲打痕が残される。12・13は、周縁に敲打痕



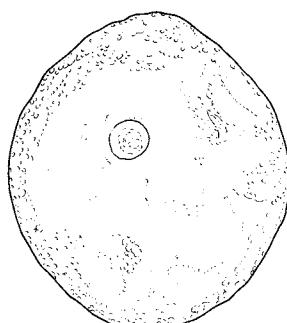
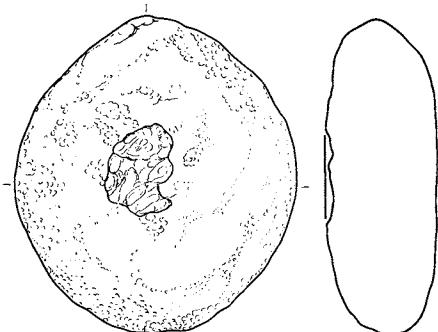
第126図 台石実測図1 (1 : 4)



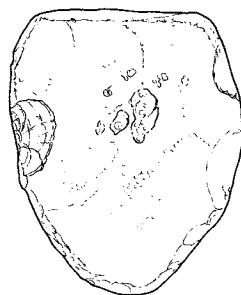
8



9

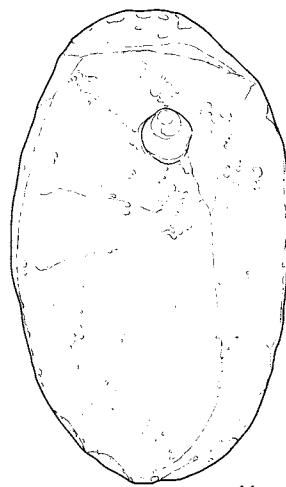
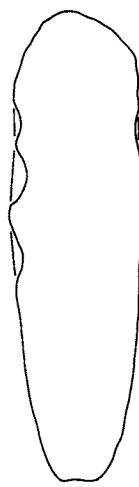
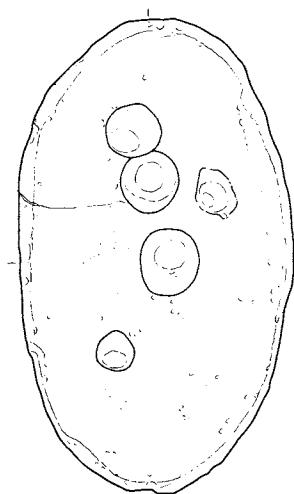


10

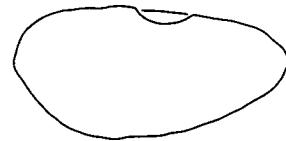


20cm

0



11



第127図 台石実測図 2 (1 : 4)



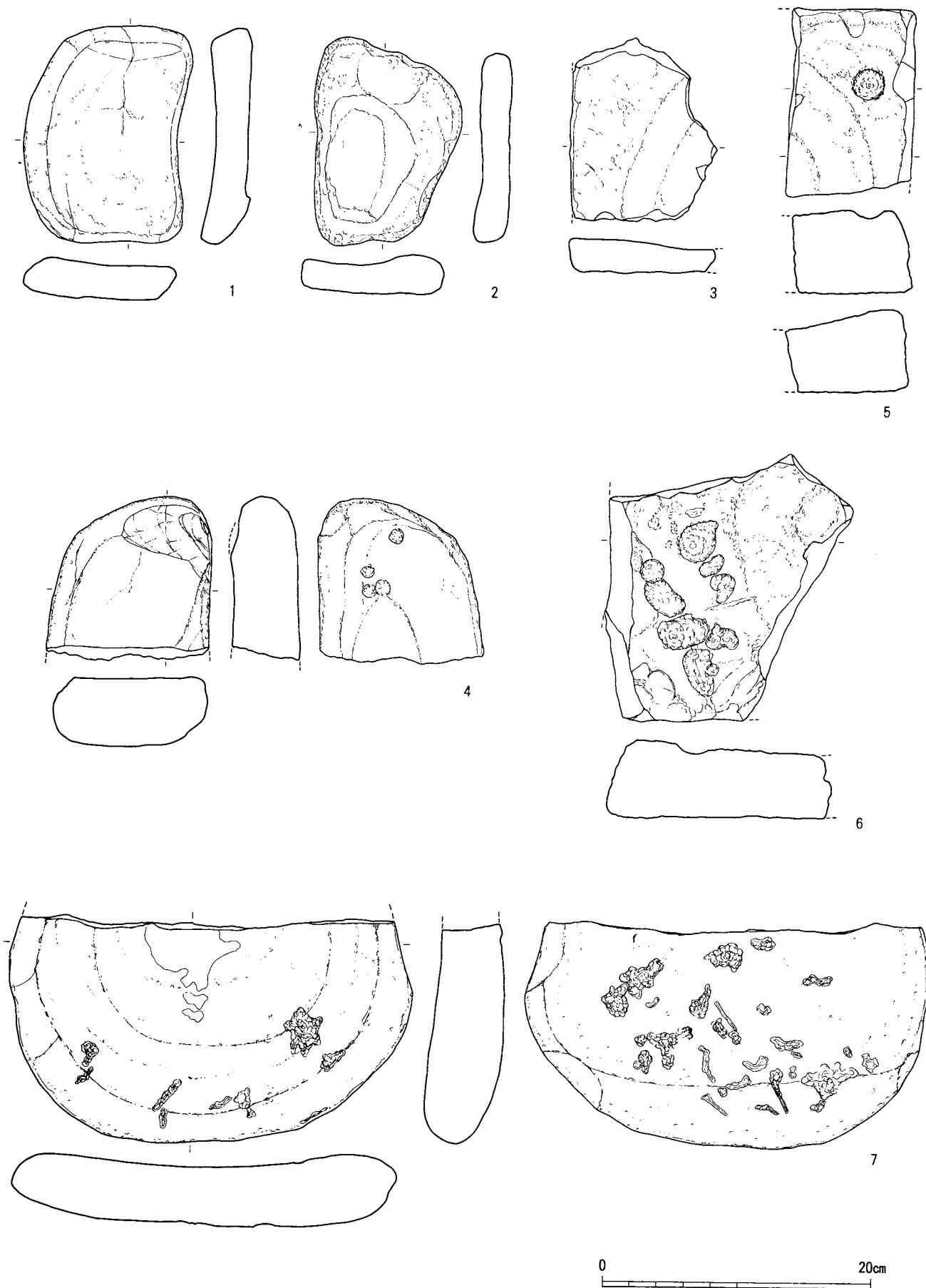
第128図 台石実測図3 (1 : 4)

をもつ。製粉具以外の用途をもつ可能性も考えられる。14は、厚手の大型品で、片面の中央には複数の敲打集中部が残り、裏面は広い磨面となっている。

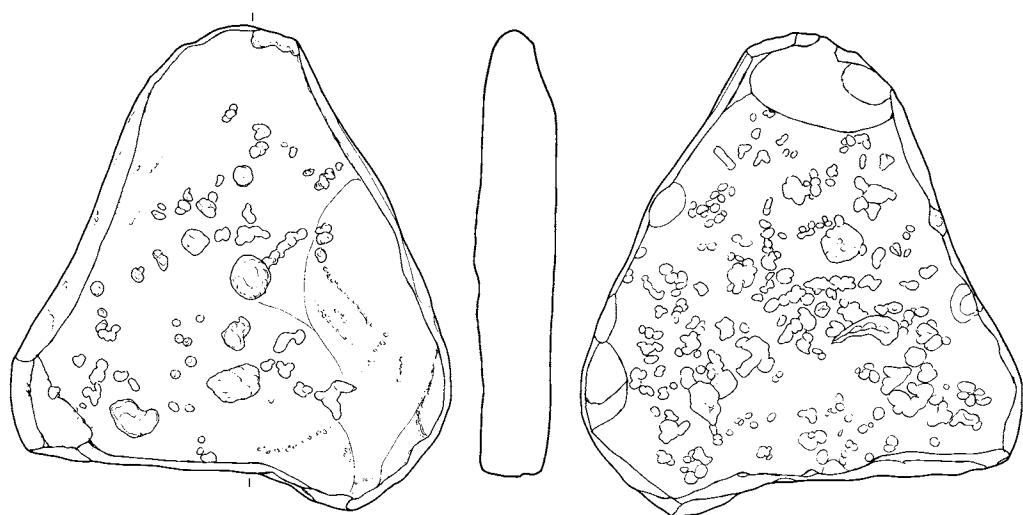
g 石皿 (第129図1～第132図14)

台石に対して、器表の一部に広い安定した磨面をもつものを石皿とした。中央に明瞭な凹みをもつ有縁石皿と素材礫の平坦部をそのまま機能面とした平盤石皿の両者がみられる。ただし、有縁のものは敲打等によって凹部を作出したものではなく、長期使用の結果として凹部が形成されたと理解される。また、彫刻文などの装飾はみられない。1～3・5～7は、片面に安定した凹面が形成されている。1・2は、いずれも自然礫を用いた小型品である。3は、扁平な礫を素材とし、約6分の1を残すと推定される。4は、台石との中間的な形態をもつが、磨面が

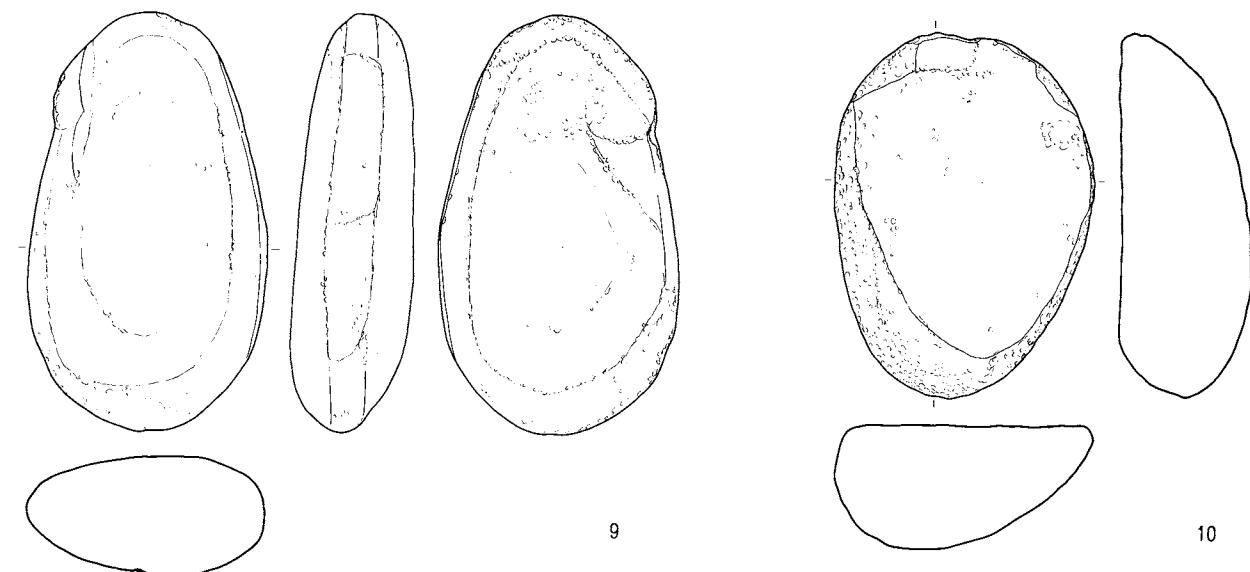
両面に広く形成されたため石皿とした。5・6は、大型品の破片である。本来は、長径50cmを越えると推定される。4～6の周縁にみられる凹みは、堅果類外殻の破碎を行う機能をもつものであろう。7は、約2分の1を欠失するが、最も整った形態をもつものである。8は、平盤石皿の典型例である。両面が機能面となっており、全面が磨面となっていると共に、敲打による凹みが他に比して明瞭に残存している。これは、両面が堅果類の外殻除去から粉化までの全加工工程にこの石器が使用されたことを示すものといえる。9・10は、素材礫の形態をそのまま利用する。9は側面にも磨面がみられるが、その機能は不明である。10は、素材礫の平坦面をそのまま利用している。11は約3分の1を欠失する。両面が広く磨面として使用されているが、凹面を形成しない。



第129図 石皿実測図1 (1 : 4)

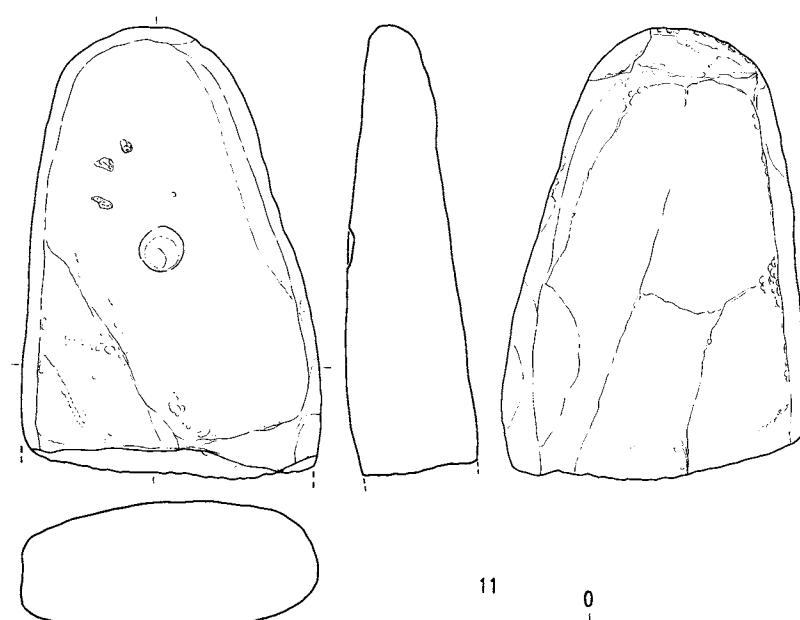


8



9

10

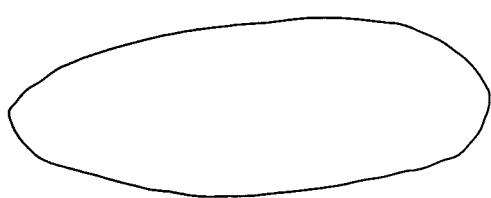
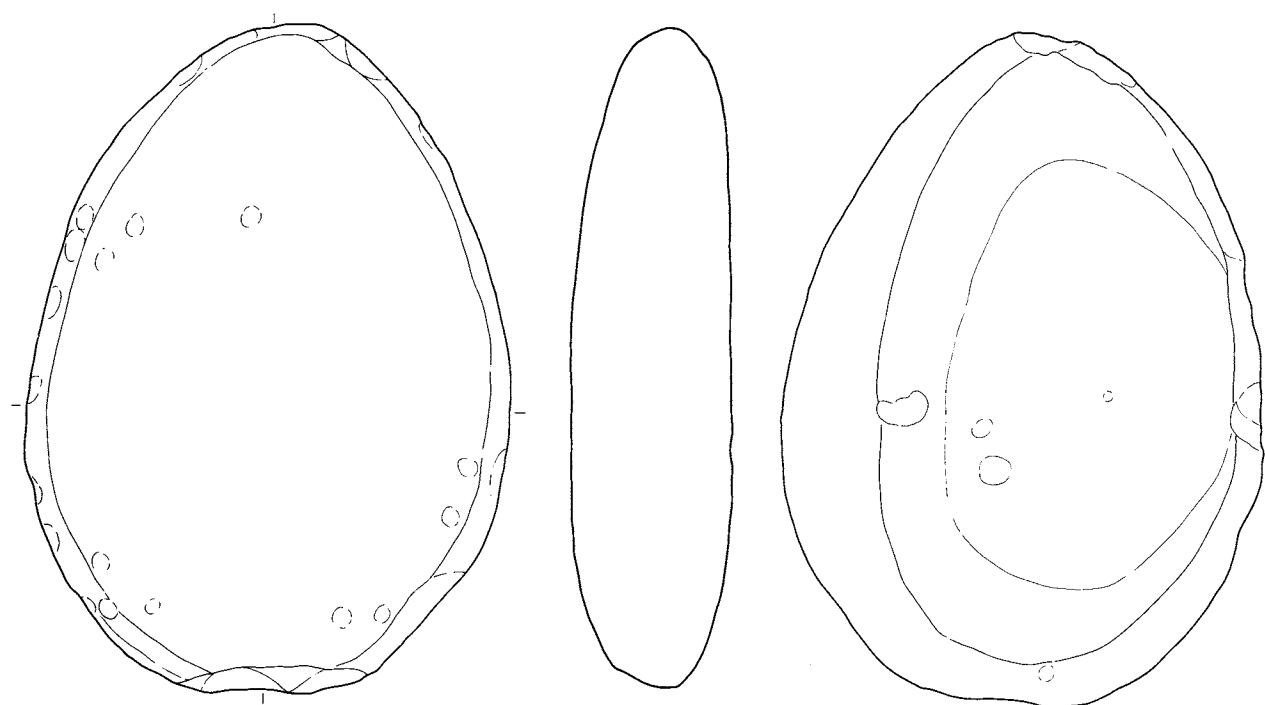
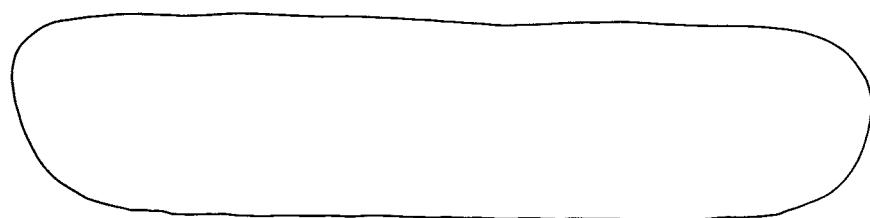
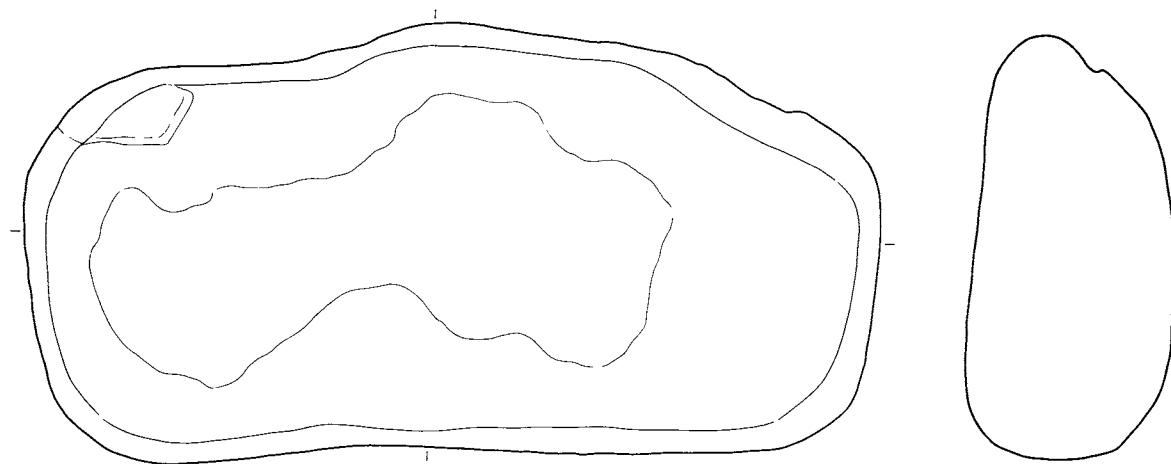


11

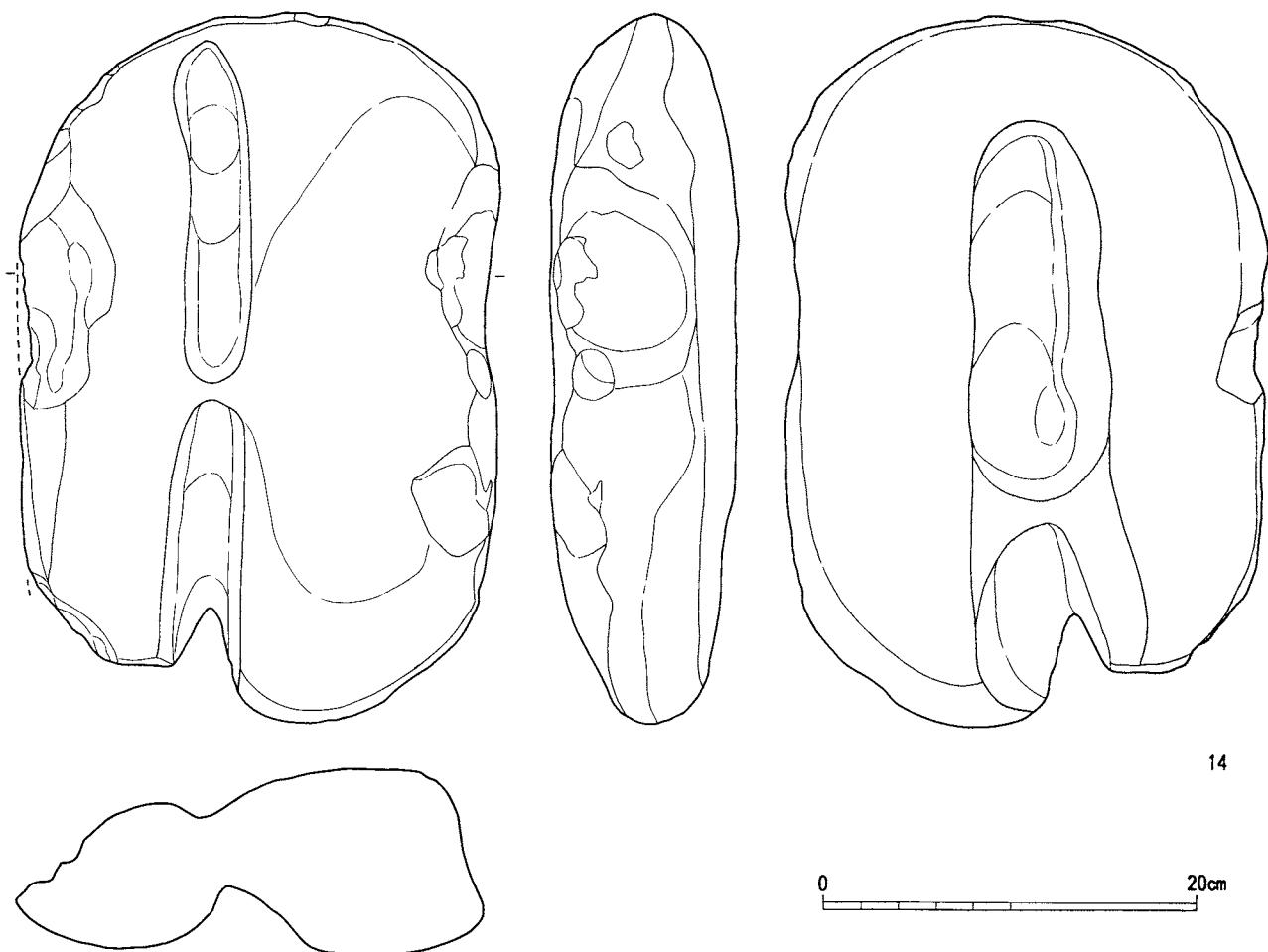
0

20cm

第130図 石皿実測図2 (1 : 4)



第131図 石皿実測図3 (1 : 4)



第132図 石皿実測図4 (1 : 4)

12・13は共に大型の完形品である。12は、片面のみを使用面とし、光沢をもった磨面が形成される。砥石の可能性もある。13は両面を使用している。14は、表裏の長軸方向に幅広の溝が形成される。全体の性状から石皿に含めたが、溝部の摩滅は明瞭ではない。側縁の一部にも、凹部が数ヶ所にみられる。溝部や側縁の凹部は加工ではなく、自然の形状をそのまま利用しているとも考えられる。その形態から推定される用途の1つとして、女性の生殖器に見立てた精神活動の対象物であることも考慮に入れておきたい。

h 敲石 (第133図1～第134図35)

植物質食料調理加工工具と認定される石器のうち、敲打痕を有するものをここに含めた。敲打痕の部位・性状により8類に細分した。総数は361点とまとまつた点数が出土している。

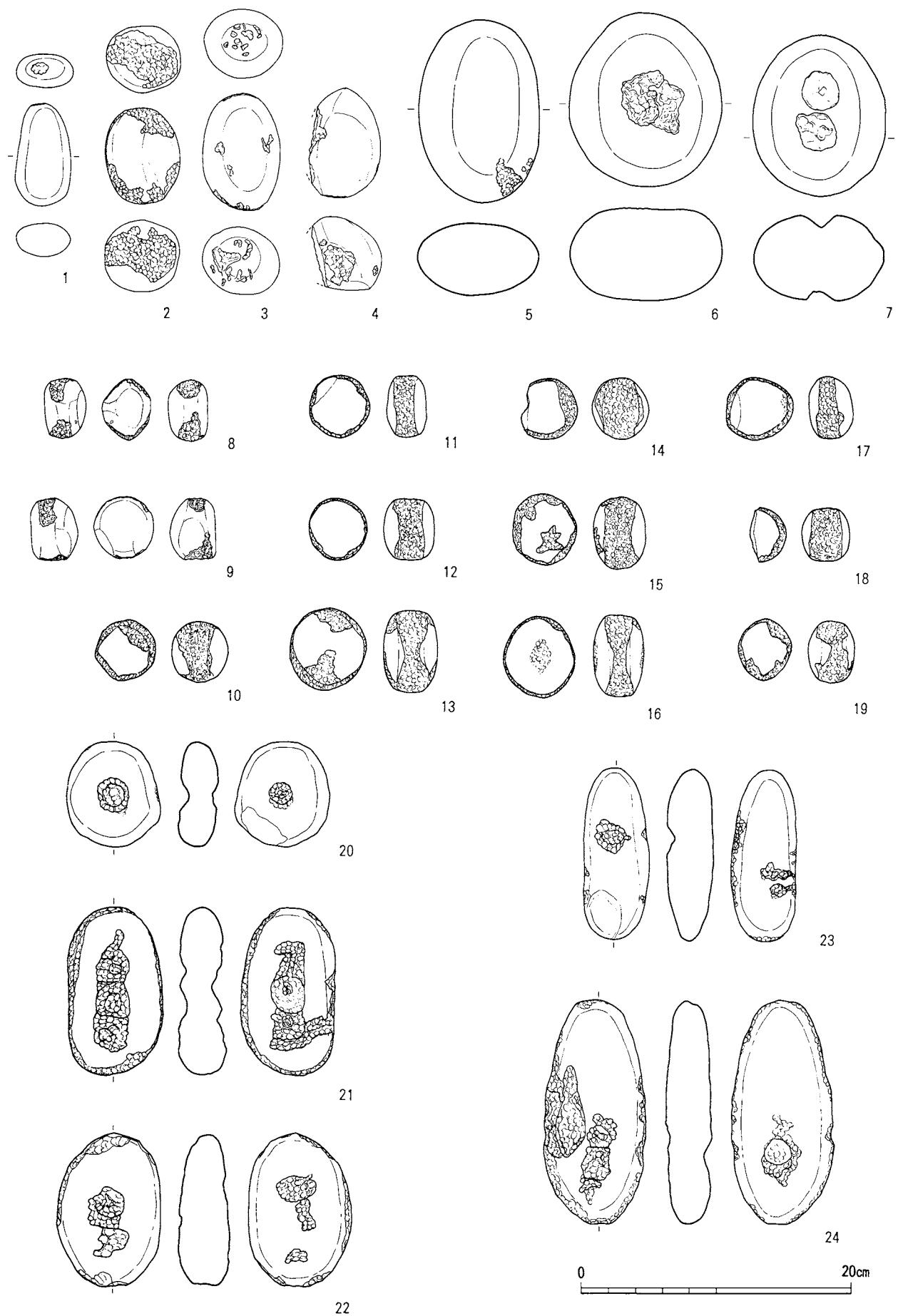
I類……器体の周縁のみに敲打痕の認められるもので、一部に敲打痕の集中部が残るもの

(IA類、1～5、8・9)、その全周に帶状の敲打痕が廻るもの (IB類、6・7、10～19) の二者に大別し、さらにその大きさによってそれにa・bの二類に細分した。このうち、特に注意されるのは、IAa類・IBa類とした、最大径5cm程で大きくても8cmを越えない一群である (8～19)。

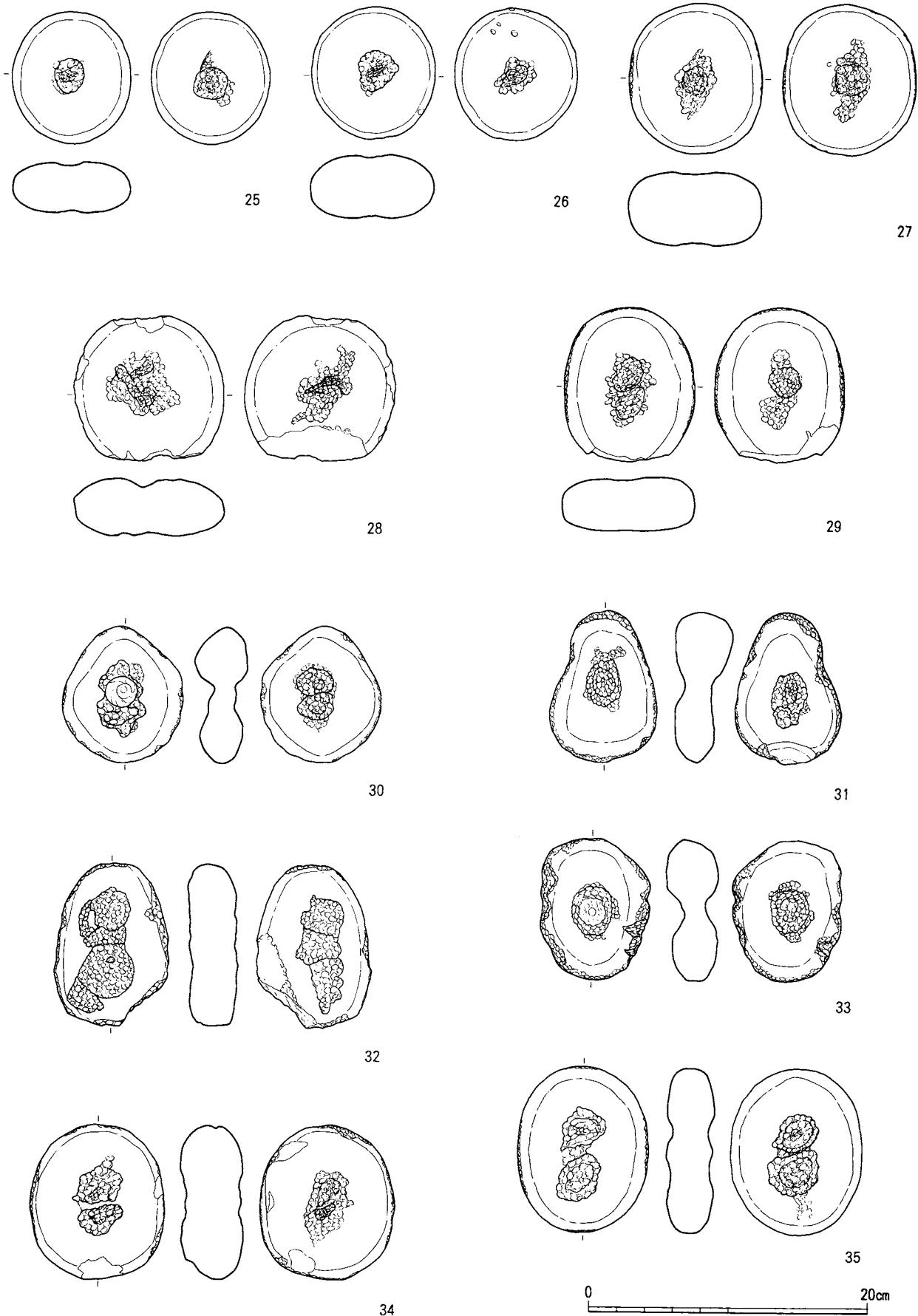
II類……器体の中央に敲打痕をもつもので、いわゆる「凹石」もここに含まれる。I類に比して点数も多く、安定した使用痕を残すものが多い。

IIA類としたものは、周縁に敲打痕がみられないもので、片面のみに凹部が形成されるものをa類、両面に残るものをb類とさらに細分した。

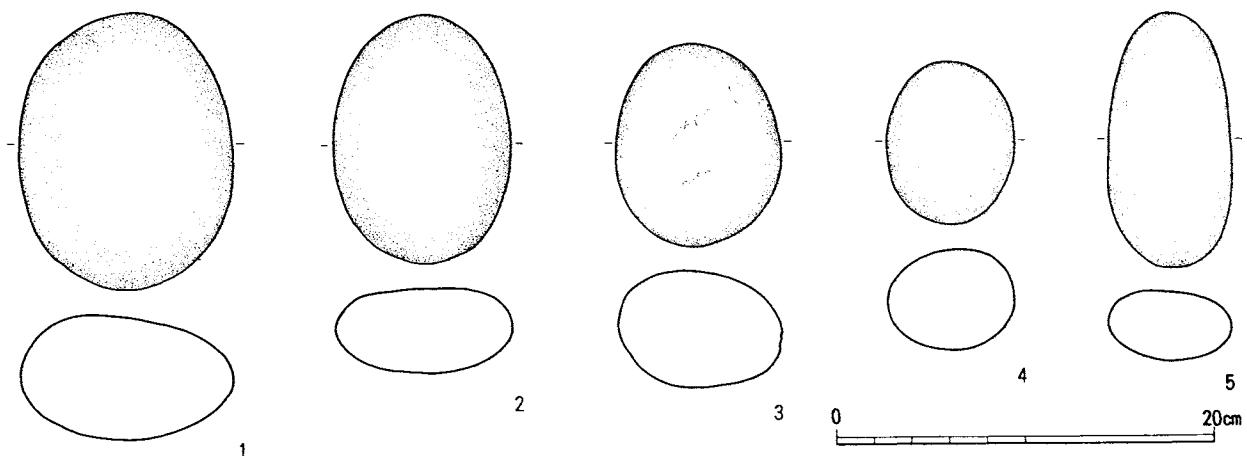
IIIB類は、周縁に敲打痕がみられるも



第133図 敲石実測図1 (1 : 4)



第134図 敲石実測図2 (1 : 4)



第135図 磨石実測図 (1 : 4)

ので、全周しないものをa類、全周に及ぶものをb類とした。

以下、個々にみていく。1～4は、IA a類である。硬質の石材を使用しており、石器製作用具の植石を含んでいる可能性がある。5はIA b類で、一端に敲打痕がみられる。6はIB a類、7はIB b類である。8・9はIA a類で、統いて示した10～19のIB a類と基本的には同一の機能をもつものであろう。いずれも周縁には敲打痕が幅広の帯状に形成される。

20～24は、IB a類である。基本的にはIB b類と同様の利用状況の中で敲打が全周に及ばなかったものと考えられる。ただし、23・24のような縦長品は異なる機能を担っていた可能性も考えられる。

25～35は、すべてIB b類である。いずれも器体中央に深い凹部が形成されている。

i 磨石 (第135図1～5)

植物質食料調理加工工具と認定される石器のうち、磨痕のみを有するものを本器種とした。39点ある。磨痕の形成の判断は、素材礫本来の礫表との比較によったため、不確かなものは除いた。

完形品5点を図示した。いずれも両面によく使用された磨面をもつ。他に2分の1から3分の1程度を残すものが3点、一部のみに磨面を残すことによって本器種とした小片が31点ある。小片のうち、6点は黒変など受熱の痕跡があり、うち5点は接合はないものの、出土位置が近いことと合わせて同一個体の可能性がある。

j 石錐 (第137図1～第138図32)

加工により錐状の機能部を作出したもの。合計125点出土している。類型ごとの内訳はI a類11点、I b類3点、II a類18点、II b類35点、III類58点である。石材では下呂石がI b類1点、II b類に2点、III類に1点みられる以外はすべてサヌカイトで占められる。つまみ部の有無、加工方法、加工範囲、機能部形態などにより下記のように分類した(第136図参照)。

I類……明瞭なつまみ部をもち、ほぼ全体に入念な加工を行って機能部を作出したもの。

a類……全体的に細身で、機能部が棒状で長く尖銳なもの。

b類……全体的に寸詰で、機能部が短く尖銳さに欠くもの。

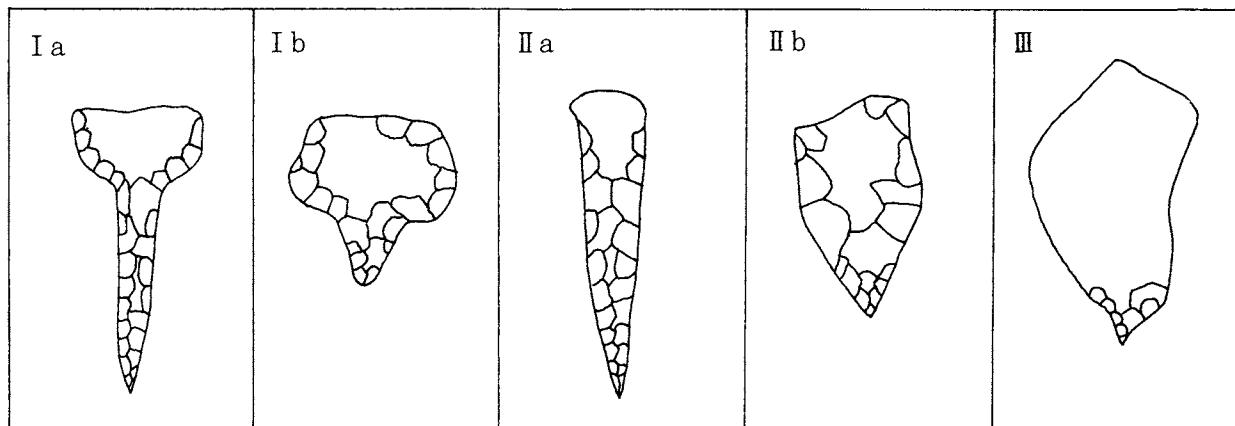
II類……明瞭なつまみ部をもたず、ほぼ全体に入念な加工を行って棒状の機能部を作出したもの。

a類……全体的に細身で、機能部が棒状で長く尖銳なもの。

b類……全体的に寸詰で、機能部が短く尖銳さに欠くもの。

III類……素材の一端に簡単な加工を行って機能部を作出したもの。

I a類 (1～6) 1はつまみ部にわずかな未調整部分を残す以外、細かな調整により長身の機能部が作られる。2は剥片の末端部側に細長の機能部を作り出し、加工はくびれ部から先端部にかけて施され、一次剥離面がつまみ部に面的に多く残る。3はつまみ部以外に調整を行うものであるが、表面右側



第136図 石錐形態模式図

はほとんど無調整である。4は表裏面ともつまみ部に礫表を残すもので機能部は丁寧に調整される。5は丁寧な調整を行い細長の機能部を作り出すもので、機能部の表裏面の稜に弱い磨耗が残る。6は縦長剥片に入念な調整を行い機能部とする。

I b類 (7・8) 7は比較的粗い加工により短めの機能部が作られる。8は上半部を欠損するもので横長もしくは幅広の剥片を素材とする。7・8とも先端部に磨耗がみられる。

II a類 (9~13) 9・10は細長の機能部をもつもので、基端部以外は調整を行う。11は横長剥片が素材と思われるもので、ほぼ全体に加工を行う。先端部にわずかに磨耗がみられる。12は基端部に礫表と一次面をわずかに残す以外は調整を全体に施す。機能部先端にはほぼ水平方向の磨耗がみられる。また、裏面中央付近の稜にも弱い磨耗が残る。石材は白い斑点の混ざるサヌカイトである。13は丁寧な加工で機能部を作り出すもので使用痕はみられない。

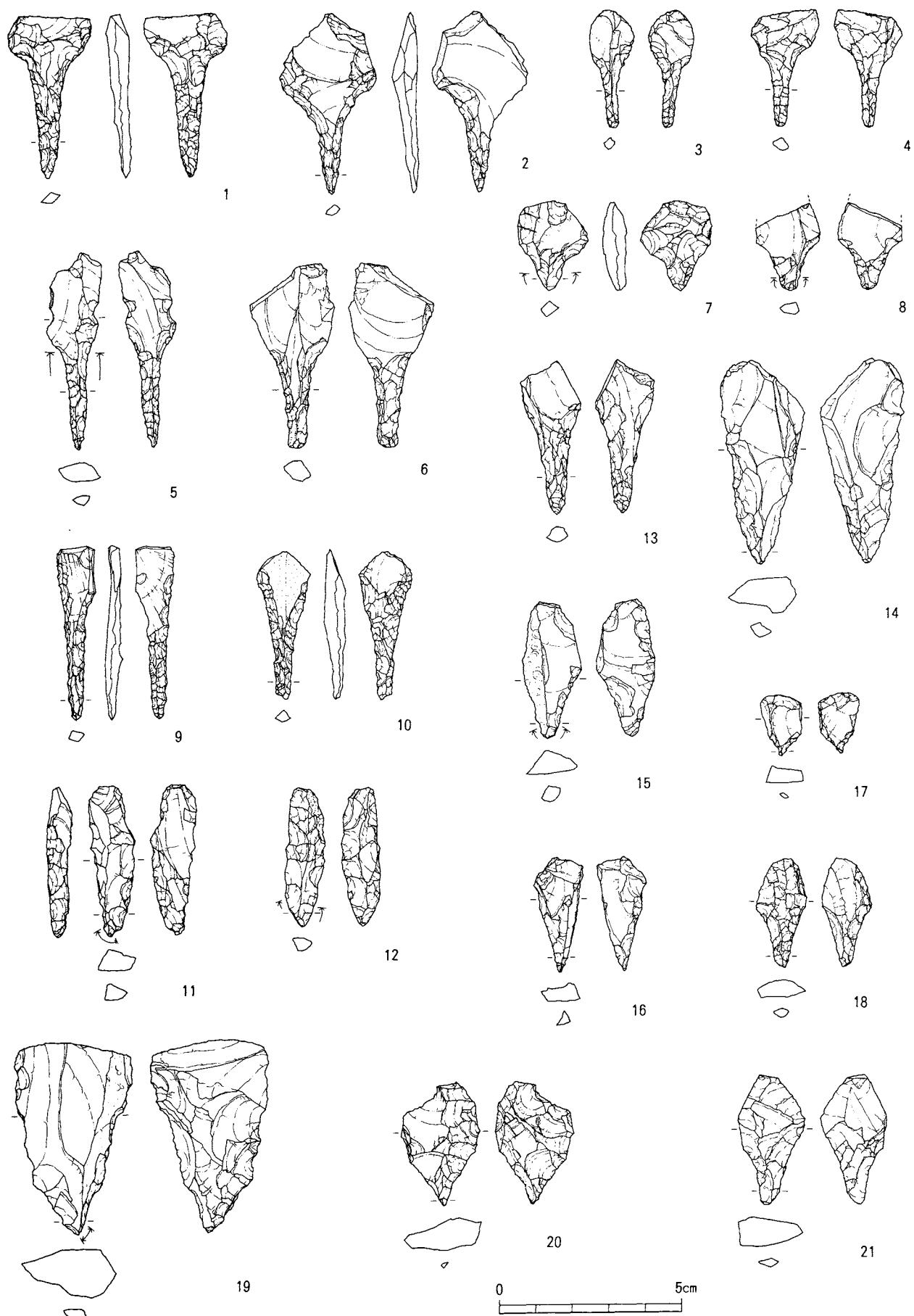
II b類 (14~21) 14は機能部が細かな剥離と粗い剥離で形成されるもので磨耗はみられない。15は縦長剥片を素材とするもので先端部が磨耗している。16は横長剥片を素材とする。17は小さな剥片に加工を行う。18は腹面側の一辺を除いて背腹両面ともすべて加工される。先端部をわずかに欠く。19は背面の大部分と腹面の半分ほどが他の面に比して風化度が強い。20はやや厚めの素材を用い、ほぼ全周に加工がめぐる。21は打面部付近以外に加工を施すものである。

III類 (22~31) 22は厚めの剥片の一端に機能部

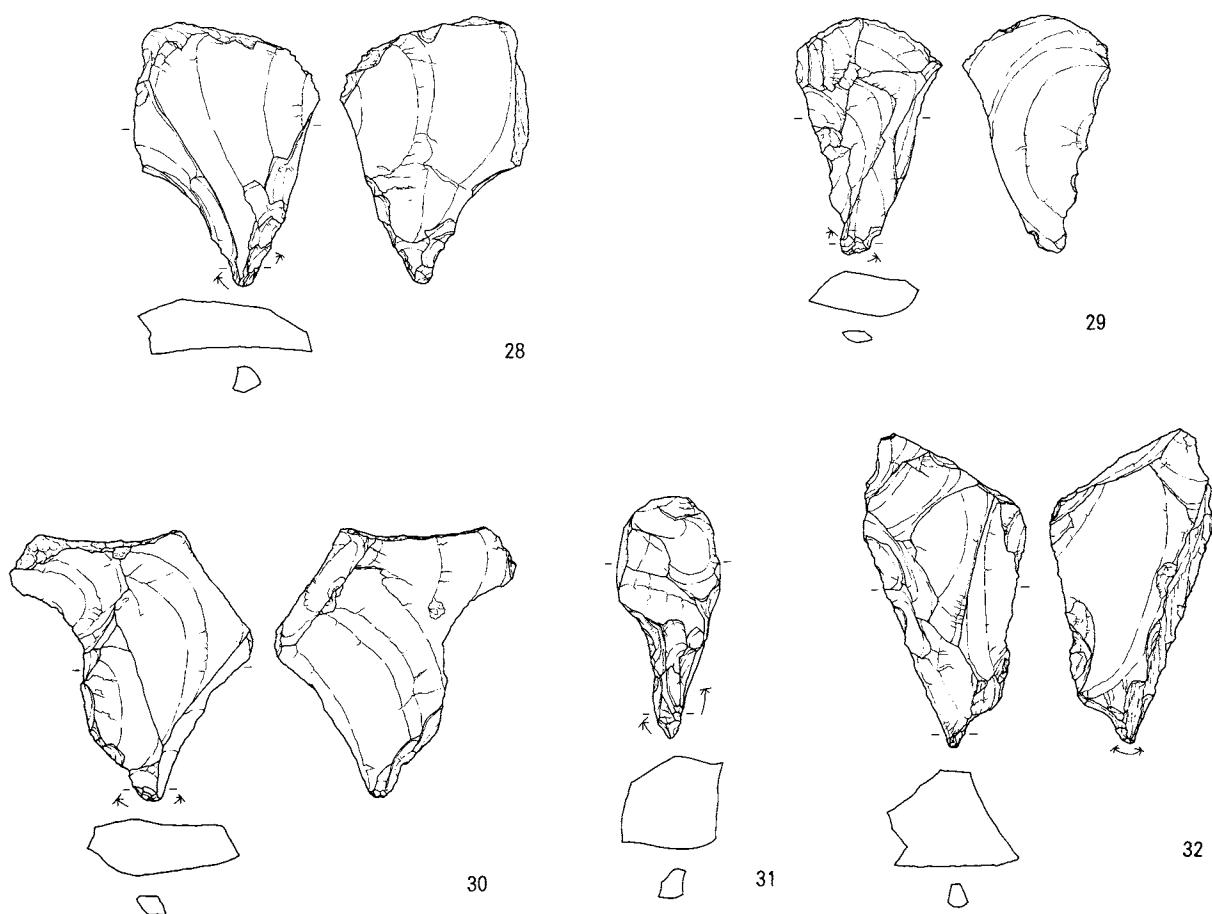
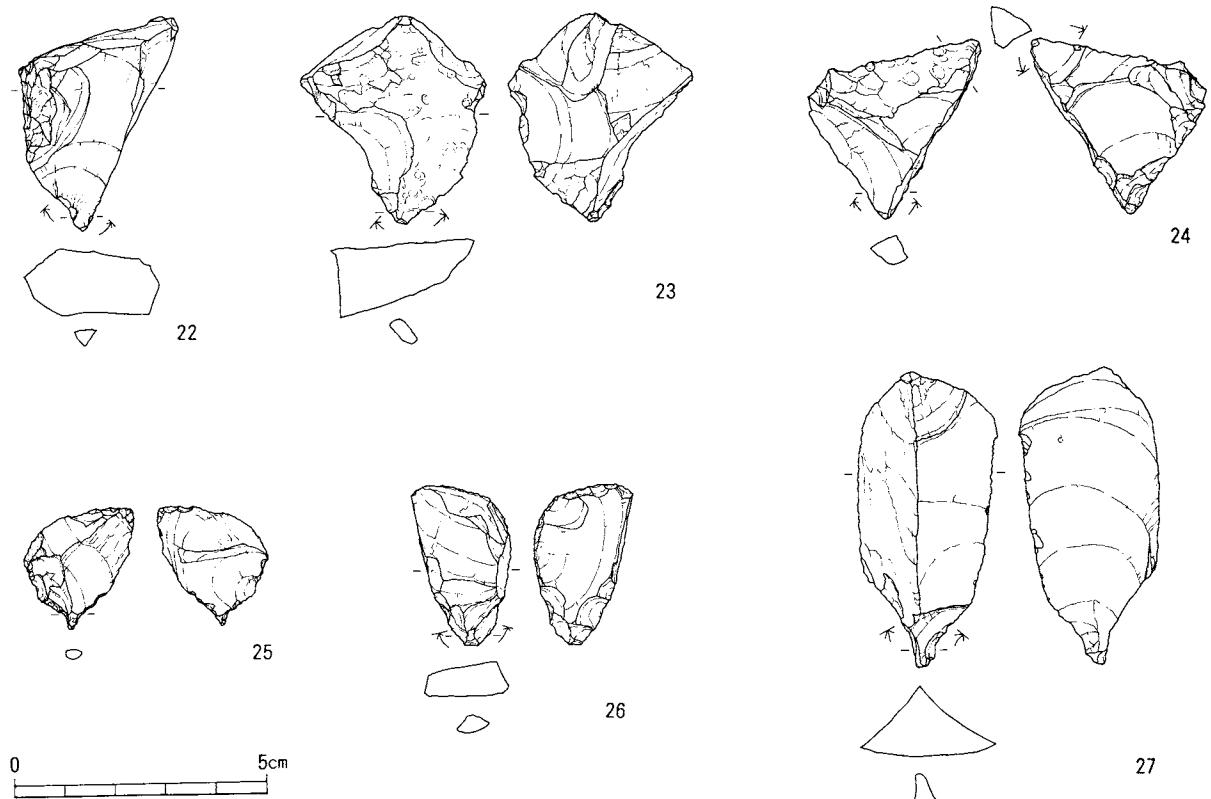
を作出する。23はポジティヴ面がみられず、石核転用と思われる。簡単な加工で機能部を作り出すもので磨耗している。24は23同様にポジティヴ面がみられず、石核転用の可能性があるもので、調整を施す機能部と未調整部分に磨耗が残る。25は小型剥片の打面側に細かな調整を行い機能部とする。26は横長剥片の腹面側を中心に調整が行われるもので、機能部に弱い磨耗が観察される。27は末端がヒンジフランクチラーとなる縦長剥片の打面側に機能部を作り出するもので、機能部に磨耗がみられるが、とくに先端部が著しい。また、剥片左側縁には細かな使用痕が残る。28は幅広剥片の礫表が残る側面の反対側に機能部を作り出す。先端部は磨耗が顕著で、器軸の左右でその範囲が異なっているが、わずかに観察できる線条痕は水平方向である。29はバルブの発達した横長剥片の一端に簡単な加工を行うもので、先端部が磨耗している。30は不定型な剥片の一端に簡単な加工を施すもので、先端部が磨耗している。31はかなり厚めの礫塊の一端に、32は石核を素材とするもので、主として一側縁を加工して機能部を作り出している。先端部にわずかな範囲であるが磨耗がみられる。

k 石匙 (第140図 1・2)

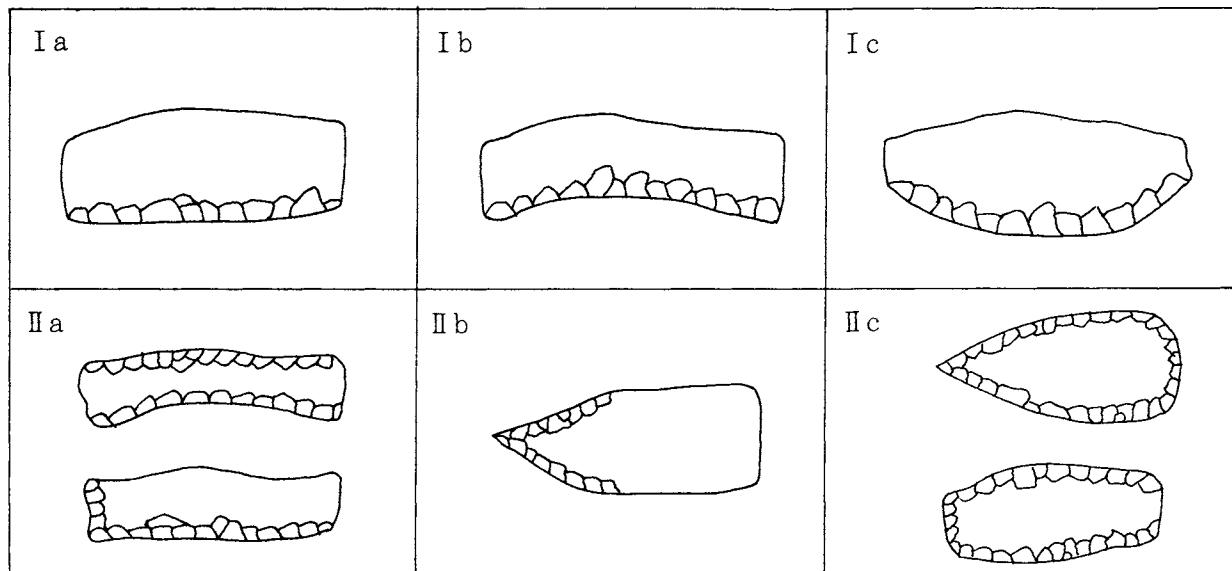
つまみ部をもち、他の縁辺に加工を行い刃部を作出するものである。1はつまみ部と思われる小片であるが、明瞭さに欠けるものであり、別器種の可能性を残す。2は礫表をとどめる剥片の一端にやや不明瞭ながらつまみ部を作り、全周に加工を施すものである。左側縁は安定した刃部を形成するが、右側



第137図 石錐実測図1 (2 : 3)



第138図 石錐実測図2 (2 : 3)



第139図 削器形態模式図

縁の加工は剥離が階段状となり角度が鈍く、整形のための加工である可能性が考えられる。2点ともサヌカイト製である。

I 削器（第140図1～第148図44）

縁辺に連続した加工を行い、安定した刃部を作出したもの。合計282点出土した。その類型ごとの内訳はI a類92点、I b類27点、I c類79点、II a類48点、II b類10点、II c類25点、分類不能品1点となる。石材別にみるとサヌカイトが272点と最も多く、ついで下呂石が5点、頁岩2点、チャート2点、石英1点である。刃部数・刃部平面形態などから下記のように分類した（第139図参照）。

I類……一側縁にのみ刃部を作出したもの。

a類……刃部が直線的なもの（直刃）。

b類……刃部が内に弧をえがくもの（凹刃）。

c類……刃部が外に弧をえがくもの（凸刃）。

II類……複数の側縁に刃部を作出したもの。

a類……一側縁とその対辺または接辺に刃部を作出したもの。

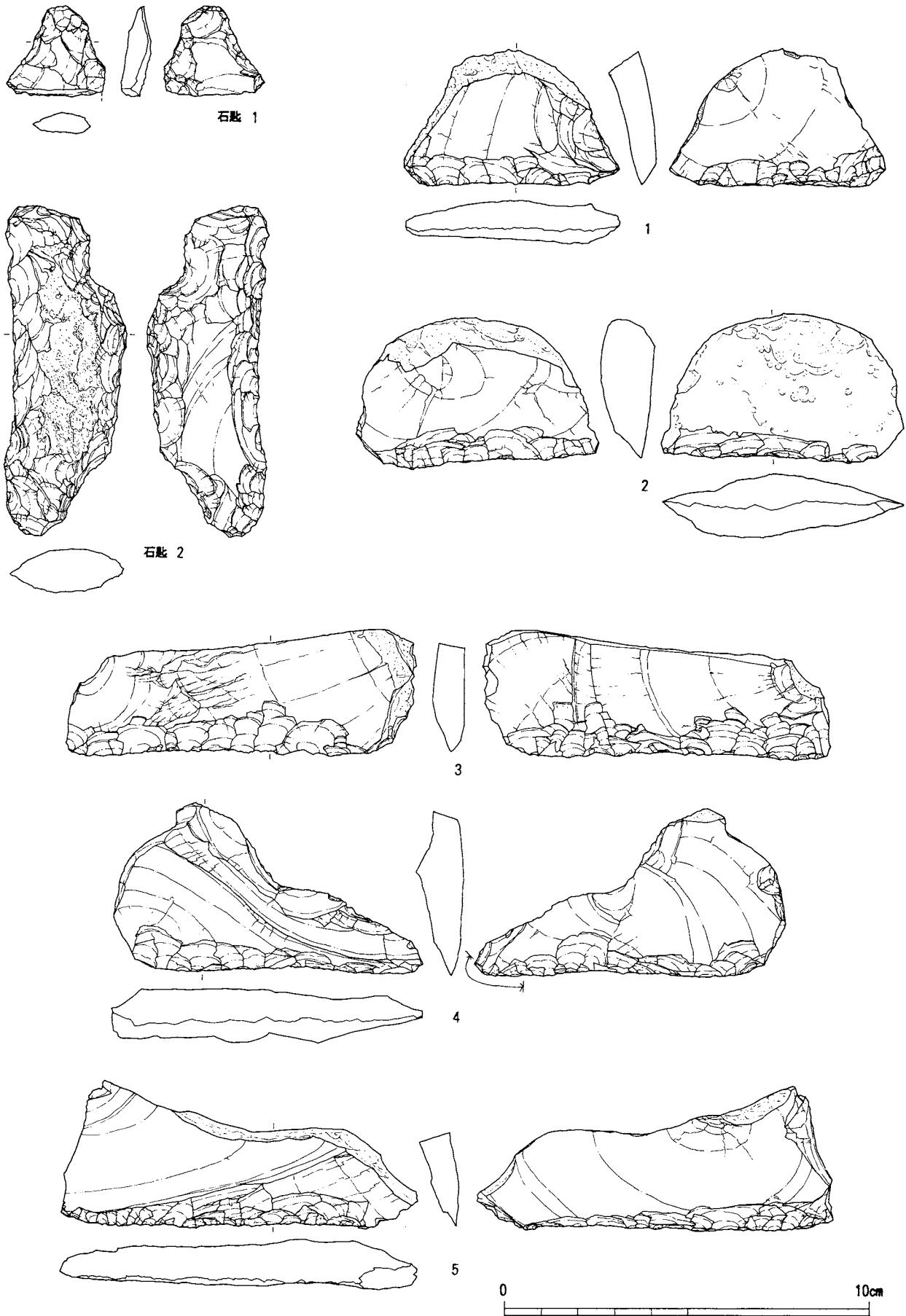
b類……一側縁とその接辺に刃部を作出し、その二辺のなす角が先鋭なもの（尖刃）。

c類……全周もしくはほぼ全周に刃部を作出したもの。

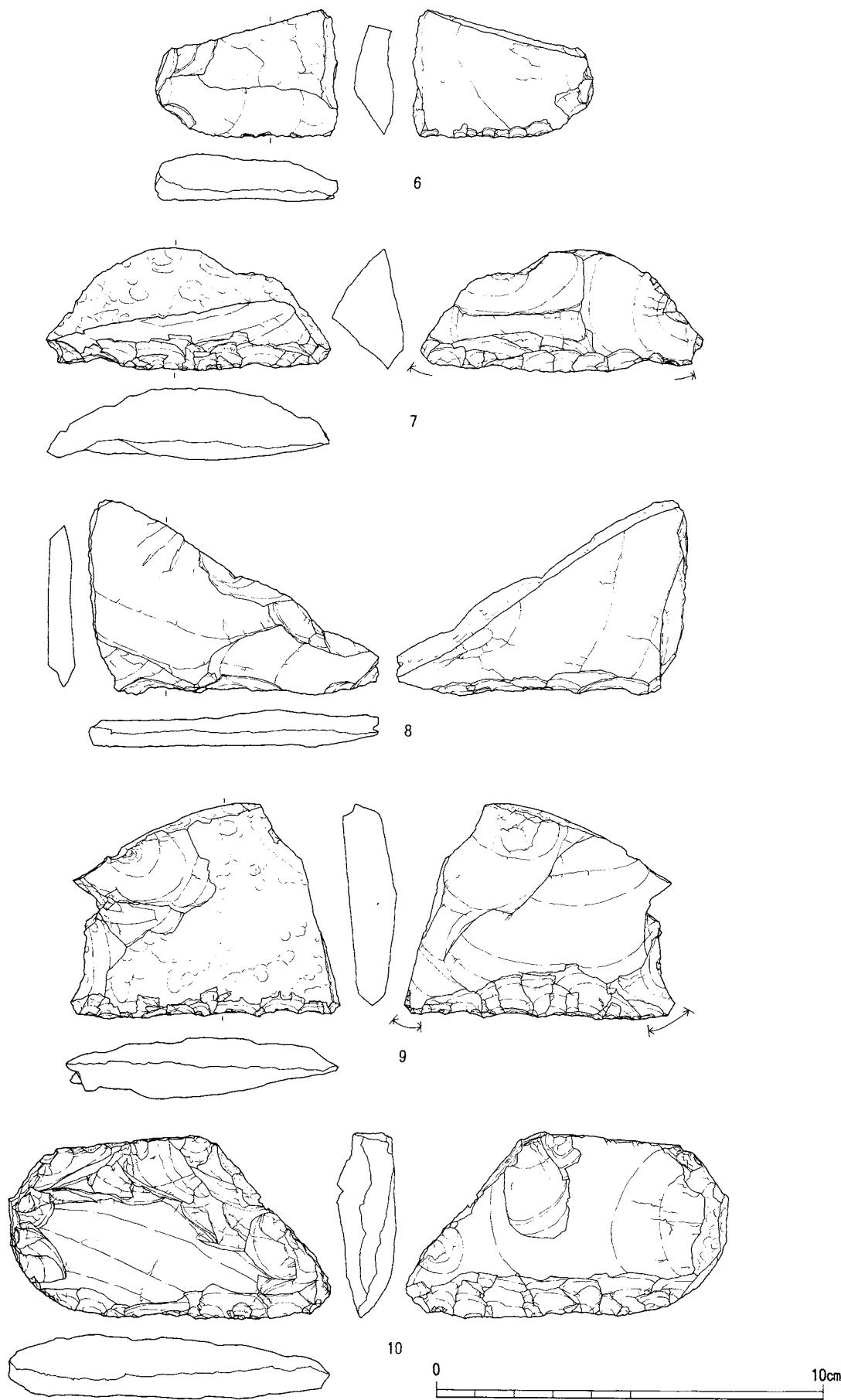
I a類（1～10） 1は打面が礫表に覆われた剥片の長辺に背腹両面に加工を行い刃部とするもので、刃部の両端の稜が磨耗している。ざらついた感のあ

るサヌカイトである。2は腹面以外礫表に覆われた幅広の剥片の末端に刃部を形成する。3は末端に礫面を有する剥片の一側縁に両面から加工を行うもので、刃部の対辺は折れ面となっている。4は剥離方向の不明瞭な横長剥片の長辺に背腹両面から加工を行う。長辺の右端の稜が磨耗している。5は打面部が礫面の横長剥片を素材とし、長辺に背腹両面から加工を行う。6は石英製で背面に礫表をとどめ、側縁腹面側に加工を行う。対辺は折れ面となっている。7は厚手の横長剥片の長辺に背腹両面から加工を行うもので、刃部全体に磨耗が顕著である。8は粘板岩製で礫表を打面とする板状の幅広剥片を素材とする。石質によるものか刃部は浅く幅広の剥離面で形成される。9は幅広剥片の末端縁に背面側には細かな、腹面側には粗めの加工を施す。刃部の両端の稜は磨耗している。10は厚めの縦長剥片の一側縁に加工を行うもので、背面側より腹面側の加工のほうが整っている。

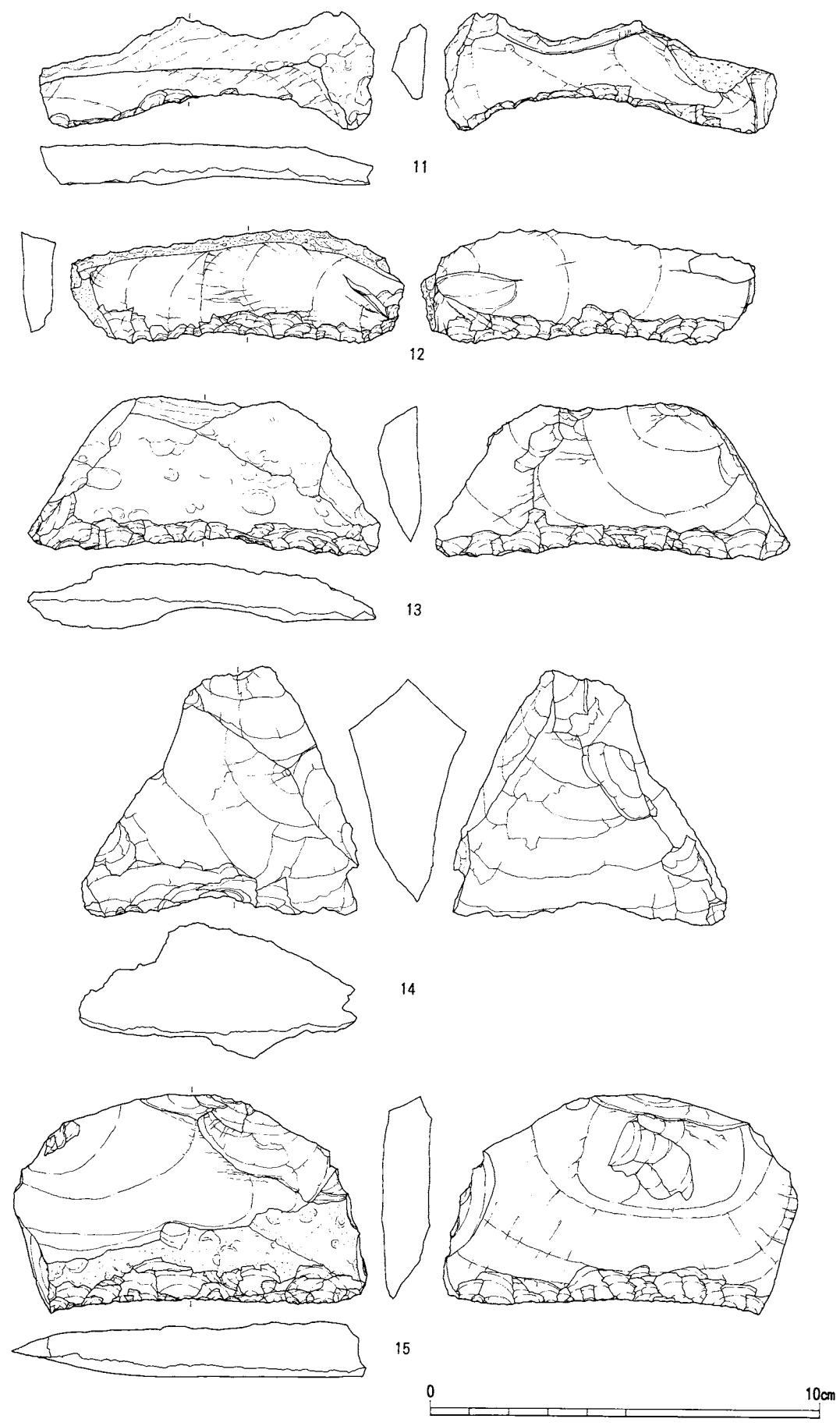
I b類（11～18） 11は細長の剥片の長辺に細かな加工を行うもので、主として腹面側に施す。12は縦長剥片の右側縁を両面加工して刃部とするもので、他の縁辺は礫面である。13は背面が礫表に覆われた横長剥片の長辺に刃部を形成する。14はかなり厚手の三角形状の不定型な剥片の一辺に片側加工で粗い刃部を作出する。白色の石英製。15は大型の横長剥片の末端縁に背腹両面から加工を施す。腹面左側に



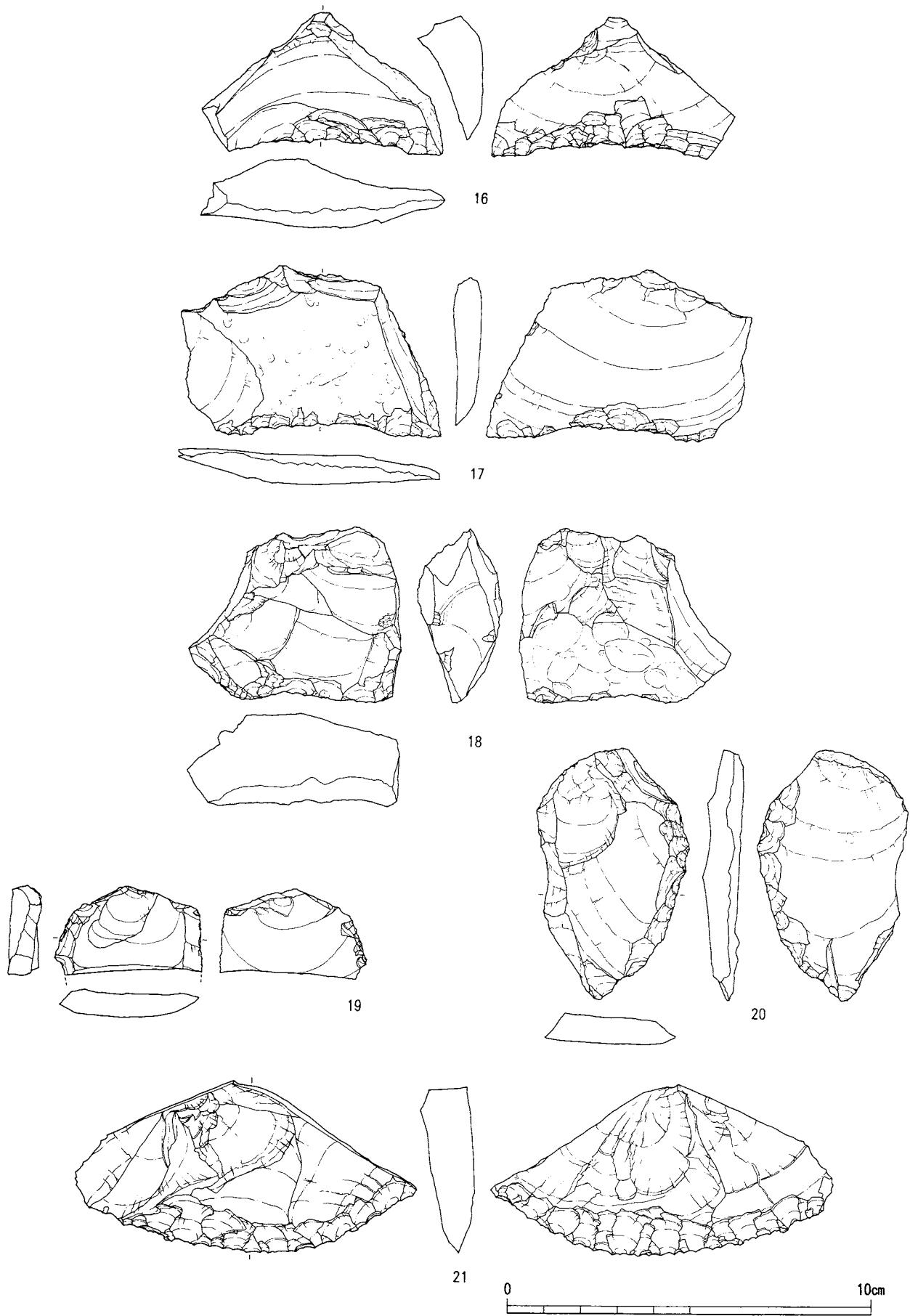
第140図 石匙実測図 (2 : 3)、削器実測図 1 (2 : 3)



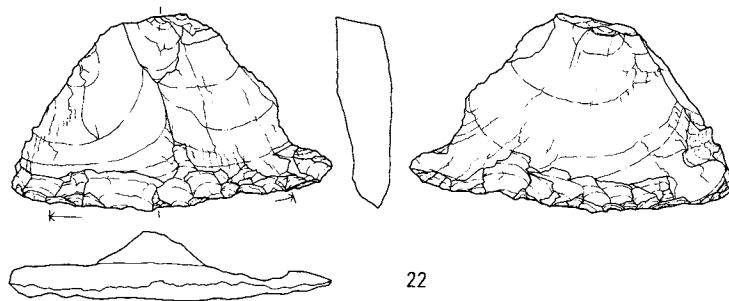
第141図 削器実測図 2 (2 : 3)



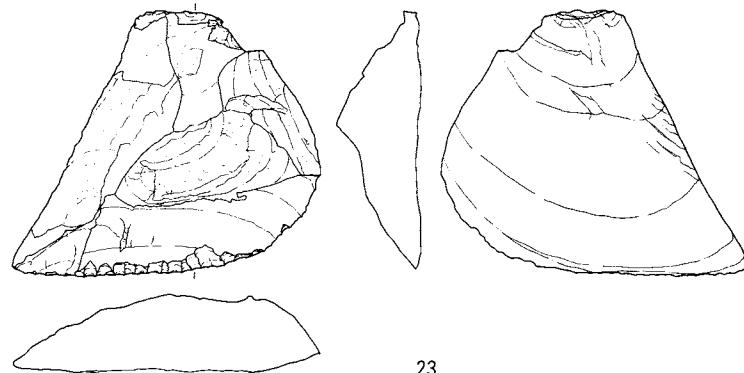
第142図 削器実測図 3 (2 : 3)



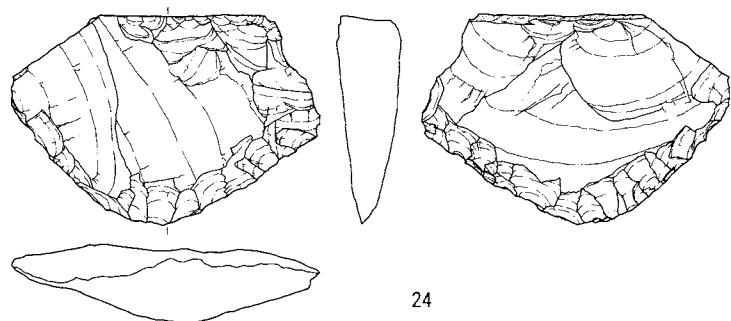
第143図 削器実測図4 (2 : 3)



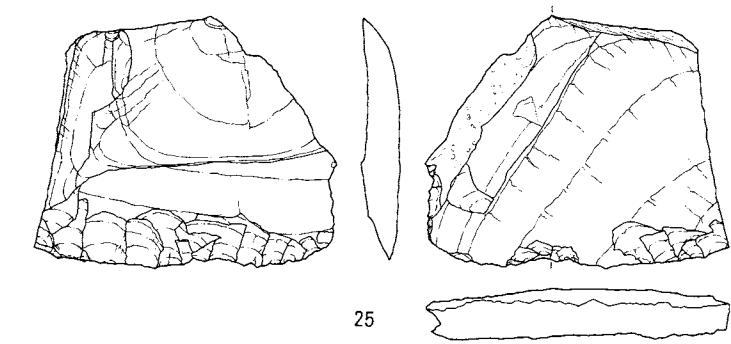
22



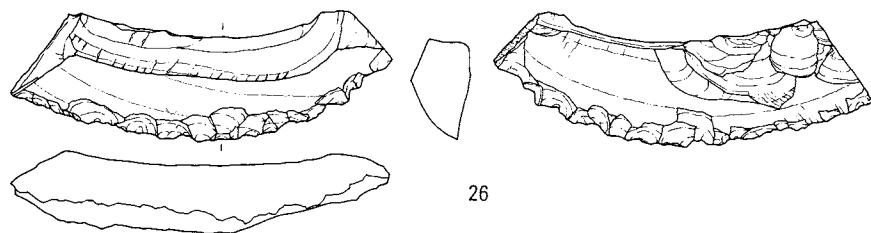
23



24



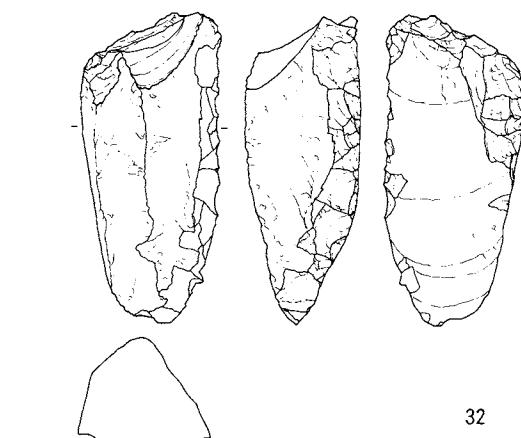
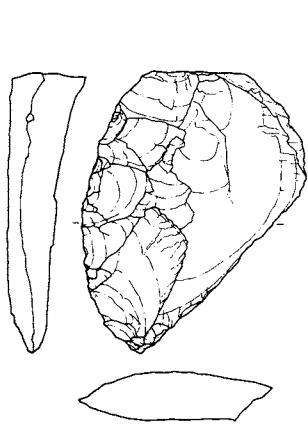
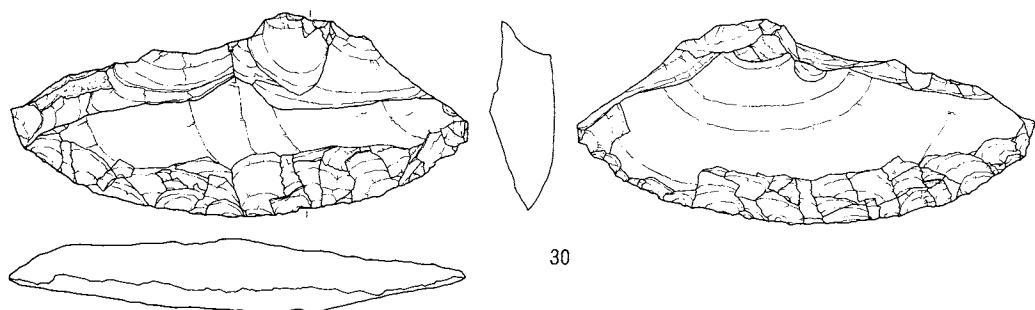
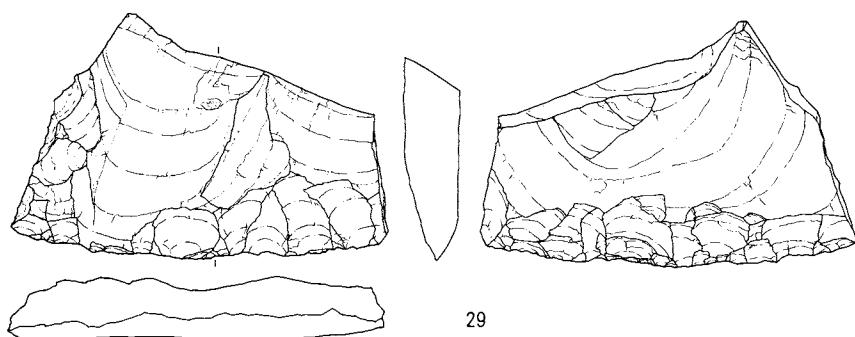
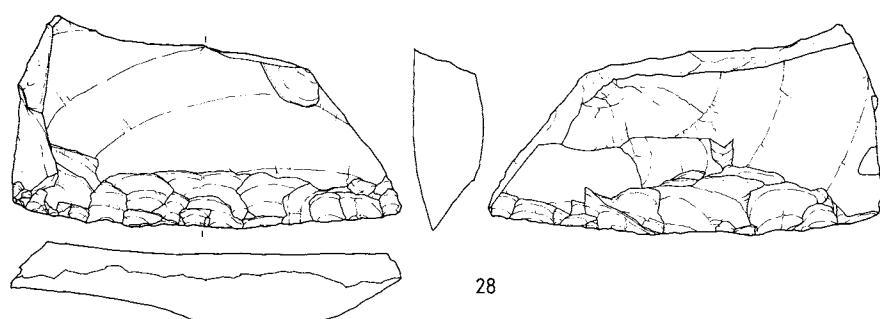
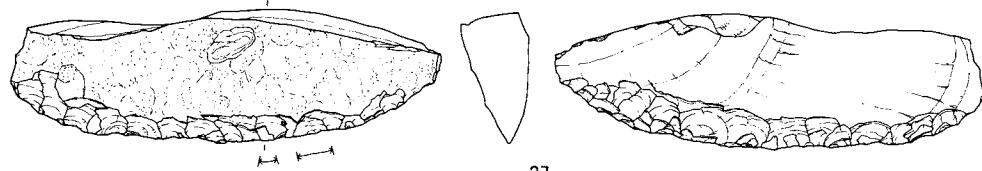
25



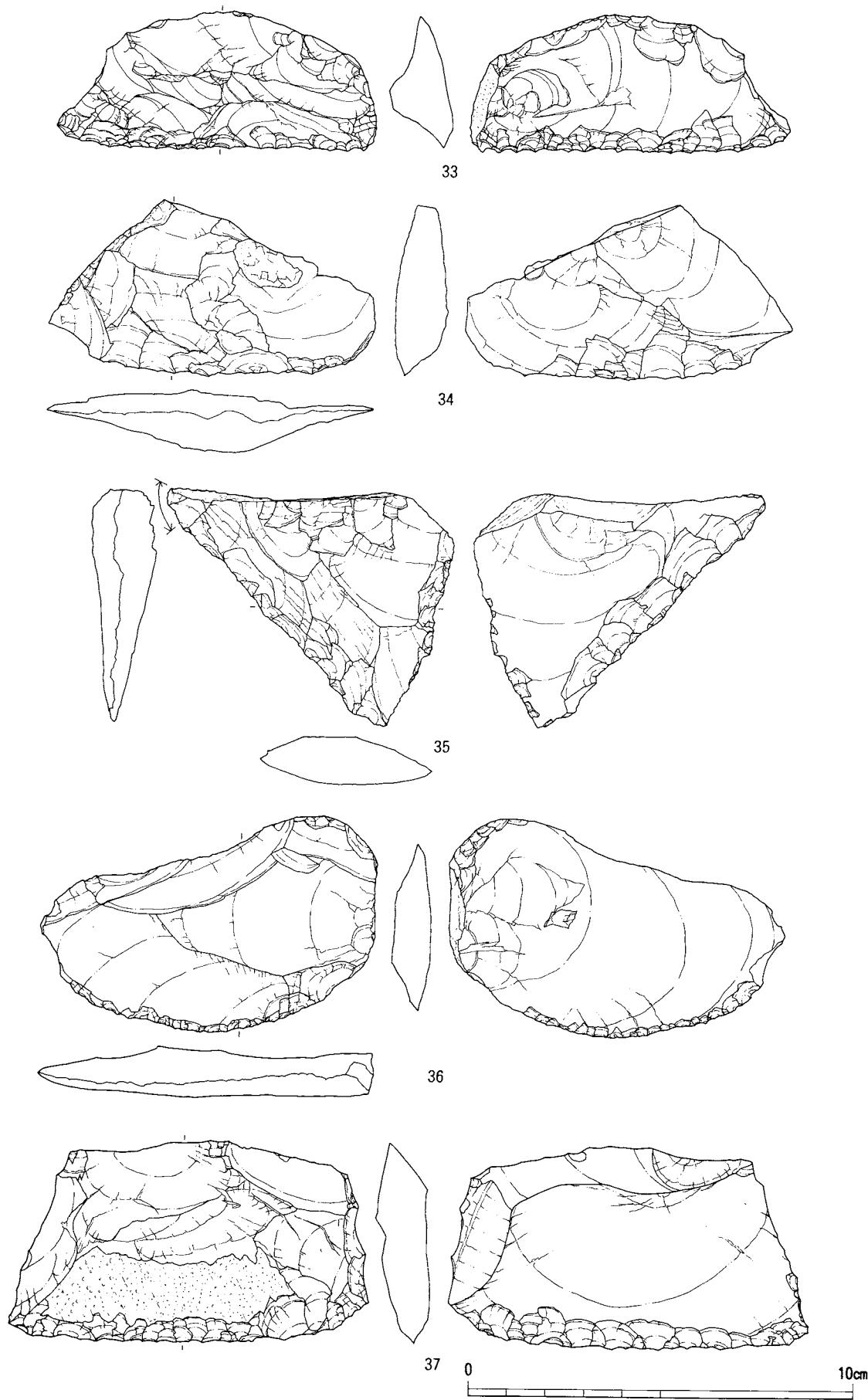
26



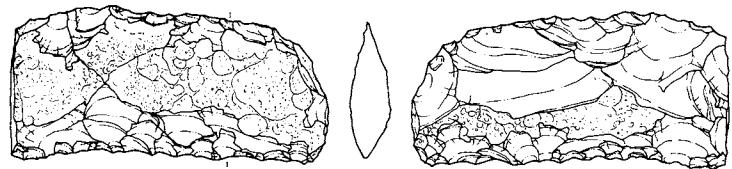
第144図 削器実測図 5 (2 : 3)



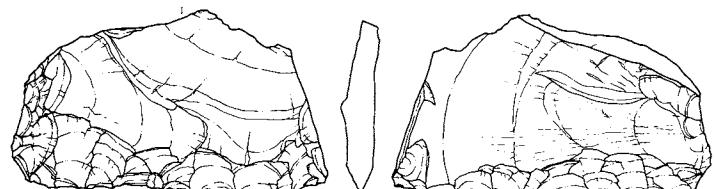
第145図 削器実測図 6 (2 : 3)



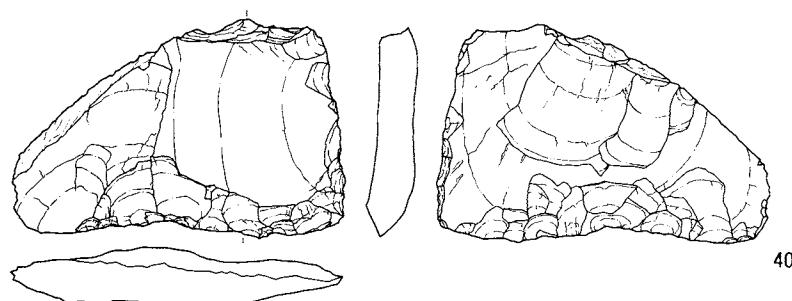
第146図 削器実測図7 (2:3)



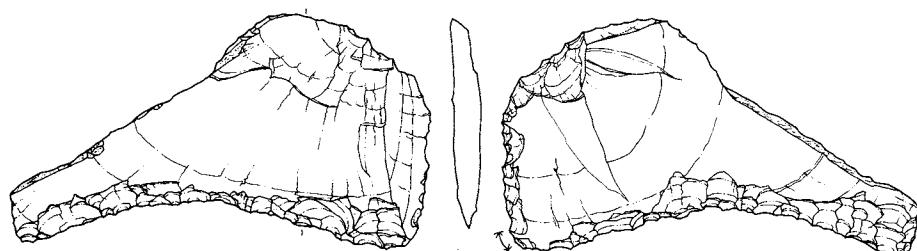
38



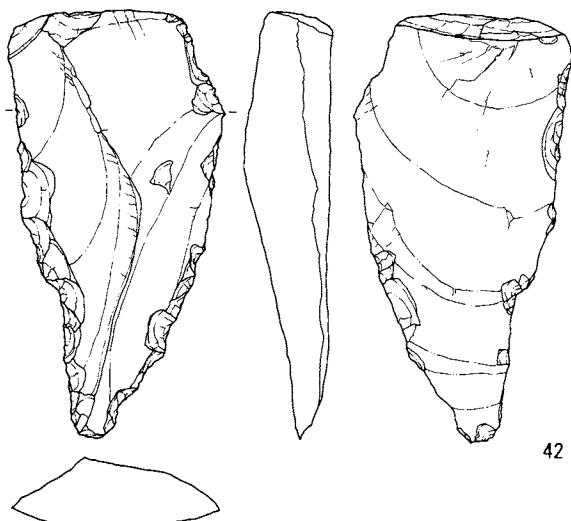
39



40



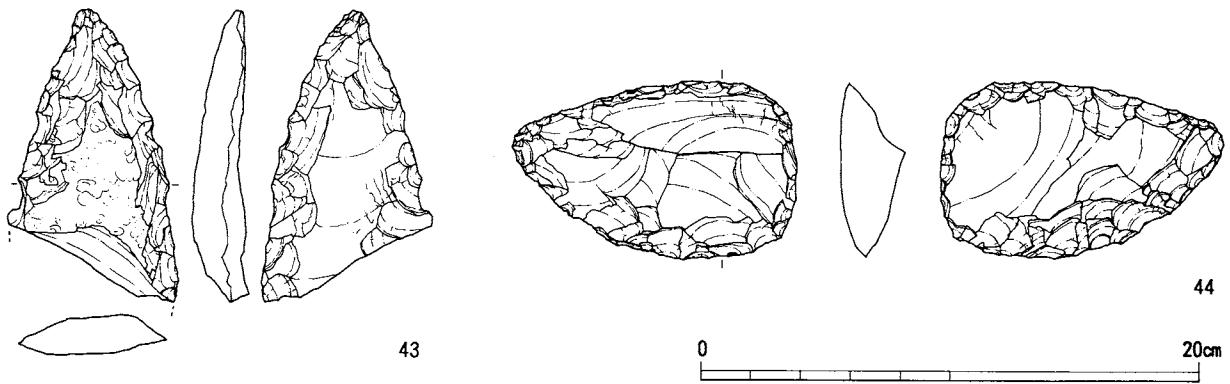
41



42



第147図 削器実測図 8 (2 : 3)



第148図 削器実測図9 (2:3)

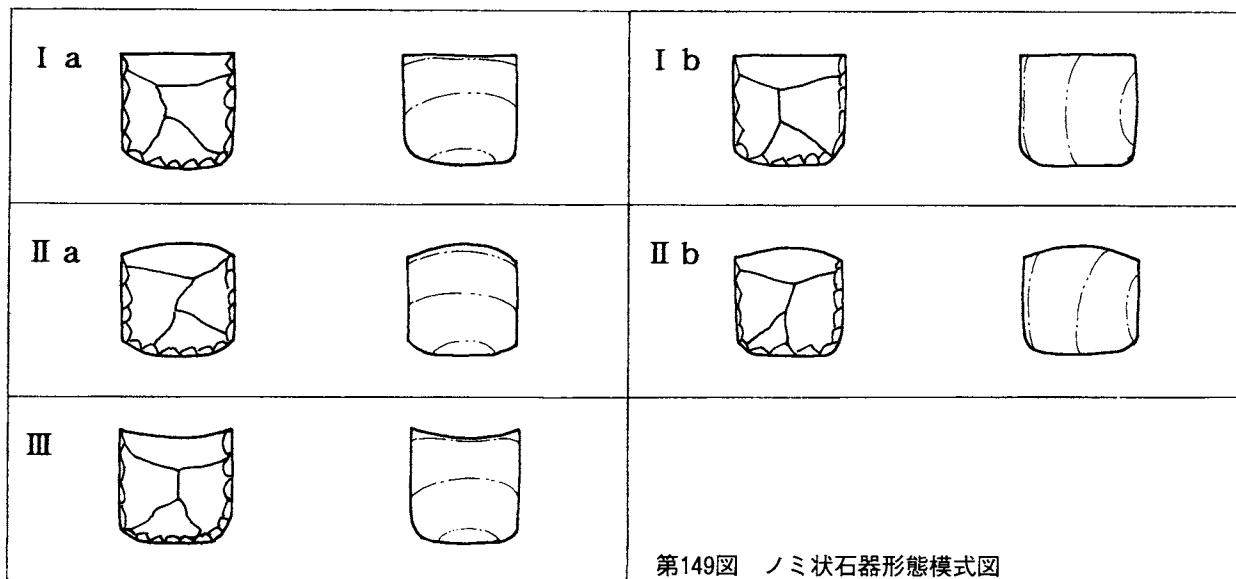
残る剥離面は風化度が強い。16は横長剥片の長辺に背腹両面から加工を行う。打面部付近はすべて礫表である。17は幅広剥片の末端縁に背腹両面からの加工を行うものであるが、刃部加工部位以外は風化度の強い古い面で構成されている。打面の左半は礫面である。18は石核を転用したものである。表裏面とも上方向・左方向からの剥離が大部分で、左右側面は折れ面状となっている。刃部は下辺に表面を中心形成される。

I c類 (19~32) 19はチャート製で一側縁に角度のある刃部を形成する。対辺には使用痕を有する。20は打面部に礫表を残す縦長剥片の一側縁に凸刃を形成する。21は打面側に礫面をとどめる幅広の剥片を素材とし、両面からの加工により凸刃を形成する。22は幅広剥片の長辺に刃部をもつ。23は幅広剥片の末端縁に2 mmほどの細かな加工を腹面側から行う。24は打面が礫面の幅広剥片の末端縁に背腹両面から加工を行う。25は縁辺の一部に礫表をとどめる剥片の主に背面側の長辺に刃部を形成するもので、背面側刃部と重複関係にある面はポジティブ面と思われ、剥片素材の石核から剥片を素材としている可能性が高い。26は一側縁に背腹両面から加工を施し刃部とする。背腹両面とも刃部と重複する面は他の面と比して風化の度合いが強い。27は背面が礫表に覆われた、剥離軸にそった折れ面を有する剥片の右側縁に背腹両面から加工を行う。28は礫表を打面部とする不定型な剥片の一辺に背腹両面から加工を施す。29は幅広剥片の長辺に背腹両面から加工を行う。打面と右側面は折れ面、左側面は礫表となっている。30は横長剥片の長辺に背腹両面から加工するものであ

る。打面は礫表である。31は打面部から右側面部にかけて礫面に覆われた剥片の一辺に大きめの加工を施す。32は背面礫表、横断面三角形、厚手の縦長剥片の一側縁背面側に角度のある加工を施す。素材剥片は原礫端部を剥離したものと思われる。

II a類 (33~41) 33は礫面を打面とする剥片の両側縁に加工を施すが、下辺の加工が細かいのに対して上辺はかなり粗い。34はツインバルブの横長剥片で、末端縁を背腹両面から比較的粗い、左側縁は腹面から細かな加工を行う。背面の打面に接する2つの大きな剥離面は他の面より風化度の進んだ古い面である。35は礫面の打面部以外の二辺に左側縁は背腹両面から、右側縁は主として腹面から加工を施す。左側縁と打面の接する部分が磨耗している。36は橍円形状の縦長剥片右側縁全体と左側縁の一部に刃部を形成する。左側縁の両端部分の稜が磨耗している。37は横長剥片を素材とし、末端縁は両面から、右側縁は腹面側から加工を行う。38は薄手の礫を素材としたもので、相対する二辺に加工を施すが上辺側片面は粗い加工となっている。39は打面側と左側縁に加工を行うが、打面側の加工は形態を整えるためのサポート的なものかもしれない。40は右側縁・末端縁ともに背腹両面から加工を施し刃部とする。腹面には調整と思われる打面側からの大きな剥離面がみられる。41は不定型剥片を素材とし、末端縁は背腹両面から、右側縁は背面から加工を行う。

II b類 (42・43) 42は縦長剥片の両側縁、特に背面側を中心に加工を行い、尖頭状に仕上げる。43は縦長剥片を尖頭状に加工を行うもので、素材剥片末端部分は折れ面となっており、**II c類**の可能性も



第149図 ノミ状石器形態模式図

あるが一応本類に含めた。

II c 類 (44) 44は二等辺三角形の三隅をやや丸みをもたす形に全周を両面から加工するものである。

m ノミ状石器 (第150図1～第151図28)

素材の鋭い直線的または曲線的な縁辺を一辺残し、他の縁辺に腹面側あるいは背面側から刃潰し状の急角度をもたせた加工を施すものであるが、折り取りや平坦剥離を併用する場合があり、いくらか変異がある。形態が鑿に類似することからノミ状石器と仮称しておく。合計153点出土している。すべてサヌカイト製である。本器種は特異な石器であり、後節で改めて取り上げる。

ここでは以下のように技術的な部分は考慮せず、刃部形態、素材の用い方で分類しておく(第149図参照)。これは現時点において、多様な加工技術の在り方を十分咀嚼し得ていない部分があるためである。よって、あくまでも暫定的な分類である。

I 類……刃部が直線的なもの。

a 類……素材剥片の末端縁を刃部とするもの。

b 類……素材剥片の側縁を刃部とするもの。

II 類……刃部が曲線的で外側に張るもの(凸刃)。

a 類……素材剥片の末端縁を刃部とするもの。

b 類……素材剥片の側縁を刃部とするもの。

III 類……刃部が曲線的で内側に張るもの(凹刃)。

素材剥片の末端縁を刃部とする。

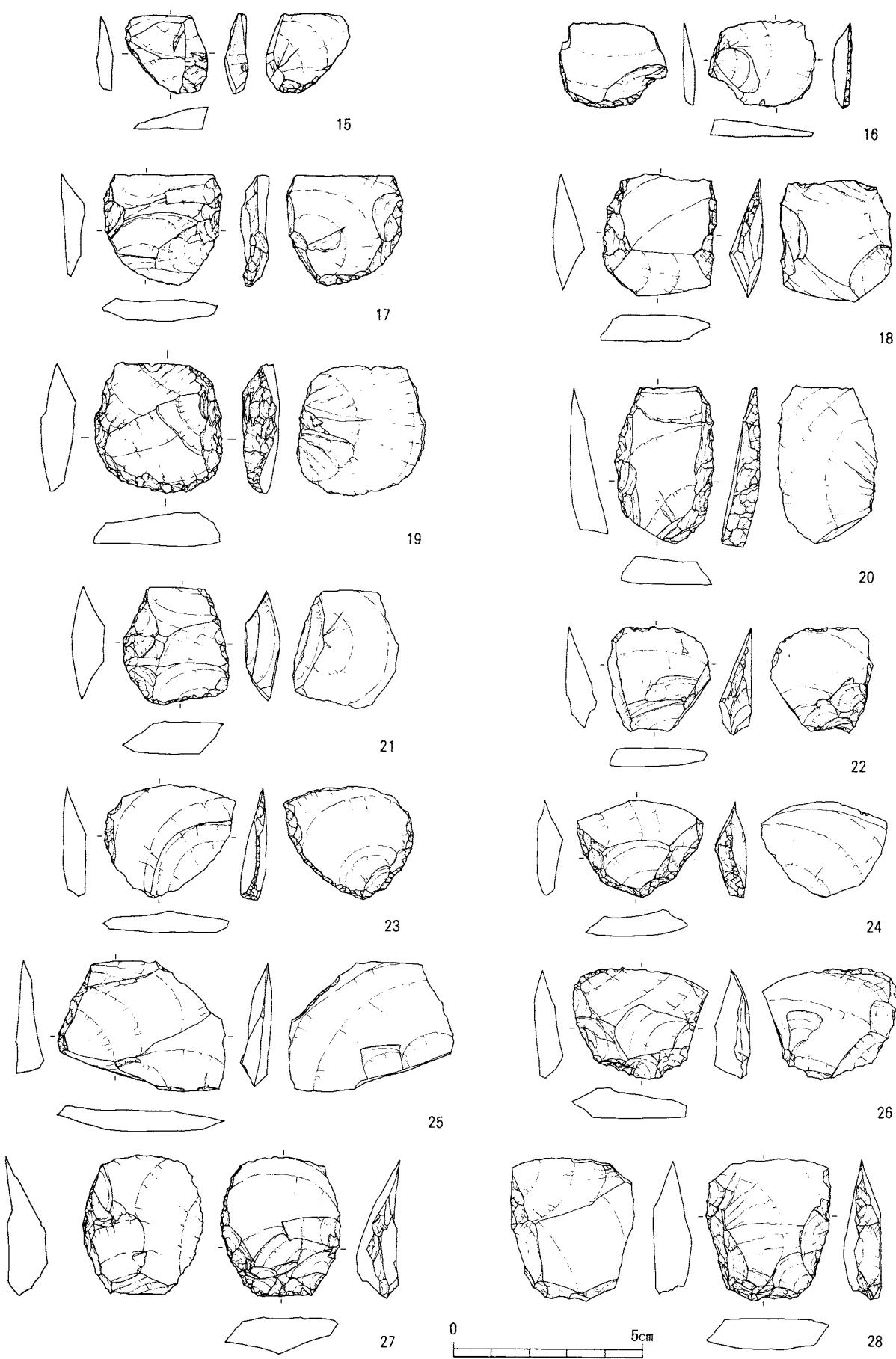
それぞれの点数は I a 類61点、 I b 類35点、 II a 類33点、 II b 類17点、 III 類3点、 分類不能 4点であ

る。

I a 類 (1～14) 1は背面にポジティヴ面をとどめ、打面部を残置する剥片を素材とし、刃部をはさむ一方の縁辺を背面側から、他方の縁辺を腹面側から加工を施す。2は小型の幅広剥片の一辺を刃部とし、他辺を腹面側から加工する。3は厚手の剥片を素材とし、一辺を残し他の縁辺に背腹両面から加工を行う。4は幅広剥片を素材とし、主として背面側を加工し、打面部・礫面部は除去していない。5は寸詰の剥片を利用し、大部分が背面側への加工で打面は除去しない。6は末広がりの剥片の長辺を刃部とする。一側縁にのみ微細な加工を行い、打面部および側面の礫面部分は手を加えない。7は腹面側から急角度の加工を施す。8は末端縁を刃部とするもので、縁辺には腹面側から粗い加工を行い、右側縁を中心に微細な加工も併用する。また、背面側からも一部に粗い加工と微細な加工を施す。9は末端縁を刃部とし、打面部以外を微細な加工で調整する。刃部には刃こぼれ状の剥離がみられる。10は微細な加工と折れ面を打面とする平坦剥離で整形する。11は背面に残るポジティヴ面の直線的な縁辺を刃部とするもので、他の縁辺を腹面側から急角度に加工して全体形を長方形状に整える。12は刃部以外は大部分を背面側から調整を行うものである。13は剥片の末端縁を刃部とするもの。14は背面の大部分がポジティヴ面で占められる剥片を素材とし、腹面側からだけではなく背面側からの加工もみられる。



第150図 ノミ状石器実測図 1 (2 : 3)



第151図 ノミ状石器実測図2 (2 : 3)

I b類 (15~21) 15は小型剥片の左側縁を刃部とするもので、礫面の打面部を除く縁辺に主として腹面側から加工を行う。16はバルヴァスカーをとどめる薄手の剥片を用い、礫面の打面部以外は腹面側から加工を施すものである。17は寸詰の剥片の直線的な縁辺を刃部とし、主として背面側からの加工によって整形される。18は寸詰の剥片の右側縁を刃部とし、それに接する二辺に加工を施す。背面側が刃潰し状加工、腹面側が平坦剥離加工である。刃部の対辺は鋭い縁辺をそのまま残す。19はバルヴァスカーの残る剥片を横位に用いて左側縁を刃部とし他の縁辺を加工する^⑨。20は幅広の剥片の右側縁を刃部とするもので、刃部の反対側の折れ面はおそらく加工後の折れと考えられる。21は幅広剥片の左側縁を刃部とし、他の縁辺に加工を施す。打面部は残置されており、その面を打面として背面側に細かな平坦剥離を加えている。

II a類 (22~27) 22は腹面側を中心に加工を行うもので、刃潰し状加工と平坦剥離を併用する。23は一部に背腹両面からの加工を行うが、基本的に背面側からの加工によって整形されるものである。24は加工がすべて腹面側から行われている。25は不定型な五角形状を呈し、二側縁に加工を施し、二ヶ所に折れ面をもつ。26は幅広剥片を素材とし、主として腹面側から加工を行う。27は背面側からの加工が腹面のバルブ部分に施される。

II b類 (28) 28はバルヴァの明瞭な幅広剥片の左側縁を刃部とし、礫面の打面部を除く縁辺に加工を行う。

n 楔形石器 (第152図1~第153図27)

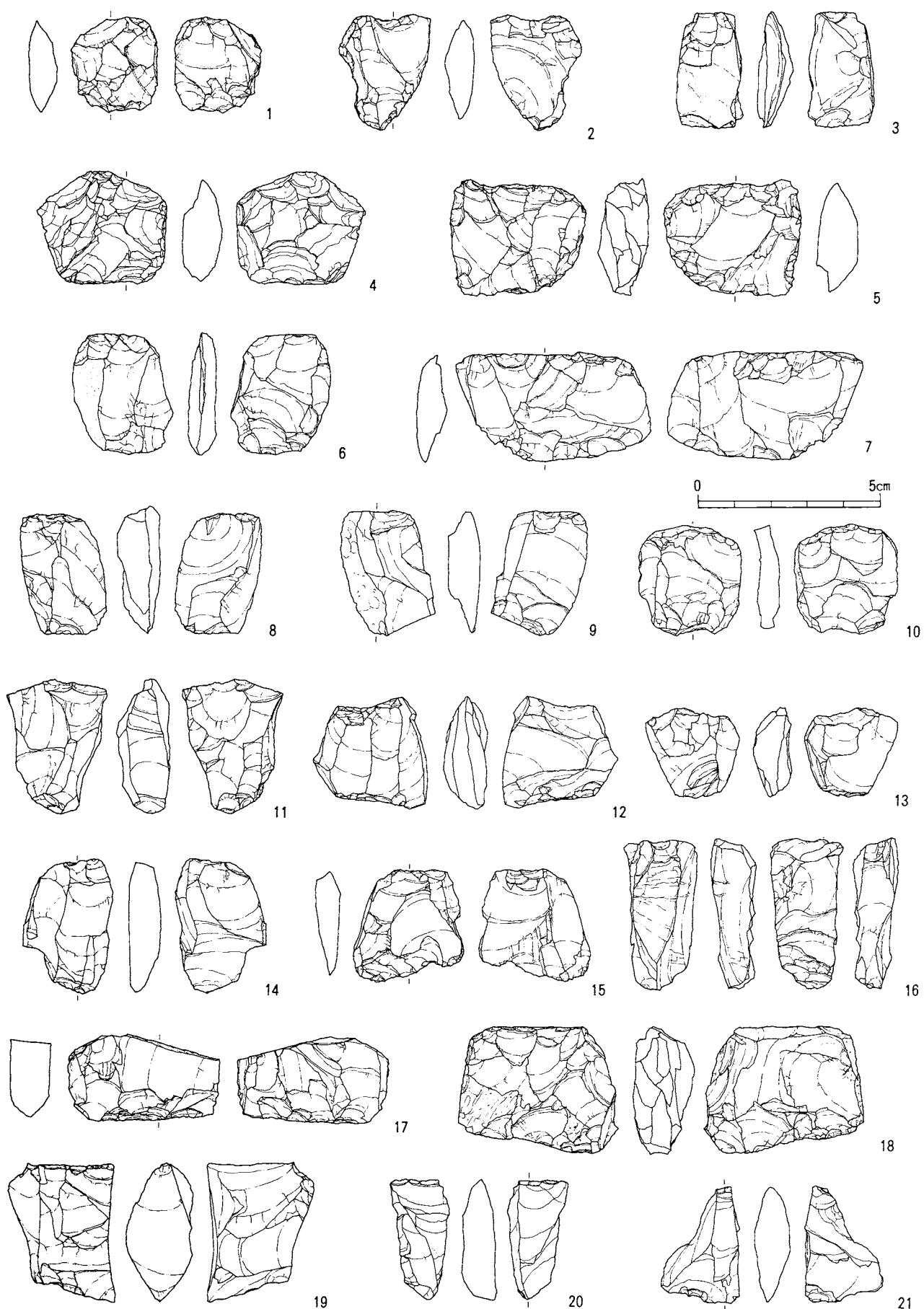
相対する二辺、あるいは上下・左右の四辺に細かな剥離痕、階段状剥離痕、潰れ状の剥離痕、奥に延びる平坦な剥離痕、器軸(加撃)方向に違う折れ面などを残すもので、截断面(器軸方向に沿う剥離面)をもつ場合が多い。製作時・使用時に生じると思われる削片状の剥片も本器種に含めてある。サヌカイト983点、下呂石59点、チャート2点、頁岩18点、石英14点の合計1,076点出土している。

1~8・27は截断面をもたないものである(I類)。1は表面が四方からの、裏面が上下からの剥離痕をとどめるものである。2は三角形状を呈するもので、

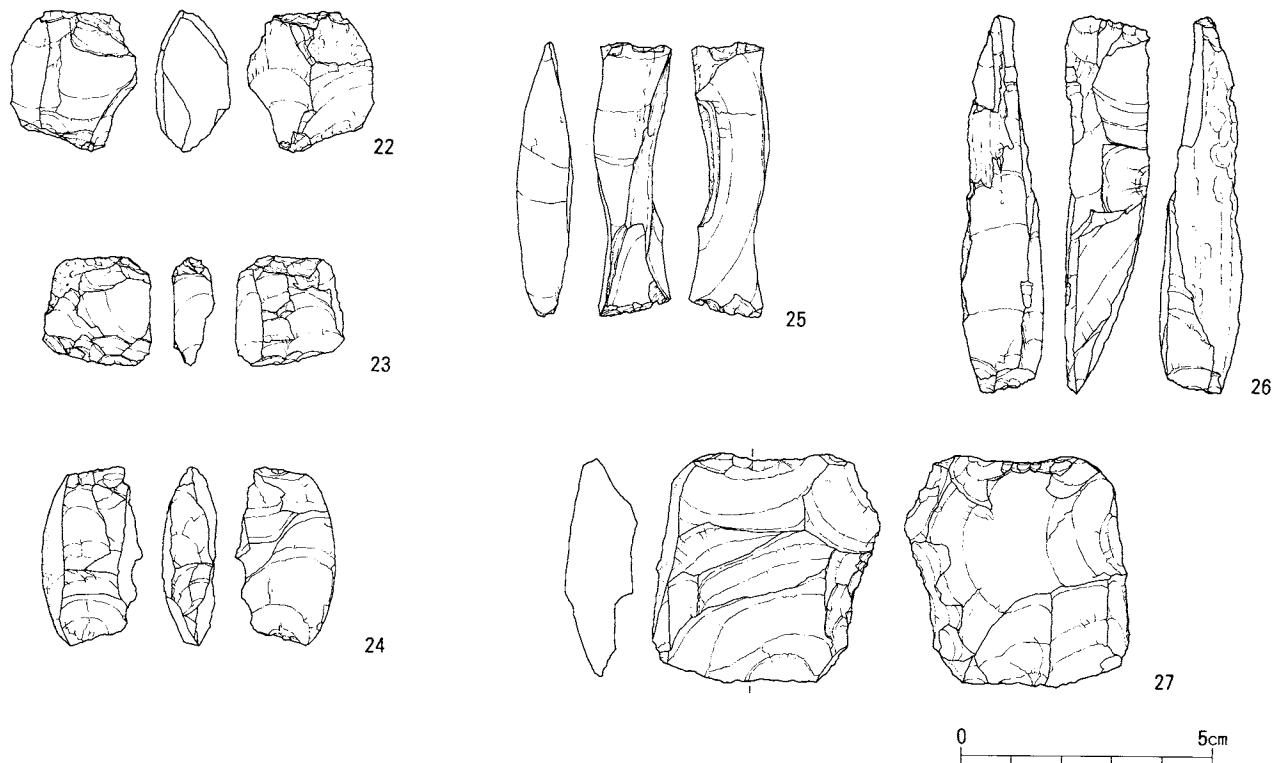
表面下端には階段状剥離が顯著である。3は背面・打面が礫表の剥片を横位に用いもので、上下からの剥離痕がみられる。4は表裏面とも四辺から階段状剥離や平坦な剥離が発達し、断面形が凸レンズ状をなす。5も4同様に表裏面とも四辺からの剥離が発達しており、とくに上辺では潰れ状剥離が顯著である。6・8は長方形のもので主として上下からの剥離面によって形成される。7は横長のもので上下からの階段状剥離と対辺に延びる剥離がみられる。上辺の一部に礫表をとどめる。27は正方形をなし、側面の一部に礫表を残す。表裏面ともほぼ四方からの剥離痕をとどめ、表面右辺と上辺はやや潰れ状の剥離となっている。

9~24は截断面をもつものである(II類)。9・13・14には上下からの剥離がみられる。10は上面から側面にかけて礫表をとどめ、上下からの剥離がみられ縦断面が長方形を呈す。11は截断面が上下方向からの剥離面となっているもので、表裏面に対してほぼ90度の角度をなす典型的なものである。12は左右に截断面を有し、表面には対辺に延びる剥離、細かな階段状が発達している。15は表裏面とも主として平坦な剥離で構成される。表面上半右側には風化度の強い古い剥離面が残る。16は表面上方・裏面下方に対向する剥離がみられ、側面には折れ面と典型的な截断面が残る。17は截断面を2面もち上辺が礫表となるもので、下辺に潰れ状・階段状剥離が顯著である。18は大型厚手のもので表裏面とも階段状剥離が顯著である。表面下半・左側面に礫表が残る。19は典型的な截断面を2面もち、主として上下からの剥離痕をとどめるもので、表面には階段状剥離が発達し、断面が凸レンズ状を呈する。20は一辺からの剥離を中心とするもので、截断面を1面もつ。21は上下に階段状剥離がみられ、縦断面は凸レンズ状をなす。22は小型のわりには厚手のもので、截断面を2面もつ。23は上下端に階段状剥離が顯著に残る。裏面下半右側は礫表である。24は截断面を1面もつ、細かな剥離の発達しないもので、表面は前後関係のはっきりしない面で構成される。

25・26は細長の削片状のものである(III類)。25は表裏面とも上下に潰れ状剥離がみられ、側面が折れ面と截断面となっている。26は表裏面ともに礫表が



第152図 楔形石器実測図1 (2 : 3)



第153図 楔形石器実測図 2 (2 : 3)

みられることから、板状の礫片が素材となっていると思われる。側面の剥離状態から削片とするにはやや躊躇されるが、上辺と下辺が平行せずに直行する形となっていることから削片としておく。

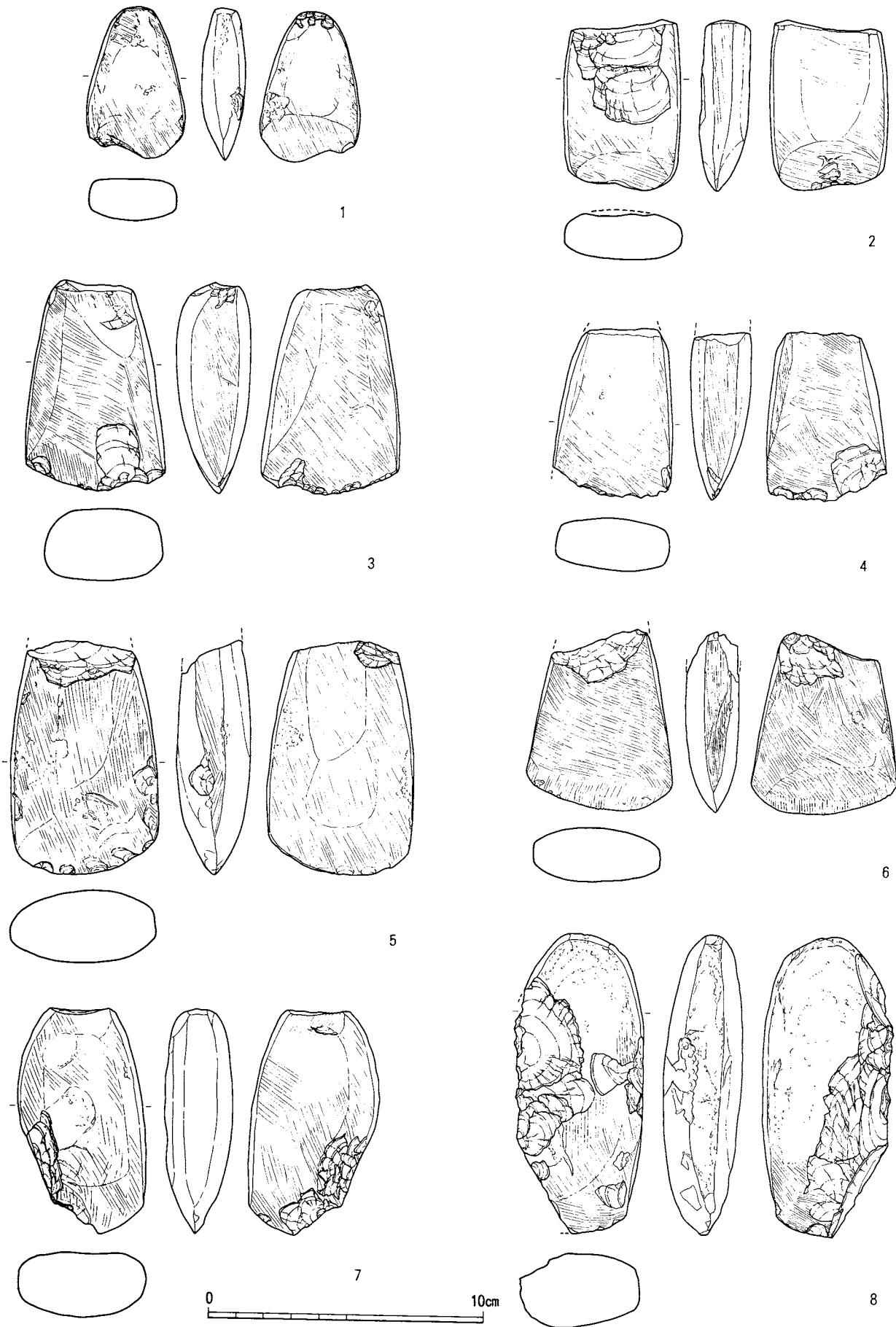
○ 磨製石斧（第154図1～第155図19）

25点が出土しており、その内2点が接合し、24個体となった。本器種は、一般にその形態と推定される用途から、伐採用斧の乳棒状石斧と加工用斧の定角石斧の二者に大別されるが、今回の調査では、前者は身部の破片の可能性をもつものがわずかに1点出土しているのみである。24個体のうち、完形品は1点もなく、ほぼ完形のものが2点あるのみで、大半が破損品である。小片を除いて器形を知り得るもの19点を図化した。小片としたものは、わずかに残る磨製石斧本来の器表から本器種と判断されるものである。大半が剥片として再利用されており、加工痕や使用痕の見られる転用品も含んでいる。また、図示した資料も、長幅比が2:1以下となる器長の短い資料ばかりである。こうした長幅比が近い資料は、使用による刃部破損と研磨・再生を繰り返した結果、着柄すると刃部が対象物に十分作用しない長さとなり、使用不能のために廃棄の対象となったと

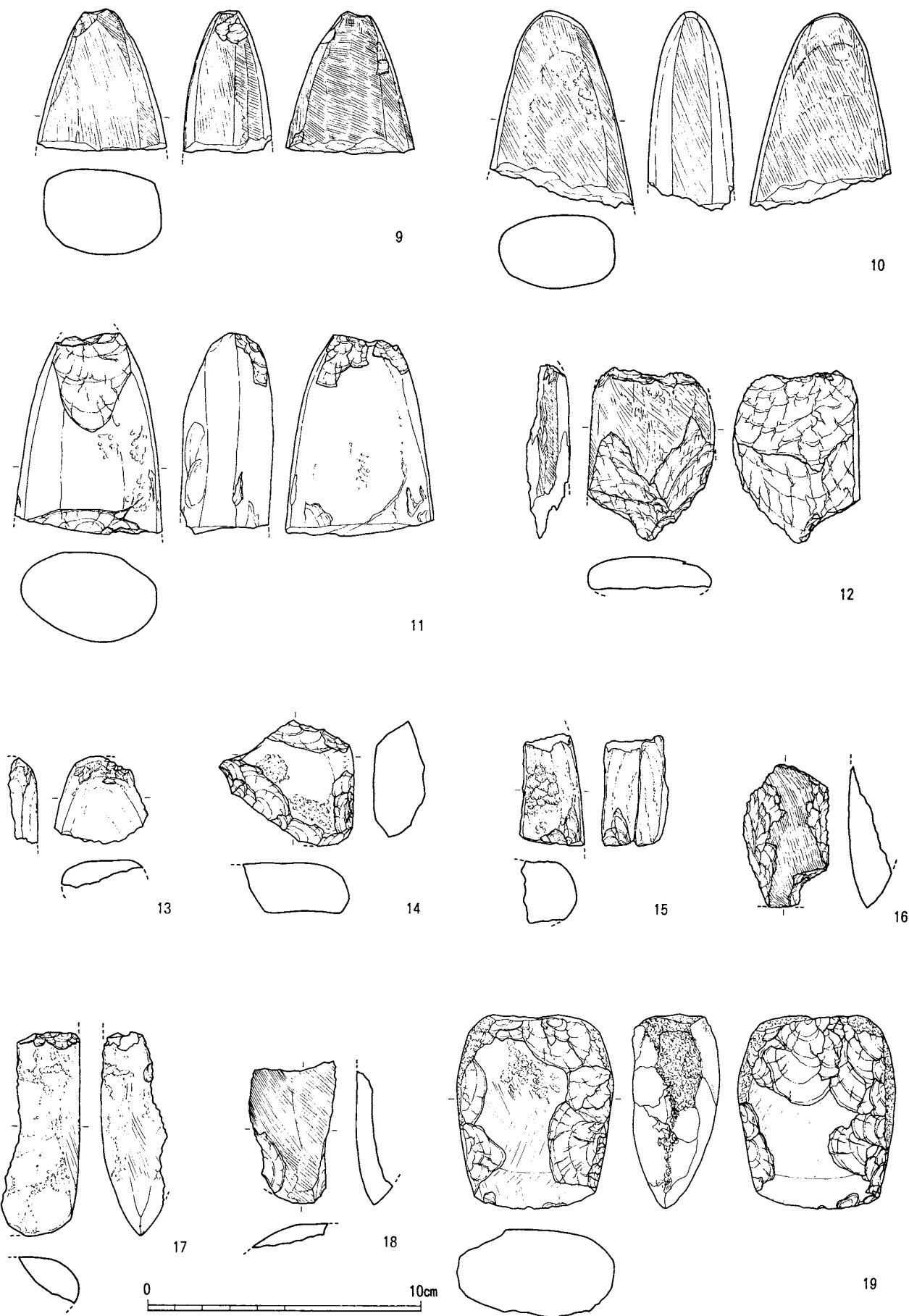
理解される。

定角石斧は、両側縁に面を有し、断面形が長方形ないしはそれに近い形態をなし、基部端に面をもつものを本器種とした。

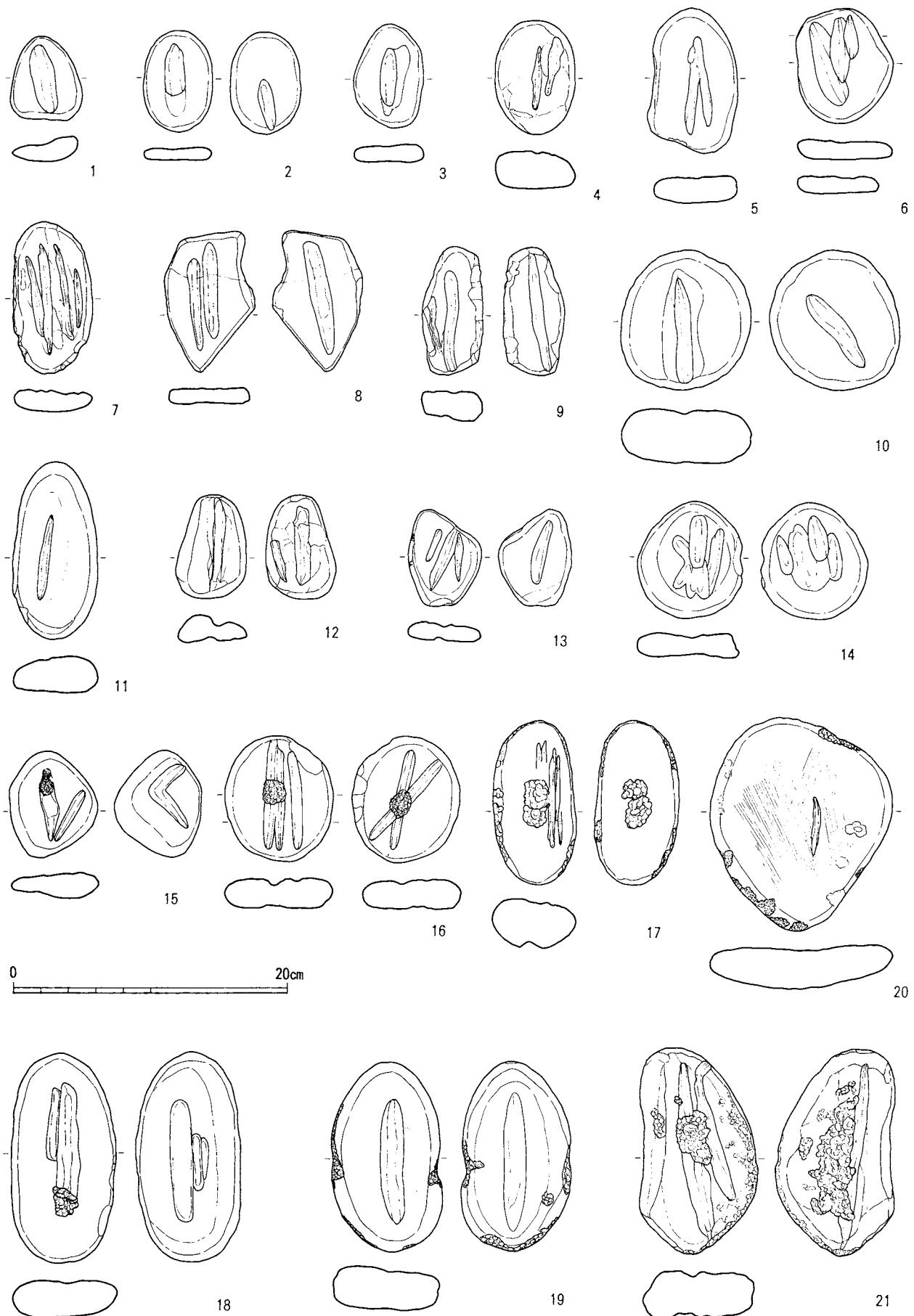
1は、唯一の小型例である。2～4は、整った形態をもった定角石斧である。3点とも基部側を約3分の1欠失している。全体に受熱による赤化が観察され、一部には黒変もみられる。5・6は、基部側約3分の1を欠く。全面に光沢をもつ。器表には、研磨痕と判断される線状痕が明瞭に観察される。7・8は、刃部破損後に剥離と研磨を加えて再生し、さらに使用した結果として刃部の著しい磨耗がみられる。さらにこの2点は楔として再利用されたらしく、刃部や側縁に残る剥離や敲打痕はその際のもので、特に8では顕著である。9～13は、基部の破片である。9は、刃部に向って開き、側縁に面をもつ定角石斧の典型的な基部である。10もよく研磨され、整った形態をもつ。11は、基部端に折損後の二次的な剥離が残る。13は小型品の基部である。14は、わずかに残る器表から本器種の体部と判断したものである。表面には、軽微な敲打痕が観察される。15は前述のように、側縁に面を形成しない唯一の例である。乳



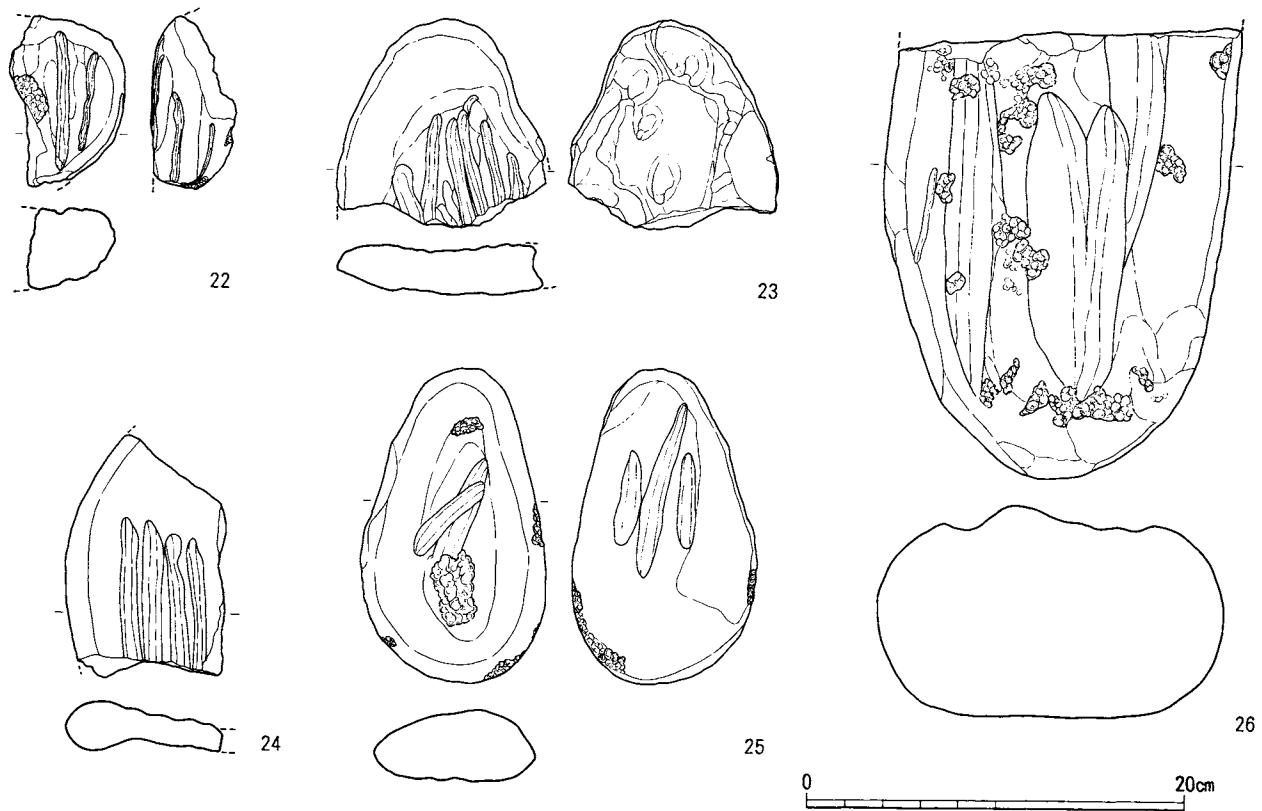
第154図 磨製石斧実測図 1 (1 : 2)



第155図 磨製石斧実測図 2 (1 : 2)



第156図 有溝砥石実測図1 (1 : 4)



第157図 有溝砥石実測図 2 (1 : 4)

棒状石斧の体部である可能性をもつ。ただし、片岩系の石材を用いていることから石棒類の破片であることも否定できない。16~18は、刃縁を一部に残す破片である。裏面はいずれも刃部側を打点とする剥離面となっている。17は、破片上縁には、さらに二次的な剥離が加えられている。19は、基端部の周辺と側縁に二次的な剥離と激しい敲打痕が観察されることから、楔もしくは槌石として転用されていたと考えられる。

p 有溝砥石 (第156図1~第158図27)

主として長さ15cm前後までの小型品と据え置いて用いたと考えられる大型品に分けられる。

小型品としたものは、大きく2類に分けた。I類としたものは、溝状の使用痕をもつもので、溝がやや幅広で浅いものと深いものがみられる。溝が両面にあるものをa類、片面のものをb類、面を為すものをc類、面と溝の両者がみられるものをd類とした。II類としたものは、細かい線状痕をもつもので、20がこの分類に相当する。また、15~20には溝状の機能部の他に敲打痕もみられるが、これは敲石の転用品である可能性と、砥石を用いる製作工程の中で

敲打を必要とする段階がある場合の両者が考えられるが、各個体の観察からは、前者である可能性が高いと考えられる。

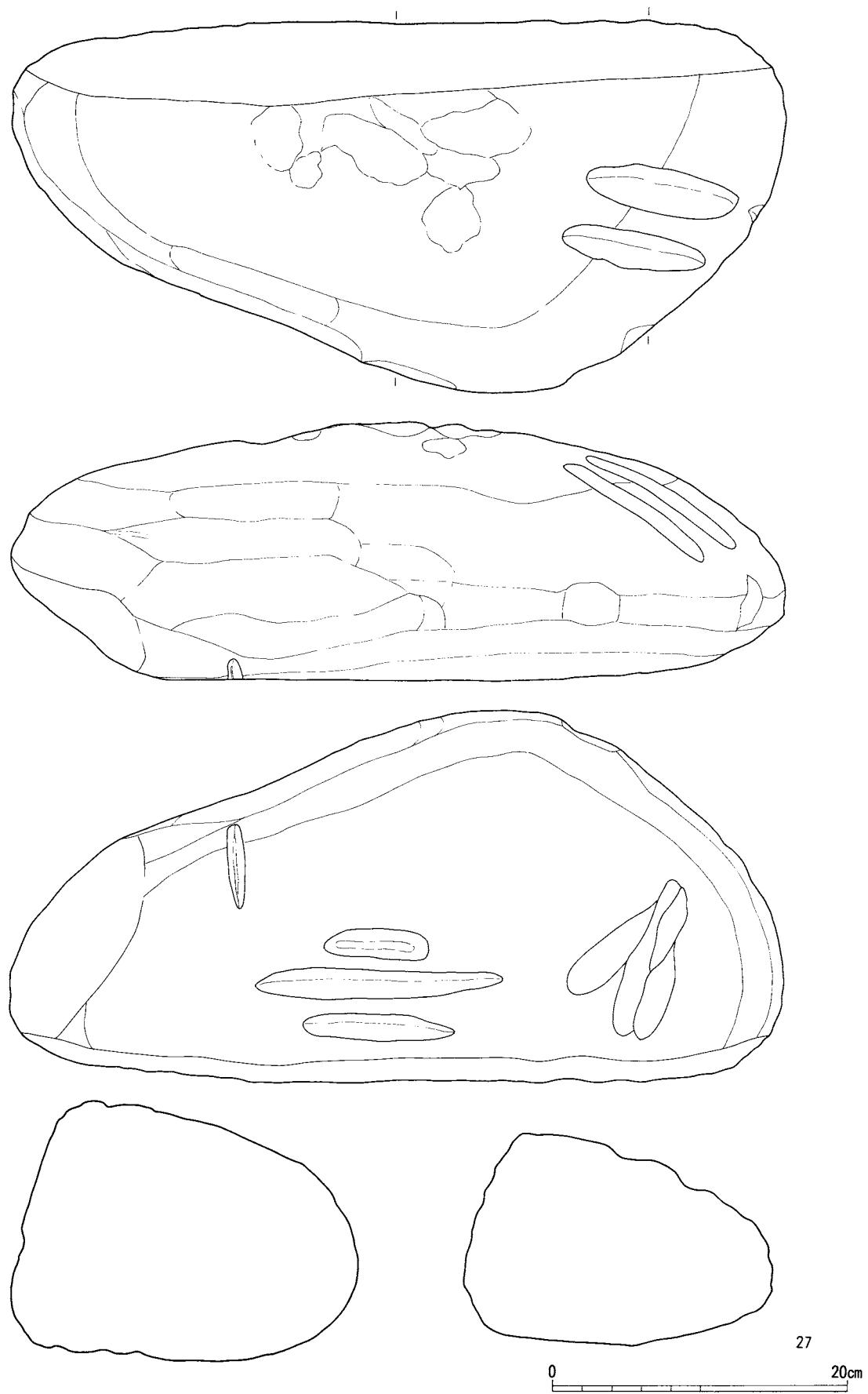
大型品は、1点を図示した(27)。約24.8kgを計り、明らかに据え置いて使用されたと考えられる。断面形は、隅丸三角形を呈し、そのうち2面に幅約2~3cmの溝が6条残されている。また、平坦面はそれぞれよく使用された砥面となっている。

q 砥石 (第159図1・2)

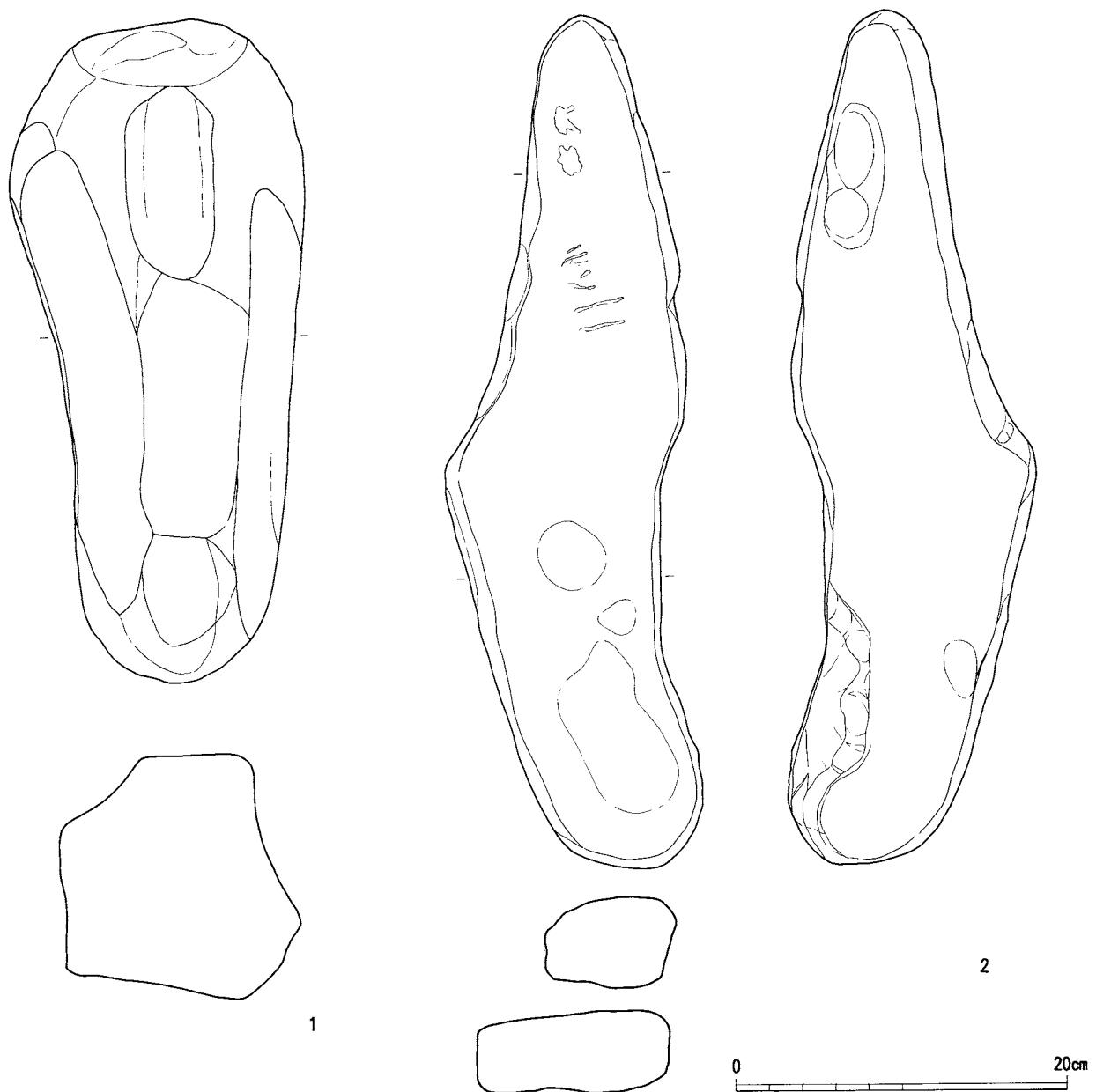
溝をもたない砥石は、11点のみ見られた。ここでは、大型品2点を図示した。1は、断面形では6面を機能部とする大型品で、磨面の性状から長期の使用が推定される。2は、細長い自然礫を素材とし、両面を砥面とする。一部に幅5mm前後の傷状の条痕が、断続的に6~7条みられる。

r 部分磨製石器 (第160図1・2)

円礫の一部を用いて、その一辺に研磨を施して刃部とする。1は半円形を呈し、一見「石庖丁」を思わせる形態をもつ。刃部は、両面からの研磨によって形成している。研磨面は極めて平滑である。刃縁の一部には剥離痕もみられる。2は、片面に敲打痕



第158図 有溝砥石実測図 3 (1 : 4)



第159図 砥石実測図 (1 : 4)

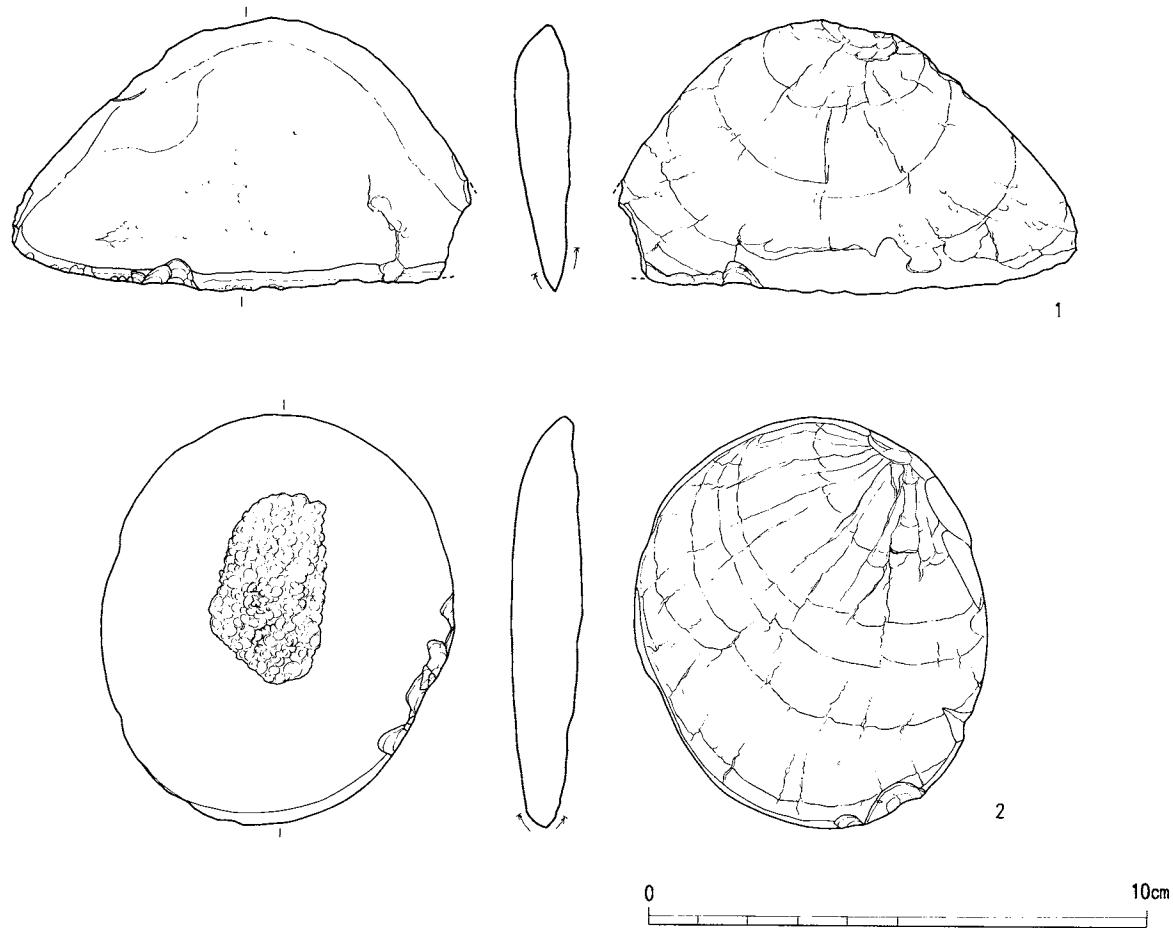
が残ることから、敲石から剥離した剥片を用いてい
ると考えられる。刃部と推定した部分は、やはり研
磨によって形成されるが、刃部角が90度前後である
ことから、1とは異なる機能をもつものであろうか。

s 軽石製石器 (第161図1～第162図13)

小型品と大型品に分けられる。小型品は、さらに
有孔品もしくは未貫通孔をもつものと全体を整形し、
穿孔はみられないものの二者に区分される。10点を
図示した。有孔品は3点ある。1～3は縦長の形態
をもち、いずれも下縁の一部を欠く。未貫通孔をも
つものは3点ある。4は縦長品の上下端を欠くもの。

5は横長の形態をもつ。6は、鶏卵状の器形を呈し、
長軸の中間付近に4カ所の未貫通孔を形成している。
7～10は、器形を研磨によって作出するもので、有
孔品の破片も含むと考えられる。

大型品としたものは3点ある。11は両面、12は片
面にロウト状の凹みをもち、敲石として使用された
可能性も考えられる。しかし、製粉具としては不適
切な石材とも考えられ、別の加工工具として機能して
いた可能性もある。13は、厚手品の破片である。
この他に、一部に整形した面をもつ小片が、約10点
ある。



第160図 部分磨製石器実測図（2：3）

t 磔器（第162図1）

6点ある。1点のみ図示した。剥片を素材とする。板状剥片の周縁のにほぼ3分の2の範囲に粗い二次加工をもつもので、打製石斧の未成品とも考えられる。粘板岩製。他は、砂岩製楕円礫の一端に粗い剥離によって刃部を形成する一般的な形態をもつものである。

u 赤色顔料付着石器（第163図1～9）

赤色顔料が器表に付着している遺物は、土器では前述のようにかなり多量に認められるが、石器では9点にとどまっている。これらはすべて敲石・磨石であり、装飾として赤色顔料が塗布されたのではなく、顔料の精製用具として用いられたものである。なお、これらと対応する下石となる石皿は、今回の調査では出土していないが、本調査区の南側で嬉野町教育委員会が行った調査では、良好な付着がみられる石皿の完形品が1点出土している。なお、赤色顔料の分析は、蛍光X線分析とX線回析を実施した。

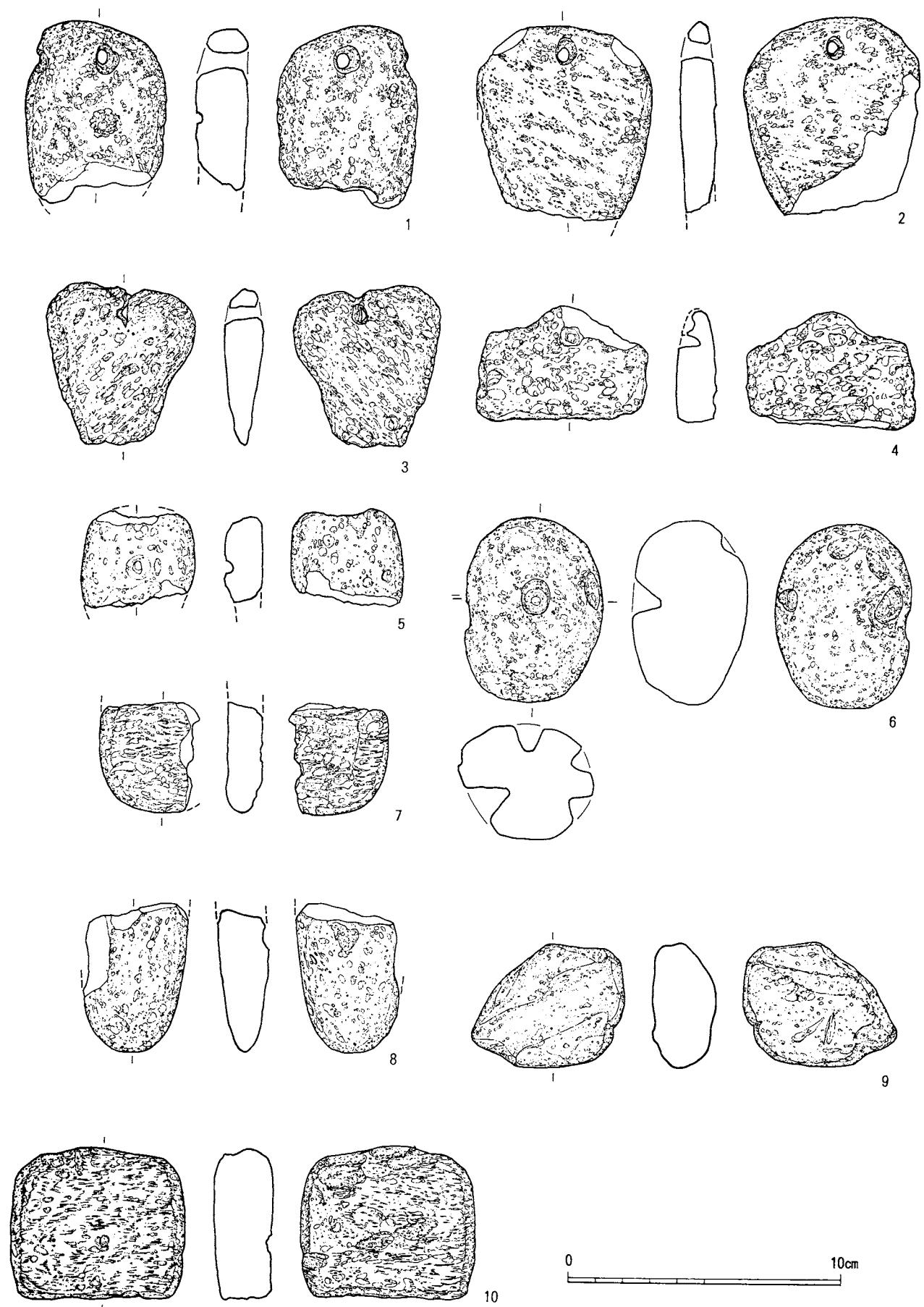
次に個々の資料をみていこう。

1は、小型扁平で周縁からの加撃痕のみられる自然礫を素材とする。その一部に淡い赤色顔料の付着がみられる。分析では水銀が検出されなかつたため、水銀朱ではなく酸化鉄（ベンガラ）である可能性が考えられる。肉眼でも鮮やかな朱色ではなく、褐色に見えることから、区別できる。

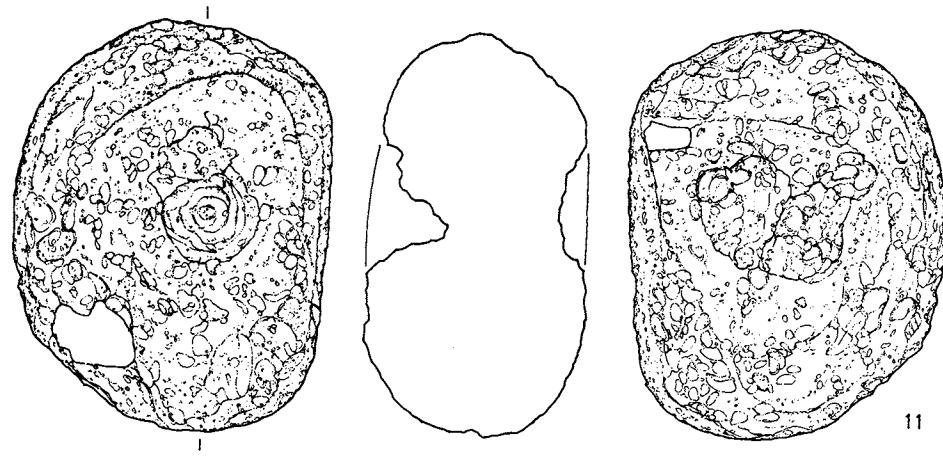
2は整った形態をもつ磨石の一側縁に鮮やかな水銀朱の付着が面的に認められる。

3は細粒砂岩を用いた敲石の一部に水銀朱の付着が残存している。敲打痕はコツコツとした細かいもので凹みは形成しない。それ以外の面は極めて平滑な磨面となっている。これら使用痕全体が水銀朱の精製の際に形成されたものか、堅果類の加工に用いられたものが転用されたのかは判断し得ないが、赤色顔料付着の状況からその精製に関わっていることは間違いないといえよう。

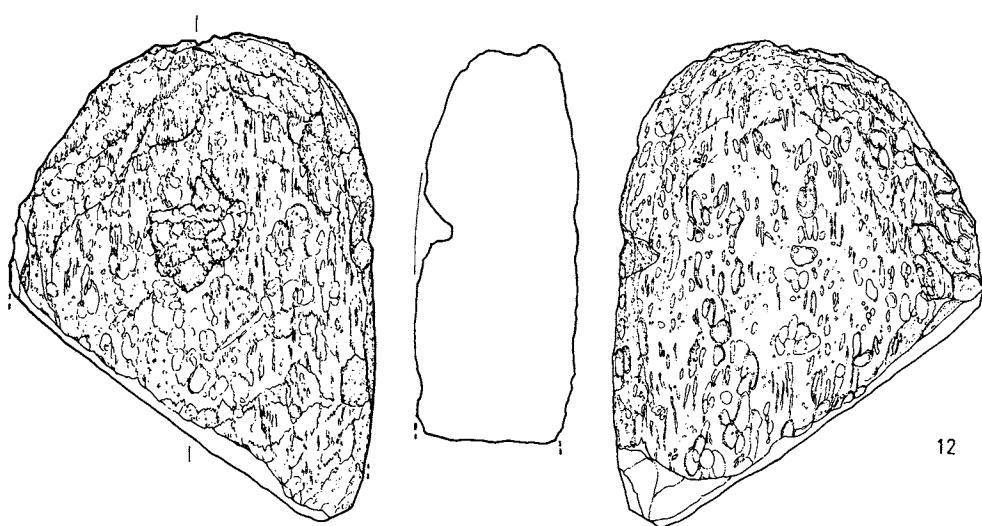
4は、断面形がほぼ正円形となる厚手の花崗岩製



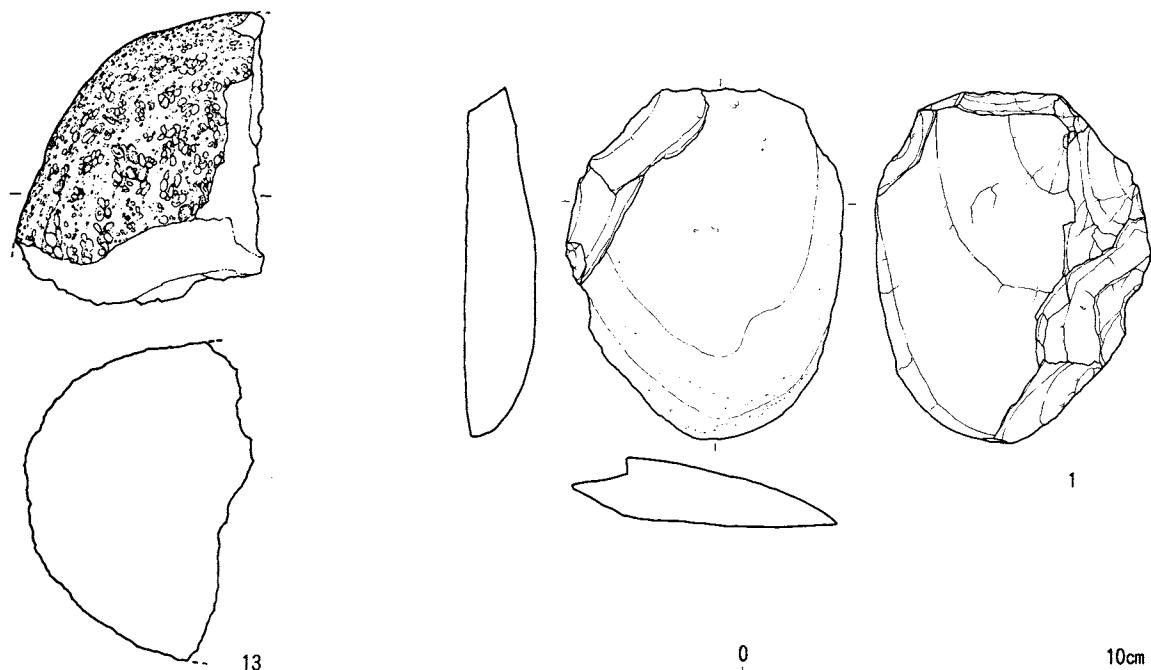
第161図 軽石製石器実測図 1 (1 : 2)



11



12

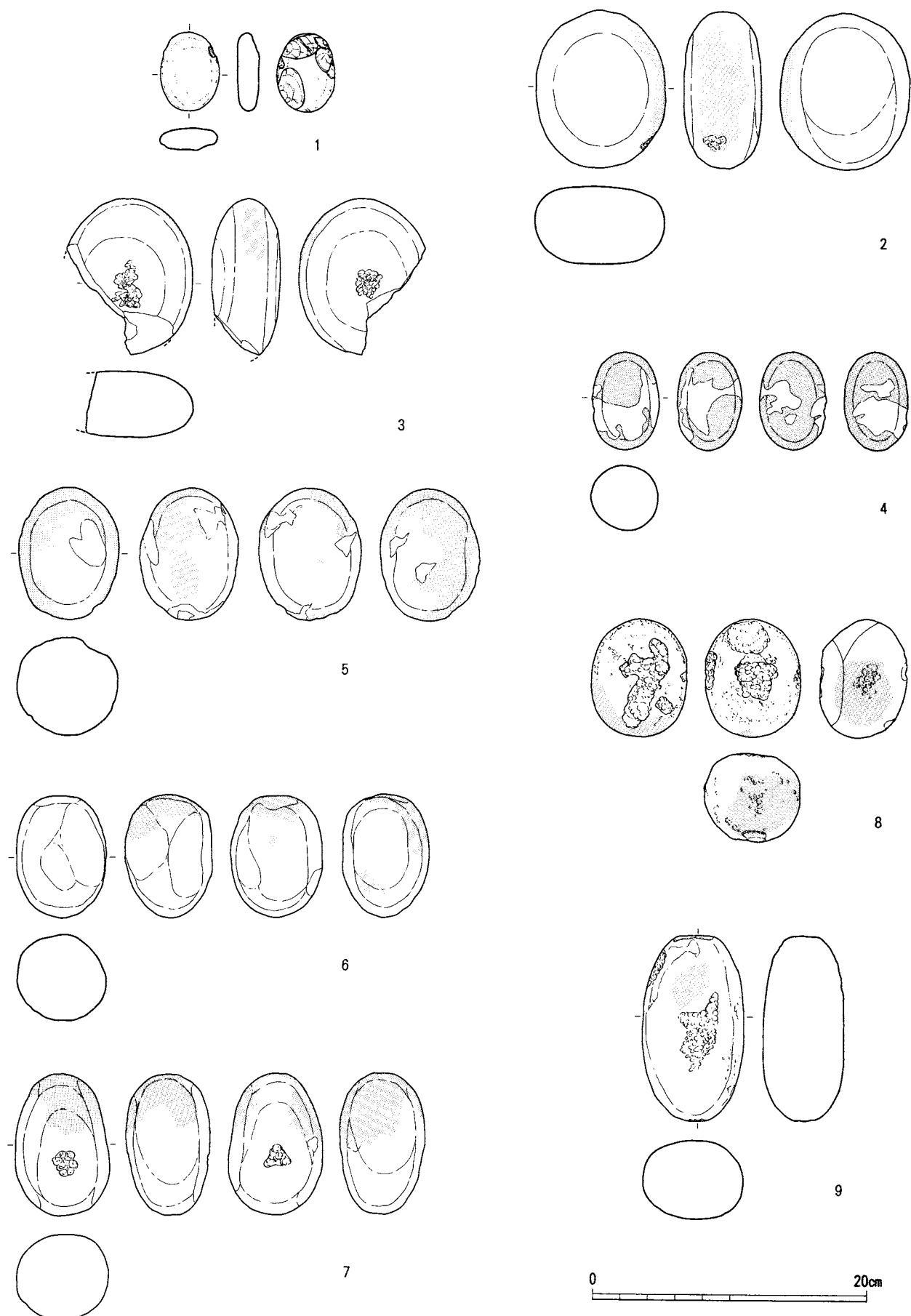


1

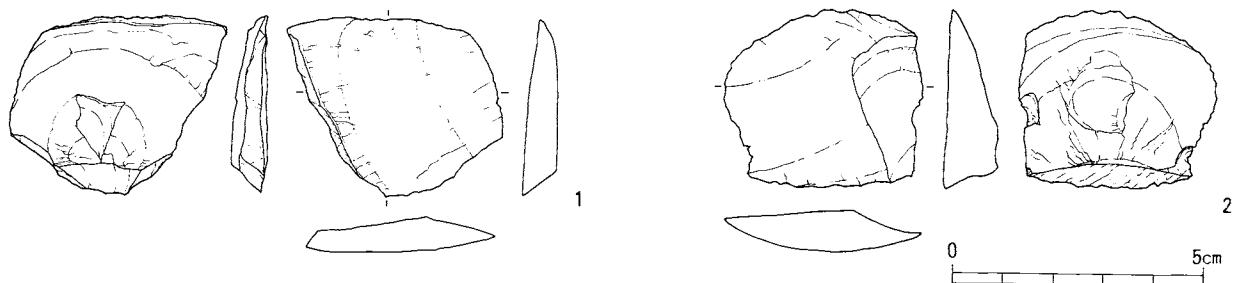
13

0 10cm

第162図 軽石製石器実測図 2 (1 : 2)、礫器実測図 (1 : 2)



第163図 赤色顔料付着石器実測図 (1 : 4)



第164図 剥片実測図（2：3）

楕円礫を用いている。赤色顔料は、全面に付着が見られるにも関わらず、分析では1と同様に水銀が検出されず、酸化鉄（ベンガラ）とほぼ断定されている。肉眼でも全体に褐色を呈しており、水銀朱とは明らかに峻別される。なお、図の白抜き部分は器表の剥落を示すが、一部には敲打痕様の部分も見られる。

5・6も磨石の表面に水銀朱の付着が残る。花崗岩製のため器表に剥落が見られるが、一部には敲打痕様の部分も見られることから敲石とすべきかもしれない。

7・8は、敲石の表面に水銀朱の付着が見られるもので、7は特に朱色が鮮やかである。

9は、長楕円形の自然礫を用いた敲石である。敲打痕は、器表中央の表裏と両端、側縁の一部に見られる。両端は面を為すが、器体中央のものは凹みを形成しない。赤色顔料は片面のごく一部に点々と見られ、図に示したトーンの範囲全面に付着しているわけではない。分析では、水銀が検出されていないことから、酸化鉄であるとも考えられるが、肉眼では鮮やかな朱色を呈しており、水銀が検出されなかつたのは付着が微量であったことが原因する可能性が高い。

v 二次加工痕有剥片

加工痕を残すものの、定型的な石器として認定するには躊躇するものを一括して本器種とした。したがって、本器種には削器・石錐・楔形石器やそれらの未成品を含んでいる可能性がある。ここでは図示していないが、サヌカイト394点、下呂石13点、貞岩5点、石英22点、砂岩2点の合計436点出土している。

w 使用痕有剥片

剥片の縁辺に使用によって生じたと思われる刃こぼれ状の微小剥離痕を残すものを本器種とした。合

計で918点出土している。石材別にはサヌカイト812点、下呂石55点、貞岩20点、石英27点、砂岩2点、チャート2点となる。

本器種の認定作業は他の加工を施す器種を肉眼観察していくなかで得られた経験的知見に依拠する部分も多く、観念的な作業ともいえる。したがって、使用で生じた微小剥離痕は剥片剥離時に生じた微小剥離痕、廃棄・遺棄された際の、あるいは廃棄・遺棄後の土中で生じた微小剥離痕などとは分離し得えず、ここでいう使用痕は現実には他の要因によって生じた、使用痕以外の微小剥離痕を含んでいることになる。

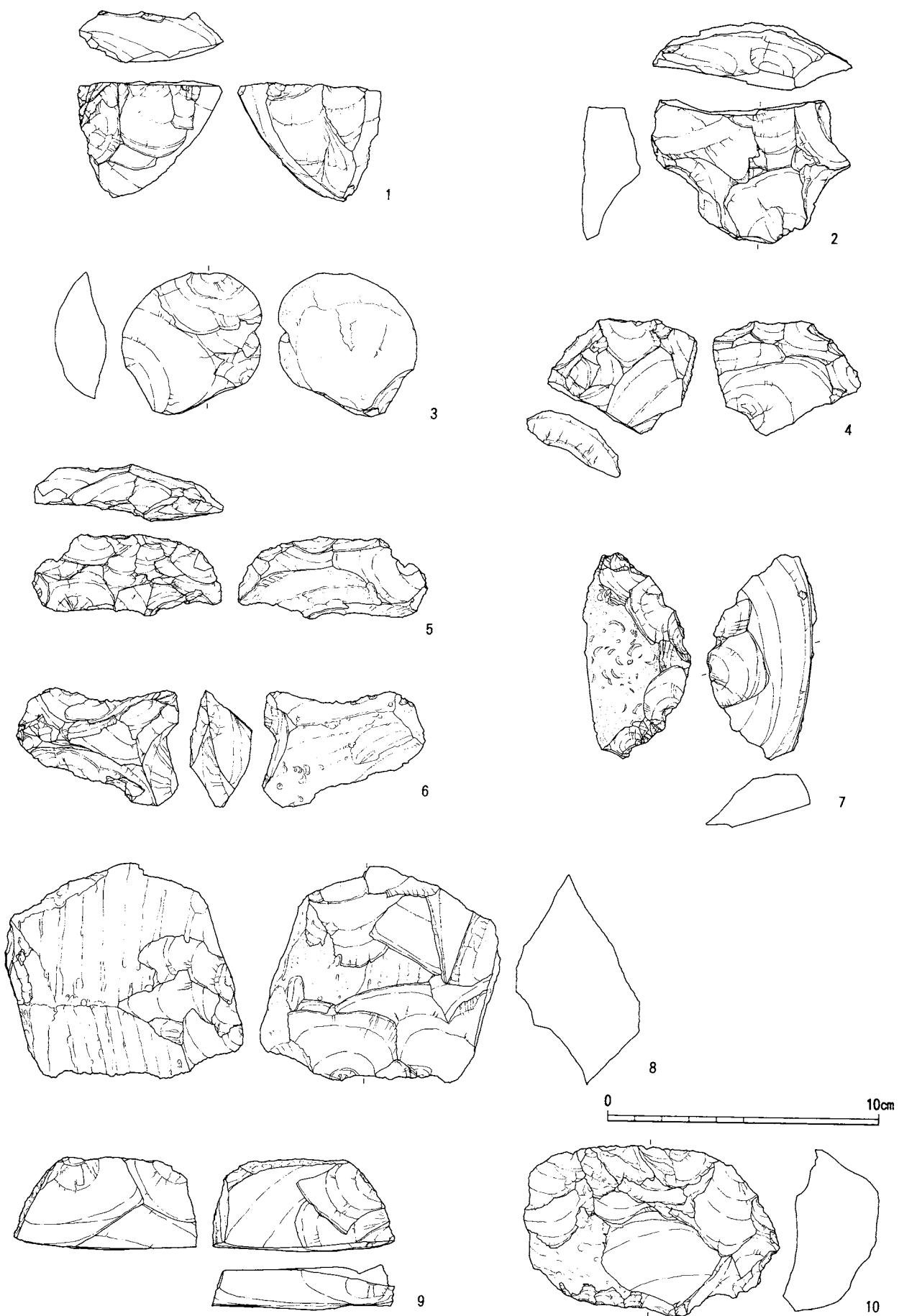
x 剥片・碎片（第164図1・2）

狭義の石器を作る目的で剥離された石片、加工せずそのまま使用する目的で剥離された石片、調整、加工の際に必然的に生じる石片、剥離にともない副次的、偶発的に生じる石片などが該当する。合計13,496点出土している。その石材別の内訳は、サヌカイト13199点、下呂石91点、チャート10点、貞岩56点、石英135点、片岩4点、砂岩1点となる。一般的には1cm以上・未満、あるいは2cm以上・未満というふうに任意の点を設け、剥片と碎片を分離していたが、ここでは両者を一括して扱った。ただし、文中で特に剥片と表記する場合は2cm以上の石片を指している。

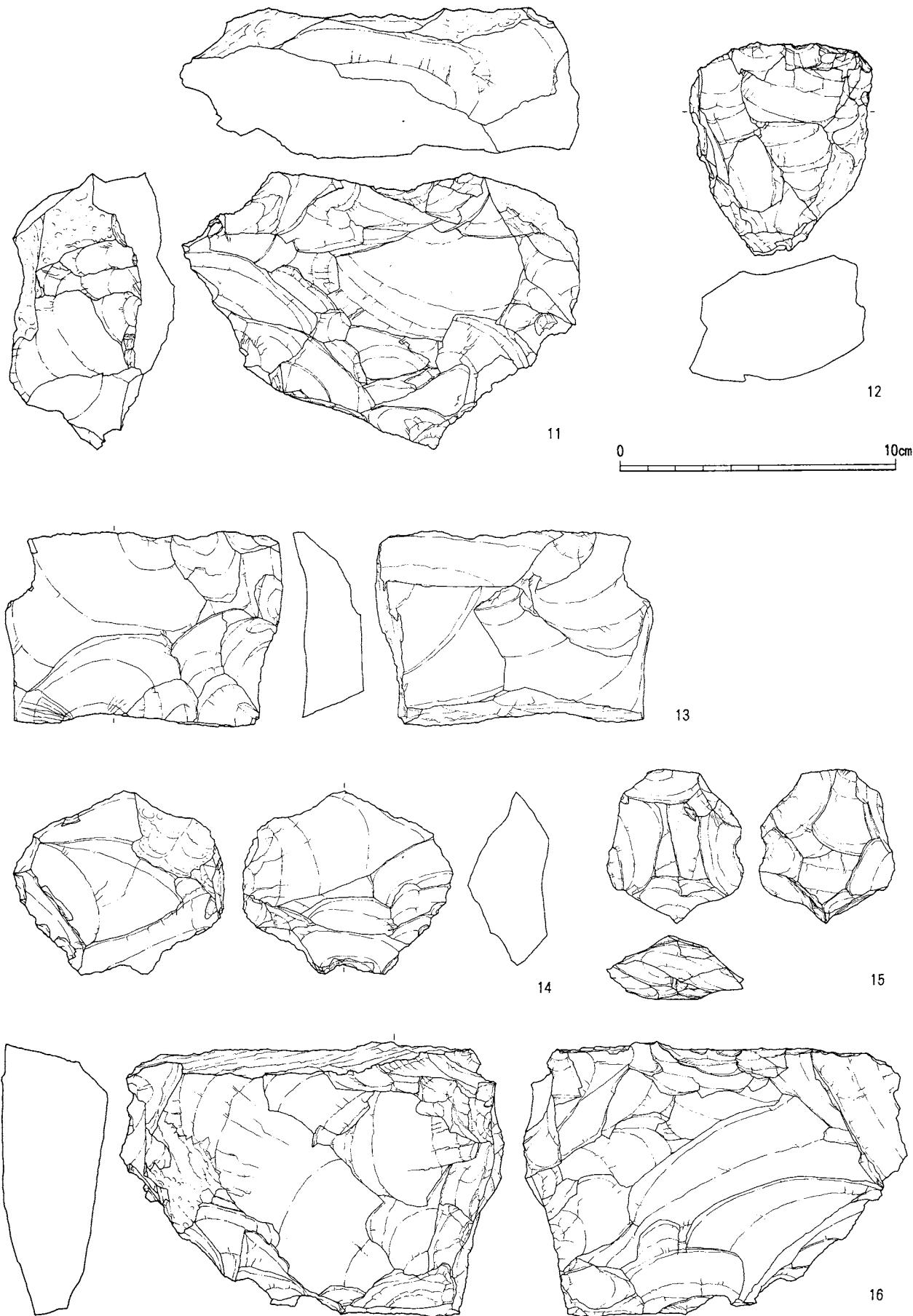
1・2は剥片の全体の傾向を代表するものではなく、逆にごく少数の例である。ともにノミ状石器の素材となり得るサヌカイト製の剥片で、正方形形状を呈し、背腹両面のなかでも安定した面が合わさってできる鋭い縁辺が特徴である。

y 石核（第165図1～第166図16）

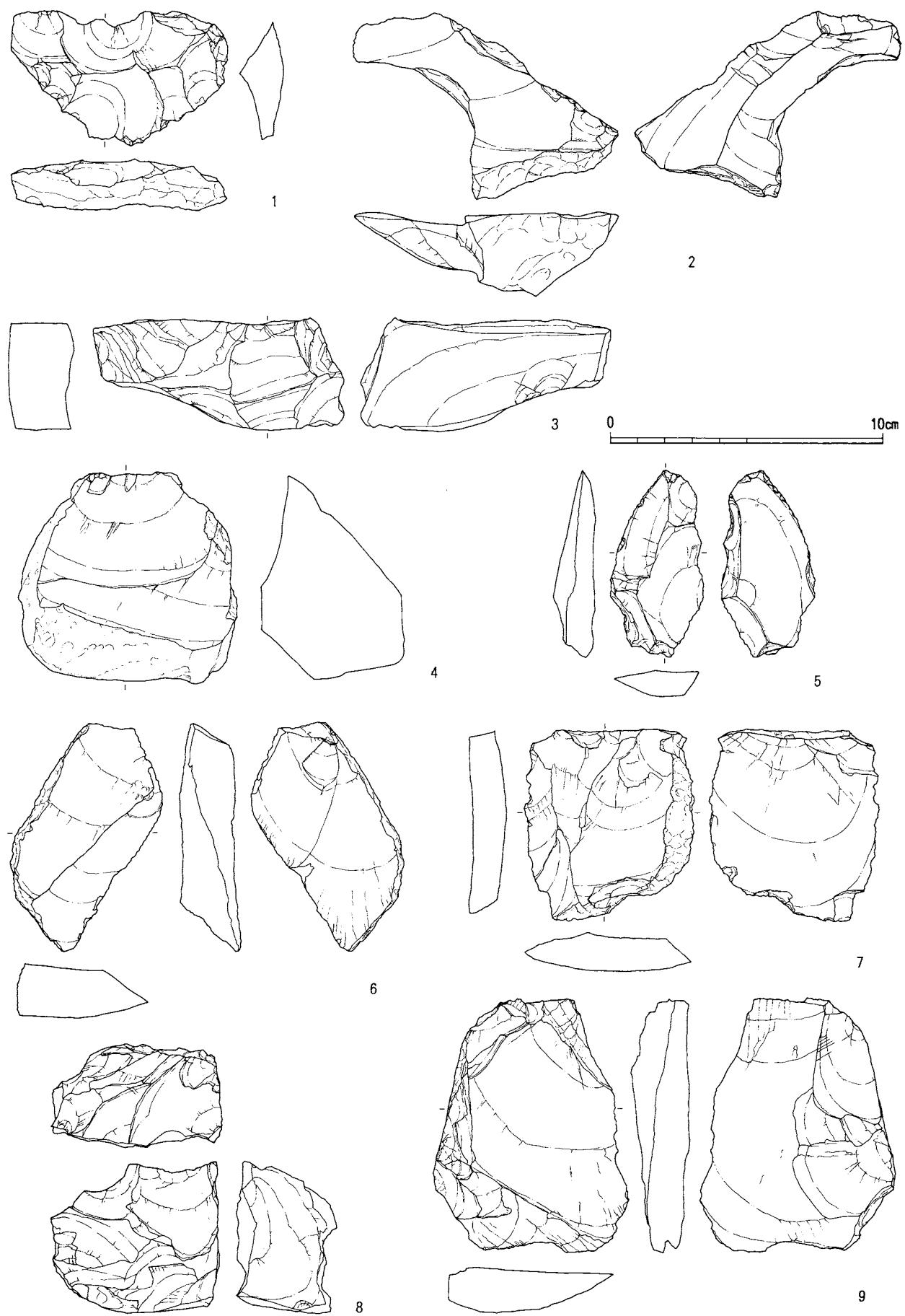
石器の素材となる剥片を剥離した痕跡をとどめるものを石核とした。石核には礫塊あるいは分割礫を



第165図 石核実測図 1 (1 : 2)



第166図 石核実測図2 (1 : 2)



第167図 石器素材実測図 (1 : 2)

素材とするものと大型あるいは小型の剥片を素材とするものがある。石材別にはサヌカイト973点、下呂石6点、チャート1点、石英34点、頁岩24点で合計1,038点となる。

1は正面観が三角形状を呈し、表面は左・上方向から、裏面は上方向から数枚の剥離作業を行う。打面は単打面である。2は裏面が礫表に覆われており、表面のみが剥離作業面となっている。剥離は全周から行われているが、下半部の剥離は上半部の剥離より後になされている。

3は礫頂部分と思われる小型の剥片を素材とし、腹面側で剥離作業が行われている。4は表裏面ともほぼ全周から剥離作業が行われる。表面左側の縁辺にかかる剥離面は風化度が強い古い面である。5は長方形状を呈するもので、主として表面の上下の長辺から剥離がなされる。裏面の上辺には打面調整らしき5枚の剥離面が残る。

6は裏面が礫表に覆われたいびつな長方形状を呈するものである。表面の剥離作業は主に上下の長辺からのもので、剥離痕の末端が階段状になり、中央部が盛り上がった面となる。7は背面が礫表の横長剥片を素材とし、背面側打面縁に沿って剥離がなされ、そこを打面として腹面側から2枚剥離される。そのうちの大きい方の1枚はノミ状石器の素材になり得ると考えられる剥片である。

8は拳大の礫塊を素材とするもので、主として表面を剥離作業面とする。9は側面の一部に礫表をとどめる板状の剥片を素材とするもので古く半折している。表面で2枚以上、裏面で3枚以上の剥離が行われ、その剥離痕から幅広～横長剥片が取られていることが分かる。10は正面観が橢円形状を呈する原

礫を素材とし、表面の長辺の上下から剥離作業がなされる。上辺からの剥離はかなりひっかかりの多いものとなっている。

11は手のひら程の大きさがあり、表面はほぼ全周から剥離作業が行われ、裏面は一部である。12は表面の一部と裏面が礫表であることから拳大の礫塊が素材であると思われる。剥離作業は表面のみで、上・左方向から行われている。打面は風化度の強い古い剥離面と数枚の剥離面で構成される。13は大型で板状を呈するもので、剥離作業は主として表面の上下方向からなされる。裏面の左半分は風化度の強い古い剥離面である。

14は表面下半部の右方向からの剥離面以外は風化度の強い古い剥離面で構成される。15は表裏面とも求心状に剥離作業がなされるものである。16も11同様にかなり大型で表裏面とも各方向から剥離作業が行われ、大小様々な剥片が取られている。

z 素材（第167図1～9）

石器素材（石核素材）となる石材である。サヌカイト90点、頁岩2点、石英72点、チャート1点、片岩1点、黒曜石1点の計167点である。通常、原礫や分割礫が供される場合が多いが、本遺跡では1～9のような全面が風化度の強い剥離面で覆われた古い時代（時期）のものと思われる素材（石器）が持ち込まれている。

本来、1・3・4・8・9は石核、5は二次加工痕有剥片、2・6・7は剥片である。特に注目されるのは5で、背面に横長剥片を剥離した面をとどめ、いわゆる底面がポジティブ面ではないものの、打面部が山形に調整されるなど翼状剥片に似る。

（大下明・久保勝正）

〔註〕

- ① a 斎藤基生「下呂石一飛騨・木曾川水系における軽石のあり方」（『愛知女子短期大学研究紀要』第26号、愛知女子短期大学、1993年）。
b 斎藤基生「下呂石の移動」（『愛知女子短期大学研究紀要』第27号、愛知女子短期大学、1994年）。
- ② 大下明「尾鷲市曾根遺跡」（『紀伊半島の文化史的研究 考古学編』関西大学文学部考古学研究室、1992年）

- ③ この資料については、実測図が公表済み（森川幸雄「西日本屈指の配石遺構一天白遺跡の調査－『月刊文化財』9、文化庁文化財保護部、1993年）であるが、背面の剥離面1枚の剥離方向を誤認していたため、訂正している。

(5) 石製品

A 概要

石製品とした資料は、岩偶・岩版13点、線刻礫10点、石棒63点・石刀4点・石剣7点、独鉛状石製品2点、球状石製品1点、小玉2点、垂飾1点、有孔円形石製品1点、小型鉢形石製品1点と豊富な内容・点数をもった資料が出土している。

B 分布

石製品の分布も石器と同様に粗密が見られる。器種ごとの特定の分布傾向を窺うことはできない。比較的まとまりが見られる部分としては、調査区の北西隅に相当するC・D列の2～4区で、石棒10点・石剣1点・岩偶3点・線刻礫2点が出土している。

さらに、石棒が3点以上出土しているグリッドとして、上記の他にE2区で4点、K10区で3点がそれぞれ出土している。岩偶は、上記以外では点々と出土しており、1グリッドから2点以上が出土した例は全くない。

また、遠距離で接合する資料が、岩偶や石棒・石刀・石剣でみられることは注意される。もちろん本遺跡内に廃棄されてから以後の移動も考えなければならないが、これらの受熱破碎資料は、他の場所で火に関わる何らかの精神活動に使用され受熱で破碎してから以後にこの場で廃棄された場合と、この遺跡内で火に関わる何らかの行為に使用された後に廃棄された場合の両者が推定される。ただ、遠距離接合資料が一定数存在することから、遺跡内の行為の後に点々とばらまかれたとするよりは、前者の場合の他所からバラバラに搬入され、廃棄されたと理解するほうが出土状況が解釈しやすいとも考えられる。

C 形態記述

a 岩偶・岩版（第168図1～第169図12）

岩偶もしくは岩版とした資料は13点が出土し、うち2点が接合して12個体となった。人体を表現した岩偶として確定するには、頭髪や顔面の各部分、四肢、乳房、腹部やへそ、正中線、生殖器、あるいは衣服などの確実な表現があることが条件となる。しかし、本遺跡出土資料は、いずれも必ずしも写実的な表現とはならず、かえって抽象的な表現を探るものが多い。また、土偶の加飾表現との共通性なども

勘案して、本器種に含む資料を選定した。従って、線刻礫や砥石とした資料には、本器種との境界的な例も含まれる。

石材は、全て砂岩製で、肌理の細かくやや軟質の砂岩を選択して利用している可能性が考えられる。全体に共通する形態的特徴として、平面形が橢円形を呈する扁平な自然礫を縦位に用いることがある。

各資料は、加飾の多い面を正面（前面）、他方を背面として図示した。また、上下はすべて仮に判断したもので、逆の可能性もある。

加飾の要素としては、次の4種がある。

A－側縁の切り込み

B－刻線（沈線）

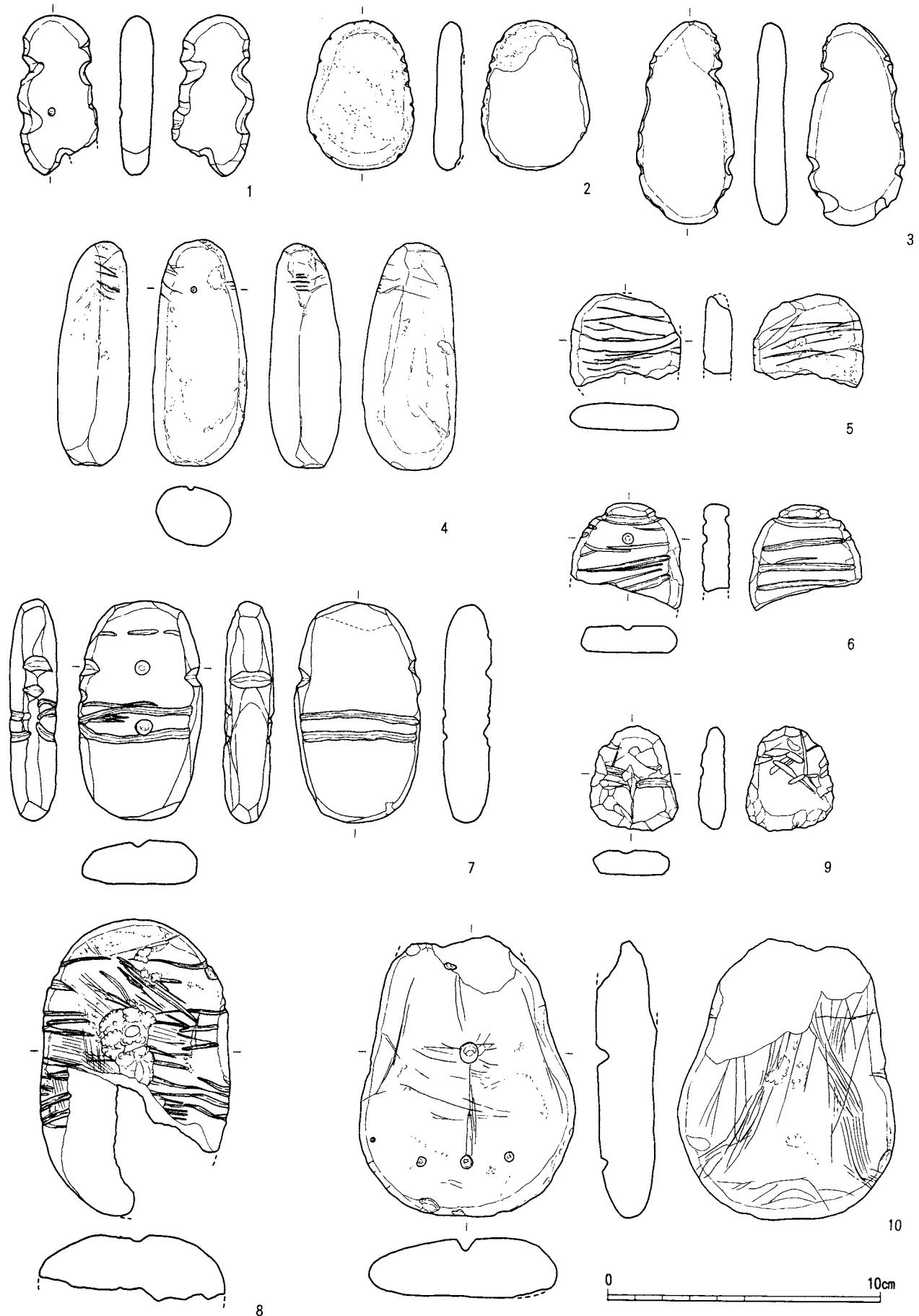
C－条線

D－未貫通孔

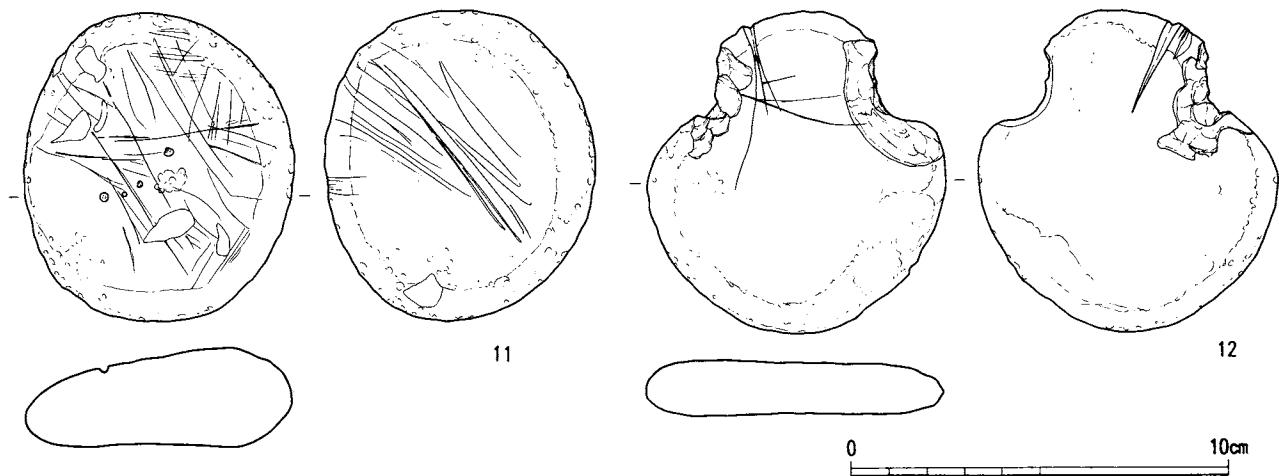
Aは、耳、手や首・腰などの体躯のくびれを表現している可能性をもつもの、Bは顔面や胸などの体表の表現とやはり首・腰などのくびれの表現も含むと考えられる。Cは、抽象的な表現や単なる擦痕である場合と髪の毛や衣服を表現した可能性が考えられる。

両側縁に切り込みを加えたものは、1～3の3点である。

1は、下端の一部を欠くがほぼ全形を知り得る。切り込みの他の加飾要素として、前面に未貫通孔1つがみられる。切り込みは左右がややすれるものもあるが、4ないし5対によって構成される。人体の表現として理解するならば、1番上は「耳」、やや大きな2番目は「首」、3・4ないし5番目までは「手」と「腰」を表すものと推定される。切り込みの位置関係からみると、正面の未貫通孔は「へそ」を表したものか。頭部に相当する部分には、顔面を思わせる表現は一切ないが、上縁の丸みは、頭部を意識しているとも考えられる。さらに図示した上下方向が本来のあり方を示すものとすれば、下部の切り込みは「股」を表現したものと考えられ、今回岩偶とした資料のなかで脚部を表現した唯一の例として注意される。2・3は、両側縁に切り込みのみを加えたものである。2は、整った卵形の平面形をもつ扁平礫を素材とする。周囲に12カ所の切り込みをもつ



第168図 岩偶・岩版実測図1 (1 : 2)



第169図 岩偶、岩版実測図2 (1 : 2)

が、必ずしも左右対称には施されていない。切り込みは、他の2例に比して浅い。本資料の特徴は、全面が鮮やかな紅色を呈するほど強く受熱していることで、片面の過半を覆う剥落もそれを原因としている。3は、全周で14カ所の切り込みが施される。平面形は左右非対称となっている。切り込みも左右が必ずしも対応しないが、器体下部では大きな切り込み2組がほぼ左右対応して形成されており、下半身の表現を意図した可能性もある。4は、棒状の橢円礫を素材とする。下端がわずかに剥落する。側縁の切り込みは浅く、線状となっている。一端に偏ってみられる未貫通孔は「口」を表現したものとも考えられる。

5は、6と線刻礫との中間的な様相をもつものである。素材の形状は6に近似し、表裏両面に横方向の刻線を多条に施す点も同様だが、刻線の太さは線状痕に近く断続的である。なお、図示した方向は上下逆の可能性もある。

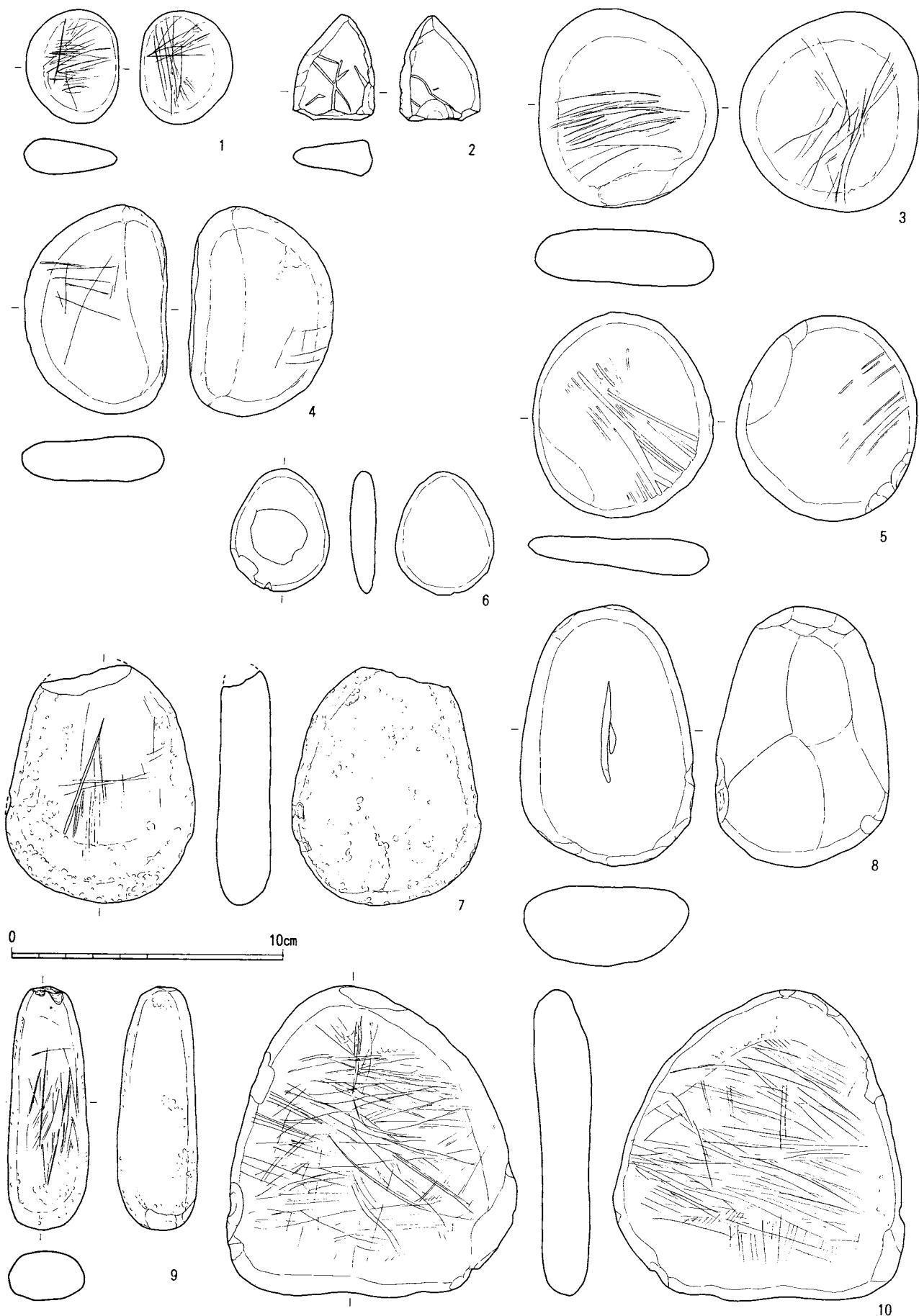
6は、下半約2分の1を欠失し、本来は整った小判形の平面形をもつものと推定される。周縁には面が形成される。厚さもほぼ1cmと均等に整えられている。表裏両面に横方向の刻線を断続的なものも含めて多条に施す。特に上端から1本目のものは他に比して太く形成され、端部を突出させるのは頭部を意識したものか。未貫通孔は「口」を表現したものか。右側面には未貫通孔のほぼ真横に2カ所の切り込みがみられる。

7は、今回出土したもののうち最も整った形態を

もつ完形品で、A・B・Dの3つの加飾要素をもつ唯一の例である。周縁も全周が整形されており、意図的な面取りがなされたように研磨が施されている。隅丸長方形で扁平な形態は、岩版と呼ぶべき資料かもしれない。加飾要素を検討してみると、未貫通孔・刻線・切り込みの3者をもつ。未貫通孔は、正面の2カ所にみられる。上端から上の未貫通孔までと未貫通孔間の長さはほぼ等しい。図示した上下が正しいとすれば、上のものは「口」、下のものは「へそ」もしくは「生殖器」を表現するものと考えられよう。凹線は、基本的には正面に3本、背面に2本が施される。表面の3本のうち、一番上のものは幅約2mmと他の2本よりもやや細く、3つに断続して表現されている。器体中央やや下の2本は、幅約3mmを測る。概ね平行して、表裏の同じ位置に施される。但し、表面の2本のうち上のものは、右側に3本の短い斜め方向のものが重なっており、この3本は施溝時に失敗したものと推定される。側縁の切り込みは、本体右側縁では2カ所、反対側では1カ所と左右対称ではない。右側が2カ所となるのは正面の刻線の乱れとの関わりがあるとも考えられる。

8は、C3区とF5区出土の2点が遠距離接合している。破損面は強い受熱により生じた破碎面で、器面全体もに強い赤化がみられる。加飾は短軸にはほぼ平行した横方向の刻線が多条に施される。受熱による剥落のため明瞭ではないが、器体中央には未貫通孔が1カ所あったようにもみえる。

9は、小型で不整三角形の礫片を素材とする。刻



第170図 線刻礁実測図 (1 : 2)

線は擦り切りではなく傷状のものが大半で、岩偶とするには疑問がもたれたが、中央には未貫通孔状の加飾もみられることから本器種とした。

10は、上部の約5分の1を欠失するが、現存長で10.2mmを測る大型品である。中央部がやや凹み、下半が膨らむ洋梨形の平面形をもつ。未貫通孔は、5カ所が施され、他に上部の破損面に痕跡が1カ所残っている。全体の平面形と加飾要素の構成から判断して、人間を表現した可能性が高いと推定されるものである。表面の長軸方向にみられる刻線は正中線、その下部の孔は「口」・「へそ」のいずれかを表現したものか。背面は、細かい線状痕のみで構成され、上部中央から下部へ向かって「ハの字状」に広がる。この「ハの字状」の条線は髪の毛を表現したもののように見える。左側縁のわずかにくびれる部分には、弱いながらも切り込みがみられる。

11は、線刻礫との中間的形態をもつ。素材の形態や大きさ、線状痕の性状は線刻礫とした資料とまったく同様の状態を示す。しかし、片面には4カ所の未貫通孔が並んで形成されることから、岩偶に含めた。12は、本器種としたなかでは特異な形態をもつものである。上半に偏って左右に打欠きを加え、分銅形の形態を作出する。さらに打欠きの間に両面から切目を加えている。表面側の切目周辺には数本の線状痕がみられる。分銅形の形態が人体の表現を意図したものと判断し、本器種とした。

b 線刻礫 (第170図1~10)

線刻礫とした資料は10点ある。岩偶との分類境界が不明瞭だが、線刻が明確な凹線状を為さず、細かい線状痕となり、さらに線状痕が一定の単位・方向性をもたず面上に付されるものを本器種として独立させた。一部は砥石である可能性も考えられる。全て岩偶とほぼ同様の砂岩を用いる。

1は、小型の楕円礫を素材とし、表裏に密集する線状痕をもつ。縦横に交差するが図柄を描くような意図は窺えない。2は、受熱した石片を使用しやや太い刻線が見られる。3も、表裏に密集する線状痕がみられる。3・4は、いずれも長径7cmほどの扁平礫を用い、表裏に線状痕がみられる。4はやや散漫である。5もほぼ同様のものである。6は、小型薄手の楕円礫を素材とし、その片面に幅1mm以下の

細い線で不整円形を線刻する。下端には切目状の加工が1カ所みられる。7は卵形の平面形をもつ楕円礫を素材とし一端を欠く。線状痕は一面の中央に密集する縦方向のものが残され、数本の短軸方向のものがこれに交差する。岩偶との中間的なものといえようか。8は、片面中央に長軸方向の線状痕が1本のみ見られる。9は、縦長・厚手の礫を素材とし、片面の中央に縦方向の密集する線状痕が残る。素材の形状は、岩偶の4に近い。10は、隅丸三角形の扁平な礫を用い、その両面に密集する線状痕が観察される。線状痕には縦横に交差する部分もあるが、何等かの図像として読み取れる部分は見られない。周縁には、浅い打欠きが4ヶ所にみられるが、意図的なものとは判断できない。

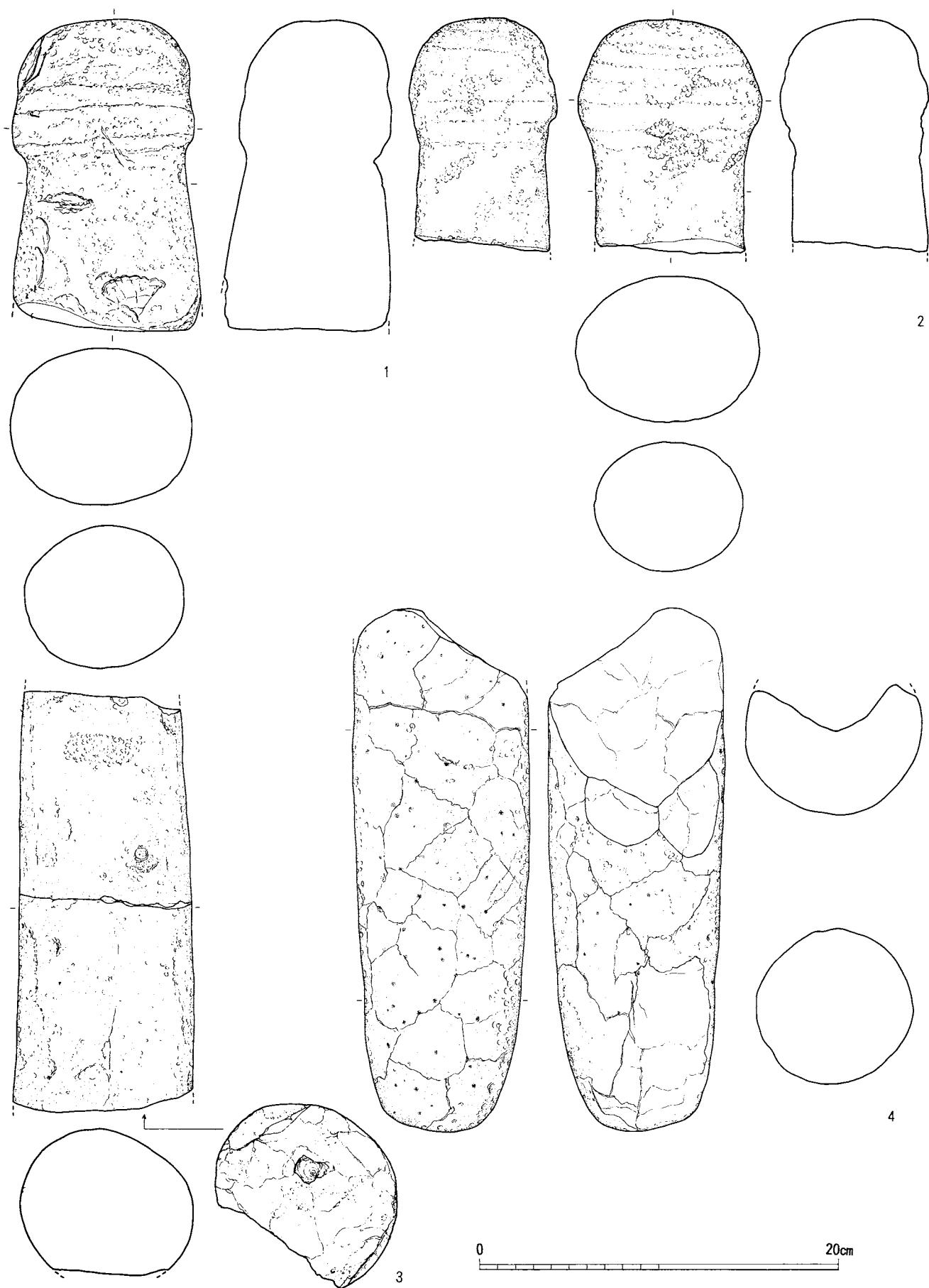
c 石棒 (第171図1~第172図12・17~第173図20・22~24・27~31)

石棒とした資料は、棒状の形態をもつ石製品のうち断面形がほぼ正円形をなすものをここに含めた。但し、片岩製の資料に関しては、素材礫の本来の断面形を勘案して、楕円形のものでも刃部の形成が不明瞭なものは石刀・石剣とせず、本器種とした。接合例は、2点のものが10例、4点が接合しているものが2例の合計12例ある。

小片も含めて64点を本器種としたが、その形状から大型品と小型品に大別される。大型品としたものは、一般に全長50cm~1m前後、直径10cm前後を測るものである。素材には柱状節理の産状を呈する火成岩や肌理の粗い堆積岩で、角柱状や不整円形の断面形をもつ素材礫を用いる。製作技術は、まず稜上に剥離を加えて、断面形をほぼ円形になるように整え、敲打によって概形を作出した後に研磨を施して仕上げるものである。本遺跡では完形品は出土しておらず、器形を知り得る破損品4点と、他に身部小片が2点ある。石材は大半が砂岩で、2のみが流紋岩質溶結凝灰岩を素材としている。

1・2は頭部のみの破片である。3分の1以上を欠失しており、本来の全長は50cm以上を測る大型品であろう。一端のみに頭部を作出した单頭で、基部は4のような形態を示すと推定される。頭部は2段に作出される。2段目はやや扁平となっている。

1は、全体に受熱による弱い変色が見られるとと



第171図 石棒、石刀、石剣実測図 1 (1 : 4)

もに、表面は全体に摩滅が著しい。特に破損面も稜が完全に摩滅している点は注意される。

2は、現存長16.3cmを測り、本来の約3分の1が残存していると推定される。笠部2段目のすぐ下の表裏ともほぼ同様の位置に、敲打痕の集中が残る。これは、完形時に付いたものではなく、折損後に形成されたと考えられる。

3は、器体中央部の破片である。全体に受熱し、図化していないが、背面の一部が“火はね”により剥落している。変色も著しく、黒色や淡い朱色に全面が覆われている。図下面とした破損面のほぼ中央には、図示したように凹部が1カ所形成される。また、本資料は2点が接合しており、それぞれD4区とN11区から出土しており、調査区のほぼ北端と南端に位置し、最大で約50m離れた遠距離接合である。図下面是凹部が1つみられる。

4は、2分の1弱を残す大型品の基部の破片である。頭部には、本来1や2のような形状を示すものが付くと推定される。破損面は、すべて受熱による破碎面によって形成されている。表面も全体に強い被熱により全面が桃色や灰色に変色し、粉を吹いたような脆弱な状態となっている。さらに、激しいひび割れ（クラック）が網の目状に観察されることから、本資料が受熱していることが明瞭にわかる。破損面も器表からの加撃による剥離面ではなく、器体内部から弾けるように破碎した面となっている。なお、表面の凹凸は、受熱しているにも関わらず少ないことから、本来は丁寧な研磨が施されていたと推定されよう。

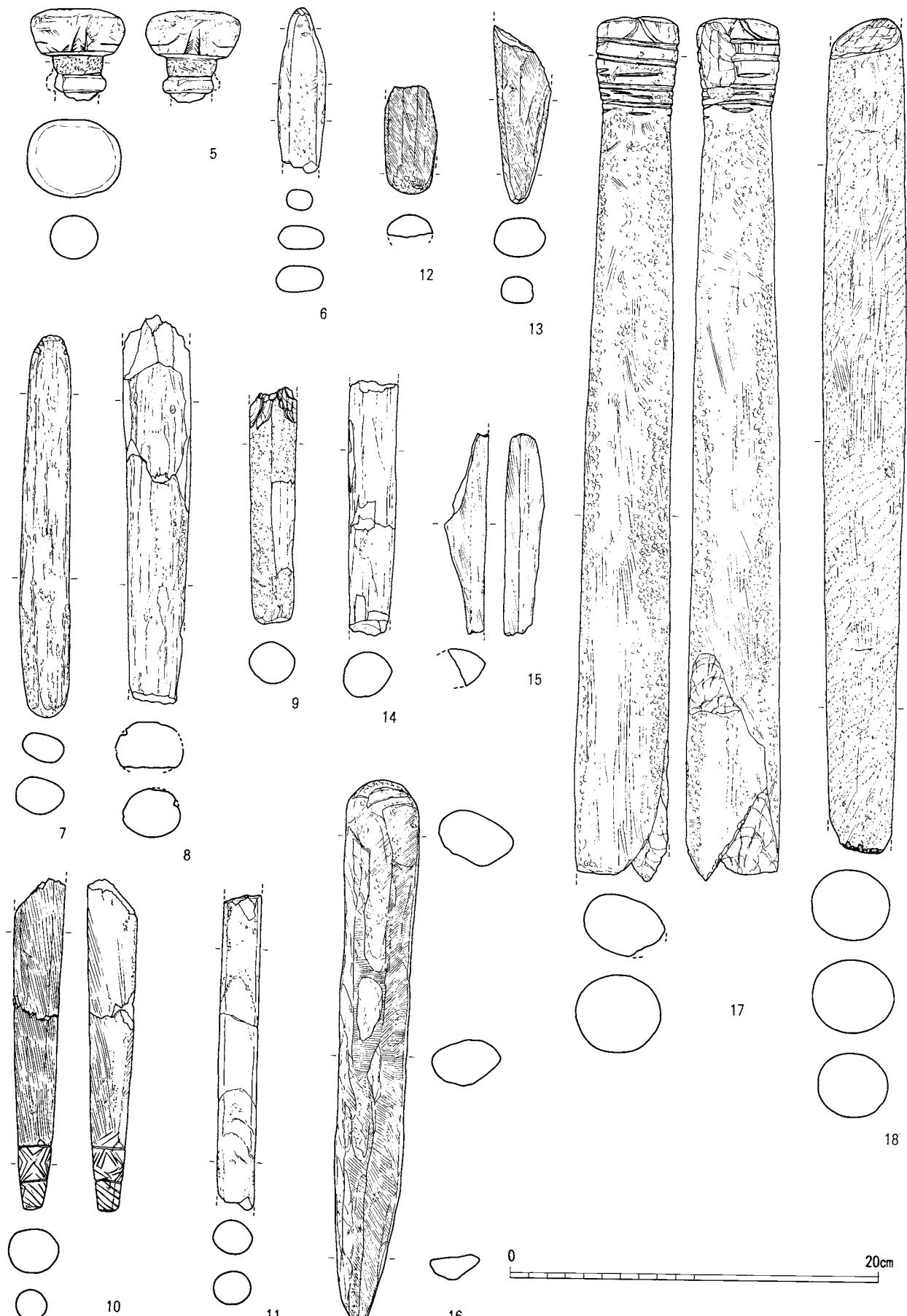
同様に受熱により破碎した大型石棒の一部と判断される小片が、B4区とF3区で各1点出土している。これら小片は、自然の礫片と区別しにくいことから、発掘時に残念ながら遺物として認定されなかつた可能性もあり、本来は、さらに多くの点数が存在したものと理解される。

小型品としたものは、用途・機能からみれば石刀・石剣と一群として捉えられるものと理解される。手に握ることができる5cm前後の直徑をもつものが多い。石材別では、緻密な石材を用い、頭部もしくは基部に彫刻紋を施す精巧な一群と片岩製の資料が含まれる。片岩製で端部に加飾を施さない一群は、本

遺跡周辺の他時代の遺跡でも一般的に出土することの多いもので、加工品か否かの峻別がしがたく、一部には自然礫を含む可能性があるが、意図的に本遺跡内に持ち込まれ、他の遺物と共に廃棄されたことは間違いないことから、代表的なものを記述の対象とした。

5は、加飾をもった頭部の破片である。上に広がる逆円錐台形の頭部をもち、その下に鍔部を付す。他の類例では、線刻による2対の工字文によって区画を形成し、区画内に瘤を付ける例が多いが、本例には瘤はみられない。また、区画も上縁がなく不十分なものとなっている。区画を形成する縦方向の条線間には、綾杉状の擦痕が観察される。鍔部に加飾はみられず、無文である。頭部及び鍔部には丁寧な研磨が施されるが、その中間部には整形時の敲打の痕跡が残っている。他の類例をみると、基部にも頭部とほぼ同様の加飾を施し、それぞれが剣の柄頭と鞘尻を表現していると推定されている。6は、素材の自然礫自体の形状をほとんど変えていないが、一端に不規則な面取り状の加工がみられることから本器種とした。7は、やや緑味を帯びた片岩質の石材を用いる。一端に2対の短沈線を施し、頭部を作出している。8は、下半部の破片でIオ・Iカ・Nウの各区出土の3片が接合している。

9~11はいずれも長径が3cm前後の細身品である。9は基部片で、表面には整形時の敲打痕が、研磨痕の下に残る。10は、線刻をもつ石棒の基部である。基端に二本の刻線を巡らし、その間に斜位の刻線を用い、上段には矩形あるいはX字形を意図した文様を形成する。下段は右下がりの斜方向のみで充填する。11は上下端を欠く器体中央部の破片である。受熱している。全面に丁寧な研磨が施される。12は、丁寧な研磨の施された基部端の破片である。黒色の片岩を用い、端部を丸く作る。17は、下部を折損するが、復元長は50cmを越えると推定される。最大径4.9cmを測り、頭部はやや膨らませて整形し、頭部端に向かうに従ってわずかに広がる平面形をもつ。頭部の加飾は刻線によってなされる。幅約3mmの全周するものを4本巡らし、その間に上端には、「ハ」の字状の短線を施し、2本目以下は、各全周刻線の間に短線を付加している。4本目の下にも短線を付加



第172図 石棒、石刀、石剣実測図 2 (1 : 4)

する。頭部の一部は剥落している。18は、17と同じような石棒の中間部と考えられる。器表の全体に整形時の敲打痕と研磨痕が明瞭に残る。上下の折損面は著しく摩滅しており、破損後も使用が継続していたことを示していると理解される。19・20は、いずれも頭部を作出しない。すべて結晶片岩製であり、研磨による線状痕など加工されていない棒状礫の可能性もある。22は、細身の小型品である。一見いわゆる「石銛」を想起させるが、先端部の形成が不明瞭なことと周辺地域で同器種が一般的でないことから、ここでは石棒と理解した。23は、細身品の下半部である。24は、よく研磨された器表をもつ。約3分の2を欠損する。敲打痕が広く形成されることは注意される。27~29の3点も片岩製の破損品である。特に28は、器表が丁寧に研磨されており、扁平な断面形をもつことから石剣との中間的なものともいえよう。29は器表の整形がほとんど為されていない。30は、大型品で、橢円形の断面をもつ。結晶片岩を素材とする。全面に丁寧な研磨が施される。頭部の形成は見られない。一部に黒変が認められるが、強い受熱の形跡は全体には観察されない。4片が接合し、最大で約10m離れて接合している。31も片岩製の大型品で約2分の1を残す。器表には、整形時の敲打痕が多く残る。

d 石刀（第172図14~16、第173図26）

4点出土した。「刀」の最大の特徴である、刃部を一方の縁辺のみに形成した、楔形の断面形を明瞭に示すものは少ない。明瞭な刃部を作出したものは、14と15の2点のみである。14は、黒色の千枚岩を素材とし、不明瞭ながらも、稜を形成し、刃部を作出していると理解される。15は、緑白色の片岩を素材とし、明瞭な刃部を研磨によって形成する。現存する断面を観察すると半折した凸レンズ状を為し、石剣の破片のようにも観察される。しかし、断面が石剣の一般的な類例に比して分厚いことと、明瞭な鎧を形成しないことから石刀とした。16は、緑泥片岩を素材とし、刃部は明瞭には作出されないが、全体の形状から石刀とした。表面には研磨痕が明瞭に観察されるが、一部には整形前の節理面も残存している。26は、全長54cm以上を測る長大な完形品である。片岩を素材としている。この資料も明瞭な刃部をも

たないが、全体の性状から本器種とした。

e 石剣（第172図13、第173図21・25）

3点を図示した。断面形には明確に両側縁に刃部を作出する凸レンズ形もしくは菱形を呈するものと両側縁が刃部とならず扁平な橢円形を為すものがある。後者は、小型石棒との中間的形態として考えられよう。3点はいずれも積極的に本器種とし得るものではない。

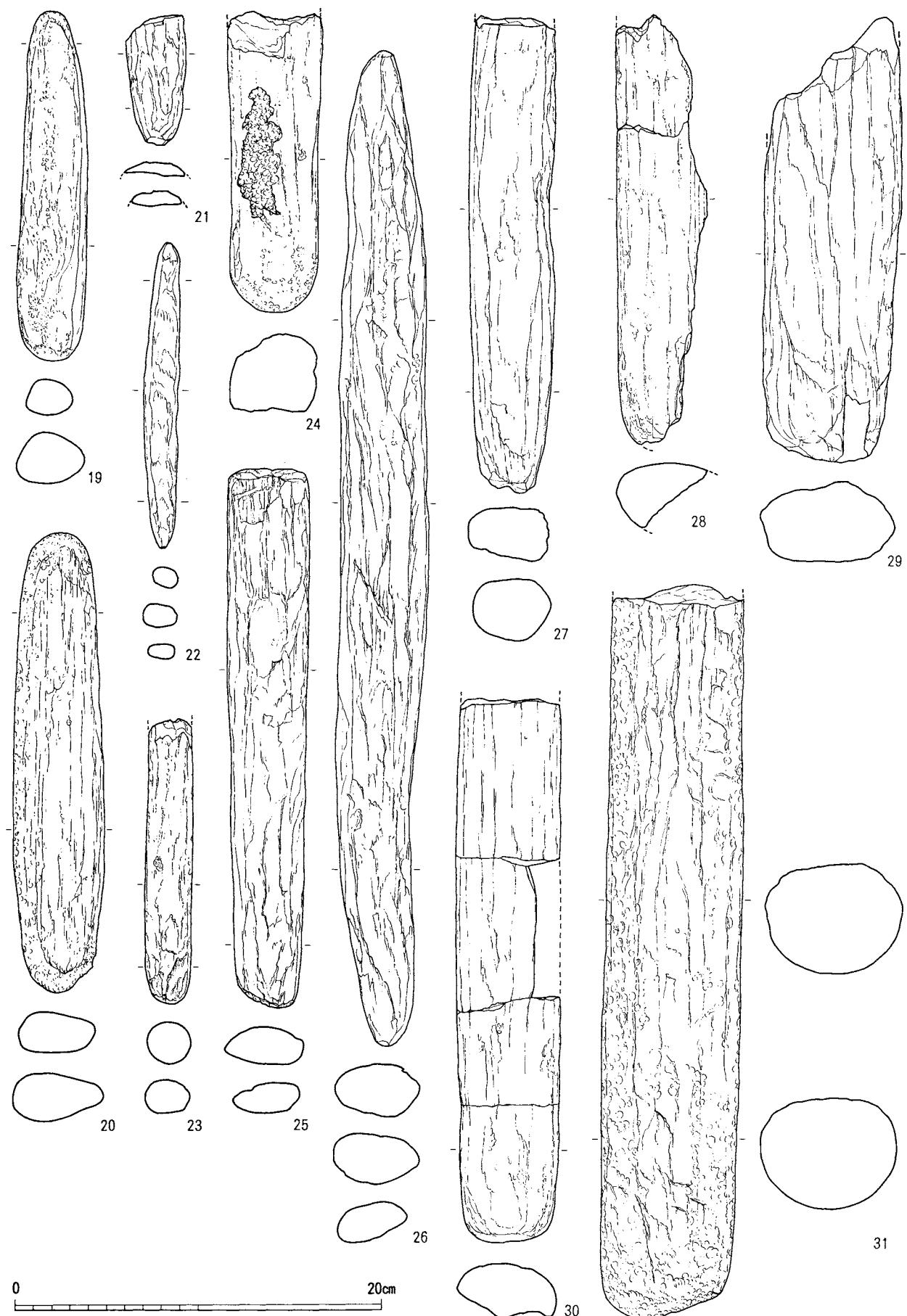
13は、緑泥片岩を素材とし、基部端に近付くに従い器幅を減ずる形態をもつ。21は、節理の強い絹雲母片岩を素材とする。約4分の3を欠失し、さらに節理に沿って剥離しているが、残存する器表から判断して、整形した基部の破片と推定される。25は、最も石剣本来の形に近い断面形をもつものである。約2分の1を欠く大型品である。

f 独鉛状石製品（第174図1・2）

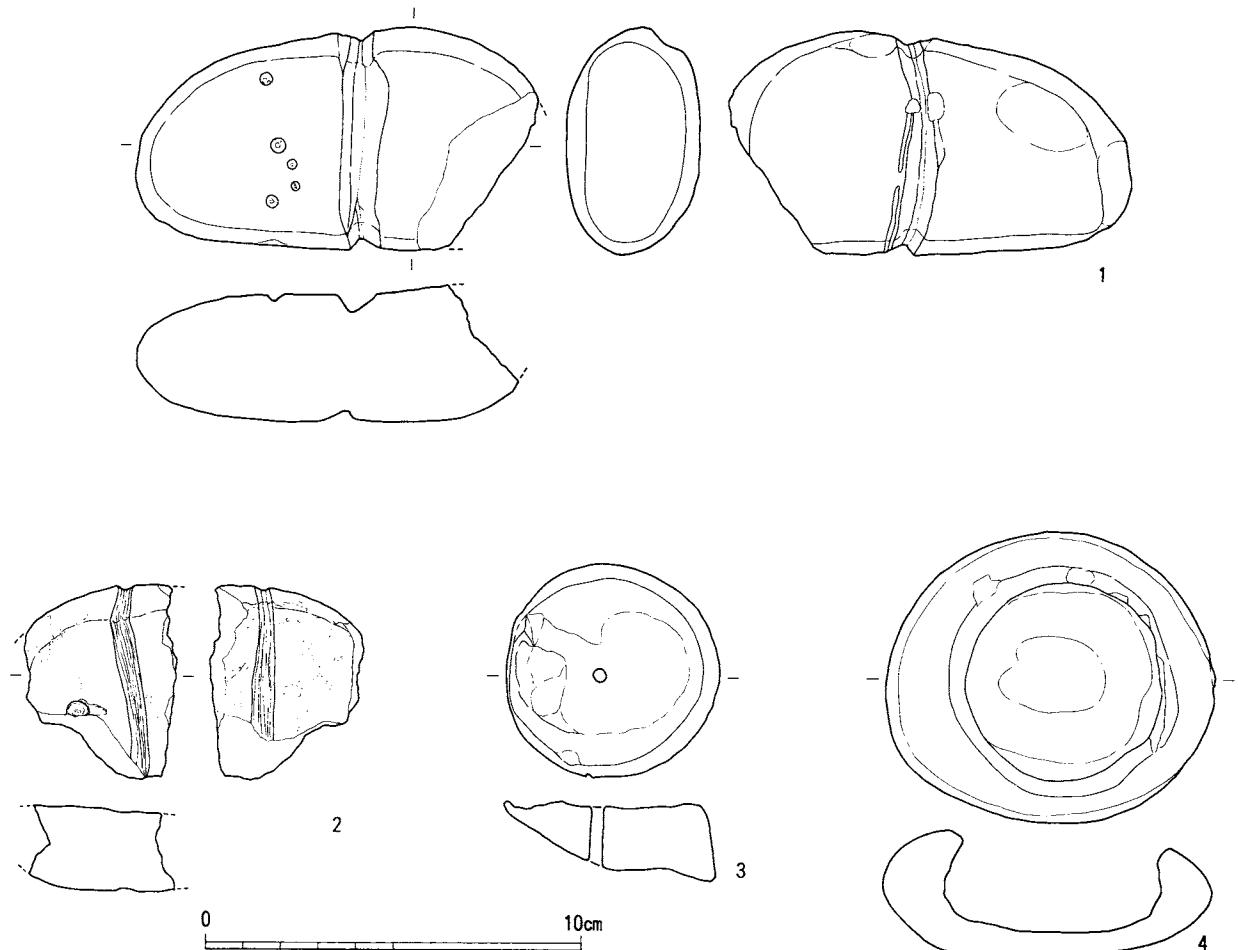
2点を本器種とした。岩偶との区別が難しいが、岩偶が器体を縦長に置いたときに左右対称となる礫を素材として意図的に選択している傾向が明瞭に窺えるのに対して、本資料は左右非対称となり、器体のほぼ中央に全周する施溝を有することと合わせて独鉛状石製品と判断した。施溝は、幅6~10mm・深さ5mm前後と広く、明瞭なものが施される。未貫通孔は5ヵ所ある。そのうち、直径が約4mmを測る3つの未貫通孔は縦にほぼ並んで不等間隔に形成され、約2mmの小さな未貫通孔2つはややずれて施されるが、5ヵ所で一連のものと考えられる。こうした未貫通孔は、他の独鉛状石製品にはみられないことから、本資料が岩偶である可能性も否定できない。但し、施溝の幅は岩偶もしくは岩版とした資料と比べて約2倍と広く、明らかに峻別される。2は、岩偶の一部とも考えられるが、施溝の幅が1と同様に広いことから、本器種の破片とした。

g 有孔円形石製品（第174図3）

本器種も1点のみの出土である。器体中央に直径2mmの孔が穿孔される。穿孔の方向は不明だが、極めて細く縦断面がほぼ平行な穿孔は注意される。全體の縦断面は円錐台形を為し、直径の大きい面は斜めの剥離面状となっているが、本来整った円錐台形の器形をもつのか、現状で完形なのかは判断し難い。用途も類例を知らないことから推定できないが、生



第173図 石棒、石刀、石剣実測図3 (1 : 4)



第174図 独鉛状石製品、有孔円形石製品、小型鉢形石製品実測図（1：2）

産用具とは考えられないため、石製品とした。

h 小型鉢形石製品（第174図4）

1点のみ出土した。石材は、岩偶・線刻礫などと共に通する軟質の砂岩である。器表面の観察から、現状で素材礫の形状を示していると考えられる。凹部の形成は、相対する周縁から底面に向かって、鋭い刃部をもった製作具で斜めに抉り取るように削ったことが内面に残る加工痕からわかる。図では表現されていないが、底部にはその側面に偏って直径約2mmの孔が開いており、そのままでは液体を入れることはできない。その用途は、器形から何らかの容器である可能性がまず考えられるが、他に類例を見ないため、石製品とした。

i 球状石製品（第175図1）

垂飾と認定するには、貫通孔をもたないことから、球状石製品とした。平面觀はほぼ正円で、断面形はやや扁平な厚手の自然礫を素材とする。幅約3～5mmの刻線を両面には十文字に施し、周縁では半周さ

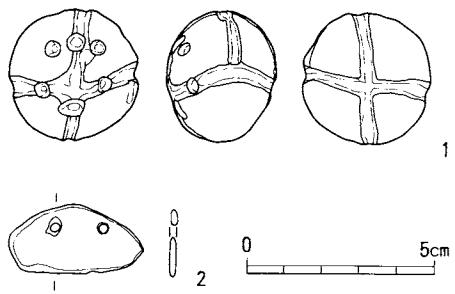
せる。片面に列点（未貫通孔）を6つもち、3つずつが2群となっている。素材の礫自体が球形を呈するため別器種としたが、加飾の内容からみるならば、装飾品ではなく岩偶とした一群に近いものとも考えられる。

j 垂飾（第175図2）

半円を為す平面形に2孔をもつもので、片岩系の石材を素材としている。有孔品であることから、垂飾と推定した。なお、その形態は一見すると弥生時代の磨製石庖丁を想起させ、そのミニチュアの可能性も考えることができたが、本遺跡の上層にある弥生時代の遺構とは大きく離れた位置で確実に縄文時代の包含層から出土していることが調査時に確認されているため、縄文時代の所産とした。

k 小玉（第176図3・4）

装飾品と考えられる小玉2点が出土している。淡い緑白色を呈し、肉眼観察ではヒスイ（硬玉）製と判定した。共に近似した形態を呈し、平面形はほぼ正



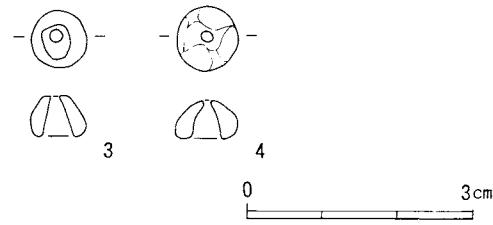
第175図 球状石製品、垂飾実測図（1：2）

円形となる。断面形は不整形な半円形をなす。器体の中央でわずかに段を形成しているようにも観察されるが、意図的なものか研磨の際の偶然なものか判

(6) 骨

範囲確認調査・東トレンチの東部を除く調査区全体に骨片が確認された。第III層（灰褐色シルト層）からの出土である。遺存状況は悪く、大多数が骨粉である。焼骨が目立つ。

一部に鑑定が可能なものがあり、イノシシ・ニホ



第176図 小玉実測図（1：1）

断できない。3は直径7mm、4は直径8mm、厚さは共に5mmを測る。孔は、2点とも平坦面側からの回転による片側穿孔で作出される。 （大下 明）

片

ンジカ・ムササビの骨がある。また、ヒトの可能性があるものも数点ある。詳細は別稿で報告する。なお、鑑定は金子浩昌（早稲田大学）氏と菅原弘樹（宮城県教育庁文化財保護課）氏のご厚意による。

（森川幸雄）

第14表 石器・石製品グリット別出土点数一覧表（1）

出土地点	赤色顔料付着石器	二次加工	使用痕有 剥片	剥片 (重量 g)	石核 (重量 g)	素材 (重量 g)	石棒	石劍 石刀	岩偶	線刻縞	鉄狀 石製品	垂飾	有孔円形 石製品	鉢形 石製品	球狀 石製品	玉 (ヒスイ)
い3				2 (25)	2 (42)											
い4				27 (180)	2 (51)	1 (125)										
あ3			2	1 29 (260)	4 (67.5)											
あ4			1	22 32 (235)	8 (308)				1							
A3			1	8 18 (66)												
A4			2													
A5																
A6				1 1 (10)												
A7																
B2		1	1 19 (56)	1 (9)												
B3		7	22 93 (327.5)	5 (127.5)				1								
B4		4	15 98 (482)	7 (230.5)	1 (13)		1		1							
B5		2	6 56 (246)	4 (130)	1 (65)											
B6		1	3 57 (276)	4 (175)	1 (58)		1									
B7		2	3 29 (187)	2 (60)												
C1		1	2 16 (145)		1 (2)											
C2		8	15 271 (1133.5)	24 (862)	1 (17)		1									
C3		14	40 239 (1051)	13 (318.5)				2	1	1						
C4		11	30 119 (551)	10 (388)	3 (36.5)		1	1								
C5		8	13 172 (918)	19 (765)	1 (80)		1		1							
C6		3	31 201 (980.5)	9 (215.5)	2 (123)		1									
C7		9	8 117 (554.5)	7 (145)	1 (5)	2						1				
C8																
D1		1		4 (13)	3 (92.5)			1								
D2		11	9 168 (701)	8 (246)	1 (34)	3		1	1	1						
D3		4	147 (606)	15 (100.5)	2 (103)	2										
D4		3	4 104 (739)	16 (433.5)	1 (17.5)	1										1
D5		8	6 193 (871.5)	11 (417)	2 (263)	1										
D6		3	8 121 (496)	13 (387)	3 (173)											
D7		5	10 176 (779.5)	13 (663)	5 (248.5)	2										
D8				22 (131)	1 (19)											
D9						1 (57)										
D10																
E1		2		10 (49.5)	5 (193)											
E2		8	18 186 (528)	12 (357.5)	3 (102)	4	1									
E3		8	44 165 (591.5)	8 (287.5)	3 (285)											
E4		4	52 213 (928.5)	16 (610)	1 (65)											
E5		4	12 143 (625.5)	9 (366)	3 (540)											
E6	2	7	32 120 (634.5)	18 (528)	2 (67)											
E7		3	8 121 (1032.5)	11 (698.5)	2 (127.5)	1										
E8		2	4 47 (392.5)	3 (100.5)	1 (10)	1										
F1		1	9 (52.5)	1 (9)	1 (315)											
F2		4	5 106 (567)	5 (107.5)												
F3		1	5 104 (318)	8 (395)	3 (2530.5)	1										
F4		7	16 176 (614.5)	10 (310)	3 (452)											
F5		4	3 84 (412)	7 (734)												
F6		4	9 238 (862)	25 (1108.5)	1 (40)	2	1									
F7		1	7 157 (118.9)	12 (483)	1 (115)							1				
F8		4	5 144 (580)	5 (118)	2 (24)	1										
F9		2	2 9 (18)													
G1																
G2		3	61 (198)	4 (143)				1								
G3		1	75 (265.5)	3 (62.5)	1 (5)											
G4		4	1 103 (374)	4 (197.5)	2 (308)											
G5		7	15 100 (420.5)	5 (92)												
G6		2	4 118 (335)	5 (354)	2 (895)	2	1									
G7		1	3 103 (543.2)	13 (276.5)	3 (280.5)	1	1	1								
G8		2	1 95 (601)	5 (301.5)	2 (23)		1									
G9		1	1 10 (37.5)	1 (15)								1				
Hク			1		1 (33)											
Hク			1	12 (125)												
Hキ			1	15 (134.5)	1 (20)											
Hカ			1	2 40 (124.5)	4 (63.5)			1								
Hオ			1	5 117 (603.5)	6 (288)	4 (48)										
Hエ		3	7 39 (213.6)	1 (67.5)												
Hウ			1	15 (127)	2 (35)			1								
Hイ		1	1 20 (80)		1 (19)											
Hア		1	20 (60.5)		1 (12)											
H1			2	(4)												
H2				35 (147.5)												
H3		3	9 35 (171)	7 (305)												
H4		3	90 (221)	3 (198)	1 (425)											
H5	1	3	74 (297)	3 (60)				1								
H6	1	1	5 20 (20.2)	2 (63)												
H7		3	2 42 (259.5)	6 (383.5)	1 (83)											
H8		1	1 61 (432)	3 (319)				1								
H9		2	4 59 (311.5)	5 (85)	1 (500)											
H10				12 (39.5)	1 (32.5)			1								
H11		1	1 13 (146)	3 (137.2)												
H12				16 (68)	2 (57.5)	1 (6)	1									
H13		1	18 (116.5)	5 (320)												
H14		2	3 36 (223.5)	7 (380)	1 (469)											1
H15			2 3 (33)	1 (20)				1								
H16				6 (45)												
H17				12 (28)												
H18					1 (32)	1 (28)										
H19																
H20																
H21																
H22																
Iコ																
Iケ			2	1 (3)	1 (26)											
Iク				40 (145.5)	2 (82)											
Iキ		4	8 33 (148.5)	7 (237)												
Iカ		2	1 74 (515)	8 (290)	1 (4)	1										
Iオ		1	15 117 (513)	4 (63)				1								
Iニ		1	3 74 (453)	9 (852)	1 (2)			1								
Iウ		2	32 (191.5)													
Iイ		1	22 (93)	2 (43)												
Iア				11 (31.5)												
I1				2 (22.5)												
I2		2	6 24 (7.5)		1 (7.5)											
I3				2 35 (211)	6 (281)							1	1			
I4		1	6 72 (190.5)													
I5		1	1 26 (199.5)	3 (117)												
I6		1	1 18 (137)	2 (48)												

第15表 石器・石製品グリット別出土点数一覧表 (2)

出土地点	石錐	石錐 未製品	打欠き 石錐	切目石錐	有溝石錐	打製石斧	台石	石皿	敲石	磨石	石錐	石匙	削器	ノミ状 石器	燧形 石器	磨製 石斧	有溝研石	砥石	部分磨製 石器	輕石 製品	礫器	
I 7	1						1	2	1				1		9			1			1	
I 8	6	1					2	4	1						8							
I 9	38	5	石1			1		5	3		4	3	35		1	1						
I 10	9	1					1	8	2		2	1	1		1							
I 11							1	1				1										
I 12							1				2				1							
I 13							1				1	1	1									
I 14							2															
I 15		1					1				2											
I 16															2							
I 17																						
I 18																						
I 19																						
I 20																						
I 21																						
I 22																						
J 1																						
J 2	2							1		1					5							
J 3	4	3						1				1		7		2						
J 4	6	2						1	2		1	1	1	6								
J 5	3	1						1						3		1						
J 6	10	1				1	1	3		1				6								
J 7	10							4	1			2		8								
J 8	20	2					1	4						1	6							
J 9	19	3				1	1	2		1	3	1	15		1	1						
J 10	16	3					2	5					3	13								
K 1																						
K 2	3								1													
K 3	12	2					1					1	1	11								
K 4	14	3					1	1	1		1			1	13							
K 5	25	1						2				2	1	14		2						
K 6	12	2					1	3				2		3								
K 7	30	6					1	3	1	1	2			12		2						
K 8	30	6					1	8	2		11	1	1	27		1						
K 9	12	4					1	5	1		5	11	13		2							
K 10	6	2					1	2	3			1	12									
K 11																						
L 1								1														
L 2	5	1						3				2		2								
L 3	5	下1		1			1	3	1					3	1						1	
L 4	3							1	2			2										
L 5								3	1		1	4	2									
L 6	2			1		1		3			1	1	6									
L 7	4	1						2				4		7								
L 8	7	1						4	3		1	1	6									
L 9	1							1	1				5									
L 10	4							3	2				1									
L 11								1					1	1								
M ケ																						
M ク																						
M キ	1																					
M カ																1						
M オ																1						
M エ																2						
M ウ																						
M 1																1						
M 2																						
M 3	6	1						1							8							
M 4	7	1						1	1					1	2	9	1					
M 5														1	5							
M 6									2					1	1							
M 7	3								1					2	1							
M 8	9	4						1	3					2	12	1					1	
M 9	2			1					4					1	1							
M 10								1	1					2	5							
M 11	5							2	1	1				1	1							
N ケ																						
N ク	1								4					2	1	6						
N キ	1								5	2				6	1	1						
N カ	7	3		1				1	5	2				7	6							
N オ	6	1						2	2	4				5	11							
N エ	4	1							5	1	3			2	9	1						
N ウ	4							2	5	2				5	11	1						
N イ	1								5	2	1			5	9							
N ア	6	1	1							1				1	3	1						
N 1	2								1					1	3							
N 2	3	1							1	1				1	6							
N 3	17	3						1	2					5	30	1						
N 4	12							1	2	2				6	14							
N 5	3	2							3	2				4	1	10						
N 6	5	1						1	5	1	1			3	8	1						
N 7	1								2	1	1			1	1	6	1					
N 8	6								1	1				1	2	9	2	1				
N 9	4								2						9	1	1					
N 10	3								1						4							
N 11	1								3		1			2	11		1					
O 1	1																					
O 2																						
O 3														1								
O 4																	1					
O 5	1																1					
O 6																	2					
O 7																						
O 8																						
O 9																						
O 10																	1					
O 11																	1					
O 12																	2					
西南レゾ	1																					
焼土	11	2																				
表土	5	4																				
不明	1																					
合計	842	160	5	6	1	10	62	27	361	39	123	2	282	153	1203	25	48	11	2	46	6	

第16表 石器・石製品グリット別出土点数一覧表（3）

出土地点	赤色顔料 付着石器	二次加工 有剥片	使用痕有 剥片	剥片 (重量 g)	石核 (重量 g)	素材 (重量 g)	石棒	石劍 石刀	岩偶	線刻記	独創状 石製品	垂飾	有孔円形 石製品	鉢形 石製品	球状 石製品	玉 (ヒスイ)
I 7		1	2	17 (9.1)	5 (39.5)	1 (14.8)										
I 8		1	3	401 (404)	11 (378.5)	1 (11)										1
I 9		11	51	216 (731.5)	18 (381)	1 (54)	1	2	1							
X 10	6	8	105 (380)	5 (247)	1 (64)											
I 11		1		12 (8.9)	1 (17.5)											
I 12				10 (6.6)	4 (14.3)											
I 13		1		10 (2.4)	2 (8.6)											
I 14				9 (6.3)	1 (30)		1									
I 15		1	1	6 (2.4)												
I 16				3 (7.5)												
I 17																
I 18			1	(0.5)												
I 19																
I 20																
I 21																
I 22																
J 1			1	5 (20.5)												
J 2	1	2	26 (52)													
J 3	2		58 (137.5)	4 (50.5)			1									
J 4	4	2	101 (238.5)	9 (161)	1 (10)											
J 5	2		50 (188.5)	1 (12)	1 (104)											
J 6	1	1	70 (29.8)	7 (39.8)	1 (217.5)											
J 7	7	2	175 (57.5)	8 (158)			1									
J 8	3	3	131 (46.9)	7 (157.5)			1									
J 9	6	3	190 (684.5)	8 (238)	4 (938)											
J 10	6	3	228 (843)	7 (145)	2 (2227.5)	3										
K 1			1 (29.5)													
K 2			4 (21)	2 (82.5)												
K 3	1	12	58 (211)	5 (73)			1									
K 4	7	2	186 (431)	8 (286.5)	1 (56)	2										
K 5	2	2	128 (294.1)	8 (240)	2 (191)											
K 6		4	97 (354)	7 (122.5)	1 (263)											
K 7	1	12	237 (1011)	16 (400)	2 (32.5)											
K 8	12	10	339 (1130)	17 (470.5)			1									
K 9	2	4	170 (739)	11 (271.5)	5 (169)											
K 10	2	4	104 (358)	8 (252.5)	1 (41)	1										
K 11																
L 1																
L 2	2	2	62 (148.2)	4 (456.5)												
L 3	3	5	89 (267)	5 (119)	1 (33)											
L 4	1		34 (98)	4 (131)	1 (40)	1										
L 5	2	1	42 (174.5)	2 (80)												
L 6	2		31 (95.2)	1 (7.5)	1 (92.0)											
L 7	3	1	94 (245.5)	7 (155)	1 (30)											
L 8		3	74 (285)	5 (231.5)	2 (23)	2										
L 9			59 (144.5)	4 (87)	1 (353)											
L 10	1		8 (33)	1 (47)	1 (22.5)	1										
L 11	1		6 (17.5)													
M ケ																
M ク																
M キ																
M カ			14 (122)	3 (85.5)												
M オ	1	2	21 (166)	7 (332.5)												
M エ	1		2 (14.5)	2 (119)												
M ウ		1	20 (88)	5 (173)			1									
M イ			6 (32.5)													
M ァ			6 (26)	1 (45)												
M 1		2	6 (30.1)													
M 2	1	1	138 (312.5)	4 (80)	1 (22)											
M 3	8	1	176 (715.5)	5 (149.5)			1									
M 4	3	1	64 (264.5)	7 (306)	3 (140)											
M 5			14 (54.5)	2 (251)	1 (10)											
M 6			8 (37)	3 (191)												
M 7	1		26 (89.5)	5 (1592.5)			1									
M 8	1	8	100 (319.5)	9 (238)	2 (260)							1				
M 9			14 (82)													
M 10	1	1	17 (95)	5 (138.5)	1 (273)											
M 11	5	1	30 (116.5)	2 (24)												
N ケ			1 (21)													
N ク		1	1 (1)													
N キ	1	5	113 (1227)	13 (396)	5 (284.5)											
N カ	3	10	442 (2126)	27 (938)	5 (285.5)											
N オ	6	22	152 (1018.5)	30 (1292.5)	2 (335)											
N エ	3	4	105 (770)	7 (251)	2 (44)											
N ウ	2	9	97 (539)	18 (510)			2									
N イ	1	3	149 (1088)	19 (1177)	6 (193)											
N ァ	1	5	45 (280.5)	5 (99.5)												
N 1	2	2	29 (187)	6 (181.5)	1 (6)											
N 2	1	5	49 (158)	3 (43.5)			1									
N 3	11	27	238 (715)	19 (627)	1 (18)											
N 4	10	17	251 (1012.5)	24 (1057)	6 (1057)	1	1									
N 5	9	9	84 (339.5)	9 (280)	4 (1127)											
N 6	2	10	64 (413)	7 (402)	2 (20)											
N 7	1	3	44 (230)	5 (182.5)												
N 8	2	2	94 (698.5)	6 (124.5)	1 (86)	1										
N 9	5	8	85 (319.5)	7 (168)												
N 10	1	6	28 (135.5)	4 (161)												
N 11	2	3	39 (37.5)	4 (94)	1 (318)											
O 1			2 (4)				1									
O 2																
O 3					1 (41)											
O 4				25 (52)												
O 5				12 (55)												
O 6				5 (32)	1 (62)											
O 7				1 (8)												
O 8				5 (7.6)												
O 9						1 (52.5)										
O 10						1 (5)										
O 11						2 (1)										
O 12																
西南1ゾーン				4 (12.5)	7 (256.5)											1
捲土																
糞土																
不明	1	2	17	305 (1403.5)	36 (1544)	12 (2680)										
合計	9	438	918	13496 (57125.5)	1038 (41272.5)	167 (22731)	63	10	13	10	2	1	1	1	2	

第17表 石器・石製品グリット別出土点数一覧表 (4)

遺物番号	出土位置	分類	石材	遺存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	插図番号
1	I 8 配石14 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	1.5	1.7	0.3	0.45		120
2	I 9 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	1.4	1.8	0.25	0.42		120
3	D 7 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	1.55	1.8	0.35	0.52		120
4	F 6 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	1.9	1.8	0.3	0.68		120
5	M11 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	1.2	1.6	0.25	0.24		120
6	E 2 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	1.65	1.7	0.3	0.45		120
7	O 1 西壁トレンチ 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	2.1	2.2	0.53	1.74		120
8	I 9 第Ⅲ層	I a	下呂石	完存	1.8	1.7	0.3	0.54		120
9	E 5 第Ⅲ層	I a	下呂石	完存	3.2	1.7	0.45	1.49		120
10	C 7 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	3.0	2.0	0.3	1.12		120
11	M 2 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	2.6	2.1	0.4	1.21		120
12	K 3 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	2.7	1.8	0.5	1.4		120
13	F 5 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	2.45	1.3	0.4	0.91		120
14	G 4 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	2.0	1.45	0.2	0.39		120
15	C 5 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	2.45	1.8	0.4	1.15		120
16	N 4 第Ⅲ層	I b	サヌカイト	脚部片方欠損	(2.6)	(1.1)	0.4	(0.94)		120
17	K 7 第Ⅲ層	I b	サヌカイト	完存	1.85	1.2	0.3	0.47		120
18	G 8 第Ⅲ層	I b	サヌカイト	完存	1.85	1.25	0.35	0.63		120
19	H 5 第Ⅲ層	I b	サヌカイト	完存	2.05	1.7	0.4	1.17		120
20	M 4 第Ⅲ層	I b	下呂石	完存	1.9	1.65	0.3	0.64		120
21	H12 第Ⅲ層	I b	サヌカイト	完存	1.8	1.7	0.3	0.56		120
22	C 4 第Ⅲ層	I c	サヌカイト	脚部両方欠損	(2.0)	(1.6)	0.3	0.61		120
23	K10 第Ⅲ層	I c	サヌカイト	完存	2.05	1.45	0.4	0.56		120
24	E 2 第Ⅲ層	I c	サヌカイト	完存	2.15	1.8	0.4	0.73		120
25	B 4 第Ⅲ層	I c	サヌカイト	完存	2.6	2.0	0.5	1.19		120
26	N 9 第Ⅲ層	I d	サヌカイト	完存	2.0	1.1	0.35	0.63		120
27	I キ 第Ⅲ層	I d	サヌカイト	完存	2.2	1.1	0.4	0.60		120
28	J 7 第Ⅲ層	I d	サヌカイト	完存	2.2	1.25	0.4	0.65		120
29	N 8 第Ⅲ層	I d	サヌカイト	完存	1.85	1.25	0.35	0.55		120
30	C 4 第Ⅲ層	I d	サヌカイト	完存	2.0	1.6	0.3	0.64		120
31	E 4 第Ⅲ層	I d	石英	脚部片方欠損	(2.3)	(1.6)	0.5	1.22		120
32	J 8 第Ⅲ層	I d	サヌカイト	完存	2.3	1.5	0.3	1.17		120
33	F 5 第Ⅲ層	I d	サヌカイト	完存	2.3	1.4	0.4	1.42		121
34	F 8 第Ⅲ層	I d	サヌカイト	完存	1.8	1.2	0.2	0.51		121
35	N 4 第Ⅲ層	I d	サヌカイト	完存	3.1	1.55	0.65	2.79		121
36	F 2 第Ⅲ層	I d	サヌカイト	完存	3.45	1.3	0.4	1.40		121
37	J 6 第Ⅲ層	I d	サヌカイト	完存	2.9	2.0	0.35	1.52		121
38	K 8 第Ⅲ層	I d	サヌカイト	完存	3.35	1.4	0.4	1.19		121
39	D 2 第Ⅲ層	I d	サヌカイト	完存	2.9	1.7	0.4	0.95		121
40	H 6 第Ⅲ層	I d	サヌカイト	完存	4.0	1.6	0.3	0.99		121
41	L 8 第Ⅲ層	I d	サヌカイト	完存	2.9	1.5	0.45	1.04		121
42	F 6 土坑11	II a	サヌカイト	完存	2.55	1.1	0.6	1.34		121
43	D 7 第Ⅲ層	II a	石英	脚部片方欠損	(2.4)	(1.7)	0.6	(1.48)		121
44	K 6 第Ⅲ層	II b	サヌカイト	完存	2.6	2.3	0.8	3.94		121
45	K 5 第Ⅲ層	II b	頁岩	完存	2.85	2.5	0.7	4.37		121
46	I 6 第Ⅲ層	II b	サヌカイト	完存	3.9	2.8	0.8	7.95		121
47	D 7 第Ⅲ層	III a	サヌカイト	完存	2.05	2.1	0.4	1.69		121
48	B 4 第Ⅲ層	III b	サヌカイト	完存	1.6	1.45	0.55	1.24		121
49	I 9 第Ⅲ層	III b	サヌカイト	完存	2.2	2.0	0.55	2.05		121
50	G 7 土坑12	IV	サヌカイト	完存	2.4	1.4	0.5	1.80		121
51	H キ 第Ⅲ層	——	石英	先端部欠損	1.85	1.8	0.5	1.69		121
52	J 8 第Ⅲ層	——	サヌカイト	完存	3.3	2.1	0.9	5.63		121
53	H ウ 第Ⅲ層	——	サヌカイト	完存	3.3	2.4	1.2	8.95		121

第18表 石鏡観察表

遺物番号	出土位置	分類	石材	遺存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	査定番号
1	D7 第Ⅲ層	打欠き	砂岩	完存	5.6	4.6	1.3	48.56		122
2	H11 第Ⅲ層	打欠き	砂岩	完存	7.2	6.1	1.4	79.24		122
3	D2 第Ⅲ層	打欠き	砂岩	完存	8.2	5.7	1.7	103.93		122
4	I15 第Ⅲ層	打欠き	緑泥片岩	完存	8.7	7.8	1.5	175.81		122
5	Nア 第Ⅲ層	打欠き	凝灰岩	完存	7.4	9.5	2.9	233.95		122
1	L6 第Ⅲ層	切目	砂岩	完存	3.5	2.3	2.0	21.62		123
2	I5 第Ⅲ層	切目	砂岩	完存	5.5	3.9	1.6	47.60		123
3	Nカ 第Ⅲ層	切目	砂岩	完存	7.0	3.4	1.3	54.32		123
4	F5 第Ⅲ層	切目	硬砂岩	完存	9.1	3.8	1.7	79.26		123
5	M9 第Ⅲ層	切目	硬砂岩	完存	6.9	4.4	1.2	64.25		123
6	L3 第Ⅲ層	切目未成品	砂岩	完存	6.3	4.5	1.7	63.04		123
7	J6 第Ⅲ層	有溝	砂岩	完存	4.1	5.1	1.1	26.98	横位	123

第19表 石錐観察表

遺物番号	出土位置	分類	石材	遺存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	査定番号
1	L6 第Ⅲ層	不明	細粒砂岩	下部3分の2欠	(5.0)	(4.1)	(0.95)	(22.22)		124
2	Iア 第Ⅲ層	不明	粘板岩	下部2分の1欠	(7.0)	(4.3)	(1.4)	(56.02)		124
3	N7 第Ⅲ層	短冊型	細粒砂岩	下部2分の1欠	(7.3)	(4.6)	(1.2)	(42.88)	刃縁僅かに残る	124
4	A3 第Ⅲ層	短冊型	緑雲母石英片岩	上部2分の1欠	(7.3)	(5.8)	(1.35)	(70.66)		124
5	D4 第Ⅲ層	短冊型	粘板岩	完存	8.1	4.95	1.4	71.78	未製品か?	124
6	J9 第Ⅲ層	短冊型	粘板岩	上端一部欠	8.6	5.05	1.1	65.20	ほぼ完存、刃縁の磨滅強い	124
7	B4 第Ⅲ層	短冊型	砂岩片岩	完存	11.5	4.6	1.7	123.03	全体に磨滅強い	124
8	F3 第Ⅲ層	短冊型	砂岩	完存	9.7	6.5	2.1	153.98	厚手	125
9	C7 第Ⅲ層	撥型	砂岩片岩	下半欠	(7.2)	(4.6)	(1.9)	(83.72)	柄部のみ	125
10	I9 第Ⅲ層	未成品	砂岩片岩	完存	13.3	5.9	1.6	129.65		125

第20表 打製石斧観察表

遺物番号	出土位置	分類	石材	遺存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(kg)	備考	査定番号
1	E3 第Ⅲ層	—	砂岩	完存	13.0	10.7	6.5	1.95		126
2	F5 第Ⅲ層	—	砂岩	完存	15.7	11.3	3.8	0.96		126
3	Nウ 第Ⅲ層	—	凝灰岩	一部新しい欠損	17.2	16.4	9.8	(3.33)		126
4	F2 第Ⅲ層	—	花崗岩	完存	16.2	9.5	5.6	1.35	磨面有	126
5	E2 第Ⅲ層	—	凝灰岩	完存	23.1	10.1	7.0	0.97		126
6	不明	—	砂岩	完存	23.1	10.1	7.0	2.47	磨面有	126
7	F2 第Ⅲ層	—	砂岩	完存	24.6	9.4	4.7	1.37		126
8	N6 第Ⅲ層	—	砂岩	完存	16.4	14.4	3.2	0.85		127
9	G6 第Ⅲ層	—	砂岩	完存	15.0	11.4	3.4	0.76	片面磨面	127
10	Nオ 第Ⅲ層	—	砂岩	完存	16.8	15.0	6.0	1.86		127
11	Hイ 第Ⅲ層	—	砂岩	完存	25.0	14.7	7.1	3.13		127
12	Iウ 第Ⅲ層	—	砂岩	完存	18.8	13.0	3.8	1.26		128
13	D2 第Ⅲ層	—	砂岩	完存	17.3	11.4	4.6	1.06		128
14	K10 第Ⅲ層	—	砂岩	完存	20.4	14.5	7.8	2.91	片面磨面	128

第21表 台石観察表

遺物番号	出土位置	分類	石材	遺存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(kg)	備考	検査番号
1	C7 第Ⅲ層	片面	砂岩	完存	16.0	11.4	3.1	0.84		129
2	K4 第Ⅲ層	片面	砂岩	完存	15.4	11.1	2.9	0.57		129
3	M11 第Ⅲ層	片面	流紋岩質溶結凝灰岩	4分の3欠	(13.6)	(11.0)	(2.5)	(0.60)		129
4	? 第Ⅲ層	両面	砂岩	2分の1欠	(12.1)	(12.2)	(5.1)	(1.05)	敲打痕有	129
5	B5 第Ⅲ層	片面	砂岩	6分の5欠	(13.9)	(9.1)	6.2	(1.13)	敲打痕有	129
6	H13 第Ⅲ層	両面	砂岩	4分の3欠	(18.1)	(18.1)	(5.8)	(2.48)	敲打痕有	129
7	N11 第Ⅲ層	片面	砂岩	2分の1欠	(29.5)	(15.9)	(5.3)	(3.75)		129
8	M11 第Ⅲ層	両面	砂岩	完存	23.2	23.5	4.3	2.96	敲打痕有	130
9	H11 第Ⅲ層	両面		完存	22.1	12.7	6.4			130
10	110 第Ⅲ層	片面	砂岩	完存	19.2	13.8	6.9	2.13		130
11	E5 第Ⅲ層	両面	砂岩	3分の1欠	(23.9)	16.0	(6.8)	(3.08)	敲打痕有	130
12	I7 第Ⅲ層	両面	砂岩	完存	22.3	45.4	10.8	15.6	大型、磨滅強い	131
13	N才 第Ⅲ層	両面	砂岩	完存	35.1	25.7	9.0	9.2		131
14	K6 第Ⅲ層	両面	砂岩	完存	37.6	25.4	9.9	10.0	他器種か?	132

第22表 石皿観察表

遺物番号	出土位置	分類	石材	遺存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	検査番号
1	L10 第Ⅲ層	IAa	砂岩	完存	7.5	4.1	2.5	118.67		133
2	E3 第Ⅲ層	IAa	石英	完存	7.0	5.5	4.9	279.14		133
3	J3 第Ⅲ層	IAa	凝灰岩	完存	8.5	5.7	5.0	252.99		133
4	H7 第Ⅲ層	IAa	片麻岩	一部欠損	(7.9)	(5.2)	5.5	(303.48)		133
5	Hウ 第Ⅲ層	IAb	礫岩	完存	13.4	8.8	5.3	926.89		133
6	Mエ 第Ⅲ層	IAb	花崗岩	完存	12.8	11.4	6.9	1520.0		133
7	M6 第Ⅲ層	IAb	凝灰岩	完存	11.8	9.9	6.2	916.61		133
8	J6 第Ⅲ層	IBa	砂岩	完存	4.4	3.5	2.9	66.15		133
9	C3 第Ⅲ層	IBa	砂岩	完存	4.5	4.4	3.4	97.26		133
10	Iカ 第Ⅲ層	IBb	凝灰岩質砂岩	完存	3.9	4.4	4.2	111.38		133
11	Nイ 第Ⅲ層	IBb	砂岩	完存	4.5	4.5	3.0	82.38		133
12	D3 第Ⅲ層	IBb	砂岩	完存	4.6	4.3	3.8	112.63		133
13	N2 第Ⅲ層	IBb	砂岩	完存	6.1	5.7	4.1	205.16		133
14	Nエ 第Ⅲ層	IBb	石英	完存	4.5	4.1	4.2	105.12		133
15	I7 第Ⅲ層	IBb	砂岩	完存	5.2	4.8	3.9	134.14		133
16	N8 第Ⅲ層	IBb	石英	完存	6.0	5.4	3.7	166.69		133
17	N7 第Ⅲ層	IBb	砂岩	完存	4.6	5.0	3.2	102.34		133
18	N6 第Ⅲ層	IBb	砂岩	完存	4.0	2.4	3.6	50.50		133
19	H9 第Ⅲ層	IBb	砂岩	完存	4.5	4.0	3.4	82.68		133
20	H12 第Ⅲ層	IIBa	砂岩	一部欠損	(7.8)	(6.9)	(2.7)	(186.22)		133
21	I10 第Ⅲ層	IIBa	砂岩	完存	12.4	7.1	3.6	399.28		133
22	D7 第Ⅲ層	IIBa	凝灰岩質砂岩	完存	11.3	7.7	3.85	401.80		133
23	D6 第Ⅲ層	IIBa	凝灰岩質砂岩	完存	12.8	4.85	3.5	257.16		133
24	I3 第Ⅲ層	IIBa	凝灰岩質砂岩	完存	16.6	7.6	3.3	487.84		133
25	D6 第Ⅲ層	IIAb	砂岩	完存	9.4	8.5	3.7	466.71		134
26	N3 溝1	IIAb	砂岩	完存	9.4	8.9	4.6	598.80		134
27	K4 第Ⅲ層	IIBa	砂岩	完存	10.8	9.5	5.3	887.70		134
28	C3 第Ⅲ層	IIBa	凝灰岩質砂岩	一部欠損	(10.2)	10.8	4.1	(688.34)		134
29	O10 南壁トレンチ	IIBa	砂岩	一部欠損	(11.0)	9.4	3.9	(691.82)		134
30	K9 第Ⅲ層	IIBb	凝灰岩質砂岩	完存	9.7	8.7	3.75	319.69		134
31	H9 第Ⅲ層	IIBb	凝灰岩質砂岩	完存	10.8	7.7	4.1	316.55		134
32	L6 第Ⅲ層	IIBb	砂岩	完存	11.6	8.1	3.4	417.50		134
33	C2 第Ⅲ層	IIBb	砂岩	完存	10.1	7.85	3.8	360.81		134
34	不明	IIBb	流紋岩質溶結凝灰岩	完存	11.0	9.7	4.5	796.51		134
35	K6 第Ⅲ層	IIBb	砂岩	一部欠損	(11.9)	(9.4)	(3.4)	(679.95)		134

第23表 敲石観察表

遺物番号	出土位置	分類	石材	遺存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	挿図番号
1	G6 第Ⅲ層	—	硬沙岩	完存	14.55	11.3	6.6	1,594kg		135
2	F6 第Ⅲ層	—	硬沙岩	完存	13.0	9.45	4.5	849.41		135
3	N1 第Ⅲ層	—	硬沙岩	完存	10.65	8.7	6.2	812.53		135
4	N11 第Ⅲ層	—	硬沙岩	完存	8.6	6.8	5.4	436.34		135
5	I7 第Ⅲ層	—	硬沙岩	完存	13.4	6.6	3.7	514.38		135

第24表 磨石観察表

遺物番号	出土位置	分類	石材	遺存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	挿図番号
1	J2 第Ⅲ層	Ia	サヌカイト		4.45	2.25	0.65	3.27		137
2	C6 第Ⅲ層	Ia	サヌカイト		4.9	2.7	0.7	5.74		137
3	E5 第Ⅲ層	Ia	サヌカイト		3.2	1.25	0.6	1.42		137
4	Nエ 第Ⅲ層	Ia	サヌカイト		3.2	1.85	1.0	3.02		137
5	H才 第Ⅲ層	Ia	サヌカイト		5.4	1.6	0.7	2.96	磨耗	137
6	B6 第Ⅲ層	Ia	サヌカイト		5.1	2.3	1.1	7.32		137
7	C2 第Ⅲ層	Ib	下呂石		2.45	1.9	0.6	2.41	磨耗	137
8	L3 第Ⅲ層	Ib	サヌカイト	上部欠損	(2.4)	(1.8)	(0.5)	(1.54)	磨耗	137
9	K10 第Ⅲ層	IIa	サヌカイト		4.75	1.1	0.5	1.55		137
10	F4 第Ⅲ層	IIa	サヌカイト		4.0	1.0	0.55	2.27		137
11	D7 第Ⅲ層	IIa	サヌカイト		4.15	1.2	0.7	3.50	磨耗	137
12	K4 第Ⅲ層	IIa	サヌカイト		3.8	1.1	0.7	2.53	磨耗	137
13	D5 第Ⅲ層	IIa	サヌカイト		4.15	1.6	0.6	3.05		137
14	C4 第Ⅲ層	IIb	サヌカイト		5.6	2.3	0.9	10.75		137
15	C5 第Ⅲ層	IIb	サヌカイト		3.75	1.6	0.8	4.02	磨耗	137
16	I9 第Ⅲ層	IIb	サヌカイト		3.15	1.4	0.5	1.75		137
17	K10 第Ⅲ層	IIb	サヌカイト		1.65	1.1	0.45	0.78		137
18	Nア 土坑13	IIb	サヌカイト	先端部欠損	2.0	1.4	0.5	1.69		137
19	D6 第Ⅲ層	IIb	サヌカイト		5.3	3.3	1.5	20.64	磨耗	137
20	K7 第Ⅲ層	IIb	サヌカイト		3.4	2.2	0.9	5.16		137
21	D2 第Ⅲ層	IIb	サヌカイト		3.6	1.8	1.0	4.80		137
22	G9 第Ⅲ層	III	サヌカイト		4.2	3.2	1.55	15.73	磨耗	138
23	F8 第Ⅲ層	III	サヌカイト		4.2	3.7	1.5	16.27	磨耗	138
24	E2 第Ⅲ層	III	サヌカイト		3.5	3.5	1.3	10.72	磨耗	138
25	D5 第Ⅲ層	III	サヌカイト		2.4	2.2	0.4	1.58		138
26	C2 第Ⅲ層	III	サヌカイト		3.2	1.9	0.7	4.66	磨耗、クサビを転用	138
27	D6 第Ⅲ層	III	サヌカイト		6.8	2.8	1.4	19.58	磨耗	138
28	D7 第Ⅲ層	III	サヌカイト		5.3	3.7	1.1	20.40	磨耗	138
29	C5 第Ⅲ層	III	サヌカイト		4.7	2.95	1.05	8.34	磨耗	138
30	H才 第Ⅲ層	III	サヌカイト		5.4	4.8	1.1	22.91	磨耗	138
31	C3 第Ⅲ層	III	サヌカイト		4.8	2.05	1.9	16.27	磨耗	138
32	N2 第Ⅲ層	III	サヌカイト		6.3	3.3	3.2	36.61	磨耗	138

第25表 石錐観察表

遺物番号	出土位置	分類	石材	遺存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	挿図番号
1	F4 第Ⅲ層	—	サヌカイト	身部欠	(2.5)	(2.7)	(0.6)	(3.49)		140
2	C3 第Ⅲ層	—	サヌカイト	完存	9.0	3.1	1.2	39.76		140

第26表 石匙観察表

遺物番号	出土位置	分類	石材	遺存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	補図番号
1	D4 第Ⅲ層	I a	下呂石	完存	3.6	5.9	1.0	24.37	刃部両端磨耗	140
2	F4 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	4.1	6.7	1.5	38.54		140
3	J9 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	3.45	9.55	9.05	41.64		140
4	K8 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	4.6	8.5	1.3	38.99	刃部右端磨耗	140
5	G6 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	4.0	9.8	0.9	32.52		140
6	G3 第Ⅲ層	I a	石英	完存	3.3	4.7	1.1	19.50		141
7	N4 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	3.2	7.3	1.8	31.42	刃部全体磨耗	141
8	不明	I a	粘板岩?	完存	5.0	7.5	0.9	29.58		141
9	D4 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	5.5	6.9	1.5	54.03	刃部両端磨耗	141
10	G8 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	4.7	8.4	1.4	64.11		141
11	E2 第Ⅲ層	I b	サヌカイト	完存	3.0	8.6	0.8	19.02		142
12	N6 第Ⅲ層	I b	サヌカイト	完存	8.5	2.9	0.9	31.87		142
13	不明	I b	サヌカイト	完存	4.0	9.0	1.5	48.18		142
14	? 第Ⅲ層	I b	石英	完存	6.5	7.0	3.0	99.15		142
15	Nオ 第Ⅲ層	I b	サヌカイト	完存	5.6	9.1	1.2	69.43	一部風化度強い	142
16	Hエ 第Ⅲ層	I b	サヌカイト	完存	3.8	6.7	1.8	31.22		143
17	K8 第Ⅲ層	I b	サヌカイト	完存	5.7	6.7	0.8	28.95	刃部以外風化度強い	143
18	Nオ 第Ⅲ層	I b	サヌカイト	完存	4.8	5.8	2.5	62.95	石核転用	143
19	Iオ 第Ⅲ層	I c	チャート	一部欠損	(2.4)	(4.0)	(0.6)	(8.14)		143
20	I9 第Ⅲ層	I c	サヌカイト	完存	6.9	4.2	1.0	29.14		143
21	D3 第Ⅲ層	I c	サヌカイト	完存	4.7	9.4	1.4	57.10		143
22	D3 第Ⅲ層	I c	サヌカイト	完存	3.9	6.4	1.2	21.76	刃部磨耗	144
23	Nオ 第Ⅲ層	I c	サヌカイト	完存	5.2	6.4	1.6	36.93		144
24	K8 第Ⅲ層	I c	サヌカイト	完存	4.15	6.2	1.3	34.01		144
25	O10 南壁トレーナー	I c	サヌカイト	完存	5.0	6.1	0.8	32.00		144
26	K8 第Ⅲ層	I c	サヌカイト	完存	2.0	7.5	1.4	23.82	一部風化度強い	144
27	K6 第Ⅲ層	I c	サヌカイト	完存	2.65	8.55	0.85	30.67	刃部中央磨耗	145
28	N3 溝1	I c	サヌカイト	完存	4.1	7.6	1.5	52.88		145
29	D6 第Ⅲ層	I c	サヌカイト	完存	4.9	7.5	1.2	48.13		145
30	H14 第Ⅲ層	I c	サヌカイト	完存	4.0	9.2	1.3	46.56		145
31	Nイ 第Ⅲ層	I c	サヌカイト	完存	5.6	4.4	1.4	29.43		145
32	L2 第Ⅲ層	I c	サヌカイト	完存	6.2	2.8	2.1	39.91		145
33	C3 第Ⅲ層	II a	チャート	完存	3.5	8.2	1.5	47.03		146
34	D7 第Ⅲ層	II a	サヌカイト	完存	4.5	8.4	1.6	44.35	一部風化度強い	146
35	C6 第Ⅲ層	II a	サヌカイト	完存	6.0	6.8	1.65	51.60	磨耗	146
36	F4 土坑14	II a	サヌカイト	完存	8.7	5.6	1.1	51.64	左側縁刃部両端磨耗	146
37	Iカ 第Ⅲ層	II a	サヌカイト	完存	5.2	9.3	1.4	82.05		146
38	C5 第Ⅲ層	II a	サヌカイト	完存	3.1	6.3	0.85	24.64		147
39	D3 第Ⅲ層	II a	下呂石	完存	3.65	6.3	0.9	17.49		147
40	K6 第Ⅲ層	II a	サヌカイト	完存	4.3	6.6	1.2	30.53		147
41	F3 第Ⅲ層	II a	サヌカイト	完存	4.6	8.3	0.6	26.35		147
42	Hキ 第Ⅲ層	II b	サヌカイト	完存	8.5	4.3	1.5	49.38		147
43	Iイ 第Ⅲ層	II b	サヌカイト	下部欠損	(6.5)	3.5	0.8	15.46		148
44	I9 第Ⅲ層	II c	サヌカイト	完存	5.6	3.7	1.4	25.24		148

第27表 削器観察表

遺物番号	出土位置	分類	石材	遺存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	挿図番号
1	J 9 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	3.1	2.6	0.75	6.77		150
2	D 4 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	2.1	2.8	0.65	3.68		150
3	H 8 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	2.7	2.9	1.0	8.36		150
4	E 7 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	2.3	3.1	0.65	4.28		150
5	N 7 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	3.2	3.35	0.8	8.23		150
6	M 7 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	3.0	3.2	0.7	6.43		150
7	D 6 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	3.6	2.75	0.8	8.67		150
8	M 4 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	3.5	3.2	0.8	10.01		150
9	D 7 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	3.2	2.1	0.5	4.83		150
10	D 6 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	3.75	2.8	0.55	5.21		150
11	D 6 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	3.75	2.75	1.1	12.79		150
12	D 6 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	3.3	3.2	0.9	11.18		150
13	D 6 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	3.8	2.75	0.8	10.86		150
14	L 5 第Ⅲ層	I a	サヌカイト	完存	3.95	3.2	0.9	13.92		150
15	J 8 第Ⅲ層	I b	サヌカイト	完存	2.1	2.0	0.6	2.43		151
16	K 9 第Ⅲ層	I b	サヌカイト	完存	2.2	2.8	0.5	2.96		151
17	M 11 第Ⅲ層	I b	サヌカイト	完存	2.9	3.1	0.7	7.41		151
18	D 6 第Ⅲ層	I b	サヌカイト	完存	3.25	2.9	0.85	8.75		151
19	D 6 第Ⅲ層	I b	サヌカイト	完存	3.4	3.4	1.0	13.03		151
20	F 6 第Ⅲ層	I b	サヌカイト	完存	4.2	2.6	0.7	10.54		151
21	D 6 第Ⅲ層	I b	サヌカイト	完存	3.1	2.75	0.9	8.89		151
22	D 7 方形周溝墓1	II a	サヌカイト	完存	2.8	2.2	0.8	6.66		151
23	N 5 第Ⅲ層	II a	サヌカイト	完存	2.9	3.85	0.65	6.85		151
24	L 5 第Ⅲ層	II a	サヌカイト	完存	2.6	3.35	0.8	6.28		151
25	D 6 第Ⅲ層	II a	サヌカイト	完存	3.4	4.4	0.7	10.24		151
26	E 6 第Ⅲ層	II a	サヌカイト	完存	2.9	3.6	0.9	9.40		151
27	C 6 第Ⅲ層	II a	サヌカイト	完存	3.65	3.2	1.1	11.62		151
28	L 6 第Ⅲ層	II b	サヌカイト	完存	3.7	3.3	1.0	14.98		151

第28表 ノミ状石器観察表

遺物番号	出土位置	分類	石材	遺存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	挿図番号
1	N 1 第Ⅲ層	I	サヌカイト	完存	2.6	2.4	0.8	5.61		152
2	M 10 第Ⅲ層	I	サヌカイト	完存	3.2	1.5	1.0	6.82		152
3	I 9 第Ⅲ層	I	サヌカイト	完存	3.2	2.9	0.9	6.33		152
4	D 4 第Ⅲ層	I	チャート	完存	3.1	3.6	1.1	13.45		152
5	H 15 第Ⅲ層	I	サヌカイト	完存	3.2	3.8	1.4	15.37		152
6	F 5 第Ⅲ層	I	下呂石	完存	3.3	2.8	0.8	6.55		152
7	C 4 第Ⅲ層	I	サヌカイト	完存	3.0	5.4	0.85	15.10		152
8	C 6 第Ⅲ層	I	下呂石	完存	3.3	3.4	1.0	7.12		152
9	M 10 第Ⅲ層	II	サヌカイト	完存	3.5	2.6	0.95	8.77		152
10	D 7 第Ⅲ層	II	下呂石	完存	3.1	2.9	0.7	6.86		152
11	C 6 第Ⅲ層	II	下呂石	完存	3.7	2.8	1.5	12.32		152
12	不明	II	頁岩	完存	3.1	3.2	1.1	12.07		152
13	不明	II	頁岩	完存	2.5	2.6	1.1	4.60		152
14	C 5 第Ⅲ層	II	下呂石	完存	3.7	2.5	1.1	8.75		152
15	N 3 第Ⅲ層	II	サヌカイト	完存	3.1	3.05	0.8	8.11		152
16	E 5 第Ⅲ層	II	サヌカイト	完存	4.1	2.0	1.2	11.25		152
17	B 6 方形周溝墓1	II	サヌカイト	完存	2.4	4.2	1.3	15.59		152
18	H 1 第Ⅲ層	II	サヌカイト	完存	3.5	4.5	1.6	29.56		152
19	N 9 第Ⅲ層	II	サヌカイト	完存	3.8	3.0	1.75	20.34		152
20	K 10 第Ⅲ層	II	石英	完存	3.3	1.7	1.0	5.79		152
21	C 3 第Ⅲ層	II	石英	完存	3.2	2.2	0.95	5.62		152
22	C 5 第Ⅲ層	II	サヌカイト	完存	2.8	2.5	1.6	9.33		153
23	C 3 第Ⅲ層	II	サヌカイト	完存	2.2	2.15	0.95	3.61		153
24	D 2 第Ⅲ層	II	下呂石	完存	3.5	2.0	1.1	8.06		153
25	N 1 第Ⅲ層	III	サヌカイト	完存	5.4	1.4	1.1	9.87		153
26	N 1 第Ⅲ層	III	サヌカイト	完存	7.4	1.6	1.7	21.18		153
27	I 9 第Ⅲ層	I	下呂石	完存	4.55	4.5	1.5	29.30		153

第29表 楔形石器観察表

遺物番号	出土位置	分類	石材	遺存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	插図番号
1	N9 第Ⅲ層	定角	安山岩	完存	5.6	3.6	1.6	42.41		154
2	D4 第Ⅲ層	定角	硬砂岩	基部端欠	(6.1)	4.3	(1.75)	(75.91)		154
3	G9 第Ⅲ層	定角	硬砂岩	基部端欠	(7.5)	5.0	2.7	(154.53)		154
4	H6 第Ⅲ層	定角	安山岩	基部端欠	(6.1)	4.3	2.2	(84.21)		154
5	M3 第Ⅲ層	定角	硬砂岩	基部端欠	(8.4)	5.35	2.2	(198.21)		154
6	B6 第Ⅲ層	定角	蛇紋岩	基部端欠	(6.5)	5.3	(1.95)	(84.43)		154
7	N8 第Ⅲ層	定角	安山岩	完存	8.1	4.6	2.5	133.69		154
8	C6 第Ⅲ層	定角	安山岩	完存	(10.8)	(4.7)	(2.85)	190.89	楔に転用	154
9	L3 第Ⅲ層	定角	安山岩	下半2分の1欠	(5.1)	(4.7)	(3.15)	(97.55)		155
10	H9 第Ⅲ層	定角	石英鉄紋片岩	下半2分の1欠	(7.2)	(5.0)	(2.45)	(155.86)		155
11	N8 第Ⅲ層	定角	砂岩	基部端・下半欠	(7.1)	(5.45)	(3.2)	(193.90)		155
12	G7 第Ⅲ層	定角	緑泥片岩	身部片	(6.0)	(4.55)	(1.6)	(53.87)		155
13	N6 第Ⅲ層	定角	蛇紋片岩	基部端小片	(3.2)	(3.3)	(1.05)	(11.36)		155
14	不明	定角	砂岩	身部片	(4.5)	(5.0)	(1.9)	(50.98)	他器種か?	155
15	Nカ 第Ⅲ層	乳棒状?	細雲母石英片岩	身部小片	(4.1)	(2.4)	(2.3)	(37.82)	石棒片	155
16	D7 第Ⅲ層	定角	硬砂岩	刃部片	(5.2)	(3.1)	(1.4)	(19.70)	二次加工有剥片に転用	155
17	G8 第Ⅲ層	定角	砂岩	刃部片	(7.35)	(2.65)	(2.35)	(40.81)		155
18	N3 第Ⅲ層	定角	砂岩	刃部片	(5.2)	(3.05)	(1.1)	(16.26)		155
19	L11 第Ⅲ層	定角	硬砂岩	完存	7.0	5.75	3.2	201.38	楔に転用	155

第30表 磨製石斧観察表

遺物番号	出土位置	分類	石材	遺存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	插図番号
1	I18 第Ⅲ層	有溝I b	砂岩	完存	6.05	5.3	1.5	54.34		156
2	K9 第Ⅲ層	有溝I a	砂岩	完存	7.4	5.1	1.0	52.54		156
3	Nウ 第Ⅲ層	有溝I b	砂岩	完存	7.5	5.1	1.35	63.91		156
4	Nカ 第Ⅲ層	有溝I b	砂岩	完存	8.2	5.8	2.2	165.77		156
5	I9 第Ⅲ層	有溝I d	砂岩	完存	10.5	6.8	1.9	190.23		156
6	E6 第Ⅲ層	有溝I d	砂岩	完存	8.4	7.0	1.4	93.64		156
7	D6 第Ⅲ層	有溝I b	砂岩	完存	11.1	5.8	1.55	148.41		156
8	M8 第Ⅲ層	有溝I a	砂岩	完存	9.9	6.4	1.15	85.59		156
9	F7 第Ⅲ層	有溝I a	砂岩	完存	9.3	4.4	2.1	112.40		156
10	D4 第Ⅲ層	有溝I a	砂岩	完存	10.2	9.55	3.8	488.71		156
11	K4 第Ⅲ層	有溝I b	砂岩	完存	12.9	6.25	2.8	270.71		156
12	J3 第Ⅲ層	有溝I a	砂岩	完存	7.6	5.1	1.9	72.73		156
13	G4 第Ⅲ層	有溝I a	砂岩	完存	7.1	5.3	1.3	57.79		156
14	F7 第Ⅲ層	有溝I a	砂岩	完存	8.5	7.6	1.8	156.24		156
15	西・北トレンチ 排土	有溝I a	砂岩	完存	7.8	6.4	7.4	111.66		156
16	N1 第Ⅲ層	有溝I a	砂岩	完存	9.2	7.9	2.2	210.68		156
17	H8 第Ⅲ層	有溝I b	砂岩	完存	12.0	6.1	3.6	327.13		156
18	H7 第Ⅲ層	有溝I a	砂岩	完存	15.3	7.7	2.8	478.35	敲打痕有	156
19	B5 第Ⅲ層	有溝I a	砂岩	完存	13.8	8.0	3.05	455.85	敲打痕有	156
20	H14 第Ⅲ層	有溝II	砂岩	完存	15.5	13.35	2.9	703.27	敲打痕有	156
21	N9 第Ⅲ層	有溝I a	砂岩	完存	14.9	8.4	3.9	539.64	両面に著しい敲打痕有	156
22	F8 第Ⅲ層	有溝I a	砂岩	3分の2欠	(9.0)	(4.0)	(3.8)	210.66	側面にも有	157
23	Mオ 第Ⅲ層	有溝I b	砂岩	2分の1欠	11.1	11.1	2.6	367.15	多条	157
24	K8 第Ⅲ層	有溝I b	砂岩	2分の1欠	(12.7)	(8.1)	(2.6)	259.92	多条	157
25	H6 第Ⅲ層	有溝I a	砂岩	完存	16.6	9.8	3.8	727.46	敲打痕有	157
26	Nエ 第Ⅲ層	有溝I b	砂岩	3分の1欠	23.7	18.3	11.1	5.9(kg)	多条、幅広、敲打痕有	157
27	F4 第Ⅲ層	有溝大型	砂岩	完存	52.1	25.0	16.9	24.8(kg)		158
1	C7 第Ⅲ層	磁石大型	砂岩	完存	39.5	17.8	14.5	11.6(kg)		159
2	D7 第Ⅲ層	磁石大型	砂岩	完存	50.3	13.2	5.4	5.0(kg)		159

第31表 砥石・有溝砥石観察表

遺物番号	出土位置	分類	石材	遺存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	挿図番号
1	Iケ 第Ⅲ層	—	砂岩	完存	8.2	7.0	1.4	103.43	敲石片を転用	160
2	N才 第Ⅲ層	—	砂岩	一端欠	5.4	(9.0)	1.05	(52.08)		160

第32表 部分磨製石器観察表

遺物番号	出土位置	分類	石材	遺存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	挿図番号
1	F7 第Ⅲ層	有孔	整石	3分の1欠	(6.6)	5.15	1.9	(15.44)		161
2	I8 第Ⅲ層	有孔	整石	3分の1欠	(7.0)	(6.4)	1.3	(13.68)		161
3	C6 第Ⅲ層	有孔	整石	下端欠	(5.9)	5.4	1.4	(4.47)		161
4	B7 第Ⅲ層	未貫通孔	整石	下半欠?	(4.2)	6.1	1.5	(10.56)		161
5	不明	未貫通孔	整石	2分の1欠	(3.5)	4.1	1.4	(8.55)		161
6	K6 第Ⅲ層	未貫通孔	整石	完存	6.7	5.0	4.2	19.50		161
7	C3 第Ⅲ層	整形片	整石	4分の3欠	(4.0)	(3.6)	(1.3)	(5.79)		161
8	C2 第Ⅲ層	整形片	整石	3分の1欠?	(5.3)	(3.7)	1.8	(7.35)		161
9	F2 第Ⅲ層	整形片	整石	完存	4.5	5.2	2.3	14.64	未成品?	161
10	D7 第Ⅲ層	整形片	整石	3分の1欠	(5.5)	6.4	2.2	(21.92)		161
11	不明	大型	整石	完存	10.7	8.35	5.8	200.21	敲石か?	162
12	不明	大型	整石	4分の1欠	(12.1)	(9.6)	(4.3)	116.42	敲打痕有	162
13	不明	大型	整石	4分の3欠	(7.2)	(6.4)	(8.4)	159.38		162

第33表 軽石製石器観察表

遺物番号	出土位置	分類	石材	遺存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	挿図番号
1	N4 第Ⅲ層	—	粘板岩	完存	9.2	7.4	1.9	147.88		162

第34表 破器観察表

遺物番号	出土位置	器種	石材	遺存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	挿図番号
1	M7 第Ⅲ層	敲石	砂岩	一部欠損	5.7	4.3	1.1	(55.66)	ベンガラ?	163
2	H6 第Ⅲ層	敲石	安山岩	完存	11.3	9.5	5.7	972.93	水銀朱	163
3	M10 第Ⅲ層	敲石	砂岩	3分の1欠	(11.4)	(8.9)	5.0	(636.42)	水銀朱	163
4	E6 第Ⅲ層	磨石	花崗岩	完存	7.1	4.9	4.7	223.40	ベンガラ	163
5	不明	磨石	花崗岩	完存	9.6	7.4	7.2	771.00	水銀朱	163
6	M8 第Ⅲ層	磨石	花崗岩	完存	8.9	6.6	6.3	528.05	水銀朱	163
7	E6 第Ⅲ層	敲石	花崗岩	完存	10.4	6.9	6.7	620.99	水銀朱	163
8	H5 第Ⅲ層	敲石	砂岩	完存	8.6	7.0	6.3	518.86	水銀朱	163
9	K7 第Ⅲ層	敲石	片麻岩	完存	13.5	7.5	6.0	954.48	水銀朱?	163

第35表 赤色顔料付着石器観察表

遺物番号	出土位置	分類	石材	遺存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	挿図番号
1	B6 第Ⅲ層	—	サヌカイト	完存	3.5	4.2	0.7	10.70		164
2	B4 第Ⅲ層	—	サヌカイト	完存	3.5	3.95	1.0	12.50		164

第36表 剥片観察表

遺物番号	出土位置	分類	石材	遺存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	挿図番号
1	D7 第Ⅲ層	—	サヌカイト	完存	4.3	5.4	1.8	31.40		165
2	Nカ 第Ⅲ層	—	サヌカイト	完存	5.2	7.3	2.3	74.31		165
3	I9 第Ⅲ層	—	下呂石	完存	5.2	5.2	2.0	53.75		165
4	Iエ 第Ⅲ層	—	サヌカイト	完存	4.2	5.5	1.7	37.24		165
5	C7 第Ⅲ層	—	サヌカイト	完存	3.0	7.0	1.7	28.86		165
6	Iキ 第Ⅲ層	—	サヌカイト	完存	4.3	6.0	2.2	46.03		165
7	D3 第Ⅲ層	—	サヌカイト	完存	7.4	3.9	1.5	48.86		165
8	Nオ 第Ⅲ層	—	サヌカイト	完存	7.9	8.9	4.9	331.89		165
9	H14 第Ⅲ層	—	サヌカイト	2分の1	(3.4)	(6.75)	1.4	(49.13)		165
10	E7 第Ⅲ層	—	サヌカイト	完存	6.1	9.4	3.5	233.57		165
11	M7 第Ⅲ層	—	サヌカイト	完存	10.0	14.5	6.0	785.96		166
12	D3 第Ⅲ層	—	サヌカイト	完存	7.7	6.7	4.6	296.37		166
13	F5 第Ⅲ層	—	サヌカイト	完存	7.1	10.2	2.9	224.36		166
14	I7 第Ⅲ層	—	サヌカイト	完存	6.7	7.7	3.6	138.13	大部分が風化度強い	166
15	K9 第Ⅲ層	—	サヌカイト	完存	5.6	4.95	2.35	55.09		166
16	H11 第Ⅲ層	—	サヌカイト	完存	10.0	14.0	3.75	668.21		166

第37表 石核観察表

遺物番号	出土位置	分類	石材	遺存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	挿図番号
1	E7 第Ⅲ層	—	サヌカイト	—	4.9	8.0	0.9	59.22	全剥離面風化度強い	167
2	C5 第Ⅲ層	—	サヌカイト	—	6.8	10.2	3.1	78.76	全剥離面風化度強い	167
3	不明	—	サヌカイト	—	4.1	9.2	3.1	151.18	全剥離面風化度強い	167
4	E5 第Ⅲ層	—	サヌカイト	—	7.8	8.1	5.6	376.59	全剥離面風化度強い	167
5	K9 第Ⅲ層	—	サヌカイト	—	6.9	3.4	1.2	27.12	全剥離面風化度強い	167
6	Nキ 第Ⅲ層	—	サヌカイト	—	8.4	5.7	1.9	83.34	全剥離面風化度強い	167
7	Nオ 第Ⅲ層	—	サヌカイト	—	8.0	6.3	1.4	77.51	全剥離面風化度強い	167
8	M8 第Ⅲ層	—	サヌカイト	—	5.3	6.2	3.5	145.07	全剥離面風化度強い	167
9	Nイ 第Ⅲ層	—	サヌカイト	—	9.25	7.2	1.8	116.98	全剥離面風化度強い	167

第38表 素材観察表

遺物番号	出土位置	分類	石材	遺存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	挿図番号
1	N4 第Ⅲ層	—	砂岩	下端一部欠	(5.8)	2.8	1.2	(23.03)		168
2	E2 第Ⅲ層	—	砂岩	片面剥落	5.4	3.9	(1.1)	(29.34)	受熱による剥落・変色	168
3	K3 第Ⅲ層	—	砂岩	完存	7.35	3.55	1.15	36.53		168
4	G8 第Ⅲ層	—	砂岩	完存	8.2	3.5	2.6	86.39		168
5	I10 第Ⅲ層	—	砂岩	2分の1欠	(2.9)	4.0	1.0	(17.69)		168
6	Iウ 第Ⅲ層	—	砂岩	2分の1欠	(3.3)	4.1	1.0	(19.56)		168
7	D4 第Ⅲ層	—	砂岩	完存	8.0	4.55	1.25	91.24		168
8	F5・C3 第Ⅲ層	—	砂岩	4分の1欠	(10.2)	(6.8)	(2.35)	(141.51)	受熱による破碎・変色	168
9	A3 第Ⅲ層	—	砂岩	完存?	3.8	3.2	1.0	13.52	傷多い	168
10	N2 第Ⅲ層	—	砂岩	上部欠	(10.25)	7.9	(2.2)	(207.89)	受熱?	168
11	G7 第Ⅲ層	—	砂岩	ほぼ完存	8.1	7.2	2.65	(176.72)	一部小新欠	169
12	G5 第Ⅲ層	—	砂岩	完存	8.0	7.9	1.5	127.72		169

第39表 岩偶観察表

遺物番号	出土位置	分類	石材	遺存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	査定番号
1	I 9 第Ⅲ層	—	砂岩	完存	4.1	3.9	1.3	21.24		170
2	N 6 第Ⅲ層	—	砂岩	完存?	3.8	2.9	1.3	16.05		170
3	C 5 第Ⅲ層	—	砂岩	完存	7.2	6.6	2.0	127.92		170
4	K 8 第Ⅲ層	—	砂岩	完存	7.65	5.2	1.65	90.27		170
5	F 6 第Ⅲ層	—	砂岩	完存	7.45	6.6	1.3	80.27		170
6	C 3 第Ⅲ層	—	砂岩	一部欠	4.55	3.6	1.0	(17.29)		170
7	B 4 第Ⅲ層	—	砂岩	一端欠	(8.7)	6.9	2.0	(151.52)		170
8	D 2 第Ⅲ層	—	砂岩	一部欠	9.5	6.4	2.9	(202.79)		170
9	I 9 第Ⅲ層	—	砂岩	一端欠	(8.9)	2.9	2.2	(69.99)		170
10	不明	—	砂岩	一部欠	11.2	10.5	2.05	(312.85)		170

第40表 線刻礫観察表

遺物番号	出土位置	器種	石材	遺存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	査定番号
1	E 8 第Ⅲ層	石棒	石英質砂岩	3分の2欠	(17.3)	(10.4)	(9.2)	2,36(kg)	受熱、大型品頭部	171
2	L 8 第Ⅲ層	石棒	流紋岩質溶結凝灰岩	3分の2欠	(12.8)	(10.25)	(8.1)	1.51(kg)	受熱、大型品頭部	171
3	D 4・N 11 第Ⅲ層	石棒	砂岩	3分の1欠	(13.3)	(10.1)	(8.0)	3.11(kg)	受熱、大型品中間部	171
4	D 7 第Ⅲ層	石棒	砂岩	3分の2欠	(28.7)	(9.9)	(8.6)	3.03(kg)	受熱、大型品基部	171
5	F 6 第Ⅲ層	石棒	粘板岩	頭部片	(4.9)	(5.1)	(4.15)	120.61	加飾、鋸部有	172
6	L 4 第Ⅲ層	石棒	緑泥片岩	頭部片	(8.9)	(2.6)	(1.4)	51.42	基部?未端加工	172
7	D 3 第Ⅲ層	石棒	絹雲母石英片岩	完存	20.7	2.7	2.1	167.33	一部加飾	172
8	I カ・N ウ・I オ 第Ⅲ層	石棒	絹雲母石英片岩	2分の1欠	(21.1)	(3.7)	(2.6)	313.60	中間部	172
9	C 2 第Ⅲ層	石棒	絹雲母黒雲母石英片岩	2分の1以上欠	(12.6)	(2.5)	(2.3)	112.86	基部片	172
10	O 2 南壁トレンチ・H 10 第Ⅲ層	石棒	絹雲母石英片岩	2分の1以上欠	(17.8)	(2.7)	(6.3)	183.33	基部端線刻有	172
11	H 8・N ウ 第Ⅲ層	石棒	粘板岩	2分の1欠	(17.0)	(2.1)	(1.8)	127.07	中間部	172
12	G 2 第Ⅲ層	石棒	絹雲母石英片岩	基部小片	(5.8)	(2.9)	(2.1)	27.86	研磨丁寧	172
13	M 9 第Ⅲ層	石剣	緑泥片岩	5分の4欠	(9.4)	(2.9)	(2.1)	78.83	基部片石棒?	172
14	C 3・C 4 第Ⅲ層	石刀	石墨千枚岩	3分の2欠	(13.7)	(2.6)	(2.4)	150.93	中間部	172
15	G 6 第Ⅲ層	石刀	絹雲母石英片岩	刀部片	(10.3)	(2.25)	(2.2)	45.86		172
16	C 5 第Ⅲ層	石刀	緑泥片岩	完存	29.5	4.05	2.7	506.58		172
17	K 10 第Ⅲ層	石棒	石墨石英片岩	3分の1欠	(47.0)	(5.0)	(4.2)	1.47(kg)		172
18	I 9 第Ⅲ層	石棒	粘板岩	頭部・基部欠	(45.4)	(4.5)	(4.0)	1.36(kg)	中間部	172
19	M ウ 第Ⅲ層	石棒	絹雲母緑泥石英片岩	完存	19.1	3.8	2.8	306.64	自然縞?	173
20	F 6 第Ⅲ層	石棒	絹雲母石英片岩	完存	25.1	4.9	2.6	501.10	自然縞?	173
21	G 6 第Ⅲ層	石剣	絹雲母石墨石英片岩	基部小片	(7.0)	(3.25)	(0.8)	25.55	偏平	173
22	H 12 第Ⅲ層	石棒	絹雲母石墨石英片岩	完存	(16.2)	1.9	1.3	64.65	他器種もしくは自然縞?	173
23	J 8 第Ⅲ層	石棒	緑泥片岩	2分の1欠	(15.4)	(2.6)	(2.3)	162.80		173
24	J 10 第Ⅲ層	石棒	絹雲母石墨石英片岩	2分の1以上欠	(16.3)	(5.25)	(4.2)	654.63	敲打痕有	173
25	I 3 第Ⅲ層	石剣	絹雲母石墨石英片岩	3分の1欠	(29.4)	(4.5)	(2.05)	477.21		173
26	I 9 第Ⅲ層	石刀	絹雲母綠縞石綠泥石英片岩	完存	54.4	4.3	2.8	1.28(kg)		173
27	D 5 第Ⅲ層	石棒	絹雲母石英片岩	2分の1欠	(25.8)	(4.7)	(3.3)	659.46		173
28	J 7・H 15 第Ⅲ層	石棒	絹雲母石墨石英片岩	4分の3以上欠	(23.1)	(4.9)	(3.4)	485.88		173
29	L 10 第Ⅲ層	石棒	赤鉄鉱石英片岩	2分の1以上欠	(23.7)	(7.5)	(4.3)	1.19(kg)		173
30	D 1・D 2・D 3 第Ⅲ層	石棒	絹雲母石墨石英片岩	3分の1欠	(29.6)	(5.7)	(3.8)	961.77	受熱?	173
31	M 7 第Ⅲ層	石棒	絹雲母赤鉄鉱石英片岩	3分の1以上欠	(40.1)	(7.5)	(6.0)	3.58(kg)		173

第41表 石棒・石剣・石刀観察表

遺物番号	出土位置	器種	石材	遺存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	査定番号
1	G 9 第Ⅲ層	独鈷状石製品	砂岩	4分の1欠	(5.9)	(10.3)	3.55	(237.68)	一端欠、加飾有	174
2	D 2 第Ⅲ層	独鈷状石製品	砂岩	4分の3欠	(5.1)	(4.0)	(2.2)	(49.60)	器体中央部のみ	174
3	C 7 第Ⅲ層	有孔円形石製品	細粒砂岩	不明	5.6	5.6	2.0	79.95		174
4	H 14 第Ⅲ層	小型鉢形石製品	細粒砂岩	完存	8.6	7.7	3.2	140.82		174

第42表 独鈷状石製品・有孔円形石製品・鉢形石製品観察表

遺物番号	出土位置	器種	石材	遺存状態	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	査定番号
1	D 5 第Ⅲ層	球状石製品	細粒砂岩	完存	3.5	3.4	2.9	35.01		175
2	F 7 第Ⅲ層	垂飾	絹雲母砂岩片岩	完存	1.8	3.6	0.2	2.03		175
3	西・南トレンチ 排土	小玉	ヒスイ	完存	0.75	0.7	0.55	0.35		176
4	I 9 第Ⅲ層	小玉	ヒスイ	完存	0.85	0.8	0.5	0.49		176

第43表 球状石製品・垂飾・小玉観察表

4 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代に関しては、中期末の方形周溝墓と推定される溝が2ヵ所で検出され、若干の土器が出土している（第177図）。この方形周溝墓1と2は、約30m離れて方位も異なっており、同時代ではあるが別な群に属したものと推定される。

このほかには遺構は認められず、微量の土器が出土したのみであった。

方形周溝墓1 調査区の北東隅寄りに位置する。西側の周溝と、これに続く南側の周溝の一部が検出されたのみである。しかし、西周溝の北端は東に曲がり始めていることから、南北規模は溝の芯々距離でほぼ12.5mと推定できる。したがって、ほぼ正方形と推定した場合は全体の西四分の一程が調査できたことになる。周溝は、北西隅と南西隅は丸みをもつて連続しており、いわゆる陸橋はない。周溝の隅部分は幅狭く浅い。

西周溝は、内側縁が直線的で外側縁はふくらみをもっている。最大幅は約1.8m、深さは0.5m程を残していた。溝の中央付近の底からやや浮いた位置で下記の土器が出土しており、埋葬や供獻に用いたものと推定される。

壺4点と高杯2点が出土した。いずれも中期末に属するものであり、当遺構の所属時期を示している。

1は、粗製の壺であり、体部に焼成後の穿孔が見られる。全体をハケ調整し、ヘラミガキやナデによって仕上げている。淡い黄色から灰白色をなし、口径12.4cm、器高30.5cmの大きさである。

2も良く似た大きさだが、受口であり体上部上半の一部にのみ波状文を施している。やはりハケ調整の上にヘラミガキやナデを重ねるが、その施す方向は1とは異なる。鈍い橙色を呈し、口径11.5cm、器高29.8cmである。

6も受口の壺であり、ハケ調整の上にヘラミガキやナデを重ねる。しかし文様の位置が異なり、櫛状具による刻みが受口下端に、横線文と簾状文が頸部に見られる。淡い黄色であり、口径12.6cmを測る。

7は粗製の小型壺である。全体をハケ調整し、ヘラミガキやナデによって仕上げる点は他と変わらないが、体部にはヘラケズリも認められる。橙褐色を

なし、口径5.8cm、器高11.9cmの大きさである。

3は、やや浅い椀型の杯部を持つ高杯である。脚部はやや細いが連續成形であり、円盤充填法が見られる。脚下半部にハケメを残すが、他は良くヘラミガキしている。暗橙色から暗黄橙色であり、口径27cm、器高24cmのほぼ完形である。

4は、基本的に3と同巧同大の高杯である。ただ杯部に丸みがなく、口縁部付近は強くヨコナデしている。又、脚部は3よりも太い。ほぼ完形で暗黄橙色を呈し、口径25.2cm、器高19.6cmである。

方形周溝墓2 東に設定した調査溝の中央付近で検出された。南の周溝と、これから連続して北に延びる溝の一部が確認されたが、南東隅は中世の条里溝によって破壊されていた。東西規模は、東と西の周溝の芯々距離から約9.5mと推定される。東周溝は、南周溝の内縁より北に約2.5mの位置で内側から細くなっている点が注目される。又、南西隅も特に幅狭くなく、浅くもない。全般に周溝の幅は0.8m～1.0m、深さは10cm前後を残しており、方形周溝墓1のように各溝の中央部が外に向かって幅広くなる傾向は認められなかった。

中期の土器が出土した。図示したように中期末が中心だが、中期中葉の例（8）も含む。ただし、これは溝の上から出土して磨滅したものであり、他の土器との時期幅があり過ぎ、方形周溝墓2の築造期を示すものとは考え難い。したがって、当遺構は中期末に属する可能性が最も高い。

8は、口縁部が強く外反した太頸の壺である。口唇に浅い刻み列を持ち、頸部には櫛描横線文が施されている。以下はハケメをナデケシたままで、無文である。橙褐色で、口径は12.8cmである。

9は受口壺であるが、方形周溝墓1出土の2や6よりも頸が細い。受口部にはヘラ描斜格子文が描かれ、口唇から頸部にかけて1本4対の棒状浮文が貼付されている。この棒状浮文には、櫛状具による刻みが施されている。頸部には、櫛描横線文がやや幅広く見られ、体上部にはヘラ描斜格子文が疎らに施されている。体部のヘラミガキは、最大径付近が横位、以下が縦位に施されている。

10はやや大型の壺であり、丸みのある体部にはハケ調整が目立ち、ヘラミガキは下部に疎らに施されるのみである。橙褐色で、底径は 6.7cmである。

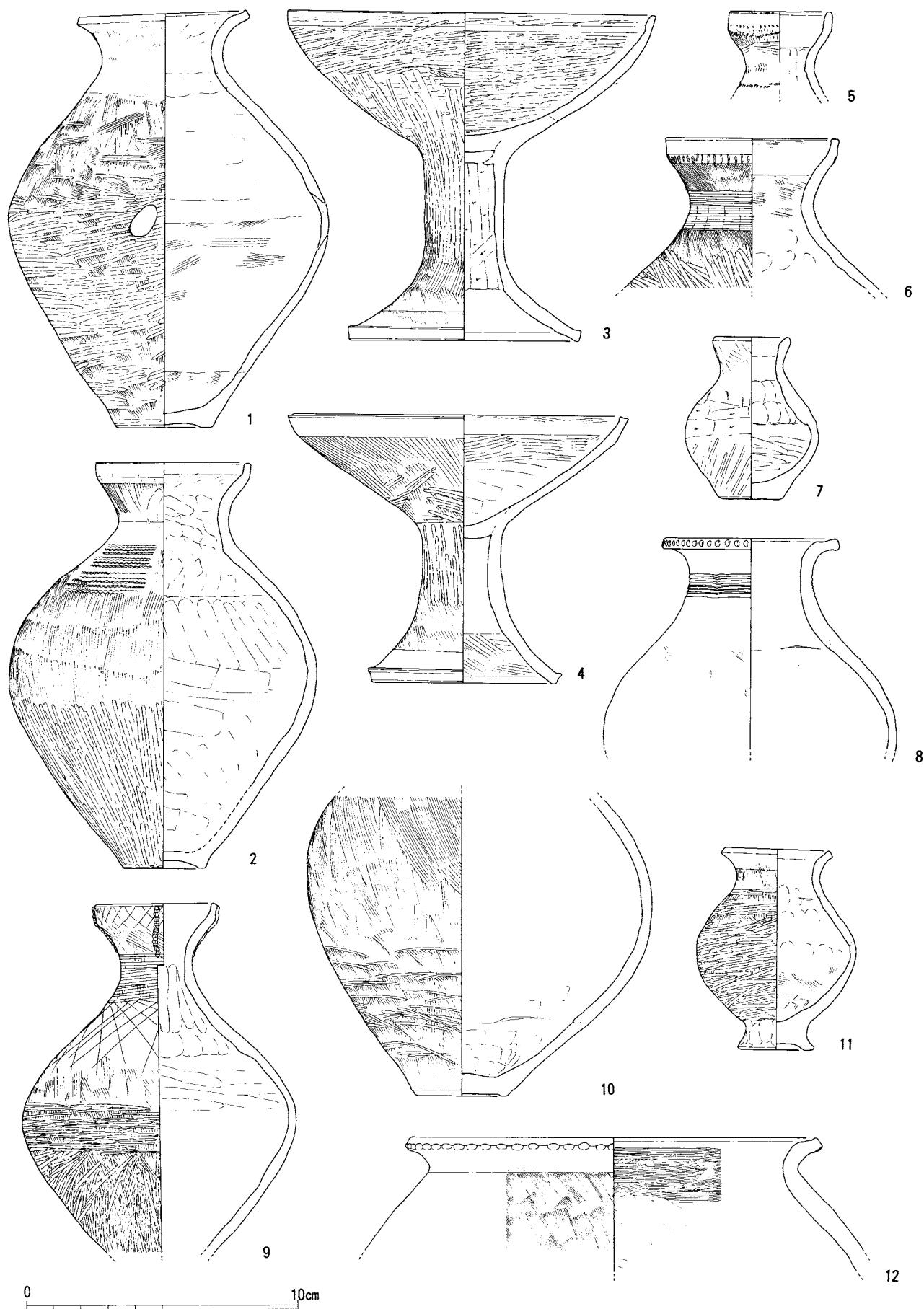
11は小型の壺であり、低い脚台が付く。頸部は相対的に大きく、口縁部は緩やかに開く。丸みのある体部にはハケ調整の後にヘラミガキを施す。脚台の外面は指圧調整のままだが、底面にはヘラミガキを残す。暗黄橙色であり、口径は 7.6cm、器高は14.8cmを測る。

その他 上記のほかに、微量の土器が出土した。

いずれも中期末に属するものである。

5は小型の受口壺の口頸部片である。外面のタテハケを、口縁部ではヨコナデで、頸部では工具によるナデによって消している。そして受口部下端と頸部には、二枚貝の貝殻腹縁による刺突文を施す。鈍い黄橙色を呈し、口径は 7.4cmである。

12は大型甕である。口唇下端には指頭圧痕列を施し、体部は強く張り出す。口縁部や体部内面はナデるが、そのほかにはハケ調整を密に施す。淡い黄色を呈し、口径は30cm程と推定される。 (山田 猛)



第177図 弥生土器実測図 (1 : 4) 1~4・6・7=方形周溝墓1、8~11=方形周溝墓2、5・12=包含層

N B地区の調査

4カ所の調査区では最も北に位置する。調査区の北側・西側には水路があり、さらに北は削平を受け水田になっている。平成2年度に水路部分の立会い調査を行い、飛鳥時代の堅穴住居1棟、時期不明の

堅穴住居2棟を確認している^①。このうち1棟の南半分は今回の調査区にもまたがるはずであったが、今回の調査では確認することができなかった。

1 遺構

S H 2 7 1 遺構は削平を受けており、床面までの深さは10cmほどしか残っていない。調査は主柱穴を確認するために床面より7~8cmほど掘り下げて行った。

住居は東西4.5m、南北3.9mの隅丸方形でほぼ南面している。北壁中央に竈、北西隅には貯蔵穴と思われる土坑を持つ。主柱穴4カ所および周溝を確認した。

なお、住居中央部分にも焼土まじりの粘土があり、別の堅穴住居を破壊して住居を建てた可能性がある。

竈の調査はまず十字にトレーナーを設定し、断面を観察し、その際に竈の本体と思われる黄色の粘土と竈の痕跡と思われる灰褐色まじりの黒色土を確認した。つぎに平面観察を行いながら焼土・炭のまじる部分を取り除いた。その結果竈の本体は横幅約95cm、奥行約50cmで、床面から約12cmが残存し、内部を床面より若干掘り下げていることを確認した。

S H 2 7 2 東西約4.5m、南側が削平されているため南北は不明である。ほぼ南面しており、北壁中央に竈の痕跡と思われる焼土まじりの粘土、北西部

分に貯蔵穴と思われる土坑を持つ。主柱穴4カ所を確認したが、いずれの主柱穴にも切り合いがあり、建て替えが想定できる。

S H 2 7 3 遺構は削平を受けており、床面までの深さは10cmほどしか残っていない。調査は主柱穴を確認するために床面より10cmほど掘り下げて行った。住居は4.6m×3.9mの隅丸方形で、南東に面して建てられている。北西壁中央に竈、北隅に貯蔵穴と思われる土坑を持つ。主柱穴4カ所を確認したもの、北西・南西の柱穴の埋土は他と異なっており、別の遺構の可能性がある。

竈はS H 2 7 1と同じ方法で調査した。上部は削平を受けているが馬蹄状をなし、横幅約95cm、奥行約45cmで、床面から約8cmが残存している。また、北側には煙出しを持っている。

S K 2 7 4 長径約2.4m、深さ約46cmの土坑で埋土には焼土を含んでいる。東側3分の2ほどは搅乱を受けている。出土した遺物により鎌倉時代の土坑であると考えられる。

2 遺物

S H 2 7 1出土の土器

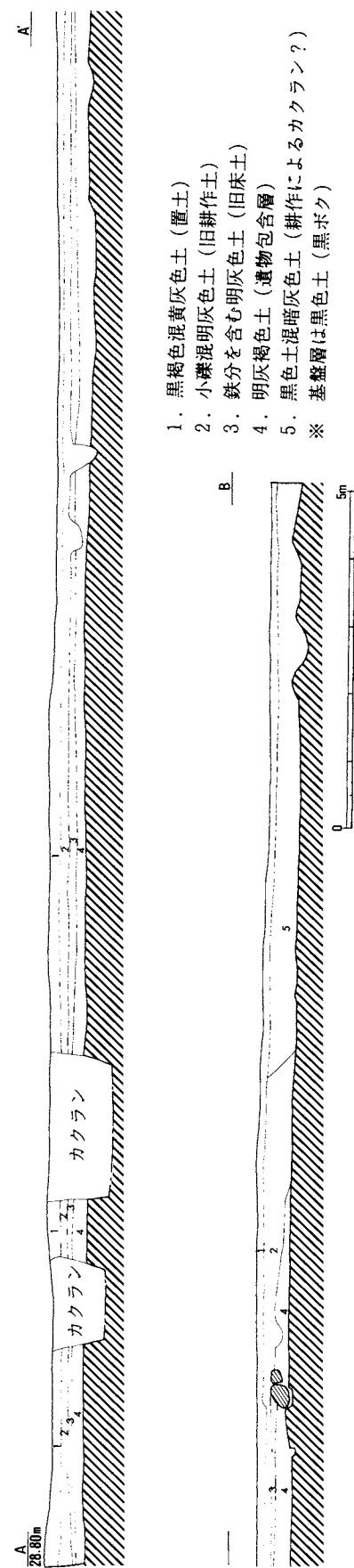
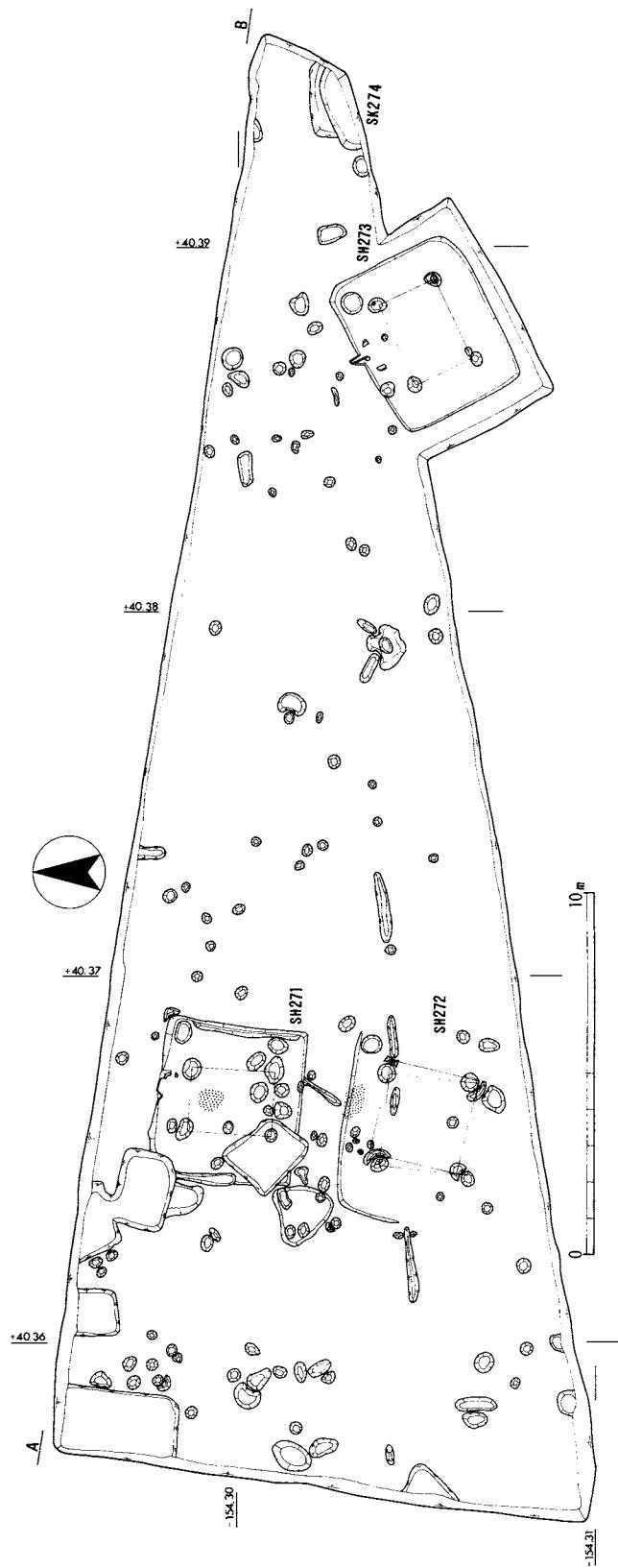
土師器皿（2） 口径19.6cmの皿で、口縁部の25%程が残存する。口縁にはヨコナデ、内面にはナデが施され、外面にはユビオサエの痕跡がみられる。胎土には1~1.5mm程の砂粒を含み、焼成は良好、色調は浅黄橙色である。

S H 2 7 3出土の土器

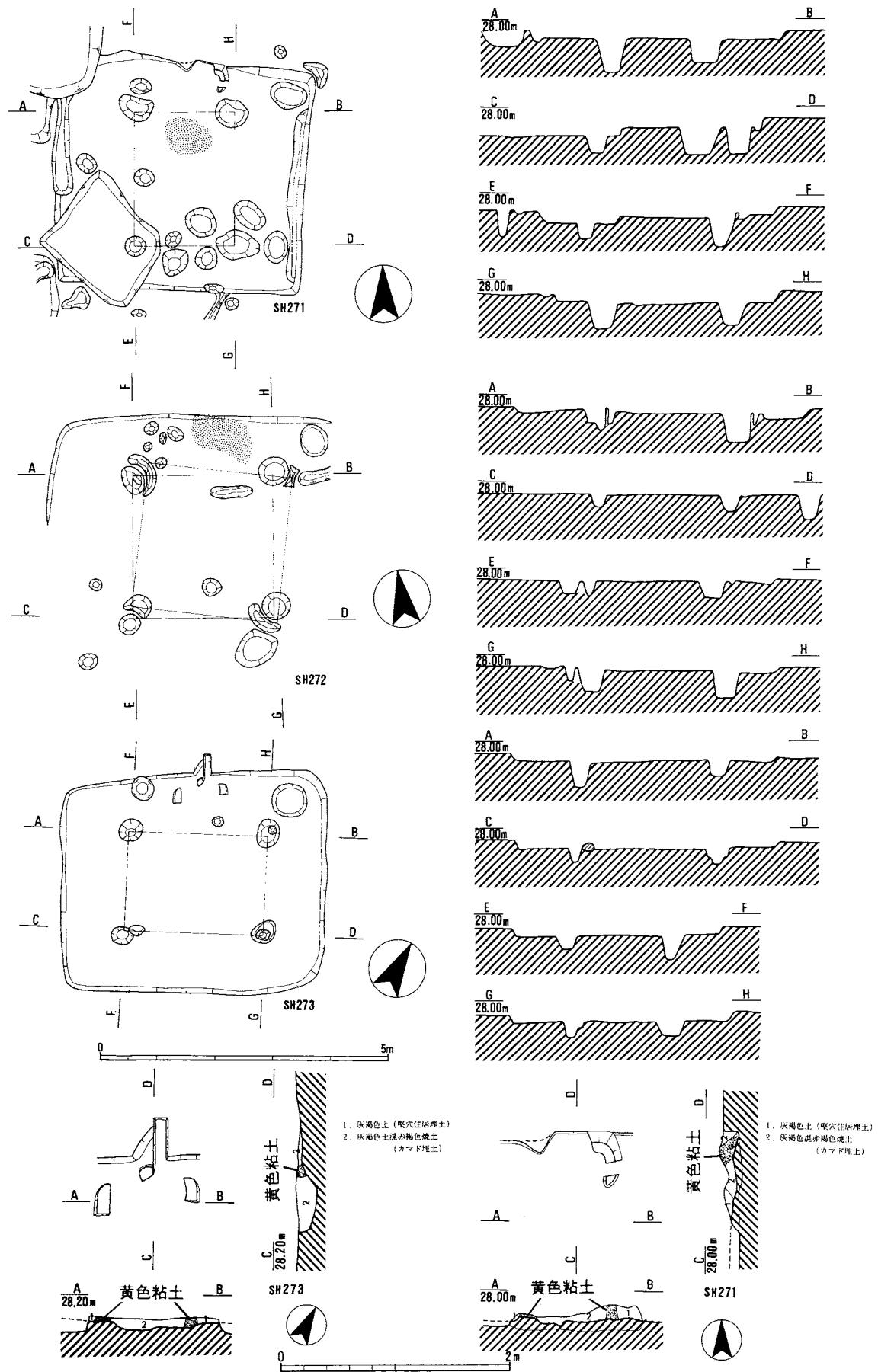
土師器椀（1） S H 2 7 3上面で出土した椀で、口径11.4cm、器高4.3cmである。口縁部は内湾して立ち上がり、端部は尖りぎみにおさまる。口縁部には内外面ともヨコナデが施される。体部外面にはユビ

オサエがみられ、内面にはナデを施した後、鋭利な工具によりかきあげた痕跡がみられる。胎土には1mm程の砂粒を若干含み、焼成は黒斑がみられるなどやや不良である。色調は外面の一部が橙色であるが大部分は黒斑により暗褐色となっている。

土師器甕（4） 口径15.7cmの甕で口縁部の30%程が残存している。頸部が屈曲して外反し、端部はつまみ上げるようにして面を作り出している。内外面とも口縁部にはヨコナデを施すが、ナデが弱いためハケメの痕跡が残る。体部外面の調整には、粗・密二種類のハケをもちいている。体部内面の上部に



第178図 B地区遺構実測図(1:200)、土層断面図(1:100)



第179図 SH271・SH272・SH273実測図 (1:100)、SH271・SH273カマド実測図 (1:50)

はハケによる横方向の調整、下部には縦方向のヘラケズリがみられる。胎土は精密で、焼成は良好、色調は浅黄橙色である。

S K 2 7 4 出土の土器

山茶椀（7） 口径14cm、器高5.8cmの椀で、口縁部の30%程が残存する。口縁部はやや外反する。口縁部から体部の内外面はロクロナデを施し、底部には糸切り痕が残る。高台は張り付けている。胎土には1mm程の砂粒を含む。焼成は良好であるが焼き膨れがみられる。色調は灰白色である。

小ピット出土の土器

土師器皿（3） グリッドB 4-P 2 出土の土器で口径19.6cm、器高1.8cmの皿である。口縁部の25%程が残存する。口縁部にはヨコナデ、内面にはナデが施され、外面にはユビオサエの痕跡がみられる。胎土には1~1.5mm程の砂粒を含み、焼成は良好、色調は浅黄橙色である。

土師器甕（5） グリッドB 8-P 2 出土の土器で口径20.2cmの甕である。口縁部の20%程が残存する。頸部が屈曲して外反し、端部は内側に肥厚する。

口縁部には内外面ともヨコナデが施される。体部外面にはユビオサエの痕跡がみられ、内面には横方向のヘラケズリを施す。胎土には1mm程の砂粒を含み、焼成は良好である。色調は浅黄橙色であり、口縁部外面には煤が付着する。

包含層出土の土器

縄文土器（8） 口縁部の破片で、口縁部及び口唇部にL Rの縄文を施した後、口縁部に2本の沈線をめぐらす。時期は中期末と思われる。

縄文土器（9） 体部の破片で、外面には縦方向に隆帯及び沈線をめぐらせ、内面にはヨコナデを施す。時期は中期末と思われる。

縄文土器（10） 体部の破片で、内外面とも巻き貝による状痕文がみられる。時期は後期と思われる。

土師器甕（6） 口径22.4cmの甕で、口縁部の30%が残存する。頸部が屈曲して外反し、端部は内側に肥厚する。口縁部には内外面ともヨコナデが施される。胎土には1mmの砂粒を含み、焼成は良好である。色調は浅黄橙色で口縁部外面には煤が付着する。

3 小 結

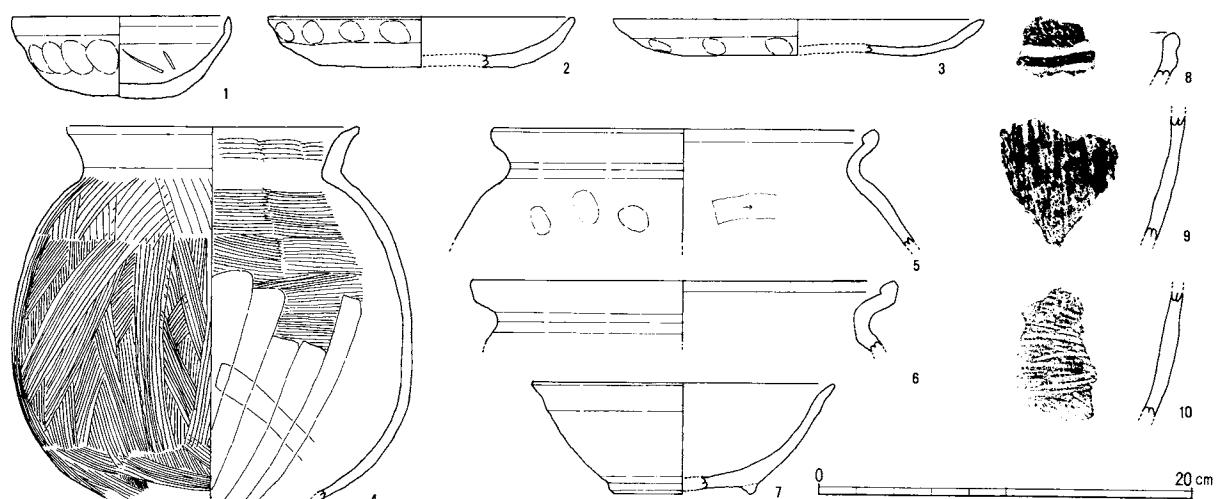
B地区からは堅穴住居3棟を検出することができた。住居内から出土した土器は少ないが、住居の時期は概ね飛鳥時代～奈良時代と考えられる。前回の調査でもこの時期の堅穴住居が検出されており、この付近の畠地が飛鳥～奈良時代の集落であったと考えられる。遺物では包含層から縄文時代中期末の土器が出土している。この時期の遺構は付近では確

認されていないが、土器はA地区でも出土しており、付近にこの時代の集落が存在していたと考えられる。

(竹田憲治)

[註]

- ① 福田哲也 「天白遺跡」『平成2年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』第1分冊（三重県教育委員会、1991年）。



第180図 B地区遺物実測図 (1:4) 1.4はSH273 2はSH271 7はSK274 3.5は小ピット、6.8.9.10は包含層出土

V C 地区の調査

1 遺構

A地区の南約60mに位置し、調査区南端は中村川の氾濫原に向かって自然の傾斜を呈する。調査面積は770m²で、遺構検出は下層の縄文時代の遺構が認められないため、黄色土上面で行った。奈良時代の堅穴住居、中世の溝等を検出したが、遺構密度は低い。

(1) 奈良時代の遺構

S H 2 0 5 一辺約3mの方形を呈する小形の堅穴住居である。北辺中央に焼土があり、竈の痕跡と考えられる。床面をやや掘りすぎたが、深さは25cmで、主柱穴は確認できなかった。

(2) 平安時代末期～鎌倉時代の遺構

S D 2 0 1 幅3m、深さ1.6mで、まっすぐ東西に延びる大溝である。東に延長すればA地区的溝1に、西へ延長するとD地区のS D 248につながるものと推定される。その場合の総延長は210m以上である。断面形はV字状を呈し、埋土は、灰茶色土、暗茶色土、暗灰茶色土の順に堆積し、水が溜まったり、流れたりした様子は認められない。

S K 2 0 9 長辺1m、短辺60cmの長方形を呈する小土坑である。深さは40cmで底部は平坦である。山茶椀、山皿等比較的まとまった遺物の出土があった。土師器皿(9)がほぼ完形であるが、埋納されたものとは考えがたい。

S D 2 2 4 調査区南部を東西に延びる溝であるが、東側は土坑状に深くなる。埋土上部は、40～50cmの様々な石で覆われる。墨書のある山茶椀(19)が倒立状態の完形で出土した。他に土師器皿(17)もほぼ完形で出土しているが、この部分を中世墓と考えるには、破片遺物の出土が多すぎ疑問である。

(3) 室町時代の遺構

S K 2 2 3 調査区南西端で検出した。全体の規

模、形態は不明であるが、一辺約4.5mの方形を呈するものと考えられる。深さは50cmを測り、壁に接して40～50cmの巨石を土止めのために列べている。

S D 2 0 6 幅50～80cm、深さ30～40cmの小溝である。調査区外から西進し、緩やかに向きを南に変え14mほど進んで消滅する。区画溝と考えられるが、区画された内側では建物等の検出はできなかった。溝が向きを変える地点から多量の土師器皿が出土した。

(4) その他の遺構

不定形な土坑、溝等を多数検出したが、その性格については不明であり、遺構とするに疑問の多いものもある。

S Z 225は、巨石の集中である。調査区の東方50mには古墳の存在が指摘されており、これも横穴式石室の可能性が考えられた。しかし調査の結果、特に石室状の配置は認められず、また遺物も須恵器甕の小片が出土したにとどまった。重複する不定形な浅い落ち込みS D 217からは室町時代の土師器皿が出土している。さらに、周溝や石を据えるための掘形も確認できず、石室の残骸と推定する根拠は非常に乏しく、自然の作用によるものと考えざるを得ない。しかし、その石の大きさと集中は他の調査区では認められず、異常である。

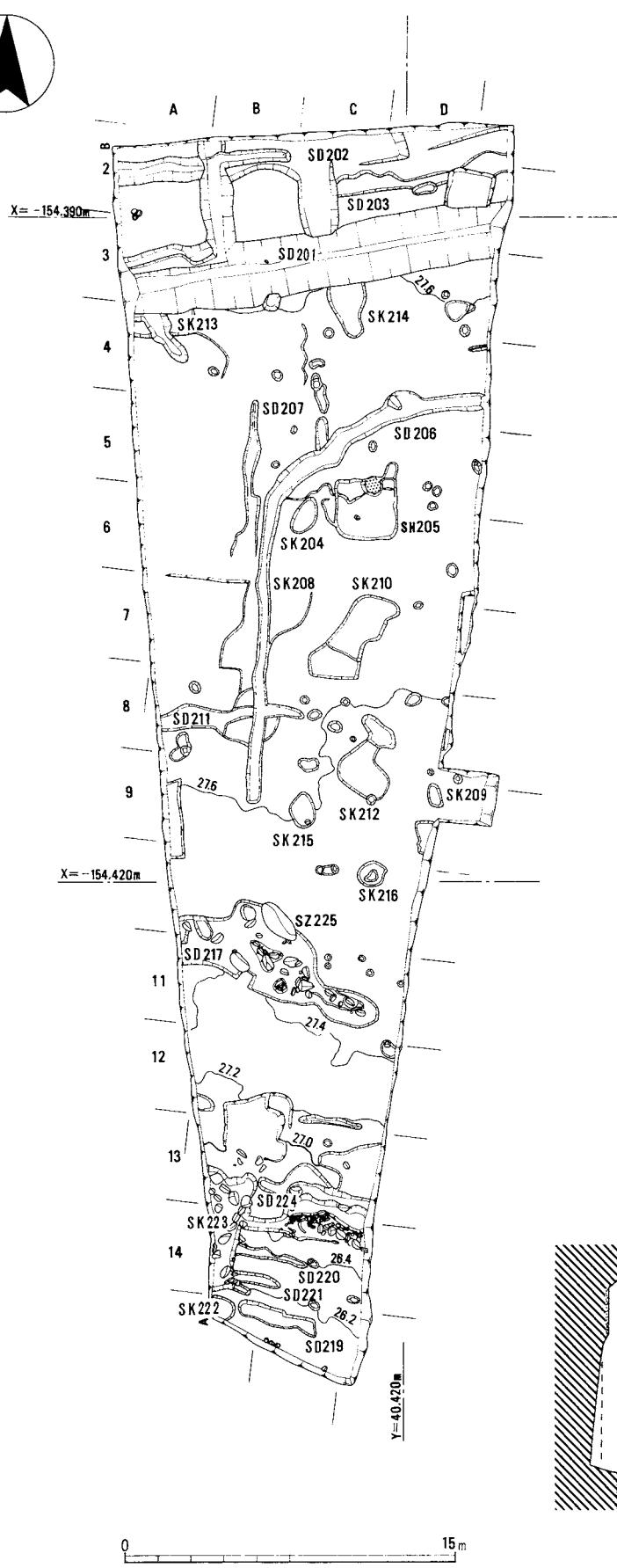
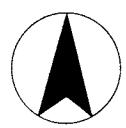
S K 215からは縄文土器、S K 213からは古墳時代の須恵器、S K 210、S D 203からは奈良～平安時代の土師器、S D 207, 221からは鎌倉時代の土師器、S K 216, 222, S D 202, 211, 220, 219からは室町時代の土師器が出土しているが、遺構の時期を正確に示すものとは考え難い。しかし、大半は中世以降に属するものと考えられる。

2 遺物

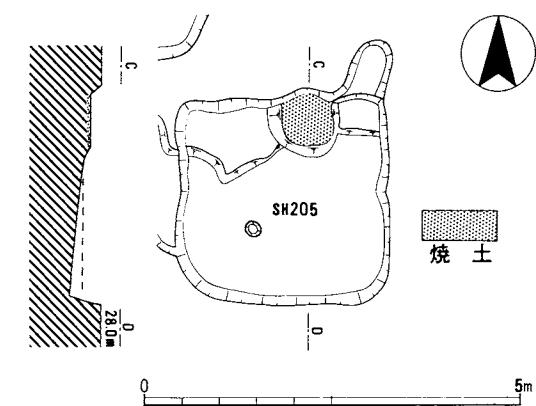
遺物の出土は比較的小量であるが、SD206からは室町時代の土師器がまとめて出土した。

(1) 平安時代末期～鎌倉時代の遺物

S K 2 0 9 出土の遺物



第181図 C地区平面図 (1:300)



第182図 SH205実測図 (1:100)

(9, 10) は土師器の皿、(11) は山皿、(12, 13) は山茶椀である。(11) は高台が付かず、ロクロナデが体部下半に及ばない雑な仕上げである。(12) の高台には砂痕が若干残る。

SD 201 出土の遺物

(1) は土師器の皿で、口縁部を2段にヨコナデする。

(2) は瓦器椀で外面にも粗いヘラミガキが施され、断面は浅黄色を呈する。

(3~5) は山茶椀、(6) は山皿である。比較的高い高台を張り付けるが、(6) には付けられない。

(7) は熨斗瓦で、須恵質である。凸面繩叩き、凹面糸切り痕と布目が残る。

(8) は繩文土器で、混入と考えられる。口縁部外面には、縦方向に沈線を施す。北白川上層2期に属するものと考えられる。

SD 224 出土の遺物

(14~17) は土師器の皿、(18) は鍋である。皿は、小形のもの (14, 15) と中形のもの (16)、大形のもの (17) がある。(15, 17) は口縁部にヨコナデを施すが、他は内面ナデ、外面未調整である。

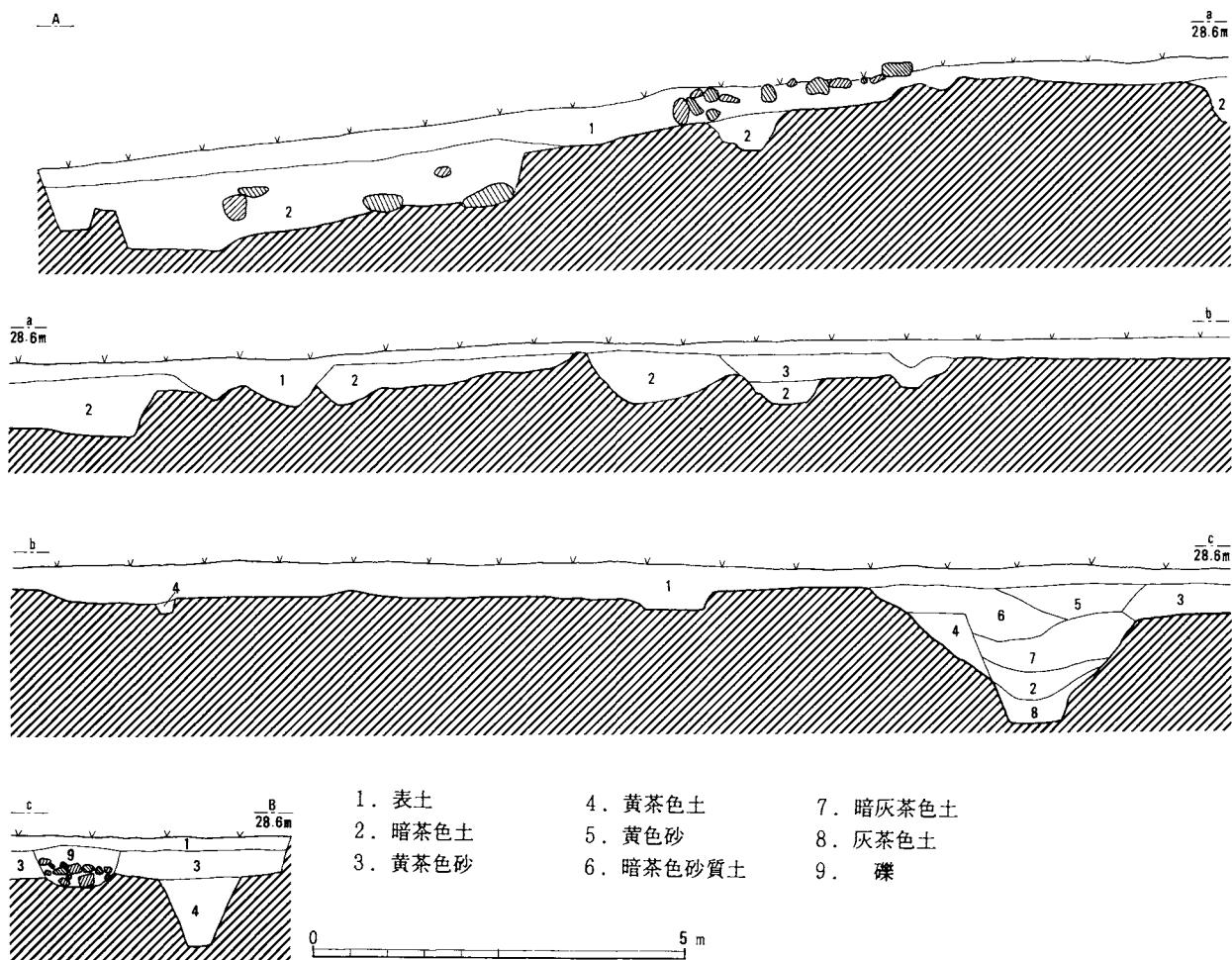
(19) は山茶椀、(20~22) は山皿、(23) は鉢である。(19) の底部外面には「行」と墨書される。

(24, 25) は青磁椀である。(24) の体部外面には連弁文が浮き彫りされる。

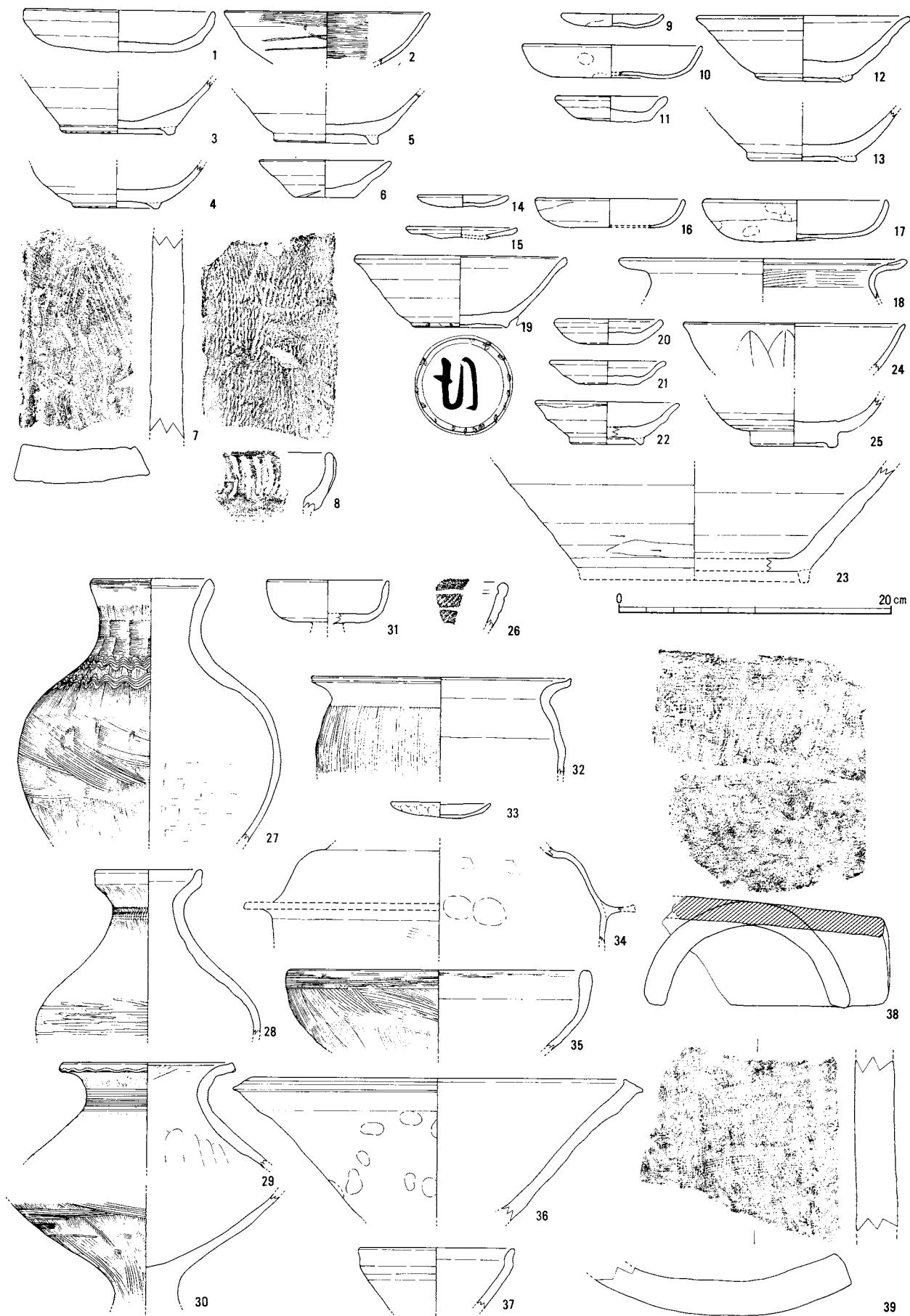
SD 206 出土の遺物

溝の屈曲部を中心に、大量の土師器皿、鍋が出土した。特に出土多い皿については、6形式に分類した。

皿A (55~83) 平らな底部から内弯して立ち上がる口縁部をもち、歪みが大きいものもあるが、口径10cm内外、器高2.5cmを測るものである。(67) の口縁部内面がヨコナデされる他は、内面ナデ、外面未調整である。(67) の底部外面には板圧痕が認められる。板の上に置いて製作されたためであろうか。



第183図 C地区土層断面図 (1:100)



第184図 C地区出土遺物実測図 (1 : 4)

皿B (40~51) 口径6.2~7.4cm、器高1cm前後の、偏平な小皿である。いずれも内面ナデ、外面未調整である。(43)の口縁端部内面には煤が付着し、灯明皿として利用されたものらしい。

皿C (85~94) 口径13~15cm、器高2.2~3cmを測る大形のもので、口縁端部はいずれも若干内弯気味になる。口縁端部をヨコナデし、内面ナデ、外面未調整であるが、(88,94)にはヨコナデが認められない。

皿D (52) 皿Bと似た形態であるが、厚手のもの。小皿であるが口縁部をヨコナデし、色調も赤茶色を呈し、皿Bと異なる。

皿E (53~54) 小皿であるが、器高が高いものである。底部は上げ底になり、色調も赤色系を呈する。ヨコナデは、内面底部近くまで及ぶ。

皿F (84) 口径12.4cmを測る大形のもので皿Cに似るが、器高が低い偏平な形態のものである。やはり、外面ナデ、内面未調整である。

鍋 (95~98) いずれも口縁端部を折り返すが、(95)は口縁頂部のヨコナデが弱く、断面三角形状を呈する。(97)の頸部内面はヘラケズリされるが、強

い板ナデととることもできる。また、(96)以外の外面上には煤が付着する。

包含層出土の遺物

(26)は縄文土器、(27~30)は弥生土器である。(27~29)は壺、(30)は台付の甕か鉢になるものと考えられる。(27,29)の外面にはヘラミガキは認められず、(28)も体部下半にとどまっている。(27)の口縁部外面は、櫛によりヨコナデされる。中期に属するものと考えられるが、(29,30)は、後期としたほうがよいかもしれない。

(31)は須恵器の高杯、(32~35)は土師器で、(32)は甕、(33)は皿、(34)は茶釜、(35)は鉢である。(33)の口縁端部には油煙が付着し、灯明皿として利用されたものらしい。(32,35)の外面、(34)の鍔以下には、煤の付着が認められる。(35)の口縁部外面は、ハケメと同一工具(?)でヨコナデされる。

(36,37)は陶器で、(36)は鉢、(37)は天目茶碗である。(36)には片口が付く可能性がある。

(38)は丸瓦、(39)は平瓦で、(38)は行基式である。(38)の外面は燻されているが、(39)にそれは認められない。

3 小 結

S D 206は幅1m未満、深さ50cmに達しない小規模なものであるため、埋没に要する時間は極めて短いと考えられる。したがって、この溝の一角から出土した多量の土師器皿は、一括性の極めて高い良好な資料と言えよう。既述したように、これらの土師器皿をA~Fに分類した。県内における中世土師器皿については、新田洋・伊藤裕偉氏等により分類されている。本書の皿A~Cは、新田氏の分類^①に従つたもので、皿Aは伊藤氏のB系統、皿BはA系統、皿CはD系統に相当するものであろう。皿Aは口径9~10cm、器高2~3cmに、皿Bは、口径7cm前後、器高1cm前後におさまり、歪みを考え合わせると、相当規格的に製作されているものである。皿Cは、口径13~15cm、器高2~3.5cmで、規格性は認められ

るもの前2者と比べるとやや法量の統一を欠く。これら3種の皿は、南勢地域で普遍的に出土するものである。新田氏の編年によれば、皿BとCが共伴することから、第Ⅱ期から第Ⅲ期への過渡期の状態を現すものと考えられ、皿Aの法量もこれと矛盾しない。したがって、14世紀末~15世紀初頭の時期が与えられる。共伴する土師器鍋とともに、出土例の少ない型式・時期にあたり、貴重な資料を提示することになったものと考えられる。

なお、皿Fは皿Bの法量を大きくしたものであるが、普遍的な存在については資料も少なく疑問も多い。皿Cの異形としておいたほうがよいかもしれない。皿D・Eについては、畿内の影響を受けたものであり、搬入品の可能性もある。

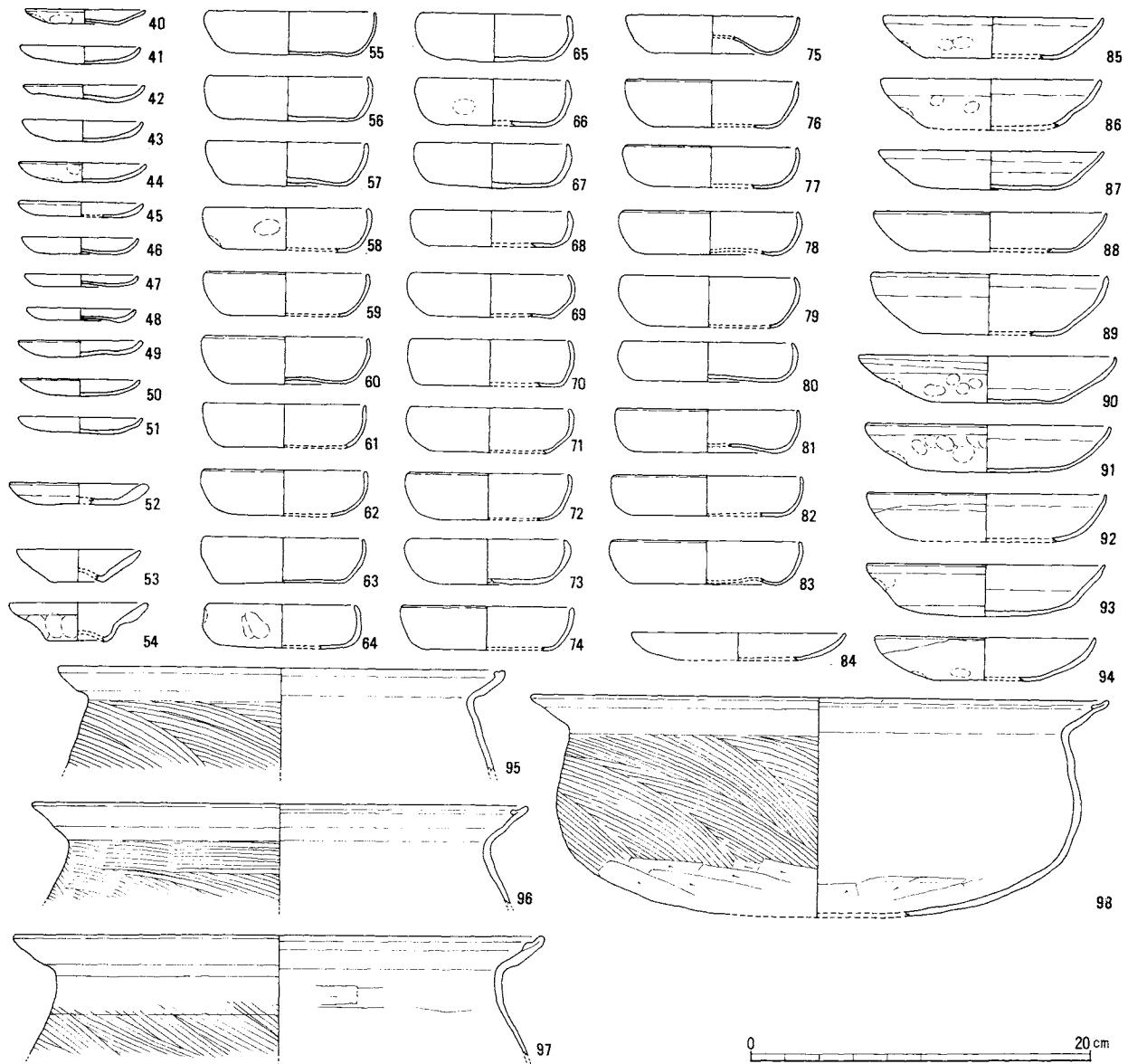
(森川常厚)

[註]

① 新田洋「中・南伊勢における中世土師器－特に「在地系」皿－の変遷と地域色解明への一視点」(『マジナル』No9、 愛知考古学談話会、1988.10)。

② 伊藤裕偉『多気遺跡群発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター、1993.3)。

③ 前掲①に同じ



第185図 SD 206 出土遺物実測図 (1 : 4)

番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	法量(cm)			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存 (%)	備考
				口径	器高	その他						
1	010-03	土師器・杯	C A -3 SD 201	14.0	3.0		口縁部外面2段にヨコナデ、底部内面ナデ、外面未調整	細砂粒を含む	良	淡黄茶色	ほぼ完形	
2	010-05	瓦器・椀	C · C -3 SD 201	14.0	—		外面粗いヘラミガキ、内面ヘラミガキ	微砂粒を含む	良	暗灰色	15	
3	010-01	陶器・椀	C · D -2 SD 201	—	—	高台径 8.4	体部内外面ロクロナデ、底部外 面ナデ	砂粒を含む	良	灰白色	50	高台外面に粉殻痕 山茶椀
4	010-04	〃	C · B -3 SD 201	—	—	高台径 6.4	〃	細砂粒を多く含 む	良	灰黄色	底部完形	ク
5	010-02	〃	C · C -3 SD 201	—	—	高台径 7.6	体部内外面ロクロナデ、底部外 面糸切り未調整	〃	良	灰白色	60	山茶椀
6	010-06	陶器・皿	C · B -3 SD 201	9.6	2.7	底径 4.2	体部内外面ロクロナデ、底部外 面未調整	砂粒を含む	良	灰黄色	50	山皿
7	011-07	瓦・熨斗瓦	C · A -3 SD 201	—	—	幅 9.8	凸面縄目、凹面布目と糸切り痕	砂粒多含	良	黄灰~灰白色	80	須恵質
8	011-03	繩文土器 深鉢	C · B -3 SD 201	—	—		口縁部外面に沈線	砂粒多含	良	淡赤茶~淡黄茶 色	小片	
9	010-07	土師器・皿	C · E -9 SK 209	7.4	1.0		内面ナデ、外面未調整	微砂粒含	良	明赤茶色	ほぼ完形	
10	011-02	〃	〃	14.2	2.4		〃	微砂粒多含	良	ク	25	
11	029-02	陶器・皿	〃	7.9	1.8	底径 5.4	底部外面糸切り未調整、他はロ クロナデ	3 mmの砂粒多含	良好	白灰色	50	山皿・雑な仕上げ
12	029-01	陶器・椀	〃	15.3	4.7	高台径 5.8	ロクロナデ	精良	良好	淡青灰色	33	山茶椀・高台に砂痕若干 あり

第44表 C地区出土遺物観察表 (1)

番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	法量(cm)			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存 (%)	備考
				口径	器高	その他						
13	011-01	陶器・椀	C・E-9 SK209	-	-	高台 8.0	底部外面ナデ、内外面ロクロナ デ	細砂粒多含	良	灰黄色	底部 80	
14	013-05	土師器・皿	C・D-13 SD224	6.6	0.9		内面ナデ、外面未調整	精良	良	灰白色	25	
15	013-05	々	々	8.0	0.8		口縁端部ヨコナデ、内面ナデ、 外面未調整	々	良	淡黄色	33	
16	013-02	々	々	10.7	2.1		内面ナデ、外面未調整	1mm以下の砂粒 含	良	淡黄橙色	15	
17	012-02	々	々	13.2	3.0		口縁端部ヨコナデ、内面ナデ、 外面未調整	細砂粒含	良	黄茶色	ほぼ完形	
18	012-04	土師器・鍋	々	21.0	-		内面ハケ目が残るが、内外面ヨ コナデ	1mm以下の砂粒 多含	良	暗茶色	20	
19	012-01	陶器・椀	々	15.3	5.2	高台径 7.0	底部外面糸切り未調整、外はロ クロナデ	1mm以下の砂粒 含	良好	灰黄色	完形	山茶椀・墨書「行」
20	013-07	陶器・皿	C・D-13 SD224	7.5	1.8		底部外面ナデ、他はロクロナデ	3mmの砂粒含	良	淡灰茶色	20	山皿
21	013-04	々	々	8.3	1.7		々	1mm以下の細砂 粒含	良好	灰白色	33	山皿・口縁端部に自然釉 がかかる
22	013-01	々	々	10.4	3.1	高台径 5.0	底部外面糸切り未調整、他はロ クロナデ	精良	良好	々	50	山皿・内面に自然釉がか かる
23	012-03	陶器・鉢	々	-	-	高台径 17.0	底部外面、体部外面下半ロクロ ケズリ、他はロクロナデ	3mmの砂粒含	良好	々	20	内面に自然釉が若干かか る。山茶碗質
24	013-08	青磁・椀	々	16.1	-		ロクロナデ	精良	良好	釉・綠茶色 地・赤茶色	10	外面連弁文浮き彫り
25	013-06	々	々	-	-	高台径 6.0	外面ロクロケズリ、内面ロクロ ナデ	細砂粒含	良好	釉・灰緑色	50	底部外面施釉なし
26	013-09	縄文土器・鉢	C・C-9 SK215	-	-		内面ナデ、外面沈線と擦り消し 縄文	1mm以下の細砂 粒含	良	鈍黄橙色	10	
27	015-03	弥生土器・壺	C・E-8 包	8.4～ 9.0	-		外面ハケメ、内面上半ナデ、下 半板ナデ	細砂粒多含	良	々	口縁部 完存	縦状文2段、波状文2段 を施す
28	015-02	々	C・C-6 包	7.7	-		内面ナデ、体部外面下半ヘラミ ガキ、上半ナデ	砂粒多含	良	白黄色	25	施による刺突文あり
29	014-05	々	C・D-5 包	12.4	-		内面ナデ、外面ハケメが残るが ナデ	細砂粒若干含	良	黄赤色	50	櫛描横線と口縁部に刻目
30	015-01	弥生土器・鉢	C・D-3 包	-	-		内面ナデ、外面ハケメ	細砂粒含	良	暗茶色	40	
31	014-02	須恵器・高杯	C・C-9 包	8.8	-		底部外面ロクロケズリ、後ロク ロナデ、他はロクロナデ	々	不良	赤茶色	25	酸化焼成
32	014-04	土師器・甕	々	19.0	-		外面ハケメ、内面ナデ	細砂粒多含	良	淡赤色～暗茶色	25	外面若干焼付着
33	014-01	土師器・皿	C・C-5 包	7.3	0.8～ 1.2		内面ナデ、外面未調整	々	良	淡黄色	完形	口縁端部内外面に油煙付 着
34	019-01	土師器・茶釜	C・C-8 包	-	-		内面板ナデ、外面鐔以上はナデ、 鐔以下はハケメ	砂粒多含	良	淡黄橙色	25	鐔以下煤付着
35	018-02	土師器・鉢	C・D-3 包	21.8	-		外面ハケメ、内面ナデ	微砂粒若干含	良	暗茶色	70	外面煤付着
36	018-01	陶器・鉢	C・C-12 包	27.4	-		内面ナデ、外面未調整	砂粒若干含	良	赤茶色	25	
37	014-03	陶器・天目茶碗	々	11.3	-		ロクロナデ	微砂粒を含む	良	淡黄茶色 釉・黒色	25	
38	016-01	瓦・丸瓦	C・C-9 包	-	-		凸面ナデ、凹面布目	砂粒多含	良	灰白色	50	行基瓦
39	017-01	瓦・平瓦	C・C-2 包	-	-		凸面縄叩き後板ナデ、凹面布目	砂粒若干含	良	淡黄色	40	
40	003-13	土師器・皿B	C・C-5 SD206	7.0	0.8		内面ナデ、外面未調整	砂粒多含	良	々	々	
41	003-01	々	C・C-6 SD206	7.4	0.6 ～1.1		々	微砂粒若干含	良	々	50	
42	028-09	々	C・C-5 SD206	7.0	0.8		々	々	良	々	80	
43	003-02	々	々	々	1.2		々	々	良	々	33	口縁端部内面に煤付着
44	003-12	々	々	7.4	0.7 ～1.1		々	微砂粒多含	良	々	40	
45	003-05	々	々	6.4	0.4 ～0.9		々	々	良	々	50	
46	003-04	土師器・皿B	C・C-5 SD206	6.8	0.7 ～1.1		内面ナデ、外面未調整	微砂粒多含	良	灰白色	40	
47	003-03	々	々	6.6	0.7 ～0.9		々	微砂粒多含	良	淡黄色	50	
48	003-05	々	々	6.4	0.4 ～0.9		々	々	良	々	々	
49	028-08	々	々	7.2	1.0		々	微砂粒含	良	灰白色	々	
50	028-10	々	々	7.0	々		々	々	良	淡黄色	50	
51	027-03	々	々	6.2 ～7.3	0.9		々	々	良	々	完形	

第45表 C地区出土遺物観察表(2)

番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	法量(cm)			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存(%)	備考
				口径	器高	その他						
52	009-06	土師器・皿D	C・C-5 SD206	7.8	1.2		口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外 面未調整	微砂粒若干含	良	赤茶色	60	
53	007-05	土師器・皿E	〃	7.2	1.9		内面強いヨコナデ、外面未調整	細砂粒多含	良	白赤色	25	
54	007-06	〃	〃	9.0	2.2		口縁部、内面ヨコナデ、外面未 調整	微砂粒多含	良	淡赤茶色	20	
55	027-05	土師器・皿A	〃	9.6 ~9.8	2.6		内面ナデ、外面未調整	微砂粒若干含、 雲母片多含	良	淡黄茶色	60	
56	007-01	〃	〃	9.3 ~9.6	〃		〃	1mmの砂粒、雲 母片多含	良	黄茶色~白茶色	完形	
57	009-03	〃	〃	9.3	2.5		〃	微砂粒若干含	良	黄茶色	50	
58	009-04	〃	〃	9.6	2.6		〃	〃	良	淡黄色	60	
59	027-09	〃	〃	9.4	2.5		〃	〃	良	淡黄茶色	33	
60	027-01	〃	〃	9.6	2.8		〃	〃	良	淡黄色	75	
61	028-01	〃	〃	9.4	2.5		〃	〃	良	淡黄茶色	40	
62	027-06	〃	〃	〃	2.6		〃	〃	良	〃	〃	
63	027-02	土師器・皿A	C・C-6 SD206	9.3 ~9.6	2.6		内面ナデ、外面未調整	微砂粒含	良	灰白色	完形	底部外面に板压痕
64	008-01	〃	C・C-5 SD206	8.5	2.5		〃	1mmの砂粒多含	良	淡黄色	50	
65	007-02	〃	〃	8.6	2.8		〃	〃	良	白茶色	25	
66	008-02	〃	〃	〃	2.7		〃	〃	良	淡黄色	40	
67	009-01	〃	〃	8.8	2.6		口縁部内面ヨコナデ、内面ナデ、 外面未調整	〃	良	淡茶色	〃	
68	007-04	〃	〃	9.1 ~9.5	2.1		内面ナデ、外面未調整	細砂粒若干含	良	白黄色	80	
69	009-05	〃	〃	9.1	2.5		〃	1mmの砂粒多含	良	白茶色	60	
70	008-04	〃	〃	9.2	2.7		〃	〃	良	黄灰色	33	
71	007-03	〃	〃	9.2~ 10.0	〃		〃	微砂粒含	良	淡黄色	50	
72	028-05	〃	〃	9.4	〃		〃	微砂粒若干含	良	灰白色	75	
73	008-03	〃	〃	9.0	2.6		〃	1mmの砂粒多含	良	淡黄色	25	
74	027-10	〃	〃	10.0	2.5		〃	微砂粒若干含	良	淡黄茶色	〃	
75	027-07	〃	〃	〃	2.2		〃	〃	良	〃	〃	
76	028-07	〃	〃	〃	2.7		〃	〃	良	淡黄色	〃	
77	028-04	〃	〃	〃	2.4		〃	〃	良	〃	50	
78	008-05	〃	〃	10.2	2.6		〃	〃	良	〃	33	
79	028-02	〃	〃	10.0	2.9		〃	〃	良	淡黄茶色	25	
80	009-02	〃	〃	10.0	2.3		〃	細砂粒多含	良	黄茶色	〃	
81	027-08	〃	〃	10.6	2.5		〃	微砂粒若干含	良	淡黄茶色	40	
82	028-06	〃	〃	11.0	2.3		〃	〃	良	淡黄橙色	25	
83	028-03	〃	〃	〃	2.5		〃	〃	良	淡黄茶色	20	
84	003-07	土師器・皿F	〃	12.6	1.6		〃	微砂粒多含	良	淡黄色	〃	
85	003-09	土師器・皿C	〃	12.8	2.4		口縁端部ヨコナデ、内面ナデ、 外面未調整	〃	やや不 良	〃	25	
86	003-10	〃	〃	〃	3.0		口縁部ヨコナデ、内面ナデ、外 面未調整	〃	良	〃	33	
87	006-03	〃	〃	13.1	2.2		口縁端部ヨコナデ、内面ナデ、 外面未調整	3mmの砂粒含	良	灰白色~淡黄色	80	
88	027-04	〃	〃	13.6	2.3		内面ナデ、外面未調整	微砂粒若干含	良	暗茶色	15	
89	003-11	〃	〃	13.8	3.5		口縁端部ヨコナデ、内面ナデ、 外面未調整	〃	良	白茶色	25	
90	006-04	〃	〃	15.0	2.7		〃	3mmの砂粒含	良	淡黄茶色	完形	
91	006-05	〃	〃	14.3	2.8		〃	1.5mmの砂粒含	良	灰白色~淡黄色	ほぼ完形	
92	003-08	土師器・皿C	C・C-5 SD206	14.0	2.8		口縁端部ヨコナデ、内面ナデ 外面未調整	砂粒多含	良	淡黄色	25	
93	006-02	〃	〃	13.9	3.0		〃	細砂粒含	良	灰白色~淡黄色	50	
94	003-14	〃	〃	12.8	2.5		内面ナデ、外面未調整	微砂粒多含	良	淡黄色	15	
95	004-02	土師器・鍋	C・C-8 SD206	26.2			口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ メ、内面ナデ	砂粒多含	良	黄茶色	25	外面煤付着
96	006-01	〃	C・C-5 SD206	29.1			〃	1mmの砂粒多含	良	淡黄色	20	
97	004-01	〃	C・C-8 SD206	31.2			口縁部ヨコナデ、頸部外面未調 整、内面ヘラケズリ、体部外面 ハケメ、内面ナデ	砂粒多含	良	白茶色	60	外面煤付着
98	005-01	〃	〃	34.0	12.8		口縁部ヨコナデ、体部外面上半 ハケメ、下半ヘラケズリ、内面 上半ナデ、下半ヘラケズリ	〃	良	黄茶色	30	〃

第46表 C地区出土遺物観察表(3)

M D 地区の調査

1 遺構

(1) 飛鳥・奈良時代の遺構

調査区北西部で検出した S K253, S D255がある。両者とも浅いもので、遺構とするに疑問も多い。

(2) 平安時代の遺構

いずれも調査区北部で検出された。土坑は、S K251,252とも不定形な浅いもので、前者は土師器の杯(3)、後者からは黒色土器片が出土している。

S B 2 5 6 北西角の柱穴を検出できなかったが、2間×2間の掘立柱建物である。棟方向は不明であるが、一応南北棟としておく。その場合、棟方向はN 4.5° Wで、柱間は桁行2.4mの等間、梁行は不当間である。柱穴は25~30cmの円形を呈する小規模なもので、これより出土したロクロ土師器から11世紀以降に属するものと考えられる。

(3) 平安時代末期~鎌倉時代の遺構

S K 2 2 7 直径約2mの不整円形を呈する。深さは検出面から1.9mを測る。壁は深さ1m以下ではほぼ垂直を呈し、底から40cmの巨石を検出した。この巨石は据えられたものではなく、元来この位置にあり、この巨石に至って掘削をあきらめたものかもしれない。全体として素掘りの井戸の形態を呈するが、埋土には湧水の痕跡は認められず確証はない。底部から完形の山茶椀(6)が正立状態で出土した。この他にも埋土中位から山茶椀(5)と山皿(4)が完形で出土している。

S D 2 4 3 SD248と重複して検出された浅い不定形な溝である。A地区から、この大溝と並行あるいは重複して延びるものである。

S D 2 4 8 C地区SD201と一連の遺構と考えられる大溝である。埋土の最下層がC地区より若干粘質になること、土色が多少変化することの他はSD201と同じである。

(4) 室町時代の遺構

S B 2 5 7 調査区南部で検出した掘立柱建物である。検出できなかった柱穴もあるが、2間×2間の東西棟と考えられる。柱間は不等間で、特に梁行

は、西側1.95m+2.4m、東側2.2m+2.4mで西側が短い。柱間は直径30cm~35cmの円形を呈する小規模なもので、棟方向はE 36° Sである。

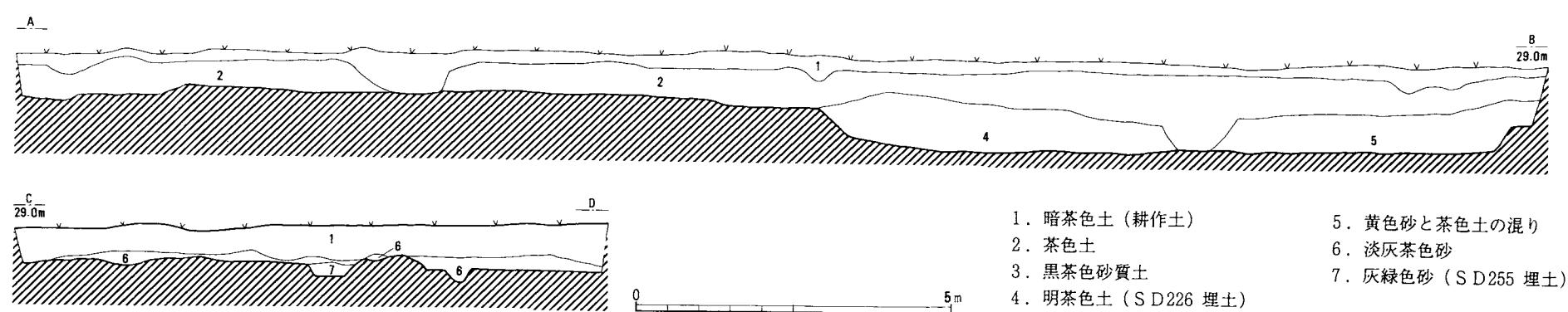
S B 2 5 8 調査区南部で検出した4間×2間の掘立柱建物で、東西棟と考えられる。棟方向はE 6° Sで、S D248が完全に埋没した後に建てられたものである。桁行きは不当間、梁行きは2.1mの等間と考えられる。しかし、東側の妻柱は検出できず、西側のものはやや内にはずれる。

S E 2 2 8 直径1.4m~1.2mの楕円形を呈する石組井戸である。掘形も楕円形を呈し、直径4m~3mを測る。深さは3mを測り、2m以下は礫層をくり抜いている。そのためか、底から30cmまでは、石組は認められず、礫層に自然堆積した石をそのまま利用したようにも考えられる。このため石組の最下段が不鮮明ではあるが、底から40cmの位置にある50cm前後の巨石を基底の石と考えたい。掘方は、断面V字状を呈し、1.6m以下では、石組とほぼ接するまでに狭まり、東側では、石組と完全に接する。この地点以下から礫層になるため、東側では自然堆積の石を底から1mまでそのまま利用している可能性がおおきい。埋土は、底から80cmまでが青灰色粘土で、それ以上は30~10cmの大小様々な石が詰まっていた。湧水点は、この青灰色粘土上面にはほぼ一致する。

S K 2 3 5 S E228の東側で検出した隅丸三角形を呈する土坑である。深さは70cmを測る深いものである。土坑西端の埋土上面に50~20cmほどの石が4個集まっているが、この遺構とは無関係のものと考えられる。

S K 2 4 1 直径80cmの円形を呈し、深さ5cm程度の小土坑である。土坑北端に焼土が認められるが、その性格については不明である。

S K 2 4 4 長辺4m、短辺3.5mの長方形を呈する土坑で、深さは80cmを測る深いものである。底部西壁に石列が認められるが、その機能については不



第187図 D地区土層断面図 (1:100)

明である。本来の壁は、石積であったものかもしれない。

S D 229 幅50~40cm、深さ10cmの小溝であるが、調査区を円弧状に東西に横断し、東側は調査区外に続いている。埋土は灰緑色砂で流水路であったようである。

S D 230 調査区中央北部で検出した。不定形な浅い溝である。

S D 237 調査区北部で検出したL字状に曲がる溝である。東端は調査区外へ延び、南端は徐々に

深さを減じ消滅している。S D230に切られるようだが、明確ではない。

(5) その他の遺構

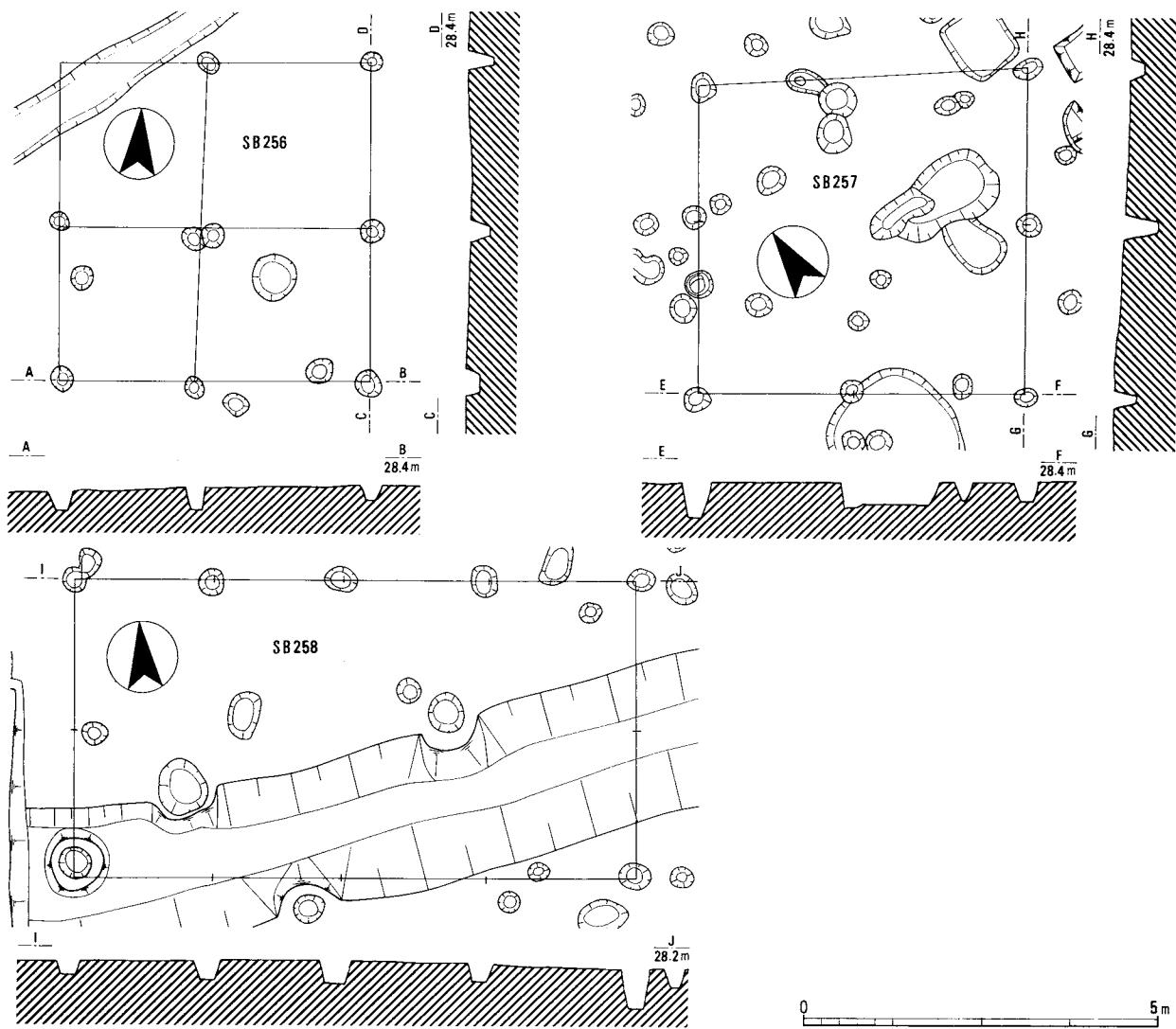
S K234,246,250, S D254からは鎌倉時代の遺物、S K231,233,236,245,246,249, S D226からは室町時代の遺物が出土している。その他遺物の出土していないものも含めて、およそ中世に属するものと考えられるが、その性格とともに、詳細な時期は不明である。S K238,239,240は、風倒木痕の可能性が高く、遺構とするに不適当かもしれない。

2 遺 物

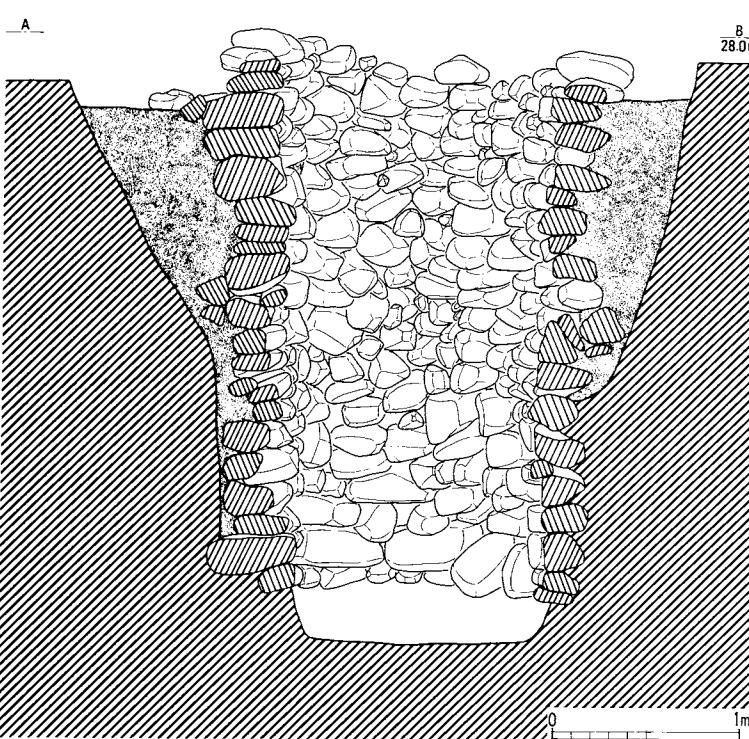
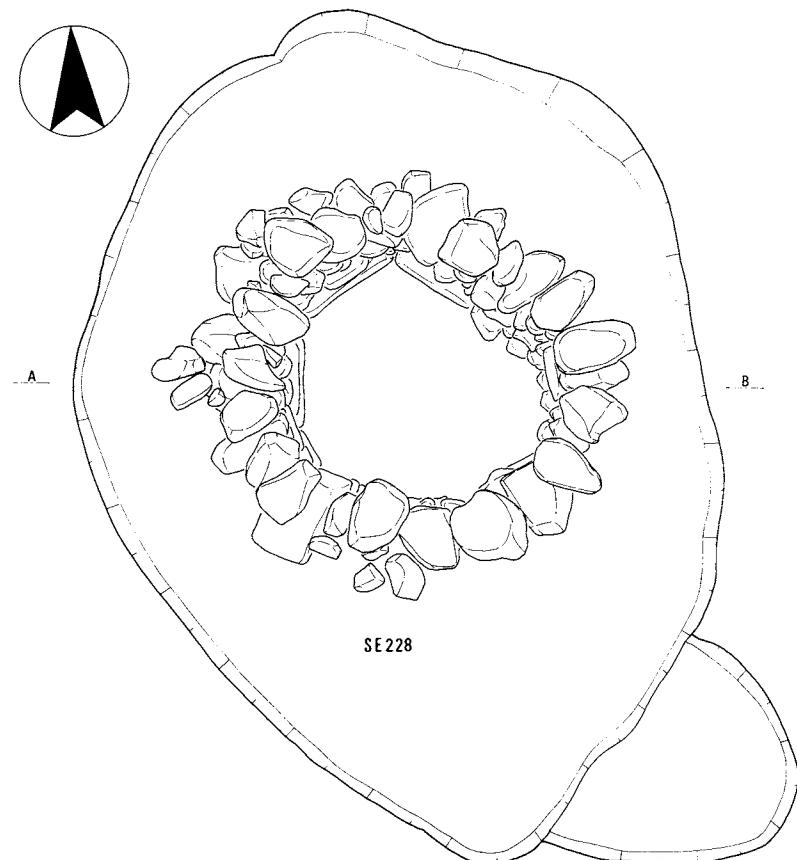
遺物の出土は、その面積にくらべ非常に少なく、良好な一括資料に恵まれなかった。

(1) 飛鳥・奈良時代の遺物

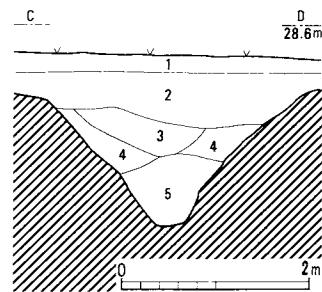
(1) は須恵器の皿、(2) は杯で、両者とも S D25



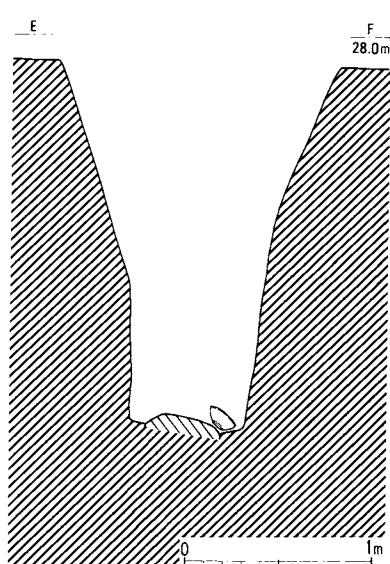
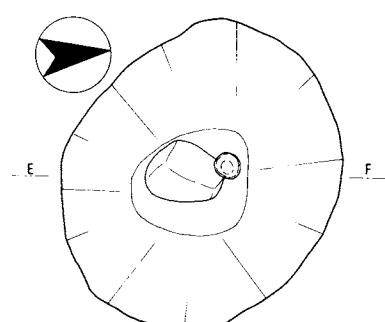
第188図 S B 256~258 実測図 (1 : 100)



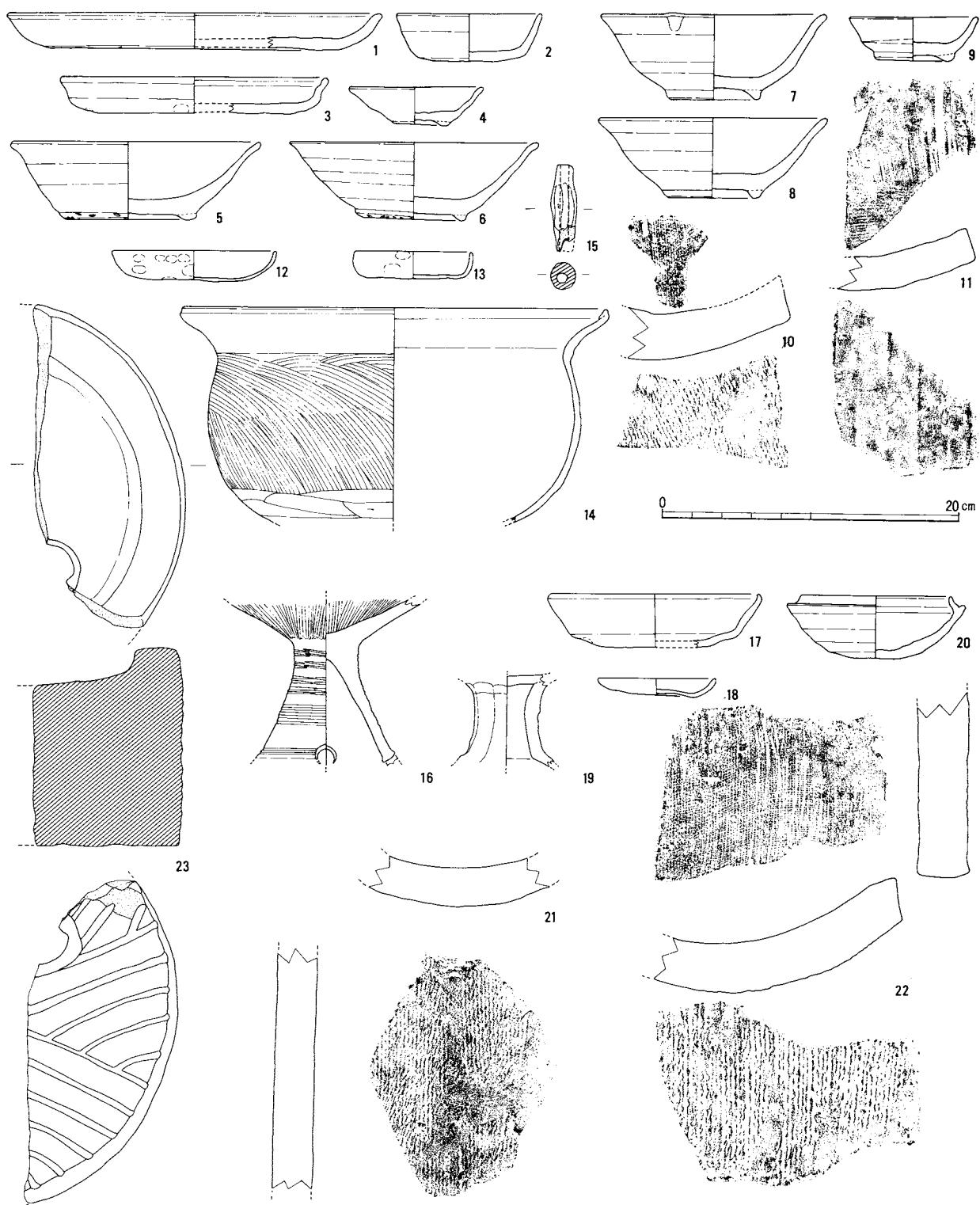
第189図 S E 228 実測図 (1 : 40)



第190図 S D 248 断面図 (1 : 80)
 1. 表土
 2. 茶色土
 3. 黒茶色砂質土
 4. 茶色砂質土
 5. 灰色粘質土



第191図 S K 227 実測図 (1 : 40)



第192図 D地区出土遺物実測図 (1:4)

平安時代中頃のものと考えられる。

(3) 平安時代末期～鎌倉時代の遺物

S K 2 2 7 出土の遺物

(4) は山皿、(5,6) は山茶椀である。高台はすべて張り付けられ、(5,6) には糀殻痕が残る。底部外面は (4,5) がナデるのにたいし、(6) には糸切り痕

が認められる。

S D 2 4 8 出土の遺物

(7,8) は山茶椀、(9) は山皿で、(7) には3方に輪花が施される。(7,9) の高台には糀殻痕が認められ、底部外面はすべてナデで調整される。

(10,11) は平瓦である。(11) は凸面布目で、模

骨一本の幅は2cmである。(10)は赤茶色を呈するが、(11)は青灰色を呈する須恵質である。

(4) 室町時代の遺物

(12,13)は土師器の皿、(14)は鍋、(15)は土錘である。(12)はSK236、(13)はSB257、(14)はSD237の出土である。(15)は小ピット出土で、この時期とする根拠はない。体部を縦方向に面取り状にヘラケズリする。

(5) 包含層出土の遺物

(16)は弥生土器の高杯である。脚部には4方に透かし孔と、1.4cmに4本の櫛による横線文を右廻りに施す。

(17~19)は土師器で、(17)は杯、(18)は皿、

(19)は高杯である。(19)の杯部外面には、脚との接合のためか不定方向の沈線がヘラにより刻まれ、脚は8面に面取りされる。(17)の内面には油煙が付着し、(18)は中世の皿と考えられるが明赤茶色を呈する。(19)は奈良時代、(17)は平安時代前半に属するものと考えられるが、やや薄手である。

(20)は須恵器の杯である。外面は、ヘラ切りの外周を軽くロクロケズリする。

(21,22)は平瓦で、両者とも須恵質であるが、焼成やや不良である。(22)の凹面は布目が残るが、(21)はナデられる。

(26)は石臼の上臼である。孔は両端から穿孔され、目は断面V字形で、8分割される。

3 小 結

SD248は、A地区の溝1、C地区のSD201につながるものと推定され、直線状に210m以上延びる溝である。幅3m、深さ1.6mで、幅断面形はV字状を呈する一見弥生時代の環濠を思わせる規模・形態である。埋土には、水が流れたり、溜まった痕跡は認められず、空堀の状態であったようである。出土した

山茶椀は、瀬戸の編年によるⅡ段階3型式～Ⅲ段階6型式までのものであり、12世紀～13世紀初頭までの時期が与えられる。方向はE8°Nで、当地域の条里の方向とほぼ一致することから、これに関連する施設であるかもしれない。

(森川常厚)

[註]

- ① 藤澤良祐 『瀬戸市歴史民族資料館研究紀要Ⅰ』
(瀬戸市歴史民族資料館、1982年)。

番号	登録番号	器種	出土位置 遺構	法量(cm)			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存(%)	備考
				口径	器高	その他						
1	022-04	須恵器・皿	D・B-5 SD255	25.2	2.5		底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	1mmの砂粒多含	不良	灰白色	15	ロクロ右回転
2	022-03	須恵器・杯	〃	9.5	3.2		〃	〃	良	茶灰色	33	底部内面自然釉がかかる
3	022-01	土師器・皿	D・B-2 SK251	18.0	2.5		底部内面ナデ、外面未調整、口縁部ヨコナデ	〃	良	明赤色	20	
4	020-03	陶器・皿	D・H-7 SK227	9.0	2.5	高台径 3.6	ロクロナデ、底部外面ナデ	細砂粒含	良	灰白色	60	山皿
5	020-02	陶器・椀	〃	15.8	5.2	高台径 9.1	ロクロナデ、底部外面ナデ	細砂粒多含	良	〃	40	山茶椀・高台に粉粬痕
6	020-01	〃	D・H-7 SK227-N.1	16.7	5.1	高台径 7.4	ロクロナデ、底部外面糸切り未調整	砂粒含	良	〃	ほぼ完形	山茶椀・高台に粉粬痕
7	020-06	〃	D・J-15 SD248	15.2	5.7	高台径 6.3~7.3	ロクロナデ、底部外面ナデ	砂粒多含	良	〃	50	3ヶ所に輪花、内面に自然釉がかかる。山茶椀
8	020-05	〃	〃	15.3	5.3	高台径 6.3	ロクロナデ、底部外面糸切り後 ナデ	微砂粒多含	良	灰黄色	20	山茶椀
9	020-04	〃	〃	8.6	2.9	高台径 4.8	ロクロナデ、底部外面ナデ	〃	良	灰白色	完形	山皿、高台に粉粬痕、内面に自然釉がかかる
10	021-01	瓦・平瓦	D・J-17 SD248	—	—		凹面布目裏、凸面繩叩き、側面 ヘラケズリ	砂粒を含む	良	赤茶色	10	
11	021-02	〃	D・J-15 SD248	—	—		凹面板ナデ、凸面布目で、模骨 痕あり	砂粒多含	良	青灰色	30	須恵質
12	022-02	土師器・皿	D・H-11 SK236	10.9~ 11.1	2.1		内面ナデ、外未調整	1mmの砂粒多含	良	白茶色	ほぼ完形	
13	023-06	〃	D・J-12 SB257	7.8	1.8		内面ナデ、外未調整、口縁部 内面ヨコナデ	微砂粒多含	良	〃	40	
14	022-05	土師器・鍋	D・E-12 SD237	28.3	—		体外面下半ヘラケズリ、上半ハ ケメ、内面ナデ、口縁部ヨコナ デ	1mmの砂粒多含	良	暗茶色	20	外面煤付着
15	023-07	土師器・土錐	D・H-19 P.1	—	—	残存重 10.7g	体部ヘラケズリ、他は手づくね	細砂粒多含	良	白茶色	80	
16	023-01	弥生土器・高杯	D・H-21 包	—	—	—	杯部内外面ヘラミガキ、脚部外 面飾横線	1mmの砂粒多含	良	明赤茶色	50	脚部に黒斑
17	023-03	土師器・杯	D・B-1 包	14.1	3.6		底部外面未調整、内面ナデ、口 縁部ヨコナデ	微砂粒多含	良	〃	20	内面に油煙付着
18	023-05	土師器・皿	D・I-15 包	7.7	1.3		内面ナデ、外未調整	細砂粒多含	良	〃	完形	
19	023-02	土師器・高杯	D・B-2 包	—	—		杯部内面ナデ、外ヘラケズ リ	1mm以下の砂粒 多含	良	淡赤茶色	30	脚は8面に面取り
20	023-04	須恵器・杯	D・A-1 包	10.1	4.1		底部外面一部ロクロケズリ、他 はナデ、内面と体部外面ロクロ ナデ	細砂粒多含	良	暗青灰色	25	
21	024-01	瓦・平瓦	〃	—	—		凹面ナデ、外繩叩き	微砂粒含	やや不 良	灰白色	50	
22	025-01	〃	D・B-3 包	—	—		凹面糸切り痕と布目、凸面繩叩 き。	砂粒含	〃	〃	〃	
23	026-01	石製品・石臼	D・D-12 包	27	11.2	外堤高 2		砂岩	—	黄茶色		目は断面V字形で、8分 割される

第47表 D地区出土遺物観察表

VII 考 察

本章では、A 地区で確認された縄文時代後期中葉

から晩期初頭の遺構・遺物について考察する。

(1) 後期中葉から晩期初頭の在地系の土器

先に報告したように、在地系の土器には一乗寺K式から滋賀里Ⅱ式に比定される資料がみられる。これらについては、深鉢A類で行った細分を基本として記述を進めた。ここでは、深鉢A類及びA'類について再度、整理を行いたい（第193～195図）。

A 深鉢A類とA'類の器形

有文の深鉢で口縁部に屈曲をもつものをA類とした。すなわち、器形のうえで口縁部・頸部・胴部に分かれる深鉢である。後述するように、g'類の前半に位置づけられるものまでは「く」字状に内折する口頸部の境は明瞭であり、内面に沈線状のものを伴う例もみられるほどである。しかし、g'類の後半以降では口頸部の区別は曖昧になり、外弯気味の口縁部が主流となる。外反する頸部は無文を基本とするが、f類以降では横走する文様帯をもつ例が増える。

口縁部が「く」字状に内折した後、さらに外反する器形のものを特に深鉢A'類とした。A'類は、本遺跡ではg類以降に認められる。文様の構成などはA類に類似する。やはり、g'類の後半で口頸部の区別の意識が薄れる傾向が認められ、h類では口縁部のビルディングが省略された器形のものが新たに加わる。i類では口縁部のビルディングが省略された器形が一般化する。

B 深鉢A類とA'類の細分

深鉢A類は口縁部の器形と文様の特徴から14類に細分される。以下に14類の細分について記述するが、g類以降はA'類もあわせて記述する。

a類 口縁部は「く」字状に内折した後、さらに口縁部中央付近で内折する。結果、幅広の口縁部となる。平縁と波状縁がある。

口縁部の文様は、2か所の屈曲部に横位の有文帯をもつ。すなわち、口頸部境を有文帯とし、無文部を介して口縁部中央付近に有文帯をもち、口縁部直下を無文とするものである。各有文帯の上下には沈線がひかれ、結果4本の沈線が横走するが、口頸部

境の沈線が省略されるものや、沈線を伴わずに隆帯状の有文帯となる例もある。有文帯には縄文帯・擬縄文帯・刻文帯がみられる。また、横走する文様帯を縦に区画する付加装飾文をもつ。付加装飾文は「ノ」または「C」字状の浮文か沈文である。浮文端部には卷貝殻頂部による円形の刺突や短沈線状の刻みをもつものがある。なお、鉢A類の235はa類に相当すると考えられるが、本例には馬蹄形の浮文がみられる。他に、末端刺突を伴う沈線が目立つ特徴があげられる。

b類 a類と比べて、口縁部の幅が狭くなる。結果、a類の口縁部中央付近の屈曲から上の部分が消失し、単純な内折「く」字の口縁部形態をとる。平縁と波状縁がある。

口縁部の文様はa類の口縁直下の無文部が消失した構成で、口頸部境に有文帯をもち、無文部を介して口縁直下に有文帯をもつものとなる。2つの有文帯を画する2本の沈線が口縁部と平行に引かれるのが一般的であるが、口頸部境の有文帯下にも沈線を伴う例もある。有文帯にはa類と同様に縄文帯・擬縄文帯・刻文帯がみられるが、刻文帯には刺突列のものもみられる。付加装飾文はa類でみられた「ノ」または「C」字状か馬蹄形の浮文・沈文を基本とするが、背中合わせになる弧線やその弧線がそのまま長方形区画文になる例などが新たに加わり、バリエーションが増える。向かい合う弧線など一部に特殊な例もみられるが、全体的にはa類に粗形を求められる付加装飾文で構成される。浮文で注目されることは、中央にくびれをもつ例が増えることや浮文が口縁部から迫り上がる傾向が看取されること、浮文短部の刺突が卷貝の側面圧痕になるなどして大型化する例が増えることなどがあげられる。このような傾向は、波状縁例（109、934、935など）でみられる嘴状の波頂部へつながると考えられる。また、付加装飾文が109のように上下2個に分かれる例もある。

また、b類には連弧文を伴う例が目立つ。連弧文は文様構成の原則には従わず、本来は無文となるべきところに配される。なお、650～652などはルーズな連弧文で結節縄文を彷彿させる。間隔の短い連弧文は結節縄文に出自を求めるものかもしれない。他に、a類と同様に末端刺突を伴う沈線が目立つことが特徴としてあげられる。

c類 b類の口縁部幅がさらに狭くなる傾向がある。口縁部文様は、b類の口縁直下の有文帯が消失した構成で、口頸部境の有文帯1帯と口縁直下の無文部からなる。有文帯の上下に沈線がみられる例もあるが、有文帯下の沈線が省略されて1本の沈線となる例が大多数である。沈線が全く省略される例もある。平縁と波状縁がある。有文帯はb類と同様である。付加装飾文はb類のようにバリエーションが豊かではない。「ノ」字状や棒状の浮文、浮文の左右に引かれた沈線のみが残った沈文などがある。なお、浮文にはb類と類似する変化がみられ、117のように嘴状の波頂部をもつ例が現れる。本例の付加装飾文は上下2個の刺突とそれをつなぐ短沈線で構成される。

b'類 口縁部の器形や文様構成はb類と同じであるが、付加装飾文や沈線が特徴的なものを本類とした。平縁と波状縁がある。

付加装飾文には円形や馬蹄形の瘤状の突起が目立つ。突起には刺突や押圧を伴うものが多い。この突起はb類の馬蹄形の浮文にその出自を求めることができる。

沈線は、幅広で凹線的なものになる。114などは、器面全体が良く研磨されているが、沈線そのものも光沢のあるものである。これは、沈線を施した時の土器の乾き具合や工具の種類に起因するものであろうが、後出する沈線内を磨く手法、いわゆる凹線の出自はここにあると考える。なお、114の波頂部は大きな嘴状を呈する。

c'類 口縁部の器形や文様構成はc類と同じであるが、付加装飾文や沈線が特徴的なものを本類とした。平縁と波状縁がある。

付加装飾文が確認される例は33だけであるが、上下に刺突や押圧を伴う瘤状の突起をもち、b'類と類似する。沈線も、b'類と同様の傾向をもつ。

d類 口縁部文様に有文帯や沈線がみられず、縦位の「ノ」字状の浮文のみが確認されるものを一括した。平縁と波状縁がある。

e類 口縁部の幅が再び広くなる傾向をもつ。平縁と波状縁がある。

横走する沈線は多条化し、有文帯を画するものから集合沈線的なものに変化する。すなわち、有文帯の消失の始まりである。有文帯の残存として、刻文帯が残る例がある。713と1014は縄文帯をもっており、本例に含めることに疑問を残す資料である。

付加装飾文はa類からc類に伝統的であった「ノ」字状のものも残るが、b'・c'類に多くみられた円形や馬蹄形の瘤状の突起が目立つ。

注目すべきものに、a類からc類にみられた沈線の末端刺突の原則が崩れ、沈線からはずれて刺突が行われる例(36・38など)がある。この刺突列(列点文)は後述するf類に一般化する。

f類 e類でみられた口縁部幅が広くなる傾向がさらに強まり、沈線もさらに多条化する。また、沈線は磨きや撫でにより再調整された、いわゆる凹線になる。平縁と波状縁がある。なお、当類以降に頸部文様帯が確認されるものがある。

刻文帯が残存する例が、掲載資料では、平縁で28例中10例あり、波状縁で27例中1例ある。付加装飾文は、点文や点文間をつなぐ縦位の短凹線を伴う例、点文を伴わない縦位の短凹線、巻貝側面の圧痕、e類に出現した刺突列を祖形とする列点文、瘤状の突起に刺突を伴う例などがある。

平縁には口縁端部に2個一対の瘤状突起をもつものの(50、51など)が目立つ。また、波状縁では波頂部が全体的に高く発達したものが目を引く。

g類 f類に比べ、口縁部幅は狭くなる傾向をみせる。f類に顕著であった波状口縁例の波頂部も縮小化する。平縁では、口縁端部に2個一対の瘤状突起をもつ例に加え、半縁状の突起をもつ例(60、70)が加わる。

沈線は、再調整された凹線である。付加装飾文は巻貝側面の静止圧痕ではなく、回転圧痕のいわゆる扇状圧痕となる。扇状圧痕には、貼り付けの上に施文される例(59)がある。

刻文帯が残存する例も残る。

本類から、A'類が認められる。全て平縁資料であり、口縁部の形態以外はA類に準ずる。

g'類 g類に準ずるものであるが、沈線の再調整はみられなくなり、いわゆる凹線ではなく幅広の沈線となったものを本類とした。刻文帯がみられる資料がなくなることや、g類でみられた半円状の突起がさらに発達する傾向がみられることが特徴としてあげられる。

注目されるものに、本類の後半に位置づけられる資料がある。A類では、口頸部の区別の意識が薄れ、外弯気味の口縁部が多くなる。また、扇状圧痕が小振りになり、なかには「V」字状のものに変化した例(773)もみられる。沈線の幅も細くなる傾向が認められる。

A'類でも、やはり、口頸部の区別の意識が薄れ、口縁部の屈曲が非常に弱いものがみられる。結果、口縁部の幅がやや広くなり、扇状圧痕間を沈線でつなぐ例(1174)や巻貝側面の圧痕を縦にずらした例(1179)などの、縦長の付加装飾文をもつ資料がみられる。

h類 A類では、波状口縁資料(1115など)を除きg'類後半にみられた外弯気味の口縁部が主流を占める。A'類もg'類後半にみられた口縁部の形態が主流となるが、注目すべき資料に1188がある。本例は、資料的制約から断定はできないが、残存する部分の下におそらく頸部の屈曲ではなく、口縁部と胴部からなる器形と考えられる。すなわち、口縁部のビルディングが省略され、頸部が消失した器形と考える。

A類とA'類に共通してみられる付加装飾文である縦位の短沈線は、g'類の1174・1179などの縦長の付加装飾文が出自であろう。また、780の弧線文は、弧線文が集約する位置に点文がみられる例から、連弧文からの変化ではなく、g'類のやや小振りの扇状圧痕と弧線状に巡る沈線からの変化と考える。

i類 A類では外弯気味の口縁部が主流であり、A'類では口縁部のビルディングが省略された器形が一般化する。幅の広い口縁部には、弧線文(780)から変化したと考えられる山形文が多くみられる。

j類 a類からi類の口縁部文様帶とは異質なものである。口縁部に連続する縦位のモチーフをもつ

もので、浮文の例と沈文の例がある。全て平縁資料である。

k類 口縁部に幅の広い縄文帶をもつ例を一括した。平縁と波状縁がある。

以上、深鉢A類とA'類の細分を再整理したが、次にこれらを概括して様式の設定をおこなう。

B 深鉢A類とA'類の様式の設定

ここでは、その分類の内容からd・j・k類については除外して考察を進めることを断っておく。

a～i類をみたとき、大きな画期となるのがh類である。h類では口縁部のビルディングの省略がみられる資料が出現し、器形が大きく変化する。

なお、本報告書39頁で記述した鉢A'類からA''類への変化もこの大画期に認められるものであろう。

a～g'類では、器形的には大きな変化はみられないが、e類で口縁部の幅が再び広くなり、有文帶が消失する小画期がみられる。

以上の大画期と小画期をもって様式の設定を行う。

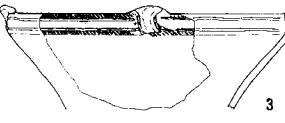
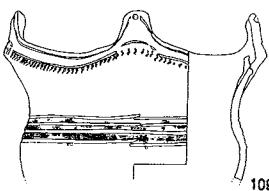
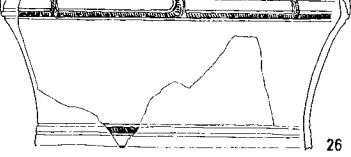
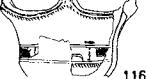
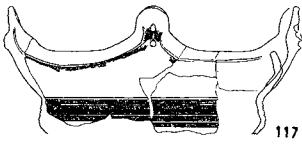
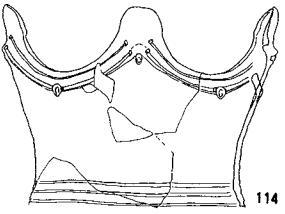
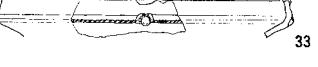
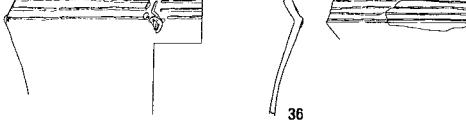
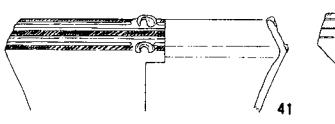
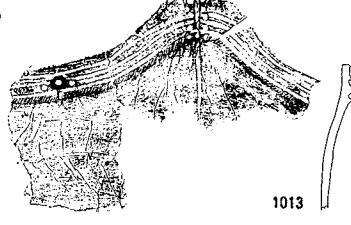
a～c'類は、泉拓良氏が縁帶文土器様式の第2様式に設定するものに相当する。^① e～g'類は、丹羽佑一氏が凹線文系土器様式に設定するものに相当するが、器形からみて縁帶文土器様式に含めて考えたい。また、文様的にいわゆる凹線文はf類とg類に僅かに認められるだけのものである。そこで、a～c'類を縁帶文土器様式の第2様式とし、e～g'類を縁帶文土器様式の第3様式としたい。

h・i類は、泉氏が西日本磨研土器様式の第1様式のa・bに設定するものに相当する。^② h類で出現し、i類で一般化する頸部が消失した器形は、泉氏の設定する西日本磨研土器様式の第1様式c及び第2様式へと受け継がれる。

C 深鉢A類とA'類の型式の設定

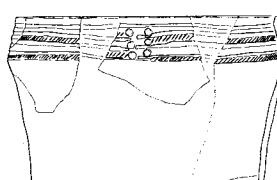
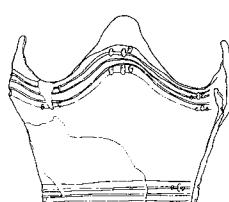
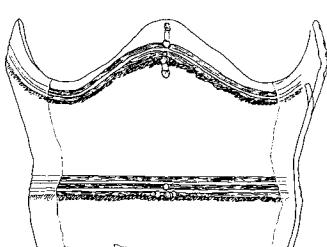
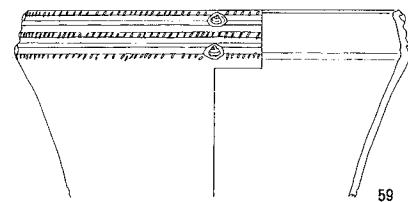
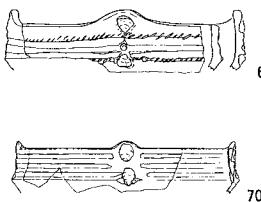
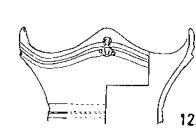
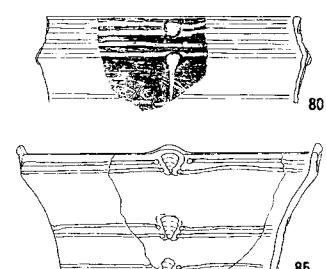
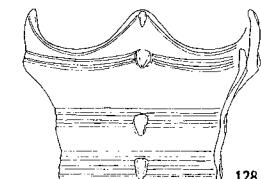
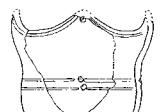
縁帶文土器様式の第2様式のうち、a類は一乗寺K式に比定される。b～c'類は、元住吉山I式に比定される。c類は、従来観塚III式の新しい部分を構成するものとして、東海的な土器と捉えることができるが、天白遺跡の資料をみる限りにおいては、型式学的にb類の後に位置づけられるものである。b類が存続したある時期にc類が後出して出現し、その後b類とc類は併存し、各々b'類、c'類へと変化しながらも併存するものと考える。

深 鉢 A 類

様式	型式	分類	具 体 例	従来型式
縁 帶 文 土 器 様 式 (第 2 様 式)	一乘寺K式	a	 	一乘寺K式
元 住 吉 山 式 (第 2 様 式)	元 住 吉 山 式	b	  	元 住 吉 山 式
	c		  	住 吉 山 式
	b'		  	I 式
	c'			
縁帶文土器様式(第3様式)	元 住 吉 山 式	e	    	+

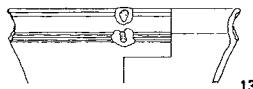
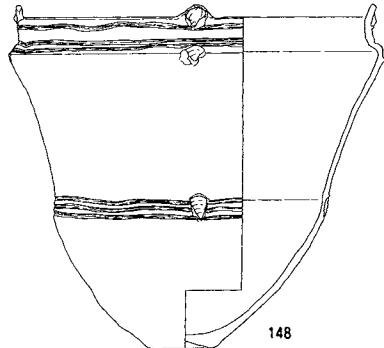
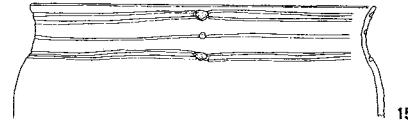
第193図 深鉢A類型式分類1 (1:8、断面と拓本のものは1:6)

* 番号は報告番号

深鉢 A 類						
様式	型式	分類	具	体	例	従来 型式
縁 帶 文 土 器 様 式 (第 3 様 式)	元 住 吉 山 Ⅱ 式	f				元 住 吉 山 Ⅱ 式
	宮	g				宮
	滝	g'				滝
	式					式
	滋 賀 里 I 式	h				滋 賀 里 I 式
	滋 賀 里 II 式	i				滋 賀 里 II 式

第194図 深鉢A類型式分類2 (1:8、断面と拓本のものは1:6)

※ 番号は報告番号

深鉢 A' 類					
様式	型式	分類	具 体 例		従来型式
縁 帶 文 土 器 様 式 (第 3 様 式)	g		 137		
		宮	 148	 145	宮
	g'	滝		 147	滝
		式	 149	 150	式
			 1179	 1174	
			 1231		
西日本磨研土器様式	滋賀里 I 式	h	 1181	 152	滋賀里 I 式
	滋賀里 II 式	i	 153	 1206	滋賀里 II 式
				 1207	

第195図 深鉢 A' 類型式分類 (1:8、断面と拓本のものは1:6)

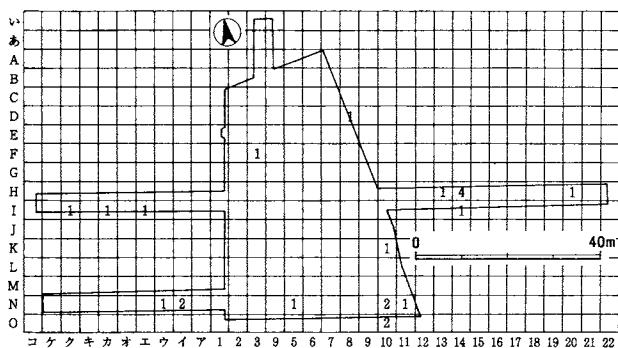
※ 番号は報告番号

縁帶文土器様式の第3様式では、e類に相当する
従来型式は認められない。e類は、元住吉山II式の
初現のものと考える。f類は元住吉山II式に比定さ
れる。g・g'類は宮滝式に比定されるが、3段階
に区分できると考える。

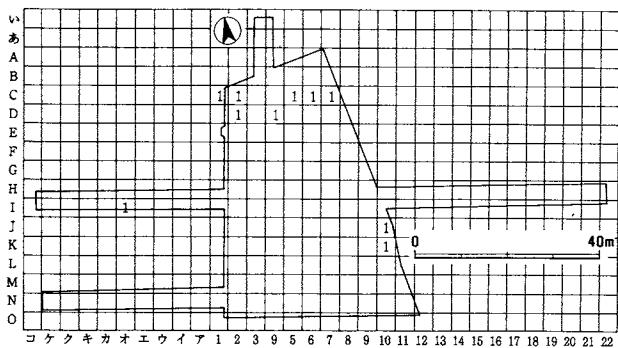
西日本磨研土器様式では、h類が滋賀里Ⅰ式に、i類が同Ⅱ式に比定される。

D 深鉢A類のグリッド別出土点数

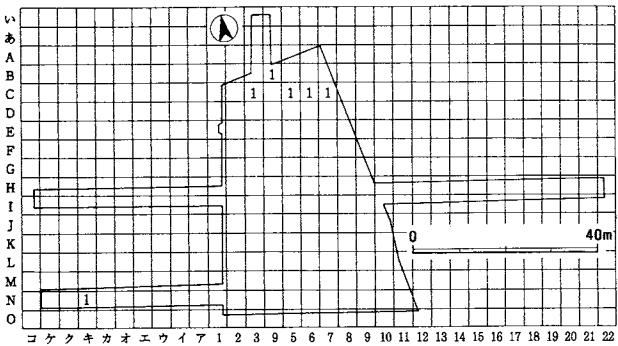
第 196・197 図は、掲載資料に限ってのものであるが、各類のグリッド別出土点数を示したものであ



深鉢 A a 類



深鉢Ab'類



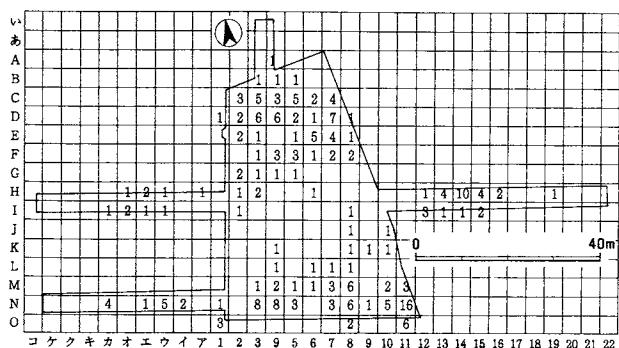
深鉢 A c' 類

る。b・f・g類に端的に現れているように、南北の2群に分けて分布状況を把握することができる。この傾向は、配石遺構や埋設土器、焼土などの遺構の分布傾向とも一致するものである。

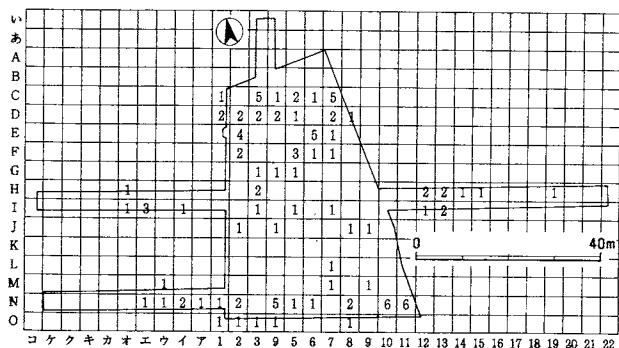
このことから、南北の2群に分かれる遺構群は、時期差による結果ではなく、祭祀を行った単位集団の違いや同一集団による異なる祭祀行為の結果と推定することができる。

まとめ

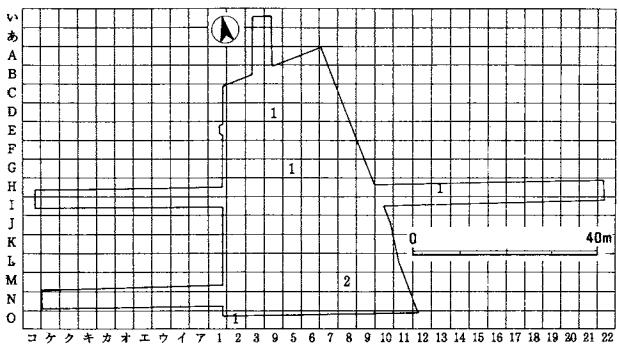
以上、深鉢A・A'類について様式及び型式の分



深鉢 A b 類

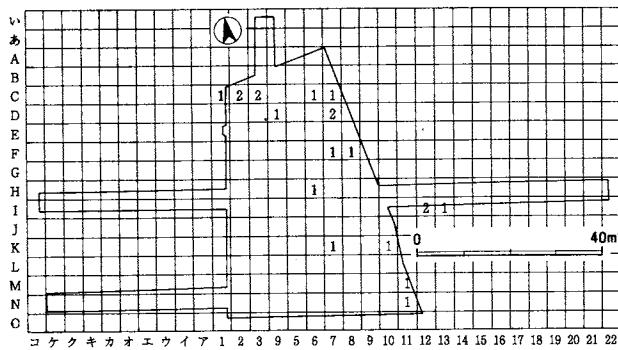


深鉢 A c 類

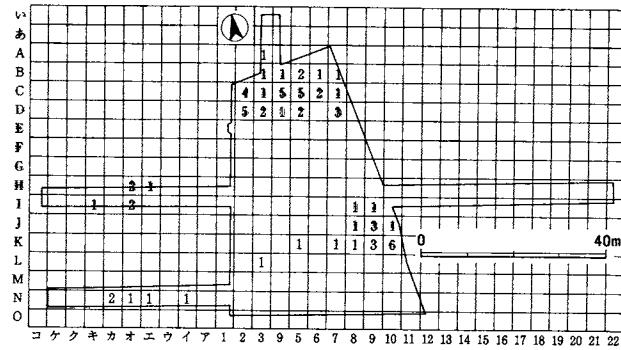


深鉢 A d 類

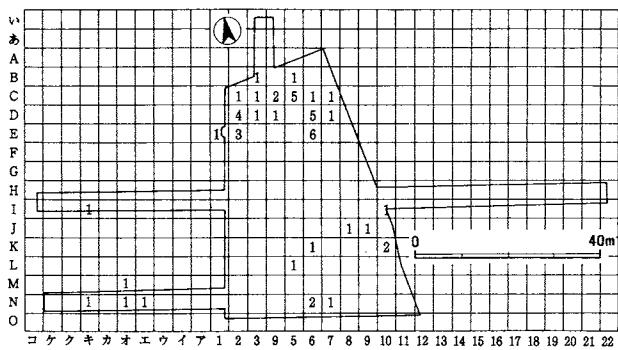
第196図 深鉢A類グリッド別出土点数 1 (1:1,600)



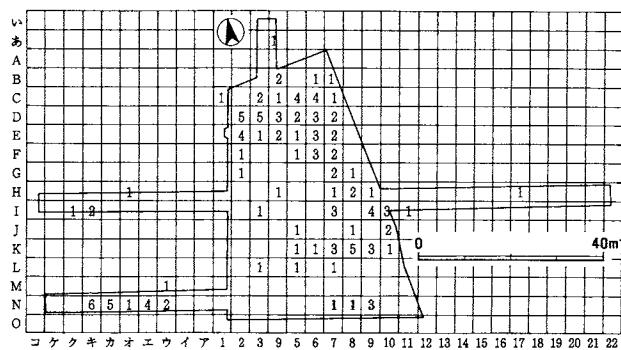
深鉢A e類



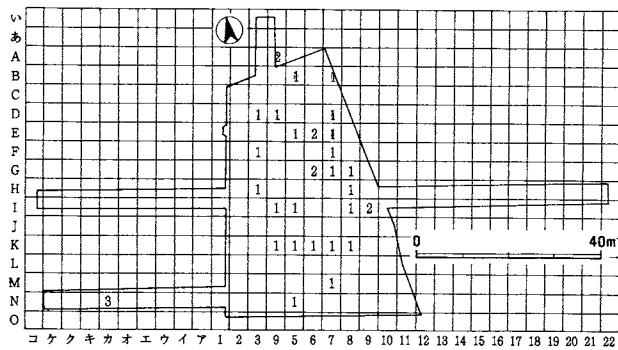
深鉢A f類



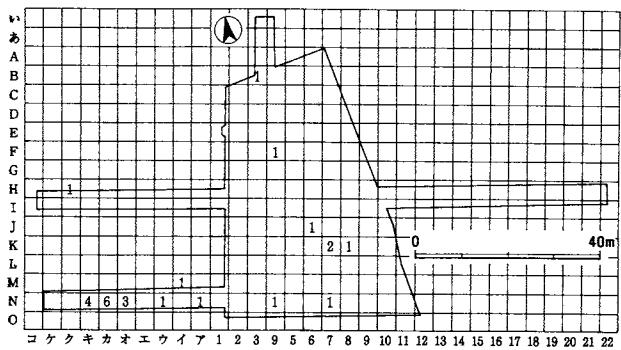
深鉢A g類



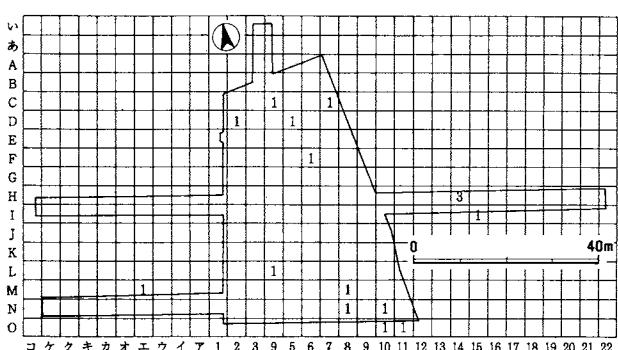
深鉢A g'類



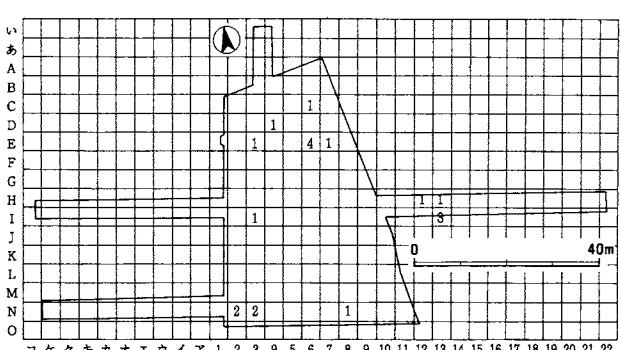
深鉢A h類



深鉢A i類



深鉢A j類



深鉢A k類

第197図 深鉢A類グリッド別出土点数 2 (1 : 1,600)

類を行った。しかし、圧倒的多数を占める無文深鉢については、埋設土器を除いては報告できなかった。また、その他の器種との組成についても包含層遺物という資料的制約から控えざるを得なかつた。また、異系統の土器との並行関係などの課題も残る。

今後、このような課題についても、深鉢A・A'

(2) 土偶

天白遺跡では70点の土偶が確認されている。その内4点は平成5年度に嬉野町教育委員会により実施された南側の範囲確認調査^⑤で出土したもので、平成4年度の当調査分は66点である。従来、土偶の出土が余り知られていなかつた三重県においては、驚くべき数量であった。

ここでは、県内の土偶の出土状況について簡単に触れた後、天白遺跡の土偶について若干の考察を行いたい。

A 三重県出土の土偶

平成7年3月現在、県内では7遺跡から101点の土偶が出土している(第48表)。時期的なものをみると、発生期の土偶に大鼻遺跡出土^⑥の1点があり、注目される。しかし、早期初頭以降、後期中葉までの資料は皆無である。後期中葉から晩期前葉の資料は

遺跡名	所在地	時 期	点 数
大 鼻	亀山市	早期初頭	1
天 白	一志郡嬉野町	後期中葉 ～晩期前葉	70
下 沖	一志郡嬉野町	後期中葉 ～晩期中葉	16
森莊川浦	多気郡多気町	後期後葉も しくは晩期	2
森 添	度会郡度会町	後期中葉 ～晩期	8
下川原	名張市	晩期前葉	3
答 志	鳥羽市	不 明	1

第48表 三重県出土の土偶一覧表

類で行った分類を基本的視点として整理を試みたい。

課題はたくさん残るが、天白遺跡の土器をみたとき、数型式に及ぶ長期に渡って継続的に非常に安定した土器づくりが営まれたとものとの評価には間違いはない。

土偶

豊富である。天白遺跡をはじめ、下沖遺跡^⑦、森添遺跡^⑧、森莊川浦遺跡^⑨、下川原遺跡^⑩の5遺跡で99点が確認されている。晩期後半の資料はない。

以上のように、県内の土偶は大鼻遺跡及び時期不明の答志遺跡出土^⑪の2例を除くと、全て後期中葉から晩期前葉の資料である。

B 天白遺跡出土の土偶

既に報告したように、当遺跡の土偶は大きく“ひとがた”のものと“分銅形”的なものに分類できる。

a “ひとがた” 土偶

“ひとがた”的土偶は、製作技法やその形態の違いからA～Fの6類に分類した。この内A類は10点あり、比較的まとまった数量の資料が出土している。A類は2本の棒状粘土を中心に製作されるもので、縦長の乳房や断面が偏平な腕をもつことを特徴とする。破片資料が多く資料的制約はあるが、共通して確認できる背面の文様を中心にA類の型式変遷が窺えるので紹介しておく(第198図)。

第I型式 背面に肩から降りる斜方向の沈線帯をもち、肩部に横位の沈線が認められるものを第I型式とした。第I型式は、細部の特徴からさらにa・bの2段階に細分できる。

a段階の沈線帯は2条沈線間に貝殻腹縁文をもつもので、肩部沈線は末端刺突と沈線内刺突をもつ(第109図1)。

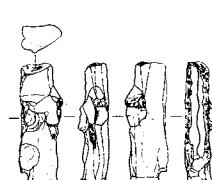
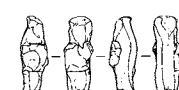
b段階の沈線帯及び肩部沈線は多条化する(第109図2)。

第II型式 第I型式の肩部沈線が消失するものを第II型式とした。肩から降りる斜方向の沈線帯の特徴からa・bの2段階に細分できる。

a段階の沈線帯は第I型式のb段階と同様に多条である(第109図3)。

b段階の沈線帯は2条である(第109図4・5)。

参考資料に後期中葉に比定される岐阜県の道下遺

土偶 A 類				
形式	特 徴	段階	細部の特徴	具 体 例
I	<ul style="list-style-type: none"> 斜方向の沈線帯が肩から降りる 肩部に横位の沈線 	a	<ul style="list-style-type: none"> 沈線帯は2条沈線間に貝殻腹縁文 肩部沈線は末端刺突と沈線内刺突をもつ 	
		b	<ul style="list-style-type: none"> 沈線帯は2条沈線間に貝殻腹縁文 肩部沈線は末端刺突と沈線内刺突をもつ 	
II	<ul style="list-style-type: none"> 斜方向の沈線帯が肩から降りる 肩部沈線が消失 	a	<ul style="list-style-type: none"> 沈線帯は多条 	
		b	<ul style="list-style-type: none"> 沈線帯は2条 	
III	<ul style="list-style-type: none"> 斜方向の沈線帯が脇から降りる 	a	<ul style="list-style-type: none"> 沈線帯は2条 	
		b	<ul style="list-style-type: none"> 沈線帯は2条 肩部に横位の隆帶 	
IV	<ul style="list-style-type: none"> 斜方向の沈線帯が消失 肩部に横位の隆帶 肩幅が狭くなる 			
				<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> 参考資料 (1:6)  道下 (岐阜) </div>
				
+	<ul style="list-style-type: none"> 偏平化 粗雑化 			<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">   </div>

第198図 土偶A類型式分類 (1:4)

跡出土例がある。

第Ⅲ型式 第Ⅰ・Ⅱ型式で肩から降りていた沈線帯が脇から降りるようになったものを第Ⅲ型式とした。細部の特徴からa・bの2段階に細分できる。

a段階の沈線帯は第Ⅱ型式のb段階と同様に2条である(第109図6)。なお、6は腰部に隆帯が確認される。

b段階の沈線帯もやはり2条のものであるが、肩部に横位の隆帯がつく(第110図7)。

第Ⅳ型式 第Ⅰ～Ⅲ型式でみられた斜方向の沈線帯が消失するものを第Ⅳ型式とした。肩部には第Ⅲ型式のb段階と同様に横位の隆帯をもつ(第110図8)。

参考資料に後期後半と推定される愛知県の大曲輪遺跡出土例がある。

第110図9・10は、偏平化、粗雑化が著しい資料で、第Ⅳ型式より後出するものと考えるが、第Ⅳ型式との型式的断絶が大きいために第Ⅴ型式とはしなかった。

以上、土偶A類の型式分類を行った。時期の比定は全てが包含層出土であり、困難である。しかし、文様の状況から、第Ⅰ型式のa段階の土偶は2条沈線間の貝殻腹縁文や末端刺突を伴う沈線、沈線内刺突などがみられ、降っても元住吉山Ⅰ式までの資料といえる。また、第Ⅲ型式のb段階資料には、中央に縦位のやや幅の広い沈線がみられる。第Ⅲ型式のa段階資料には腰部に隆帯がみられる。これらの幅広沈線や隆帯をもつ資料がいわゆる凹線文土器に対応するものであろうか。偏平化、粗雑化が著しい資料9・10は晩期に降るものであろうか。

“ひとがた”的土偶は他に、B～Fの5類の系統のものがある。これらの内C類の2点(第111図16・17)は、背面に脇から降りる斜方向の沈線帯をもつもので、A類第Ⅲ型式の土偶との類似性が指摘できる。時期的にも近い資料であろうか。

さて、今後A類以外の“ひとがた”土偶についても型式分類を進めていく必要があるが、これらの系統差が土偶を製作した単位集団の違いによるものなのか、或いは時期差によるものなのか当面の課題したい。

b “分銅形” 土偶

第112図22～第113図27の6点を“分銅形”土偶

(G類)とした。22は沈線間に擬縄文がみられ、元住吉山Ⅰ式までの資料と考えられる。23は沈線間に刻みがみられ、元住吉山Ⅱ式までの資料と考える。24～26は、比較的幅の広い沈線をもつ資料でいわゆる凹線文土器に対応する時期のものであろうか。27は、無文である。時期についての判断はここでは控える。

c “ひとがた” 土偶と“分銅形” 土偶の系譜

三重県の土偶の出土状況は先述したとおりである。現況では、天白遺跡の土偶の系譜を県内に求めることはできず、他の地域に求めざるえない。

後期前半の時期、西日本の土偶の絶対数は少なく、“分銅形”土偶にその地域色をみいだすことができる程度である。やはり、“ひとがた”土偶の系譜は東日本に求められるものであろう。

関東地方で加曾利B様式期に盛行する“ひとがた”的いわゆる“山形土偶”との関連が注目される。しかし、天白遺跡の“ひとがた”土偶と山形土偶を比較した時、直接的な影響は認められず、おそらく、山形土偶の間接的な影響下に当遺跡の“ひとがた”土偶は成立したものと考える。今後その中間に位置する土偶を解明していく必要がある。

“分銅形”的土偶については、現状では近畿・瀬戸内地方からの影響で成立したものと考えておく。

土偶の使用方法については不明確であるが、明らかに系統の異なる“ひとがた”と“分銅形”的土偶については、その担っていた役割に違いがあったのであろうか。

d 赤色顔料付着の土偶

当調査出土の土偶66点中、21点に赤色顔料が認められる。手や足など各部位のみが残存する資料を除けば、32点中、14点とほぼ1/2の率を占める。

C まとめ

三重県の後期中葉から晩期前葉の縄文社会は、土偶が担う役割(機能)を強く必要としたようである。この時期、他の地域からの土偶文化を受け入れ、自分たちの社会のなかに位置づけ消化していったようである。後期中葉以降、三重県の縄文遺跡が土偶文化を必要とした社会背景については、「(6)天白遺跡の性格」で考えたい。

晩期には、土偶の必要性が序々に薄れたようで、三重県に代わって、近畿地方の大坂府・馬場川遺跡

や奈良県・橿原遺跡^⑩で土偶の盛行がみられる。

(森川幸雄)

(3) 石器・石製品

A 石器製作

本遺跡では、打製石器・磨製石器両者の製作に関する、各器種の未成品・剥片・碎片・石核・原石、あるいは加工用石器といった資料が大量に出土している。ここではその意味について若干の検討を加えていきたい。

a 打製石器の製作

打製石器の製作は、多数の完成品の存在と共に、未完成品や製作関連資料から安定した活動の存在が認定されるが、これらの資料がこの場所での石器製作の結果として残されたものか、他所で行われた石器製作に関わる資料がこの場所に一括して廃棄（投棄）されたのかは、接合や個体識別などの十分な資料操作を経ていないため判断できない。ただし、他の遺物の出土状況との関係を勘案してみると、後者が中心である可能性が高いと考えられる。

不十分な資料操作からはこの発掘区内での石器製作・加工作業を否定することはできないが、石器製作そのものが直接的に生産活動に結びつくものではなく、一種儀礼的な意味合いをもつ可能性についても考える必要があろう。

素材には、肉眼観察から二上山産と推定されるサヌカイトが最も多く使用され、他に下呂石、在地産と推定される安山岩・チャート・頁岩・石英などがみられる。また、個別記載で示したようにサヌカイトには、明らかに旧石器時代に属すると考えられる剥片や石核がみられ、当時の石器素材の採集・搬入の一様相が知られて興味深い。

剥片剥離については、旧石器時代的な効率的な剥離技術は基本的には用いられていない。剥片自体の特徴をみると、第一に折断面をもつものが一定量存在している点が指摘できる。接合を行っていないため、素材の分割を目的とした意図的な折断か剥片剥離時の衝撃によって起こる偶発的なものの判断は難しく、ここではすべて剥片として分類したが、かつて岡村道雄氏が指摘されたように調整のための折断として積極的に評価すべきかもしれない。

第二に比較的安定した大型の横長剥片や幅広剥片が生産されていることである。先に触れたように、

効率的な剥離技術によるものではなく、石核素材に大型の剥片を用いたことによると考えられ、特に削器の素材として多用されているようである。

b 磨製石器の製作

本遺跡でみられる磨製石器としては磨製石斧をあげることができる。しかしながら、これらは既に述べたように、使用不能となって廃棄されたものや転用品ばかりであり、未完成品はまったくみられない。ただ、大型の砥石や有溝砥石が安定した点数みられるところから、磨製石斧以外の磨製石製品や骨角器などの製作がそれらを利用して行われていたと考えられる。

B 各器種について

次に器種ごとに簡単な所見を述べていきたい。

a 石鎌

石鎌は形態記述の項で述べたように、大部分が凹基無茎鎌であり、尖基鎌が1点存在するものの、有茎鎌はみられなかった。凹基無茎鎌のなかでもI a類、I d類、I b類の順に多く、これらでかなりの数を占めている。また、先端部をより尖鋭に作り出すもの、側縁が鋸歯状となるものが、一定量存在することも特徴のひとつである。

県内における後期の石鎌形態については、表面採集・混在などの限界もあるが、玉城町庄出遺跡^⑪、多気町森莊川浦遺跡^⑫、度会町森添遺跡^⑬、勢和村新神馬場遺跡^⑭、飯高町宮ノ東遺跡^⑮、大宮町大西遺跡^⑯などが参考になる。五角形鎌の多寡・盛行時期、有茎鎌の有無・出現時期など細かな部分での検討課題はあるものの、全体的には本遺跡の形態的特徴は上記諸遺跡と特に違うものではないと考える。

次に量的な問題がある。上記の遺跡を含め伊勢湾西岸の後期の遺跡からは数多くの石鎌が出土する傾向がある。たとえば、上記の森添遺跡は他時期のものも含め1,800点以上、新神馬場遺跡・宮ノ東遺跡・大西遺跡でも200点以上出土している。また、伊勢湾北東岸の晩期後半の遺跡からは石鎌が多量に出土することが從来から指摘されている。この多量化の傾向は、有茎鎌の増加や石鎌の大型化と軌を一にすると考えられる。したがって、こうした量的増加を

ただちに狩猟の活発化に結びつけるのではなく、その背景に何らかの社会的な要因が存在すると考えられよう。

本遺跡は後期後半の良好な資料であるが、中勢から北勢にかけては後期後半から晩期前半にかけての良好な石器資料に恵まれておらず、以後どのような消長を経るのか、土器群や他の石器の変化などの要素も含めた時期的な変遷を考えるとともに、立地的な視点からも検討が必要であろう。

b 漁撈活動に関わる石器について

三種の石錐の出土数が各分類を合わせても12点と少数であるが注意される。遺跡が中村川をすぐ眼前に見る低位段丘上に営まれながら、広い調査面積と他の遺物の莫大な出土点数に対して、石錐出土点数が僅少であることは、そのまま漁撈活動が低調であったということを示すのではないといえる。

しかし、網漁に代わって、釣漁や筌・簍立てなどを用いた陥縄漁など、他の漁法が行われた可能性も想定できるが、石錐を用いた網漁が、縄文時代の内水面漁とりわけ河川漁において普遍的な漁法であることを考えたとき、他の漁法を想定した場合でも網漁がみられない理由を見出ださなくてはならない。三重県下の個々での遺跡の河川漁の実態については、今後の検討課題としたい。

さらに、時期差の可能性も考慮する必要がある。後期の前半には打欠き石錐・切目石錐共にきわめて安定して存在するのに対して、本県下の宮ノ東遺跡・森添遺跡や兵庫県北部の但馬地方に所在する広井代遺跡といった後期後葉の凹線文土器群を主体とした遺跡では、やはり本遺跡と同様に石錐は僅少であることが知られている。とりわけ広井代遺跡では、コンテナ十数箱に及ぶ採集資料や調査資料があるが、石錐は1点も確認されていない。同様に200点以上の石鏃が採集されている宮ノ東遺跡も石錐は1点もない。また、森添遺跡でも他時期の包含層からは相当数の石錐が出土しているにも関わらず、後期後葉の第6・9層からは、「皆無に等しい」という。

こうした地域を越えた共通性から、縄文時代後期後葉に内水面における網漁が一時的に衰退するという時期的な特徴である可能性も考慮しなければならないが、この点については、上記三遺跡や同じ嬉野

町内の下沖遺跡などの同時期の資料の公表を待って検討する必要があろう。

c 植物質食糧に関わる石器

根菜・球根類の採集具と理解される打製石斧は、9点と少ない。一方、本遺跡よりややさかのほる後期中葉の遺跡で、立地が河川の中流域と類似している桑飼下遺跡（京都府舞鶴市）では、751点と多量の打製石斧が出土し、他の石器群や動・植物遺存体から推定される生業活動と合わせて「桑飼下型経済類型」が設定されている。

これをみると、打製石斧の在り方が、遺跡ごとに大きく異なることを示しているといえる。ただ、石器組成以外の要素を検討すると、桑飼下では、第一に地形的には根菜・球根類が生育しやすい自然堤防の発達が著しい。第二に遺構の内容をみると、河川堆積の砂層のため住居址こそ確認されなかったものの、その存在を推定させる多数の炉址やトチの果皮など植物質食糧の残渣によって構成される「特殊泥炭層」などが検出され、安定した生活遺跡としての用件を備えている。

それに対して天白遺跡では、少なくとも今回の調査範囲に、配石と埋設土器以外に住居址をはじめとする直接的な生活の痕跡を示す遺構が見られないことから、遺跡自体の機能の相違を反映している可能性も高く、単純な比較はできないといえよう。

d 石錐

肉眼および20×ルーペで機能部の観察を行った。これらはかなりマクロな観察であり、ミクロな観察を行えば、磨耗痕としたなかに線条痕や光沢痕を残すものが当然含まれてこよう。さらに、使用痕なしとした点数も減少することが予想される。したがって、先学の業績に多分に依拠し、対比させるかたちでのきわめて表面的な記載になる点をお断わりしておきたい。

さて、使用の痕跡と思われる磨耗痕（稜線の潰れ）や線条痕は、I a類2点(18.2%)、I b類2点(66.6%)、II a類5点(27.8%)、II b類7点(20.0%)、III類40点(70.0%)に認められた。使用痕のほとんどは磨耗痕で、線条痕が確認できたのはII a類1点、III類6点のみであった。I a・I b類の出土点数自体が少なく統計上問題があろうが、III類の40点(70.0%)

という数値は他の類型と比較して際立って高いものである。こうした数値上の差異は何に起因するのであろうか。

ここで先学の使用法に関するいくつかの業績を簡単にみておきたい。上深沢遺跡の報文では石錐の種類として「連続複方向（交互）回転によって凹み程度の小さな穴をあけるもの」「非連続単方向回転によって穴を拡大しながら徐々に穿孔するもの」が提示されている。小稿分類のⅠb・Ⅱb・Ⅲ類に対応すると思われる。

矢島・前山両氏は石錐の類型化を行って全国的な分布・変遷を概観し、使用法としてA1a・A2・B1類=「着柄を前提とした弓錐用」、C類=「指で直接保持して使用するハンドドリル」、B2類=弓錐用とハンドドリルの両者、D類=「穿孔部を拡大するような機能」を類型と対応させるかたちで仮説的に提示している。

また、町田氏は実体顕微鏡によるミクロな観察を行い、A類=「穿孔でも穴部の拡大」、B・C類=「穿孔（ねじ切り）」、D類=「全周の揉みきり運動にみる対象物の穿孔、穴の貫通作業」を想定している。

このような成果から、形態や使用痕の状態の違いは、対象物の違い、使用時間・回数の違い、穿孔作業における回転穿孔と刺突穿孔の使い分け、作業段階での使い分けなどが何らかのかたちで反映していると考えられよう。

各氏・各遺跡での形態分類がそれぞれ異なっており、必ずしも厳密に相互に対応させることはできないが、おおむねの形態的な対応関係は第49表のようになろうか。第49表から分かるように1対1で対応する例は少なく、1対複数あるいはある遺跡の一つの類型が他遺跡のいくつかの類型にまたがるかたちで重複して対応する場合が多い。

以上のような問題があることを認識しつつ、あえて使用法を想定してみよう。機能部が棒状で長く先鋒なⅠa・Ⅱa類は、拡大を目的としない穿孔作業、機能部が短く尖鋒さに欠くⅠb・Ⅱb類はあらゆる穿孔作業、に主として用いられた可能性がある。Ⅲ類は分類定義にもあるように加工範囲が小さく、素材をあまり変形しない。また、多様な形態・大きさ・厚さの素材を用いるため、結果的にⅢ類の形態は齊一性にとほしく、着柄にははなはだ不適当である。したがって、柄に装着するのではなく、直接手に持つて使用したと思われる。そして、使用痕の残る範囲は器軸（機能部の中心軸）に対して左右あるいは表裏で長さが異なる例が多い。これは「回転軸と錐部の中心軸が一定せず偏った角度で回転運動が行なわれた」結果と考えられる。

本遺跡では補修孔を穿った土器片が多く出土しており、その穿孔部は器軸と回転軸が一致しない「V」状のもの、器軸と回転軸が一致する「V」状のものが存在するが、前者が多数を占めている。Ⅲ類の対象物の一つは土器に残る補修孔と考えられよう。

e 削器

素材となる剥片は横長剥片、幅広剥片、縦長剥片などで、その背面に残る剥離面構成から特に系統だった剥片剥離技術は存在しないと考えられる。したがって、剥片のなかに大型の剥片が多数存在することからも、アトランダムに剥離された剥片のなかから素材に見合った剥片を選択したといえよう。

刃部形態について、直刃、凸刃、凹刃の順に多いわけであるが、凹刃・凸刃の多くは極めて直刃に近いものであり、弧を描くような明瞭な凹刃・凸刃は少ない。刃部は全体的にしっかりとしており、大部分は背腹両面から加工を行うものである。

刃部には刃縁が磨耗して丸みをもつものや潰れ状

天白遺跡	(矢島・前山 1983)	北村遺跡(町田 1993)	阿久遺跡(小池 1982)
I a	↔ B 1・B 2	↔	C
I b	↔ C 1	↔	B 2
II a	↔ A 1a・A 1b・A 2	↔	D
II b	↔ D 1・D 2	↔	B 1
III	↔ D 2・E・C 2	↔	A

第49表 石錐分類対照表

を呈するものが肉眼で35点確認できた。このような使用痕は、一端もしくは両端あるいは中央に部分的に残されている場合、全体に断続的に残されている場合、刃縁全体にまたがる場合がある。

磨耗・潰れの強弱についても、全体に強く残るもの、全体に弱く残るもの、部分的に強く残るもの、部分的に弱く残るもの、部分部分で強弱が異なるものなど多様である。

使用痕研究の成果によれば、こうした磨耗・潰れは硬い被加工物、鋸引き、平行方向の運動、直交方向の運動などにより残され得るものであり、使用痕の残る部位が多様なことに関しても、打製石器のもつ特徴である刃角や縁辺形の変異、圧力のかかり方が部位により異なること、などに起因するとの指摘がある。

削器の具体的な用途については、分析を行っていないため言及できないが、愛知県以東で目につく「粗製剥片石器」のあり方も含め、今後の検討課題である。

f ノミ状石器

ノミ状石器の特徴については形態記述の項で簡単に述べたが、特異な石器でもあり、まず最初に、その特徴をより詳しく下記の観点からみておきたい。

石核素材……接合資料が確認できない以上、石器背面側に残る剥離面の状態等を手がかりに推察せざるを得ないが、背面側剥離面のなかにポジティブ面・平坦面をとどめるもの、幅広剥片が素材となっているものが比較的多く見られることから、まず第一に一定の大きさの剥片が石核素材の中心であった可能性が考えられる。例えば、石核7・9のようなものがよい例である。第二に分割礫である。比較的安定した面であろう分割面を剥片背面に取り込むことは、剥片剥離作業の初期の段階なら可能である。

素材剥片……製品を見るかぎり、大きさは長幅5cm前後で厚さは1cm前後の正方形形状の剥片が中心である。腹面は平坦で安定した面を、背面にも縁辺に接する平坦もしくはそれに近い安定した面をもつ。他の剥片・石核の観察から、アトランダムに剥離された剥片のなかから素材に適した剥片を選択したというよりは、石核素材の選択・利用段階からそれなりの目的意識をもって素材となる剥片を生産したと

考えた方が妥当であるといえる。

加工方法……基本的には旧石器時代のナイフ形石器・台形様石器・台形石器などにみられる急角度の刃潰し（背潰し）状の調整加工に類似する。調整は先の石器類の場合は腹面側から施されるのが普通であるが、ノミ状石器の場合は腹面や背面からの急角度の調整のみならず、器体の厚みを取り除く背腹両面からの平坦剥離調整も多用される。平坦剥離調整は急角度の調整面か折れ面、礫表面を打面とする。したがって、模式図的に示せば多くの調整加工部分の横断面形は「∠」形あるいは「<」形、「凸」形となる。

ただし、礫表部分や折れ（折り取り）面、打面部が未加工であるものが一定数存在することから、形態や腹面・背面とその間の面（側面）のなす角度、器体の厚みなどが、使用に際して支障がないと判断されれば、加工は不要であったということになる。

刃部位置……安定した背面側剥離面と安定した腹面のなす角度が鋭い部分を刃部に選択している。刃部位置は素材剥片の末端縁が2、側縁が1の割合で選択されている。

刃部形態……直線的な縁辺が多いが、外側に緩く弧状（凸状）となる縁辺もままある。刃角は概ね20～40度に収まるものが大部分である。

刃部使用痕……肉眼・20×ルーペ観察のうえでは、刃部には刃こぼれ状の微小剥離痕や磨耗はほとんどみられなかった。これが使用法に因るのか、対象物に因るのか、使用頻度に因るのか、現時点では未検討である。

石材……すべてサスカイト製である。一定量出土している他の器種は複数の石材が用いられているが本器種に関してはあてはまらない。

以上がノミ状石器のいくつかの属性の主な特徴である。

本器種は出土品の分類作業を行っていくなかで抽出したものである。当初は見たこともない石器であったため、急角度の加工部位を搔器・削器の刃部のようなものと考えたが、いくつか抽出し得た時点で加工方法や刃部形態にみられる特徴・齊一性から、加工部位を刃部のサポート的な部位と認識するに至った。この石器に関しての主な問題点・検討課題は下

記のようになろう。

(ア) 本遺跡に限られる器種なのかどうか。今のところ県内の遺跡での出土は寡聞にして知らないが、今後注意が必要である。

(イ) 機能・用途について。サイズ的に規格性が強いことから、石器本体をソケット状の柄に取りつけた形で使用した可能性も否定できない。

g 磨製石斧

伐採用斧と考えられている乳棒状石斧は、身部破片かと思われる小片1点を除いては、出土していない。定角石斧のうちの大型品が伐採用斧として使用されていたとも考えられる。磨製石斧の僅少性は、必ずしも木材加工活動の不活発さを示すものではないと考えられる。

h 有溝砥石

有溝砥石は、その用途として玉製品や骨角製品・木製品の研磨が推定されている。今回の調査では、玉製品としては硬玉製と推定される小玉が2点出土しているが、他には玉製作の可能性をもつ原石や未成品は全く出土しておらず、多くの砥石を必要とするとは考えられない。一方、骨角製品・木製品については、1点も出土していないため全く情報をもたないが、加工対象としてはこれらが主体であったと考えることが妥当であろう。

i 軽石製石器

あまり類例を見ない器種で、これだけの点数がまとまって出土している遺跡は他にはない。ただ、前述の森添遺跡で、第161図1と同形態のものが1点と中央に穿孔をもつ楕円形の製品の2点が出土している^⑨。同遺跡では、それぞれ浮子と垂飾と推定されており、本遺跡でも、有孔品は浮子、他のものは砥石などの加工工具がその用途として想定されよう。

j 部分磨製石器

部分磨製石器としたものは、いずれも円礫片の周縁の一部に研磨面をもつもので、その部分を刃部と理解した。2点は、その加工部位から同一器種としたが、前述のように刃部の在り方がやや異なり、第160図1の刃部は、特に摩滅が著しい。しかし、両者が同一の機能をもつすれば、擦り切り石器とするのが最も妥当ではないかと推定される。しかし、第160図1の形状や刃部の在り方は、やや光沢をもつ点

などいわゆる「穂摘み具」の刃部の在り方との共通性もみられ、横型で整った形態をもつ削器が多いことと合わせて、再検討を要する資料としておきたい。

東海地方から東北地方では、後期後半から弥生時代にかけて本器種に類似した石器が多数出土し、近年検討の対象となっている^⑩。本遺跡とほぼ同時期で、渥美半島に所在する川地遺跡では「粗製剥片石器」と呼称している円礫から剥ぎ取った剥片をほとんどそのまま用いる石器が、点数的に石鏃に匹敵するほど出土しており、穀物系の植物質食糧の収穫具として利用されていた可能性が想定されている。さらに弥生時代にいたっても、中部・関東から東北地方にかけては、磨製石包丁の補完的な穂摘み具として、「打製石包丁」とも理解されている。本遺跡では、部分磨製石器とした2点が共に「粗製剥片石器」と同一器種であると考えたとしても、生産用具として主体的な位置を占めていたとは言い難い。

k 石核・素材

まず、大きさ・重さについてであるが、軽いものから重いものまで多様である。サヌカイトのなかには1kg近いものもある。その他に拳大ほどの石核・素材もかなり存在する。森添遺跡でもサヌカイト製の原石が極めて多く、なかには約4kgに達するものがあるという。また、それとは逆に、軽いものは小指大ほどであり、石核素材ともなり得ず、その必要性を合理的には解釈し得ない。何故、このようなものが搬入（混入？）されたのであろうか。

全面が風化度の強い剥離面で覆われた古い時代（時期）のものと思われる素材（石器）が持ち込まれている点については既に触れた。石材原産地から離れた遺跡での素材のあり方としては、原礫やブランクとして整えた状態のものが一般的であるが、本遺跡の素材のいくらかは、過去に廃棄あるいは遺棄された遺物そのものであり、準備された「ブランクとして整えた状態のもの」とは異なる。

このような変化（違い）は何に起因するのであるか。要因が二上山周辺の石材供給側にあるのか、石材需要側にあるのか検討が必要であるが、三重県内の石材利用状況として、後期になると、全般的に石鏃などの剥片石器類に在地的なチャートを利用することが著しく後退し、サヌカイトにほぼ全面的に

とってかわっていくことが指摘されている^⑨。これは単に使用石材の変換にとどまらず、量的な変化をも伴っている。すなわち大規模遺跡の出現とあいまって、石器類の総量も膨大なものになり、剥片類・石核・素材も目立って多くなる。

したがって、要因のひとつとして、サヌカイト石材の需要増大が考えられよう。そして、需要増大に伴って供給する側も「旧石器時代～縄文時代後期以前の遺物」を石材（素材）として大いに活用したのではないだろうか。このことは前提として、石器製作における一連の工程を遺跡内で完結し得るに十分な石材を獲得する広範な流通・交易網が確立していたことをも意味しよう。

本遺跡では大量に出土したサヌカイト以外に、一定量出土している遠隔地産出の石材として下呂石がある。下呂石の原産地と本遺跡の距離は、サヌカイトの原産地である二上山のそれに比べて遙かに遠いが、下呂石は木曽川下流域まで転石として分布していることが知られており^⑩、どのような入手経路を経たのか、北勢から中勢にかけての分布・出土量の在り方をも含め興味がもたれる。

C 石器組成とその評価

ここでは、各器種ごとの検討を踏まえて、伊勢湾周辺から近畿地方に分布する他の後期遺跡の内容と比較し、石器群全体の構成から本遺跡の性格について考えてみたい。

石鏸と植物質食糧調理加工用石器がどの遺跡でも主体となっており、本遺跡もこれらが主体とはなるものの、点数的には楔形石器が石鏸をやや上回って出土している。ただし、楔形石器については、この器種をきちんと抽出して報告している遺跡が皆無に等しく、他との比較は残念ながらなし得ない。このことから、楔形石器を除いて考えるならば、同様の傾向を示すと理解して大過ないであろう。

漁撈活動関連の石器については、石錐の僅少性を指摘した。これは後期後半期の遺跡においては、他地域でも内水面を対象とする遺跡では、同様の傾向があることも知られた。ただ、同時期の遺跡でも、海岸部に立地し、貝塚を形成する前述の川地遺跡では、組成の約4割を打欠き石錐が占めており、その様相を大きく違える^⑪。こうした様相は、遺跡の立地

差がこの時期の漁撈活動に大きく反映されていることを示しているといえる。これは、前述のように内水面漁撈の質的变化を示すものであると共に、地域による分業の可能性も考えておかなくてはなるまい。また、川地遺跡の特徴として前述の「粗製剥片石器」が、打欠き石錐とほぼ同数出土しており、同遺跡において重要な位置を占める何らかの作業に使用されていたことが推定されている。本遺跡では同様の石器はわずか2点しか出土しておらず、また、両者が全く同一の機能をもつものか否かも判断できない。ただし、本遺跡では横刃型の削器が安定して存在しており、これらも含めての使用痕などの検討が必要だといえる。

最後に、本遺跡の石器群は、出土状況の特殊性を除けば、一般的な集落に近い組成をもつものともいえる。このことは、本遺跡が何らかの理由で大量廃棄を行った特別な性格をもった遺跡であると仮定した場合、そこに廃棄される遺物（生活用具）の内容は、生活空間である集落の内容をほぼ反映しているものが、換言すれば集落内の大半のものが、この場所に運ばれて棄てられていると考えることもできる。今後は、分布論を中心とした遺構との関係の詳細な検討を進めていくことによって、本遺跡に残された石器群の意味がより明確になるものといえる。

D 石製品

石製品は、土偶をはじめとする土製品とともに、多数の配石を検出した本遺跡の性格をさらに特徴づける遺物群であるといえる。ここでは、形態記述を踏まえて、各石製品を巡る諸問題について、そのいくつかの点を指摘しておきたい。

a 岩偶・岩版、線刻礫

岩偶・岩版もしくは線刻礫と呼ばれる資料については、これまで周辺地域でこれほどまとまった点数の類例が知られなかった資料である。

まず、三重県下でほぼ同時期の資料として、佐八藤波遺跡^⑫の岩偶とされる資料がある。長さ約12cmを測り、顔面の表現はないが頭部を突出させ、体部には小型石棒類の端部のような横方向もしくは斜め方向の線刻をもつ。末端は二股となり、脚部を表現しているとも考えられる。その形態から見る限りは、岩偶と呼んで大過ない資料であるといえる。ただ、

天白遺跡例は自然礫を素材とし、その形態を基本的にそのまま利用しており、様相が大きく異なるものといえる。

他に周辺地域での類例を探るならば、奈良県五條市の上島野遺跡で採集された線刻礫とされる資料を挙げることができる。遺跡の時期は、採集された土器からは中期末葉と後期中葉の2時期がある。個人所蔵資料で、正式報告が知られないため総点数は不明だが、一定数がまとまって出土しているよう、図録の出品目録では5点となっている。図録等に掲載された写真を見る限りでは、橢円形自然礫の平坦面に、主に外周から放射状に傷状の施溝を行うもので、切目石錐や磨製石斧の破片^⑨の上に加飾しているものもみられる。しかし、これらはいずれも天白遺跡例のように、明らかに人体表現を意図したと判断されるものではなく、また加飾要素の内容を見ても未貫通孔をもたない点が大きく異なり、残念ながら同一の基準では取り扱うことができないといえよう。また、実物は未観察だが、これらは表探資料であることから、線刻とされるものが、後世の傷を含む可能性も考慮される。

視野を西日本全域に広げてみても、近似する資料は現状では知り得ない。

岩版とされた資料は、桑飼下遺跡^⑩でさらに整った形態をもった資料が1点出土している。この資料も永らく類例が知られず突出した存在であった。整った隅丸長方形の平面形で未貫通孔2カ所と太い放射状の刻線による加飾をもつ。未貫通孔や刻線の在り方は、本遺跡例のなかでは、第168図7と近似した形態を有している。

以上、管見の及ぶ範囲で類型を挙げてみたが、逆に整った形態をもつ資料が複数出土した本遺跡の在り方を際立たせることとなったといえよう。

従来、伊勢湾以西では後期後葉の凹線文土器を中心とする時期の遺跡は、まとまった遺物量をもった調査例が少なかったが、近年本遺跡を含め、近隣の下沖遺跡や兵庫県佃遺跡など、良好な調査例が増加した。その成果によって、土偶がこの時期に安定して存在することなど、従来知られなかった本時期の精神活動に伴う遺物の様相が判明しつつあることなどから、今後の調査が増加すれば、岩偶もしくは岩

版も類例が期待されるものとしたい。系譜や形態の多様性についても資料の増加を待って検討したい。

b 石棒

本遺跡出土の石棒の特徴としては、従来資料が僅少であった後期後葉の大型石棒がまとまって出土しており、その多くに受熱による破碎（いわゆる火碎）の痕跡を有することがある。

大型石棒の消長については、ここでは検討を一先ず置き、遺跡の性格を考えるうえで大きな位置を示すと考えられる受熱石棒について、検討を加えていきたい。

受熱石棒をはじめ、石棒を使用する精神活動については、従来から様々な見解が示されてきたが、戸田哲也氏が、石棒の完成から廃棄まで、いわば“石棒のライフサイクル”の中での様々な行為を、最近整理された。^⑪氏は、出土状況から見た石棒に関する“儀礼”的在り方を(A)住居内石棒儀式、(B)屋外石棒儀式、(C)葬送石棒儀式に大きく3分類し、さらに各々細分されているが、受熱による破碎（氏のいう“火碎”）を含む破碎・分散については、「儀礼の手法」別の分類が必要であるとしている。

今回出土した受熱石棒のうちで、最も顕著なものは、第171図4の下半片であろう。形態記述で述べたように全体に強い受熱による変色と粉を吹いたような表面の風化、さらに表面を覆う網の目状のクラックを有している。また、同図1・2の頭部や3の中間部も変色と剥落がみられる。

次に2点の頭部片は、受熱以外の点でもその在り方が注意される。

まず、同図1は折損面を観察すると著しく摩滅しており、さらに表面の全体がつるつとした手擦れのような状態を呈している。この状態は、本資料が折損後も完形品とはまた別の在り方で精神活動の対象となっていたことを明瞭に示すものであろう。また、同図2は、表裏面の頭部下付近に敲打痕の集中部がみられ、さらに受熱による変色もみられる。さらに3の下面のほぼ中央にも凹みが1つ形成されている。他に片岩製でも敲打痕をもつものが1点みられる（第173図24）。このような敲打痕の集中部や凹みをもつ石棒破損品は従来から注目されており、単なる台石・敲石などへの転用ではなく、凹部は女性

器を表現するものと理解し、凹部を形成することによって、「両性具有」あるいは「雌雄同体」の状態を示したとの解釈もなされている。[◎]

受熱石製品と遺跡内での火を用いた行為との関係については、分布の記述で簡単に述べたように、みられないと判断した。その理由をやや詳しく述べてみよう。

遺跡内で火を利用した確実な証左として、焼土遺構が35カ所で検出されている。その分布と受熱石製品の分布を比較してみると、ほとんど重ならないことがわかる。例えば、大型品として図示した4点はいずれも程度の差はあるものの受熱していると考えられるが、出土グリッドと焼土遺構とは全く重なっていない。また、他の石製品も若干の近接例はあるものの、基本的には重なっていない。

のことから遺跡内の焼土遺構と受熱石製品とは、分布上は有機的な関係をもたないことがわかる。こ

(4) 赤色顔料付着遺物

縄文時代の赤色顔料には、赤鉄鉱を原料とするベンガラと辰砂（硫化水銀）を原料とする朱の2種類がある。天白遺跡ではその両者が確認されるが、比率は圧倒的に朱が多いものと思われる。

赤色顔料の付着する遺物には土器、土偶、土製丸玉、岩偶、敲石、磨石、石皿（巻頭図版参照・平成5年度嬉野町教育委員会実施の範囲確認調査で出土）がある。また、辰砂原石（巻頭図版参照）も1点出土した。辰砂原石は、D4グリッド出土で、長さ3.0cm、幅2.0cm、厚さ1.5cm、重さ8.36gである。母岩は、結晶片岩であろうか。

A 土器

赤色顔料が認められる土器片は多数あり、その数量は800点を越える。破片資料が多く、器種の断定が困難であるが、多くは鉢の内面もしくは、精製の有文鉢外面に認められるものである。これらは土偶や岩偶に認められるものと同様に、祭祀的な意味をもつものであろう。

しかし、なかには明らかに深鉢の体部もしくは底部内面に認められるものも微量あり、これらは祭祀以外の機能を考える必要がある。赤色顔料の容器や精製時の道具のひとつ或いは、塗彩時のパレットなどに使用されたものであろうか。

のことと遠距離接合例から、受熱資料は、本遺跡内での火を用いた行為によって生じたものではなく、他所で受熱したものが本遺跡内に持ち込まれ、廃棄されたものと理解したい。このことは、土器をはじめ他の遺物の出土状況と合わせて、本遺跡の性格を考えるうえで重要な位置を占めるものである。

以上、代表的な石製品について、その問題点を概観したが、個々の遺物の意義から遺跡の性格まで、あまりにも多岐にわたる重要な問題を含んでいるために、そのごく一部に言及できたに過ぎないのが実状である。今後は、各器種ごとにその系譜や多様性などの検討を進めると共に、石製品総体として、同じく精神活動に関わると理解される土偶などの土製品と合わせて、配石群を特徴とする本遺跡の性格を評価するための分析を行わなくてはならない。

（大下 明・久保勝正）

赤色顔料付着遺物

赤色顔料付着土器の出土状況は遺跡内で特に偏りは認められず、全体的にみられる。

B 赤色顔料の生産と交易

敲石や磨石、石皿、辰砂原石の存在は赤色顔料の生産を裏付ける。敲石・磨石の9点は、先述のように成瀬正和（宮内庁正倉院事務所）氏に分析していただいた。その結果、明らかにベンガラと確認されるものが1点（第163図4）ある。他は、付着の量が微量であるため不明瞭なもの2点を除き、朱である。朱を中心として、一部にベンガラの生産、朱との併用が行われたようである。石皿は未分析であるが、その鮮やかな発色から朱であると思われる。

朱の生産に関連した県内の縄文遺跡は奥義次氏の報告に詳しい。これによると、天白遺跡以外に、2km上流に位置する下沖遺跡から朱付着の磨石が、多気郡多気町・新徳寺遺跡から辰砂原石が、同町・森荘川浦遺跡から朱付着の磨石が、多気郡勢和村・池ノ谷遺跡から朱付着の磨石・石皿、辰砂原石が、度会郡度会町・森添遺跡から朱付着の磨石・石皿が出土している。時期的には、下沖・森荘川浦・森添の3遺跡が天白遺跡と同様に後期後半を中心とする遺跡で、新徳寺遺跡が後期前葉、池ノ谷遺跡が晩期後半に位置づけられる。

以上の天白遺跡をはじめとする後期後半を主体とする4遺跡は、いずれも拠点的な大規模な遺跡である。また、他地域との交流の広さを物語る異系統の

(5) 配石遺構

ここでは、配石遺構の性格と県内の配石遺構の状況について記述を進める。

A 配石遺構の性格

今回の調査では、配石遺構の性格を論及する十分な根拠を得ることはできなかった。

一部に断割りを実施したAタイプのもの（配石3・4）とCタイプのもの（配石14）を比較すると、下部に皿状の土坑を伴うAタイプの配石遺構が墓の可能性は高いと言える。土坑の大きさは成人が埋葬されるには不十分であり、再葬墓の可能性が指摘できる。しかし、風化した石が検出された他には副葬品などは認められず、墓と断定するにはやや根拠が乏しい。

B 三重県の配石遺構の状況

県内の縄文時代後期後半を主体とする遺跡をみると、天白遺跡の2km上流に位置する下沖遺跡や度会郡度会町・森添遺跡^⑨で小規模ではあるが配石遺構がみられる。また、多気郡勢和村・新神馬場遺跡^⑩にも配石遺構らしいものがあったということである。

天白遺跡の配石遺構は際だって大規模なものと評

(6) 天白遺跡の性格

最後に縄文時代後期後半の県内の遺跡の様相及び天白遺跡の性格について記述する。

A 後期後半の県内の遺跡

県内の後期後半を中心とする遺跡（凹線文土器が出土する遺跡）の状況については、奥氏や田村陽一氏が既に指摘するところである。これらの報告によると、この時期の遺跡は天白遺跡を含めて13遺跡と非常に少ない。遺跡数は少ないが、その様相は大河川の流域に2ないしは3か所の大規模な遺跡が展開されるもので、中期末葉のように小規模な遺跡が多数分散して存在するものとは対照的である。

天白遺跡も先述のように、数型式にわたる土器が継続して多量にみられることから、非常に安定した拠点的な遺跡が展開されたものといえる。

ある一定規模集団の安定した遺跡が営まれるためには、食料確保の安定が必要である。この時期安定

土器も多数出土している。これらのことから、奥氏は、この時期の県内の縄文遺跡が朱を媒介とした広域な交易を行っていたとのではないかと指摘する。^⑪

配石遺構

価されるが、後期後半の時期には、河原石の遺跡内への持ち込み、配石の構築は一般化していたようである。

土坑内に比較的大きな石がみられる広義の意味での配石遺構は、中期末葉の安芸郡芸濃町・大石遺跡や後期前葉の名張市・中戸遺跡などで既にみられる。しかし、後期中葉以降の配石遺構がこれらの系譜を引くものとは考えがたく、やはり東日本に展開された配石文化を受け入れたものと考える。

大石遺跡や中戸遺跡のような土坑内の配石では不十分で、目に見えて存在感を訴える天白遺跡のような配石遺構をこの時期に必要としたのであろう。

近年、島根県の水田ノ上遺跡や滋賀県の小川原遺跡^⑫で縄文時代後・晚期の大規模な配石遺構群が確認され、西日本にも東日本と同規模の配石遺構遺構が存在することが明らかになってきた。今後、西日本での配石文化の成立と展開について検討を進めるなかで、天白遺跡の配石遺構の位置づけをより明確にしたい。

天白遺跡の性格

した食料採集が行われたものと想像されるが、安定した食料の確保は集団形成の必要条件ではあっても、決して十分条件ではないと考える。そこには、後期後半の縄文人が何らかの理由で集まる（集団を形成する）必要性があったものと考える。

ここで、思い起こされるのが奥氏が指摘する“朱を媒介とした広域な交易活動”である。朱の生産のためには、一定規模の集団を必要としたであろう。また、朱の生産に関わるそれぞれの集団間の情報交換や規律的なものも存在した可能性も考えられる。

“朱の生産と朱を媒介とした広域な交流”が一定規模の集団を必要とし、ある種の社会的組織を生んだ。そして、集団や社会的組織を維持していくための精神的拠り所として、配石文化や土偶文化、石棒文化を必要としたのではないだろうか。

B 天白遺跡の性格

大規模な配石遺構や埋設土器、焼土遺構、土偶・石棒をはじめとする多量の祭祀遺物の存在、併せて住居跡が確認されていないことから、天白遺跡は日常的な生活の場を離れた祭場と考える。この地では、葬送儀礼や遺物の廃棄儀礼など様々な祭祀行為が営まれたものと想像する。更に想像を逞しく言えば、県内の朱に関連する集団が集まって“朱祭り”を行った場所かもしれない。

もっとも、以上述べた当遺跡の性格を十分に立証する根拠を持ち合わせるわけではない。集落との関係をはじめとし、今後に残される課題は大きい。

〔註〕

- ① 泉 拓良「縁帶文土器様式」(『縄文土器大観』4、小学館、1989年)。
- ② 丹羽佑一「凹線文系土器様式」(『縄文土器大観』4、小学館、1989年)。
- ③ 泉 拓良「西日本磨研土器様式」(『縄文土器大観』4、小学館、1989年)。
- ④ 註③文献。
- ⑤ 和氣清章『天白遺跡範囲確認調査報告』(嬉野町教育委員会、1994年)。
- ⑥ 山田 猛『大鼻遺跡』(三重県埋蔵文化財センター、1994年)。
- ⑦ 和氣清章「下沖遺跡」(『平成3年度 三重県埋蔵文化財センター年報3』三重県埋蔵文化財センター、1992年)。
- ⑧ 奥 義次・御村精治『森添遺跡発掘調査概報Ⅱ』(度会町遺跡調査会、1988年)。
- ⑨ 奥 義次「森莊川浦遺跡」(『多気町史－通史』多気町、1992年)。
- ⑩ 門田了三「下川原遺跡」(『平成2年度 三重県埋蔵文化財センター年報2』三重県埋蔵文化財センター、1991年)。
- ⑪ 中岡 登編『鳥羽志摩新誌』(鳥羽市、1970年)。
- ⑫ 増子康眞「加曾利B式に平行する東海地方の縄文後期土器－型式編年研究の基礎的な作業として－」(『古代人』第55号、名古屋考古学会、1994年)。
- ⑬ 名古屋市見晴台考古資料館編『大曲輪遺跡発掘調査概要報告書』(名古屋市教育委員会、1981年)。
- ⑭ 岡崎晋明「近畿地方周辺の後期土偶について」(『関東地方後期の土偶－山形土偶の終焉まで－』土偶シンポジウム3発表要旨、「土偶とその情報」研究会、1995年)
- しかし、三重県の縄文時代後半には非常に安定した遺跡が営まれ、配石や土偶、石棒文化を強く必要とする社会があったことに間違はない。また、必ずしも東日本の縄文文化を受け入れるだけではなく、そこには確固たる自分たちの土器作りを継続させた力も読み取れる。このことは、長野県飯田市の中村中平遺跡^⑨に凹線文土器が少なからずみられるこ^⑩とからも理解される。
- 縄文時代後半は、早期前半の押型文土器の盛行と並び、三重県の縄文文化が光り輝きをみせる時代である。

(森川幸雄)

- 委員会、1975年)。
- ③ 宮城県教育委員会『上深沢遺跡』(1978年)。
- ④ 矢島國雄・前山精明「2. 石器Ⅱ 石錐」(『縄文時代の研究』7、雄山閣会、1983年)。
- ⑤ 町田勝則「(2)石器 サ 石錐」(『北村遺跡』長野県埋蔵文化財センターほか、1993年)。
- ⑥ 小池 孝・小柳義男ほか『阿久遺跡』(長野県教育委員会、1982年)。
- ⑦ 註②文献。
- ⑧ 阿子島香『石器の使用痕』(ニュー・サイエンス社、1989年)。
- ⑨ 註④文献17頁。
- ⑩ a 斎野裕彦「大型板状安山岩製石器について」(『太平台史窓』11、1992年)。
- b 町田勝則「光沢痕跡ある剥片について」(『中俣遺跡・押鏡遺跡・檀田遺跡』長野市埋蔵文化財センター、1991年)。
- c 町田勝則「粗製剥片石器の使用痕について」(『朝日遺跡 IV』愛知県埋蔵文化財センター、1994年)。
- ⑪ 愛知県埋蔵文化財センター『川地遺跡』(1995年)。
- ⑫ 註④文献17頁。
- ⑬ 註⑤文献17頁。
- ⑭ a 齊藤基生「下呂石-飛騨・木曽川水系における転石のあり方-」(『愛知女子短期大学研究紀要』第26号、愛知女子短期大学、1993年)。
- b 齊藤基生「下呂石の移動」(『愛知女子短期大学研究紀要』第27、愛知女子短期大学、1994年)。
- ⑮ a 註⑦文献。
- b 小野田勝一『川地遺跡』(渥美町教育委員会、1993年)。
- ⑯ 川地遺跡の粗製剥片石器と同様の用途を本遺跡では横刃型の削器が担っていた可能性も考えられる。
- ⑰ 皇学館大学考古学研究会『宮川下流域遺跡』(1981年)。
- ⑱ 岡崎晋明「上島野遺跡」(『吉野・紀ノ川悠久の流れ古代・大和と紀伊の文化交流』奈良県橿原考古学研究
- 所附属博物館、1993年)。
- ⑲ 註⑧文献の 232頁。
- ⑳ 深井明比古「佃遺跡」(『兵庫県史 考古編』、1993年)。
- ㉑ 戸田哲也「石棒出土の具体例」(『飛騨みやがわシンポジウム 石棒の謎をさぐる』宮川村教育委員会、1993年)。
- ㉒ 小島俊章「鍔をもつ中期の石棒について」(『飛騨みやがわシンポジウム 石棒の謎をさぐる』宮川村教育委員会、1993年)。
- ㉓ 註①文献。
- ㉔ 奥 義次「池ノ谷遺跡範囲確認調査報告」(『勢和村遺跡地図』勢和村教育委員会、1995年)。
- ㉕ 奥 義次「朱に彩られた森添遺跡」(『図説 伊勢・志摩の歴史 上巻』郷土出版社、1992年)。
- ㉖ 註③文献。
- ㉗ 註④文献。
- ㉘ 註⑮文献。
- ㉙ 森川幸雄「大石遺跡」(『平成3年度農業基盤整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告 第1分冊』三重県埋蔵文化財センター、1992年)。
- ㉚ 仁保晋作ほか「中戸遺跡」(『昭和61年度農業基盤整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告 I』三重県教育委員会、1989年)。
- ㉛ 渡辺友千代「水田ノ上A遺跡」(『水田ノ上A遺跡・長グロ遺跡・下正ノ田遺跡』匹見町教育委員会、1991年)。
- ㉜ 中村健二「小川原遺跡の発掘調査-西日本最大級の配石遺構-」(『滋賀考古』第8号、滋賀考古学研究会、1992年)。
- ㉝ a 註④文献。
- b 田村陽一「南 における凹線文系土器の一例」(『三重県埋蔵文化財センター研究紀要』第4号、三重県埋蔵文化財センター、1995年)。
- ㉞ 馬場保之ほか『中村中平遺跡』(飯田市教育委員会、1994年)。

報 告 書 抄 錄

ふりがな	てんぱくいせき							
書名	天白遺跡							
副書名	平成4年度三重県農業基盤整備事業地内埋蔵文化財発掘調査報告							
卷次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	108-2							
編著者名	森川幸雄・森川常厚・竹田憲治・山田 猛・大下 明・久保勝正							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-03 三重県多気郡明和町竹川503番地 TEL 05965-2-1732							
	西暦 1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °〃	東緯 °〃	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
天白遺跡	三重県一志郡 うれしのちょうおおあざ 嬉野町大字 かわらだあざてんぱく 釜生田字天白	405	344	34度 45分 29秒	136度 29分 47秒	19920729 ~ 19930199	5,490	県営圃場整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項			
天白遺跡	葬祭遺跡	縄文時代	配石遺構	縄文土器・土偶 岩偶・岩版・石棒	祭祀遺物・朱闕連遺物が多い			

平成7(1995)年3月に刊行されたものとともに
平成16(2004)年12月にデジタル化しました。

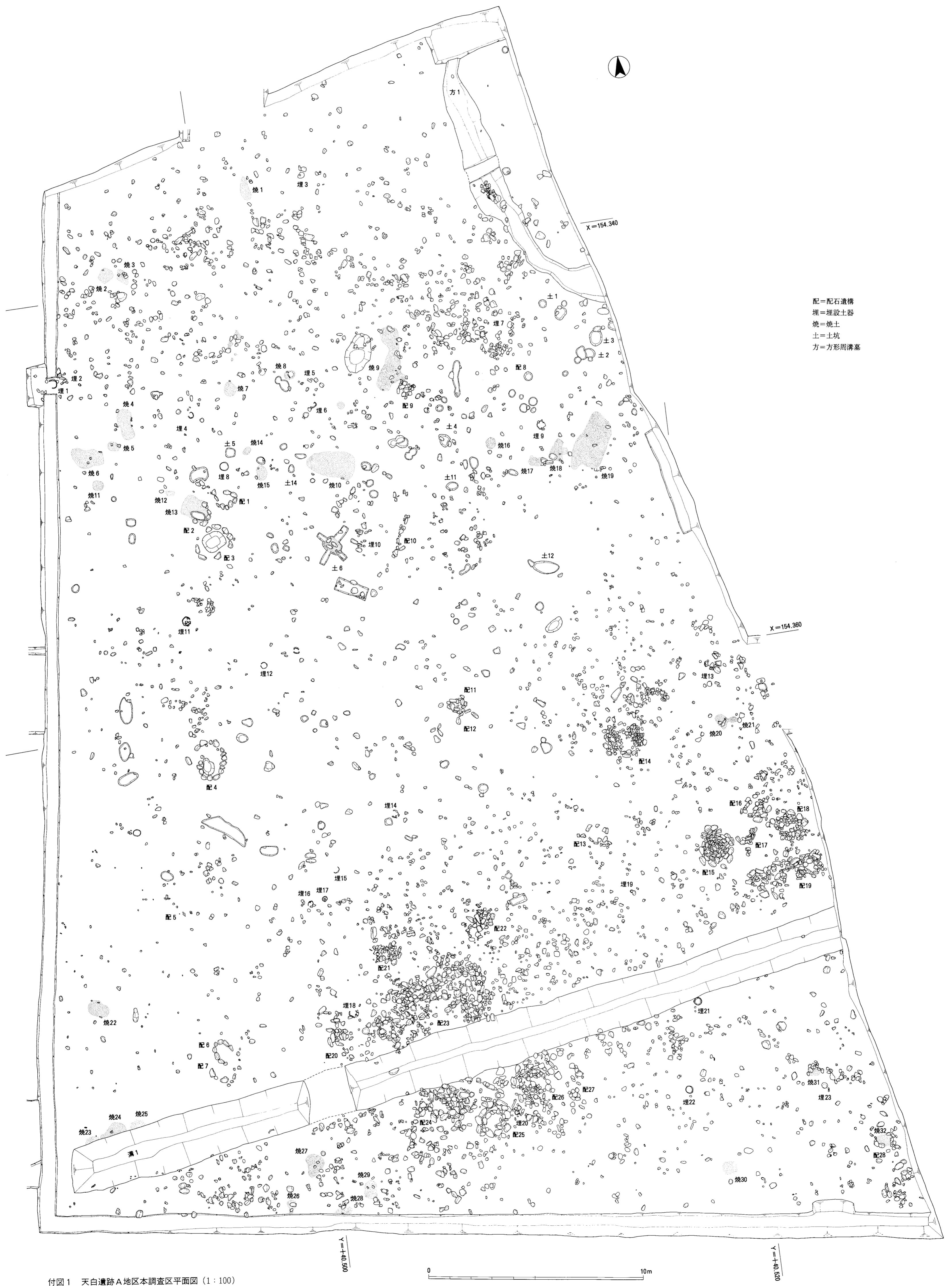
三重県埋蔵文化財調査報告 108-2

天 白 遺 跡
— 本文編 —

1995年3月 発行

編集発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 光出版印刷株式会社



付図1 天白遺跡A地区本調査区平面図（1：100）

